

# 7つの歌姫と音楽の仮面 ライダー ⊠ビート⊠

よなみん/こなみん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

少年は歌を・・・音楽を愛する優しい人だった

しかし、未知の敵・・・ノイズに出会ったことにより、彼の運命は変わる。

異世界の人たち・・・この世界の敵・・・彼はなにを見るのか・・・

この物語は7色の歌を唄う歌姫とそれを守る少年のお話

タグ変更たまに行います。

# 目次

## 始動編

1 始まりのメモリー——音楽のライダー

第1音 少年の奏でる音色——10

第2音 これが学校なり——21

第3音 熱き情熱のビート——37

## ツヴァイウィングの悲劇編

第4音 悪夢は来る——49

第5音 悪夢の始まり——59

第6音 悪夢の後 新たな話の幕開け

70

## シンフォギア編

第7音 過去を振り返らず——75

第8音 少年は苦しみ、少女は覚醒す

る——88

第9音 二課という組織、少年は存在

を否定する——99

キャラ説明（第9音までのオリキャラ

のみ）——114

第10音 蒼き力、顕現する白き鎧

119

第11音 少女は驚き、少年は過去を

述べる——135

第12音 少女たちは再会し、和解す

る——150

第13音	姉弟の再会。少年は決意す	る	—	168
第14音	覚醒する雷鳴の魂	—	180	168
第15音	演奏へと帰還、記憶は蘇る	—	196	168
第16音	物語は進む。二人の刃を交	えて	—	220
第17音	黄金の剣、戦争は始まる	—	238	220
第18音	再び現る7つの力	—	252	238
第19音	みんなが起こした奇跡	—	272	252
第20音	over the rain	—	367	272
番外編	皆で楽しい日を。	シンフォギア番外編	—	303
夏ですよ！プールでしょ！	—	—	—	315
夏ですよ！プールでしょ！	Part	—	—	329
夏ですよ！プールでしょ！	Part	—	—	341
夏ですよ！プールでしょ！	Part	—	—	355
新たなメロデー	少年の憂鬱	—	—	367
シンフォギアG編	—	—	—	367
番外編	皆で楽しい日を。	シンフォギア番外編	—	303
夏ですよ！プールでしょ！	—	—	—	315
夏ですよ！プールでしょ！	Part	—	—	329
夏ですよ！プールでしょ！	Part	—	—	341
夏ですよ！プールでしょ！	Part	—	—	355
新たなメロデー	少年の憂鬱	—	—	367
シンフォギアG編	—	—	—	367

478	第九詞	思イハ目覚メ希望ト化ス	466	第十六詞	化け物と呼ばれた仮面ライ	587
	第八詞	二つの交差する心	466	見る		
	第七詞	巨大な影、心の中	454	ナ編		573
	第六詞	覚醒スル黒キ感情	439	番外編	黒い翼と白い翼 (翼+セレ	
429	第五詞	裏の感情。表の感情。		ス+奏編		558
415	第四詞	自然の声。少年の存在	403	番外編	病みなんてないんや。(クリ	
	第三詞	新たな敵その名は「ブイーネ		542		
	第二詞	黒いガングニール	389	第十四詞	交わる物語。新たな時間	
	第一詞	桃の歌姫と銀の少年	379	第十三詞	神獣鏡	529
				第十詞	ハプニングだらけ	489
				第十一詞	宣戦布告	502
				第十二詞	争いの火種	514

	ダー	699			
	第十七詞	609	怪物は翼を広げる		
	伝説の仮面ライダー編				
	第1弦	619	新たな世界。過去の仲間たち		
	第2弦	630	運命と破壊の姉妹		
	第3弦	641	歴史を守るもの		
	第4弦	657	永遠と蝶と幻想と		
	コラボ編	前	幻想の地に降り立つ科学		
	編				
	第5弦	670	世界は回り、時は混ざる(コラボ話)		
	第6弦	684	厄神様と天人様。		
	第7弦	697	暗く、冷たく、狂おしく		
	第8弦	712	重奏曲		
	第9弦	725	開かれる真実の扉		
	コラボ編		仮面ライダー電王・ブレイズ		
	&ゲート				
	コラボ中編		仮面ライダー電王・ブレイズ		
	イズ&ゲート	739			
	コラボ		IS魔法ビルド		
	第10弦		天を廻りて戻り来よ(前編)		
	第11弦	753	天を廻りて戻り来よ(後編)		
		766			

第12弦 ? (・ω・)? Let's

party!! (／ \*・ω・\* )／ふうー

!!

777

第13弦 発言ひとつで戦場です。

789

ほのぼの冒険編

第1節 いざ! 新たな出会いを求め!

802

第2節 3店舗巡り! まずは癒しを!

815

第3節 店舗巡り! 魔女の家へ!

827

シンフォギアGX編

第1章 特異点としての使命。

840

第2章 火種は火を起こす

852

第3章 紅き槍の戸惑い

863

第4章 聖剣の祭壇

876

第5章 表と裏と仮面と。

889

第6話 追憶の過去。帝王の協力

901

第7話 合流。そして旅立ち

913

第8話 星天ギャラクシイクロス

925

第9話 降り掛かる火の粉

938

第10話 転移・・・そして

951

第11話	少年は聖装を纏う	963
第12話	平和からの悲愴	975
第13話	時と科学の登場、迫り来る	987
黄金		
第14話	先立つ黄金、走る彗星	987
1000	第15話 天空にそびえ立つ路城	
1011	第16話 重なる記憶	
	第17話 襲撃!	1022
	第18話 発進! 白き流星!	1035
	第19話 終わりの始まり	1048
	第20話 2つの世界を繋ぐモノ	1059

1071	第21話 武器の貯蔵は十分か。	
1083	第22話 しばらくの平和 その1	
1096	第23話 今日俺が稽古をつけてやろう! その1	1108
	第24話 大地に咲く希望の花	
1120	第25話 目覚めの福音・銀腕・アガートラム その1	1132
	第26話 独奏が奏でる抜剣・銀腕・アガートラム その2	1146



第27話	ヤンテレビS正常	—	1157
第28話	ヤンテレビS正常	—	1167
第29話	天才が3人。無双の弾丸	—	1178
魔弓・イチイバル	—	—	1178
第30話	天才が3人 無双の弾丸	—	1190
魔弓・イチイバル	—	—	1190
第31話	月の侵略者 黄金の軌跡	—	1201
撃槍・ガングニール	—	—	1201
第32話	月の侵略者 黄金の軌跡	—	1209
撃槍・ガングニール	—	—	1209
第33話	月の侵略者 黄金の軌跡	—	1219
撃槍・ガングニール	—	—	1219
第34話	月の侵略者 黄金の軌跡	—	1267
鎌・イガリマ、塵鋸・シユルシヤガナ	—	—	1267
第37話	月の侵略者 二人の絆 獄	—	1256
(作者の息抜き) 闇鈴夢。	—	—	1256
マ、塵鋸・シユルシヤガナ	—	—	1248
月の侵略者 二人の絆 獄鎌・イガリ	—	—	1237
撃槍・ガングニール	—	—	1237
第35話	月の侵略者 黄金の軌跡	—	1228
撃槍・ガングニール	—	—	1228



## 始動編

## 始まりのメモリー 音楽のライダー

・・・ふあああ・・・

朝日がカーテンの隙間から光を見せる日の朝・・・部屋で一人の少年が起きる

少年の部屋にはギターやバイオリン：：さらにはピアノ、ドラムまで置いてある：：  
とても広い部屋だった

少年はベッドから体を起こすと顔を洗う

少年の銀の髪が水を浴びさらに輝く・・・

「・・・相棒。今は何時だ？」

少年は誰もいない場所へと向け声をかけるが

『午前6時だよ。そろそろ出かけるぞ』

機械的な・・・どこか楽しそうな声が返ってくる

「・・・もうそんな時間かよ。」

少年はそう言うと思い、少し長めのコートを羽織る

『へへっ、今日も決まってるな！』

「うるせえよ。行くぞ」

少年はベッドの引き出しから機械を取り出すと部屋の戸締りを徹底したあとで、部屋を出る

「・・・眩しいね」

『だろ？つてか早くバイト行かないと遅刻だぜ？』

「いつけね。急ぐか」

そう言う俺はバイクへと乗り、スピードを上げながら、バイト先へと向かった



・・・チリーン

「！いらつしや・・・」

「どうもです。ギリギリでしょ」

「・・・もうちよい余裕を持って来い！」

俺はバイト先の喫茶店に入るなりバイト先の店長から怒られるが・・・店長は笑顔だ

「うえーい。」

「ほら！早く着替えてホール入ってくれ」

そう言うのと店長はコーヒーを淹れる

・・・店長・・・ヒゲがなければかつけーのに

俺は少し残念そうにしながら着替える・・・

「この銀髪・・・どうにかならんかな」

俺はそう言うのと渋々な顔で仕事に入る

チリーン

「いらつしやいませー」

俺が入り口を見ると・・・

『てんちよ。あれはまずいでしょ』

『・・・奇遇だな。俺もそう思った』

俺達が見る入り口には青髪の人と赤髪の人が立っているが・・・

何がまずいかと言うと・・・まあ、言わずともわかるとは思いますが

『・・・風鳴翼・・・天羽奏・・・ッ』

そこには大人気のグループ、ツヴァイウィングの二人・・・風鳴翼と天羽奏がいたのだ

変装してても俺たちの目は誤魔化せなかった

『・・・やべえつすよ。店長。行ってください』

『やだよ。若僧。お前に決めた!』

店長はそう言うのと店の奥へと逃げる・・・チキンめ。

俺はニコニコを崩さずに彼女たちへと話しかける

「お席は・・・どうなさいます?」

「そうだねえ・・・出来れば・・・おつ、あそこいいな!」

そう言い赤髪の彼女が選んだのは端つこの・・・窓側の席だった

「いいか?」

「ええ、どうぞ。」

俺は冷静な・・・ニコニコ顔で席へと案内する・・・が

・・・青髪の・・・翼さんだっけか。あんなに無口な人なのか?

俺はなんかわからないものを心に秘めつつ店長の元へと向かう

「オーダー待ちいくつ?」

「4つか5つですよ。」

俺は数を店長に報告すると一応、片付けに入る

「まったく・・・なんでこんなところに来るかなあ・・・」

俺が片付けをしていると店長が

「おーい、お前のロッカーうるさいけど何かあるのか?」

「……ああ、気にしなくていいですよ。」

……一応無視。あれは関わるとういことないからな

俺は気にせず仕事を続ける……それはお昼まで平和に続いた……



「……くー……終わったー……」

時間はあつという間に過ぎ、俺の帰る時間になった

「ん、1回帰るのかい?」

「ええ、お昼は家で食べたいですからね」

それに最悪ツヴァイウィングの二人に何かあつても俺のせいにはならないからな

俺はそのまま帰ろうとする……その時だった

ヴー……ヴー……

「!警報!」

「……ノイズだ!」

俺たちは急いで店の人たちを逃がそうとするが

「ダメだ!入り口に溜まってやがる!」

既に手遅れだった、ノイズと呼ばれる生命体は店の入り口まで出現していた  
俺は店の人たちを奥に行かせると共にノイズと対峙する

「・・・きもいな」

俺がそう言うのとノイズの腕が伸び、俺を目掛けて放たれる

「ッ!?!」

俺は咄嗟の反応で回避することに成功するが、さらにノイズの数が増えていく

「ッ!?!ノイズか!」

「しかし、この場では・・・」

ツヴァイウィングの二人も何か言っているが俺には届かない

俺は・・・回避する中、店長へと言葉を放つ

「てんちよ!俺のロツカーから機械を持ってきてくれ!これ!鍵だからよ!」

俺はそう言うのと鍵を店長へと渡す

「お、おう!待ってるよ!」

店長はそう言うのと店の奥へと消える・・・

俺はさらに増えるノイズを相手に回避行動を続けていた

◇



店の奥。俺はロッカーに “霧夜 鈴夢” と書かれているロッカーから機械を取り出す……その時

『おっ！おっさん！俺の出番かな！』

機械から情熱的な者の声がする

「鈴夢のところに持つてく！投げるから覚悟しとけ！」

俺はそう言うのとホールへと出る……そこには

「ほっ、よっ。」

机や地形をうまく利用してノイズの攻撃を躲している鈴夢がいた

鈴夢は俺の姿を見るとこちらに少し近づいてくる

「鈴夢ッ！受け取れ！」

俺はそう言うのと機械を少年へと投げた



……先程までノイズと戦っていた少年は店長らしき人から機械を受けとるとそれを腰に巻く

彼が機械を腰にくつつけると、ベルトが彼の腰に巻かれる

「行くぞッ！相棒！」

『おっけい！レッツ！ミュージック！』

そう言うとは彼は腰のホルダーからSDメモリみたいなものを取り出す

「何をするつもりだ！貴様ッ！」

隣の翼が大きな声で叫ぶ・・・彼は

「簡単だ！俺には夢がない・・・だけど！」

彼はメモリを起動されると、腰のドライバーに差し込む

「誰かの夢を守ることは出来るから・・・だから！発動！」

『ビート！』

「変、身！」

そう言うとは彼はドライバーを横に引く

『スタート、メロディ！ビィィィイト！』

情熱的な電子音と共に彼の身体が音符に包まれその姿を変える

『始まるメロディ 奏でるリズム』

LET'S GO!!!

仮面ライダーアアッ！ビィィィイトッ！』

電子音が鳴り終わると彼の姿は仮面の戦士へと変わっていた・・・

「何・・・」

「・・・白い・・・仮面の戦士・・・」

白いアルビノのような身体に、ところどころ柔らかい感じの装甲が彼を包んでいた  
彼はノイズ達と対峙しながら言う

「さあ！お前にメロディーを刻んでやる！」

そう言い彼はノイズ達へと駆けていった

## 第1音 少年の奏でる音色

なんだあれは！

私たちは驚愕していた

この喫茶店でノイズの襲撃があつたまではいいのだが・・・

「変身した・・・あの戦士に」

「・・・ガングニールでも天羽々斬でもない・・・なんなのだ・・・あれは。」

私たちはノイズと戦う戦士を見ながら言う

その戦士は黒い服に白い鎧を足した感じの戦士で、武器は持たず、素手でやり合っているのだ

しかし・・・気になるのは

♪♪♪

「この音楽・・・どつから流れてる？」

彼が変身した後から流れている音楽が気になつて仕方なかった

「・・・だが優しい・・・まるで戦いには程遠い曲だ・・・」

「あいつ。戦う気ないんじゃない？」

その時、後ろが煙に包まれる

「ッ！緒川さん！」

「翼さん！奏さん！今のうちです！」

緒川さんはちようど私たちが一般の人からは見えないうちに煙幕を撒く

「これなら！翼！」

「ああ！行くぞ奏！」

私たちはそれぞれ聖詠を歌い彼と戦うために彼のところへ向かうが

「オラッ！」

そこにはノイズを無惨と言わんばかりに倒した戦士が立っていた

「あー終わった終わった・・・」

『おつかれ！今日も熱いビートだったぜ！』

その少年はこちらを見るなりこう言う

「ん？これって倒して良かったよな？」



・・・煙から出てきたツヴァイウィングの二人はライダーみたいな鎧を纏っている

が・・・そこは詮索せず

俺が質問すると二人は哑然とする

「・・・ん？間違ったこと言ったか？」

俺はそう言うのと改めて店を見渡す

「・・・こりや、補修かな・・・めんどくせえ」

「・・・いや、そこは大丈夫だぜ？」

俺がめんどくさいと思っていると赤髪の人・・・天羽奏が話しかけてくる

「そここのところは二課が責任もって対応するからさ」

「・・・二課・・・」

俺がその単語を呟くと翼さんが奏さんの口を封じる

「奏！」

「いやー、口が滑っちゃまった・・・わりい・・・」

どうやら機密事項・・・みたいなものらしいな

俺は深い詮索はせず。帰ろうとすると

「貴様・・・どこへ行くのだ」

翼さんに冷たく・・・質問される

翼さんの目は本気で・・・間違えば殺されそう・・・なのだ

「・・・決まってる。帰るんだよ。」

「その力を持つていながら！逃げるのか！」

俺はその言葉にカチンときた

「何が力だ！こんなの！力でもなんでもないんだよ！」

俺は周りを気にせず叫び始める

「力があるから！皆戦うんだ！いつだって！」

「・・・お前」

「俺はッ！殺したくないんだよ！ノイズも！人もッ！」

俺はそう言う目から出てくる雫を拭い、バイクへと乗る

『The Fine』

「帰るぞ」

「貴様ッ！待てッ！」

俺は後ろで聞こえた叫び声を見殺しして家へと走った

◇

・・・そうか。

二課と呼ばれる施設で俺たちは報告を受けていた

「・・・で、その少年は」

「それが、バイク乗って逃げてよー・・・」

「追いかけてないのか」

「・・・申し訳ありません」

俺は少し考えると、彼女達へと言う

「いや、彼に発信機は付けたのだろうか？なら俺が直接行こう」

「いいのか？」

「・・・こう言うのは大人の出番だ」

俺はそう言うのと彼女たちを部屋から退出させる

そして一人になったところで俺は考える

「・・・まさかあの時の・・・いや、そんなことは無いはず・・・」

俺が思い出しているのはある一つの事件のことだ

彼が言った言葉・・・もし、当てはまるならあの事件なのだが・・・

「・・・まさかな。あの時の生存者はいないはずだ」

俺はそう言うのと表へと歩き始めた





・・・俺はバイクの後ろをちらりと見る

「・・・付けられてるか？でも・・・」

俺はそのままバイクを走らせ信号を曲がると・・・

後ろから何台か黒い車が俺と同じぐらいのスピードで着いてくる・・・これは

「・・・着いてきてるな」

『相棒、正面からも沢山来てるぜ』

ビートドライバースこと、トイがそう言う俺は車線を変更する

「・・・レッツゲーム。」

そう言う俺は加速し、着いてきた車の反対を通る

ドライバーはこの行動は予想外らしく、慌てて対応する

しかし、その中で格段に違う動きをする車が一台・・・

「・・・プロだな。」

俺はそう言うバイクのスピードをさらに上げる

「・・・そろそろ振り切るか」

十分に距離を稼ぐと俺はバイクから飛翔し、歩道へと降りる

キイイイイ・・・

車は焦つて止まるが・・・目の前は橋なので止まりようがない・・・

しかし相手もプロ・・・ドライバーを即座に変更し、自分は降りると言う行動を見せた・・・

「歩道あつて助かった。さて・・・」

俺は下を見る・・・そこには川が広がっていた

本来なら何も無いはずだが・・・

「おつ、ナイスだぜ。」

俺は何かを見つけるとそのまま飛び降りる

「ツ！降りられたー！」

「死ぬ気かツ!?!」

車から降りてきた黒服が何人か下を見るが遅かったな

俺は下までもものすごいスピードで落ちるが・・・

ボフツ・・・

川を運航していたボートのクツションに助けられる

「いやはや、鈴夢様・・・お見事です！」

「出航！このまま振り切るわよ！」

俺を乗せたボートは、少女の声とともに走り出した



俺はそのままボートを降りて・・・自分の家ではなく

「いらつしやいませ。鈴夢様」

「上がっていいわよ。鈴夢」

友達である、少女「紫藤 玲奈」の家・・・豪邸へと来ていた

「相変わらずすごいね」

「当たり前でしょ？てか鈴夢！こっちよ！」

そう言い彼女に腕を引っ張られ、彼女の部屋へと入る

女の子の部屋に入るのは気が引けるが・・・今はそんなことではない

「ちよ、痛い痛い痛い・・・」

「あつ、・・・ごめん。」

彼女は気付くと、さっと、俺の手首から手を離す、そして、のぞき込むように心配し、

落ち込む・・・

気を落とす玲奈に俺は

「ところで何か思いましたよ。ただ……何？」

俺がそう言うのと彼女は、はっ。となり俺に向けて

「そうだ！曲を演奏して欲しいのよ！もちろんクラシックでね！」

「わかったよ……」

俺は渋々言いながらもバイオリンを手に取り演奏を始める

初めは軽く……冷静を持ちながら演奏する……そして徐々に音上げていく

その音楽は心を奪われるかのように優しい物だった

……あるものはその場で口ずさみ……

……あるものはその場で踊り始める

彼の音楽は彼女だけでなく。世界的にも評価されており、子供の時にはすでにコンクールに招待されるほどの実力を得ていたのだ……

そんな彼が曲を演奏するなど滅多にないのだ……なのである意味この時間は彼女にとっても、屋敷の者にとっても裕福な時間である

♪♪♪

曲は長く……彼は多少のアレンジを加えながらも演奏を続ける……

その演奏は……まるで夢の中で踊るような物だった



「ふう．．．終わった」

俺は重度の緊張から開放されると、肩の力を落とす

玲奈の方を見ると彼女は子供のように手を叩いていた

「すごいわ！流石、鈴夢ね！」

彼女に素直に褒められ少し照れてしまう．．．

俺はバイオリンを元あった場所に戻すと机に置かれている紅茶を飲む

「．．．はあ．．．癒される．．．」

「当然よ！私が淹れたんだもの！」

玲奈が？へえ．．．意外だな

俺が不思議そうな顔をしていると、彼女は心配そうにして尋ねてくる

「大丈夫？今日．．．ノイズが出たんでしょ？」

「まあね．．．って、知ってるのか」

「当然よ。ニュースはちゃんと見る派だからね。」

彼女はどこか、誇らしげに答える

．．．だけど、俺が落ち込んでるのはそんな事じゃない．．．

「知ってる。ビートに変身したんでしょ？」

「知ってたのか……」

「いや、表情を見れば嫌でもわかるわ」

「……参ったな……そこまで表情に出てたのか」

俺は少し恥ずかしそうにすると、彼女は約束するように言う

「隠し事はしない、何かあれば相談するよ。」

「……そうだな。」

少し子供らしい彼女に、俺は微笑む

「……そう言う俺は席を立ち、荷物をまとめる」

「どこに？」

「明日は学校だ。早めに寝る」

そう言い俺は外へ出て、新しいバイクへと乗るが

「鈴夢！また明日ね！」

そう叫ぶ彼女に

「またな。」

短い言葉だけ残し、俺は帰っていった……

## 第2音　これが学校なり

．．．俺は部屋へ帰宅するとすぐさまベッドへと入る

．．．眠たい

『当然だなあ．．．あんなことがあつたら』

「今日はいろんなことがありすぎたよ．．．」

思い返すと戦つた記憶と追いかけて回された記憶しか出てこない．．．

とにかく、今日は何も無かつた．．．そう思っていると

ピンポーン

「．．．来たか」

俺はそう言うのと玄関へと向かい、ドアを開ける．．．そこには

「霧夜　鈴夢くんだな？」

そこにはヒゲをいい感じに生やした大人がいた

「ええ。立ち話もなんですから中へどうぞ。」

俺はその人を部屋へと通す

俺は台所からお茶を出すと、大人の前に置く

「どうぞ。まあ、そんなに美味しくないですけどね」

「そこは気にしなくていい、私が勝手に来ただけだからな。」

そう言うとき大人は真剣な表情をとる

「・・・それで、何の用ですか？ 大方・・・あれの事ですか」

「もちろんそれもある。しかしそれとは別の話をするためにきた」

別の話？ 俺は少し驚いてしまう

・・・大人は少し躊躇うとこう言う

「君は・・・音楽が好きか？」

「ッ!？」

俺はその言葉に頷くことが出来ず、それどころか少しの怒りを感じた

「君は・・・いつから嫌いになったんだ。」

「・・・お前。誰だよ」

俺は口調を変え、警戒をする。

別に自分は音楽が嫌いではなく・・・特定の人達が嫌いなのだ。それは、この人も例

外ではない

「俺は風鳴弦十郎。二課の司令だ」

「・・・あの女も言ってたが・・・二課ってなんだよ。」



「特異災害対策機動部二課．．．それが俺たちの組織だ」

．．．名前を聞くからにどうやら、政府が組織したものかな．．．

「さて．．．次は君のことを聞きたいのだが．．．」

「お前に話すことは無い。帰ってくれよ．．．」

俺がそう言うと大人は立ち上がり、靴を履く

「．．．素直かよ」

「帰れと言われたら帰るさ。俺は馬鹿ではないからな」

大人はそう言うと、そのまま俺の家を出ていく

『．．．いいのか？話さなくて』

「話したところであの人たちにはわからないよ。」

俺はそう言うと、クローゼットから一つ．．．アルバムを取り出す。

そこには幼き頃の自分と両親がいた．．．

「俺は．．．嫌いだ．．．」

俺はアルバムをゴミ箱へと捨てるとそのままベッドで眠りについた



・・・チュンチュン・・・

ジリリリリリ・・・

「んー・・・朝か・・・」

俺はすぐ目の前にある、時計のアラームを止める

『相棒！今日は学校だろ!?!』

「そうだねー・・・寝てるわ」

俺が毛布を身体に包み、いもむし状態になると玄関からすごい音がする

「鈴夢ッ！起きなさいよッ！」

「ぐはっ!?!」

どうやら玲奈がドアをぶち破り、俺にカバンをぶつけてきたらしい・・・その衝撃で  
トイも吹き飛ばす

「・・・痛い・・・」

『な、なんで俺も・・・』

俺たちは悶絶する・・・痛いな

その姿を見た玲奈が俺の元へ駆け寄り

「鈴夢ッ!?!大丈夫なの!?!誰よ!?!こんなことしたのは!?!」

そう言う玲奈に俺は・・・

「お前だよっ!？」

この後、無慈悲な顔面パンチを食らった



・・・俺たちの通う中学は、普通ぐらいの学力をもう奴らが集まっており・・・まあ、一言で言えば無駄に才能を持つてる奴らが多いところである

「ういーつす。・・・って、俺の席返せ」

俺がクラスへと入ると俺の席はすでに占領されていた

「おー待つてろよ！すぐこいつを倒すからな！」

「何をツ！返り討ちにしてやる！」

・・・こいつらは俺の意見を無視して、俺の席を使い遊○王をやる

そして、俺の席に座る男・・・南雲 優也が言う

「オラッ！こいつだ！」

クラスのやつから「「おおっ！」」と言う歓声上がる

「あれは真紅眼の黒竜じゃないか！」

「やべえ、しかもレアデザインじゃねえか！」

・・・何張り合ってるんだろう。

優也が真紅眼を出すのが攻撃力は2400・・・恐らく優也の中では最強のカードなのだろう・・・

しかし反対の奴が言う

「真紅眼か・・・たしかにカツコイイが・・・攻撃なら俺が勝つな！」

「何ッ!？」

そう言うのと一枚のカードを取り出す

「まさかッ!そのカードは!」

「そうだ!圧倒的攻撃力の前にひれ伏すがいい!」

・・・あの眼鏡の奴が海馬社長に見えるんだが

「いでよ!青眼の白龍!」

「な、なんだって!」

クラスから上がる悲鳴の声・・・その中には優也の悲鳴もある

「ふっふっふっ・・・あーっはっはっは!」

・・・やべえ。意識が飛んでやがる。

狂人みたいな声を上げると、眼鏡は手を挙げ

「青眼の攻撃!滅びのバーストストリームッ!」

「ぐあああああッ!？」

「そう言うのと衝撃で優也が後ろに倒れる

「「優也——」」

「……まるんじゃねえぞ……俺は……止まんねえからよ……」

……なんだこれは。何を見させられてる？

俺が哀れな視線を送る中、俺の目に手が置かれる

「だーれだ!？」

「……響だろ?知ってる。」

後ろから発せられる声にそう答えると、その手がどけられる

俺が後ろを向くと、笑顔の二人組がそこに立っていた

「あ、未来もいたのか?ごめんごめん。」

「いや、いいよ。元は響の悪ふざけだからね」

「未来の裏切り者——!」

……この二人の片方は立花響、もう片方は小日向未来。

この二人は俺と同じクラスの、姉妹みたいな二人である。

初め、ぼっちだった俺に唯一、手を差し伸べてくれた二人なのだ

だからか、クラスからの人気も高い。

響は運動面で・・・未来は勉強面で優秀であるから、二人はお互いを助け合う存在なのかとも、感じてしまう

「むー・・・鈴夢くんも意地悪」

「元は響なんだろ？じゃあ響が悪いな」

「がおー！」

「ちよー！未来助けて！」

俺達が廊下でじゃれあっていると

「ほら。授業を始めますよ。早く席に着きなさい」

先生に冷たい目で見られる

・・・たしかに背中に響が貼っ付いてさらに、俺の耳を噛む姿はどこか、嫉妬を覚えるかもしれないけど！

「響、降りて席に着け」

「ほら、響、行こう？」

「うー・・・つまんない。」

俺たちはそれぞれ席につき・・・授業が始まった。

ちなみに優也は保健室で除細動器を使った実験の材料になっていた



・・・で、あるからしてここは・・・

先生の声が聞こえる中、俺はケータイをいじる。

・・・うわあ・・・やっぱりニュースになつてな。

『仮面の戦士！喫茶店を守る！』

・・・なんともダサイ題名だ。

「・・・何見てるの？」

隣の席の未来さんが冷たい目で見てくるが俺は焦ることなく

「エロ動画。」

十分な嘘をつく・・・しかし

「本当は？」

未来さんは怒です。

そのとき俺の頭が危険を感じる

俺は急いで黒板を見ると先生が攻撃体勢に入っていた

「・・・すみません」

「続けるぞ」

・・・この後・・・何事もなく授業を終えた・・・  
ぐああああッ!?

・・・あつ、あいつ死んだな

◇

あざーつした。

「あー・・・やつと帰れる・・・」

「おつかれ響。」

俺は劳いの言葉をかけ響の席に牛乳を置く

「むー・・・育ち盛りじゃないんだから」

「ははっ。大きくなれ。」

いろんな意味でな。

ちなみに俺も男だからな・・・変なことは考えるさ

俺がこうやって時間を潰していると

「鈴夢ー！優也は!?!」

「保健室だろ？それより俺たち帰るけどいいか？」



「待って！すぐに連れてくるから！」

隣のクラスから玲奈がクラス前で叫び、すぐに優也を連れに保健室へと向かった

「……全く……」

「鈴夢くんも大変だね。」

未来に慰められる……同情するなら金をくれ

なんて言えるはずもなく。俺たちは荷物をまとめ、教室を出ると

「青眼……死すべし……慈悲はない……」

「鈴夢お待たせ！さあ！みんなで帰るわよ！」

ブツブツ迷いごとを呟く優也に、ふわふわとした玲奈がこちらに来る

「じゃ、今日はふらわーに行くか」

「やったー！早く行こうよ！」

俺がそう言うと言響に元気が戻る

「もう。今日は食べ過ぎないですよ？」

「へいき、へっちゃらだよ！鈴夢くんも早く行こう!？」

……元氣すぎる響に俺たちは……

「しゃーないな……遅れたやつはジューズ代奢りな！」

「はあっ!？」

「行くよ！未来！」

「響！待ってよー！」

こうして俺たちはふらわーに向かって走り始めた・・・

◇

ふらわーは俺達が通うお好み焼き屋である。

お好み焼き自体好きではないが。ここのお好み焼きは結構好きなのだ。

なんとというか・・・こうおばちゃんが言うに

「愛があるからね」

なのかなあ・・・

「むぐむぐ・・・おいひいでふね！」

「響・・・食べながら喋らないで！」

・・・未来ちゃんが、響のほっぺとかにつくソースを拭う・・・その姿は世話をする

お姉ちゃんのようにだ。

「鈴夢・・・見とれてないよね」

「んなわけあるかい。はよ食えよ」

俺達が冗談交じりの会話をする中

「おぼちゃん聞いてくれよ．．．俺の．．．俺の力じゃあいつには勝てないんだよ！」

「あらまあ．．．でも、いつかは勝てるわよ．．．ほら、三度目の正直って言うじゃない」

「おぼちゃん．．．(泣)」

．．．向こうは向こうで人生相談みたいになって．．．この日もふらわーは賑やかだった

と言うより．．．俺には一つ気がかりなことがある

「ん？おぼちゃん。あの写真は．．．」

．．．俺は厨房にある、写真にふと違和感を感じた

「ああ、これはね鈴夢くんが小さい時の写真よ。」

「ここで撮ったの？」

「ええ、なんでも青髪の女の子も一緒だったのよ？」

「青髪の．．．」

その写真は少女は俺の後ろに隠れ．．．俺は堂々としているものなのだが．．．この子．．．どこか身に覚えが

「．．．この子誰かわかる？」

「わかってて言うと思うかい？悔しいなら自分で思い出しな？」

そう言っておばちゃんは鉄板を掃除する

・・・この子・・・知らないんだよな・・・

隣の玲奈も写真を見るが

「・・・なにこれ？初めて見るわね」

「・・・お前は知らないでいいよ。」

玲奈が叫ぶその時だった

ヴー・・・ヴー・・・

「ツ！警報！」

外から大きな警報音が聞こえる

「ノイズだね・・・おいでなすったよ！」

「おばちゃん！響達を頼む！」

俺はそう言うのと店の外へ出る・・・そこは

「ひでえ・・・まるで戦場だな」

外は車で分からなかったが地形がだいぶ変わっており、さらに複雑なものになってい

る・・・さらに

「空にもいる・・・これはめんどくさそうだな。」

俺はドライバーを腰に巻く・・・

しかしその時ちょうど・・・制服を纏った翼さんがやってくる  
「貴様・・・」

「・・・話はあとだ。今は片付けるぞ」

そう言う俺はメモリケースからSDメモリを取り出す

「発動！」

『ビート』

「変身！」

そう言う俺はドライバーを起動させる

『スタート、メロディービーイイト！』

電子音と同時に俺の身体を音符達が包み込む

『始まるメロディ、奏でるリズム』

LET'S GO!!!

仮面ライダーアツ！ビーイイト！』

俺の姿は一瞬にして白いライダーへと変身する

「Imyuteus amenohabakiritron」

翼さんはそう歌うと彼女を白い装甲が彼女を包む

「貴様・・・」

「行くぞ。街を守るんだ。」

俺たちはまだ見ぬ生物・・・ノイズと対峙する・・・

## 第3音 熱き情熱のビート

．．．空は青く．．．．．広い空が広がるが．．．

「うおおおおおッ！」

少年が戦ってる所の空は謎の生物たちで埋まっていた

「キリが無いッ！こんなによく相手できるなッ！」

俺はノイズを蹴り、殴る

しかしどれだけやろうとも、数は減るどころか増えるという現象を見せている

「ちっ！」

翼さんの方もだいぶ苦戦のよう。

しかしそうこう言おうと、相手は言葉の通じない宇宙人のようなものだ。戦うのも無理はない

「．．．こうなったら！」

俺は右側のメモリスロットに「ビート」メモリを差し込み発動させる

「発動！」

『ファイナルドライブ！ビィィィット！』

電子音と同時に俺の足へとエネルギーが回る

「オラッ!!」

俺はそのまま足を周辺のノイズへとぶつける

俺の蹴りは周辺のノイズ他、上空のノイズまで巻き添えを食らって落ちていく

「・・・改善の余地ありか・・・」

そう言い俺は翼さんの方を見る

「はあッ!」

彼女は刀を持ち、素早い動きでノイズを切り裂いていく

「・・・やるじゃん。」

正直、口だけだと思っていたが、案外そんな感じでもないようだ

そうこうやっている、黒塗りの車がやって来て、中から天羽奏が降りてくる

「奏!」

「翼ッ!待たせたな!」

そう言うのと奏さんも、聖詠を歌い出す

「Croitzalronzellgungnirzizzl」

そう言うのと朱色の鎧が彼女を包み込む

「よっしゃ!張り切っていくぜ!」



そう言い、槍を持って突撃していく彼女に

『俺、あいつと気が合いそうだぜ？』

「やめとけ。」

冗談を言うトイ。

俺はそれを無視して戦い続けた・・・



・・・彼は何者なのだ

私は戦う中、ある一つの疑問を持っていた

彼の身体能力はどこから来ているのか、そして彼自身は訓練された人物なのか

喫茶で戦った時も彼の身体能力は常識を超えていた

ノイズが放つ攻撃をいとも簡単にくぐり抜け

さらには、今、空のノイズの対応も出来ている・・・

「もしかして・・・本当にあの事件の生き残りで・・・こうなる時のために訓練してたの  
では・・・？」

私がそう呟くと

「翼ッ！上だッ！」

「ッ！」

奏の指摘通り上を見ると、私を目掛け、たくさんのノイズが降下しようとしていた  
「くっ！これしきの数ッ！」

その時、地上のノイズの攻撃によって刀が落とされる

「！しまった！」

そのために、私は空のノイズの攻撃を受け、ダメージを負ってしまふ

「翼！クソっ！」

奏も両方のノイズの対処で精一杯なのだ・・・

このまま朽ちるかと思っただが

「大丈夫か！こんなところで死ぬなよ！」

私を一人の戦士が救う

「あっ・・・」

その姿は数年前に・・・私を助けてくれた少年に似ていた

「・・・大丈夫か？」

「ああ・・・情けないな・・・」

私が冗談交じりに言うが

「・・・情けなくないさ」

彼はどこか懐かしそうにそう言う

「力を持ち・・・自覚して戦うものは誰もが目標とするものだ・・・それは・・・俺も例外じゃない」

そう言うのと彼は、腰のホルダーから黒いSDメモリを取り出す

「だけど・・・それを情けないと笑うのはダメだな」

「お前は・・・」

少年はそう言うのと、私に背を向け立ち上がる

「俺にもあったさ・・・そんな熱い時がなッ!」

そう言うのと手にあるメモリが発火し・・・姿を変える

そのメモリは紅く・・・まるで燃えているようだった

「行くぜ相棒!」

『おっけい!任せろよッ!』

そう言うのと彼はメモリをドライバーへと差し込む

『フレイム!』

彼は腕を出し・・・構え・・・そして

「変身!」

『チエンジー・メロディー！フレエエムツ！』

機械が熱い、情熱的に言うのを彼を炎を纏った音譜が包み込む

『熱き情熱、灼熱のメロディー！』

BURNING!!!

仮面ライダービート！フレエエムツ！』

炎が解けると同時に彼の姿が変わる

「紅い・・・戦士」

彼の姿は熱く・・・とにかく熱い感じの姿だった

近づくだけで焼けそうな姿を纏う少年は、腕に棒を二つ持ち、ノイズへと向ける

「さあ！灼熱のメロディーを刻んでやるー！」

そう言うのと彼は地面へと二本の棒をぶつける

「オラッ！」

ぶつけた衝撃で私たちの周りに炎の壁が作られる

「・・・すごい」

「立てるな？あとは任せませ」

そう言うのと彼は一人・・・この壁の向こうへと走っていった



・・・行ける！この力があれば！

武器は響鬼にも似ている二本の槌・・・これがあれば戦える

俺は奏さんの方へと走り、ノイズと戦う

「ツ！お前！その姿は?!」

「とにかく片付ける！手を貸せ！」

そう言うと奏さんの動きも素早くなる

俺は負けずと炎を纏った槌をぶつける

「うりゃーとおっ！」

俺は突進してくるノイズを受け流すようにして攻撃する

「やるじゃん！見直したぜ！」

感心している奏に対し

「アイドルでも戦えるんだな！びつくりだ！」

俺は冗談交じりで言葉を返す

俺はそのまま・・・地上のノイズを消していくが

「厄介なのは空だぜ？どうするんだ？」

そこを対策できるのが仮面ライダーなんだよ。

「面白いのを見せてやるよ。」

そう言うともう一つのスロットにメモリを差し込む

『アツプテンポ！アクション！』

そう言う俺の目の前にピアノの鍵盤のように白い階段が現れる

「アクション。レディ」

そう言うドライバーを起動させる

『アクション！3、2、1、GO！』

GOの掛け声と同時に俺は階段をリズムよく登る

俺が登っていけば登るほど奴らは逃げようとするが

「逃がさねえぞ」

俺はさらにもう一つ、メモリをスロットに差し込む

『スロウ！アクション！』

「アクション。レディ」

『アクション！3、2、1、GO！』

そう言う相手とのノイズの動きが遅くなる

「さあ、そろそろ伴奏も終盤だ！」

俺はそう言うと、右側のメモリスロットにメモリを差し込む

「ファイナルドライブ！フレエイムッ！」

俺は空高く上がり、槌から出る炎をノイズへとぶつける

ズガアアン

そんな効果音とともに、ノイズ達が消滅していく

「The Fine」

『決まったぜ！』

こうしてこの戦いは・・・俺の勝利で終わった



・・・彼はすごい・・・

まさか空のノイズも簡単に撃ち落とすとは思ってもいなかった・・・

私は奏に起こされながらも、その場へと立つ

「・・・彼は何者なのだ・・・？」

「直接聞けばいいだろ？」

私がそう言うと彼は変身を解き、元の姿へと戻る

「……」

彼はそのままバイクへと乗り、逃げようとするが

「ご同行。願えますか？」

緒川さんたちに行方を阻まれる

「嫌だと言えば？」

「撃つてでも止めます、それが仕事ですから」

「流石は大人だな、言うことも汚ければやることも汚い」

彼は冗談なしにそう言う、その顔は殺意しか表情に無かった

「……どうしますか？」

緒川さんがもう一度尋ねるが

「断る。俺の力は俺の物だ。誰にも渡さない」

そう言うのと彼はメモリをドライバに差し込み起動させる

『スモーク！アクシヨン！GO！』

それと同時に彼の周りを煙が包み……辺りを覆う

「かつこよかつたぜ」

彼は私の耳元まで来ると、そう言って去っていく……

「……逃げられました……申し訳ございません。」



「気にしないでください．．．しょうがないですから」

私たちは．．．底に見えぬ不安を抱えつつ．．．その場を去ろうとした

◇

．．．音楽が嫌い．．．か。

俺は一人．．．黄昏ていた

「俺はいつからこうなったんだろうな、大事なことがあると逃げて．．．現実を見ようと  
しなくなったのは．．．」

俺は未だに忘れない事件のことを思い出していた

炎の中．．．多くの戦士たちが戦い．．．俺にドライバーを託したことを．．．

その時に．．．俺は一度地獄を見たことを．．．

俺がこうやって一人で呟いていると

「鈴夢！無事!?!」

「鈴夢——!」

奥から響と、玲奈がやって来る

「お前ら！無事なのか！」

「逃げ足だけは一流ってね！」

「鈴夢くんこそ！無事だったの!？」

二人が心配そうに聞くが

「無事じゃないなら、ここにいる俺は誰だよ」

俺は少し笑いながら言う

「じゃあ！帰ろう!?!もちろんみんなだね！」

「行くわよ！鈴夢！」

「ああ！」

先に走っていく二人を追いかける形で、俺は走り出した・・・

この先・・・恐怖が待ち受けてるとも知らずに・・・

## ツヴァイウイングの悲劇編

## 第4音 悪夢は来る

「……あー眠たいー」

「……再び今日は学校……なのだが」

「よつす。おはようさん」

「どうして家の前にこの人はいるの？」

「扉を開けると、そこには天羽奏がサービスと言わんばかりに立っていた」

「昨日戦った後からこの人は俺の家へと来ている……何故？」

「……ストーカーですか？」

「おっと、勘違いするなよ。二課を舐めてもらっちゃ困るってな」

「……別にそんなことを言った覚えはないんだがなあ……」

「俺は気にせず、学校に行こうとするが」

「おっと、学校かい？ だったらお姉さんが付いてつてやろうか」

「……遠慮しとく」

「そう言うと俺は歩き始める」

「冷たいねえ．．．そんなにあたし達が嫌いかい？」

．．．奏さんが後ろに付いてくる

「．．．嫌いですよ。今やってることはね」

「おお、嫌われちゃったな。残念だ」

そう言いつつも笑顔な奏さん．．．

．．．俺が途中まで、奏さんと話しながら歩いていると

「鈴夢くんー！おっはよー！」

後ろから元気な声が聞こえる．．．響は元気だなあ

「相変わらず元気だねー」

「鈴夢くんは眠たそうだねー！」

そう言いう響の後ろから未来ちゃんがやって来る

「響．．．早いよ．．．」

「未来ちゃん．．．大丈夫？」

全く．．．響の元気の良さもそうだけど．．．未来ちゃんのついて行く精神もすごい

な

俺が感心していると、奏さんは

「おっ、元気そうだな、元気にしてるか？」

「はい！つて、天羽奏さん!」

「そうだけ!」

・・・響つてツヴァイウィングのファンだったか・・・

俺はその場を逃げようとする・・・

「鈴夢くん!奏さんだよ!本物の!本物!」

響の無邪気さに俺はその場に固まってしまう

・・・クソっ・・・ほっとけねえ・・・

俺は響の元へ行くと・・・奏さんは

「おっ、もしかしてお前の彼女か!?青春だねえ・・・」

その台詞に俺たちは

「そ、そんなじゃない!」

全力で否定する俺たちを見て「本当かあ?」と疑問を持つ奏さん。

未来ちゃんだけは唯一まともかと思つたが・・・

「・・・」

ダメだ、この人、殺意を込めた目で俺を見ている

・・・クソっ・・・どうする!

俺がこの場をどう収めるか迷っていた時

「おつ、そうだそうだと、お前に受け取ってほしい物があつてよー」

奏さんは、真剣な顔で言う・・・俺にね

「・・・なんですか?」

「これだよ。これ」

そう言い、奏さんはチケツトを渡してくる・・・

「・・・三枚・・・これは?」

「今度、私たちライブをやるから来てくれよな」

「ほんとですか! やったー!」

素直に喜ぶ響に対し、俺は少し悩む

・・・これはどういう意図が・・・? 罠じゃないのか・・・?

・・・俺が必死に悩む中・・・奏さんが

「大丈夫だ。ただ簡単にお前にも楽しんでほしいんだよ」

「・・・あつそ。」

チケツトをポケットにねじ込むと、俺はそのまま学校へと歩いた・・・



・・・ライブか・・・あんまり行ったことなかったな・・・  
・・・あの事件以降・・・俺はライブそのものが嫌いになり・・・さらには音楽そのものが嫌いになった・・・

しかし、あの人は・・・

「俺を前に進めようとしてるのか・・・？」

俺はそう言うのと、自分でその考えを否定する

「・・・ないな。単なる罠かもしれん・・・」

しかし俺は気になっていた

もし、あの人があの事件に関係しているのならあの時のことも聞けるし、何があったのかも理解できる・・・

これは数少ない事件の真実に触れることが出来るんじゃないのか・・・

「・・・行くだけ行ってみるか。」

この日は何も無く・・・普通の日を過ごした・・・



・・・悪夢の日は来た・・・

・・・今日はツヴァイウィングのライブの日・・・

俺は一人・・・会場へと向かうが

ヴーヴー

響からLINEが入る

『一人じゃ寂しいよー、一緒に行こう?』

・・・俺は思わず笑ってしまった・・・

「あいつも女の子なんだな」

そう言う俺はバイクを走らせ、響と会うために急いだ

◇

・・・鈴夢くん・・・遅いなあ・・・

私は鈴夢くんにLINEしたあと、会場前で待っていた・・・

「もう、・・・相変わらず遅いなあ・・・」

・・・私がそう言っていると

ブロロロロ・・・

「・・・悪い遅くなったな」



黒いコートに身を包んだ鈴夢くんが現れる

「遅いよー、つて、暑くないの?」

「ああ、この程度慣れたもんだ」

そう言うのと鈴夢くんはヘルメットをしまい、バイクから降りる

「さて、そろそろ行こうか?」

「うん!こっちだよ!」

そう言うのと私は鈴夢くんの腕を取り、会場へと走り出した



・・・実験が始まるか

舞台裏・・・二課の面々が重たい空気を放っていた

「これはあくまでもネフシユタンを起動させるものだが・・・いつも通りで構わない」

「了解だ。いつも通りだな!」

俺がそう言うのと、奏はいつも通りに気合いを入れるが

「・・・」

「・・・お?翼?」

一人・・・翼だけは緊張しているようだった

「・・・本当に大丈夫でしょうか」

「大丈夫だよ！なんだったって二人なら無敵だからな！」

奏は必死に元氣付けようとするが、翼は再び重たくなる・・・

しかし・・・彼は来るのか？奏は「大丈夫だ！」とは言っていたが・・・

そう言うと監視カメラを見ていた緒川から報告が入る

「司令、来ましたよ」

「！：そうか・・・」

・・・黒いコートを身に纏う彼は・・・隣の少女と、楽しそうに話しているが・・・

結局のところ大人の事件に巻き込まれ、さらには彼の中の音楽まで奪ってしまったの

だ・・・なら

「・・・このライブで、元氣を取り戻して欲しいな」

そう言う俺は・・・実験監視室へと移動した



・・・すごい数

私は鈴夢くんと共に、席をとるが改めて見ると・・・

「ほんとに人気なんだなあ。の二人は」

「そう言えば鈴夢くんって、奏さん達と知り合いなの？」

私は特に驚くことのしない鈴夢くんに、疑問をぶつけてみる  
すると、鈴夢くんは少し焦って

「ああ、ちよつといろいろとな・・・」

鈴夢くんは誤魔化すようにして言う・・・

でも、ちよつと知り合いなんだ・・・羨ましいな・・・

私たちが話をしていると、突然辺りの声が大きくなる

「なんだ!？」

「鈴夢くん! ツヴァイウイングだよ!」

私は鈴夢くんにステージを見るように指を指す・・・そこには

「・・・すげえ・・・」

そこには美しい衣装を身に纏った、ツヴァイウイングの二人が立っていた  
しばらくすると曲が流れ始める・・・

「・・・綺麗・・・」

「・・・これが・・・あいつらの歌・・・」

私たちは呆気に取られていた・・・

鈴夢くんがどう思っていたのか知らないが・・・私はあの二人が憧れの存在なのだ・・・それが目の前で歌を歌い・・・踊っている・・・まさに夢のよう・・・

「すごいね！」

歓喜を漏らす私に対して・・・鈴夢くんは

「・・・」

どこか真面目な顔をしていた・・・

「・・・？どうしたの？」

私は耐えきれず、鈴夢くんに話しかけるが

「・・・響、此処で待ってろ」

そう言うのと鈴夢くんは、席を離れ、アリーナから出ていく・・・

その瞳には、雫が溜まっていた

「・・・鈴夢くん・・・？」

私はこの後に悪夢が来るなんて予想出来なかった・・・

## 第5音 悪夢の始まり

私たちがステージで歌い・・・踊る・・・

・・・あの少年は・・・？

私は時々、ステージを見るが、例の少年の姿は見当たらない

・・・それでも、私は歌い続ける・・・この歌で、彼が救われると信じて・・・



・・・俺は響の元を離れ、一人アリーナへと続く廊下へ出る・・・そこには

「・・・炙り出すつもりだったのか・・・？にしては場所をよくも変えたものだ」

俺の後ろに、大人が現れる・・・

声からして20歳ぐらいの男・・・この人はサングラスを掛け、俺に顔を見せないようにする

「・・・あんた。何者だ？」

「貴様こそ・・・何者だ。俺の存在に気づくとは・・・」

・・・そう言う男は、腰に機械を巻く・・・

「ツ!?それは」

「やはり・・・貴様、仮面ライダーだな？」

・・・俺のことを知っている・・・こいつは

「お前、何者だよ」

「悪いが貴様は俺たちの目的のために消えてもらおうぞ！」

そう言うのと、ドームが揺れる

ズウウン!

「ツ!?なんだ!?!」

「・・・まさか起動したのか? いや・・・そんなはずは」

そう言い俺が外を見ると

外には青黒い・・・カラフルな生物が浮遊していた

「ツ!ノイズ!」

「ちっ、あのババア・・・」

そう言う男は俺の前から姿を消す・・・

俺はその男とは反対の方へと走る

「ツ!響・・・無事でいてくれよ!」

俺はそう言うのと腰にドライバーを巻き、メモリを差し込む

『ビート』

「変身！」

俺は仮面ライダービートへと変身し、アリーナへと向かった

◇

「くっ！まさかノイズが来るとはッ！」

「どうしてここに来るんだよ！」

私たちは驚愕した。

ライブ後に、爆発が起きたかと思えば、突然その煙の中からノイズが現れ、近い者から襲っていつている……

さらに、空にもノイズが増えており……このままでは多くの被害を生むことになる……

「翼！行くよ！」

「ああ！行くぞ！」

私たちはそれぞれプロテクターを纏い、ノイズを蹴散らしていく

しかし、私たちがいくらか倒そうとその数は減らない

「どっから湧いてやがる、この数はッ！」

「くっ！このままでは！」

戦っていると、突然遠くで衝撃音が聞こえる

「ッ！被害が！」

「くっ……」

私が驚愕していると、奏にノイズの攻撃が入る

「ぐあっ！」

「奏ッ！」

ノイズの攻撃によって奏のギアは元の新品の状態から破損したものに変わる

持っている槍も……刃が欠けていた

「奏！大丈夫なの!？」

「大丈夫だ……このままやれる！」

しかし、そう言う奏の動きは先程の俊敏性のあるものではなく、どこか疲れ果てたものを感じる

「……時限式の限界か……わかってたけどな！」



時限式・・・それは奏の体質のようなものだ

奏は、制御薬の「LINKER」を過剰投与した結果、後天的な形で適合者とはなつたものの、「LINKER」を投与しなければ、最早ただの人間そのもの・・・それどころか、身体に様々な不幸を及ぼすだけである。

つまり、奏は100%あつた体力を毒か何かによつてじわじわ削られている感覚なのだ。

「奏・・・一度、回復を・・・」

「ダメだ。ここで私がいなくなれば守るものが減る・・・だからー!」

そう言い奏は槍を持ち、ノイズへと向ける

「私はこいつらを・・・殺さないとなつ!」

そう言い、ノイズへと攻撃する

血を吐きながら・・・彼女は歌い、槍を振るう・・・

「・・・くっ・・・」

私はその背を見ること以外、何も出来ず・・・ただ、ノイズに刀を突き立てることしか出来なかつた



クソつたれ！こんな・・・こんなっ！

俺は湧き続けるノイズに対し、攻撃をしていたが

目的は忘れてはいない

「クソっ！響ッ！響イーッ！」

俺は叫ぶが・・・響の声は返ってこない・・・

それどころか、目の前はノイズに襲われ、死んでいく人の光景を見るばかりだ・・・

「こんな・・・こんなッ！」

俺は人を襲うノイズを倒すが・・・

うわあああッ！

きやああああッ！

人々の悲鳴は消えることは無い・・・

「・・・満足か？自分の嫌いな大人が死んでいった」

そう言い、俺に向かってくるのは、先程会ったばかりのサングラスの男だった・・・

「貴様ッ！」

「そう怒るな・・・俺の目的はお前だけなのだ」

そう言うとうちは青黒いメモリを取り出す

「ツ！それは……」

「お前が始まりのメロディーを奏でるなら俺は死のメロディーを奏でる！」

そう言い、男はドライバーにメモリを差し込む

「発動……」

『ノイズ』

ノイズだと!? ……まさか！

俺が構えると、男は笑い始める

「ははは！そう驚くことでもない！俺もあの事件の被害者だからな！」

「何ツ!？」

「だが、貴様の存在は不愉快だ！ここで消す！変身！」

男はそう言うとドライバーを起動させる

『スタート、メロディー……ノイズ』

電子音と共に、阿鼻叫喚を思わせる、不気味な音楽が流れる

黒い霧が男を包むと……男の姿は青黒の……仮面ライダーに変わっていた……

「その姿は……」

「仮面ライダーノイズ……結構気に入ってるんだぜ？」

そう言うと、男は腕に手甲を付ける

「……貴様……」

「さあ、喧嘩を始めよう」

それが俺たちの戦闘の合図となり、俺たちは拳でぶつかり合う

しかし、相手の方がパワーは強く、俺は簡単に吹き飛ばされる

「ぐっ……」

その衝撃で、俺は扉を破り、客席へと出される

「さあ……俺と戦え」

そう言い指を鳴らすライダー……

「俺は……」

俺はそう言うと、一つの悲鳴が俺の耳に入る

「きやああああッ!」

その悲鳴は、俺が良く、いつも聞いていた元気な声の少女のものだった

「響ッ!!」

声のした方を振り向くと、そこには胸から出血している響と、

「クソっ!大丈夫か!?!しっかりしろ!」

ボロボロになりながらも響を起こそうとする奏の姿があった

俺も響に駆け寄り、傷を治そうとする

『リペア、アクション!』

俺はトイが起動したのを合図に、響の治療をする

最低限の、治療をすると、俺は奏も同時に治そうとするが

「ぐあっ!？」

「おっと、そいつには死んでもらわんと困るんだよ」

そう言うノイズに吹き飛ばされる

吹き飛ばされた俺の身体は、奏と一緒に吹き飛ばされる

「クソっ……」

「貴様ツ！いい加減にしろツ！」

俺はそう言うノイズは

「どうする？守るのか？その頼りない力で……」

笑いながら言うノイズに俺は……

俺はメモリケースから、黒いメモリを取り出す

「ん？それはなんだ？」

「……ある人は言ってた……俺たちの力は……俺たちの物じゃないと……」

……そう言うノイズは

「じゃあなんだ。」

「俺たちの力は皆の物だッ！だから！」

俺がそう言うのとメモリは虹色に輝き、姿を変える

そのメモリを俺は躊躇なくドライバーに差し込む

「発動！」

『レインボー』

「変身ッ！」

『ファイナルメロディー！レインボーオオオッ！』

電子音が鳴ると、七つの色……七つの歌が俺を包み、姿を変える……

その姿は、俺が目指した物……ライダーそのものだった

「貴様……その姿は」

「……さあ！奏でよう……俺たちの魂を！」

そう言うのと盾と剣を構え、ノイズと対峙する

俺の攻撃を見切り、ノイズも反撃してくるが、俺はその攻撃を盾で受け止め、剣で、足

でノイズへと反撃する

それを繰り返す中、奏と響を守るように翼さんが戦う

しかし、そんなことを無視し俺たちは戦う

ノイズも周りの雑魚を一層しながら戦う

「うおおおつ！」

「せいやあああッ！」

俺たちはやられてはやり返すを繰り返し・・・お互いがボロボロになるがクソっ・・・レインボースタイルでの消費が激しいか・・・

俺の身体は悲鳴を上げており、最早あと数分も変身できないであろう・・・

俺たちは武器をぶつけ、距離を取ると、お互いにメモリスロットへメモリを差し込む

『ノイズ、ファイナルドライブ』

『レインボー！ファイナルドライブ！』

俺は剣にエネルギーが集まり、奴は腕にエネルギーが集まる

「うおおおつ！」

お互いのエネルギーをぶつけると・・・辺りは光に包まれた・・・

## 第6音 悪夢の後 新たな話の幕開け

あの事件のあと・・・被害は最悪のものとなった

まず、死者、行方不明者を数えさせてもらおうと大体1万2874人にのぼる大惨事となり

その中には、霧夜 鈴夢と書かれた物もある・・・

しかも、文献によればノイズ災害による死亡率は全体の1/3程度であり、他は逃走中の将棋倒しの圧死や、避難経路の確保を争った暴行死であることがわかった

これでも十分悲劇に及ぶもののだが・・・まだ、悲劇は終わっていないかった  
これが週刊誌に載ると、一部の世論が変化し始めた

どのように変わったかと言うと、まず、死者の大半が人間の手によるものから生存者に向けられたバッシングが始まった。要は、残党狩りのようなものである

これに対し生存者たちはただ、生き残ったと言う理由だけで、暴行をはじめとした、社会的いじめを受けることとなった・・・

そしてもう一つ、二課側の保護対象であった霧夜 鈴夢のことを話す

霧夜 鈴夢は仮面ライダーノイズとの戦闘後・・・行方不明になっていた



正確にはどちらも消えていた・・・と言うべきか

その場に残されたのは破損状態の虹色のSDメモリ・・・

我々はそれを解析すると・・・そこにはシンフォギアシステムのことや、さらにはソロモンの杖と言った、こちら側しか知りえない様々な文献が暗号と化してこのメモリに組み込まれていた・・・

我々はこの暗号から、「もしかしてこれも聖遺物なのでは？」と考えを持ったがその考えは否定された

櫻井 了子の研究、例として何かしらの歌がこのメモリに反応するかどうかの実験が行われていたのだが・・・

結果として、それは反応した

いや、それとは、別のもの・・・つまり天羽々斬が反応したと言うべきか、天羽々斬のペンダントは発光し・・・まるで生きているかのように反応していた

櫻井 了子はこれに対し、「これは歌の増幅装置」だと解釈している  
では、この失われた技術を彼が持っていたのか・・・

それは誰にも理解出来なかった。

次にネフシユタンのことを話そう

ネフシユタンはあのライブで起動に成功したものの・・・

ノイズの襲撃のあと、突如行方がわからなくなったのだ  
つまり、第三者により取られたことになる・・・

また、二課のメンバーは風鳴弦十郎が守っていたために、ほぼ、無傷ですんでいる  
最後に装者たちのことを話そう

まずはツヴァイウィングからだ

ツヴァイウィングの片翼、天羽奏は重症・・・さらには「ガングニール」の装者としての力が消滅・・・つまり、彼女は装者では無くなった。

それに対し、風鳴翼は軽傷・・・しかし、歌手としての活動は停止することになる。  
そして、被害者である立花響は重症だったものの、病院で奇跡的に回復する・・・今は、リハビリの最中だろう。

・・・しかし、彼女たちの運命は・・・この後に大きく変わることになる・・・  
・・・こうして、悲劇の幕は下ろされていくのであった・・・

◇

・・・酷いな

俺は街の光景を見て・・・啞然としていた

俺が見ているのは、「何故お前が生きてるッ！」と言いながらあの悲劇を生き延びた人  
に対し、恨みを持つ人が攻撃している人達の図だった

．．．もちろんあの悲劇を知らない訳では無いだろう．．．しかし、あの人たちの心は、悔しさと嫉妬で覆い尽くされているのだろう．．．

．．．言葉は．．．届かない

「．．．トイ。帰るぞ」

『おう！今日は何も無く終われるな！』

「お前は元気だな．．．」

俺は一人．．．暗い道を歩くと．．．

♪

歌が聞こえる．．．

．．．

その歌を聞くと．．．俺の頬を雫が通る

「クソっ．．．俺は．．．守れなかった．．．」

『相棒．．．』

トイが慰めようとするが．．．俺は言葉を続ける．．．

「俺は．．．何のために生きて．．．何のために力があるんだよ．．．」

そう言う俺は足を進め．．．歩き出す

「止まれない．．．俺の魂は．．．止まらないんだ．．．」

俺は悔しさを胸に秘め・  
・  
一人・  
・  
歩き続けた・  
・  
・

## シンフオギア編

## 第7音 過去を振り返らず

・・・朝が来る・・・

何度目かわからない朝が・・・

私は起きると・・・すぐに着替え始める・・・

制服を羽織り・・・スカートを履く・・・そして

「鈴夢くん。行つてくるねー」

入り口にある一つの写真に挨拶をすると、私は外へ出る

「響ー！遅刻するよー！」

外の・・・階段を降りたところに親友である未来が待っている

「ごめん！急ごう！」

私は未来と合流すると、ある場所へと向かつて走り出す・・・そこは

「着いた！私たちの学校！」

「やったね・・・ギリギリセーフだよ・・・」

私たちは、額から出てくる汗を拭いながらも教室へと向かう・・・その途中で

「あら、汗をかいてますね。」

「ほんとだ！タオルで拭かなきゃ！」

「ほら！未来も拭くから落ち着く！」

廊下でクラスの仲良し組である、安藤創世、寺島詩織、板場弓美ちゃんたちにわしやわしやされる

「ちよ、ちよつとー、くすぐつたいよー！」

「もう！なんで私までー！」

私たちがわしやわしやされながら、クラスへと向かっていると

「廊下では暴れるな」

そう言い、私の隣を青髪の女の人が歩いていく・・・

「・・・翼さん・・・」

その人は、私の憧れ・・・風鳴翼さんなのだ・・・

いつものような、キリツとした姿ではなく・・・言葉にもやもやを感じる・・・

「・・・すいません・・・」

私たちは謝り、道を開けるが・・・

「・・・」

翼さんは冷たいまま・・・私たちの隣を通っていく・・・

「翼先輩ってあんなのだっけ？」

「もう少し覇気があるとも聞いたけど……」

……無理もない……あの事件のあとなのだ……

私が入りつくと……涙を流していた翼さん達がいたあの事件に……

……私が落ち込むと未来が

「響は、悪くない……大丈夫だよ」

そう言つて、私を慰めてくれた……



……俺は、リディアンと呼ばれる学園の前まで来ていた

なんでも、響がここに入学したと言うのを小耳に挟んだので、俺はわざわざここまで来ていた

「……なんで俺はここまで来たのかな？」

『知らねえよ。』

冗談目に言う俺に対し、トイは冗談抜きで返してくる

……まあ、知らないよな……

俺は、木の上で寝るようになって、くつろぐが・・・

その木の周りの人達の話し声により、俺は寝れずに・・・ついには

「寝れねえ・・・」

そう言いつて愚痴りはじめる

『人多いからなあ。しょうがないよな』

「ちつ。ニートどもが」

そう言い俺は木から降り、ふらふらと歩き始める

『どこに行くんだ?』

「決まってるよ。ふらわーに行くんだよ。」

『死んでるのにか?』

「・・・黙ってる。」

・・・死んでる・・・か。

・・・俺はそう言つと、ふらわーに行くためにバイクを走らせた



・・・いやー・・・授業辛かつたなあ・・・



私は授業が終わると同時に、その場に倒れ込む

「うー、難しいよ……」

「お疲れ様。ふらわーに行く?」

未来が私に近づき、そう言ってくれる。

私はその言葉を聞いて

「じゃあ行こう!?!お腹すいちゃった!」

「はいはい、行くよ?」

私は未来を連れ、ふらわーへと移動した……

……ふらわーに着くと、お店はいつものように賑わっていた

私たちは席に着くと、奥からおばさんがやって来る

「おばさん!いつもの頂戴!」

「はいはい、ちよつと待っててね。」

おばさんはそう言うのと厨房へと入り、作業をする

私たちはその間、楽しい会話に花を咲かせていたが

(ガタツ)

近くの席の人が立つのを見て、私は違和感を感じた

……あれ?あの人……

見た目は私たちと同じ、高校生ぐらいの身長・・・髪の色は赤く・・・朱に染まってる

黒いコートでフードを被り・・・まさに不審者なのだが・・・

どこか、懐かしい匂いを放っていた・・・

その人が隣を通り過ぎると、レジにお金をピツタリ合うようにして置く

『おばちゃん！お代置いとくぜ！』

「ごちそうさま。」

「またいらつしやいね！」

そう言ってお店を出てしまうが、その声には身に覚えがあつた。

未来も同じような反応をするが、私たちは口には出さなかつた

「・・・なんなの？あの人」

「さあ？暇な人だよね。」

「・・・なんか悲しそうでした。」

何も知らない三人はそう言うが、突然弓美ちゃんが

「そう言えばちよつと前まで『仮面の戦士』がいたとかだけど・・・」

「・・・そう言えばそんな噂あつたね。」

「・・・仮面の戦士・・・」

その話は今も噂として流れている。『仮面の戦士』の事だった

なんでも、私が事故に遭う前から存在していた噂らしく、話によればその戦士のいる場所では、歌が聞こえるとか。さらには虹の姿をしているとか。

．．．いろいろ信じ難い物だが、この噂を信じる人もいるらしい。

．．．そう言えば鈴夢くんも、あの事件で死んだんだよね．．．

．．．私と未来の友人．．．霧夜 鈴夢は死んだ．．．私たちは最初、その話を聞いた時は泣くよりも先に驚いてしまった

嘘だと思っていた。

．．．その後、彼の友達や、彼をよく知る玲奈さんでさえ、泣いていたのに．．．私は受け入れられなかった

私たちは．．．彼が死んだと受け入れた時には、自然と涙を流していた

．．．しかしどう足掻こうが、彼は死んだ。その事実が変わらないのだ。

玲奈さんはリディアンに入学したのだが、一度も顔を合わせていない．．．  
．．．彼の死は．．．私たちの周りすらも変えてしまったのだ

「．．．ああ．．．でも仮面の戦士が味方とは言えないでしょ？ 定番の悪役みたいなのもいると思うし．．．」

「いたとしても、それはそれですよ。私たちには関係ないんですから」

詩織ちゃんの言葉に私たちは納得してしまふ。

私たちは一般人。何も出来ない・・・ただ、逃げるだけしかできないのだ。

・・・力が欲しい。皆を守る力が・・・

◇

・・・どうした？

そこに「彼」はいた。

私は突然のことに少し驚いてしまふ。

この時の私は気弱く・・・外に出るのすら抵抗を感じていた頃だ・・・

しかし、いざ外に出ると、謎の少年と出くわした

年齢は私と同じくらい・・・服装は明るい感じのキャラクターが描かれたパーカーと半ズボンだった。

彼の手には少し古ぼけたフルートが握られており、曲を演奏していたところに私が近づき、彼を驚かせてしまったことからこの出会いは始まった。

・・・彼は演奏を止めると、私に言葉を投げかける

「どっつしたっ？」

「え……ええと……」

私が口ごもると、彼は再び演奏をはじめ

……その音楽は、どこか聞いたような、懐かしいものだった

「……すごい……」

その時、何も知らなかった私は驚いてしまった。

「……」

しかし、その反応にも彼は無言で演奏を続ける

きづけば、私たちの周りは大勢の子供、大人が集まり、演奏を聞いている

しかし、彼はそんなことにも驚いたりはず、演奏を続ける

……すごい集中力……

私は心が弱く……ちよつとしたことにも驚いてしまう……いわゆる普通の女の子

なのだが、彼はそんな私とは真反対だったのである

彼は、そんな小さい頃の私にとってのもう一人の憧れだった

「ふー……」

彼が演奏を終えると、周囲から大きな拍手が起こる

私も、大きな拍手をしていたのだろう。夢中で手を叩いていた

彼は周りに一礼し、その場を後にしようとするが

ギョッ

「・・・何?」

「あ、あの・・・」

私は気づけば、私は彼の服の裾を掴んでいた。

彼は少し不思議そうな顔をする。

「・・・ええと・・・その・・・」

私は勇気を出そうとするが

「いたいた!お嬢!」

「っ!」

「・・・お嬢?」

後ろから来てしまった黒服の言葉に彼は繰り返してしま

「あ・・・う・・・」

予想外のことには私は少し後ずさる

「ほら、叔父様がお待ちです。早く参りましょう。」

「え・・・ええと・・・」

私はこのまま彼に何も言えずに終わると思った時・・・

「・・・やめなよ。」

彼が冷たい言葉をはつする

「え？」

「やめなよ。嫌がつてるだろ？もしかして変態かな？」

「なっ！このガキ！」

そう言うのと黒服の人は拳を振り上げるが

「止めて！」

私が彼と、黒服との間に入る

「なっ、お嬢……」

「……なんだ。話せたんだ」

そう言うのと彼は黒服の人に

「すみませんね。手伝ってもらつて。」

「……あ、ああ……」

黒服の人達は啞然とする……そして、彼は私の方へ来て

「大丈夫？」

「う、うん……大丈夫。」

彼はそれを確認すると

「聞く？どうせなら新しいのも練習したいし。」

「!-いいの!?!」

「ああ、だって僕の演奏を聞いてくれるんだろ? だったらいいじゃん。」

そう言うのと彼は演奏をはじめると、私たちはそれを、懐かしく、聞いていた



．．．私たちは叔父様たちが来るまで演奏を聞いていた

「．．．これは．．．」

「ははは．．．まさか、○○の元にいたとはな」

叔父様は驚いたような顔をし、もう一人の大人は笑っていた

「叔父様．．．お嬢が．．．」

「．．．ふむ．．．まさかな」

．．．叔父様はその場でなにか話しているが、もう一人の大人は少年の元へ来て

「○○帰るぞ」

「ん」

そう言うのと楽器をしまい、彼は帰ろうとする

「ええと．．．」



「ふむ。帰るのか？」

叔父様が尋ねると、彼は

「僕達は忙しい。でも、僕は忙しくないけどね」

そうやって笑顔で返す

・・・叔父様は少し微笑むと

「・・・なら写真を撮ってくれないか？この子にとっては初めての友達なんだ。」

「わかった・・・」

それは・・・彼との出会いであった

彼の名前は・・・まだ思い出せない。

## 第8音 少年は苦しみ、少女は覚醒する

「あー！食べた食べた！」

私たちはふらわーでお好み焼きを満腹になるまで食べるとそれぞれ帰宅しようとしていた

黒いコートの人や、仮面の戦士のことなど忘れ、今、私たちはこの幸せを楽しんでいた

それにしても外は日が落ち始め、辺りは暗くなっていた

「うわー・・・暗いなあ・・・」

「だね。気をつけて帰ろう？」

そう言うのと私たちは歩き出す。

時々、学校のことや、皆の懐かしい話をしていたが

「それでねー・・・ほんとに面白かったんだー」「止まるんじゃねえぞ」ってさー！

「それって・・・」

「ネタバレ禁止だよー・・・」

私の話はあまり出来なかった。

突然だ。なぜならあの事件の関係者や、さらには事件に巻き込まれたなんて言えない……

未来は心配そうにこちらをのぞき込む

私は「大丈夫だよ」と一言言うと、未来は表情を笑顔に戻すが、その笑顔は少し暗いものだった

……忘れよう……あれは悪い夢なんだ……

◇

……クソっ……

俺は公園の木の……一人苦しんでいた

俺の手には古ぼけたフルート……親父の遺品が握られていた。

それを吹こうと構えるが……

「……ダメだ……」

構えても手が震え、思うように演奏ができない

「……参ったな……このままだと……」

そう思い、ふと、空を見上げると

「♪♪♪」

「・・・誰かの鼻歌が聞こえる・・・しかもこの曲は・・・

「・・・懐かしいな・・・夜」・・・か。」

この曲は、子供の頃、俺が無我夢中で吹いていたものじゃないか・・・でも

「ここまで完璧に出来るものなのか？」

「・・・この曲は知らない人からしたらここまで完璧にリズムを取れるものじゃないのだが・・・

そう思っていると、足音が微小だが聞こえてくる

「・・・誰だ？」

歩いてくる人に注目する・・・

公園の前を歩いているのは、青髪の少し和風の人だった

「・・・風鳴翼・・・」

そこにいたのは私服姿の風鳴翼が一人、この公園に歩いてきている姿なのだ

しかし、俺は同時に考えた

「・・・何故あいつがここに？」

まずここに一人で来る理由がわからない。もし、アイドル・・・いや、それなりに有名なら護衛の一人や二人付けるはずなのだが・・・

今の風鳴翼は一人。つまり無防備の状態なのだ

「・・・馬鹿が。この時間に一人で来るやつがおるかよ。」

俺はそう言うのと、風鳴翼へと近づこうとするが

『やめとけ相棒』

トイに冷静に止められる

「何故？」

『考えてみる、今、お前が出れば、それだけでお前が生きっていると噂になる。つまり』

「・・・二課とやらの護衛対象になるのか？」

『そこまではわからん。しかし確保はされるだろうな』

・・・トイの考えも一理ある。確かにあれだけの力を行使してかつ、彼らにも特定されてる。

唯一・・・死んでいるのが救いか。

しかし、生きてるのがバレればしつこく付きまとわれるだろうな・・・

「ちっ。」

『わかつたら余計なことはするなよ？いいな？』

トイがそう言うのと俺は頷き、そのまま闇へと消えた



．．．ぐー．．．ぐー．．．

まさかの休日。私はだらしなく寝ていた。

．．．んー．．．今日は．．．休みか．．．わーい。

一度起きてはそう言うが、私は布団の暖かさに再び寝てしまう

「響ー起きてよー!」

隣で親友の未来が起こしているが、私は起きる気は無い。

「．．．ふらわー行かないよ?」

そう言う未来の心無い一言に私は飛び起きて

「ダメー!それはダメだよ!起きるから!ね?ね!」

恐らく私の起きる速度にみんながビビったであろう。

．．．気がつけば、私は未来に抱きついた形になり、未来はその感覚に浸っているの

か、表情が崩れてきている

「．．．はっ!、嘘だよ嘘。ふらわーはちゃんと行くから」

「やったー!」

私の喜ぶ姿は．．．まさに子供のものだった。



・・・久しぶりに未来と過ごす休日は楽しいものだ。

話をしているだけで、私たちは盛り上がる。

もちろん、買い物もするが、未来が私を使つて、ファッションを試すのもまた、楽しいものである

私が照れる中、未来が新しい物を持つてきては着せる・・まるで、着せ替え人形のようにだ。

お昼は、パフェを食べに例のカフェへ。

そこには髭をいい感じに生やしたマスターおじさんと

「え?! 玲奈さん!」

「響ちゃん、未来ちゃん!?! どうしてここに?」

そこにはバイトとして働いていた玲奈さんがいた。

玲奈さん曰く、鈴夢くんの働いた場所が気になる上に、この店長が「ここにいれば鈴夢くんも来るかもよ?」と言ったとか・・・

玲奈さんも、まだ鈴夢くんが生きていると考えているんだ・・・

その思いは私達も一緒であり、私達も鈴夢くんは生きていると思っ

「じゃあ、ごゆっくり〜」

そう言うのと玲奈さんは厨房へと戻っていく

「いいところだね。」

「早く食べたいな〜」

私の頭の中は、食べることしかなく、既に未来の言っていることは頭に入っていなかった

数分待つこと

「・・・お待たせ致しました。」

店長さんが、話題のパフェを持ってきてくれる

「わーいー！いただきますー！」

「いただきます」

私たちは、それを一口ずつ頂くが・・・

「んー！美味しいー！」

話題のパフェは、予想より美味しかった。

◇



・・・その後、バイトが終わった玲奈さんと、話をしていた。

「へー、すごいね・・・」

「まあ、慣れてくればこんなものよ」

私たちの前では、学園とは違う話し方をしていというが、やっぱりこの方がしっくりくる。

私たちがそのまま会話に花を咲かせていると・・・

ヴー・・・ヴー・・・

聞きなれた音が私たちの耳に聞こえてくる

「これは!？」

「ノイズだ!ここら辺に近いぞ!」

店長が言うからにノイズの出現位置はここから近いらしく、しかし、逃げればノイズの出現位置から逃げれるとのこと

「なら逃げよう!ここから離れようよ!」

「え、ちよつと!響待つてよ!」

私は未来と、玲奈さんを連れ、カフェを出る。

「・・・空にも・・・」

玲奈さんが空を見ながら呟くと、空にも大量のノイズがいるのを肉眼で確認した。

「どうして!?! どうしてこうなるの!?!」

未来は今にも泣きそうな声でそう言うが

「急ごう!」

私は焦りながらも二人を連れて逃げ始めるが

ズドオオン

「!・ノイズが!」

私たちの前にワームのようなノイズが現れる

「なんなの!?!」

未来がそう言うが無慈悲にもノイズは酸みたいなのをはなつ

「つ! 避けれない!」

このまま私達もやられる・・・そう思った時

「間に合ったか」

そういう声と共に、白の仮面の戦士が私たちを守るようにして立っていた。

気づけばワームのようなノイズはやられていた。

「えーつと・・・あなたは・・・」

「・・・まさか。」

恐る恐る尋ねる未来に、何かを確信したような玲奈さん。しかし、仮面の戦士は嫌がらず、冷静な声で話す

「……君たちはここから離れるんだ。遠く……できるだけ遠くな」

そう言うのと仮面の戦士は剣を手に持ち、ノイズを切り裂く

私たちは彼の戦う姿に唖然としていた

声からしてまだ大人……青年にも達していない人が、まさか戦うなどとは思っていないからだ

しかし、いち早く正気に戻った玲奈さんが

「逃げましょう！」

私たちは彼女の指示の下、逃げようとするが

「だめ！……つちにも！」

未来が叫ぶ方向には、大量のノイズが出現していた

人形から飛行形まで……様々なノイズが地上から空も埋めつくしていたのだ。

「だめだよ……だめ……」

「……力があれば……」

……私がそう眩くと……

ドクン……

心臓のあたりから熱を感じる・・・

しかも今日が初めてではない・・・でも、前感じた時より暑くなっている・・・  
ドクン、という音と共に、私の頭に一つの歌が流れる・・・この歌は

「・・・行こう。皆を守るために」

そう言い、私は駆け出す

「っ!? あいつ!」

仮面の戦士は叫ぶが私は歌う

「|Balwisyall Nescell gungnir tron|」

すると私の身体をあの時、助けてくれた人と同じプロテクターが私を包み込む

「・・・あれは・・・」

『間違いない。『ガングニール』だ!』

私は目を開け、自分の身体を確認する

私の身体はプロテクターに包まれ、ところどころに装甲が施されている

そして、不思議と湧き上がる力を握りしめ覚悟を決める

「これなら・・・皆を守る!」

私は戦う。皆を守ってみせる!

その覚悟と共に私はノイズへと拳を向け、戦いはじめた・・・

## 第9音 二課という組織、少年は存在を否定する

・・・まさか・・・響が。

俺は聖遺物であるガングニールを纏った響を見て唾然としていた。

「くそっ！俺は！俺はっ！」

俺は悔しいばかりにノイズを切り裂く

「何故だ！何故俺は弱いんだ！」

俺は泣きそうな声でそう言う。

「戦わせたくない！響を！大切な人をつ！」

俺は剣を振るい、振るい、振るい続ける

・・・何故だろう。なぜ俺は・・・

この疑問に答えるものはおらず、少年はただ一人・・・苦しんでいた



私をプロテクターが包むと、私は反射的に歌い出す。

「すごい……この力があれば……っ！」

私が感情に浸っていると、ノイズがこちらに向けて歩き出す。

しかし、私は冷静に

「玲奈さん！未来を頼みます！」

「わかったわ！」

そう言うと玲奈さんは未来を連れていく

私は拳を構え……

「はああああっ！」

ノイズの群れへと突撃する。

群れへと突撃すると、さらに拳を振るう、一発……二発と続ける。

この力が……この力があればっ！

私は拳だけでは、対応ができず、脚も使ってノイズを蹴散らしていく

「うおおおおっ！」

私は地上にいるノイズ相手に手加減なしで拳を脚をぶつける。

その衝撃で、そのノイズだけでなく、周囲のノイズも死んでいく

「まだ来るの!?!なら片付ける！」

そう言い、私はさらにノイズを蹴散らすため、空を舞う

そして、そこから急降下することで、私の周りを衝撃波が包む。

おかげで周辺のノイズは一掃し、さらには空中のノイズまでも倒してしまう。

・・・私は拳を振り上げ、さらに気合を入れる

「よっし！まだ行けます！」

私はそのままノイズを蹴散らしていった

◇

・・・遅かったか！

私が到着した時にはそこは戦場と化していたが・・・

「・・・はあっ！」

・・・そこで戦う・・・白い戦士を見つける・・・彼はっ！

「霧夜 鈴夢か！」

間違いない・・・死んでいるはずの彼・・・霧夜 鈴夢がそこにいた

何故生きているのを隠していたのはわからないのだが、彼は戦っている・・・なら！

「私とて防人だ！戦うぞ！」

そう言いながら、私は天羽々斬を纏い、刀を取る

「行くぞー！」

私はノイズに接近すると、ノイズを真つ二つに切り裂いていく  
白の戦士も同じように、剣を振るい、ノイズを切り裂いていく  
私たちの距離が近くなる・・・そこで

「霧夜 鈴夢！なぜ生きているのだ！」

私は仮面の戦士・・・霧夜 鈴夢にそう尋ねるが、彼は

「・・・違う・・・俺は！」

彼は自分を否定するかのように、戦う

その姿は少し前までの自分に似ていた

「私は未熟・・・だが！貴様がいれば心強いのだ！だから！」

私は今の心を彼にぶつける

彼がどう思おうが関係ない、だけど

「生きているのを隠すな！それでも男子か！」

私は最大の思いを伝える。

もし本性を見せてくれなくてもいい。

死んでいるとも言ってくれていい。

それでも、私は彼が生きてて欲しいんだ・・・



その直後、彼は堪忍袋の緒が切れたように答える

「っ！好き勝手言わせとけば！黙れよ似非侍！」

彼から反応がある、それもあまりいい言葉ではないが。

しかし、生きていたことに私は純粹に喜んでしまう

「ふん！帰ったら覚えておけよ！しつかり宴会で盛り上がるからな！」

「・・・随分古風だな！おい！」

私はこの時・・・笑顔だっただろう・・・

私たちは愚痴を交えながらもノイズを撃退していくが・・・

「そうだ！防人！響を助けてやってくれ！」

「何っ!？」

「あいつ、ガングニールを纏って戦ってるんだ！頼む！」

・・・彼は必死な声でそう言う。

・・・響とは・・・立花 響のことか！

彼女のことは知っている・・・何より私の後輩なのだ。

そしてあの事故の被害者・・・

それが今・・・戦っているのか。

「・・・わかった！ここは任せたぞ！」

「当たり前だ！任せとけ！」

私がある場所を離れると、彼はノイズを自分の方に来るよう仕向ける

「頼んだぞ！」

・・・貴様もそこを任せる・・・次は死なないで！

◇

・・・翼が着く前には既に戦いは終わっていた

・・・地面は荒れているもののノイズは一体もいなくなり、あとの残党も姿を消して  
いつている・・・

「終わったんだ・・・よかった・・・」

私は張り詰めた糸を切ったかのように、ため息をしてその場に座り込む

改めて周りを見るとやり過ぎた感じがすごいする・・・

・・・私がへたりこんでいると

「立花・・・なんだと・・・」

後ろから翼さんが叫びながらやってくる・・・

「これは・・・なんなのだ・・・」

翼さんはそういう・・・

周りには、ノイズの残り湯みたいな感じでちろっと液体が残っていたり、さらには地面や、車が壊れてたりする

「あつ、やりすぎた・・・」

「・・・ありえない・・・」

啞然とする翼さんをよそに、私は反省していた



・・・よかったな。

俺は一人、遠くから翼と響を見ていた

「あとは帰るだけだ。行くぞ」

『おーけ！帰ろうぜ！』

そう軽い会話を交わしバイクへと乗ろうとするが

「お久しぶりだな。鈴夢。」

「・・・んあ？」

・・・黒い車が俺の周りを囲み、さらにそのうち一台から奏が出てくる

その後から来た黒い車からもたくさんの黒服が降りてくる……

「……まじかよ。」

「一緒に来てくれよ? な?」

「面倒だ。」

「そう言わずにさ? な?」

……周りは銃持ちかよ……

「ついてつてやるよ。それでいいだろ?」

◇

……わあ、すごいなあ……

私は翼さんに脅される形で捕まり、そのまま黒い車でリディアンの方面まで来ていた

「……どこに行くんですか?」

「企業秘密ですよ。」

そう言う黒服の人に対し、私はワクワクした感じで座り直す

「……何故ガングニールがこの子に……」

翼さんは相変わらず、冷静な感じで座っている

・・・私の先程の力のことも向こうで聞けるのだろうか・・・？  
・・・私は不安になりながらも、車に乗り続ける・・・

そして

「着きましたよ。」

そう言い、私たちは車から降りる・・・そこは

「うわああ・・・大きい・・・」

明らかに、みんなが憧れそうな地下施設の入口だった。

・・・私たちはそこを通ろうとするが

「やっほー、緒川さん」

「お疲れ様です、奏さん。」

奏さん？

私は後ろを向く・・・そこには、一瞬わからなかったが、奏さんがいた。

「奏さん!?!」

「ん? ああ・・・あの時の・・・」

奏さんも私のことを知っているようで少し驚いた・・・

もう一つ驚いたのは・・・

「・・・ちっ。」

その隣には・・・ふらわーで見た、黒いフードに赤髪の人がいたのだ。

「・・・さあ、行こうぜ？」

そう言い、私たちは地下施設に足を踏み入れました・・・



「ようこそ！機動二課へ！」

「え？え？」

「・・・」

・・・私たちが二課と呼ばれる施設に入るなり、盛大に歓迎を受ける。

しかし、隣のコートトの人は

「後にしろよ。こちとら疲れてんだぞ。」

・・・、ダメだ。この人も狂ってる。

「いやーん！犯されちやうー！」

「・・・誰か一発打つと（永遠に）眠れる薬ねーのかよ。」

黒コートトの人は頭を抱え、白衣の眼鏡の人は騒ぎ、座ってる二人はため息をつき、奥の男の人もため息をつく。

翼さんは冷静で、奏さんは笑っている。

私がどうしたらいいか焦っているよ

「はじめましてかな？立花 響くん。そして……」

奥から来た大人が私を見て、そう言い、黒コートの人を見て、こう言う

「……霧夜 鈴夢くん。」

「え……」

「……」

その言葉に翼さんは、「ああ……」と。

奏さんは「やっぱりな」とそれぞれ反応を見せる

「……誰のことかな？」

「君のことだ。なぜ隠している？」

黒コートの人は男の人を睨み、そう言う。

「……てか、自分から名乗るのが常識じゃねえかな？どうだよ。」

「……俺の名前は風鳴弦十郎。これでいいかな？」

弦十郎さんがそう言い、黒コートの人は……

「……俺は霧夜 鈴夢ではない。それだけだ。」

彼はそれだけ言い、この部屋を出ていこうとするが

「……鈴夢くん?」

「……」

私は反射的に名前を呼んでいた。

もし、鈴夢くんなら……

私は僅かな希望を残して話しかける

「……鈴夢くんなの?」

「……そうだと言えば?」

「信じる。鈴夢くんだもん。」

……今の私は子供のように無邪気かも知れない

でも、生きてて欲しいよ……

「……わりいな。俺は霧夜 鈴夢じゃない。」

そう言い、彼は部屋から出て行った

◇

……俺はかつこ悪いなあ……

俺は一人、部屋でゴロつく



もちろん悪い方のごろつくではなく、ただゴロゴロしているだけなのだ。

「……なぜあの時、俺は言葉を否定したのか

……なぜ俺は、響の手を取らなかつたのか

……何故、自分を殺したのか……

「……誰か……教えてくれよ。」

『……』

彼の呟きを聞いていた相棒は……何も答えず……ただ、黙っていた……

◇

「戦うだど!? 貴様! どれほど辛いものか分かるのか!」

「落ち着けよ翼!」

場面は……鈴夢くんと呼ばれた人が出ていったあと、弦十郎さんから

「二課で共に戦うか? もちろん。否定もしてくれていい。」

と、提案を受け、私が「戦います!」と元氣よく答えた後であった

その答えを否定するかのよう翼さんが詰め寄ってきて、それを今、奏さんが抑えている状況である

「え……えつと……」

「貴様に分かるか！戦うことの辛さが！彼の思いが！」

「だから翼！落ち着けて！」

私は何も考えられなかった……

戦うこと……それはみんなを守ることだと思っていた……でも

「くつ……とにかく！私は反対だ！」

「翼！……どうしてこうなるかな！」

……翼さんは出ていき……奏さんは頭を抱えてしまう……

……この映像は……

「……っ……」

知ってる。こんな感じの状態を……

……私が震えていると弦十郎さんが

「やるか？今ならまだ引き返せる」

私は、その言葉に覚悟を決め

「……やります。この力がみんなの役に立つなら……」

「……そうか。だが無理はするなよ。それと……」

弦十郎さんは決意したように言う

「君の師範を俺が努めよう。君が自分を守れるように．．．皆を守れるようにな」

．．．私の運命は、変わっていく。後悔はしない。

．．．鈴夢くん。私、やるよ．．．この力で皆を守ってみせる。

私は胸に宿る力を握りしめ、固く誓った。

## キャラ説明（第9音までのオリキャラのみ）

第9音までのオリキャラの説明となります。

主人公

霧夜 鈴夢（へきりや れいむ）

仮面ライダービートの変身者。

大の音楽好きで、一部の人からは“絶対音感”と呼ばれるほどの実力者で世界を渡り、演奏をしてきたが知る人ぞ少ない。

また、過去の事件で両親を亡くし、それ以来一人で生活していたため、金には敏感。

さらに、シンフォギア編では死人扱いされ、自分もその存在を否定するほどの変わりようを見せる。

髪の色は過去編では銀髪だが、シンフォギア編で紅に染めている。

得意楽器はバイオリン

歳 シンフォギア編で16歳

身長 159 cm

誕生日 4 / 15

紫藤 玲奈へしどう れいな

鈴夢の幼馴染。大のお嬢様なのだが鈴夢が好き。

また、鈴夢の正体を知ってる。

鈴夢、玲奈が子供の頃、自分の屋敷に演奏に来て、彼の演奏の姿、音色に惹かれ、一目惚れ。

学校は私立リディアン音楽院高等科の所属。

歳 シンフォギア編で15

身長 152 cm

誕生日 7 / 08

スリーサイズは

B : 89 · W : 57 · H : 80

南雲 優也へなぐも ゆうや

上の二人の友人。二人の関係をよく知る人物。

厨二病を持つ、痛い人間。

遊戯王はお友達と言う。

歳 シンフォギア編で16

身長 162 cm

誕生日 4/04

トイ(へ)ビートドライバー

ビートドライバー・・・略してトイと呼ばれる、ビート変身ツール。

人工知能が組み込まれており、会話だけならこなせるがそれ以外は皆無。

ある時はノリノリに、ある時は冷静になるなんとも言えない性格を持っている。

事件の事を詳しく知る唯一の手がかりだが、誰も気づいていない

◇

息抜きに雑談させてみた。

鈴夢「・・・もつと早く作れよ？」

小南「いや・・・読み仮名振ってなかったのか・・・気づかなかったです。」

玲奈「これはもう、死刑ものね。」

鈴夢「だな。」

小南「ちよつ！死刑ですか！10話しか書いてないのに死刑ですか!？」

鈴夢「10話？休憩にはちようどいいな」

小南「ダメだ！話を聞いていない！」

玲奈「そう言えば、相方の夜南さんは生きてるの？」

小南「あー・・・夜南さんはテストの結果で死んでます」

鈴夢「・・・（。ρ。）ボー」

玲奈「ちなみになんぞ？」

小南「・・・ええつと・・・確か37人中・・・〇〇位だったとか。」

鈴夢、玲奈「・・・（。D。）」

小南「テストはノー勉で挑んじゃダメだね。」

鈴夢「そうだな。てか最近、部屋にポスター増えた・・・よな？」

小南「そうなんですよ。確か艦これのポスターが二件ほど、結城友奈も一件増えまして。」

鈴夢「おめでたいよな。なんか」

小南「・・・まあ、という事で今回の雑談はここまで！お読みいただきありがとうございました！」

鈴夢、玲奈（誰に言ってるんだろう・・・）

小南「本編を見て、気に入ってくれた方、気になる方はお気に入り追加よろしくお願  
いします！」



## 第10音 蒼き力、顕現する白き鎧

・・・はあ！てやあつ！

あたしは天羽奏、今は新しく二課に入った奴の観察をしている翼？大丈夫・・・多分な。

しかし、後輩はよくやるなあ・・・

司令は片手で後輩の攻撃を受けるが、後輩は諦めず、さらに連撃を加えていく

「はあはあ・・・」

「む・・・少し休憩するか。」

司令がそう言うと、後輩は立ち直り

「大丈夫です！やれます！」

元氣よく答えるが、司令は拳を下ろし

「いや、休憩だ。」

「ええっ!？」

「少し休憩して、体調が万全になれば続けよう」

「はいっ!！」

そう言い、後輩は休憩に入る

司令は、その場に座し、瞑想する

「・・・すげえな。」

一回、訓練室で後輩のポテンシャルは見たがすごいものだった  
しかし、いくつか不利な点もある  
まず、武器がないことだ。

聖遺物にはそれぞれ、それに対応した武器があるのだが・・・

天羽々斬なら刀。

ガングニールなら槍とあるのだが・・・

後輩のギアはそれが作れないらしく、戦闘手段が格闘しかないのだ。

つまり、必然的に司令が鍛えるのがいい・・・しかし

「結構厳しいなあ・・・そんな急がすこともねえのに。」

どうも見る限り、司令は焦っているようにも見える

・・・まあ、嬉しいのか、それとも最近になってやっと出てきたノイズに焦ってるの  
か・・・どつちかだろう。

それに後輩は難なく着いてきている・・・

「体力あるねえ・・・若いのは」

私は拳を握りしめ・・・悔しそうにそう言った・・・



・・・全く・・・なんでこうなるかな。

俺は一人、頭を抱えながら街を歩いていく

「全く。どうしてこうなるか。」

『・・・お前が正直になつてればこうはなるまいに』

「うるせえな」

俺が生きてるつてなつて、わーわー騒ぐのはおかしいからな。

「それで死んだ人達が喜ぶか？なわけないだろ」

・・・俺は・・・

『・・・独り言漏れてるぞ？』

「漏らしたんだよ。」

そう言う俺は、バイクへと乗り、ケータイの画面を付ける

・・・相変わらず、ツヴァイウィングの解散はニュースのトップになっている。

まあ、そりゃ、ファンからしたら悲しいだろうな。しかも解散の理由があれだからな。

・・・奏も歌えばいいのに。

正直ギアがなくても歌は歌えるはず。

「・・・どうしようかな。」

俺はバイクを走らせると、そう考えながらスピードを上げた

◇

ヴー・・・ヴー・・・

案の定・・・ノイズの警報が鳴る。

俺は、ビルの屋上より、ノイズが出るであろう場所を眺めていた。

「・・・いよいよだな。」

「ああ、私たちの目的はここからがスタートだ」

俺の隣にはあの時の少年と同じ銀髪の少女がいた。

その少女の首には赤い宝石のようなペンダントがある。

「・・・お前の目的ってなんだ？ どうやら俺たちとは違うみたいだが。」

俺がそう尋ねると、少女は悲しそうに言う

「弟を探してるんだよ。」

「・・・そうか。」

俺はそれだけ聞くと、その場から去る・・・

残された少女は・・・

「待ってろ！お姉ちゃんが必ず見つけ出すからな！」

・・・少女はその笑顔と共に、ビルの屋上から姿を消した

◇

・・・来たか。

俺は警報が鳴ったのを確認すると、バイクの移動方向を変える。

「トイ、行くぞ！」

『おっけ！行くぜ！』

そう言う俺はドライバーに赤いメモリを差し込む

「変身！」

次の瞬間、俺は炎を纏い、晴れると俺は仮面ライダービート、フレイムスタイルへと変身する。

俺はそのまま、道路を疾走し、ノイズの出現位置まで移動した



・・・来た！

私はノイズの出現位置まで来るとガングニールを展開し待機していたが・・・

「予想より数が多い・・・」

あの時は鈴夢くんが助けてくれたから数は少なかったけど、今回は私一人・・・つまり

「私がやるしかない。」

・・・覚悟を決めると、私は拳を構え

「爆走っ！」

ノイズの群れへと一気に距離を詰める

そのままノイズの群れへと肉薄すると、私はノイズを殴り、蹴り倒す

その反動で、周りのノイズも消し飛んでいくが、私はお構いなしに、ノイズを倒す

「はあっ！てやあっ！」

私は、教えられた体術に、さらに自己流の体術を合わせ破壊力を上げる

・・・しばらくすると

「はああっ！」

空から刀を持った人が降りてくる

「翼さん！」

「・・・」

私は名前を呼ぶが、翼さんはそれを無視して、戦う。

近づいては切り裂き、切り捨てていく

しかし、その刀には、私でもわかる迷いがあった

「てやあああー！」

私は腕のブーストを使い、ノイズへと高速で接近し殴り掛かる

その直後、目の前に大きな影が現れる

「っ!? かいヤツだ！」

しかし、その影のデカブツは、響が振り向くと同時に形を消す

「・・・あれは」

「間に合ったか！ 加勢する。」

そこには、この前とは違う、紅い戦士がおり、手に持つ弓で、切り裂き、穿つ

・・・私たちは、このままノイズが消えるまで戦った・・・

◇

・・・やるな。

俺は響の動きを見て、感心していた。

戦闘技術は恐らく、二課の誰かに教わっているのだろう・・・それでも、学習が早すぎる。

響の学習速度は前々からおかしいとは思っていたが、まさかここまで成長するなんて・・・

・・・俺は、戦いながらもそう感じていた。

「・・・これなら行けるな」

俺はそう言うのと、腰のホルダーに手をかけ、そのまま黒いSDカードを取り出す・・・  
「・・・俺たちの力・・・」

俺はそれをしまおうと、そのまま響達の方へと駆け出した

◇

・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・



私は、ノイズとの死闘を終え、その場に座り込む．．．すると  
ヒンヤリ

「ひんやりー！」

私の頬に冷たいものが触れる。

振り返ると．．．

「．．．飲め、それを纏っているとは言え、一番怖いのは脱水症やらだからな。」

．．．紅い戦士がジューズを持ってきてくれる．．．

．．．ゴクゴク．．．

「ありがとうございます！」

「．．．礼はいらない。」

．．．この気遣いの良さ．．．やっぱり鈴夢君じゃ．．．

．．．でも隣の人は、それを否定する．．．

「．．．終わりか？なら帰るか．．．」

鈴夢くんが帰る．．．その時

「立花響．．．」

「え？」

．．．声のする方向を向くと、翼さんが刀を構え、コチラを見据えている

「翼さん……?」

「……」

……その時……

「響、下がれ」

その声と同時に私の目の前で翼さんと鈴夢くんが武器をぶつけ鏢迫り合いになる

「……!どけ!」

翼さんは今にも誰かを殺しそうな顔で言う……しかし

「どかないよ。響だけはやらせない」

……私の名前を呼びながらも、彼は私を守る……

刀と、弓が打ち合い、その場には金属音に似たものが響く

「……ならば……押し通る!」

「……やるしかないの?」

「翼さん!鈴夢くん!やめてよ!」

私の静止を聞かず、二人は武器をぶつけ合う

……私の目の前には、二人の人間か打ち合っていた……

私はその光景を見ることしか出来ず、その場に座り込むことしかできなかつた……



ギイン

「ぐあつ！」

俺は刀に吹き飛ばされ、その場を転がる

「・・・立て！それでも守れるのか！」

そう言いながら、鬼神のように風鳴翼が近づいてくる

「・・・くそっ・・・弓じゃ限界かね・・・」

俺の弓は最早武器としては機能しておらず、ところどころにヒビが入っている

・・・俺はホルダーを探すが・・・

「・・・やべっ。落としたのか」

虹色のメモリがないことに気づく・・・つまり

「だいぶ前に落としたのか・・・くそったれ。」

俺はそう言うのと弓を構える

翼は刀を構え、さらに肉薄しようとする

しかし、彼女には歌がある・・・

先程から歌っている天羽々斬の聖詠が彼女に力を与えている・・・

つまり、あの歌がある限り、俺は彼女には勝てない……

俺が、勝つ方法は……

俺はそう考えると、ホルダーが突然発光しだす

「これは……」

「はああっ！」

そうこうしているうちに翼が切りかかってくる

その刀は……

パシィッ！

「っ！白刃取りか！」

「……」

俺は翼の刀を両手で受け止めると、そのまま翼を蹴り飛ばし、ホルダーから発行しているメモリを取り出す

「っ!?それは！」

「新たな力か……試すぜ！」

『おっけー！行くぜ！相棒！』

トイが戦意上昇したのを確認すると俺はメモリを差し込む  
そのメモリは蒼く……大海をイメージした色をしていた

「発動」

「ウオーター!」

「変身!」

『チェンジ!メロディー!ウオオオオターツ!』

俺の身体は電子音と同時に水に包まれ、リズムを刻む・・・その歌は・・・

「っ!?!天羽々斬だど!?!」

翼と同じ・・・天羽々斬の歌が流れていた

『流れる流水!零れる想い!』

LET'S GO!!!

仮面ライダービート!ウオーター!』

「・・・わりいな。お待たせ」

俺の姿は蒼く染まっており、背中には大きな太刀がある。

「・・・」

「貴様・・・」

俺は背中から太刀を引き抜くと、構える

俺の太刀は、刃の部分が蒼く発光し、峰の部分にはトゲトゲしたものがついている

「行くぞ!」

「来いー！」

俺たちは打ち合い、お互いを攻撃し合う

「風鳴翼！お前は一人じゃないだろう！」

「何!？」

俺は攻撃を続けながら叫ぶ

「何故響を否定する！」

「・・・っ！それは・・・」

「認めてやれよ！あいつだっつてわかってるんだから！」

「ぐっ！」

「・・・はあ・・・はあ・・・」

しかし、俺の体力は底を尽きようとしている

・・・決めるしかない

俺は翼を蹴り飛ばすと、メモリを右側のスロットに差し込む

『ウォーター！ファイナルドライブ！』

その瞬間、俺の刀はサメのようなオーラを纏い、深く構える

翼の刀は炎を纏い・・・お互い構える

「うおおおおおっ！」

次の瞬間俺たちはぶつかり合い、辺りには炎と水が交わりながら上へ登って行つた



・・・鈴夢くん!

私は二人がぶつかっているだろう場所から炎と水の柱が立つと走り出す  
・・・せめて、無事で!

私は悲願しながら、鈴夢くんたちのところへ向かう・・・その時だった

「お前か。融合症例第一号は」

突然、何も無かつたところから声がする。

声の主は少女で、コートを羽織り、姿を隠していた

「あなたは・・・」

「悪いが消えてもらうぞ!」

そう言い、少女はコートを脱ぎ、姿を見せるが

「つ!?それは・・・」

少女の身体には、私たちとは違う・・・白い鎧に包まれていた・・・

「行くぞっ!」

その声と共に、少女からムチが飛んできた・・・



## 第11音 少女は驚き、少年は過去を述べる

「行くぞっ！」

その声と共に、白い鎧を纏っている少女からムチが飛んでくる

「っ！」

私は咄嗟の判断で、それを避けるが

ビシッ！

「ああっ！」

避けたのは一方のムチであり、もう片方のムチが私に直撃する。

「はっはっはっ！情けねえな！」

少女は高らかに笑う。

私は荒れていた呼吸を整えるとその場で飛び、姿勢を直す

「よしっ！」

この声と共に拳を握りしめ構える

「あたしと戦おうってか!?無駄無駄！」

「そんなのやってみなきゃわかんないよ！」

そう言い、私は大地を蹴る

銀の少女は回避行動を取ろうとするが、私の速さには及ばない  
「っ！こいつ！」

少女が大地を蹴る頃には私は既に、少女の懐まで近づいていた  
「覇っ！」

私はそれと同時に掌を少女の腹にぶつける・・・が

「・・・」

「っ!?!効いてない!?!」

「おらっ!」

少女の身体はビクともせず、気づいた次の瞬間には私の首にはムチがあった

「ぐっ・・・あっ・・・」

「ふっはっはっはっは！ざまあねえな!」

銀の少女は私を持ち上げると、目の前まで持ってきて

「ひとつ聞くぞ」

「・・・なにを・・・?」

いきなりだが質問をしてくる

「私の弟を知らないか?」

．．．私はこの理由のわからない質問に首を降るが．．．

「嘘だな？だつて現に、貴様は弟と関わっていたのだから．．．」

「知らないよ！そもそも誰なの!?!あなたの弟は！」

「っ！」

私はそう返すと、銀の少女はさらに首を締めてくる

「ぐっ．．．」

「．．．そうか．．．なら教えてやるよ．．．冥土の土産にな」

そう言うとき少女はこう答える

「私の弟は『霧夜 鈴夢』だ。覚えとけよ」

そう言うときで私の意識は途切れた

◇

はあはあ．．．

俺は立っている．．．

俺の姿は翼と戦った時同様ビートのウォータースタイルなのだが．．．

俺の刀は最早武器としては機能しないものと化していた

「・・・脆いな。もう少し強化したいな」

『結果オーライだろ?』

・・・まあ、そうだな。

適当に相槌を打つと、俺は目の前で横になっている翼を見つめる

「・・・トイ。俺は・・・こいつを知ってる・・・」

『・・・そうか。』

・・・俺はそう言うと、彼女を抱きかかえ・・・

「よいしょ。」

いわゆる、お姫様抱っここの体勢にする

「・・・意外に重たくないな・・・」

『おいおいw女心を弄ぶなよ?』

「お前じやあるまいし。違うから」

俺はそう言うと、翼を持ち、運んでいく・・・

「う・・・ううん・・・」

・・・翼が唸るが・・・起きはしないな

俺はそのまま・・・彼女を運びながら・・・響の元へ戻ろうとする・・・だが

「・・・情けないな・・・私は・・・」

「……起きてたのか。」

「……あなたに“情けなくない”。なんて言われても私は今の状態をこう言うしかないのだ……」

「……」

……情けない……か。

「しかし私は強くはなれなかった。どれだけ刀を振るおうとも、どれだけ心を強くしようとも。決してだ。」

「なんでだろうな。」

「……はぐらかさずに教えてくれ。あなたは……」

……その時。俺の記憶が蘇る……



……その記憶は過去……あの事件の時だった……俺は子供の時……俺には親も、姉弟もいた。

……姉さんは寂しがり屋の……まあ、可愛い人だったよ。

でも、僕たちは母さんの血を引いているから髪の色が銀色だった……

学校ではそれでいじめられた・・・だけど

「人間なだけ有難いと思つてほしいな」

僕はその一点だけを貫いてきた。

・・・僕達はある日、内戦地にいった・・・

理由は・・・父さんに聞かなかつたからわからないが

父さんはただ一言

「俺たちに来ることがあるから行くだけだ」

・・・その時の父さんは、どこか寂しく、どこか悲しかった。

・・・内戦地に行けば。父さんと母さんは仕事に追われた。

その間は姉さんと二人でいた。

「・・・お母さん・・・お父さん・・・無事かな・・・」

「大丈夫だよ。多分ね。」

時々、そう言う姉さんを、僕は慰めていた

気持ちは分からなくもない。だけど僕は信じていた、必ず帰つてくると。

しかし・・・その願いは簡単に打ち消された・・・

気づけば、僕達の家まで銃声の音がして、父さん達が帰ってくる

「父さん？」

「ここはダメだ！逃げるぞ！」

「○○○○！早く行くわよ！」

「う、うん！」

母さんは姉さんを連れれると、僕達は周りの人達と同じく逃げ出す。

後ろには死。ただそれだけだった。

でも、前も生きる訳ではなく。僕たちにはいつ、死が降り掛かってもいい状態だった。

「っ！来るぞ！」

後ろから流れ弾が来る。

音と共に僕の近くに弾が着弾する。

・・・このままだと・・・

ドオン

「がっ!?!」

「っ！鈴夢！」

僕は銃声と共に、その場に倒れ込む・・・

僕の脚に弾が当たったらしく、僕は立とうとするが

「っ！」

もう一発。僕の脚に当たる

「鈴夢！鈴夢!!」

「くっ……くそ……」

父さんたちは、僕を助けに来ようとするが……

後ろからは死神の声、音が聞こえる。

今来れば……確実に死ぬから……

「父さん。逃げて」

「鈴夢……」

僕は笑顔で……答える

「……さよなら」

それだけ言うと、父さんたちは無言で僕の元を去っていく

……取り残された僕は……

「……死にたくないなあ……」

そう言う。

その時だった。

「……死にたくないか。ならこれを持ってけ」

「……?」

突然。隣に黒い人が現れる。



まるで虫を思わせる姿をしているその人は、僕に一つの機械を渡してくる

「……君は選ばれたんだ。」

「……え。」

「……これはアニメではない。」

さらに隣には紅い、侍を模した戦士が立つ

「俺たちとは違う時の流れに生きる戦士よ。今……目覚めろ」

王の椅子に座る戦士がそう言う。

気づけば僕の身体は黒い空間の上であり、さらにたくさん戦士に囲まれている……  
彼らは

「仮面……ライダー……」

僕が見ていたアニメ、仮面ライダーの人達。

……そこにいたのは平成ライダーと呼ばれた人達だった

そして、全戦士を代表してか、黒の戦士が来て

「戦え。君のために」

「僕は……」

僕はその手を取り、もう片方の手にある機械を手を取った……



「とまあ。こんな感じかな？」

「……」

私は驚愕していた。

まさか、そんな事件に巻き込まれてたなんて……

「……じゃあ音楽が嫌いになったのは……」

「……親が死んだからな。」

……私は何も言えなかった。

「音楽がなければ。俺の親は死んでなかったからな……」

……彼は……幼い頃に……こんな

……しかし、今この話を聞くと、ふと、嫌な予感がする

……この話を聞くと、何故か彼のことを考えてしまう。

昔会った男の子……

彼の去った日は……？

そして彼が事件に出くわした日は？

・・・嫌な予感がする。

私はこの予感を口には出さず、自問自答をしていた

「・・・でも、その後俺は、病院で目が覚めた。」

彼はその後を話し続ける

「その時の体は酷かったらしい。脚は撃たれてたし、頭からも血が出てた。おまけに腕は骨折だだよ。笑えてくる」

「でも、リハビリは不思議と嫌ではなかった」

「え？」

「トイがいたからな。俺はこいつに元気付けられた。」

『へへへっ。そう言うことだぜ？』

「俺は楽しかった。こいつと入れたからな」

『なんか嬉しいな』

「でも、痛いものは痛いからな。それに耐えて今になる」

・・・彼は一通り話を終えると、ため息をつく

「・・・どうしてだろうな・・・お前に俺は会ったことあるんだよ・・・」

「・・・奇遇だな。私もそう思う」

◇

・・・私は・・・？

私は気がつけば、横に寝かされており

「よかった・・・無事でしたか」

そばにいる緒川さんが安堵のため息をつく

私はその場に来た、二課の人達に保護され、目覚めるまで寝かされたらしい・・・

銀の少女の行方は・・・？

「あの・・・銀の少女は・・・」

「・・・すいません。僕達が来た頃には・・・」

どうやらいなくなつたみたいだ・・・

・・・あの人・・・

「弟は『霧夜 鈴夢』だ。」

・・・この発言が頭から離れず、思わず考え込んでしまう。

・・・私は・・・どうすればいいの？

◇

・・・何故だ？

「何？」

「何故姿を隠す？」

「・・・」

「立花は悲しんでいる。なのに・・・」

「無駄に騒がれたくない。」

・・・彼は真面目に言う。しかし・・・

「隠さなくても良い。しかし私たちには話してはくれないか？」

「・・・」

「確かに世間からしたら行方不明の生存はニュースになるかもしれない。しかし、私たちはそんなことはしないさ。」

・・・私がそう言うと彼は

「本当か？」

不思議そうに尋ねてくるが

「ああ、武人に二言はない。」

その言葉を最後に彼は会話を切った・・・

◇

・・・鈴夢・・・

「くそっ・・・ここにもいないのか!？」

「だけどフィーネは!ここにいてるって言った!

「待ってる!お姉ちゃんが見つけるから!」

泣きそうな声で言う少女は・・・杖を持ちながら歩いてた・・・

◇

・・・俺たちは、あれから歩き続け、二課の人達と合流する

俺はライダーの姿を解き、人の姿に戻る・・・

「翼さん!」

「緒川さん。申し訳ありません」

翼は緒川さんと呼ばれる人と会話しているな・・・

俺はその隙を見て、その場を離れようとするが・・・

「助かりました。霧夜 鈴夢さん」

「……まだ俺に何か用か？」

「……来てもらっていいですか？」

俺は翼の方を見ると

……なるほど。着いてこい……か。

「わかった。同行しよう」

俺は……響と顔を合わせられるかな？

## 第12音 少女たちは再会し、和解する

．．．二課．．．

「．．．二人とも無事だったか．．．」

．．．二課に着くと、弦十郎さんが安堵のため息をつく

．．．座っている、藤堯さんやおおいさんが苦笑いで俺たちを見て、奏さんは．．．

「．．．喧嘩すれば仲がいいんじゃないんだからな？」

．．．それはご最もで。

．．．俺たちは何も言い訳できず、ただ、話を聞いていた

隣の響は汗を流し、翼さんは顔を青ざめる。

．．．緒川さんは苦笑いしてるし．．．

．．．俺の顔は．．．恐らく笑顔にはなっていないだろう．．．

．．．俺達が一通りの反応を見せると弦十郎さんは腕を組み直し

「．．．それで。君から話があると翼から聞いたのだが．．．」

「．．．っ」

弦十郎さんが目を光らせ、睨みつけてくる



・・・そりや、こうなるよな。

・・・いつか来ることは分かってた。

自分の正体を誰かに話す時が・・・

・・・隣の響と翼が俺を見るどころか、全員が俺に注目する・・・

俺の耳のイヤホンにトイから

『・・・言つてこいよ。それと泣かせるなよ?』

・・・そう聞こえる

・・・俺は・・・

「・・・俺は・・・許して貰えないかもしれない。いや・・・」

俺は拳を握りながら答える

「・・・ただ単に怖かったんだ。自分もああなるとな・・・」

「・・・」

「だけど。今ここで・・・俺は・・・」

俺はそう言うくとフードを取り、顔を上げる

その時、響から声が漏れる

「あつ・・・」

「・・・改めて言おうと思う・・・ただいま、響。」

俺は・・・笑顔か・・・？

俺の頬を雫が流れる

・・・泣いてなんか泣い・・・泣いて・・・

「・・・ばか。」

そう言うのと響が俺に抱きついて、胸板を叩く

「ばか・・・ばかばかばかあ！」

「・・・ごめん。」

・・・その場は一瞬だけ、俺たちの世界になった・・・

・・・後悔はしない。俺であることを認めてくれた人のためにも・・・

俺が響を抱きしめようとする・・・

「・・・おいおい、あたし達にも言うことは？」

・・・奏さんが絡んでくる・・・

俺は・・・

「お騒がせしました。改めてたくださいま。」

・・・俺の顔は・・・笑顔と泣き顔の混じったものになってただろうな・・・だせえ

◇

「……響。ごめんな？」

「……ふん。」

「どうやら突然の告白？で響が拗ねてしまったようだ……  
……正直今まで仲が良かったからどう対処すればいいのか……  
うーん……どうしたものか」

『だから言っただじゃんかよ』

「……まさか泣くなんて思ってたよ。」

「俺は肩をすくめる……」

「……しかし……泣いてくれるなんて……」

「ちよつと嬉しいかもな……」

「何が？」

「っ!？」

「俺が独り言を漏らすと、響がいきなり目の前まで来る」

「……響さん？」

「……許して欲しい？」

「それはもちろん。」

「……なら……私と……デートしてくれる？」

「……は？」

「……俺はその言葉の理解には、時間をかけてしまった……」

「デート？響と？」

「……頭が混乱する……」

「……で、デートですか……」

「そうだよ。文句ある？」

「ないけど……なんで俺？」

「……デートって普通好きな人とするもんだろ？」

「……俺は頭を混乱させつつ……言葉を絞り出す……」

「ただ、一言……「はい。」と」

それを伝えると響の表情は拗ねてたものから喜びの表情へと変わる

「えへへへ……よかった……」

「……へ？」

「！いや、なんでもないよ！それじゃあね！」

「あつ……おい。」

「……独り言で何を言ったかと思えば、響は顔を赤くして去ってしまふ。」

しかし、よくよく考えれば響は俺に好意を抱いている可能性が．．

「ないない。俺だと響に迷惑かけるからな．．．」

それは向こうもわかっているだろうが．．

「．．．なんで俺なんだ．．．」

結局、俺は響がお出かけ（デートなどではない）に誘ったかは検討がつかないままこの日を過ぎた．．



「．．．やった．．．」

．．．やったよ．．．生きてた．．

私は自分の部屋で、ただ、純粹に喜んでいた

もちろん、彼をデートに誘ったのもある．．．しかし、一番は

「．．．生きてて．．．くれたんだよね。」

霧夜 鈴夢と言う存在が生きていたのだ。

ライブでの事故以来、姿を消した彼が．．

戦士とはいえ、生きていてくれた事が嬉しかった．．

私は布団の上で、顔を枕に埋めてゴロゴロする

(うー……どうしよう……どこか行くところあるかな……でも、鈴夢くんも行きたいところあるだろうし……うーっ……)

……私が一人、ゴロゴロしながら独り言を呟いていると

ピロリン♪

「ヒイイッ!?!」

突然の音に反応し、その場で飛び上がり、構えてしまう

「……未来?」

よく見れば、未来からのLINEだった。……なにになに?

『……明日、皆で遊ぼう?』

「……これだ!」

私は心の中で、「未来ナイス!」と呟きながら、返信を打つのであった……



……ゾクッ。

「……!?!誰だ!?!」

『……落ち着け。誰もいないぞ。』

響が「未来ナイス！」と呟きながら返信してるとき、彼の背筋に冷たいものが走ったと言う……



「……相変わらず人が多いな。」

東京の街並みは久しぶりに来ても相変わらず、多くの人で賑わっていた。

周りにはギャルや派手なオタク……さらにはホモ……さらには野獣……ゲフンゲフン……今のは見てないぞ。

……取り敢えず言いたいことは、この街は俺が最後に来た時とは変わらなかった。

「……つたく……リア充も多いし……なんでここにきたんだよ。」

昨日、響から「ここで待て。」と指令を受け……此処で待っているが……

「……これは流石に俺の体力も持たないですよ……」

周りがリア充だらけでは、流石に俺のS A N値も落ちてしまう……

……という事で俺が取るべき行動は……

チヨコン

・・・落ち着くなあ・・・

俺がとつた行動は取り敢えず銅像の隣に立つ事だ。

これならばつちには見えないはず。

そう言えば、未来ちゃんたちは元気だろうか・・・

生存を伝えれるのが二課だけとなるとやはり心配すべきはそこだろう・・・

あのおつさんは世間には教えないと言うが・・・嫌でも俺のことがバレれば・・・

「まあ。ただじゃ済まないな。」

あの事件のあとのように、またバツシングが起こるに違いない・・・

・・・俺は恐れているのだ・・・

「・・・なれたと思つたのになあ・・・」

俺は思わず腕を見る。そこには誰にもらつたか・・・シユシユと呼ばれる物があつた。

俺はこれを手放した事は無い。

風呂や、学校は例外として・・・それ以外は特別な時以外は付けているのだ・・・

・・・まあ。子供の時の記憶がないのは仕方ないな。

人間過去は振り返らないって言うだろ？

『そんな名言はねーよ。』

「今、俺が作つた。」



これ、流行らないかな。

・・・俺が独り、ブツブツと話していると

突然、目の前が真っ暗になる

「だーれだ!」

「・・・響だろ? 知ってる。」

・・・俺がそれだけ言うと、響は手を目から離し、俺の身体を向けさせる

「もう・・・引つかかってくれてもいいのに・・・」

「・・・歳を考えろ歳を。」

「むう。」

・・・ほっぺを膨らます仕草は・・・可愛いけど! 行動は慎んでくれよ・・・

「はあ。」

「ほら! ため息ついてないで、行こう!」

そう言うと言は俺の手を取り、走り出す。

周りなんて関係ないとばかりに、俺たちは街を疾走する

「鈴夢くん! 置いてくよー!」

「ちよっ! 待てっ!」

まったく・・・嫌な予感がするぞ・・・



．．．んもう．．．響遅いなあ．．．

私は響と遊ぶ約束を設け．．．集合場所に先に来ていたのだが．．．

「遅刻だなんて酷いよ．．．」

．．．それにしても。内容が気になるなあ

『大事な話！絶対遅刻しないでね！』

．．．ここで言う、響の大事な話がわからない．．．

このタイミング．．．絶対怪しいことではないと思うけど．．．

「なんだろう．．．彼氏．．．とか？」

．．．私はその言葉の後、首を横に振る。

「ないないない。響に限って．．．そんな．．．」

私がそうやって待ち続けると．．．

「未来ー！」

遠くから聞きなれた友達の声が聞こえる

「響ー！」

私たちは近づき、抱き合う。

「もう！遅いよー！」

「ごめんごめん！ちよつと用事があつて・・・」

そう言うど響は後ろを見る・・・そこには

「チヨ・・・ハイヨ・・・」

・・・息を切らした少年が・・・

「響？あの人は・・・」

私がそう尋ねると響は笑つて

「よく見て？もしかしたら知ってるかもよ？」

そう言われ、私は彼を見る

身長は響と同じくらい・・・

髪は紅・・・

・・・それと・・・

「・・・ダメだ。わかんないよ」

「・・・ホントか？」

そう言うど彼は腰から・・・

「サプラーイズ」

「っ!？」

・・・ココアを投げつけてくる・・・冷えてるのを  
その声で・・・私は・・・

「鈴夢・・・くん？」

・・・死んでいる彼の名を絞り出す・・・すると

「ただいま。未来」

「うわあああん！」

・・・彼は・・・生きていたんです・・・

◇

・・・いやあ。悪いことしちゃったな・・・

昨日から響に続いて未来まで・・・泣かせるなんて・・・

「男としてないな・・・これは。」

この感覚は、もしかしたら自分は最低なのでは、と思ってしまう。程のもので

この場に皆いたなら最悪とでも言われるのだろう・・・

「・・・未来ちゃん？離れてくれない？」

「はっ!？」

俺はそう言うのと未来ちゃんは素直に離れる。

「もしかしたら響が言ってた用事って」

「さて! 皆行こー!」

「・・・鈴夢くん・・・」

「諦めようか。これが俺たちだよ」

「・・・久しぶりの感覚に・・・私は・・・」

「うん!」

涙を少し、流しながら走り出した・・・



「・・・はあ・・・元気いなあ・・・」

俺たちはショッピングからゲーセンまで。幅広く遊び尽くし、くつろいでいた。

今は皆仲良くアイスタムである

「あー・・・癒されるんじゃ〜」

「おじいちゃんみたいなこと言わないでよー・・・」

「元と言えば響が悪いよ……」

……全くその通りだ。

俺はダブルのアイス、バナナとチョコを

未来ちゃんと呼ぶは仲良くストロベリーだ。全く、女の子らしい。

「……あー……うめーな……」

久しぶりのまともな飯に、俺は満足していた。

放浪中は、植物とか、塩水しか食べたり、飲んだりしかしてないから……

生き物は殺しません。坊さんですから。

「……鈴夢くん……ちよつといい？」

「ああ？」

隣から響の音がするので顔を向けようとすると

パクン

……へ？

「ご馳走様ー」

「……何が起きた？」

「ちよ、はしたないよー！響ー！」

……状況を整理しよう。

響が・・・俺の・・・アイスを・・・食べた。

・・・俺は少し考えた後・・・

「何も見てない。」

結論を簡単に出した。

「鈴夢くん!?!怒っていいのに!」

「ミクサンオレハナニモミテナイ」

・・・恥ずかしさで・・・死にたいです。



・・・どこいった。

あれから数分後。迷子になりました。

響は未来を連れ、どこかへ飛んでいき、置いてかれた俺は・・・

・・・俺は辺りは人が多く、下手をしたら巻き込まれてしまいそう・・・?

俺はふと、耳を澄ませる・・・

・・・た・・・たす・・・

「あそこかな?」

俺はそう言う、器用に人混みを避け、差し伸べられる手を掴む

「え!？」

「このままどこかに出よう!」

俺はそう言う、その手を引つ張っていく

声からして、手の主は少女なのだろう・・・俺たちと同じか、少し上の・・・

しかし、そんな事は関係無しに、俺はその子を端まで引つ張っていく

・・・人混みを出て、俺たちは一息つく

「はあはあ・・・暑いな・・・さて・・・だいじょ・・・」

俺は言葉を言おうとして止まってしまふ・・・

「・・・だな。ありが・・・」

・・・俺と同じく、向こうも停止してしまふ・・・

無理もない・・・こちらが分かってしまえば、向こうも分かってしまふものなのだ・・・

つまり

俺たちはお互いに知っているのだ・・・

「あ・・・あ・・・!」

俺は必死に声を絞り出そうとするが・・・



「お前……」

……向こうの少女から声を出す

「鈴夢……なのか？」

少女は銀髪で、胸が大きくて、短いスカートを履いている……彼女は……  
「……クリス……姉……」

姿は変わったが、髪の色は変わらない俺の姉、雪音クリスがそこにいた……

## 第13音 姉弟の再会。少年は決意する

・・・姉さん・・・どうしてここに？

俺は頭が混乱した。

姉さんはどうしてここに？あのあと何があった？

俺は突然のように思い出した出来事に対して、処理が出来ないでいた。

「姉さん・・・どうしてここに・・・」

「・・・お前を探しに来たんだよ。」

・・・姉さんの目は、喜びと幸せのものになっていた

「ああ・・・ようやくお前を抱きしめれる・・・寂しかった・・・」

姉さんは妖艶な感じで近づくと俺を抱きしめる

女の子の独特の匂いが、俺の鼻腔をくすぐる

「・・・ちよ！姉さん！」

「ふふっ・・・恥ずかしいか？」

「・・・そりゃ・・・」

・・・こんな人影の少ないところとはいえ、大勢人がいるのだ。こんなところで抱き

合うのは良くない

「……そう言えば母さんたちは……」

「……死んだよ。」

俺が尋ねると、悲しい……怒りを含んだ声が返ってくる

「え……」

「私を庇って死んだよ……だから……」

そう言う時姉さんは俺を抱きしめる手を強くして、こう言う

「私にはもう、お前しかいないんだ……一緒にいよう……」

……姉さんの気持ちは分かる……でも……

俺は姉さんの拘束から離れ、叫ぶ

「なら、一緒に暮らそうよ！皆いてたの……」

俺は言葉を止めた……それは……

「……壊れたのか……？ 鈴夢……」

姉さんの目からハイライトが消え、さらに姉さんが首からペンダントを出す……あ

れは!?

「トイ！あれは！」

『検索してる！待ってる！』

俺達が一通りの会話を終えると、俺の首に鋭いムチが巻かれ、引つ張られる

「ぐあつ!・・・がはっ・・・」

「・・・鈴夢・・・お姉ちゃんの言うことを聞けないのか・・・?」

「・・・くそっ・・・」

俺はそのまま、姉さんの側に持ってかれる

姉さんはそのまま俺を抱きしめ、こう言う

「・・・誰かに毒されたのか?・・・安心しろ、私が綺麗にしてやるからな・・・」

そう言う俺と俺に顔を近づけ・・・

つて!これは素直にまづい!

俺は反射的に姉さんを蹴り飛ばそうとするが

「つ?!ビクともしない!」

「・・・どうした?大人しくしろよ・・・?」

よく見ると姉さんの身体には、見たことの無い白き鎧があった。

・・・あれは・・・どこかで・・・

「ぐあつ!・・・」

「・・・鈴夢・・・お前はお姉ちゃんのだ・・・誰にも渡さない・・・」

・・・くそっ・・・どうすれば・・・

ここは人影の少ないところ。だけど……  
響なら……気づいてくれるはず……  
そう思っている

「鈴夢くん!どこー!?!」

「ちっ。邪魔が入るか……」

遠くから聞こえる声に、姉さんは舌打ちをし、白い鎧を解く

「ぐはっ……うえっ……」

俺はそこに落とされると、空気を一気に吸い込んで、むせてしまう

「……次は……こうはいかないぞ。」

姉さんはそう言つて、人混みへと消える

取り残された……俺は

「……姉さん……どうして?」

昔とは違う、姉の変わりように言葉が出なかつた……



「今日はありがとね!」

「いえいえ。」

響と未来ちゃんとの仲の良いお出かけはこれにて幕を閉じたが・・・

・・・俺はまだ、姉さんの変わりようが頭から離れなかった

「・・・はあ。」

「どうしたの？ 深いため息なんてついて・・・」

・・・隣にいた響が心配する・・・見られてたのか

「いや、なんでもない」

「ほんとに？」

・・・ジーン・・・

うつ、そんな厳しい目で見られると、流石に目を逸らしてしまう

「・・・なにか隠してる？」

「別に・・・」

素直に言えないな。

俺はそれでもと、嘘を貫き通す

「・・・別にいいけど、隠し事はしないでね！」

響からそう念を押される

無理もないか・・・生きてることを隠してたからな・・・

少し離れた所にいる未来ちゃんに目を向けると「私もだよ」と言わんばかりの目で見てくる

「わかったよ。隠し事はしないから。」

「ならいいや！早く帰ろう？」

俺は差し伸べられた手を取り、手を繋いだまま、それぞれの帰路へと向かった・・・



・・・久しぶりの我が家だな。

俺は部屋へ上がると、布団へところつく

ゴロゴロ・・・

「・・・姉さん・・・」

俺は未だにこのことが頭から離れなかった

変わった姉さん・・・別の仮面ライダー・・・

・・・そう言えば、あいつはどうなったのだろう・・・

そして、レインボーメモリは？

「・・・やること盛り沢山だな」

俺はそう言うのと布団で横になる

・・・そのまま・・・俺は静かに眠りについた・・・

◇

次の日、俺は二課で相談をしていた

「・・・仮面ライダー・・・ノイズですか」

「ええ。出来れば今まで出た方向とかを教えて欲しいんですが・・・」

「・・・分かりました、調べてみます」

そう言うのと緒川さんは笑顔のまま消える・・・忍者かよ

俺は一つ、出来事を終えると次は研究室へと向かう

「あらくどうしたの?」

そこには眼鏡をかけたナイスバディの女性、櫻井 了子が椅子に座っていた

「レインボーメモリって知りませんか?」

「知ってるわよ? ほら」

そう言うのと了さんはメモリを渡してくる

「いいんですか?」



「ええ。調べても分からないことだらけだし．．．いいわデータはとってあるもの」

俺は改めて一礼し、その場を去る

次に俺は．．．

「．．．はあっ！」

「甘い！」

俺は弦十郎さんと打ち合いをしており、俺は仮面ライダーで、弦十郎さんは生身で構えるが．．．

「せいっ！はああっ！」

バシィッ！

「踏み込みが甘い！力を込めろ！」

．．．俺はこの人に手も出せずにいた

オマケに弦十郎さんは片手で全て受け止めている。

「くそっ．．．」

俺は限界を迎え．．．その場に倒れ込む。

「少し休憩だ。身体を休めておけ」

「はい．．．」

俺は仰向けになりながら空を眺める

「……空気が美味しいな……」

……この日……俺は久しぶりに空気が美味しいと思った……



……ヴァー……ヴァー……

ノイズの警報が鳴り、俺はノイズの出現場所を見る。

そこには既にネフシユタンを纏った雪音クリスがいて、彼女は手に持った杖からノイズを出現させている

しかし、あの女は理解できない……

旧文明とか理解できない……だが……

「いつかは裏切る……」

俺は気づいていた……あの女の目的に。

「……先を急ぐか」

俺はドライバーを腰にはめると、メモリを差し込み、起動させる

「変身。」

俺はビルから飛び降りると、青黒の戦士……仮面ライダーノイズへと変身する

「さあ……出てこいよ……」

俺は宿敵が出るのを待ちながら……下へと飛び降りて行った……

◇

……俺はバイクへと乗り……道路を駆けていた

学園にいる響、翼は来れないから現状では俺しか行けないのだ……

『鈴夢さん！そのまま真っ直ぐです！』

「了解！」

俺はビート、ウォータースタイルで目標まで向かう……

「トイ！今日もよろしくな！」

『おうよ！行くぜ！』

俺たちは目標地点まで着くと、バイクを巨大ノイズにぶつけ、俺はそのまま空へと飛翔する

俺は背の刀を抜き

「せいやあああつ！」

そのまま地上のノイズへと切り下ろす

俺は地上に降りた後も、ノイズを切り伏せていく

時にはビルの壁を利用し、空中のノイズを切り

さらには、大地に刀を刺し、突撃してくるノイズを真つ二つにする

「まだだっ！まだ来るのかっ！」

『鈴夢！裏路地に高レベルの反応！この前のだ！』

トイがそう言うのと、壁を貫通してムチが飛んでくる

「つーこのムチは！」

このムチは前に見た・・・もしかして

俺が穴の空いた壁を見ると・・・そこには白き鎧を身にまとった姉さんがいた・・・

「・・・鈴夢う・・・どうして私の敵になるんだ・・・？」

姉さんの目には光がなく、負のオーラを漂わせていた

その手にはムチが握られており、しかも強く握っているのか、ムチが鋭く見える・・・

「姉さんこそ！どうして戦うんだ！」

「それはお前を取り戻すためだ！別の女とイチャつきやがって！」

そう言う姉さんからは再びムチが飛んでくる

俺はそのムチを避けるが、代わりに後ろのノイズがムチに貫かれる

「姉さん！やめてくれよ！」

「鈴夢！お前は誰にも渡さない！」

俺たちは・・・ムチと刀を打ち合い・・・そこで争いが始まった

## 第14音 覚醒する雷鳴の魂

・・・キーン

街の中・・・俺たちは打ち合っていた

ネフシユタンのムチを俺は刀で払い落とし

姉さんは俺の刀を避ける

「鈴夢！いい加減に私のものになれ！」

「なるかつ！俺は誰かのものじゃない！」

俺は叫びながらも、ムチを避け、ノイズを蹴散らしながら、姉さんと対峙する

「くそっ！奏さん！響たちは!？」

『もう少し堪えてくれ！』

そう言う俺は刀を持ち替え、峰の方を向け、姉さんに当てる

「ぐっ！鈴夢っ！」

「こつちだ！ついてこい！」

俺は距離を取ると、場所を変えるべく、走り出すが・・・

「逃がさないぞ！」

壁などなるノイズを俺の逃げる先に出現させる

「くそっ！姉さん！こんなことはやめよう！」

「嫌だ！鈴夢を取り戻すまでは続けてやる！」

「それって、迷惑なんだよ！」

俺は姉さんと刀で打ち合い、お互いに戦う

姉弟関係ない、ただの殺し合いだった

「くそっ！トイ！」

『おっけい！任せろ！』

そう言うのとメモリホルダーから紅いメモリが飛び出るが・・・

「させねえ！」

姉さんはムチを飛ばし、メモリを弾き落とす

「っ！くそったれ！」

『反則だろ！』

俺たちはメモリを拾うために近づくが、それを姉さんに阻まれる

「鈴夢！私のために死ぬ！」

「俺は死ぬえない！やるべき事を終えるまでは！」

俺は滑り込むようにして姉さんの股からメモリのある場所まで近道をする

「鈴夢うううっ!」

『あれがお前の姉かよ。どうかしてるぜ。』

「・・・ほんとそれな。」

トイの呆れた声に、俺は険しい顔で返す。

しかし、姉さんは俺を逃がさない一心で俺と戦っている・・・

・・・寂しかったんだろうな

しかし、俺には帰る場所もあり、頼ってくれる人たちもいる。

「やるしかないか。」

俺は腰のホルダーから黒いメモリを出すと、ドライバーに差し込む

『エラー・・・エラー・・・』

「やってみるか。」

そう言う質問無用でメモリを起動させる

「変身!」

『ジジジ・・・エラー・・・エラー・・・』

次の瞬間、俺を電撃が襲う

「ぐっ・・・あがああああつ!」

「っ!鈴夢くん!」



気づけば空からガングニールを纏った響が降りてくる

「貴様っ！私の鈴夢に何を！」

姉さんがムチを放つが

「霧夜っ！無事か!？」

それを天羽々斬を纏った翼さんが刀で受け止める

「邪魔だっ！貴様！」

「貴様こそ！何故こんなことをする！」

二人は言い争いながらも戦う。

響は俺の近くまで来て

「鈴夢くん！大丈夫!？」

響が触れようとするが、体に走る電流の存在に気づき、その手を引き下げる

◇

「うぐっ……うおおおっ！」

「……何か……私に出来ることは……？」

私は動揺して、どうすればいいかわからなかった……

「鈴夢くん！どうすれば！」

そう言うと……

『だったら歌っておくれよ。お嬢ちゃん?』

「!? 歌う・・・?」

『ああ、その歌が、俺たちの力になる』

・・・歌う・・・

気づけば・・・私は歌を歌い始めていた

“撃槍・ガングニール”・・・

・・・いつもの元気な歌を・・・彼の前で歌う・・・

「っ!・・・ひびき・・・」

・・・止めない。歌は・・・私に勇気をくれたから・・・彼に・・・勇気を・・・

「うっ・・・うおおおっ!」

次の瞬間・・・彼に雷鳴が落ちる

「っ!?! 鈴夢くん!」

「・・・」

その一瞬・・・彼の姿は変わっていた。

姿は黄色く・・・手の武器は刀から槍に変わっていた

「・・・おまたせ。響。」

彼は柔らかい声が聞こえる

「鈴夢くん。無事なの？」

「ああ、おかげでな。」

彼はそう言うと、再び白い鎧の人の方を向く

「あの人は・・・」

「俺の姉さんだ。」

彼がそう言い、私は驚いてしまった。

「・・・行かなきゃ。寂しい思いをさせたくないからな」

「・・・わかった。行こう！」

「ああ！」

俺たちは、姉さんを止めるべく・・・走り出した



「はあっ！」

「てやっ！」

私は刀を打ち合い、じりじりと距離を詰めていた

「くっ・・・こんな・・・」

「諦めろ。貴様の負けだ。」

私がそう言うのと、銀髪の女は笑い出す

「ふふふ．．．ふはっはっは．．．」

「．．．何がおかしい。」

「負けだあ!?!笑わせるなよ!お前たちなんか．．．」

そう言うのと彼女の白い鎧から別の光が発光する

「何!?!」

「殺してやるっ!!」

次の瞬間、白い鎧は剥がれ、中から赤い鎧が見える．．．

「っ!それは!」

「はははっ!『イチイバル』の力にひれ伏せよっ!そらあっ!」

そう言うのと彼女は手にある弓をガトリングに変え、乱射する

「くっ!」

私はそれを避け、上手く瓦礫の影に入る

「どうしたあ．．．?逃げたら殺せないだろお!」

そう言うのと次は腰の部分から大量のミサイルが飛んでくる

「っ!何だと!?!」

私はそれを避けられず、大量のミサイルをもろに喰らってしまおう  
くっ……うっ……」

「情けねえな……力がなければかりに……」

彼女は私の近くまでくると、ガトリングを頭に付ける

「……くそっ……」

「さよならだ。楽に逝けよっ！」

このまま死ぬと思ったとき

ギイン

「っ！これは!?!」

「なんだよっ!」

そこには奏が使っていたガングニールに似ている槍があった

「……姉さん！もうやめるんだ!」

そう言い、空から彼が振ってくる。

私の隣にも、少女が着地する

「……鈴夢……」

「もうやめよう。……こんなこと……何になるってんだ……」

……彼の姿は、前まで見た色とは違う、新しい色に変わっていた……その姿は……

「……奏……」

かつて私が目標としていた人の姿と極似していた……

「翼さん！無事ですか!？」

「……立花……」

隣に着地した立花が、私の身体を起こす

「……響、翼を頼む」

そう言うのと彼は槍を手に取り、銀の少女へと向かった



「姉さん！どうしてこんなことを！」

俺は手にある槍を振るいながら問う

「決まってるだろうっ！お前を取り戻すためだっ！」

「そんなの……っ」

姉さんはあくまでも俺を取り戻すためだと言う

「だって！いじめられた私をつ！一人だった私をつ！泣いてた私をつ！助けてくれたのはお前だっ！」

「・・・っ」

「お姉ちゃんはお前がいなきやダメなんだよっ！だからっ！」

姉さんはガトリングを握る手を強くする

「お前を私のモノにする！誰にも渡さないっ！」

・・・俺は・・・

俺は槍を見る・・・この槍は・・・

「そうだ・・・決めたんじゃないか。戦うって・・・」

◇

僕が機械を手にとると、龍のようなイメージを放つ戦士が問う

「本当にいいのか？それを取れば後戻り出来なくなる」

「別に？一度死に損なってるからそれでいい。」

僕はそう言うとき次は黄金の戦士がそばに来て

「君は人だ。生きているんだ。そんな事を言わないでくれ」

「その通りだ。君は生きているんだ、だから生きろ」

そう言うのはムゲンの戦士・・・

「なら、それは今日から君の相棒だ。」

カブトムシの戦士がそう言い・・・僕は

「ん。なら後で付けるよ」

「・・・そうか。」

僕は機械を腰に近づけると、腰にベルトとして装着される

「祈れ、君の力になるように」

「願え、光を持つ戦士になるために」

「成れ、正義のヒーローにな。」

・・・意識がうつすらとする中、僕は

「戦う。みんなのために」

そう言うのと僕の意識は・・・目覚めて行った



・・・みんなのために戦うって・・・決めたんじゃないか・・・

それを確認すると俺は改めて槍を構える

「つ!?!肉を削いでやるからなっ!」



「はあっ！」

そう言つて飛んでくる姉さんのミサイルを俺は一つ、手で掴み投げ返す  
あとは全て避け、一つ投げ返したミサイルを爆発させる

「っ！目くらましかよっ！」

そう言うと姉さんはガトリングを構えるが・・・

「遅いっ！」

俺は稲妻のように接近し、姉さんを蹴り飛ばす

「っ！鈴夢っ！」

「うおおおっ！」

次に俺は片方のガトリングを破壊する

「そんなっ!?イチイバルがっ！」

「まだっ！まだだあっ！」

そう言うと俺は槍を振るい、腕、脚、胴と赤い鎧を破壊していく

「嘘だっ・・・こんなっ！」

「・・・これで終わりだっ！」

そう言い、拳を姉さんにぶつけようとするが

「ぬるい」

「っ！」

逆に俺の身体が吹き飛び、辺りは静かになる

「鈴夢くん！」

「霧夜っ！」

二人は叫ぶが・・・俺は

「くそっ・・・またお前かよ・・・」

一人、感情的になっていた

「久しぶりだな少年。」

「うぜえんだよ。貴方は」

そこには青黒の戦士、仮面ライダーノイズが立ちはだかっていた

「！お前っ！」

「・・・契約破棄だ、悪いな」

そう言うのと男の手にはペンダントがあり、さらには姉さんを蹴り飛ばす

「ぐああっ！」

姉さんは近くのビルの壁に叩きつけられ、そのまま気絶する

「さて・・・ここで一つ、殺るとするか」

そう言うのと奴は手甲を装備して構える

対して俺は槍を構える

姉さんがぶつかつた衝撃で飛んだガラスが落ち、割れたのを合図に俺たちは走り出す  
「てやあああつ！」

ノイズはダツシユと同時に拳を突き出し、突撃してくる

俺は槍を構え、同じように突き出して突撃して行く

お互いが交わり、衝撃波が辺りを襲う

「貴様つ！腕を上げたなつ！」

「お前こそつ！なかなかやるじゃねえか！」

俺たちはそのまま打ち合い、互いに傷を負つていった

「ぐっ！」

「ぬっ！」

俺はノイズを蹴り、距離を置く

「決めるつ！」

俺は黄色くなつたメモリをスロットへ差し込む

『サレンダー！ファイナルドライブ！』

俺は雷を帯びた槍を投げる

ノイズはそれを避けるが、もう遅い

俺お腕には響のギアと同じく、アームドギアが装着されていた  
「行くぞっ!」

俺は光速とも呼べる速度でノイズへと近づき容赦なく蹴り込む

「ライダー・・・キツクッ!」

俺の蹴りはノイズを蹴り飛ばし隣の建物へと吹き飛ばす

「ぐああっ!?!」

ノイズはそのまま、建物を突き破り、中で転がる

しかし、次の瞬間、奴の姿が消える・・・これは?

「フィーネだな・・・あいつ・・・私を・・・捨て・・・」

そう言うのと姉さんはその場で倒れ込む

・・・俺は姉さんを背負うと・・・翼達のところまで行き、そして・・・

「帰りましょう。」

「・・・そうだな・・・」

翼は響の手を取り、立ち上がる・・・

丁度その頃には、緒川さん率いるSP達が到着し、俺たちを回収する

姉さんは、俺が保護する形で車に乗せる・・・

「・・・姉さん。俺はここにいます。だから・・・みんなで生きよう」

俺はそれだけ言うと、姉さんの頭を撫でながら眠りへと落ちた・・・

## 第15音 演奏へと帰還、記憶は蘇る

「・・・鈴夢・・・？」

私は見知らぬ天井を視界に・・・目を覚ます

横を見ると同じベッドが・・・

さらに横を見ると、点滴があつた

「・・・倒れたのか・・・」

そう言い、私はここまでの経緯を整理する

私は鈴夢と戦つて・・・そこから・・・

——「契約破棄だ。」——

その言葉が自然と蘇り、私は身体が震える

また一人になる・・・また・・・また・・・

私は身体を抱き抱えるようにし、その場にうづくまる

「・・・嫌だ・・・一人は・・・嫌だよお・・・」

・・・また、一人になる。そう思った矢先

「姉さん？」

．．．入口に、私を救う光があった．．．

「鈴夢．．．鈴夢っ！」

私がベッドから出ると、繋がっていた点滴のチューブが勢いよく外れ、点滴自体は倒れる

「姉さん？．．．どうした．．．の？」

私はお構い無しと鈴夢を抱きしめる．．．

ああ．．．懐かしい匂い．．．あの時から変わってない．．．

「鈴夢う．．．」

「．．．」

鈴夢は初め、少し動揺していたが自然に私の髪を撫で始める

「．．．大丈夫だよ。俺はここににいるから」

私はその言葉に．．．涙を流した．．．



「泣き止んだ？」

「．．．ああ、ごめんな。」

そう言うのと俺は姉さんに水を渡す

「……髪の色……変えたんだな」

「……ごめん。」

俺の髪は紅く、血色に染まった色になっている

それを見た姉さんは少し悲しそうな顔をしていた

「……戻した方がいいかな」

「一緒にじゃないといや。」

「……」

僕は少し考えると……

「わかった。髪の色戻すよ。」

「っ!? いいのか!?!」

「ああ、姉さんとおそろいがいいからね?」

「鈴夢っ!」

姉さんは喜びのあまりか、俺に抱きついてくる

姉さんの大きな胸が俺の顔に当たる

「んー!んー!」

「……どうした?甘えていんだぞ?」



そう言うのと俺の顔をさらに胸へと沈める

「んー！んー！んー！」

「・・・お前を離したりしないからな？一緒にいよう・・・」

その直後、この部屋のドアが開く

「霧夜・・・どうし・・・」

ドアからは翼さんが入ってきて、手に持ってたであろう袋を落とす  
姉さんの表情はニヤけたものから一変して、相手を睨む表情をする

「・・・霧夜を離せ、さもなくては切るぞ」

「・・・やだね。鈴夢は私のものだ。」

そう言うのと翼さんから刃物の独特の金属音がする

「・・・ならば切るっ！」

「んー！んー！んっ！」

「はっ！やってみろよっ！」

そう言うのと翼さんが地を蹴ろうとする・・・その時

「あー！いちやいちやして！うるさいなあっ、黙っとけよっ！」

・・・恐らくドアの付近なのだろう・・・奏さんがそう叫んでくる

翼さんは刀を収め、

姉さんは俺を抱きしめる手を緩める

「・・・とりあえず皆の所に行こう？ここじゃあ話にならないよ。」

「・・・そうだな」

「ああ・・・」

俺は姉さんの身体を支えつつ、一歩・・・また一歩と歩き出す

「鈴夢」

「姉さん？」

「これから一緒だな」

・・・その言葉に俺は

「もちろん。絶対に離れないから・・・ね？」

曖昧だが、姉さんの気持ちに答えた。

◇

．．．二課の司令室は重い空気に包まれた

．．．おっさんは少し険しい表情で立っている

「．．．それで、この子が．．．」

「間違いありません。照合率100%ーイチイバルです。」

あおいさんのモニターには聖遺物「魔弓・イチイバル」が映し出されている

「．．．ネフシユタンは？」

「．．．持つてねえよ。」

姉さんの持つていたイチイバルはおっさん．．．弦十郎さんが所持、預かる形で持つており、ネフシユタンの反応は無かった

つまり．．．何者かによって奪われたという事になる

「．．．そうか。それで君は．．．」

「．．．雪音 クリス．．．あたしの名前だ」

．．．姉さんが名乗り、弦十郎さんも「風鳴弦十郎だ、二課の司令をやってる。」と簡単に自己紹介をする。

弦十郎さんは、「さて」と一言置くと、空気がさらに重くなる

「．．．君の知ってる限りの情報を教えて欲しい．．．まずは誰が黒幕だ？」

黒幕．．．その言葉に司令室にいる人達が反応し、姉さんの言葉待つ

「・・・『フイーネ』だよ。」

「フイーネ？」

「・・・さあな。詳しくは知らねえよ、ただ、そう名乗ってただけだ。」

次に何故、ノイズを操れるか、と質問が飛ぶが

「・・・『ソロモン』だよ。知識の・・・」

「・・・ソロモン・・・」

俺はその言葉に反応する。

ソロモンと言えば知識の神より知識を授かった人間・・・王の名前である、つまりは・・・  
「・・・そこに、ノイズの情報・・・さらには聖遺物との関係もあるのか？」

・・・しかし、そうと決まったわけでもなく、俺の考えは頭の中で留めておくことに  
した

「・・・君はどうしたい？」

「え？」

俺が考えてる矢先、弦十郎さんがそんな言葉を発する

「どうする・・・って、」

「決まつてるだろ？ここで暮らすか。それとも、聖遺物を返却し日常へ戻るかだ。」

・・・この選択には姉さんも悩み始める

・・・どちらに転んでも苦しいこと、楽しいことのメリット、デメリットは同じだ・・・  
どちらを選んでも変わらない・・・つまり

これは姉さんを試してるんだ・・・戦う覚悟があるか・・・

・・・この選択次第では、戦う事になる。つまりは今よりもっと辛い経験をするかもしれないのだ・・・

しかし、俺としては姉さんには戦って欲しくはない。

出来れば普通の生活に戻って欲しい・・・

姉さんは時が止まったかのように固まっている

・・・俺は・・・

その時、弦十郎さんが

「・・・戦わないならそれでもいい。ただ、ここにいるやつは皆死ぬ気だ。」

そう言うのと二課全体が頷く

「君にその覚悟があるなら・・・喜んでイチイバルを返そう。しかし、このままでは君のやってきた事というのはただの罪悪だ。」

・・・俺たちは、何も言えず・・・ただ、聞いていた

奏さんも、翼さんも、何も言えず、ただ、次の言葉を待っていた

「……君の弟は戦っている。自分の意思でな。雪音クリス……君はどうしたい？」

……恐らくこれが最後のチャンスなのだろう……

俺たちは、各々の反応を見せる

……姉さんの拳が固く握りこまれ……そして

「やるに決まってるんだろ。罪とかじゃなくて、好きな人のために戦ってやる」

「……そうか。なら」

そう言うのと弦十郎さんは険しい顔から一変して笑い

「クリスくん。ようこそ、機動二課へ」

……この後……姉さんの歓迎会が、惜しみなく行われた……

◇

さて、姉さんの二課所属が決まったとして、問題は……

「姉さんの住処だよー……」

俺は部屋を掃除していた……理由は独り言で呟いた通り……姉さんの住処になるからだ。俺の部屋が。

まあ、嫌ではないが……その……年頃の男女が……一緒にいるというのは……  
「鈴夢ー？入るぞー？」

姉さんが俺の部屋に上がる

姉さんは一通り、俺の部屋を見渡すと……

「……相変わらず音楽はやってるんだな」

「まあね。」

俺はそう言うのと姉さんの荷物をクローゼット……ダンスにしまい込む

……姉さんの……ね。

「……そう言えば私ってどうなるんだらうな？」

「……聞いた話だと学園に入れされられるとか」

「……面倒だな」

そう言うのと俺は弦十郎さんに言われたことを思い出す

「リディアンでの演奏……ですか。」

「ああ、君の演奏を聞きたい。個人的だが……皆の意欲関心にはなるだろう。」

「……なるほど。」

「無理は承知だ。しかし……君の力になれば……と。」

「……」

俺は部屋の端にある、バイオリンを取ると自然と弾き始める

「この曲は……」

「『円舞曲』」

……俺はリズムに乗り、身体を流れるように動かす

姉さんも演奏を聞くために、耳を澄ませている

「……このまま弾くよ。」

俺の部屋は、響き渡る音色によって支配される

窓を開けているからか……外には多くの人が集まった

スマホで録画するもの……ペットと一緒に聞くもの……

親子で聞くもの……決して少なくはない

それでも俺は……演奏する手を止めない……

……ただ、弾くだけなら前の俺でもできる……もしかしてあのおっさんは……何かを伝えたいのか？

かを伝えたいのか？

……俺の演奏が終わる頃には外には先程より多くの人が集まった。

部屋の扉からも、少なくとも声がすることから……近くまで来ていたのだろうか

「……近いところ引越すかな？」



「……鈴夢と一緒にならどこでもいいぞ？」

改めて演奏を終え、外へ空気を吸いに行くと大喝采が起きた……



……はあく温まるんじや〜

お風呂場では、そんな歓喜の声が聞こえる。

「……楽しそうだな」

『はっはっはっ！何を今更！お風呂は命……いや！人生の洗濯だぜ！』

私は鈴夢がお風呂から出る間、こいつ。トイとかいう奴と会話していた

「……私たちが逃げた時か」

『ああ！そんなときに鈴夢と一緒になってな〜』

こいつの性格はよく分からない。

敵になってた時は冷静だったり、無言を貫いてたり……空気の読める嫌な奴かと思

えばその逆、熱くなったり……ん？熱く!?

『はっはっはっ……熱い……』

よく見るとこいつの身体からはすごい熱が出ていた

「ちよっ！どうするんだよ！」

『冷凍庫……プリーズ……』

「冷凍庫……あれか！急げっ！こいつの命のためにつ！」

私はすごい勢いで冷凍庫を空けると、中に放り込んで素早く閉める

「はあ……はあ……どうだ？」

『はあく生き返るんじゃ〜』

直接冷凍とか……アグレッシブかよ。

私は冷凍庫を空けると……中には冷たくなった、トイがいた

『いやー暑かった暑かった。やっぱ慣れないことはしない事だね！』

「……お前ってよく分からんやつだよな」

『よく言われるw』

……そう言ってるうちに、鈴夢がお風呂から上がる音がする

……お風呂……

「しまった……覗きに行けねえ……」

そう言っつて、落ち込んでる私にこいつは……

『今なら秘蔵の写真プレゼントですよ？いかがかな？』

「もらう。」

私は写真を貰うと、そのまま布団で眠りについた

「あれ？トイー？どこいった？」

『・・・へ、ヘルプミー・・・』

◇

・・・服装よし、サングラスよし。

俺は服装の再確認をしていた。何故なら・・・

「リディアンに言つて演奏か・・・緊張すんな・・・」

そう言う俺の隣には、トイーが冷えた魚状態で、俺を見据えていた

『へっくし！うう・・・さっみい・・・』

「・・・昨日あそこにいたお前が悪い。」

俺はそれだけ言うと、上からいつもの黒い・・・

「・・・やめとくか。なんか気味悪いしな」

そう言うと別の色・・・茶色のコートを出し、羽織る

髪は・・・

「鈴夢ー・・・おはよう？」

「ああ、おはよう。」

「……銀……」

そう、俺の髪は元の銀色に戻している。

昨日の姉さんのやりとりを思い出し、昨日のうちに終わらせておいたのだ。

「……朝ごはん食べる？」

「たべりゅー……」

まるで子供のように答える姉さんに、簡単に作ったものを出す

「いただきまーす……」

「それじゃあ、先に行ってくる」

「いつてらっしやーい……」

「トイ、よろしくな」

そう言う俺はバイクへ乗り、いつものように声をかける

「リディアンまでよろしくな。」

『へ了解』

その言葉を合図に、エンジンが掛かり、大地を疾走する

風が気持ちよく、俺の長めの髪は流れるように揺れる

「……頑張ろう。」

背中に担いだケースを大事に、俺はリディアンまでひとつ走りした。

◇

ざわざわ・・・

リディアンの講堂に私たちは集められた。

理由としては

「授業のリラックスとして、ある人の演奏を聞きます」

との事だった。

「でも、よく考えれば誰が演奏するのか聞いてないよね」

「・・・そうですね、有名な人とも言ってないですし・・・」

「なんだか、嫌な感じ」

そう言うのは、私たちのクラスの友人、創世ちゃんと、詩織ちゃん。

もちろん。弓美ちゃんもいるよ？

「・・・でも演奏聞くのは悪いことじゃないよね？」

「そうだね。心が安らぐからね。」

未来はそう言いながら私の手を握る

「・・・ちなみに玲奈さんもこの講堂にはいるらしいのだが  
・・・どこにいるんだろ?」

その時、遠くから声がする

キヤー!!

そんな幸せを体験したような叫びが、講堂はもちろん、外まで響く

「・・・一体なにが・・・」

私たちは思わず声のする方を見てみる・・・そこには

「先生って、どこにいるんだろ? やっぱ職員室かな」

「鈴夢くんっ!」

「んあ?」

私たちは人混みをかぎわけ・・・彼のところへ走った・・・

◇

「・・・んあ? 響?」

俺を呼ぶ声があった方を向くと、俺はこちらへ走ってくる響達を見つめる

「鈴夢くんっ!」

俺は周りの人たちに返事しつつ、彼女たちと接触する  
「どうして・・・って、響たちはリディアンだったのか。」

そう言えば緒川さんがそんなことを言ってた気がする  
・・・って、響たちは俺が来ることを知らないのか？

俺がそう考えていると

「霧夜、こちらだ。」

制服姿の・・・新鮮な翼さんに案内される

「どうもです。失礼します」

「・・・立花たちも着いてくるといい。」

そう言々と翼は校舎へ歩き出す

「・・・行こう?」

「え? ああ・・・そうだな。」

俺は響の手を取り、隣の未来ちゃんと響と一緒に歩き出した



「ところで鈴夢くんはどうしてここに?」

「えーつと・・・手続き・・・かな？」

「リディアンに入るんですか？」

「のんのん。俺じゃなくて姉さんがね。」

「クリスちゃんかー・・・楽しそうだなー」

響はもう、姉さんのことを名前で呼ぶようになったのか・・・  
仲がいいのはいい事だな。

「ところで玲奈さんには挨拶したんですか？」

「・・・まだ・・・かな？」

・・・玲奈・・・か。近いうちに挨拶に行くかな

・・・しかし、こうして見ると学校という所は懐かしい

改めて俺は後悔しているかもしれない。

「ところでどうしてここに？」

「ん？ああ、俺は演奏に来たんだよ。」

「え？」

「・・・叔父様が手引きしたのだ。ここに演奏に来るようにな

「そーいう事。」

・・・俺の言葉に二人は哑然とする・・・ん？



「翼さんは知ってたの？」

「……まあ……それは……ゴニヨゴニヨ……」

「……はて？ここでいいのか？」

翼さんがゴニヨゴニヨ言ってたところが気になるがまあ、部屋についたからしようがないね。

「それでは。ありがとうございます。」

「ああ、演奏に期待している」

「鈴夢くん！頑張ってるね！」

「鈴夢くん……応援してますよ？」

そう言うと彼女たちは来た道に戻っていく、さて……

「失礼しまーつす。」



「演奏始まるねー」

「落ち着きがないねえ。」

私たちは演奏が始まる直前まで、わくわくそわそわとしていた

「うー……もつと近くで聴きたいよー……」

「しようがないよ。大人しくここで聴こう?」

そう言ってるうちに、ステージに誰か人影が映る……あれは

「鈴夢くんっ!」

「響!うるさいよ!」

しかし、そんな私に気づいたのか鈴夢くんはこちらを向き笑顔で手を振る

キヤー!

それを勘違いする人達は……

「すごいなあ……」

「鈴夢くん、一応イケメンの部類に入るからね……モテるよ」

そんなことを話していると、彼はステージにマイクを持ってきた翼さんからマイクを受け取る

翼さんが、ステージから下りると鈴夢くんはマイクのスイッチを入れて

「えー……入口で会った人たちも、今初めて会う人も初めまして……霧夜 鈴夢です。」

彼の言葉を聞くべく……周りは静かになる

「今回来たのはここで演奏するため……だけなんですけどね。だけど……この演奏が皆さんにとって心に残るものであるとありがたいと思っています」

長い前置きを置いて・・・彼は

「それでは始めさせて頂きます。よろしくお願いします」

そう言うのとマイクを翼さんに返し、バイオリンを弾き始める

流れるような美しいメロディーが講堂に響き渡る・・・

彼にはスポットライトが当たっていて、その姿はまるで大舞台上で演奏している人にも

感じられる

「綺麗・・・」

隣の未来がそんな言葉を漏らす・・・気持ちはわかる・・・だって

「・・・すごいんだなあ・・・」

今の彼は・・・私たちの届かない所にいるんだから・・・



・・・聞いた事がある・・・この曲は・・・

「子供の時・・・彼が弾いてた・・・」

今の彼の姿は、子供の頃・・・初めて会った男の子に似ている

「あれは、霧夜なのか？」

似ているかと言われれば答えづらいが．．．それでも、彼の姿はあの子に似ている  
そして、その直後の事件．．．

あの子のお父様が言つてた名前は．．．

——「鈴夢」——

．．．あつ．．．

私は思い出した．．．あの時の子供の名前を．．．。そうだ．．．鈴夢だ．．．そし  
て

「彼だ．．．間違いない．．．霧夜なんだ．．．」

私はそう思うと、自然と涙が出てくる

生きていてくれた．．．生きていたんだ．．．

私を変えてくれた少年が．．．私に勇気をくれた少年が．．．それだけで、私の気持

ちはいつぱいになった．．．

教えなきや．．．彼に．．．、そして伝えなきや．．．

演奏が終わるまで．．．私は鈴夢のことを考えていた．．．

◇

・・・この演奏・・・気に入らないな。

一方外では、サングラスの男が講堂の中を覗いていた

「・・・全く・・・楽しそうだな。」

「・・・そう言うのは後でいくらでも崩せる。」

俺の隣には俺と同じくサングラスを掛けた女がいた

「ふん。あいつは俺の獲物だ、手を出すなよ?」

「言われなくてもわかってるわ。早めに処理してね?」

そう言うとな女は虚空へと消える

「霧夜 鈴夢・・・お前の力は俺のものだ・・・必ず取り返してみせる・・・待っている

よ『七つの歌』を・・・我が手に・・・」

そう言うとな男も虚空へと消える・・・

その場にはメロディーが流れた、彼の奏でる・・・平和を祈る旋律が・・・

## 第16音 物語は進む。二人の刃を交えて

あー……終わったか……

演奏を終えると、重度のプレッシャーから解放されたかのように緊張が解けていく

……俺は歓声、拍手を浴びつつ、ステージ上から下りていく

「お疲れ様。」

「お疲れ様です。気持ちよかったですよ。」

「……そうか。」

それだけ言うと、俺は講堂から退出し、バイクへと向かう。

「……久しぶりだったな……」

演奏するのは去年の玲奈の家で演奏した時以来だ……

……ん？玲奈……？

「鈴夢ーっ！」

「っ!？」

気づいた時には、俺の幼馴染である紫藤 玲奈が近くまで来ていて俺に強烈な蹴りを

喰らわせる

「ぐはっ!？」

「遅いわよっ!生きてたら返事しなさいっ!」

・・・少し涙ぐんだ声は、俺の耳にハッキリと聞こえた。

それだけ心配してたのか・・・申し訳ないな。

「・・・ごめんな?連絡せずに。」

「ふん。どうせどのタイミングで行こうか迷ってたんでしょ?」

「その通りで。」

俺はそう言うのと玲奈をどけ、身体を起こす。

服についた砂をはらい、改めてバイクへと乗り、声をかける

「玲奈ん家まで。」

〈了解〉

「送ってくれるんでしょうね?」

「早退にしとけよ?」

「準備なら出来てるわよ」

そう言うのと俺は玲奈にヘルメットを渡し、バイクにエンジンをかける

「行こう」

「レッツゴー!」

楽しそうな声を乗せ、俺たちは帰り道へと走り出した。



「お嬢様・・・鈴夢様ですか？」

「そうよ。だから通しなさい？」

「・・・お久しぶりです鈴夢様。」

軽いやりとりを終え、俺は玲奈の部屋へと通される。

メイドさんや、玲奈の家族に挨拶をし、玲奈に着いていく

「あらく鈴夢くんなの？お久しぶりね」

「おや、霧夜じゃないか。そろそろ玲奈を嫁にはしないのか？」

「久しぶりだな！兄弟！久しぶりにサバイバルに行こうぜ！もちろん親には内緒だ！」

・・・そんな家族の言葉が、何故か一緒に聞こえる。

「さあ、ここよ？」

「おつ、部屋の位置変わったのか」

「当たり前でしょ？入るわよ。」

「お邪魔します。」



玲奈が部屋を開け、俺は招かれるように入る。・・・そこには・・・

「うわぁ・・・メルヘーン?」

「どこがメルヘンよ。どつからどう見ても!360。どつから見ても!女の子の部屋でしようが!」

・・・玲奈の部屋は前、最後に来た時とは違い、ぬいぐるみ・・・や、さらには脱ぎっぱなしの下着とか・・・とりあえずいろいろと目に悪い状態と化していた。

「・・・女の子の部屋・・・ねえ。」

至る所に下着やら、ぬいぐるみが放置してある時点で女の子の部屋なのか、と錯覚してしまう

「なによ。文句あるの?」

「とりあえず部屋を片付けようぜ?」

「・・・それ、爺やにも言われたわ」

言われたのかよ・・・てか、爺さんもせめて何とか片付けさせてくれよ・・・  
「・・・ところで戦いはまだ続けるの?」

・・・不意に、玲奈からそんな言葉が発せられる

「・・・どうして?」

「最近ノイズの出現が多いでしょ?だから・・・心配で」

「……確かに最近はずいぶんノイズの出現速度が過去と比べて上昇している。それに、姉さんを向こう側から引き離れたのを起点にさらにノイズが頻繁に出るようになっていく。」

「……確かに……戦いは終わらない……でも、だからと言ってむぎむぎと降伏するやつもないからさ。俺は戦う。最後の一人になっても、ノイズを殲滅させるまで、俺は死なない。」

「……鈴夢……」

「そう言う俺は部屋を出ようとする」

「もう行くの？」

「ああ、俺はそう言う役目を背負ってるからな。」

「そう……帰ってきてね。」

「……約束する。」

俺は言葉の約束を交わすと、部屋を出て、館からも出る。

「お世話になりました。」

俺はバイクへ乗り、道路を駆け抜ける

「……ん？あれは……」

俺は帰り道に……ある一人の人影を見つめる……あいつは……

俺が近づくとわかったのか、向こうも反応してくる

「鈴夢っ!? 鈴夢なのか!」

「優也っ! 久しぶりだなっ!」

そこには俺の最高の友人、南雲 優也がチャラーい私服で歩いていた

「あれ? 変わった?」

「変わるわけねーだろっ!? 俺のまんまだよ!」

「このウザさ本物だわ」

「ふあっ!」

・・・全く・・・懐かしいなおい。



「全く・・・なんか、困ったな。」

「ああ・・・ノイズとかき・・・最近になって活動したって感じだよ・・・」

「お前は平気だったのか?」

「ああ、ノイズは生では見たことないな」

「そうか・・・」

俺は優也からそう聞くと、難しい顔をする

「俺は悪運強いからなっ！」

「自慢にもならねえよ。全く・・・元気なことで」

「元気があればなんでも出来るからなっ！」

そんな俺達がいるのは、近くのビル。中にはいろんな人達が歩いている

「相変わらず人混みは嫌いだな」

「そうか？俺はナンパ出来ていいけどな！」

「浮気性もほどほどにしとけよ。」

俺がそう言うと「綺麗な嫁さん欲しいからな！特に美人っ！」と、優也特有の答えが返ってくる。こういうところはやっぱり優也だと思う。

「さてー・・・いい嫁さんは・・・」

「ん？あの人の集まりは・・・」

俺たちは一つの人混みを見つめる・・・そこには

「ちよつと！離しなさいっ！」

「ちよつとぐらいいいだろー？俺たちと遊ぼうぜ？」

一人の女性と、多くの男達が揉めあっていた。

見ているところ・・・ナンパのようにも見えるが・・・あの挙動と、反応からして恐らく連れていかれるパターンなのだろう。

「・・・最悪だな。」

「珍しく同じだ。やるか？」

「優也は女の人を、俺が切り込む。」

「らじや。」

そう言う俺は、男達の群れへと入っていく

「はいはいはいはい。そこまでにしましょうか。」

「あゝあゝ？なんだてめえは。」

「さて、誰でしょうね？」

俺の後ろでは優也が女性を連れて行っている・・・さて、あとは俺かな？

「邪魔をしたんだ・・・遊んでもらうぜっ!？」

男が言葉を言い終える前に、俺は蹴りを喰らわせる。

男は後ろに大きく吹き飛び、周りの奴らは動揺する

「かかってこい。死にたいやつからな」

「てめえっ!」

早速、勘違いしたやつAがかかってくるが、俺は拳を受け止め、回し蹴りを喰らわせる

「てめえ・・・調子に乗るなよっ!」

「しねえっ!」

ナイフを持った奴が同時に俺に向かってくるが・・・

「道具に頼って喧嘩するぐらいなら、喧嘩やめた方がいいよ。その方が生き残れるから」  
その言葉を最後に、俺は片方を足の裏で吹き飛ばし、もう片方を鳩尾を殴った後で、首を腕で思いつきり殴る

「ぐへっ・・・」

「・・・ピクピク・・・」

連中は一気にダウン状態まで持っていかれ、口から泡を吹く・・・白目になったり・・・と、気絶している・・・

俺は手をはらうと、そのままその場を去り、優也と合流する。

「さて、大丈夫ですか?」

「あっ・・・ええ。」

「気をつけて下さいね? ああ言うのは出くわさないのが一番ですが、出会ったら迷わず助けを呼んでくださいね?」

「わ、わかったわ・・・」

「お姉さん、お名前は?」

と、突然優也がナンパを始める。おい、さつき説明しただろうが。

「おい……」

「やっぱ、綺麗だしき。名前聞いても損は無いかなって」

「……そうかよ。」

俺は頭をかき、優也はニコニコと女性の返事を待っている……そして

「マリア・ガデンツァヴナ・イヴ。それが私の名前よ」

「……南雲 優也だ！で、こいつが……」

「霧夜 鈴夢。覚えなくてもいい。」

「あーら、こりやマイナスだな。」

「どうせ忘れるんだ。名前なんか覚えなくてもいいだろ。」

マリアさん……だっけ？すこし、悩んだ後……

「また、覚えていたらお礼をするわ。」

そう言って、走り去って行った

「あー、振られちゃいましたか」

「……あつそ。」

俺達も、家へ帰るべく、道に戻り始めた……



・・・遊び終えた後でも、俺たちの気持ちは熱くなっていた

「楽しかったなあーっ、なっ!? そうだろ!」

「そうだな。またお前に会えなくなると寂しいよ」

「はっはっはっ! 心配すんなよ! また会えるさ。」

俺たちはそう言いながら、帰り道を歩く・・・その時

ああ・・・これが

ええ、これを国まで運ぶのが仕事です。

・・・微量だが、人の声を聞き取った。

・・・なんだ? 剣・・・? 国・・・? 一体なんなんだ?

俺は声のする方へと歩き出す、優也も

「なんか声が聞こえるな。行ってみるか。」

俺たちは意見一致で、声のする方向へと向かうと・・・

「ぐわあああっ!」

突然、人の叫び声がある・・・場所は丁度俺たちの行く先・・・

「っ! 行こうぜ鈴夢!」

「ああっ! 急ぐぞ!」



俺たちは叫び声が聞こえた方へと走り出す。しかし、走ると同時に「ヴーヴー」と言う警告音が聞こえる。これは……

「ノイズっ!?!こんな時に!」

「場所がわからないっ!このまま走ろう!」

俺たちはそのまま駆け抜け、声のしたであろう場所へと、到達する……そこは

「……っ。ひでえ……」

「……こんな……」

そこには黒服の……恐らく国の人なんだろう……国の人達であったものが、跡形もなく消えていた……。残ったのは濁ったような血の跡のみ……

そして、その場所にはノイズが湧き出ており、箱を回収していく……あれは

「あれが……剣か。」

「鈴夢っ!上だっ!」

優也の声が聞こえ、俺はすぐにその場を離れたあと……ノイズが急降下して来て、地面をえぐっていく

「トイっ!行くぜっ!」

『オツケーっ!レッツ!メロディーっ!』

俺はメモリホルダーからサンダーメモリを出し、機動させる

「発動！」

『サンダー』

「変身っ！」

『スタート、メロデーター！サンダーアッ！』

俺を稲妻のビートが纏い、周辺にも僅かだが電流が流れる

『響き渡る雷鳴！ 瞬間に轟く咆哮ッ！』

LET'S GO!!!

仮面ライダービート！サンダーアッ！』

俺は槍を持ち、ノイズへと向かっていく

槍で、ノイズを切り裂き、突き刺す、さらには槍からレーザーなるものを発射させ、直

線上のノイズを一掃する

「鈴夢っ!?!」

「優也っ！お前は逃げろっ！早くっ！」

「わかった！だけど死ぬなよっ！」

優也は俺の乗っていたバイクを動かすと、高速でその場から退避する

「さあっ！その荷物を返してもらおうぞっ！」

俺は、光速とも呼べる移動速度でノイズに接近し、持っている荷物を奪う。

「一掃するっ！」

俺は「サンダーズピア」にサンダーメモリを差し込む

『ファイナルブレイク！サンダーッ！』

武器にさらに電流が加わり、ノイズを貫き倒す

「まだっ！これで終わらねえっ！」

俺はさらに地面に槍を突き刺すと、俺の周辺には稲妻が走り、周りのノイズが一掃されていく

「うおおおっ！」

最後の一撃と言わんばかりに、俺は槍のエネルギーを放出する……その後には……

「……綺麗になったな」

辺りには……ノイズは残ってはいなかった

「……さて……箱の中身……は？」

俺が箱を開けると……俺たちは凍ったかのように、止まってしまっ、中には……

「黄金の……剣……」

そこには黄金の剣……が、綺麗な形で納められていたしかも……

「これは聖遺物なのか？」

『肯定だ……これは通称「デユランダル」だ。』

「デュランダル……」

俺はこの黄金の剣を手に取りろうとするが……

『やめとけ。そいつは害悪だ。』

トイがそう言うのでやめておくことにする

「でも……どうしてこれが……」

『恐らく研究するために運んでたんだろうな……んで持つて、回収つて所かな?』

トイがそう言うのと、背後に人の気配を感じる。

俺は槍を手を持ち……静かにその場で立つ……そして、静か……静か……横へ移動する。それにつられ、人の気配も動いているのがわかる

「……そこで何やってる? どうせろくな事じゃないだろうに。」

俺は後ろの人物へと、話しかけるが答えは帰つては来ない。それどころか、さらに警戒、敵対しているようにも感じれる

「出来れば……戦いたくはないんだ。引いてはくれないか?」

そう言つて、後ろを向くと、そこには僅かな砂煙を残し、人の姿はなかった……いや。

「上か。」

条件反射。俺が上を向くとそこには仮面ライダーノイズがアームドギアを起動させ、

宙を舞っていた

「ちっ！気づかれたならしようがない！覚悟っ！」

「何が楽しくて戦いをやるんだよっ！いい加減にしろよっ！」

俺は空中から降ってくるノイズに槍をぶつけると、そこに衝撃波が起こり、俺たちはそれぞれ別の方向へと飛ばされる

それでもと言わんばかりにノイズは加速し、一気に俺に接近してくる。アームドギアの出力を上げ、加速をつけた上で俺をぶん殴る

俺はそれを右手で受け止め、その手を弾くと左手でノイズを殴り飛ばす。

加速がついた俺の一撃は、ノイズに直撃し、後ろに吹き飛ばす。

「ぐあっ！……くそっ……負けるわけにはっ……」

「……どうして戦うんだ。あんたは。」

俺がそう言うのとノイズはフラフラと立ち上がりながらもこう言う。

「勝って……手に入れるんだ……『7つの歌』……始まりの力を……」

「……始まり？」

「フィーネが世界を壊し……俺達が世界を作る……その後は争いも、苦しみも、何も無い……ただ、平穏な世界があるんだ……そのためなら……俺はっ……」

「……」

俺はその言葉に唾然する。

フイーネ・・・世界を作る・・・？7つの歌で？そんなことが・・・もしそうだとすれば。俺たちの存在は「いらなかった」のでは？

あの時の選択はこの未来を知った上での選択だったのだろう・・・しかし、改めて現実を見てみる・・・俺は言葉が出なかった。

俺たちは罪・・・なら、生きていること・・・存在することが罪なのでは？

そう考える中で、俺には一つの闇があった。

人なら誰しもが持つ心の闇・・・それから生み出される絶望・・・。そして、それを目のあたりにした時の無力さ・・・後悔・・・嫉妬・・・憎しみ・・・

俺の心は今まさに後悔の闇に覆われていた。

もし、あの時素直に死んでいれば・・・もし、俺が仮面ライダーにならなかつたら・・・もし・・・

俺は自然と手の力が抜け、槍を落としてしまう。

「うああっ！」

「っ！」

ノイズは俺に拳を当てる。一撃だけじゃない。二発・・・三発・・・しかし、その間も俺の心は闇に覆われていた。

「どうしてこんなことに……」

「お前がっ……お前が邪魔をしなれば！」

「俺が……邪魔……」

ノイズは俺を殴り飛ばすと、メモリをスロットに差し込む

『ファイナルメロデー。ノイズ』

「はあっ！」

低い機械音と共にノイズのギアに青黒い稲妻が走り、空へと飛び出す……

「はああっ！」

ギアの出力も上げ、上空からの高速ライダーキックを俺に向け発射する。

俺はフラフラとその場を立ち上がり……急いで離れるが

「遅いっ！もらったあ！」

「っ……」

ノイズの攻撃が当たる直前……俺には光が見えたような気がした……

## 第17音 黄金の剣、戦争は始まる

・・・っ・・・なんだ？この光は・・・

俺は恐る恐る目を開ける・・・そこには先程までケースにて嚴重に保管させていたはずの「デュランダル」が俺を守る形で空中に浮遊しており、輝きながら俺の手元までくる。

「っ・・・これは・・・」

『デュランダルが・・・俺たちを選んでののか？』

俺は空中に浮かんでいるデュランダルを手にとると、デュランダルは先程とはまた、大きい輝きを放ち、姿を消す・・・

デュランダルが握られていた俺の手には、黄金の剣は無く、代わりに黄金のメモリがあつた・・・

「デュランダル・・・俺に力を・・・」

俺がそう言うと、不意に拳が飛んでくる

「っ！お前っ！」

「くそっ！なんだそれはっ！その剣は・・・俺のだぞっ！」



「・・・俺の・・・存在する意味・・・」

俺はサンダーメモリを取り出し、代わりにデュランダルメモリを差し込む。

「俺に力を貸せ。」

『デュランダル!』

「変身。」

俺はメインスロットを閉じ、ドライバーを起動させる。

『エクストラメモロデイツー! デュランダルツ!』

次の瞬間。俺の装甲が取り外され、新たに出現した黄金の鎧を身に纏う。さらには右手に剣が・・・左手に小型の盾が装着される

俺の姿は今までのビートとは違い。黄金の・・・まるで王のような王冠頭と、背中のマント・・・そして、各部分に施される特殊な装飾が、中世の騎士を思わせる・・・

ビートの歌も、今までならスタイルごとに「ガングニール」、「天羽々斬」と、共鳴するような感じで歌が流れたのに対し、このスタイルでは重々しい歌が当たりを支配した。

「・・・さあ、かかってこい。」

「うおおおっ!」

ノイズは出力全開のアームドギアを俺にぶつけるが、咄嗟に俺は盾で防ぎ、逆に殴り

返す。

「っ！あああっ！」

「どうして戦うんだ！どうして！」

俺の声は、怒りと憎しみが支配したあの人には届かない・・・なら！

「せいっ！」

「ぐっ・・・あっ・・・」

俺は剣を一閃させ、ノイズに直撃させる。

その一閃は俺も感じたが予想より重く、さらには人を切る感覚を感じた

「っ・・・予想以上だな・・・」

俺は剣を構え直し、腰のホルダーからメモリを取り出す。

「っ！・・・ああっ！がああ！」

「・・・すぐに終わらせてやる」

俺はメモリを武器と化したデュランダルに差し込み、起動させる

『ファイナルブレイク！デュランダルトゥ！』

その電子音と共にデュランダルにエネルギーが集まる、光・・・そう例えてもいいほどの輝きを放ったエネルギーが剣に集まる・・・

「・・・てめえ・・・この野郎・・・」

「終わらせる、この一撃で！」

俺は剣を縦に一閃させ、その勢いで大地に衝撃が走り、エネルギーはノイズに向かって走っていく

「ぐっ……ぐわあああつ！」

光の刃は……ノイズに吸い込まれるように当たって行った……

「終わりだな……」

俺は変身を解除する……その直後だった。

ヒュンと言う鋭い音と共に俺は吹き飛ばされる

「ぐっ……」

「ふん。案外使えない駒よ……」

「駒……？」

空から一人の女性が降りてきてそう言う……

女性はそう言うど落ちていたデュランダルを回収する

「全く……こんな姿になって……」

「お前……まさか……」

「ああ、名前を覚えてやろう。私はフィーネ。先史文明の巫女だ」

「てめえ……が……」

俺は手を伸ばすが、その手は届かず……そこで意識を落とした……

◇

「……ここだよね？警報が鳴ったのは……」

「ああ……しかし、やけに静かだな……」

私たちは遅れて現場に到着する。現場は人の血と、ノイズの血液だったり、とノイズがいたのは証明されているが……

「この地面のえぐれ方はなんだ？」

「……そこまで大きな戦闘があったのか？」

地面は割れたり、クレーターが出来ていたりほとんど道路としての面影はなかった。

気になったのは何故か中身のないケース。

「……何かの運搬中だったのか？」

「……その可能性は高いな。でなければ裏道は使わないからな」

「てことは鈴夢くんもいるのかな……」

私たちはその言葉に反応し、辺りを搜索する

恐らく霧夜は先に来ていた……でなければこんなクレーターや、戦闘のあとは残らないはず……

「……鈴夢くんっ！何処にいるの!?!」

「……っ！こつちだ!」

突然雪音が叫び声に近い声を上げる。私たちは雪音が見たものを見ようと近くに行く……そこには

「鈴夢くんっ!?!」

「鈴夢!」

「霧夜っ!」

私たちが見たのは、頭からだが多少の出血をして、目を閉ざしている霧夜がいた。

霧夜の近くにはもう一人、人がおり、その人も倒れていた

「っ！早く回収しないと!」

「緒川さん!急いで!」

「こつちは私がつ!急ぎましよう!」

私たちは彼らを抱えると、回収場所へ向かって走り出した



―二課医療施設―

そこで「私」の意識は覚醒する。

「……あれ？」「俺」はビートと戦ってたはず……

辺りを見渡すと、隣には「俺」愛用のノイズドライバーがあり、さらに隣は

「……」

銀髪の……あの時と変わらない少年がいた

「……私……負けたのか……」

あの時……感情的じゃなければ……、など、つい敗因を考えてしまう

「……ダメだ。前向きになるって決めたじゃん！」

私は布団を出ると、ドライバーを持って施設内を移動する……と、思ったでしよ？

「……逃げるとは関心しないな。」

「っ!？」

突然、声がしたので声がした方を振り向く……そこには

「初めましてかな？」「新海 美月 へにいの みつき」くん。俺は風鳴弦十郎……この

施設……機動二課の司令をやってる。」

「……っ。」

「とりあえず話を聞きたい。いいかな？」

「わかったよ。話せばいいんでしょ？」

「・・・そうしてくれると助かる。」

そう言うのと男は背を向け、歩き出す

「あら。私は嫌われてるのかな？」

「今まで敵だったからな。受け入れるには時間を要する。」

「なるほどね。」

そう言うのと男は歩き出し、私はついて行くことにした



「・・・っ。俺は・・・」

俺は悪夢を見ていた・・・

悪夢の内容は、自分が死ぬこと。

俺の最後は無惨で・・・人の形では無くなっていた。

「・・・違う・・・こんなの・・・これは望んでない。」

否定すれば否定するほど、人の形からかけ離れた物になる・・・最終的には人の面影

すらない……

「やめてくれ……こんなの……」

俺は身体を勢いよく起こし、叫び出す

「やめろおおおつ!!」

……その声はこの部屋には響き渡る……しかし、最悪なことに廊下にも響いた……

「はあ……はあ……」

俺の額には多くの汗が出ており、俺はそれを拭う

「……負けたのか……ファイネに」

俺は現状までのメモリを確認する。

……確認しても、デユランダルのメモリだけはない……つまり

「ファイネに取られたのか」

俺はそう言うと、布団から身体を出す。

「……みんなは……司令室かな……」

俺はビートドライバーを手に取り……歩き出す……

止まらない……ファイネが何を企んでるか知らないけど……俺は否定する。ファイ

ネのやることを!

「行く……みんなに話そう……」



俺は少しずつだが一步．．．また、一步と歩き始めた．．．



．．．この子が．．．

司令室の空気は重かった。理由は一つ。

「ここまでが私の知るフイーネの野望だよ。」

「黙示録の竜．．．そして、」

「全世界の統一．．．」

．．．フイーネの野望は私たちの常識の範疇を超えていた。それどころか、不可能とまで同時に思ってしまった

「．．．そんな．．．」

「ネフシユタンの融合。そのために君は利用されてたし、さらには動き回されてた。これまでの事は全部あいつの手のひらなんだよ」

「くそっ！くそおっ！」

装者たちは動揺を隠せなかった。

当然だ。いきなり目的が語られ、さらにはそのためまで多くの人たちを利用する．．．

つまり、今までの行動はほぼ無意味だったのだ。

「・・・止める方法はあるけど、フィーネは神出鬼没。何処にいるかもわからないし、突き止める術もない」

「でも、君たちの拠点には」

「フィーネと私たちは別行動。つまりどこにいるかなんてわかんないよ。」

新海は言い終えたかのように、くつろぎ始める・・・私たちは

「どうすればいいんだよ・・・」

「・・・わからん。」

この状態に何もすることができなかつた。

しかし、そんな事は前触れであり、ある一つの報告が私たちに衝撃を与える

「皆さん大変です！、ここより遠くない場所に巨大な塔が！」

「っ！なんだと！」

弦十郎叔父様の指示で、拡大モニターが表示される・・・そこには、紅く・・・天まで伸びるような巨大な塔がそびえ立っていた

「これは・・・」

「カ・デインギルか・・・初めて見る・・・」

「あれが・・・フィーネの計画の実行なのか！」

私たちはただ、黙るしかなかった。

紅くそびえ立つ巨大な塔の出現を、ただ、見ているしか出来なかった。

「何も出来ない……のか?」

「弱気になんなよ!何かあるはずだ!」

そう言うが、雪音の声も震えていた

「……そうだよ。やる前から諦めてたら……守るものも守れないから……」

「鈴夢!」

雪音の言葉に賛同するのは、医療施設で寝ているはずの霧夜だった

「霧夜っ!大丈夫か!」

「平気です。やれますよ。」

そう言うとは彼は、新海の方向を見て

「……っ。」

「俺はまだ貴方を許した訳では無い。それだけは覚えておいて下さい。」

そう言うとは彼は司令室を出ようとするが、叔父様がそれを引き止める

「どこに行く気だ。」

「あの塔です……あれにフィーネがいるなら……倒してやる」

「私も行く。鈴夢を死なせはしない」

霧夜に続き、雪音も同行を宣言する

「・・・なら私も！この力で、誰かを守りたいんです！」

「私も行く。彼には借りがある。」

立花と、新海も決定・・・なら

「叔父様・・・行かせてください・・・私たちには、死しても守り通すモノがあるのです。」

私も、このメンバーを代表して、叔父様に申し出る

叔父様は、腕を組んだあと、呼吸を置き

「なら、俺たちはリディアン周辺、さらには塔周辺の人たちを逃がそう。・・・緒川！」

「わかりました、やりますよ。」

そう言うのと緒川さんたちは急いで移動の用意をする

「これから二課は最後の任務を開始する！目的はフィーネの目的の粉碎だ！ここにいる

皆の奮戦に期待するっ！」

その言葉を合図に、雪音と霧夜が走り出す

私たちはそのあとを追うように走り、全員で地上へと出る・・・

「さて、行こうか・・・俺たちの戦いを終わらせるために・・・」

「・・・ビート・・・その・・・貴方を少し誤解していたかも・・・」

「話はあとだ。まずは敵を片付ける！」

私たちはペンダントを出し、聖詠を歌い出す

「負けてられないな行くぞっ！」

『オツケー！スタートツ！メロディーツ！』

「行こう、私のために」

『了解』

霧夜と新海はそれぞれメモリを差し込む

『ビート』

『ノイズ』

「変身！」

『スタート、メロディー！ビーイイト！』

『スタート、メロディー・・・ノイズ。』

彼らを白い鎧と、青黒い鎧が纏い、私達もプロテクターをその身に纏う

「行くぞ。俺たちの最後の戦いだ。」

その直後、ノイズ発生を知らせる警報がなり、それが私たちの戦いの始まりとなった

## 第18音 再び現る7つの力

「案の定っ！学園まで飛んでくるのなっ！」

この争いが始まりとも言える警報が鳴ると、ノイズが空を大地を埋め尽くすような数で学園へと飛来、進軍してくる。

俺たちはそれを潰しながら、カ・ディンギルの塔を目指して進軍していた。

こちらと向こうの戦力比は無限もいいところ・・・だけど

「こちとら対ノイズを何回もこなしてるんだ！そこら辺の軍隊よりは出来るんだよっ  
！」

「当たり前だっ！行くぜっ！」

俺は姉さんの弾幕を利用し、一気にカ・ディンギルへと向かう

「鈴夢くんっ！こっちは任せてっ！」

「ここは死守してみせるっ！行ってこいビートっ！」

新海さんと響が学園の死守。俺たちは「任せた！」の一言を言うそのままカ・ディンギルへと走り出す。

「響・・・大丈夫だよな？」

俺は底知れぬ不安を残しながらも・・・カ・デインギルへと向かった・・・



「せいやつ!」

私は空から来るノイズをギアの加速を使い、上手く倒していた

「やるじゃん。ただの馬鹿だと思ってたけど。」

「へへっ、ありがとうございます!」

「褒めて・・・まっいいか。」

私たちは学園の入口周辺に群がってくるノイズを蹴散らし、みんなを守るけど・・・

「数が多いっ!」

「フイーネ・・・そこまでして世界を変えたいのか!」

『増援接近。それと、二課付近にて高エネルギーのぶつかりが観測されました。』

「え!」

私たちがそう言うと、二課の司令室があつた場所の周辺から大きな音が聞こえる

「っ!あれは・・・」

大きな音と共に、派手な鎧を纏った女性が吹き飛ばす・・・あれは

「！フイーネえええつ！」

「新海さん！落ち着いて！」

ノイズと戦いながら、突然叫ぶ新海さんを私は必死に抑えるが・・・

どうして、フイーネがあそこに？

それが疑問だが・・・後ろから来る人影でその目的を一瞬で理解した

「響！」

「!? 未来！それに緒川さんも！」

「響さん。無事ですか!？」

司令室があつた場所付近から緒川さんと未来がこちらに走ってくる

「これから私たちは二課の別拠点に移動します。未来さん達を連れて」

「私たちと学園の皆を連れて地下へ行くの！響も！」

・・・昔の私なら今の未来の言葉に頷いてた・・・でも。

「ごめん未来。私には守るもの・・・守るべき人達がいるから。それに、鈴夢くんが戦っ

てるんだ・・・ほつとけないよ！」

「響・・・」

隣の緒川さんは未来の手を取り

「行きましょう。今は信じてあげてください。」



「・・・死なないでね？」

そう言うのと、緒川さんは未来を連れて走り去っていく。私は、新海さんに

「新海さん！皆が避難できたなら私たちも塔へ行きましょう！」

「わかった！なら早く片付けるぞっ！」

「はいっ！」

私たちは、学園に迫り来るカラフルな影を、一匹残らず撃ち落とすと誓い。今も戦う・・・



・・・カ・デインギル・・・

俺たちは、紅く・・・天までそびえ立つ塔の前まで来ていた。しかし・・・

「よく見ると大きいな」

「歓喜してる場合かよ。破壊するぞっ！」

そう言う姉さんだが・・・よく良く考えればこのサイズのを一気に破壊するとなると人間弾薬庫の姉さんでもどれだけ弾丸をぶち込んでも破壊しきれない気がする・・・つまり。

「……破壊は現実的じゃないのかもな。」

「しかし、破壊しなければ……」

俺達がそう言っていると、どこからかムチが飛んでくる

「っ！翼っ！」

「きやあっ!?!」

俺が翼さんを押して飛ばした際。翼さんが変な声を上げたが俺は気にしてない……それどころかムチが飛んできた方向へと集中する。

「……やはり貴様か……仮面ライダー……」

「……ファイネ……っ。」

そこにいたのは前の黒い服とは違う……鎧を身に纏ったファイネがいた。

「あれが……」

「っ！ファイネ！よくも現れたなっ！」

そう言うのと姉さんの弓はガトリングへと変わり

「死ねっ！」

迷いなく引き金を引き、ガトリングから大量の弾丸がはなたれ、ファイネへと襲いかかるが……

「……煙がすごいな……」

「・・・だねっ・・・これな・・・っ!」

ファイネに弾丸が当たり、煙が起こる・・・。俺たちは、煙が晴れるのを待っていたが・・・そうなる前に俺の身体は何かを持っていかれる

「霧夜っ!」

「なっ!れ、鈴夢っ!?!」

「あ・・・がはっ・・・」

「・・・ふっ。あんなのでは私は倒せないな」

俺の首はファイネに捕まれ、身動きが取れない。

「ぐっ・・・」

「あの時大人しく倒れてればいいものを・・・」

「うる・・・せえっ!」

俺はファイネを蹴り飛ばし、拘束から脱出する

「行くぞっ!」

俺は腰から剣「シルバーソード」を取り出すと、ファイネ向けて走り出す

「霧夜っ!私も行くぞっ!」

翼も刀を構え直し、ファイネへと切りかかるが

「無駄だ。」

俺たちの刃は、フィーネには当たるが、鎧部分が硬く、貫通までは出来なかった。

「なんて強度だ……」

「くそっ！まだだっ！」

俺は次と言わんばかりに、アームドギアを起動させ、加速をつけ……

「シャインブレイクッ！」

思いつきり拳を当てるが……

「……無駄と言っただろう。」

フィーネの鎧はビクともせず、俺はムチに当たって、俺のプロテクターが欠ける

「があっ！」

俺は吹き飛ばされ……瓦礫に埋もれてしまう……

「霧夜……貴様っ！」

「風鳴翼……君にはがっかりだよ。」

そう言う翼はフィーネに吹き飛ばされる

「ぐっ……あ……」

翼は、その場を転がり、塔に当たる

「こんなの……どうやって……」

「……っ。俺は……」

「ふん。己の無力さを知ったか。」

「・・・っ。」

フィーネは俺の首を絞め、釣り上げると近くまで来て

「二つだけ教えてやる。私の夢はこれでは終わらん。どんなことをしてでも叶えてやる」

そう言うと俺は空中へと放り出される

「・・・っ！鈴夢っ！」

「霧夜・・・」

「・・・だからなんだよ。」

俺は空中で姿勢を取り直し、地面へと降り立つ。

「何?！」

「貴様の野望なんてモノはどうでもいいんだよ。俺が言いたいのはそれが誰かのためになるのか?」

「・・・何を。」

「貴様だけの野望ならそれは正しい事じゃないっ！ただの害悪だっ！」

「貴様っ！言わせておけばっ！」

「俺は戦うっ！お前見たいな奴がいる限りなっ！」

俺はそう言うのとホルダーから虹のメモリを取り出し、ドライバに差し込む

「発動っ！」

『レインボー』

「貴様っ！それは！」

「てめえが直してくれたんだろ!?感謝するぜっ！変身！」

俺がドライバを起動させると俺の身体は宙に浮き、身体は「7つの歌」によつて包まれる

「貴様あああっ！「7つの歌」をつ！」

「全ての歌・・・この力でっ！俺は究極になるっ！」

『ファイナルメロディーツ！レインボーツ！』

俺は空中で輝き、姿を変える。

その姿は前に、悲劇の時に使った基本色の虹色とは違い、俺が望む・・・「7つの歌」の色になっていた

『7つの剣ツ！ 最後、究極のスタイルツ！』

LET'S BEAT!!!

仮面ライダービート、レインボーツ！』

・・・俺の姿は7つの虹色・・・イチイバルの紅を初めとした全ての色になっていた。

また、左肩にはバイオリンの形になっている盾と剣がある．．．  
俺はその剣を抜くと、改めてフィーネと対峙する

「．．．ビート．．．貴様はイレギュラーだ．．．」

「はん、勝手に言ってる。俺は戦う．．．この究極の力でっ！」

「そんなことはさせないっ！」

フィーネがムチを二つ、俺目掛けて飛ばしてくるが、俺は盾でそれを防ぐと、二つとも手で掴み、俺側に引き寄せ、鎧へ剣を突き立てる

「ぐあっ!？」

鎧に剣が当たると、鈍い音がして、フィーネ身体が簡単に吹き飛ぶ

「っ！なんだこれは．．．」

「．．．これが人の希望．．．人の究極だっ！」

俺はそう言っていると、高速とも呼べる速度でフィーネへと接近し、連撃を加える。

「霧夜っ！」

「翼っ！姉さん！塔を頼むっ！」

俺はそれだけ言っていると、フィーネへと集中する

「貴様っ！言ったはずだっ！塔は壊せないとっ！」

「それを決めるのは俺たちだっ！俺たちは限界を超えてやるっ！」

「人間ごときがっ！生意気なっ！」

「黙れっ！貴様の野望はここで終わらせるっ！」

俺はそう言うのとフィーネの顔面目掛け、殴り掛かる

「ぐっ！女に容赦ないなっ！」

「女っ!?!お前は違うっ！俺の敵だっ！」

俺はそう言うのとさらにフィーネへと殴り掛かり、吹き飛ばす

「ぐっ！」

「さあっ！俺たちで決着をつけるぞっ！」



カ・デインギル・・・

私たちはこれを壊そうとしていたが

「くそっ！硬いんだよっ！」

「私たちでは無理なのか・・・？」

私たちの武器は既に限界を迎えようとしていた・・・

それだけ硬いのだ・・・カ・デインギルは・・・



「こうなったらっ!」

「っ!雪音っ! “絶唱”をつっ!」

「これしか方法は無いんだよっ!」

絶唱……それは装者における最大の攻撃手段のひとつ……。増幅したエネルギーを一気に放出し対象にクリティカルなダメージを与える反面、その代償はシンフォギアを見に纏い、強化された肉体であっても負荷を軽減しきれないほどに絶大だ。

その例が悲劇の時の奏である。

奏は元々適合率の低さに加え、“LINKER”の効力の低下から限界を超えた負荷を浴び、重症まで負ったのだ。

ビートの……霧夜の救援がなければ奏は助からなかったし……。私も絶唱を使うところだった……

以上のことから絶唱は諸刃の剣と呼ばれることもあるのだ……

「鈴夢が……命をかけてるんだ! 私達もそうしないと……あいつだけ痛い思いをさせたくないんだっ!」

「……しかし…… “絶唱”は……」



「……翼……」

私は二課の予備施設で装者たちの動きを見ていた

「翼さん……クリスちゃん……」

「……くそっ……」

私は何も出来ない自分に怒りを感じていた……

あの時、彼女を救ったがために力を失った……

それ以降。翼が変わってしまったのを覚えている……力を激しく求め……共に戦

う仲間を否定してしまった翼を……

「私は……何も出来ないのか？」

……私は一人……落ち込む中で、不意に肩を叩かれる

「っ!？」

「奏さん。翼さんたちに思いを伝えましょう……」

そこには何かを決めたような顔をした緒川さんがいた。

「緒川さん……」

「奏さんはいつまでも奏さんです。翼さんが憧れた……貴方なんですから。」

そう言うとう緒川さんは私を引っ張り、二課の予備施設の隣にあった隠し扉を開け

る……そこには

「……これは……」

「……急遽で作りました……いろいろ大変でしたよ」

そこにはマイク……スピーカーと、さらにはステージすら整っているライブステージがあつた。

「……すごい……」

「さあ、こちらです。」

そう言うとは1つの服を渡される……これは

「ツヴァイウイングの……」

「……そうです。あの時の……奏さんの衣装です。霧夜くんが直してくれたんですよ」

「……あの坊主が……」

私が衣装を取ると、不意に何か足下に落ちる

「……メモリ……」

「……霧夜くんからですね。「お前に預ける」だ、そうですよ。」

「……あいつ……」

私は一度。あいつの事を誤解していた時があつた……

こいつは何者と思う時も……馬鹿だと思ふ時もあつた奴……だけど、今のあいつ

は違う……

私に……希望を与えてくれた奴なんだ……

「緒川さん……電源は？」

「付いてます。あとはこのメモリを増幅機として通して、奏さんが歌うだけですよ」

「ありがとう。」

そう言うのと私は着替え……衣装を身に纏う

「翼……私は今一度歌う……天羽奏として……ツヴァイウイングの片翼としてなっ

！」

「奏さん！準備おつけーです！」

「行くぞっ！」

逆光のフリーユージェル……私たちの歌を……！

◇

「なんだこれはっ！」

天羽奏が歌い始めた頃……俺の方に歌が聞こえていた

「……あの時と同じ……それ以上だ……」

「貴様っ！何をしたっ！」

焦り始めるフィーネに俺は笑いながら

「簡単さ。人に希望を与えただけ……ただそれだけだ。」

「希望だと？」

「ああ、結局歌って言うのは戦いの道具じゃない。人に……生きるもの達……さらにはここにはいない人たちに希望を……未来を繋げるものなんだ！」

俺はそう言うときさらにフィーネへと肉薄し、切り裂くが、フィーネはそれを避け反撃を加える

「ぐっ！レインボーじゃ……限界も近いな。」

レインボースタイルは……言わば究極の形……“7つの歌”の“絶唱”とも言える力を持つこいつは俺の身体では5分弱が限界である

しかも、“7つの歌”を束ねているだけあってその反動も大きい。下手をしたら俺の身体は負荷に耐えられず、肉体が滅ぶかもしれない。

しかし、今はそんなことを言っている場合ではない。

フィーネの野望を……フィーネを倒すためにはこの力が必要なのだ……

「奏の歌……このチャンスが無駄にはしない！」

俺はメインスロットの隣、サブスロットを開くと一枚のメモリを差し込む

『オーバー・ブースト』

「アクシヨン」

次の瞬間、俺の鎧は変形し、高速移動に特化した姿になる

「まだ姿を変えるか！」

「これが俺の力だっ！スロットルワン！」

俺は地を踏み、大地を疾走する。目は確実にファイネを捕らえている

「高速移動か！」

「ていやあああつ！」

俺の拳は吸い込まれるようにファイネの鎧へと直撃する

「時間はまだある！たっぷり楽しもうぜ！」

「おのれビートっ！殺してやるっ！」

「三下のセリフは聞き飽きた！お前には倒れてもらおうぞっ！」

俺の身体が悲鳴をあげてることなど知らず…俺はファイネへ牙を向けていった…

◇

「奏……」

「あの女……」

私たちは突然聞こえてきた「逆光のフリーユージェル」に騒然としていた。

歌っている人は一瞬で察した。奏だ。だけど「ガングニール」の装者を止めてから、奏が歌うことなどなかった。

だけど今、私が憧れた人が歌っている

私も歌い出す……あの時のように……

「奏……私たちは一人じゃない……今は仲間がいるから……」

「……行くぜっ!」

私たちの歌に雪音も加わる……

私たちのギアに力が来るのが分かる……

私たちは各々武器を構えると、私は刀に炎を纏わせカ・デインギルへと飛翔する

雪音は塔全体へと一斉射を行い、塔の破壊を試みる

「奏っ……私たちはもう、ツヴァイウイングじゃない……それでも……」

塔の頂上まで行くと、私は刀を振るう

「私たちは翼だっ! 決して折れないっ! 両翼の翼だ!」

私の一撃が当たると、カ・デインギルは崩れていく……私たちは……

「霧夜……後は……任せた……」

「鈴夢……ダメなお姉ちゃんでごめんな……」

“絶唱”のバックファイアに耐えれず……その場で倒れ込んだ……



「うおおおっ!」

「ぐっ!」

塔が崩れる直前。俺たちの戦いは佳境へと突入した

レインボースタイルに変身してから5分近く……いよいよ身体の限界が自分でも分かるようになってきた

『鈴夢。変身の強制解除まであと30秒』

「なら決めるっ!」

俺はメモリを右側のスロットへと差し込もうとする……しかし

「あっ……」

俺はその場に倒れ込んでしまう

「ふん。どうやら限界のようだな」

「があっ……ああ!」



「……ここまで頑張ったな。ご褒美をやるう。」

そう言うとファイナーネはムチからエネルギーを球体状に変換させる

「……くそっ……身体が……」

『生命器官の機能低下を確認。変身を解除します』

「っ！」

その警告のあと、俺は元の姿に戻る

「くそっ……」

「ふはははっ！塵と消えろっ！」

俺に巨大なエネルギーが落とされ……俺の記憶はそこで途切れた……

## 第19音 みんなが起こした奇跡

「っ！高エネルギーのぶつかりが……！」

「鈴夢くん達はっ！無事なのか!？」

二課の予備施設は慌てた声でいっぱいだった。

そこにはリディアン生徒……さらには塔周辺の人たちを収容している。

隣のステージには奏さんと緒川さんが……

「響……鈴夢くん……」

そこにおおいさんの声が入る

「響ちゃん新海さんは健在っ！翼さんとクリスちゃんの両名は姿は確認出来ました！」

「鈴夢くんは！」

「……」

私は顔を若干青ざめる……もしかして……もしかしたら……

「……霧夜くんは……まだ……」

「っ！」

私は耐えきれず、その場に倒れ込む……彼が……死んだかもしれない……

「！未来！」

「小日向さん！」

「未来っ！」

詩織ちゃん達が私を支えるが・・・

「鈴夢くん・・・ shouldn't with ...」

私は一人、何も出来ないもどかしさに涙を流した

◇

「翼さん！しつかり！翼さんっ！」

「・・・っ・・・立・・・花？」

私が目を覚ますと・・・そこには汗を流した立花がいた

「よかった！新海さん！そっちは・・・」

「大丈夫だ。こっちも目を覚ましたから」

私から少し離れた所には雪音がギアを外した状態・・・つまりは全裸に近い状態で寝そべっていた。

「情けねえな・・・」

「無事で何より。」

私たちは、その場で身体を起こすと、辺りを見渡す……

周りにはカ・デインギルの破壊によって出来た瓦礫の山が……至る所にあつた。

「……派手にやったな……」

「だけど破壊はできた……あとは……」

私たちがそう言うと、突然。空が輝く

「っ！立花っ！」

「はいっ！」

新海が叫ぶと同時に立花は私を抱え、その場をすぐに離れる。それは雪音の方も同じ

「なんだ……？ノーツ。」

『高エネルギー反応。ビートではありません。』

「じゃあ誰が……」

新海の疑問はすぐに晴れる。煙から現れた人影は……

「ふん。よくも破壊してくれたなっ！」

「フィーネっ！」

そこには見たことのない。黄金の剣を持ったフィーネがいた。

「貴様ら……この歌といい……よくもやってくれる……」

「てめえも。死んだかと思つたよ。」

「死んだ？ふん。そうだな．．．死んだのは．．．」

「あの少年の方かもしれないぞ？」

その言葉に、私たちは驚愕した。

「お前つ！鈴夢に何をつ！」

「貴様らが知ることではない。私から言えるのは『霧夜 鈴夢は死んだ』。ただそれだけだ。」

「．．．ノーツ。本当かい？」

新海がノーツ．．．ノイズドライバーなるものに尋ねると

『申し訳ございません。お答え出来ません。』

そう言われる

「．．．ビート．．．貴方の敵は必ず倒す。」

新海はそう言うのと、アームドギアを構え、ファイネへと突撃する

「ふん！無駄な足掻きを．．．『デュランダル』の前にひれ伏せつ！」

剣から大きな光が発光すると、当たりには衝撃波が起こつた．．．



「……俺は……生きてる……?」

俺が目を覚ますと……空は相変わらず。紅く染まっていた。

トイは俺の腰に、ドライバーとして巻かれている……

「……トイ。一つ頼みがある……」

『奇遇だな。おそらく俺も同じ考えだ。』

「じゃあ……頼む……」

俺はそう言うと、瓦礫を掴みながらも、前進する

足は立てるまでには至らず、頭もくらくらする。

視界がボヤけ……手の感覚すらも無くなつていく……

だけ……

「今だけは……死ぬわけには行かないんだ……みんなの希望……仮面ライダーは……絶対に死なないんだ……」

俺は落ちているメモリを回収しながらも、前進し続ける。

「止まらねえ……絶対に……止まるわけには行かないんだ……未来を……この手に掴むまでは……っ。」

俺は冷たい……水の感触がする手を空に……ぎりぎり光が指してる方向へと掌を

伸ばす……

「……しな……ない……いの……ち……まもつ……て……」

俺の意識は完全に途切れ、命の鼓動すらも止まろうとする……

……せめて……最後の……歌を……奏で……たいな

俺の思考はそこで考えるのを止め。命は確実に停止した。



「っ！司令！霧夜くんからの伝言です！」

二課の予備施設……朔也から叫びに似た声が飛んでくる

「！読んでくれ！」

「……歌を……頼む。」だ、そうです……

「歌……だが……」

隣では奏が“逆光のフリーユージェル”を歌っている……これ以上の歌エネルギーを出

す方法は……

「……これが限界か……？」

俺がそう思った矢先……

「歌があればいいんですか？」

「っ!？」

突然。小日向からそんな声がかかる。

「君たちは……一体何を」

「歌うんです!皆でっ!」

そう言うのと、突然この場の皆が歌い出す……

その歌はリディアンの校歌……

「……これは……」

「エネルギー反応?これは……」

何の変哲もない……歌が誰かの役に立つと信じて……

モニターに表示されるエネルギー表示はさらに上昇していく

……この反応は隣の部屋で歌っていた奏にも聞こえた

「……懐かしい……優しい歌……」

「奏さん……」

「わかったよ。歌は……皆の希望だ!」

奏も歌い出し、増幅機が反応する

「!エネルギーの数値上昇!これは……」



「つ！響ちやん達の聖遺物にも反応が！」

そう言われ、モニターを見る．．．そこには、光を纏った少女達が立ち上がる姿が映されていた．．．



「ぐっ．．．」

「無駄な足掻きよな。最早生き残りは貴様だけだ」

「．．．皆．．．」

カ・ディングル跡．．．ノイズとフィーネの戦いはフィーネが圧倒的有利な状況にあった。

「さあ！これで終わりだっ！」

剣に光が集まる．．．その時だった。

奏の歌同様。突然歌が聞こえる．．．

「なんだこの歌は．．．」

「．．．ノーツ．．．これは？」

『わかりません。しかし、膨大な歌エネルギーを確認。』

ノーツがそう言うのと次々と地面から光の玉が空へと上がっていく  
「なんだこれは……不愉快なっ！」

……その時……私は何かわからない力に怯えていた……

◇

……歌ってる……皆の声が聞こえる……

その時空は明るくなり始め……暗かった大地が光を帯びて、輝き始める

よかつた……支えてくれる皆は……いつだつて……

私は手を握る力を強める

……皆が歌ってるんだ……私も……まだ歌える……頑張れるっ！戦えるっ！

その瞬間、私の周囲が衝撃波に包まれ、フイーネが吹き飛ぶ

「立花っ！」

「まだ戦えるのかっ！？何を支えに立ち上がる！何を握って力と変える！」

私は光を纏い……少しずつ立ち上がる

「なんだ……この不愉快な歌のせいとか？お前が纏っているそれはなんだ！？心はたしかに砕いたはず、なのにお前が纏うそれはなんだ！？それは私が作ったものか！？纏っているそ

れはなんだ！なんなのだ！」

その直後、光の柱が三ヶ所に降り立つ。

翼さんも、クリスちゃんも光を纏い立ち上がる・・・

「あれは！」

『エネルギー増大。正体不明です。』

私たちは飛翔し、光を外すと、中からは白をメインとした、それぞれの色で飾られているシンフォギアが出てきた。

「シンフォギアアアアアッ！」

私たちには翼が生え、さらには各部分が強化された姿になる・・・これは・・・

「なんだ！なんなのだ！私は知らない！あんなもの！私は知らないぞおおっ！」

フィーネはどこからか出した杖「ソロモン」を振りかざしノイズを出現させる。

巨大なサイズから小型の量産タイプまで、多くのノイズが地上を空を埋め尽くす

「・・・行こう。皆を守るんだ！」

私達は翼を広げ、ノイズへと立ち向かう。

「さあ、フィーネ。続きと行こうか」

『こちららも戦意高揚です。いつでもやれます。』

新海さんは拳を構え、迎撃の体制をとるが・・・

「おのれっ……シンフォギアああっ！」

次の瞬間、フィーネの周辺にはすぎましい力を感じ私たちは身構える

「おのれっ！もう遠慮などしないっ！叩き潰してやるっ！」

煙が晴れると共に、フィーネの姿は変わっており、大きな……赤き竜となっていた

「新海さん！そっちは任せます！」

「あいよっ！その代わりそっちもお願いな！」

「わかりました！皆さん……行きましよう！」

「ああっ！」

皆の意思が一つになり……私たちは赤き竜へと向かって行った……



……歌……

俺には完成していない……自分が作曲している歌がある……

曲を書くのは楽しかった……しかし、この曲はどうしても気が乗らなかった……そ

れは

——鎮魂歌へレクイエム——

人の魂を贈る歌を・・・俺は気乗りでは作れなかった。

そもそもこの大事な曲を作ること自体無理に等しいのだが・・・作らずにはいられなかった。

試しかつたのだ自分の才能を・・・

だけでできなかった・・・だから・・・

ー作りたいたい・・・もう一度・・・ー

◇

「・・・っ。歌が・・・」

俺が目覚ました時には、空は明るく・・・俺が見据える先には巨大な赤き竜がそばえ立っていた。

「・・・フイーネ・・・お前は・・・」

俺はそう言うと、立ち上がろうとする・・・だけど・・・

「・・・そりゃそうか・・・足が・・・」

いくら生き返れたとしても、身体はそのまま・・・立ち上がることも、下手をすれば進むことも出来ない・・・

「……トイ……サルベージを」

『了解。』

俺の一言で身体は不思議な力で元の健康な身体に戻るが……

「……侵食が……」

俺の身体の腕部分に謎の違和感を感じる……

しかし、それで生き返れるなら十分だ。

俺は立ち上がり、赤き竜を見据えながら

「行くぞ。俺たちの最後の戦いだ。」

『レインボー』

「変身」

『ファイナル、メロディー！レインボー！』

俺の姿は7つの歌……さらには光に包まれ、姿を変える……

変身した姿はレインボースタイルに翼を加えたものとなっている

「行くこう……皆が戦ってるのに。俺だけ行かないなんて選択肢はないからな」

『レッツ、ファイナルメロディー！』

「行くこう！」

俺は肩の盾から剣を抜くと、大地を飛び、空へと飛び出す

「フィーネ……俺たちは死んじやいない！何度でも蘇ってやるっ！」  
俺は彼女たちと共に戦うべく、戦場へと飛翔した

## 第20音 over the rainbow

「はあああつ！」

私は白く、翼を携えた天羽々斬を纏い、空にいる大型のノイズと対峙していた

「これでっ！」

私の刀を姿を変え、それを大型のノイズ目掛け振り下ろすと見事に真つ二つになり、姿を散らせる

「これがっ……シンフォギア……」

この力に関心していると、さらにノイズが空に出現する

「くっ！しかし強くなつた天羽々斬……貴様らごとき敵ではない！」

そう言うのと連続してノイズを切り裂く

「まだっ！こんなものでは無いだろう！」

私は新たに刀を構え、空のノイズを駆逐しに走った

◇



「おらっ！持ってけっ！」

私は横に長くなったギアから大量のレーザーをノイズ目掛けて照射する

レーザーは軌道を変え、必ずと言っていいほどノイズに直撃する

「地上は・・・馬鹿が行ってるか。」

私は赤き竜へと向かうが

フィーネが出したのか、道中にノイズが現れる

「やっぱりなっ！だけどこんなの！イチイバルの前じゃ無意味なんだよ！」

私は追加でレーザーを放ち、ノイズを消滅させる

「フィーネ・・・お前も焼き払ってやるよっ！」

私はそう言うと、空、さらには地上のノイズへ向け、全武装を開いた



限界を超えた力・・・か。

私は地上。追加で出現したノイズを蹴散らしながらそう考えていた。

「ていつ！はあ！」

『ノイズ減少傾向なし。減る様子はないようです。』

「こいつらはどうやったたら減るんだろぅね!? 困っちゃうよー」

そう言った矢先、空からレーザーみたいなのが飛んできて、地上のノイズを一掃してしまう

「立花っ!」

「新海さん! 援護します!」

「え、ええ・・・」

そう言うのと立花はすごい勢いでノイズを消滅させていく

「すごい・・・」

『驚きです。エネルギーは私たちの倍以上あります。』

「・・・敵じゃなくてよかった」

そう言うてる矢先、ノイズが後ろ・・・つまり、二課の予備施設周辺に現れる

「っ! 急ごう!」

『了解。』

私たちは道中のノイズも片付けながら、二課へと急いだ



．．．ふん。まあ予想通りだな。

私は赤き竜の中．．．デュランダルを片手に一人眩いた

「しかし、霧夜 鈴夢が死んだのはいい事だ．．．このまま全てが私の思い通りになればいいな。」

しかし、二課や、今のシンフォギアの変化には驚いた。

「．．．だかそれもここまでだ．．．全てを終わらせる．．．」

そう思い、竜で攻撃しようと思った時、突然竜の腹部分が裂ける

「っ！なんだと！」

「．．．見つけた．．．」

そこには．．．信じたくもない．．．

「貴様は．．．死んだはずだぞ！霧夜 鈴夢っ！」

そこには私自らが手を下したはずの霧夜 鈴夢がいた。

「さて．．．この戦いも終わらせよう．．．」

彼はそう言うのと剣を抜き、構える

彼の姿は先程戦った時とは違い、翼を生やし、ところどころに白き装飾が施されている

「貴様．．．死ななかつたことを後悔させてやる！」

「言つてろ！ただしお前がなっ！」

私は剣を振りかざし、彼は私に向け、飛翔することから最後の戦いが始まった。



・・・劍撃が飛んでくる・・・なら！

「防ぐっ！」

俺は左肩にある盾を広げ、飛んでくる劍撃を防ぐ

「くっ！貴様っ！何故戦う！死んでまでっ！無理だと分かつていてっ！」

「・・・っ！」

「何故なんだ！何がお前達をそうさせる！」

「決まってるんだろ・・・この歌は・・・皆の思い」だっ！皆が歌ってる限り・・・俺たちは諦めないっ！」

俺はフィーネへ、あと少しの距離まで近づく

「それは理屈だろっ！」

「そうだなっ！お前から見ればそうかもしれないっ・・・でもっ！」

俺はフィーネへ剣を振りかざすと、フィーネはデュランダルでそれを防ぐ

弾かれては再び俺は剣を振りかざす

フィーネは再びそれを防ぎ、鏢迫り合いの状態になる

「諦めないっ……一度やったことは……最後までやり通してやるっ!」

俺は距離を取ると、ホルダーから紅いメモリを取り出し、剣へと読み込ませる

『ファイナルブレイク!フレエイムツ!』

炎を纏った剣を振るうと、まるで吸い込まれるかのようにフィーネへと向かっていく

「こんなものっ!」

しかしフィーネは剣を一閃させ、炎をかき消す。

「貴様!無駄だとなぜ分らない!」

「限界なんて壁はぶち壊してやるっ!それが俺たち……いや!俺の可能性だあつ!」

その次の瞬間。フィーネの手にあるデュランダルは大きく光を放つと、俺は身体を外

に弾き出される

「霧夜!」

「鈴夢っ!」

翼と姉さんが同時に叫び、さらに俺は空中で姿勢を直す……その時だった

ドオオンと言う、図太い音と共に、赤き竜から黄金の剣が飛び出す……あれは!

「何っ!デュランダルがっ!」

「デュランダール！」

デュランダールは迷うことなく俺に直進してくる……つまり

「俺を選んでるのか！」

俺は飛翔し、デュランダールへと手を伸ばす

「鈴夢っ！取れよっ！」

「霧夜っ！勝ち取れっ！それは貴様の力だっ！」

俺はようやく、デュランダールの柄を掴むと、突然負の感情が強くなる

「ぐっ……ガアアアっ！」

俺の身体……鎧は黒くなり、闇へと堕ちる

「鈴夢くんっ!？」

「ビートっ！あれはっ！」

『高エネルギー反応。デュランダールに飲み込まれています！』

俺は自我を失うまいと抵抗する

『相棒！負の感情はこちらで制御する！あとはやってくれよっ！』

「あ……ああ……わかった……グウっっ！」

俺はものすごい勢いで引つ張られる感じを抑えるが、半分以上は抑えれず、外に衝撃波として放たれる

「くそっ！これじゃ近づけない！」



状況は二課の予備施設でも同じだった

「……っ！凄いエネルギーだ……これじゃあ……彼は……」

「……！」

一人……未来が地上へ行こうとするが

「待て！どこに行く！」

それを、弦十郎が制する

すると、未来は何かを決めたような目で

「地上に出ます。」

二課のメンバーにそう告げる

「無茶よ！下手したら……」

「でも！鈴夢くんは戦ってるんです！声をかけて……必死に戦う彼を戻したいんです！」

「……賛成だな」

隣の部屋から奏が来て、そう答える

「あいつには今一度、クスリを打たないとな？ 暴れたら大変だからな」  
「……奏さん……」

◇

地上、二課の緊急口からみんなが出てくる

「……あ……」

「踏ん張れっ！ ここが正念場だろうがっ！」

声のする方を向けば弦十郎さんや、緒川さんたち……これまでに会ってきた人達が俺に声を届けようとしていた

「自分を強く！ 高くイメージして下さい！」

「昨日までの君を！」

「これからの君を！」

続いて緒川さん、朔也さん、あおいさんと声を届けてくる

「演奏していた貴方の思いを！」

「かつこよかつた自分を！」

「今、誰かを守ろうとする自分を！」



「昔から知っている！未来を守る貴方を！」

リディアンの子達・・・響の友達と玲奈が俺に声を届ける

「ぐっ・・・グウっつ、あああつ！」

俺がさらに苦しむ中、翼さんと姉さんが俺の両手を掴み

「お前は私の希望だ・・・お前の力を・・・皆を守った力を見せてくれ！」

「鈴夢っ！お前に全てかけてんだ！ここでぶっ放せ！」

さらに地上の奏でさん・・・新海さんが

「馬鹿野郎っ！お前がお前で無くなったら誰が止めるんだよ！いい加減目を覚ませっ！

男だろっ！」

「ビートっ！貴方が私に見せた数々の奇跡はこんなものか！もつとだ！もつと見せてくれっ！」

皆が声を届ける・・・俺は・・・

「うおおおっ!!」

しかし、闇の引つ張る強さも強く・・・俺の心が完全に闇に飲まれそうになった時・・・

「鈴夢くんっ！」

「っ！」

聞き覚えのある声・・・響と未来が最後の一押しとばかりに俺に声を届ける

そうだ・・・俺は・・・こんなところで碎ける人間じゃないだろ！

過去との因縁も断ち切り・・・さらには苦手すらも克服した俺はなんだったんだ！  
断ち切れっ！今の自分をつ！

「うおおおっ!!!」

剣の先が輝くと共に、俺の姿は黄金の・・・王の姿になる

翼を纏いし黄金の騎士・・・俺は剣を構える

「なんだ・・・そんな馬鹿な・・・」

「・・・これが皆のっ！俺たちの希望の力だっ！」

俺は剣にエネルギーをため・・・大きく振りかざそうとするが

「鈴夢くん！私もっ！」

「響っ！」

翼と姉さんが離れ、代わりに響が俺の隣に来て、同じく剣を・・・デュランダルを握る

響がデュランダルを握ると、俺の時以上のエネルギーが刃となつて放出される

「貴様・・・その力！何を束ねた！」

フィーネの質問に俺たちは迷うことなく答える

「引き合うみんながくれた・・・シンフォギアだああああっ！」

## I s y m p h o g e a r l

俺たちは迷うことなく剣を赤き竜目掛け振りかぎし、真上から真つ二つにすべく振り下ろす

光の刃が、赤き竜の頭に当たるとその身体にブツブツの斑点みたいなのが表面に出始める

「赤き竜が・・・完全聖遺物が・・・こんな！」

「うおおおっ！」

俺たちがさらに力を加えると、光が発光し、赤き竜が崩れ始める

「こんなところで・・・我が身！朽ちてなるものかアアアッ！」

その言葉を最後に・・・赤き竜が大きな音をたて、消滅していった・・・



・・・終わった・・・のか。

赤き竜の消滅後・・・おそらく俺は気絶していたのだろう・・・俺は地面で横になっていた

「・・・派手にやったな。これは修理が大変そうだな」

そう言う俺の手には、虹色のメモリと黄金のメモリが握られていた

『……どうする？皆を探すかい？』

「……面倒だな……だけど……」

俺はそう言うのと、赤き竜があつた方へと身体を向ける

「まだ、終わつちやいない。」

そう言う俺の目に人影が映る……あれは

「フィーネか。」

『……みたいだな。』

そこには身体をふらつかせながらもこちらに向かつてくるフィーネがいた。

「おのれ……必ず……この恨みを……」

「……」

俺はフィーネへと、近づき始める

『鈴夢!』

「大丈夫だ……」

俺は近づくと、フィーネは俺に向けて殴りかかってくるが

「もうやめよう。争いは終わったんだ」

「……貴様……今更戯言を……」

「……戯言なんかじゃない。俺は誰も殺したくないんだ。」  
「……っ。」

そう言うとフィーネは脱力。その場に倒れ込んでしまう

「……満足かよ。お前は」

「何?」

「お前はこれでいいのか? フィーネ……いや、櫻井 了子」

「……」

俺がそう言うとフィーネは黙り込み、しばらくして

「……ああ、結果がこれなら何もいいようがない。受け入れるしかない」

「……そうか。」

俺はそれだけ聞くと、フィーネに背を向ける

「どこに行く気だ」

「帰るんだよ。俺の帰るべき場所に。お前は どうする……?」

「私は……」

戸惑い続けるフィーネに俺は手を差し伸べ

「どうでもいいけど来い。また皆で笑おうぜ」

「……」

フィーネが手を取ったのを確認すると俺は無理矢理でも立たせる

「……貴様は……私の裸体を見たいのか？」

「……は？え!？」

フィーネの姿はシンフォギアが解除された状態に等しく……生まれたままの姿だった

おそらく途中まで布かなんかを引っ張っていたのだろうが俺が立たせた衝撃で、はだけてしまう

「ちよー！これは事故だろっ!」

「ふふ。冗談だ。わかっているとも。」

「……からかうなよ。」

俺はそう言うと、上着を一枚……フィーネに羽織らせる

「鈴夢くーん!」

遠くから響の音がする……おそらく俺を見つけたのだろう……

「行きましょう。」

「……そうだな。」

俺はフィーネの手を取り、みんなの所へ帰るべく……まずは響の所に向けて歩き出した……



・・・この事件は櫻井 了子・・・つまりフィーネを犯罪者に仕立て、解決しようとしたが

俺たち・・・二課側が研究・・・さらには災害対策には必要と発言し、こちら側で保護することで事件は収束した

そして、少年は新たな道を歩き出す・・・

―空港―

「んー・・・疲れた・・・」

あの事件のあと、俺はゆっくり世界を旅していた。

響たちは相変わらず・・・変わったことと言えば

「ビート・・・いや！霧夜くんの隣は私よっ！いくら姉の貴方でも譲れないわっ！」

「うるせっ！弟の隣は姉の特権だ！そこをどけよっ！」

帰りの飛行機おろか、全てにおいてこの人達がうるさい事かな。

「全く・・・真ん中に座るからそれでいいでしょ。」

そう言うと二人は両サイドに座り。何はともあれこれで準備が出来た

「さて・・・皆元気かな？」

僅かな期待と、好奇心を乗せ・・・俺たちを乗せた飛行機は飛び立った・・・



# シンフオギア番外編 番外編 皆で楽しい日を。

優也「はいつ！これから俺たちはナンパをやりに行こうと思います！」

突然、優也からそんな声がかかる。

俺はこの言葉に返すことが出来ず……ただ、啞然と……煎餅を食べ、お茶を飲んでいた

優也「……なんか返す言葉ないかなあ……」

鈴夢「……どう考えても無理なんだよなあ……」

優也「無理じゃない！頑張ればナンパの一つや二つ出来るさ！」

鈴夢「それはナンパとは言わないんだよなあ。」

俺は呆れた感じで話すが優也は火がついたかのように燃えながら

優也「アホっ！いいか！俺たちは戦争に行くんだ！勝ち組になるためのな！」

鈴夢「アホくさ……」

優也「いいから行こうぜ！」

優也は俺の手を取ると、部屋から出そうとする

優也 「行くぞー！」

鈴夢 「・・・やーだー・・・」

俺たちがゴタゴタやっている、部屋の扉が開いて「ただいまー」と言う声がする：

この声は・・・

クリス 「鈴夢ー！戻ったからギュッとしてー！いや、させろー！」

鈴夢、優也 「・・・」

クリス 「なんだ？友達か・・・チツ。」

俺たちにも聞こえないぐらいの小さい舌打ちをすると姉さんは俺の布団へと入る

優也 「・・・お前のお姉さん？（ボソボソ）」

鈴夢 「そうだけど？何か問題でも？」

優也 「巨乳じゃん。美少女じゃん。（ボソボソ）」

鈴夢 「そうだねー・・・」

優也 「ナンパしていい？（ボソボソ）」

鈴夢 「どうぞ？」

まあ、姉さんの性格知ってるからあえて進めるけど。こいつも馬鹿だとは思

優也 「あのーすみません。お時間いいですか？」

おい。お前はどこのビジネスマンだよ。

お時間いいですか？……って。それはナンパじゃねえよ。ただの勧誘だよ。

クリス「なんだ……？鈴夢との眠りを妨げるなら容赦しねーぞ……」

優也「そうじゃなくて……この後お時間あればご飯とか……」

優也がそう言うのと姉さんは獲物を睨むような眼光で優也を見て

クリス「ああ？私には鈴夢がいるからいいんだよ。それにナンパか？さつきから鬱陶

しいな……こっちは眠たいんだよ……鈴夢……ご飯作つといて……」

鈴夢「了解。」

姉さんがそう言い、俺が答える……だけど優也は違つた……。こいつは手応えどころか何も無かつたので、テンションを落とし、足から崩れ落ちる……

優也「鈴夢っ！お前ー！」

鈴夢「ふにや？」

優也が目覚めたかと思えば突然俺の近くまで来て、胸ぐらを掴み

優也「どういうことだア!?こんな美人の！グラビアモデルみたいな人がお前にしか興味が無いだとオ!?!」

鈴夢「俺とは言つてないじゃん。」

優也「お前の名前呼んでたよなあ！呼んでたよオ！羨ましいなあ!?!」

鈴夢「……ちよつと何言つてるかわかんないです。」

優也「鈴夢ううう！」

さらに崩れ落ちる優也を放置し、俺は早速調理に取り掛かる

今回作るのは、えー：：：そうだな。オムライス中心にしてサラダとスープかなあ：：

俺は頭の中で何を作るか考えたと、早速食材を調理する

優也「美味しい匂いがするなあ．．．（グスツ）」

鈴夢「ここで食べてけよ。どうせ皆で食べた方が美味しいからな」

優也「鈴夢ううう．．．（泣）」

優也は俺の優しさに泣きついてくるけど．．．この絵は酷い．．．なので

鈴夢「離れろ。でなければお前をフライパンで焼くぞ」

優也「サーセン」

取り敢えず最大級の脅しを使い。権力で引きはがす．．．さて。

鈴夢「作るか」

◇

優也「んー！美味そうな匂いだなあ．．．」

鈴夢「でしょ？あと少しかなー」

俺は丁寧にお皿を出し、盛りつけを開始するが……

優也「あれ？お皿多くないか？」

鈴夢「他にも人が来る。それだけだよ」

そう言うのと早速お客様が来る……さて、

スチャ、スチャ。

優也「何それ」

鈴夢「黄金〇衣」

優也「なんで家にあるの？」

鈴夢「コスプレ用に作ったもの」

優也「しまつてこいよ」

俺は優也にそう言われ、渋々片付けた後、玄関までお客様を迎えに行く……さて

鈴夢「らっしやーい。」

優也「らっしや……は？」

扉を開けると、そこには

翼「こんばんは。霧夜」

奏「ちーつす。元気にしてたか？」

元、ツヴァイウイングの二人がいた。うん。やっぱりスタイルいいからか何着ても似

合うね

鈴夢 「まあ、立ち話もなんなのでどうぞどうぞ。」

翼 「お、お邪魔します……（霧夜の家……はじめてだ……）」

奏 「おつ邪魔ー（これが霧夜の家か……いい匂いがするなあ……）」

二人はリビングまで行くと隣の優也が突然

優也 「あの二人……知り合い？」

鈴夢 「ああ、ちよつとした成り行きでね」

優也 「ああ!?!お前羨ましいなあ!?!」

しかし、優也は少し考えると次の答えを出す

優也 「そうか! つまり彼女たちは知り合い……だから鈴夢が好きとは限らない……

つまりナンパできる!」

鈴夢 「……眠い。」

優也 「行つてくるぜ!」

そう言うのと優也は走つて翼たちの後を追うが……まあ、無視だな

俺はそんなことは気にせず、キッチンへと急ぐ……

鈴夢 「おつ。ギリギリセーフだな。」

俺がスーパの味見をしようとすると

奏「おつ。美味そうじゃん」

鈴夢「・・・何故ここに？」

奏「いやー腹が減ってなあw」

鈴夢「・・・太るよ？」

奏「んー？もしかしてこっちの事か？」

そう言うのと奏が大きい・・・胸を押し付けてくる

鈴夢「・・・別に？」

奏「ありや。耐性付きかよ・・・ガツカリだなあ」

鈴夢「大きいのはいい事だ」

奏「え？」

俺はそう言うのと料理を盛りつける

鈴夢「持ってつてくれたらおかわりを認めよう」

奏「了解。任せろ」

俺たちは二人で配膳を開始した・・・

◇

響「鈴夢くん！来たよー！」

未来「鈴夢くん！お邪魔します！」

さて、この後響と未来ちゃんが来たからほとんど揃ったね？

ちなみに玲奈はお家の事情だそうで。

本音はおそらく「二人きりじゃないといや。」とか言いたいんだろうな。

さて、そうこう言ってるうちに料理の配膳が完了。

鈴夢「・・・さて。いただきます」

全員「！！」いただきます！！！！

優也「・・・いただきます・・・（泣）」

優也が涙流しながら食べてるけど無視無視。さて・・・料理の出来は？

響「美味しいなあ！鈴夢くん！美味しいよこれ！」

未来「あー・・・机が・・・鈴夢くん。ごめんね？」

鈴夢「気にしてないから大丈夫だ。ほら響。ほっぺに汚れが」

響「んー・・・ありがとー！」

俺が響たちといちやつているのが気に入らないのか姉さんたちがすごい歯軋りをたててるのが聞こえる

クリス「くそっ・・・鈴夢は私のなのに・・・」



翼「霧夜……なぜ私じゃないんだ？」

奏「あーっ……もう少し積極的になっとくべきだったなあ……」

そんなことを呟いていたのは俺には聞こえず。俺はぱくぱくとご飯を食べ続けると翼「き、霧夜……こちらに来てはくれないか？」

鈴夢「……どうして？」

翼「……ダメか？（うるうる）」

鈴夢「……行くよ。だから泣かないで」

俺は響たちとの話を切ると、翼たちのところへと座る

クリス「鈴夢！何が食べたい!?お姉ちゃんが食べさせてあげるからな！」

奏「今ならあーんのサーブिस付きだぜ？何が食べたい？」

鈴夢「二人の頭はどうなってるの？」

俺がつい、余計に作りすぎたサラダに手を伸ばすと、その手を翼に掴まれる奏「ダメだぞ？ここに来たらあーんでしか食べさせてあげないからな。」

鈴夢「それ流行ってるの？」

クリス「私たちの中では当たり前なんだよ。」

そう言う翼さんはサラダを俺の口まで持ってきて

翼「あ、あーん♪」

鈴夢「ぱくっ。」

俺に食べさせる

翼「鈴夢の唾液・・・鈴夢の・・・(ぶつぶつ)」

クリス「鈴夢！次はお姉ちゃんだ！」

姉さんは唐揚げ・・・

奏「じゃあ私もな！」

奏さんは Pasta を持つてくる

鈴夢「・・・やべえところ来たよ」

俺は結局、響たちに呼ばれるまでこの状態が続いた・・・

◇

皆がそれぞれ家に帰り・・・俺たちで二人きりになった時・・・

鈴夢「そーいや、なんで泣いてた？」

優也「・・・翼さん奏さんにフラれた」

鈴夢「・・・なんて？」

—————

優也 「翼さん!?あのツヴァイウイングの!」

翼 「ああそうだが・・・どうした?」

優也 「この後お時間あります?良ければ一緒にデートなんか・・・」断る」

翼 「私には心に決めた人がいるのだ。そういうのはお断りだ」

優也 「・・・まじかよ。」

優也 「奏さん!ファンです!サインを!ついでにお食事を!」

奏 「おつ?ファンか・・・ありがたいけどなあ・・・解散したし・・・それに、好きな奴いるからな・・・悪いな」

優也 「ふあつきゅー・・・鈴夢だな。」

—————

鈴夢 「へえーそーなのかー」

優也 「・・・自覚なの?」

鈴夢 「何が?」

優也 「翼さんたちお前のことが好きなんだぜ?」

鈴夢 「それはないそれはない。」

俺が全力で否定すると、優也はため息をつく

優也「どうしてこんなやつが好きなんだ・・・？」

鈴夢「・・・まあ、いいじゃない。そう言うのは人の自由だしさ。」

優也「そう言うお前は好きな人いるのか？」

鈴夢「・・・ノーコメントで。」

優也「・・・そうかよ。」

俺たちは窓を開け・・・星空を眺める・・・

優也「・・・何はともあれお前が生きててよかったよ」

鈴夢「・・・そうか・・・」

俺たちはそう言うと、二人でコーラの入った瓶を合わせる

二人「乾杯。」

俺たちはコーラを飲み・・・この日・・・優雅な日を過ごした・・・

夏ですよ！プールでしょ！

・・・これからの時期。いよいよ夏本番です。皆様はいかがお過ごしでしょうか。友人、家族とプールに行く人・・・彼女と遊ぶ人・・・あとはお祭りを楽しむ人も・・・さて、この作品の主人公たちはどのように楽しむのかな？

—————

舞台は東京・・・俺たちはいつも通りね。

いやー・・・にしても大変だったなあ・・・

突然訳の分からん化け物たちに襲われるわ・・・なんか知らんけど因縁付けられるわ・・・姉さんとは再会するわ・・・

取り敢えず、この半年は大変でした。

でも、嫌だった訳じゃない。むしろ皆でわいわい騒げて良かったと思う（物理的に）さて、今の季節は夏・・・俺たちは暑さに耐えきつていた

クリス「暑い・・・これじゃあ私が溶けちまう・・・」

鈴夢「だからって、氷枕で布団に横になることはないでしょ。」

クリス「鈴夢の臭いがする」

鈴夢「夏は臭いが酷くなる時期だからねー布団は干そうね!」

クリス「うわあああつ!鈴夢!私の癒しを没収しないでくれ!」

悲しそうに焦る姉さんに俺は笑顔で

鈴夢「断る。」

その一言を言い終えると、俺は毛布を洗いに洗濯機まで急いだ。

◇

鈴夢「でも暑いな・・・たしかに姉さんの言うこともわかる」

たしかに夏本番となるといよいよ気温が30。を余裕で超えてくるので俺たちは溶けそうになる・・・なので

鈴夢「もしもし玲奈?ちょっと相談が・・・」

玲奈『何?プールでしょ?知ってるわよ』

鈴夢「流石。」

玲奈『今、お父様に手配してもらってるのよ。数日後には別荘も建てれるらしいし・・・

その時まで待てる?』

鈴夢「ちなみにいつ?」

玲奈『んー・・・大体3日かな?』

俺は少し考えると

鈴夢「了解。その時は呼んでね」

玲奈『ええ。それじゃあね。』

俺は玲奈との連絡を切ると、次はある場所へとバイクを走らせた

◇

翼「暑いな・・・溶けそうだ・・・」

奏「だな。シャワー浴びてもすぐ暑くなるからな」

翼さんの家の前にも、やはり中からそんな声が聞こえる

鈴夢「お邪魔しまーつす。」

奏「おつ。鈴夢ー・・・」

翼「!き、霧夜・・・いらっしやい・・・」

俺が翼さんの部屋に上がりしだい、奏さんは背中に抱きつき、翼さんは部屋でおろおろしている・・・ん?

鈴夢「お掃除してる?」

翼「ううっ……」

翼さんの部屋は女の子の部屋ではあるが……玲奈の部屋同様、下着等が散らかって  
いた

鈴夢「……片付けよう」

翼「え!?!」

奏「にやははは!いいんじゃないの!?!」

翼さんは驚愕し、奏さんは高らかと笑うけど何か変か?

翼「か、奏っ!それはーああっ!霧夜!片付けるなっ!」

俺はそんな二人を差し置いて床に落ちてる下着類を拾い、軽くたたんだ後、入ってる  
であろう場所へとしまふ

翼「き、霧夜がわ、私の……」

奏「いいんじゃないね?むしろ効果的だろ」

ときばきと下着等を片付ける俺を見て、二人はそう言うがまあ、無視だな。

俺のような男よりも良い奴はいるよ。うん。

俺は一通り片付け終わると、改まって翼さんたちに話をする

鈴夢「さて。今回は翼さんたちに話があつてきました」

翼「なんだ?難しい話じゃなければいいが……」



奏「同じく。出来れば簡単に……」

鈴夢「プール行きたい？」

奏、翼「詳しくお願い。」

この食いつき……嫌いじゃない。

俺は、スマホを取り出すと、画面を開き、地図を出す

翼「これは？」

鈴夢「ん？俺の友達の数地……つまりはプライベートビーチって所かな？」

奏「……ここ丸ごと？」

奏さんの言葉に俺は頷くと、二人は驚愕する

奏「これだけのものを私有地に……すごいな」

鈴夢「金持ちなんだろうな……詳しくはあまり言えないですけど。」

翼「それでここに？」

鈴夢「うむ。ちなみに三日後」

奏「水着か……サイズ合うかな……」

鈴夢「合わないなら向こうで発注するらしい。希望のサイズを言ってください。」

……俺がそう言うと二人は顔を赤く染める……ん？変な事言った？

翼「ば、バカっ！か、簡単にそんな言葉を吐くなっ！」

奏「そ、その通りだっ!少しは女心を勉強しろっ!」

鈴夢「・・・なんで怒られた?」

俺は怒られた理由が分からず。渋々玲奈の電話番号を渡すことに

翼「・・・では、またな」

鈴夢「うん。またね。」

さて、二つ目の要件も終え・・・俺はバイクを走らせる・・・向かう先は・・・

鈴夢「響たちと合流したいが・・・どうしよう?」

バイク(チェス)『へ電話ではダメなのですか?』

鈴夢「・・・それも考えたけど・・・電話じや伝わらないことあるだろ?だからと思っ

てな・・・」

チェス『へ了解。マスターの意見を尊重します』

鈴夢「よろしくな。」

俺はそう言い、車体を叩くとチェスはエンジンを吹かす

あつ。チェスって言うのはこいつ(バイク)の名前だ。ほら・・・ちよこつと本編に

も出てたやつ・・・。名前はチェイスバイカーの略。

移動速度はとても早く・・・高速モードと通常とあるのだが高速の方が速い。

・・・速さは・・・走ったことないから知らない。

取り敢えず余裕で速いと断言出来る。

取り敢えず響たちと何かしら連絡を・・・と、思った時  
ピリリリリ・・・

突然電話が鳴る・・・電話の主は・・・

〈立花 響〉

鈴夢「・・・もしもし?」

響『あつ! 鈴夢くん! 今からお家行ってもいい?』

鈴夢「・・・どうして?」

響『鈴夢くんに会いたい!』

鈴夢「素直にありがと。丁度こっちも探してたから・・・来てくれる?」

響『おつけー! 今から行くね!』

さて・・・本人は家に行くから・・・

鈴夢「チェス。帰ろうか」

チェス『了解。全速で行きましょう』

俺はエンジンをかけると全速でバイクを走らせた

◇

さて、家に帰れば案の定・・・響と未来ちゃん・・・全く。ナイスタイミング。

鈴夢「・・・取り敢えず上がろう。暑くちや死んじやうからね」

未来「ありがとうございます。お邪魔します」

響「鈴夢くん家だああ!お邪魔しまーす!」

二人は勢いよく、玄関からエアコンのある部屋へと直進していくが・・・

鈴夢「ん?なんでエアコンある部屋知ってるのん?」

・・・不思議なこともあるもんだな・・・

◇

鈴夢「はい。ガ〇ガ〇君ね。ソーダ味の」

響「ありがとー!」

未来「響!行儀悪いよ!」

響が食べながら、溶けていき、液体となったアイスを未来ちゃんが床に落とすまいと必死にガードする。

鈴夢「改めて見ると姉妹だな」

未来「……見てないで少しは床を大事にしようよ」

鈴夢「だが断る」

俺は座布団を敷き、横になるが……

響「鈴夢くん……それで話って？」

あつぶね。話を忘れてたわ

鈴夢「プール行こうぜ？」

響「さんせー！」

未来「……鈴夢くん。ごめんね……」

鈴夢「気にすんな。行きあたりばったりだよ。」

未来「……何か違う気がする」



そして三日後……

鈴夢「さて皆さん。準備は出来ましたか？」

翼「……私は出来ているが……他は？」

奏「あたしもだ。」

クリス「あたしも。」

鈴夢「・・・大人組はよし。」

俺は頭の中で整理しながら分析する・・・いや、するまでもない。

鈴夢「響?置いてくぞ。」

響「鈴夢くん!それはないよー!」

未来「・・・自業自得だと思うけど・・・」

・・・さて、響も準備出来たところで、俺の家の前にある黒い車・・・リムジンに合

図を送る。

そうすると、扉が開き、玲奈が手招きをしてくる

鈴夢「よし。皆で行こうか・・・ハメは外しすぎないように」

皆「二はい!」

そんな元気な掛け声を乗せた車は・・・玲奈の所有するビーチへと移動した・・・

◇

・・・車に乗って数分・・・車内は広く・・・皆でくつろいでいた。

ただ、翼さんだけは・・・

翼「霧夜の膝……温かい……このまま一緒になりたい……」

鈴夢「……このまま一緒になるのは無理や。諦めてくれ」

翼「……ふふふ……夫婦になれば関係ないのだ……」

鈴夢「ならねえよ。」

とか言いつつも。俺は翼さんの長い髪を撫でる……

てか、今言うけど翼さんのキャラがおかしい。

前はこう……もっと冷静で、この中では常識人のはずなのに……今はタメ口じゃないと泣いてしまう女の子になってしまった……

鈴夢「……恋ってやつなのかなあ……」

俺はこの正体が何かわからないけど……取り敢えずそういう事しておく事にした  
玲奈「あら、楽しそうね？」

鈴夢「……嫌がつてるだろ？見ればわかるよ」

玲奈「逆に嬉しそうにしか見えなかったけど？」

鈴夢「……ふん。」

俺がそっぽを向くと……背中に玲奈が抱きついてくる……

玲奈の胸はどちらかと言えば大きい方だ……前の俺なら耐えれず倒れていたかもしれない……だけだ。

鈴夢「残念。耐性付きだ」

玲奈「・・・残念。」

玲奈はそう言うのと、改めて俺の隣に座る

玲奈「ねえ・・・ほんとに自覚ないの?」

鈴夢「どうした急に。」

玲奈「優也がさ・・・なんか鈴夢が鈍いつて・・・」

鈴夢「言つとくけど俺は鈍くないからな?何故なら俺はモテないからな?」

俺がそう言うのと玲奈は深いため息をつく

玲奈「・・・この鈍鈴夢。」

鈴夢「なんだよ・・・悪いか?」

俺がそう言うのと玲奈は

玲奈「むしろ好きだよ?そんな鈴夢をね?」

◇

響「海よっ!私は帰ってきた!」

未来「・・・ここは響の住処じゃないでしょ?早く荷物を置いて着替えに行こうよ」



響「おっけー！なら行こう！」

響と未来は荷物を置きに、先に玲奈の所有する別荘へ荷物を置きに行く

翼「ふむ・・・なかなかだな・・・」

奏「海が綺麗だね・・・透き通る青・・・光を反射するほどの美しさ・・・」

ツヴァイウイングの二人は感情に浸っている・・・そして俺は

クリス「鈴夢は私と隣なんだ！お前なんかには譲らねえ！」

玲奈「あら！ここは私の別荘よ!?私の言うことが聞けないのかしら!?」

クリス「てめえの言うことは聞いてねえ！私は鈴夢に聞いてるんだよ！」

ここで喧嘩してる・・・どして？

鈴夢「・・・喧嘩の理由はわからんけど・・・このままけんかが続くなら俺が移動す

るけど？」

俺がそう言うと二人は突然手を取り合う

クリス「お前を誤解してた・・・仲良くしようぜ？」

玲奈「私も・・・ごめんなさい？」

笑顔で謝るふたりだが・・・その目には光がなかった・・・

・・・さて、ここまで来たら・・・

鈴夢「あとは部屋決めかな・・・」

俺がそう言った瞬間・・・みんなの目が変わり・・・そして

皆「「鈴夢は私と同じ部屋だああああ!」」

鈴夢「いやあああああだっ!俺は一人がいいんだよおおおっ!」

こうして俺を巡った鬼ごっこが始まった・・・

## 夏ですよ！プールでしょ！ Part 2

鈴夢「はあはあはあ・・・撒いたか？」

鬼ごっこが始まってすぐ逃げ・・・俺は木の上に登っていた・・・

生憎ここはジャングルみたいな所・・・つまり木も大量にある・・・俺の森だ！

鈴夢「さて・・・俺を見つけれぬなら見つけてみるよ・・・」

そう言っていると、早速下から声が聞こえる・・・

翼「霧夜・・・どこだ？どこへ行った・・・？」

鈴夢「翼さんか・・・この人まともだから・・・捕まっても・・・」

と、言いかけたその時は

翼「霧夜と夜の営みをして・・・それから口実を作り・・・そしてあばよくは婚約も・・・」

鈴夢「・・・ナニモキイテナイ。」

何も聞いてない。いいね？

さて、そろそろ逃げたいけど・・・

鈴夢「翼さんがここにいるとやばいよなあ・・・」

俺がそう言う・・・下の翼さんがこちらを向き・・・

翼「鈴夢・・・見つけた・・・」

鈴夢「ごめん。人違いだわ」

そう言つて、木から降り、大地を駆け抜ける・・・しかし

カカカツと言う鋭い音と共にナイフ・・・が飛んでくる

翼「霧夜っ!逃げるなっ!私の夫となれ!」

鈴夢「なんでそうなるっ!俺は一人がいいんだあああ!」

俺が全速力で逃げる度、後ろからナイフが飛んでくる

鈴夢「チラッ」

翼「シヤキン」

鈴夢「にくげるんだよお」

後ろを向けば刀を構えてるあたり・・・最後は脅しに来るからな・・・逃げろ!

鈴夢「翼さんっ!諦めてくれ!」

翼「霧夜っ!逃げるなあ!」

◇

鈴夢「ふう・・・なんとか撒けた・・・」

玲奈の屋敷にて・・・俺はなんとか撒くことに成功した・・・しかし

鈴夢「ここに荷物を預けたってことは・・・皆ここに来るんだよなあ・・・」

つまり・・・？

ドドドドド・・・

鈴夢「走れメロスっ！音速の如くっ！友を死なせないためにつ！」

セリ〇ンテ〇ウス！俺は君を見捨てないからなっ！

俺は音速の速さで屋敷へと逃げ込んだ・・・

◇

さて・・・舞台は変わり・・・屋敷でのかくれんぼ・・・

一番注意すべきは・・・

姉さんかな？

外ならともかく・・・屋敷になれば姉さんが強いだろう・・・

鈴夢「毎回俺の匂い嗅いでるからな・・・わからないわけが無い」

正直本人はバレないようにやってるつもりなんだろうけど、俺にはバレてるんだよ

なあ。

まあでも、どこにいようと俺を見つけ出せるのはある意味すごいと思う。

そこでとる対策は・・・

クリス「見つけたぞ! 鈴夢! ここにいるんだろ!」

・・・姉さんが部屋に来たか・・・作戦実行!

パサツ

クリス「・・・これはっ!」

そう・・・姉さんに対抗出来る唯一の策・・・それは!

クリス「・・・鈴夢う・・・(ドサツ)」

鈴夢「情けない・・・」

俺が投げたのは・・・俺のシャツ・・・インナーだ。

この夏・・・俺の汗、臭いを吸収したインナー類は姉さんの餌として持っていかれる

のだ・・・

だからあえて着ているいらぬシャツを姉さんに持って行ってもらった。

鈴夢「おやすみ。」

俺はそう言うとその部屋に姉さんを残し、去っていった

クリス「鈴夢・・・(スヤスヤ)」



さて・・・残るは四人・・・かな？

まあ、とは言つても皆手強いからな・・・

鈴夢「てか、なんで俺なんだよ・・・」

俺はそう言いながらも、屋根伝いに逃げるが・・・

ズドン！

・・・突然槍が俺の目の前に突き刺さる・・・槍？

鈴夢「もしかして・・・」

そう思いながらも、隙間から下を見る・・・すると

奏「鈴夢・・・出てこいよ・・・」

鈴夢「・・・納得した。」

なるほど・・・もともと GANG ニールで槍を使ったからか・・・どうりで狙いが的確なわけで。

さて・・・ほんとにどうしよう。

こうなると例え屋根伝いに隠れたとしても槍によつて突かれたらおしまいだ。

ん？なんでみんな殺そうとするの？

奏「……鈴夢う……」

しかし、奏さんは何故か前が見えてなさそう……チャンスだ!

俺は隠し持ってた煙玉を投下してその場をあとにする……が

奏「鈴夢うっ!逃がさないぞっ!」

鈴夢「てめえ見えないんじゃないのかよっ!ちきしよーう!」

奏は槍を振り回しながらも俺を追いかけてくる

幸いにも廊下は長く……俺の走りなら直線で撒ける……と思っただけどね?

奏「鈴夢ううう!」

鈴夢「くそっ!なんでこんなに早いなだよなあ!」

謎の補正がかかっているのか……奏の動きが早くなってる!

鈴夢「くそっ!捕まってたまるかっ!捕まったらいろいろと嫌な予感がするっ!」

俺は背筋に感じる謎の恐怖とともに廊下を爆走していた……

◇

さて……俺は奏を撒き……一人、安心していた……

場所は庭なるところ。



鈴夢「皆動きが良すぎるんだよなあ．．．」

皆動きが良すぎるんだよ。あれから翼さん。姉さんに再び追われたもの．．．ほん  
と動きが凄かった．．．なんかこう．．．どこへ逃げてもそこに来る執念って言うか．．．  
なんというか。高い壁も簡単に超えるぞって勢いで迫って来るんだよなあ．．．あれだ、  
山があつたから登るみたいな感じだ。

すごい執念だなあ。

てか、なんで俺なの？

鈴夢「不思議だなあ．．．なんでこうなつたんだろ？」

未来「鈍感なのが悪いよ。」

気づいた時には遅かった．．．既に俺の隣には未来がいて．．．俺に抱きついている．．．  
つまり

響「未来ナイス！」

未来「やったね！鈴夢くんは私たちの物だよ！」

鈴夢「誰が物だよ。」

やられた．．．ハメられたのか。

俺がまさかこの場所に来ると予想して．．．？

響「ふふん。鈴夢くんを弱らせて捕まえる完璧な作戦．．．どうかな!？」

未来「ふふふ．．．これで私たちのものだね．．．どうしようかな．．．」

ダメだ。響はワガママモード発動の未来はDSモードが発動している．．．これは危険かもしれない．．．こうなれば

鈴夢「あー．．．動けないな．．．こんな時に姉さんがいたらなー(棒)

その時、庭に大量の弾幕が落とされる．．．

響「これは!?!」

未来「響!」

鈴夢「うおっ!」

霧が晴れると．．．俺の体は姉さんに持たれていた

クリス「鈴夢!無事か!?!」

鈴夢「もう。一人にしたい。」

クリス「でもなあ．．．」

鈴夢「うるうる．．．」

クリス「ーっ!わかったよ!一人でいいから!泣かないでくれ!」

やったぜ。

玲奈はどこに行つたのか不明だが．．．俺のこの一言で決まってしまった．．．



鈴夢「腹減った……たいして泳いだわけじゃないのに……」

騒動が解決して数分後……俺は砂浜に横になっていた……

暑いけど……全然我慢できるわ。

と、その時だった

玲奈「ほら、シヤキツとする！」

バシイと、言う素晴らしい音と共に俺の頬が叩かれる

鈴夢「痛い。親父にもぶたれたことないのに……」

玲奈「……知らないわよ。ほら。こっち来る！」

そう言う俺は身体を起こされ、玲奈に連れてかれる……ん？

鈴夢「これは？」

連れていかれた場所にはひとつの腕時計を持った執事さんが立っていた。

玲奈「これは鈴夢が前に頼んだやつでしょ？急いで取りに行ったのよ。」

鈴夢「納得した。」

この腕時計は、前に、トイの拡張ツールとして玲奈に製造を頼んだ腕時計だ。

トイ『いやあ……形が小さくなって気持ち悪いぜ……』

鈴夢「我慢しろ。出なきや外出出来ねえだろ。」

今まではスマホにツールを入れていたが、これで余分な手間がかからずに済む。

鈴夢「サンキューな。」

玲奈「要件は済んだわ。泳ぎに行きましょ?」

・・・あつ。言うの忘れてた。

鈴夢「僕は泳げましえくん。」

バシイ

2度もぶたれた・・・親父にも(以下略

◇

・・・さて、泳ごうか?

泳げないと言った?あれは嘘だ。

しかし、こうも海のそこが深いと俺の心はちよつと冷めてしまう。

はあ・・・せめて深くないところが良かったなあ・・・

鈴夢「まあ、泳げるところまで泳いでしまおう。」

翼「霧夜の水着・・・はあはあ・・・」

奏「・・・翼が見てるのは主に全部だろうが。行くよー」

翼「いやー・・・霧夜の水着を見せて・・・」

翼さんが喚いてた気がするが無視だ

クリス「・・・鈴夢の水着・・・写真を撮らなきや。」

響「クリスちゃんこれでどう？」

クリス「！いいぜ・・・もつと撮ろう」

・・・どこからか二人の声も聞こえるし・・・

未来「鈴夢くん泳げるの？」

よかつた常識人がいた。

鈴夢「それなりにはね。それに泳げないと困ることあるからさ・・・」

未来「困ること？」

鈴夢「・・・いざれわかるさ。」

俺はそう言うのと、少しずつ、水へ足を入れる・・・

鈴夢「・・・やつぱ抵抗あるよなあ・・・でも、泳がないと玲奈に殺されるしな」

今、別荘に戻るのなら玲奈にバレて殺される運命を辿るばかりだ・・・それだけは気をつけたい。

鈴夢「ええい！豪に入れば郷に従えだ！行くぜっ！」

ん?当たって碎けろ!だったかな?まあいいか!

俺は腹をくくり、海へダイブする・・・けど。

鈴夢「ヴェアアアアアアア!」

ダメだ、このヌメつとした感じが嫌いだ!これならまだ学校のコケだらけのプールの方がましだ!

俺は浅瀬まで退避する・・・

鈴夢「・・・嫌いだ・・・恨んでやる・・・」

しかし、俺は渋々言いながらも足を水に浸しながら、響達のところへと歩き出した・・・

## 夏ですよ！プールでしょ！ Part 3

響「鈴夢くん！あーそぼ！」

俺たちが響たちと合流すると突然そんなことを言われる

奏「遊ぶって言ってもなあ・・・何して遊ぶんだ？」

クリス「だな。遊ぶ道具がないんじゃないよな・・・」

確かに、奏さんたちの言う通りだ。このビーチには遊ぶ道具が全くない・・・つまり、泳いで遊べという悪夢が見えるんだ・・・

鈴夢「どうしようかね？」

玲奈「そんなこともあろうかと」

突然、俺の隣に玲奈が現れたことにより、俺はバランスを崩し・・・翼さんにもたれ

掛かる形になる

翼「霧夜・・・大胆な・・・」

鈴夢「・・・で、何？玲奈。」

玲奈「遊ぶものくらい用意してあるわよ・・・爺や！」

爺「はい。お呼びでしょうか。」

玲奈がいつもいる執事さんの名前を呼ぶと、玲奈の隣に道具を持った執事さんが現れる。

響「ビーチバレー?」

玲奈「そうよ。誰が・・・鈴夢の隣に座るかよ!」

鈴夢「・・・それって俺が遊べないことには変わりないよな?」

しかし、そんな俺の疑問をよそに、どこからかパフパフ音がなつて、この会を祝福している。

玲奈「ルールは簡単。二人一組でペアを組んで争ってもらうわ・・・この人数だとちようど3チームね。でもって一番多く勝利したチームの勝利よ!」

鈴夢「・・・爺さん。俺は一人で食べれないですかね?」

爺「無理ですね。鈴夢様の席は固定となっておりますゆえ」

おのれ玲奈。謀つたな。

まさかこれを予測して俺を海に固定させていたとは・・・恐ろしい子。

誰よ!玲奈をこんなふうに教育したのは!

鈴夢「・・・とりあえず俺たちはお茶と行きませんか?メイドさんたちも交せて」

爺「いいですね・・・きつとあの子達も喜びます。」

鈴夢「んじや、ここら辺に机を置きますか」



爺「では、私はお茶を用意します。」

鈴夢「カモミールでよろしく。」

爺「了解であります。」

俺たちはすぐ近くで火花が散ってるのを無視し……優雅なお茶を取ろうとしていた……

◇

……ふふふ……鈴夢の隣は私たちだ！

私は奏とペアを組み……まさにチームツヴァイイングを結成していた。

翼「再び奏と組めるのだ……どんな敵も相手ではない！」

奏「当たり前だよなあ……行くぜ！」

◇

クリス「お前とチームを組むんだ……下手なことしたら撃ち抜いてやるからな？」

私のペアはこの鈴夢にまわりつく虫一号だ。よくもまあ……私の鈴夢に手を出す

ものだ。

玲奈「あら。そちらこそ、下手な真似はしないでくださいな?」

・・・こいつは嫌いだ。だけど鈴夢の隣になるには使えるものはなんでも使つてやる

!

◇

響「未来!頑張ろう!」

未来「そうだね・・・鈴夢くんを今度こそ手に入れよう?」

私たちのコンビなら・・・誰にも負けない!

響「行きますっ!限界なんて壁はっ!・・・突破しますっ!」

◇

さて・・・試合が始まるか。あつ。えつと・・・ごほん。

鈴夢「えーどうも。こんにちは、・・・ニユース「ビート」へようこそ。司会は私、霧

夜 鈴夢と。」

爺「解説の爺やでお送り致します。」

「わー(ぱちぱち)」と言うメイドさんたちの盛り上がりもあり……俺たちは気に入ったかは知らんが解説役等をやることとなった。

爺「いやー……この戦い……もといキャットファイトは見ものですなー優勝商品の鈴夢様？」

鈴夢「茶化さないでくださいよー……だからこうしてふざけてるんでしょ？」

メイド1「ですよねー……あつ、鈴夢様！ケーキ召し上がりますか!？」

鈴夢「もらいましょう。」

メイド2「鈴夢様、鈴夢様……あーん♪」

鈴夢「(ぱくつ)。」

メイドたち「「きゃー♡」」

メイドさんたちや、爺さんの作ったケーキ等、様々なおやつを食べながら俺は解説をする

鈴夢「にしても見事に仲良し組で固まりましたねー」

爺「ですね。お嬢様のコンビが不安なのですが……」

鈴夢「ああ見えて姉さんと仲いいんですよー夜中に一緒に襲ってくるぐらいですからね？」

爺「・・・申し訳ございません・・・」

何故か謝る爺さんを俺は無視して、改めてコートに目をやる

コートには既に翼、奏ペアと、クリス、玲奈ペアが・・・

審判は響、未来の二人だ・・・

みんな水着なのだが・・・やっぱり俺も漢だ・・・見るべきところは

鈴夢「・・・姉さんのも奏さんと同じぐらいか?・・・翼さんのもいいなあ・・・玲奈も大きいし・・・響とか未来の健康体も・・・」

メイド3「鈴夢様つたらどこを見ているのかしら?」

メイド4「鈴夢様の変態。」

と、このように女性の身体を見てしまうのだ・・・まあ、漢だし?しようがないよな?某アニメの主人公はおっぱいどころか蜜まで舐めてるもんな・・・

まあ、それをさせる女性もどうかと思うけどそれに比べれば俺なんかまだマシだよ。

鈴夢「・・・えー・・・ごほん。ごほん。・・・試合が始まるようで・・・」

爺「気楽に見ていきましよう。」

俺たちはこれから始まる試合?に目を向けた・・・

◇

さて・・・試合の様子を見に行こう。

あつ。ここからは戦場カメラマン・・・渡部〇一さん視点で行きましょう。

さて・・・基本的なルールはバレーと同じ。

(作者がビーチバレー知らないからそのように)

あとは聖遺物の使用などの制限↑あること自体おかし。

最後は殺傷行為の制限。

・・・てか、バレー関係なくないですか？

さて・・・上のことはさておき・・・試合を見ていこう

・・・第一試合。

ピーッ!

ホイッスルの音と共に翼がボールを相手コートに放つ

クリス「おっけー!任せろっ!」

玲奈「攻撃は任せなさいっ!」

クリスが上げたボールは・・・ジャストでクリスたちサイドのコートギリギリに上

る

玲奈「アタック!」

鈴夢「おっとお! 玲奈の素晴らしい一撃イイイ! これはとれないかああっ!?」  
と、思っていたが・・・

ボールの着弾地点には待ってたと言わんばかりに奏がいて、ボールが「パァン」と言う音と共に高く上がる

翼「奏っ!」

奏「翼っ! 上げてくれっ!」

翼「わかった!」

翼が高くトスを上げると、素早くそれを奏が相手コートに叩き込む

クリス「せいっ!」

玲奈「フォロー入るわ!」

さらにそれをクリスが上げ・・・玲奈がフォローに入る

鈴夢「いやあくナイスコンビですねえ! あつ。メイドさんそのケーキもらえます?」

メイド5「はいはい。あーんってしてくださいね?」

鈴夢「あーん。・・・もぐもぐ・・・しかし姉さんと玲奈は仲がいいですねえ」

爺「そうですね・・・伊達に好敵手をやってる訳ではないですな。」

鈴夢「好敵手って敵の友達でしょ? 結局仲がいいんじゃないですか。」

・・・字的に判断すればそうなる・・・が。

コートに目をやろう・・・すると

クリス「くそっ！このままだと鈴夢の隣じやなくなるだろ！しっかりと動け！」

玲奈「うるさいわね！あなたはボールを拾ってなさい！」

クリス「たまには攻撃させろ！」

・・・これは酷い。

◇

さて・・・皆さんこんにははく戦場カメラマンのく渡部く〇一ですく

って、柄じゃないのは止めて。とりあえず戦場カメラマン視点で続けます。

あなたは誰かって？そんな細かいことは気にしない気にしないく気にしちやダメよ  
くダメダメ。

それでは第二試合を見ていこう。

第一試合？あの後、クリスチームが友情放棄して負けたよ。

あまりにも酷かったので感想だけで。

クリスがボールを上げて、そのまま炎を纏った足でフアイヤートルネードみたい

蹴ったり

玲奈がクリスに渡すまいとゴットハンドを繰り返したり

さらには正義の鉄拳とか・・・懐かしい。

とりあえず超次元サッカーにジャンルが変わってた。

まあ・・・最後は翼さんが華麗に決めてたけどね? いや・・・可愛かったなあ・・・

とくに控えめな胸・・・おっぱいが揺れるところとか・・・?  
? ( ? ? )  
▽  
?? )  
グへへ

へ

さて・・・次の試合を見ていこう。

次は響と未来チームと、奏、翼チームの試合だ。

いやあ・・・健康おっぱいはいいですねあ・・・

おっとっと、試合を見ていきますか

これまでの結果は

翼、奏ペア、1勝

クリス、玲奈ペア 1敗

◇



・・・さて、試合が始まります。

審判は・・・クリスチームが審判を放棄したのでメイドさんたちが努めます。メイド「はーい。試合を始めます！」

ピーツ！と、言うホイッスルの音と共にボールが打ち出され試合が始まる。ボールは放物線描き、翼チームのコートに入っていく

翼「奏っ！攻撃を任せたぞっ！」

奏「おっけー！高く上げてくれっ！」

翼「こうか！」

翼が、ナイスと言わんばかりの位置にボールを上げる・・・そこに奏が走っていく。奏「後輩っ！悪いけど手加減なしだからな！」

そう言い、奏が必殺の一撃を放つ・・・って、ボールに電流走ってません？

しかし、そのボールはバシイと言う素晴らしい音と共に翼さん側のコートに落ちる。奏「なん・・・だと？」

奏が相手側のコートを見ると、ちょうど目の前にブロックの感触を味わった後輩・・・

響がいた

響「やったー！防いだぞー！」

未来「やったね！これで勝つるよ！」

奏「・・・防がれた・・・?この一撃を・・・」

・・・悔しそうにする奏とは別に、嬉しそうにする・・・響たち

・・・その時、奏の中で何かが吹っ切れたのか・・・奏から赤いオーラが出てくる

奏「ふっふっふっ・・・見せてもらおう・・・後輩達の実力をな!」

響「諦めたらそこで試合終了ですよ!」

奏「上等だ!やっつてやるぜ!」

・・・友情つてなんだろう?

響「未来!しっかり入れてね!」

未来「わかった!・・・てえいっ!」

おっ。おっぱい揺れた(\*´ω`\*)

と、翼側のコートに入り、奏がレシーブした後だ

ギョウンと、言う擬音と共に奏の動きが3倍近くまで上昇し、翼が上げたボールを一気にコートにぶち込む

響「・・・シヤアだ・・・赤い彗星だ!」

奏「ふっ。」

・・・奏さん。全然かっこよくないです。

鈴夢「・・・ドーピング疑惑ありますね・・・これは試合を終わらせますか」

爺「いかなさいますか？」

鈴夢「決まってるでしょ？響たちの隣に座ります。」

爺「わかりました。私たちは夕食の用意をします」

そう言うのと執事と、メイドさんたちは屋敷に戻っていき、鈴夢は一人でビーチバレーのコートへと向かった……

◇

鈴夢「試合終了……勝者は響、未来ペアー……」

響「やったー！鈴夢くんにご飯だー！」

未来「……これでいいの？」

未来ちゃんがそう言うのと翼さんたちが詰め寄ってくる

翼「霧夜！こういうことだ！私たちではないのか！」

奏「鈴夢っ！ちゃんと説明しろ！」

……なら簡単にいいいます。

鈴夢「動きが3倍なんてのは反則です。ルール違反ですよ？」

奏「鈴夢く」

鈴夢「人生諦めが肝心だ。」  
そう言い、俺は一人・・・屋敷へと戻って行った。

## 夏ですよ！プールでしょ！ Part 4

・・・夕食時。私たちは作戦を練っていた。

クリス「鈴夢のお風呂を覗く？」

玲奈「そうよ。きっと鈴夢は私たちとの入浴を拒むし入ろうともしない・・・だから恐らく別の浴室・・・を使うつもりだわ。そこでよ。」

・・・私は決意したかのようにみんなに切り出す

玲奈「ここで鈴夢のお風呂を覗くのよ！報酬はその後に見られる理想郷よ！」

翼「鈴夢の裸・・・？鈴夢の・・・」

奏「・・・ふむ。ありだな・・・私たちは乗ったぞ？後輩たちは？」

玲奈「・・・放置よ放置・・・どうせあれでお腹いっぱいでしょ？」

クリス「・・・だな。よっし！作戦開始だ！」

・・・ザワザワ・・・

鈴夢「・・・向こうが作戦立ててるなあ・・・」

響「鈴夢くん？どうしたの？」

鈴夢「ちょうどいい。響、未来、お願いがある」

響、未来「何?」

・・・こうして夜・・・新たな争いの幕が上がった・・・

◇

鈴夢「んー・・・湯加減バツチリやなあ・・・」

メイド4「湯加減大丈夫ですか?少しでも暑ければお下げしますが」

鈴夢「問題ない。大丈夫ですよ。」

メイド4「よかった・・・ありがとうございます。」

鈴夢「それよりも外は大丈夫?」

俺がそう言うのと廊下から走る音が俺にも聞こえる

メイド4「今、来ましたよ?どうしますか?」

鈴夢「・・・あつ。大丈夫大丈夫。廊下には優秀な守護騎士がいるから」

メイド4「ではお背中をお流し致します」

鈴夢「おねしやす。」

俺が快感に浸ってるあいだ・・・廊下では激しい音が聞こえていた



クリス「作戦決行だ！行くぜっ！」

私たちは聖遺物を纏い、廊下を疾走する

玲奈曰く、階段を登り、右に真っ直ぐ行くと、浴場らしい

それを私たちが先行し、玲奈がカメラを持って突撃する・・・

これほど素晴らしい作戦はない！（確信）

さて、作戦決行なのだが・・・

翼「何故、天羽々斬を？どうしてなのだ？」

奏「・・・疑問だな。どうしてだ？」

・・・確かに疑問だ・・・どうして？

しかし、その質問はすぐにかき消される

翼「っ！二人とも！前だっ！」

先輩が叫ぶと、前から咆哮とも呼べる衝撃波が飛んでくる

翼「奏は下がって！雪音っ！」

クリス「わかつてるよ！」

先輩を下げ、私たちが前が出る・・・

咆哮を完全にかき消すと・・・前には人影が現れる

翼「・・・その影・・・立花か!」

クリス「特訓馬鹿かつ!」

響「・・・先輩達・・・鈴夢くんのお風呂は覗かせません!」

そう言うのと馬鹿はアームドギアを構え、咆哮を放とうとする・・・っ!

クリス「バカっ!こんな狭いところで放たれたらっ!」

翼「受け身を取れっ!雪音っ!」

次の瞬間、馬鹿の腕から再び咆哮が放たれた・・・

◇

奏「・・・くそっ・・・小日向・・・そこをどけっ!」

翼とクリスの戦闘中・・・私は隙を見て動いたものの、小日向に見つかって戦闘している

未来「鈴夢くんの入浴を邪魔させはしません!」

奏「くそっ!すぐそこに楽園があるのにいっ!」

私が小日向に詰め寄ると、小日向は腰からスタンガンを取り出し、私にぶち込もうと



する

奏「いつの間になんなものをつ！」

未来「鈴夢くんを守るためだもんっ！これぐらい当たり前だよっ！」

私の戦う廊下は火花ではなく・・・電気が走っていた

◇

クリス「くそつたれ！持ってけ！」

私が弓をガトリングに変え、放つものの、馬鹿はそれを簡単に躲し、接近してくる

クリス「先輩！任せた！」

私がそう言うのと先輩は刀を馬鹿に突き立て、罅迫り合いになる

翼「立花っ！そこをどけっ！私たちには引けないものがあるだろう！」

響「わかってますよ！でも、鈴夢くんの頼みだからっ！行きますよっ！」

さらに馬鹿は体術で対応するが、先輩はそれを躲しながら反撃をしようとする

しかし、馬鹿の攻撃にも隙はなく。お互いに様子見している状態だった。

クリス「先輩っ！離れろよっ！」

私がそう言うのと、先輩は離れる仕草を見せるので腰のミサイルを遠慮なく放つが：

響「せいやああああっ!」

馬鹿はそれを拳一つで相殺してしまう・・・

クリス「嘘だろ!」

響「これで・・・っ!終わりですっ!」

私たちは次こそ馬鹿の放った衝撃波に直撃し、意識を失った

◇

鈴夢「あー・・・いい風呂でした。」

メイド4「ありがとうございます・・・あ」

鈴夢「・・・すごい派手にやったねえ。予想外だよ。」

俺が風呂から出たあとに見た光景は、何故かシンフォギアを纏い気絶してる二人と、奏さん。それと、ガングニールを纏った響と、何故かスタンガンを持つてる未来だった。

鈴夢「これはどういうこと?」

響「見ての通りだよ?」

鈴夢「説明を要求する。」



鈴夢「で・・・飽きもせず覗きたんだよなあ・・・」

爺「それは大変でございますなあ・・・」

お風呂上がって時間は深夜・・・皆が寝てる時に俺たちはティータイムを取っていた  
鈴夢「なんで俺なんだろうなーいい人は必ず現れるのに・・・」

爺「・・・鈴夢様だからでは？」

鈴夢「は？」

俺が爺さんを見ると、爺さんはいつもの笑顔で答えてくる

爺「皆様それぞれ思いはあるかもしれないませんが・・・鈴夢様が、皆様の心に残る形で  
関わっている・・・あるいは鈴夢様の事が頭から離れないのでは？」

鈴夢「・・・女心はわかんないよ。いや・・・分かるうともしたくない。」

爺「鈴夢様・・・」

鈴夢「俺は実際には女というものが嫌いなかもしれない・・・女子はくだらん理由  
で群れるし・・・仲間を決めるし・・・嫉妬するし・・・ほんとにくだらないんだよ。で  
も・・・時には目を離せないやつもいれば・・・相手にしたくないやつもいる・・・俺  
たちとは大違いだな。」

・ ・ ・俺のくだらない愚痴に、爺さんはすこし悩んでしまう ・ ・ ・が、すぐに笑顔になっ

爺「そう思うのは、鈴夢様がどこかで迷ってらっしやるか ・ ・ ・あるいはどこかで信用しているからだと思いますよ。」

・ ・ ・俺は爺さんの言葉に少し、感動してしまう ・ ・ ・涙も出そうになった ・ ・ ・  
 ・ ・ ・この人ともう少し早く知り合いたかったな ・ ・ ・

鈴夢「 ・ ・ ・信用 ・ ・ ・ね」

爺「鈴夢様はツンデレですからね、素直になれないのでしよう?」

鈴夢「 ・ ・ ・どこがツンデレですか。」

しかし、ハッキリと断れない自分が ・ ・ ・すこし恥ずかしかった

爺「さて ・ ・ ・そろそろ寝ないとお嬢様に怒られますからね」

鈴夢「そうっすね ・ ・ ・」

俺たちはそう言うとかツプ等を片付け ・ ・ ・寝巻きへと着替える

爺「 ・ ・ ・では、また明日」

鈴夢「ええ。お疲れ様です。」

◇

朝目覚めれば・・・俺の布団は重たかった・・・いや、全体的に何か動きづらい・・・まじかよ。

俺は周りを見て・・・全て納得した・・・

全方向に・・・翼さんたちが引っ付いていたのだ。

鈴夢「・・・可愛いなあ・・・」

俺は起こそうとはしたが、恐らくいい夢を見てるのだろう・・・みんなから寝言が漏れる

翼「霧夜あ・・・そこ・・・」

奏「・・・んああ・・・鈴夢・・・逃げるなあ・・・」

クリス「・・・んー・・・鈴夢・・・可愛いな・・・」

主にこの3人。どんな夢を見てるんだ。

玲奈「鈴夢ー・・・って」

鈴夢「しー・・・寝かせてやろうぜ？」

玲奈「そうね・・・まあ、この場は譲ってあげるわ。」

そう言う玲奈は扉を閉めていく

俺は・・・

鈴夢「皆……これからもよろしくな」

俺は起き上がると、皆の頬に軽く口付けをして部屋を後にした……

◇

響「えーっ!これで行っちゃうの!?!」

突然そんな声上がる。

鈴夢「んあ?行つてなかったっけ?俺の演奏会。2日後なんだよな」

翼「霧夜……行くのか?もう少しゆっくり……」

鈴夢「悪い。今日行く予定です」

俺はそう言うときみんなからは不服の声が上がる……当然ちやあ……当然……なのかなあ

鈴夢「でもほら。必ず帰ってきますから」

奏「……事故るなよ?」

鈴夢「事故らねえよ」

そう言うとき俺は二課の緒川さん手配のへりに乗り込む

ドライバー「行きますか?」

鈴夢「おねしやす。」

俺が同意すると、ヘリが少しずつ上昇する

響「鈴夢くーん！頑張ってねー！」

鈴夢「・・・あいよー」

響の声を最後に・・・俺はこの地を飛び立った・・・

◇

ーおまけー

クリス「んあ!? 鈴夢が演奏会で飛び立った!?!」

未来「響つ! どうしてそれを言わなかったのよ!」

・・・私たちの部屋では寝坊した二人からの説教を受けていた。寝てた二人が悪いのに

響「私たちも知らなかったよお・・・ねえ? 翼さん奏さん」

翼「ああ・・・いきなり言われたからな・・・」

奏「いやー・・・全く知らなかったからな。」

私たちがそれぞれ反応を見せると・・・クリスちゃん未来から黒いオーラが出る

未来「・・・おし おき だね・・・」

クリス「だな・・・行くぜっ!」

そう言い、クリスちゃんはいチイバルを取り出す・・・つて!

響「クリスちゃん!ここでそれはダメだよ!」

クリス「うるせえ!昨日の続きをやるぞっ!」

未来はスタンガンを構え、奏さんと対峙する

奏「小日向・・・落ち着け」

未来「・・・ダメですよ?逃げたらさらに気絶させますからね?」

そう言いながらも翼さんたちに未来は容赦なく迫っていく。

翼「奏っ!何故こっちに来るのっ!」

奏「翼が何でもしますからっ!ほら!」

抵抗する二人に未来は・・・

未来「死刑☆」

最高の笑顔で答え・・・昨日の続きがここで起こった・・・

玲奈「うるさいわね!静かにしなさい!」

このメンバーで一番強いのは玲奈さんじゃないの?



## シンフォギアG編

## 新たなメロデー

## 少年の憂鬱

ー空港ー

『次の便はー』

『搭乗口はー』

多くのアナウンスが流れる中・・・俺たちは空港内を満喫していた

「はあくお土産も買ったし・・・満足だなー」

隣にいるのは俺の自慢の姉さんこと、雪音 クリス。

胸は大きいし、スタイルもいい・・・多くの男からしたら最高の美少女だ。

「そうね。なんだか家族のような気分も感じるわ」

さらにもう片方にはこちらは俺と同じ仮面ライダー・・・ノイズこと新海 美月さん。

新海さんも胸は大きく・・・しかも髪は紫・・・つて。可愛いなおい。んでもってス

カートじゃなくてジーンズか・・・アリだな。

あつ、俺の名前は霧夜 鈴夢だ。よろしくな。

で、今は東京に帰ってきたのだが・・・

「ああ・・・空気が暑いな」

「同感。このままだと潰されちゃうわ」

「元気ねえな・・・ったく。何時になつたら帰れるんだよ」

俺たちは空港を後にし・・・外に出る・・・と。

「鈴夢さん。クリスさん。美月さん。おかえりなさい」

黒い車と共に、緒川さんが出迎えてくれる。

「お久しぶりです。緒川さん」

「ええ。立ち話もなんなのでどうぞ。」

そう言い、緒川さんは車のトランクを開け、荷物を入れてくれる。

姉さんたちの荷物も、同様に、違う黒い車に入れる

「さて・・・二課までお願いします。」

「わかりました。おまかせください。」

そう言う俺たちを乗せた車は二課へと向かい・・・走り始めた・・・



「あー．．．鈴夢がいなくてだるい。」

二課の司令室はものすごいだるけに誘われていた。

理由はフイーネ異変のごだごだと、後は鈴夢たちの連絡だった．．．だって、翼が

ー「霧夜の声が聞きたい。」ー

とまで言い始めるのだ。これには二課のメンバーも．．．後輩達も苦笑いである

「全く．．．鈴夢はいつ帰ってくるんだ？」

このまま行けば．．．恐らく翼は精神おろか．．．身体まで壊しかねない。

なんとかして鈴夢を取り戻さないと．．．と、思っていると

『奏でさん？お久しぶりです』

「！れ、れ、鈴夢!？」

『れーが2回多いですけど、どうかしました？』

私は突然、通信越しに彼の声が聞こえたのでびつくりした。

「い、いつ帰ってきたんだよ！」

『今日だよ．．．まったく。時差が狂いそうだったよ』

「まったく．．．帰ってきたら言えよ？翼が壊れかけてたぞ？」

俺がそう言うとな彼は少し悩み

『うーん．．．まあ、しょうがないか。わかった。後でフォローするよ。』

「サンキューな。私たちがじゃ手も付けられず……ずっと負のオーラ纏わせてたからさ……」

『翼さんらしいな』

「らしくないよ。あん時とは大違いだ。」

私がつめ息をつくつと、彼は

『幸せ逃げちゃうよ?』

「やかましい。」

私は通信を切り、翼に連絡を入れる

「翼。鈴夢が帰ってきた、早く二課に来いよ」

『なんだと!? わかった! 待っててくれ!』

翼の方から連絡を切り、私は緒川さんの車の現在地を調べる

「……あと少しで来るじゃん……」

私は席を立つと……司令室を後にした

◇

「こちらです。」

俺たちを乗せた車は無事、二課へと到着した。

「どうぞこちらです。」

「ありがとうございます。……ほら。姉さんたちも降りる。」

「うー……鈴夢……」

「霧夜くんは暑くないの……?」

……暑い? そう言えば……

「そんな季節なんですねえ……」

「まあ、慣れるしかありませんね。」

「黒服の皆さんは慣れてそうですもんね」

俺が冗談気にそう言うと「プロですから」と笑顔で返される……緒川さんはプロと  
言うより忍者のような気がする。

しかし、本人の前で言うのと怒られそうなのであえてスルー……俺は二課へと入る……  
が

「霧夜っ!」

「ヒラリ。」

予想通り、二課へと入ると俺に向けて弾丸（翼さん）が飛んできたので回避。

回避された翼さんは二課の扉を蹴り、再び俺へと突撃してくる

「霧夜っ！避けるな！」

「避けるわ。それこそいろいろ危ない気がする！」

俺は避けようとしたが後ろから誰かに抱きしめられる

「鈴夢・・・捕まえたぜ？」

「・・・っ。奏さん！」

俺は動けなかつたので案の定、翼さんにも抱きしめられる

「おかえり・・・霧夜・・・」

「・・・抱きしめてなければパーフェクトだったのに。」

俺は動けず・・・数分・・・ようやく姉さんたちが二課へ入るが

「っ！先輩っ！鈴夢は私のだ！離せっ！」

「霧夜くんは私のよっ！譲ってもらおうわ！」

二人は勢いよく、二人を引き剥がそうとするが二人はものすごい力で離れようとはしない

「・・・誰が離れるものかつ！」

「譲れねえな！ここは私たちのだ！」

四人でゴタゴタとやってるから、俺はその隙に脱出する。

さして・・・

「緒川さん。行きましようか」

「いいんですか？」

俺は後ろをチラ見しこう言う

「灯台もと暗しですよ。手元足元が見えてないんですよ。」

そう言う俺たちは二課の司令室へと歩き出した

◇

・・・司令室・・・

「おかえり鈴夢くん。」

「鈴夢くん！お久しぶり！」

「成長したね？お久しぶりです」

司令室に入るなり、皆さんからコールを受ける・・・俺は

「ただいま」

と、軽い一言を交わすと・・・椅子に座り込む

「はあ・・・コンクールやら、批評会やらで疲れた・・・」

「そんなものですよ。鈴夢くんならやれると信じてます」

「ママやな。」

「ま、ママ!？」

あおいさんの包容力はどこか母性を感じる気がする・・・気のせい?それでも甘えてしまうのは本能だ。

「はは、鈴夢くんがいると飽きませんね」

「人をトラブルメーカーみたいに言うのはダメですよ。」

「いや、みんなの本心が暴かれて楽しいという意味ですよ。」

「・・・変わってなくね?」

俺はそう言いながらもあおいさんの膝に身体を預け、横になる

「あー・・・癒されるんじやあ・・・」

「はあ・・・鈴夢くんは子供なんですな」

「永遠に子供がいい。働きたくないわ。」

俺があおいさんたちとじゃれあっていると、司令室へと翼さんたちが入ってくる

「・・・あおいさん?何故鈴夢を・・・」

「・・・クリス。やることはわかっているね?」

「当たり前だ。血祭りにあげてやる」

そう言い、翼、クリスの二人はそれぞれ天羽々斬とイチイバルを構え・・・奏さんは



何故か槍を手に持つ……って、どこから出したんですか。それ「ちよつと……落ち着いてくださいよ！」

しかし、あおいさんの静止は虚しく、三人はジリジリと迫ってくる……ダメだ。完全に殺意が湧いてやがる。

仕方なく俺はあおいさんの膝から離れ、三人に向け

「……怖い。」

一言告げると、みんなから負のオーラが消える

「き、霧夜……これは違うんだ……」

と、翼さんから見苦しい言い訳。

「れ、鈴夢……わかってくれ。これは違うんだ」

「違うかい。完全に武装しようとしてたでしょ。」

「……やつちまつたねえ……」

それより反省点無しの皆さんに俺はガツカリだよ。

……しばらく沈黙が続くと奏さんが「あつ。」と何かを思い出したかのように言葉を発する

「そう言えば鈴夢に話があるんだわ。」

「……なに？」

「ああ……それが……」

「……ん？もったいぶって言うことか？」

俺が躊躇うみんなに言葉をかけようとする

「いや、俺が説明しよう」

と、弦十郎さんが出てくる

「で、なんですか？」

「……実は今週中に翼が、外国の大物アーティストと、コラボしてライブをやることになってな……」

で、なんで言いづらいんだ？

「そこで翼が鈴夢のことを言ったところ……」

「ここまでは良かった……だが、次の言葉で俺は驚愕してしまった

「……霧夜 鈴夢に合わせろ」と言われたんだ」

……俺は……どんな顔をしてたんだろう。

◇

……まさか彼に会えるとはね

私は未だにあの時の会話を思い出していた

—————

「翼さん。落ち着いてください。」

コラボ相手との打ち合わせ中・・・突然、青髪の子・・・風鳴翼だったか・・・彼女が自己放棄したかのように壊れ始める

「ダメです！緒川さん！合わせてくれ！」

「落ち着いてください！彼は今、別の戦場にいます！翼さんはここで打ち合わせで！予定が合わないんですよ！」

「離せっ！離さなければ切る！」

・・・私と、私の妹・・・セレナ・ガデンツアヴナ・イヴは呆れていたし・・・恐らく周りのSPの人達も呆れていた・・・だが

次の言葉で私の意識はそちらに持っていかれた・・・

「霧夜に！霧夜に合わせろ！」

・・・霧夜・・・？もしかして

「それは・・・霧夜 鈴夢のことかしら」

私の言葉に・・・彼女の鋭い眼光がこちらを見る

「貴様！霧夜を知っているのか！」

「貴方こそ！知っているのね．．．」

—————

この一連の騒動のおかげで、今週、前日辺りに再び打ち合わせと、彼に会えるらしい．．．つまり。

「．．．再会できるのね。彼と」

私は心に秘めたドキドキを．．．上手く表現出来なかったが．．．

「．．．彼と会って．．．お礼を．．．」

私はそう言い、歩き出す．．．

誰も知らない．．．この出会いが．．．新たな争いを産むことを．．．

## 第一詞 桃の歌姫と銀の少年

・・・まったく・・・なんで俺は

俺は誓たちにもタイミング悪く・・・会うことは出来ず、翼さんの付き添いで、打ち合わせに行くところだった

「霧夜が一緒・・・」

「はあ。誰だよ。翼さんをダメ人間にしたやつ。」

・・・俺だったか？いや。ありえないありえない。

さて・・・今日は弦十郎さんに言われたように・・・翼さんのコラボ相手・・・翼さんいわく「桃の歌姫」と会える日だ・・・

どうも外国では大物アーティストらしく。下手な態度はとれない。

さて・・・どうしよう。

今は会議室なところで待たされているが、俺は緊張していた。

「・・・どうすればいいんだよ。」

俺がむしゃくしゃしているうちに、扉が開き、そこから緒川さんが来る

「どうぞ。お入りください。」

そう言い、三人の女性が通される

「……？あの人は……」

初めに入つて来た……銀の人には身に覚えがあつた……誰だつて？

あつ。そうだ。

「ええつと……初めまして……今回、風鳴翼のマネージャーとして何故かお呼ばれされた霧夜 鈴夢と言います。よろしくお願いします。」

俺はそう言うと言儀に頭を机に着くか着かないかのギリギリの所まで頭を下げると……

不意に机と俺の顔の間に手が置かれる……ん？

俺が慌てて上を見ると、桃の歌姫が……手を伸びていた……

「……あなたのことは知っているわ……それこそ私は忘れたことは無いもの……あの時以来……あなたのことしか考えていなかった……どんなときも……そしてマムに聞いてみればあなたは大物の演奏者……しかも世界的なね……私はあなたの演奏会には全部……私の家族と行ったわ」

……俺にはこの人が何を言ってるか分からなかった、ただどこの人も異常なのはわかかった。

「それでもあなたには会えなかったわ。直ぐにどこかに行つてしまうもの……だけどこ

うして会えた・・・私はこの日を大事に・・・そしてあなたに伝えたいことがあるの。」  
そう言うのと彼女は席を立ち、俺の隣まで来て・・・

「あなた・・・私たちと共に来ないかしら」

・・・このセリフは・・・意味がわからなかった。

「なんで？」

「・・・あなたが欲しいのよ。切歌や、調もきつとあなたを受け入れるわ・・・」

「・・・しらね。」

とりあえず、話が脱線しそうなので、俺はこの人を座らせ・・・自己紹介してもらおう

「私はマリア・ガデンツァヴナ・イヴよ。」

「妹のセレナ・ガデンツァヴナ・イヴです。そしてこちらがママよ。」

「おっけ。あなたは技術者か何かで？」

「・・・ご想像におまかせするわ。」

・・・とりあえず一通り挨拶を終え・・・さて・・・

「話をしましょう。」

俺の言葉で・・・会議が・・・話し合いが始まった。



・・・はあ・・・終わった・・・

・・・俺は会議を終えると・・・自販機の前まで来ていた。

翼さんたちは今頃ステージの下見だろう。

俺が一人・・・ジュース・・・いや、コーヒーを飲む・・・その時だった

「あつ！鈴夢さんデス！」

「鈴夢さん！」

「んあ？」

俺を呼ぶ声があるので、そちらを振り向くと、少女が二人・・・俺の方に向け突進してくる・・・つて。

「だーいつぶー！」

「げぼぼあ!？」

片方のフードを被った少女が俺に向かって突撃し、みごと俺の鳩尾に直撃する・・・もう片方のツインテ少女は、静かに俺に俺に抱きついてくる

ちよ！これってロリコンで訴えられるパターンや！

くそつたれ！どうにかしてどけなければ！

俺は必死に抵抗するが、少女たちは絡みつくようにして俺に抱きついてくる



「マリアの言つてた通りデス！優しいし．．．力強いデス！」

力強い!?俺がこれならこの子達はどいう力してるの!?

「．．．はあああ．．．いい匂いだあ．．．ごろごろしたい．．．」

ツインテの子は何言つてるの!?!意味不明、不可解、理不尽過ぎないか!?

「とにかく離れてくれない!?!このままだと俺死んじゃうよー!」

あかん．．．意識が．．．

「．．．ああ．．．生まれ変わったら．．．悟りを．．．開きたい．．．」

「切ちゃん．．．鈴夢さんが」

「ふえっ!?あつ!れ、鈴夢さん!?!大丈夫デスか!?!嫌デス!死んじや嫌デス!」

「．．．やりすぎたかな．．．」

．．．俺つて死んだ?



―三途の川―

あー．．．ここどこですか?

俺は身に覚えのない川にて、目を覚ました．．．そして

「おっ。死人か？早くこっち来いよ。生き返れないぞ？」

そう言われて前を見る・・・そこには

ー〈地獄行き〉ー

死にたくねええええっ！

「どうしてこうなつたあああああ!?!」

・・・よかつた！目を覚ませた・・・生きてた！

「おかえりっ！俺の体っ！・・・ぐはっ!?!」

俺は気づけば布団で寝かされており・・・生きてたことを実感すると俺は布団でごろごろし、さらには落下する

「・・・いててて・・・腰痛が・・・」

思いつきりぶつけてしまった腰を撫でながら・・・俺は立ち上がる・・・

「鈴夢っ！無事なの!?!」

そんな叫び声と共にマリアさんが入ってきて俺を抱きしめる・・・ん？

ちよ、マリアさんの胸が・・・っ

マリアさんの胸は大きく・・・弾力があるって・・・っ！

「ん〜！ん〜！ん〜！」

「ごめんなさい！切歌たちが！」

謝るぐらいなら離してください。

俺は手を振り回し、抵抗するが・・・

「ああっ！んっ！」

ダメだ。手が届かねえ・・・それどころか身長差のせいでマリアさんの・・・大事なところにクリーンヒットしてしまう

「れ、鈴夢う・・・そこはだめ・・・」

「・・・んー・・・ん・・・」

俺がダメだ。これは・・・

「・・・え？鈴夢!?鈴夢！」

・・・ダメだ。今日は二度も意識を落としちゃった☆



・・・ああ・・・今日はだるかった。

寝てる記憶しかないが。なんとか桃の歌姫との打ち合わせを終えることが出来た・・・  
そして。

「いよいよ明日か・・・」

翼と、桃の歌姫とのコラボライブはどうとう明日なのだ……

……下手に失敗させたくもない。

そう思いながら、俺が帰り道歩いていると……

ふと、後ろに違和感を感じた。

「……? 誰もいないよな?」

俺が後ろを向くと、気配は消えるものの……俺が歩き出すと気配を感じる……

「……くそつ。誰だよ……」

◇

「……はあはあはあ……彼の帰り道……そして、家の在処……」

私は彼の帰り道の跡をつけ、とうとう家の在処へ辿りついた

「調と切歌に発信機付けさせておいて正解ね?」

……セレナにはこの位置をパソコンでマークしてもらっている。問題ない。

しかし……彼の家は普通なのね

彼の家はアパートなのだが……よく見れば普通の人なら選ばない部屋を選んでいる。

「……彼は地味なのが好きなのかしら?」

・・・にしても彼の家を見つけたのは大きい。  
ふふふ・・・これからいつでも彼の元に行けるわね・・・  
しかし。次の日に彼らが敵になることを誰も予想してはいない・・・



・・・さて・・・朝になったな

とうとうライブの日。俺たちは着替えていた

俺はいち早く二課へ行き、黒いスーツに身を包んでいた。

・・・ってこれ似合うかなあ？

「これって似合いますかねえ・・・？」

と、俺の疑問に

「大丈夫ですよ。似合ってますよ？」

と、緒川さんに疑問形で返される。

「・・・でも、先に会場入りしてもいいんですかね？」

「大丈夫ですよ。私たちはあくまでも護衛・・・つまりはSP扱いですからね。」

「なるほどね？」

と、俺が答えると、俺のスマホに着信がある

〈立花 響〉

今日ライブ行く!?

帰ってきたみたいだから一緒に行こうと思って!

・・・いい子だな。

俺は「ライブ会場の裏側にいるから会う時は連絡してくれ」と返し、改めて前を向く

・・・俺たちを乗せた車はライブ会場へと走る・・・

今日・・・この日に俺たちが争うことになるなど・・・誰も知らなかった・・・

## 第二詞 黒いガングニール

・・・ライブ会場は人でいっぱいだった。

会場が開く一時間前でも既に人が並んでおり、長蛇の列を作っている。

「凄いですね。」

「さて・・・こちらです。」

俺は緒川さんに通され、従業員用の廊下を通り、待機室へと向かう・・・

「翼さんたちはこちらに？」

「ええ。まあ、入ればわかりますよ。」

ん？躊躇いがあることか？では・・・

「お邪魔しやーつす。」

俺が部屋に入り、扉を閉めて顔を上げるとそこには

「霧夜か？すまない・・・背中まで手が届かなくて・・・ブラを外してはくれないか？」

「鈴夢？私もお願いしていいかしら？」

「・・・なんつータイミングだよ。」

グツドじゃねえよ。これはバッドタイミングや。



「霧夜・・・ありがとう・・・」

「ありがとね？お礼にマツサージをするわ。」

「・・・お胸が当たってるけど？気にしろよな？」

俺は何故かアーティスト二人にマツサージをされると言う下剋上みたいなことをさせてしまっている・・・これでは緒川さんに見つかつた時になんて弁解すればいいか。

・・・まあ。これはこれで楽だからいいけどさ？

俺が転がりながらマツサージを受けているとその時間が来る

「・・・悔しいけど・・・時間みたいね？」

「そうだな・・・」

そう言うと二人は名残り惜しそうに俺から離れる

「・・・ありがと。おかげで元気でたわ」

「・・・ボディーガードよろしくね？優秀なガードマンさん？」

「・・・エスコートぐらいこなしますよ？こちらです。お嬢様方？」

俺は二人の先に行く形で歩き出し・・・会場へと急いだ・・・





・・・その裏では・・・二人による取引が行われていた

「・・・ではこちらですか。」

「ええ。あとのことはお願いします。」

私たちの目の前にいる人はウエル博士と呼ばれる研究者だ。それも世界的な。

私たちは彼に、アタッシユケースに入った聖遺物“ソロモン”を渡し、その場をあとにする

「あー・・・疲れたー・・・鈴夢がいたらなあ・・・」

「ほんとにそれね。霧夜くんがいればこうはならなかったわよねえ・・・」

・・・私たちはライブ会場に歩きながら、そんなことを考えていた。

「てか、なんで今頃コラボなんだ？」

「・・・知らないわよ。私に聞かないで？」

そう言っていると、会場の方の盛り上がりが強くなる

「・・・すごいわね？」

「だな。私たちまでやけどしそうだな。」

私たちはやけどをしない範囲でライブの熱気を感じ取っていた・・・外には  
「おっさん?」

「ん? クリスくんたちか・・・取引は終わったのか?」

「なんとかね?」

・・・そこには二課の司令官・・・風鳴弦十郎が立っていた

「おっさんこそどうして?」

「・・・監視だ・・・すごい嫌な予感がしてな・・・」

私たちには分からなかったものの・・・絶望の時間は刻一刻と迫っていた



今、ライブ中・・・

ステージ上の二人は「不死鳥のフランメ」を熱唱している

俺はその様子を脇の控えから見ている

「・・・すげーな。」

ただ、それだけの言葉。しかし、この言葉にも俺なりの思いが含まれている・・・

「・・・プロって凄いなあ・・・なあ? 相棒。」

俺は腕時計に収まっている相棒に話しかける

『そうだな。でも、二人もどこかでお前と同じ気持ちだろうよ』  
「だいたいけど。」

と、俺たちでやり取りをしていると、ライブ会場の熱気は最高に達する

俺は思わず耳を塞いでしまうが・・・それほどの熱気だと言うことなのだ

「すごいなあ・・・」

『こんなのやってたら頭がシユークリームになっちまう』

「・・・そうだな。」

そうして、翼さんと、マリアさんによる感想と・・・あいさつのはずだが・・・

『突然だけど・・・人質になってくれるかしら』

そう言うのと突然会場に身に覚えのある生物が出てくる・・・あれは！

『ノイズだっ！間違いない！』

「なんでっ!?!」

俺は躊躇いながらも、ベルトを起動させようとするが

『ダメだ！ここでは変身出来ないっ！』

「っ！じゃあどうすれば!」

俺達が言い争う中、俺の首に鎌が置かれる

「っ……君たちは……」

「ごめんデス。だけどマリアのお願いだから……」

「……ごめんね。でもしようがないから」

「……っ。」

俺はこの前の子達に捕まり……事態は最悪のものとなっていた

◇

―二課―

二課でも状況は同じだった

「っ！ノイズの出現を確認！警戒レベルを最大の手前まで引き上げます！」

「おっさんとの回線は!？」

私が指揮を執る中、二課に残っている二人はそれぞれ出来ることをこなしていた

「ダメです！強力なジャミングです！通信途絶！」

「おまけに装者たちとの連絡もとれません！」

「ちっ！こんな時につ！」

私が舌打ちしたタイミングで、モニターに音声通信が入る

『こちら美月!どうしたの奏!』

通信の相手は新海 美月であり、彼女は状況からしてどこかへ急いでいた・・・

「美月か!状況だけ伝える!いいか!?!現在、翼たちのライブ会場にてノイズの出現を確認した!数は不明!また、内部から聖遺物の反応もある!」

『それが翼たちじゃないの!?!』

そう言うとは私は会場のモニターを見て

「その可能性も否定出来ない・・・でも、戦ってるならノイズの数は減るはずなんだよ・・・」

・・・私がそう言うとは美月は

『わかった!会場に向かう!』

「気をつけろ!中に入ると通信が届かなくなる!」

『了解!』

私は通信を切ると、再び二人に指令を出す

「二人とも!ライブ会場周辺にバリケードを張るように手配してくれ!」

「了解!」

私たちはできることからこなしていくことを決めた・・・



・・・つ、最悪の状況だ。

俺は変身出来ず、二課側からも通信がない

そして俺は

「調、しつかりと見張ってるですよ」

「切ちゃんこそ、しつかりね」

なぞのぼしよに監禁されてます

「何これ、ここ知らないけど、何？アル○ウス大量にゲット出来るん？」

「あ、アルセ○スデスか!？ちよ、ちよつとそれは・・・」

「モンス○ーボールならあるけど」

そう言い調ちゃんを取り出したのは古いマツクのハッピーセットのやつ。

ちなみにDPの時だったかな・・・マツクのハッピーセットで真面目になんかスロツトマシーンの感じのモンスターボール（大きめ）を貰って全種類コンプリートした覚えがある（作者談）

ボールのスイッチとなる部分を押すとそれぞれの属性のマークが回り始め同じマーク（片方が草ならもう片方も草）って感じで揃えなければならぬのだ。

昔はこれでよく遊んでた（作者談）

「つて！これ違う！俺が欲しいのはオー○ド博士のピカチュウ入ったやつや！」

ピカチュウ専用のモンスターボールなんてのもあるらしいけど誰か知りませんか？

(・・・)

その場の空気が和んだところで俺は話を変える

てか、知ってたんだポケ○ン

「ここから出してくれない？」

「断るデス。これはマリアの遺言なのデス」

「それ死んでるぞ節子」

・・・この子達は翼さんたちと同じく、シンフォギア・・・『鎌』と、あと何？

もう片方の・・・名前覚えた子、調ちゃんのシンフォギアはなんですか？

そんな細かいことは置いといて、俺は話を続ける

「君たちが今・・・何をしようとしているのか！本当にわかってるのか!？」

「・・・この世界には偽善者が多すぎる・・・」

「だからつて！こんなのは反逆だ！自分たちは正しいと思っても！世界からの敵になる

ぞ！それでもいいのか!？」

「っ！だけどっ！」

「こんな事をしてっなんになるって言うんだっ！こんなご事をしてもっ！何も戻りはし

ないっ!」

「黙れっ!!」

調ちゃんが叫んだと思うと、彼女から刃が飛ばされる

「っ!ノコギリ?」

「・・・あなたはマリアが気に入ってるからだけど・・・本当ならここで殺したいっ・・・」

「・・・」

俺は静かに腕時計になつてるトイに命令する

ー次で変身するー

この部屋なら、人々の目はない。安心して変身できる

『了解』

耳のイヤホンに聞こえたのはそんな些細な言葉。

「だけどっ・・・マリアがっ・・・笑顔になつてくれるからっ・・・私は!」

「調!落ち着くデスっ!」

泣き崩れる少女を抱き抱えようと走る子・・・それはまるでお互いに必要とし、互いに支えあつて生きていくようだった

「変身!」

『オツケー!レツツビーイイト!』



俺がその瞬間に叫び、トイが続けるように叫ぶ  
その声に反応した少女たちは、急いで構えるが

「遅いっ！」

『チェンジ、メロディー！ビーイイト！

始まるメロディー！ 奏でるリズム！

LET'S GO!!!

仮面ライダーアアアビーイイトツ！』

俺は白銀の戦士に変身し、彼女たちの刃を振り払う

「鈴夢さんっ！」

「すまないっ！俺にはやるべき事があるんだ！」

俺はそう言うのと会場へと乗り出すために拳を壁にぶつける

「爆裂っ！」

拳が壁にあたると、見事に各部屋を貫き、会場までの道ができる

「行くぞっ！この音が開戦の合図だっ！」

俺は走り出し、会場まで一気に飛び出た



私は友人の未来と一緒にライブに来ていたけど……

「響！ノイズが！」

「落ち着いて！私たちは『人質』なんだよ！逃げられない！」

そう、私たちは人質と言う立場に立たされたのだ

突然、ステージにいた人、マリア・ガデンツァヴァ・イヴの発言により、私たちは悪の立場に立たされたのだ

解放されることは恐らく無いと思ってい

「翼さん……」

ステージ上の翼さんも、迂闊には手を出せないようで、混乱している

「鈴夢くん……私……どうしよう」

その時、私たちの下で大きな爆発が起きる

「何?!地震?!」

「わからない！一体何が!?!」

そう思い、ステージを見ると、ステージに白銀の戦士が現れた

銀の戦士が現れると、近くにいた人が呟く

「おい……あれは仮面ライダーじゃないのか?」

「ああ……俺達が子供の時に憧れた……」

「仮面ライダーだ！」

その時、その人たちを中心に、周りの人達が銀の戦士を応援し出す

「頑張れ！」

「負けるな！」

そんな短い言葉だったが、銀の戦士はそれに応えるように拳を横に突き出す

「鈴夢くん……」

今、私たちの希望が、悪を打ち砕くべく、戦い始めた



「……あなたは？」

私は突然現れた白銀の戦士に問う

「……誰だと思う？ まあ……知れば戦う気など無くなるがな」

私は背筋に寒気を感じた……何故なら「私は彼の声を知っている」からだ。

「……まさか……」

「そのまさかなんだよな」

そう言うとは彼は剣を構える

「さて……この人たちを解放しろ。そうすれば……何とかしてやる」

優しさを含んだはずの彼の言葉は、私にはほとんど脅迫に近い形で聞こえた

……私たちは負けられない。

私は歌う……黒き槍の歌を

次の瞬間、私を黒い鎧が包み込み、私は降り立った

「……」

「黒い……ガングニール……」

私は槍を、彼は剣を構え……戦いが始まろうとしていた

### 第三詞 新たな敵その名は “フイーネ”

ステージ上では二人の戦いが始まっていた

「ふんっ！せいっ！」

白銀の戦士は剣を振るい

「やあっ！はああっ！」

黒い女性は槍を振るっていた

お互いの武器がぶつかると、金属音に近い音が響き、火花が散る、しかし、彼らはそんなことを気にせず、ぶつかった後も、お互いに武器を振り続けていた

「鈴夢！あなたは どうして戦うの!?!」

「っ！決まってるだろ！お前らみたいな奴を止めるためだよっ！」

当たり前の質問に当たり前の答え・・・当然だ。彼らは信じるものがあるから戦っていたのだ。

しかし、黒い女性は銀の戦士の攻撃に少しずつ押されているようだった

「っ！パワーが違う!?!」

ビートのノーマルスタイルは決して力がある訳では無い。

力なら響のガングニールの方が上だし、機動性も翼の天羽々斬が勝っている

ノーマルスタイルは万能の塊であり、なにかに特化している聖遺物に勝てるものではないのだ。

つまり、彼女を押ししている理由は彼の努力と実力・・・さらには思いの強さである

「このまま押ししてやる！」

彼は剣を振るう手を止めず連続して振り続ける

「くっっーん！ん！」

彼女は押されながらも、槍で剣の攻撃を的確に防いでいる

しかし、均衡が破れるのは以外と早かった

ギイーン

彼の剣が、彼女の槍を吹き飛ばしたのだ

「っーギアが！」

彼女の槍が大きく飛んだ後、後ろに突き刺さる

「決まったな！」

「・・・しまった・・・」

彼は素早く、腰のスロットにメモリを差し込む

『ファイナルドライブ！ビーイイトツ！！』

彼はアームドギアを起動させると、空を舞い

「はあああああつ!!」

上空から彼女を目掛けてライダーキックを喰らわせる

「っ!」

「これでっ! 終わりだアアアっ!」

これで終わる・・・そう思った時だった

彼の蹴りが彼女を襲う数秒・・・彼に斬撃が直撃する

「切歌っ!」

「マリアっ! 無事デスかつ!」

斬撃が飛んできた方を振り返れば、聖遺物に身を包んだ切歌、調の二人がいた

「やっ! と間に合った」

「鈴夢さん・・・今は許さないデスっ!」

彼の方を怒りを含んだ目で見ると二人・・・しかし

「っ!?! いない!」

「どこに消えたデス!?!」

確かに直撃させたはずの彼の姿はそこには無く、どこかへ消えていた

「よく探すデス! まだ近くにいますはずデス!」

「……地上にはいない?」

地上にはいない。その言葉に反応した二人が上を見れば、そこには既に彼が、紅い姿で……手にガトリングを持ち、こちらに照準を向けていた

「弾幕だつ!受け取れ!」

彼はそう言う、ステージに向け、引き金を引き、大量の弾丸を放つ

地面に弾丸が着弾すると砂嵐のように砂煙が舞い上がり、彼女たちの視界を奪う

「くっ!目くらましなんて!」

「こんなの!どつてことないデス!」

彼はガトリングを収納すると、地上へ降り立った



……俺は会場へ降り立つと疾走する

まずは緑の子。

その子へ肉薄すると、俺はまず投げ飛ばす

「つ!?!きやあああつ!?!」

可愛らしい声を上げ、飛ばされるが敵だから関係ない。



俺はそのまま空中に上げるようにアッパーを繰り出す  
「ぐはっ!？」

緑の子は吹き飛び、次の目標はツインテの少女。

その子に近づき、俺は足蹴いをしかけ、転ばせる

「いつの間!？」

そのまま俺は肘を鳩尾付近へと叩き込む

「ああっ!」

気を失ったのを確認し、俺は最後・・・黒い女性へと疾走する

「せえええいつ!」

「鈴夢!?! あっ!」

そのまま俺は滑るかのように接近し、彼女を打ち上げたあと、剣で切り刻んでいく

「最後っ!」

俺は最後の一撃と言わんばかりにかかと落としを喰らわせ、地面に衝突させる

「・・・終わったな」

三人とも瀕死になったのを確認し、俺は手を払う事で・・・戦いを終わらせた・・・

◇

・・・情けないですね・・・

会場の様子を、一人ドローンで見ていたのは先程「ソロモン」回収したウエル博士・・・こと、ドクター・ウエル。

彼は会場の様子をドローンで監視していたが。三人の装者がやられたのを見て、ため息をついた

「・・・まあ。改良の価値があるからいいですが。彼は面白いですね。」

聖遺物とは違う、別のもの。

さらにはそれに答えるかのように動く少年の存在が彼の好奇心を煽っていた。

「・・・彼が都市伝説の仮面ライダーですか・・・一応テレビでも見ましたが・・・生で見れるとは驚きですね。」

彼はコーヒーを飲み干すと、席を立ち、ケースからソロモンを取り出す

「そろそろ頃合ですか。引いてもらいましょう」

◇

ウエルが杖を起動させると同時。突然、空のノイズが彼女たち三人の身体を持ち上げ運んでいく

「！ウエルからなのね」

「っ！待ってっ！逃げるな！」

俺は大地を蹴り、飛翔しようとするが、身体が限界を迎えたのか、その場に膝を着いてしまう

「しまった！」

「鈴夢！」

彼女に呼ばれ、俺は空を睨む

「私たちはフィーネ……その残党みたいなものよ。」

そう言い残し、彼女たちは去っていった

俺は……彼女に言われた言葉をただ受け止めれずにいた



「ノイズの反応消失！敵側の装者たちは逃げた模様！」

「……そうか……死者とかの報告は？」

私がそう言うのと、あおいさんからは「死者はいません。怪我人もです」と、奇跡的な言葉が帰ってくる。

「・・・よかったあ・・・翼たちとは？」

「回線繋がりました。音声出します。」

朔也さんがそう言うのと音声だが、翼との連絡が繋がる

「翼！そつちは無事か!？」

『ああ！私たちは無事だ!』

どこか安堵の息を二課のメンバーが漏らす中・・・別の声が聞こえる

『奏さん？お疲れ様です』

「鈴夢か!?!大丈夫なのか!?!」

その声とは霧夜 鈴夢本人の声であり、彼は疲れた声ではなく、いつもの営業声で、答えってくる

『なんとか・・・ですが装者を逃がしました・・・すいません』

「気にすんな。無事ならそれでいいさ」

私がそう言うのと、彼は『後片付けがあるので失礼します』と通信を切る・・・二課には静寂が訪れる

「・・・何が目的なんだ？」

私は敵の目的が分からないことに、少し不安を覚えていた



あれから事故処理が終わり。彼は疲れた身体を癒すために……何故かスポーツジムへと来ていた

『あれから数時間が経ちますが如何もんでしようかね』

「……知らないよ。」

俺は身体を動かしながらも、相棒の質問に答えていた

『てか、あれから数時間動きっぱなしだけど大丈夫か?』

「……大丈夫だ。あれから弦十郎さんにも鍛えられてるからな」

俺の身体は昔とは違い、筋肉付きが弦十郎さんに近づいていた、決して弦十郎さんを目標にしてる訳では無い。

しかし、これもこれでいいと思っていた

「……マリア……か。」

『気になるのか?』

「そりゃあね。昨日まで味方みたいだった人が突然敵になるんだ。びっくりしたよ。」

『昨日の友は今日の敵ってか？面倒だな』

「そういう世界だ。気にしてないよ」

そう言う俺はタオルで汗を拭き、持ってきた自家製のお茶で喉を潤す

「・・・続けようか。」

そう言う俺は次の機器へと歩き出すが

「霧夜。時間はあるか？」

突然なのか。偶然なのかはわからないが。翼さんに引き留められる

「・・・あるけど。」

「そうか・・・なら・・・で・・・その・・・」

「ん？」

「デートをしてくれないか？」

あれ？デートってお出かけだよな？

◇

・・・俺は着替えながら、翼さんのお出かけのことを考えていた。

・・・デートなあ・・・確かに響の時は何回か一緒に行っただけどさあ・・・翼さんと

なると話が違う。

なんだろう・・・響が友達なら翼さんは大人のお姉さんなのだ。

対応をしつかりせねば。

そう思い、普段着のパーカーを羽織ると俺は外へ出る

「・・・いたいた。」

俺は翼さんを見つけ、近寄るが・・・

む。どうも人の視線が刺さるな

当の翼さんに視線が集まるせいか。少し近づくだけでも視線がこっちに向いてしま

う

翼さん歌手だからなあ・・・有名なんだよなあ。

俺が行くのを躊躇っていると、翼さんがこちらを見つけ、近づいてくる

「霧夜、着替えは済んだか？」

たくさんの視線の中で、翼さんと話すことは、下手したらスキャンダルになりかねな

い・・・気をつけねば。

「ああ。行くうか」

俺がそう言い、歩き出すと翼さんは手を握ってくる

「っ!？」

「……どうした？嫌か？」

「……いや。別に……」

「では行こう……ちやうど昼食を食べに行こうか」

そう言うと俺たちは心当たりのある店まで手つなぎで歩き出した……

その時の嫉妬の視線は……気にしなかった



## 第四詞 自然の声。少年の存在

場所を移して、とある喫茶……そこでは二人の睨み合いが始まっていた  
「来るの遅せえよ。ああん!」

片方はやや古めのイケメン。

「うるさいなあ……来たからいいでしょ?」

もう片方は今のイケメン。

二人のイケメンがぶつかっていた

「全く……死んだと思っただぞ?ちゃんと葬儀のことも考えててなあ……」

「誰が死んだんだよ……それならちゃんと遺言書いとるわい」

「こちらとお前に捧げる手紙まで書いてつたのだぞ!?俺の感動を返せつ!」

「黙れつ!死んだと思う方が悪いんじゃない!それとそれだと喜んでるからな!」

「うるせえ!さっさと働け!」

「バイト辞めたんじゃないやなかったつけ!?俺って!そこんどどうなんですかねえ!」

「じゃあさっさと死ね!」

「なら表でろやあ!」

「やっつたろか!」

元バイトと元店長が言い争いをする中、店内はその続きを楽しみに聞こうと待つていた

「お前の代わりに玲奈ちゃんが働いとるんだぞ!? ふぎけんなよ!」

「それは知らねえよ! どうせ俺が死んだから新しく雇ったんだろ!」

「そ、それは・・・」

慌てて目をそらす店長・・・凶星かよ

しかし、咳払いをすると一気に態度を戻す

「だけどなあ! だからって! ノコノコと顔を見せてくんない!」

「んだと!? せっかく来たのにこれかいっ!」

翼さんは先に席に座ってもらってます。

「つたく・・・死んで来るなよ。お前よ」

「すいませんー死んでなくて」

お互いに冷静になり、言葉を慎む

「・・・で、なんで翼さんと?」

「・・・いろいろあつたんだよ。」

そう言い流すと、俺は翼さんの座ってる向かい側に座る

「はあ……疲れたよ」

「ふふふ……霧夜は可愛いな」

「ふえ？」

首を傾げる俺を無視し、翼さんはパフエを注文する

「……よくわかんないな」

「そういうものだ。気にしなくていい」

数分経ち、パフエが運ばれると……

「霧夜、口を開けろ」

「断る。」

ほら。始まった。

俺の口目がけ、翼さんはスプーンを突き刺してくる、これで溶けないアイスとか、具がすごいと思う。

「むっ！避けるな！」

「避けてないわ！これは反射的に動いてるんだよ！」

かれこれ数分続け、俺の諦めで大人しくスプーンを口に加える

「美味しいなあ……」

と、頷く俺とは別に

「霧夜の……霧夜の……」

俺の加えたスプーンを凝視する翼さんがいた。

◇

俺たちは昼食を軽く済ませた後……思い出の公園に来ていた

「懐かしいな……」

「ああ、私もだ」

「ここに来たことあるの？」

「……ああ、そこで大切な人に会った。」

……翼さんの言う、大切な人って誰だろう？

俺は一瞬間こうとはしたが、懐かしいそうにする翼さんを見て、聴けないでいた

「霧夜は覚えていないのか？」

「……知らない。覚えてると言えば……それは違うな、どちらかと言えば……思い出せないになるかな」

「……そうか。」

俺の発言に翼さんは少し悲しそうな顔をする

俺は必死に何かを思い出そうとするが、何も思い出せない。

「・・・その時・・・翼さんが・・・」

「・・・あの時・・・霧夜は演奏をしていたな・・・少し古い・・・楽器で・・・あの時のお前がかつこよかった・・・それに私は憧れたんだ・・・」

「・・・何かが引つかかる・・・」

どうして翼さんは俺が演奏していたのを知ってる？何故持ってたのは楽器だと分かる？

その答えは一つしかない・・・

「霧夜・・・思い出したか？」

「・・・翼？なのか・・・」

あの時の青髪の臆病っ子・・・それは風鳴翼・・・と言う事になる

「やつとだ・・・やつと・・・」

「・・・そうか・・・言われれば面影が・・・」

言葉が続けようとしたが、続ける前に翼さんに抱きしめられる

「霧夜・・・私は我慢が出来ないんだ。こうなったのは紛れもない・・・お前のせいなんだからな？・・・だから・・・」

そう言うと彼女は落ちてく夕日を背に、面と向かって告げる

「……私はお前を愛している……」

……この言葉を聞いて……俺にどうしろと言うんだ……

◇

この告白を聞いたのは彼だけではない。

「……鈴夢……」

その女性は桃の髪で……彼を思う黒のガングニールの所持者だった

「……鈴夢……? どうして……私じゃないの?」

彼女の目には涙が溜まっており……既に泣き出す寸前のところまで来ていた

「……鈴夢を手に入れなきゃ……どんな手を使っても……」

彼女はそう言うと、彼の家の方向へと、フラフラと歩き出した……

◇

……あの後、翼さんと別れ、一人で帰路を歩いていた

「お前を愛している」

・・・あの時の翼さんの顔は・・・恋する女性のものだった・・・  
「・・・どうしろって言うの？俺に・・・」

俺は女性経験などない。そもそも、異性として見たことがないのだ。

デートって言われた時もそう。俺は全て「お出かけ」だと思っていた。

しかし、それは俺が思っていただけであって・・・彼女達にとつては本物の・・・それこそ、緊張する・・・「好きな人とのデート」なのだろう

それを俺は軽い気持ちで・・・いつものように振舞っていたから・・・

もし今までのデートで俺が違う態度になっていたなら、それはそれで違う結果になっていたかもしれない。

だけど。結局こうなってしまった。彼女たちの思い、行動に気づいていたにも関わらず、無視して、それこそ知らないふりをして・・・

結局こうなるまで俺の愚かさを知らなかったのだ。

・・・俺はかつこ悪いと思う。

そもそもかつこいいとか意識したこともないのに・・・何故こうなったのかは不明である・・・だが。

俺のいつもの行動が・・・彼女たちの中にある「恋心」をさらに強くしてしまっただろう・・・

「・・・クソが・・・」

俺は初めての経験に怒りを覚えていた・・・いや、不安なのかもしれない。

告白されたのは初めてなのだ。しかも、それまで告白とかは経験しない・・・いや、経験すらしようとしなかったのだ。

それほど俺は、恋愛と言うものに距離を置いていたのだ

・・・しかし、返事をしないのも俺としてはどうかと思う

それこそ、本当に「かつこ悪い」なんじゃないだろうか。

でも、逆に彼女をフツたとして・・・誰が俺をかつこ悪いと言うのだろう。

別に好きな人がいれば・・・それは正しいことかもしれない。だけど、それが逆に彼女を傷つけてしまうのだ。

もしそれで彼女が変わってしまったら。その怒りの矛先は彼女を追い詰めることをした俺になるだろう。

告白とは青春とは言うけど、それは違うのかもしれない。

俺にとって告白とは、それだけで相手の・・・自分の運命を変えるものであり、さらにはそれによって、周りが変わっていき・・・最後には後悔するものだと思う。

本当の幸せなんてのは・・・それを乗り越えたことを言うのかもしれない。

しかし、告白されたのならそれはもう、「目を背けてはいけない」事なのだ。いつも



のような、「俺は知らない」なんてのは通用しないし、「待つてくれ」なんてのも通用しない。

告白の答えに「待つとか」「後で」とかはない。あるのはその場で、その時に得る答えなのだ。

・・・告白は・・・一種の儂いものである。

俺は・・・

しかし、彼女は現実には、その「儂い瞬間」に手を伸ばしたのだ。俺に・・・俺と一緒にいたいから・・・

ならば俺も答えなければならない。その「儂い瞬間」に、いや、「儂い瞬間」を終わらせなければ・・・

この「儂い瞬間」は、長く続けば続くほど、苦しいものだ。俺はそう思う・・・だからとは言え、俺は彼女とは釣り合わないだろう。

・・・いや、告白に釣り合うとか、釣り合わないとか言い訳は見苦しいのかも知れない・・・。何故なら彼女は歌手と言う・・・有名な人でありながら、さらには誰もが羨ましがれる彼女が「好きな人」に、告白したのだ。その辺の男なら「喜んで！」と、返すところを俺は、戸惑っている。

それほど俺は怖いのだ・・・もしこの事が他の皆にもあつたら・・・恐らく俺は「死

“を選ぶだろう。”

「ただ、『死』を選んだところで彼女たちは納得しないだろう。これはこれからの運命……しいては未来を決める出来事なのだ……恐らくこの告白の権利を握っているのであればそれは告白した方ではなく、『告白された方なのだ』」

「……告白なんてのはくだらないと思う。」

「ただ、自然に付き合うなんてのはもつとくだらないと思う。」

「だから彼女は選んだのかもしれない……あえて思いを伝えて……俺に振り向いて貰うために……」

「……俺には覚悟がない。」

「……ただのクソ野郎なんだ……俺は。」

「彼女は勇気を出した……なのに俺は……」

「気付かぬ振りをして、さらには彼女たちを振り払ってきた……本当に俺はクソ野郎。告白される価値なんてのも無いのかもしれない。」

「……ただ選んでくれた。こんな俺でも……」

「……俺はなんなんだろうな。」

「俺は一人、自分への殺意と、後悔を考えながらも、歩いてきた……」



俺は部屋に帰り・・・姉さんに顔を見せることなく、布団に入る

「鈴夢ー？ 飯食べるか？」

「・・・いいよ。いらない」

「そうか。身体を大事にな」

・・・今の姉さんも、俺のことは好きなんだろうか・・・

もし好きなら、俺は告白を待ってもらうことも出来るが・・・

そうでなければ、俺は翼さんと付き合える・・・

・・・わからない。

俺が一人、寝込んでいると、突然窓が空いて、誰かが侵入してくる

「っ！んー!?!」

「静かにして」

俺を抑えたのは俺より大きい女性・・・桃の髪を持ち・・・胸にペンダントが見える・・・

この人は

「マリアさんっ!」

「・・・鈴夢・・・話があるわ。」

そう言い彼女は俺を抑えながら話を続ける

「何を・・・貴方は！」

「静かにして。殺されたいの？」

「・・・っ。」

俺は彼女から溢れ出てる殺意に怯えながら、口を閉じる

「私はね。貴方が好きなのよ・・・それこそ助けてもらった時、何故か運命を感じたわ。何故かこの子のことを知りたいて。」

・・・この人は何を言っているのだろう、意味がわからない。

「・・・でも、あなたは私より高い位置にいた。それこそ私の届かない場所に。だけどこのライブで、ようやく手に入れられる・・・そう思ったのに！」

彼女は、俺の上に乗ると、光のない目で

「なんで風鳴翼なの？」

「ーっ！」

「答えて。」

何故彼女がその事を知ってるのか。俺には理解出来なかった。それこそ、本当に理解するまで時間をかけたかったのかもしれない。

「・・・本当なら私も言いたかった・・・愛しているって。」そうでなきや。貴方が・・・

私を好きになれないから！」

「……」

「だから……分かせてあげる。あなたは私のモノだって。」

そう言うのと彼女は俺の首元を噛んでくる

「ーっ!!?」

「はむ……」

初めは柔らかい噛み方だったが……途中から強く噛んでくる

「んーっ!」

助けを呼ぼうにも……口を塞がれていて叫ぶことも出来ない

「……はぁ……これであなたは私のよ」

「……っ……」

俺の首元には、俺は見えないが、恐らく噛み跡が大きく残っているのだろう。

しかし、彼女は終わりじゃないと言わんばかりに次は上着を脱がそうとする

「っ!クソっ!」

俺は枕の隣にあつた、腕時計を扉の近くまで口で投げるとトイが

『姉ちゃーん。鈴夢が呼んでるぜ!』

大声で姉さんを呼んでくれる

「・・・どうやら時間ね」

マリアさんはそう言うと、再び窓から出ようとす

「そうね・・・私も貴方を愛してるわ。それを覚えておいて」

そう言うと彼女は窓から消えてしま・・・

取り残された俺は姉さんが来るまで自分の運命を恨んでいた

## 第五詞 裏の感情。表の感情。

・・・告白された翌日・・・俺は二課へ行くのを拒んでいた

二課に行けば嫌でも翼さんと顔を合わすし・・・勘のいいやつはそれだけで何かあったと察してしまうからだ。

・・・俺の運命は普通の人間のものだったはずだ。

もし仮面ライダーにならなければ・・・俺は後悔してしまう。

俺の運命なんてのは、一度死んでいるものなのだから、俺ではないのかもしれないけど。

紛れもなく、これは「俺の」運命なのだ。これは現実・・・それを受け入れなければならぬ。

昨日の噛まれた部分は包帯で巻き、痣になった部分も包帯で隠している。

「・・・どこに行こうかな。」

誰に相談しようにも、怖くて話すことが出来ない。

俺は本当にクズだと思う。

「・・・だりい。」

俺はそう言いながらも、暑い中……家に帰ろうとしたが

「鈴夢くん！」

「鈴夢くん！お久しぶり！」

幼馴染二人組。響と未来に捕まってしまふ。

……俺はこの二人に名前を呼ばれた時に少し驚いてしまったものの、慌てることなく冷静に落ち着くことを専念する

「どうしたんだ？ああ……今日は休日か……」

思い返せば今日は休日……響たちが外にいてもおかしくはないのだ。

「……鈴夢君こそ！どうしたの？元氣ないけど……」

「鈴夢くん？何かあったの？」

「あつ。いや、なんでもないよ！」

俺は突然二人に質問され、驚いてしまうが何ともないと答える

この二人が俺に好意を抱いているなら……俺は彼女たちを悲しませてしまふからだ

「……今日はちよつと気分転換にな……散歩でもしようと思つて……」

「私たちはランニングだよ……ねー？」

「そうだね。つて言うかお出かけでしょ？」

「そうだったけ？」



相変わらずの元気組二人に俺は笑みをこぼしてしまふ

この二人といると・・・何故か楽しい・・・

そんな感情が俺にはあつた。

だが表では恐らくだが冷たく接している・・・

これは紛れもなく「ツンデレ」・・・もしくはウラオモテなのだろう。

・・・しかし、分かつていても治せないのが俺の悪いところなんだ・・・

「・・・そうか。邪魔して悪かつたな。」

そう言う俺は走早に去つてしまふ

二人の引き止める声も聞こえたが・・・俺は関係なく走つていく

・・・いつの間にか俺の目には涙が溜まつており・・・走つて行く度に涙が雫となつ

て零れる

「・・・クソっ・・・」

俺は彼女たちが来ない・・・裏道で一人、涙を流していた

「どうすればいいんだよ・・・こんなの分かんねえよ・・・」

俺が涙を流していると、後ろに人の気配を感じる・・・

「っ!？」

「・・・ごめん。脅かすつもりは無かつたんだ。」

そこには二課にいるはずの天羽 奏がここにいた

「……前に渡した通信機から特定して来てみたら……なんかごめんな。」

「……いや。なんでもない、大丈夫だ」

俺は涙を拭うと、改めて奏と向き合う

「それで？何か用か？」

「ああ、ちよつとな」

そう言うのと彼女は照れくさそうに聞いてくる

「……翼に告られたのか？」

「……っ!？」

「その様子だと凶星だな……大体分かってたけどさ」

……彼女は知ってたらしい……だが

「安心しろ。私たちは全員知ってるし……それにちゃんと答えもある。」

……俺は彼女の言葉を理解できなかった。いや、理解することも出来なかった。

彼女は突然笑顔になると俺の手を引っ張っていく

「ん!？」

「こつちだ!ついてこい!」

俺は強引に引っ張られ、二課へと連れてかれた。



二課に連れてこられると、俺は司令室の前に立たされる

「……ここぞでなにか。」

「いいから入れて。きつと驚くぞ〜?」

先程からワクワク顔の奏……俺は覚悟を決めると扉を開ける……そこには  
「鈴夢ー! 愛してる!」

「ちよつと! 霧夜くんは私が愛しているのよ!」

……中では突然の言い争いが始まっていた

「これは?」

「知ってるだろ? 皆お前の事が好きなんだよ……だから……」

そう言うとならば照れながらこう言う

「皆で彼女になろうってさ?」

「……はあ。」

俺はこれまでの自分を改めてバカだと思った。

そうだ……この人達はそういう人達じゃないか。

何でもかんでもやる人達だけど．．．思いがひとつならやることも一緒じゃないか。  
俺は改めてこの人達の暖かさを知った．．．

「．．．ありがとう。」

「おいおい。違うだろ？告白の挨拶は」

「．．．そうだな．．．これからよろしく。」

「．．．まあ、いいか。」

「ここにはいない響たちを含め．．．俺は．．．この人たちと付き合うことを決意した．．．  
．．．その時の俺の顔は．．．笑顔と涙の両方だった。」



こいつの嬉しい顔は見てて飽きねえな。

私たちはこいつの彼女になった。

しかし、彼がこんな顔をするなんてのは．．．初めて知った。

いつもは彼の負の顔なんてのは見なかったのだ。

彼は笑顔を見せ．．．人を弄って．．．さらには、みんなを笑わせるトラブルメーカー

じゃなかったか

だけど、今、彼は普通の少年なんだと思った。

なれない体験で・・・精神を追い詰めて・・・さらには、自分の価値観をすり減らして・・・涙流して・・・

だけど、それが「彼」なんだ。彼の顔なんだ。

これから彼を知りたい・・・それが、私たちの想いだった・・・

「鈴夢・・・よろしくな！」

「ん？ああ！よろしく！」

私たちは告白らしくない告白をしたが・・・これでいい。

これが・・・私たちなんだ。

なれないことで馬鹿になるより何倍かマシ。先にやって後で後悔するよりマシ・・・何倍か・・・いや、それ以上にこの告白は私たちにらしいと思った。



「鈴夢くん！大好きだよー！」

「それはありがとう。」

『よかったなあ・・・鈴夢。』

「ああ……よかったよ。」

俺は彼女となった響と、ある場所に向かっていた。

「それで？ここは……」

「……ちよつとな。」

場所は墓地……俺はここにやり残したことをしに来た

「久しぶり、母さん。父さん」

それは両親の墓参りだ。

両親の墓参りは、特にやることなく来た時に来るぐらいだったから……結構来ている

「鈴夢くんのお母さんたち……」

「ただいま。」

そう言う俺は丁寧に挨拶をし、花を変え、線香を着ける

「……俺にも家族ができた……嬉しいよ。だけど不安だ……だけど……」

俺は響を一度見ると再び墓石に顔を向ける

「乗り越えていきたい。このメンバーでこの家族で」

俺はそう言う、桶を持ち、帰る

「……鈴夢くん。」

「俺は不安だよ。いざ付き合ってみればこうなんだと感じるし．．．それ以上に関係も壊れるかなんてのも心配になる．．．だけども。」

俺は響の手を取ると、彼女を見て言う

「必ず良い奴になるからさ。協力してくれない？」

俺の言葉に響は笑いながら

「もちろん！責任もって鈴夢くんを一人前にするからね!？」

「ははっ。これからよろしく。」

俺はお礼を言うと、そのまま彼女の手を握り

「帰ろう」

「うん。」

育ててくれた両親の眠ってる場所に背を向け．．．二人で歩く。

．．．ありがとう．．．母さん．．．父さん．．．俺は生きるよ。絶対命は無駄にはしないから．．．

その想いを胸に．．．俺は皆が待つてるであろう二課へと帰り始めた．．．



．．．???

「マリアが部屋から出て来ないデス」

「．．．あの偽善者のせいだね．．．」

「．．．姉さん．．．」

三人はマリアがいる部屋の前で、話していた

鈴夢と接触したのを最後に、何故かマリアは部屋から出なくなつた。

「．．．鈴夢さんを捕まえれば出てくるのかなあ」

「．．．でもそれしかないデス」

「なら行こう。やることが決まつたなら」

そう言い、三人は彼を捕まえるべく動き出す。

再び装者達がぶつかると．．．それを予言するものは無かつた



## 第六詞 覚醒スル黒キ感情

．．．みんなから告白された次の日。寝起きは最悪だった。

「．．．寝起きつらい。おやすみ。」

俺は再び布団で寝る．．．しかし

「鈴夢！起きろよっ！そして朝ごはん作ってくれ！」

「霧夜っ！お願い！ご飯を！」

．．．姉と居候によつて睡眠が妨げられる。

．．．眠たいからパス。

俺が彼女たちを放置して寝てると

「こうなれば．．．」

「やるの？」

クリス姉がフライパンとおたまを持ち

カンカンカン！

「うるさいよ．．．」

「起きないお前が悪いぞ。全く．．．」

「ほら。早くご飯作って?」

「うえーい……」

俺はフラフラとした足取りでキッチンへと向かうが、姉さんたちは俺の布団へと侵入して。てか美月さんもか

「鈴夢の匂いだ……(くんくん)」

「はあく幸せとはこの事ね」

ダメだ。イカれてやがる

「無視しよう。」

とりあえず面倒くさい二人は無視して……俺は朝食を作り始めた



皆と付き合い始めて、二日目、この連絡は玲奈まで行き届いてたらしく、二課に帰ると玲奈がいて、そのまま説教させられるハメになった。

ちなみにだいたいぶ前の話になるが、俺の生存だが、どうやら一部の機関、さらには人達は知ってたらしく、俺は驚いてしまった。

全く……お人好しだなと感じてしまうが、俺はこの人達の好意を受け止めていた。

「うん。ご飯できたからテキトーに食べてね。」

そう言う俺はパンを片手に靴を履き、トレーニングウェアでバイクを運転する。

「トレーニング行くから」

『へ了解』

今日は翼さん。奏さんとの練習だ。行こう

◇

ジムに行けば、先に奏さんと翼さんが汗を流していた

「鈴夢ーおせーよー」

「霧夜・・・遅かったな。」

「すいませんねー遅れて」

俺は軽く謝ったあと、直ぐに荷物をロッカーにしまい、トレーニングを始める

『今日は三時間、ノンストップで動くぞ?』

「機具は30分事にチェンジな。」

トイがタイマーを起動させると、俺はトレーニングを始める

体幹から、機具、さらにはウエイトトレーニングもこなして・・・

「・・・かつこいいねえ・・・モテる男つてのはああ言うのを言うんだろうな」

「だな。私たちの自慢の彼氏だ」

ランニングも軽くなして、休憩に入りたいが・・・

「ボクシングやりてえ。」

『じゃあ向こうだ。行こうぜ?』

さらに力を付けるべく、俺はボクシングにて、殴り合いを所望した。



あの後、響も合流し、今は一緒にトレーニングをしている

今やってるのはミット打ち

片方が思いつきり殴り、もう片方はそれをミットで防ぎ、堪えるものだ。

これで、防御する時の基本とか得れるからマジ便利

俺は響のパンチを受けながら、リズムを取り続ける

「鈴夢くん!大丈夫!」

「ん。大丈夫だからなっ!どんどん来いっ!」

響のパンチ力は女性の中ではそこそこある方であり、さすがは特訓馬鹿とも呼ばれる

と思つてしまう

「やあ!」

そして突然拳だけではなく、蹴りも追加してくる

「行くよっ!」

「……もつと来い!」

このままお昼の時間まで、俺たちは動き続けていた

◇

……お昼になれば、俺は自分の飯を買いに行くのだが……

「き、霧夜つ……一緒に食べないか?」

翼さんに上目遣い+抱きつきで頼まれる……むむ

こうやってやられるとなあ……なんか断れないんだよ。だつて翼さんだぜ? アイドルだぜ? 美人だぜ? 大和撫子だぜ? (以下省略)

とりあえずこの人は数えだしたらキリがないほどの、完璧な人なのだ(家事を除く)

こんな人にこうされたら断わる気が出ないよなあ

「ん……だけどなあ……」

「ダメか?」

「うっ……」

今にも泣きそうな翼さん……

泣かないで。もう少し耐えて下さい。

「……分かりましたよ！一緒に食べますよ!？」

「そ、そうか！なら食べるぞ！」

そう言い翼さんは俺を引っ張っていく

このあとの流れは大体予想してた

「ど、どうだ？」

「ん……美味しい……」

「よかった……もっと食べてくれ！」

そう言う翼さんは嬉しかったのか……勢いよく箸を喉に突っ込む

「……奏さん。大丈夫なんですか？あれ……」

「……頑張れとしか言えないなあ」

この後、必死に生き返るべく努力しました

……お昼は……うん。美味しかったよ

◇

「……場所は変わり二課

「……怪しい場所がある？」

「ああ、おっさん。まずはこいつを見てくれ」

「そう言うとな隣の美月が写真を何枚か見せる

「これは……」

「私たちがおっさんに見せたのは、補給の瞬間だった

「ただの補給ならまだ見逃すが……これだけは違った。

「……裏道で補給だと？しかも……」

「そう。廃墟の場所だよ。これは嫌な予感がするわ」

「場所はだいたいぶ前に放置された病院。

「そこに、食料などの補給品が入って行くのは普通なら不自然な現象だ。だから写真に

収めた

「……調べて起きたいが……前の組織のことも気になる。」

「それも踏まえてよ。私たちが調べたいの。」

「……」

「私たちの言葉におっさんは悩み込む。」

しかし、装者と装者をぶつけて恐ろくだが勝つのはこちらだと信じている。それはおっさんも同じはず。

「・・・わかった。こちらで少し、様子を見た後検討してみる。それまで皆は休んでくれ」

そう言うとおっさんは直ぐにモニターを見て直ぐに搜索し始める

「・・・じゃあ私たちでお茶でも行く?」

「いいね! 近くに行きつけがあるんだ!」

そう言うとは私は美月を引っ張り、行きつけの場所へと向かった



「疲れたー・・・」

「同じく・・・」

俺たちはトレーニングを終え、翼、奏と別れ、帰り道へと着いていた

しかし、響は強かった、流石はおっさんと訓練・・・いや、修行をしてるだけある。

しかし、俺も少しだがおっさんとは修行してたから少し軽く感じた

「・・・鈴夢くん! 今日ありがとうね!」



「気にするなつて・・・もう断る間柄じゃないだろ？」

「えへへへ・・・鈴夢くん私たちの彼氏だもんね？」

「・・・残念ながらその自覚が無いんだけどな？」

「そうか・・・自覚がないんだ・・・」

そう言うのと響は俺によってくる

「ん。いろいろ当たってるからやめい」

「えー・・・でもカップルってこんなのでしょ？」

「・・・それは悪いお手本だよ。本来は恥ずかしいからやらない方が良くないんだよなあ」

「・・・けち。」

だが、こう言おうが響は俺から離れる様子がない。

「・・・離れてくれよ」

「やーだあー」

俺達がイチャイチャしてると・・・ふと、目の前に

「鈴夢さーん！」

「ゲーエエツス!!」

見知った二人組が現れ、俺に飛びついてくる

「んあ!？」

「あっ!? 鈴夢くん!」

俺は反動で倒れ、彼女たちにスリスリされる

「・・・切歌。調、やめてあげて? 姉さんが悲しむから・・・」

その後ろには見えないが可愛い子が立ってる。

「ちよ! 鈴夢くん!」

「スリスリ・・・」

「スリスリ・・・」

・・・ダメだ、目を開けたくない。

響が心配してくれてるが、俺の心は既に死にそうです。

が、そんな事はどうでもいい。

「・・・どうして君たちが・・・」

そう、この子達は敵なんだ。つまり、仲良くはなれない存在・・・

「・・・決まってるじゃないですか。あなたを連れ戻しに来たんですよ。」

そう言う俺の体が見えない糸で縛られる

「!? 鈴夢くん!」

「残念デース! 鈴夢さんはもらつてくデースよ!」

「借りる。永遠に返さない」

そう言うと俺の体は、二人に持ち上げられるが

「ぐおおおっ！」

「嘘っ!?!」

「や、破られたデスよっ!?!」

「……流石は人じゃない……奴……」

……俺は糸を破ると、素早く行動し、彼女たちから距離を取ったあと、響にジエス  
チャーする

響は理解してくれたのか、頷く……よし

「……行こう！鈴夢くん！」

「ああー！」

俺たちは走りながら GANG ニールとビート、サンダースタイルへと変身する

俺は高速の動きで緑の子に近づき、

響はもう片方のツインテの子を相手する

「……アガートラーム」

銀の子は俺たちの戦う間に銀のプロテクターを装着する……俺は……

「っ！君がそれをつ!?!」

俺はそう言うと銀の子に向き合う

「どうしました？私だって装者です。纏えるのは当然ですよ？」

「・・・俺が言いたいのはそこじゃない。」

俺は笑うように言う彼女に槍を向け

「それを手放せ・・・それは君が使うには早すぎる」

「・・・」

「君の歌は危険なんだ・・・歌ってはいけない・・・」

俺がそう言うのと彼女は剣を取り出し俺へと肉薄してくる

俺はそれを拳で防ぐと、彼女を蹴り飛ばし、さらに拳で殴る追撃をする

「がはっ!!」

「・・・爆裂っ!!」

俺はさらに彼女を引き寄せ・・・

「てやあっ!!」

「あ・・・」

彼女に完璧なアッパーを当て、上に打ち上げた後にかかと落として地面に衝突させる

「せ、セレナっ!!大丈夫デス!?!」

「お前っ!!セレナをっ!!」

刃の子がこつちに殺意を剥き出しにしながら来るが俺は・・・

「刮目せよ。」

そう言うのと俺はアームドギアを合わせ、もう一つ槍を生成すると、それを合わせ双槍を作る

「あああつっ!」

彼女は滑るようにしてくるけど・・・

「遅い」

俺は彼女の腹に容赦なく一撃を入れると、さらに緑の子に

「せいっ!」

「デスっ!」

一撃を加えたかったが彼女の鎌に幅かれてしまう

「セレナと調はやらせないデスよ!」

「・・・邪魔をするなっ!」

そう言うのと俺の意識は・・・何者かに持っていかれた・・・



「!? 鈴夢くん!」

私は純粹に破壊を続ける彼に怯えていた

「……」

しかし、彼は止まらない……それどころか彼に変化が訪れる

……鈴夢くんの目がサンダースタイルの黄色から……黒に染まると、彼のメモリホルダーから黒いオーラを帯びた……漆黒に染まったメモリが勝手にメインスロットへと装着される

『シヤドウ』

「変身」

次の瞬間、彼の身体は黒いモヤに包まれ……黒い戦士になる

彼の手には大きな剣があり、彼の姿も大きく変わっていた

「……うつ……寒気がするデス」

緑の子が言う通り、彼の今の姿は禍々しい怪物みたいな姿をしていた

一言で言うなら、神話の怪物の姿だ

しかし、そんなかつこい物ではなく。

彼の身体は怪物へと変わっていた

「……逆光」

彼は剣を広げ、鏡みたい丸くするとそこから光が生じて、その眩しさにわたしは目

を閉じてしまう

「デエエエツス！」

叫び声のあと、目を開ければ緑の子はプロテクターが溶け、溶けた部分から素肌が見えている

「・・・次はお前だ」

私を見ながら言うその言葉は・・・さながら死の宣告をされているようだった

## 第七詞 巨大な影、心の中

「鈴夢くん！やめて！」

「貴様を殺すっ！」

彼は私に容赦なく剣を振るうが、わたしはアームドギアでそれを防ぐ彼の力は強く・・・下手をすれば一撃でギアが破壊されそうだった。

しかし、彼は私だとか関係なく、拳を、剣を振るう

「どうして!?! トイも答えてよ！」

私は彼の相棒のトイに話しかけるが、彼も答えてはくれない

「くっ！痛いけど我慢してね！」

私の一撃が彼の身体に当たると、彼は同様せずに私の腕を掴むとそのまま吹き飛ばす

「ぐっ！ああっ！」

ものすごい痛みから私は悶絶してしまうが、直ぐに彼は追撃をしてくる

「終わりだっ！」

が、彼は飛ぶと同時に撃ち落とされる・・・これは

「後輩っ！無事か！」



「立花っ！待たせたなっ！」

増援に来た翼さんと奏さんが鈴夢くんと対峙する

「霧夜なのか!?!」

私は翼さんの叫びに頷く、間違はなく彼なのだから

「・・・とりあえずこつちこい。ここは翼に任せろ」

そう言う奏さんに頷く翼さん・・・だけど

「・・・聖遺物・・・破壊する！」

彼はそう言うのと再び剣を広げる

「なんだっ!?!この光は！」

翼さんがそう言うのと次の瞬間、その光が幅かれる・・・それは

「!?!これはなんだ!?!」

「・・・！ネフィリム!?!」

そこには大きい・・・怪物みたいな生物がいた

その怪物は鈴夢くんを見るなり直ぐに、彼へと襲いかかる

しかし、彼も避け、一撃一撃を加える

「・・・ウエルのやつデスね・・・」

「ウエル・・・?」

そう言うと銀の子が言い放つ

「こいつはネフィリム．．．聖遺物よ。完全なね？ だけど．．．こいつの役目は聖遺物の破壊．．．もしくは融合を目的としてる。つまりこいつは聖遺物を食べてしまうのよ。」

「．．．そんなやつが」

「．．．恐らく私たちでも勝つのは難しいわ。彼でも．．．」

．．．その言葉に私たちは啞然としてしまった。

彼でも勝てないとなると、それは本当に難しくなる。

しかし、彼はそれに臆することはない、一撃を確実に加えていく

「でも、それが送られたってことは．．．」

「．．．私たちは用済みなのかもね」

「．．．あいつ。初めからマリアたちが狙いだっただのか．．．」

銀の子と、ツインテの子は悔しがすが、今はそこではない。

「霧夜を助ける！ 奏つ！ 立花を頼むぞ！」

そう言う翼さんは彼の加勢に行くが、彼はそんなことを無視して、攻撃を続ける

「おっさん！ クリスたちを呼んでくれ！」

奏さんは司令に連絡を取る．．．

「鈴夢くん。大丈夫．．．だよな？」

何も出来ない私は・・・ただ、彼の無事を祈っていた



黒き戦士がネフィリムへと切りかかる中、私は彼と共に立ち向かっていたが

「霧夜っ！」

私は彼へ声をかけるがその行為は虚しくも彼には届かず、彼はそのまま剣を振り続ける

「霧夜っ！返事を！」

「・・・」

彼は無言のままネフィリムへと切りかかる。

しかし、彼の攻撃はほとんどネフィリムへは通っておらず、逆にネフィリムからの反撃を受ける

「・・・っ、どうすればいいのだ」

私は苦痛の言葉を漏らす。

彼が狂った理由は分からない・・・しかし、今、彼を止めないことにはネフィリムを倒すことは出来ないかも知れないのだ・・・

しかし、今の彼は目の前の敵を倒す兵器と化している……つまり、彼はただ戦い続ける者と化したのだ。

「霧夜！」

「……鬱陶しい。」

そう言うのと彼はこちらに黒き剣から弾丸らしき物を飛ばしてくる

「っ！何故だ！何がお前をそうさせる！」

「……黙れっ！お前は……お前たちがいなければアアっ！」

彼の叫びと同時にこちらに光が放たれるが、その光はネフィリムによつて遮られ、さらに彼の身体を握りつぶすように掴む

「ぐあっ！……ああっ！……」

彼の身体は悲鳴を上げているが、ネフィリムはそれでも握る力を弱めない

「霧夜っ！」

「馬鹿っ！」

私たちのこの叫びすら届かない……どうすれば……

その時、多数のミサイルがネフィリムを襲う

「待たせたなあ！行つくぜ！」

「力を貸すわっ！行くよっ！」

加勢に來た雪音と美月がネフィリムと対峙するが、ネフィリムの手を見て二人は怒りを見せる

「鈴夢！」

手に掴まれてる霧夜を見て、二人の身体から怒りのオーラが見えてくる

「あいつ！殺してやるよっ！」

「同感よ！行くぜっ！」

美月が飛翔し、雪音が弾幕を放つ

しかし、それがネフィリムに当たったところでネフィリムは怯んだりせず、霧夜を握る手を強くする

「……ぐっ……」

彼の変身が解ける……その時、ネフィリムは彼をその場に落とす……

「……」

彼は氣を失っているが……

グアアッ！

ネフィリムは一つ咆哮をあげると、その場を消えるように去っていくが……

「鈴夢っ！」

雪音がいち早く霧夜により、抱き抱えるように起こす

「……目を開かない……どうなってるの？」

「……黒い化物になつていた……」

私たちが話をしようとする、そこに銀の子が入ってくる

「……私たちもいいですか？」

「……セレナ・ガデンツァ・イヴ……」

……彼女の名前を改めて確認し、話をする

「……ネフィリムは彼が送ってきたもの……つまり、私たちも餌だったのよ。だからあなた方に協力させてくれないかしら」

「それは……」

「……別にいいわ。だけどこっちの指示にね。」

そう言う、後ろに黒い車が来て、緒川さんたちが駆け寄ってくる

「大丈夫ですか!?!状況は!?!」

「緒川さん!鈴夢を!」

「?!?!分かりました!他の皆さんも乗ってください!」

そう言う、霧夜は黒い車に乗せられ、先に行き……私たちはセレナたちを保護する  
ような形で車に乗った……



．．．俺の心．．．

．．．ここはどこだ？

俺は当たりを見渡す．．．しかし、どこを見てもここには何も無い．．．黒い空間だった。

「．．．ここは。」

「お前の心だ」

声のする方．．．そこには一人の戦士がいた

「．．．俺と戦え。」

そこには黒い．．．化物のような戦士がいた

「．．．お前は？」

俺が尋ねる．．．そうすると彼は

「．．．俺はお前だ。」

そう言う俺たちは拳をぶつけ合い、争いが始まった。



彼の容態を了子さんに聞いたところ

「ん〜．．．なんとも言えないわね。ここが悪いとかは無かったわ。．．．そうなる心  
の問題かしらね」

．．．私たちはその説明に納得してしまい．．．その他のことも了子さんに任せて、私  
たちは司令室に集まっていた

「．．．君たちも装者なのか。」

「はい。私は第一種適合者．．．切歌たちは第二種の適合者です。」

第一種．．．適合者はそのように分けられる。

まずは第一種から。

第一種は天性．．．先天的な適正を訓練などによって恒常的に伸ばしたのを指す。

第二種はリンカーや、薬の投与によって時限式によって適正を引き上げたものを指す  
そして、これに属しない者を第三種と分けるが

この第三種は事故により、融合し、シンフォギア装者となった後、土壇場に必要係数  
を引き上げるの言う

第三種に関しては、未だに立証されていない部分が多く、櫻井 了子ですら説明出来な  
いほどに情報が少ないのだ。



．．．セレナは第一種。切歌、調、マリアの三人は第二種に所属される

「．．．なるほどな。それで．．．ネフィリムとは」

「．．．ネフィリムは完全聖遺物よ。自立的な．．．さらにこいつは餌を食べることで成長するとんでもない化物よ。」

「．．．その餌が」

「私たちの聖遺物．．．いや、エネルギーと言った方がいいかしら。」

．．．ネフィリムは危険なものだと彼女から説明を受け．．．俺たちの一通りの話は終わる．．．が

「．．．しかし、何故君たちも？」

「．．．ウエルは元々私たちには興味ないのよ。ただの餌．．．それを今日思い知らされたわ」

「．．．そうか。」

しかし、もう一つ気になるのは．．．

「彼の言葉にあつた危険とは．．．なんだ？」

「．．．恐らく絶唱よ」

「君のか？」

私はその返しに頷く

「そうよ。わたしの絶唱は・・・エネルギーベクトルの調整でのリセットよ」

「・・・」

「全ての生物はエネルギーを元に成り立ってるわ。それを操作し・・・一定の所まで戻す。それが私の絶唱・・・」

「なるほど。」

全ての質問が終わり、一同は解散となるが

「鈴夢・・・」

「・・・お前達を認めねえぞ」

そう言ううと雪音と美月は部屋を出ていく

「・・・彼は・・・」

「・・・すまない。今はその話をしないでくれ」

私は彼が目覚めてることを祈り・・・彼の元へと急いだ・・・

◇

・・・ギイン！

暗い心の中。二人の戦士が戦っていた

片方は銀の戦士。

もう片方は黒の戦士

お互いはお互いの存在を否定し、

お互いに生きるために殺し合う

・・・彼らの戦いは・・・終わる所を見せない・・・

## 第八詞 二つの交差する心

少年の心は黒く……そこでは二人の戦士が戦っていた

白銀の戦士が剣を振るうと、黒き戦士がそれを掴み、引き寄せる

「お前の心は弱い……何故ならいらぬ事だけを思っているからだ」

「……っ！何をっ！」

引き寄せられた銀の戦士は逆に反動を利用して蹴りかかるが、黒の戦士は予想したかのように受け止め、殴り返す

「本当の事だろう！彼女たちを守ろうと！救おうとして！それが何になるんだ！」

そう言うのと黒の戦士は銀の戦士を吹き飛ばす

「人はいつも！争い！憎しみ！そして殺し合う！結局そうじゃないか！」

「何がっ！」

「そうでなければ君を倒しにはかからんよ！あの子達のように！」

剣を広げ、光を放つと、それは俺へと直撃する

「ぐああっ！」

「怖いだろう!?悔しいだろ!?それが君の……いや、君の姿さ！……なのに君はその明

確な殺意を彼女たちへと向けなかった！何故だ？！」

「そんなことをしても！何も戻らないと知ってるからだ！」

「だが結果はどうだ！それを理解せず！ただ戻らぬもののために剣を振るう彼女たち……それを見て君は何を思ったんだ！」

「ぐっ！」

俺は剣を拾うと、黒い戦士の剣を受け止める

「そうさ……何も変わってない。人は……ただ争い続ける……」

「……っ」

「だから人を殺す！そうでなければ……俺たちは……俺達が死ぬ！死なないためにはどうすればいいんだ！……答えは簡単だっ！殺せばいい！……殺られる前に殺る！そんだけだ！」

黒の戦士は俺を蹴り飛ばし、光を向ける

「だけどっ！それでも知ってるんだ！」

俺は地面を転がり、それを躲すと、地面を蹴り奴へと切りかかる

「彼女たちは！そんな人じゃないって！」

「何がっ！君は裏切られたじゃないか！信じた者達に！」

「だけどっ！彼女たちは人なんだ！生きてるんだ！何も俺たちとは変わらない……生き

ている人なんだよ！だからっ！」

俺はそう言うのと、剣を弾き飛ばし、殴り掛かり、黒の戦士を吹き飛ばす

「っ！だからなんだ！」

「俺には・・・いや、俺たちは仮面ライダーだっ！」

そう言うのと俺は再び殴り掛かり、連撃を入れる

「・・・っ、そんなこと！」

「関係ないんじゃない！あるんだ！俺たちは・・・人間の自由のために戦うんだ！」

そう言うのと俺の一撃が黒の戦士の腹を貫通する・・・

「・・・なら証明しろよ。」

そう言うのと俺の意識は別の場所へ飛び、その景色は光へと変わっていった



・・・俺の意識は病室で覚醒する。

ここで目覚めるのは何回目かな。

身体を起こそうとすると、手に重みを感じる・・・

見てみれば、そこには響が俺の手を握る形で寝ていた

「……響……」

俺は響の髪を撫でてしていると、誰かが部屋に入ってくる

「……起きてたの？」

「……セレナさん。」

そこには銀の装者……セレナさんが立っていた

「……俺は」

「……ごめんなさい。私たちのせいで」

「……いえ。元といえば制御出来なかったおれのせいです。申し訳ないです」

お互いに頭を下げてる絵面は……最早宗教に見えた

最終的には部屋に入ってきた切歌ちゃん達によってこの状況が終わった。



……大体の話は聞いた。

彼女たちが裏切られたこと。

俺が暴走したこと。

そして、敵の目的を

「……俺のせいでマリアさんが……」

「……いいえ、貴方のせいじゃない……私たちがしっかりしてないから……」

「……」

そしてマリアさんの事を……

だが、敵の場所が分からない以上。こちらからも動けない。

「……そうか。そうなのか……」

「……ごめんなさい。私たちのせいで」

強く落ち込む彼女に俺は

「大丈夫ですよ。現に俺は生きてるわけですから」

「……ごめんね」

……そう言うのとセレナさんは部屋を出ていく……

……俺は追いかけてしようとしたが

「どこ行くの?」

俺の腕を掴む響が尋ねてきた

「……俺は……」

「あの人を追いかけていくの?」

「ああ。」



「そう……」

そう言うのと響は光の無い目で俺を押し倒す

「っ！響！」

「……鈴夢くんは私たちのものなんだよ!? あんな人達に！」

「落ち着けっ！」

俺が怒りを込めて一喝すると響は糸が切れたかのようにそこに倒れ込む

「うう……鈴夢くんを盗られたくない……」

「……盗られるわけないだろ。」

そう言うのと俺は響の髪を撫でてやる

落ち着いた所で俺は響を連れて部屋を出る

「……司令室に行かなきゃな」

俺は響と手を繋ぐと司令室に向かった

◇

「鈴夢くん、無事なのか？」

司令室に行くなり、そんな言葉が帰ってくる

俺はあおいさんの膝に横になりながら答える

「ええ。身体は大丈夫ですけど．．．トイは？」

「．．．現在修復中だ。限定的だがな．．．」

「．．．そうですか。」

つまり俺はビートには変身出来ないことになる。困ったな

「しかしどうしてあんなことに．．．」

「．．．朔也さん。そこは悩む所じゃないですよ。むしろ俺はチャンスだなど思ってます。」

「チャンス．．．」

「ええ。俺が変わるための．．．ね」

俺はそう言うのと膝から降りて、司令室を後にする

「．．．？あれは．．．」

偶然、休憩室から出てくる二人組を見つける．．．あれは

「切歌ちゃんたち？」

「あつ！鈴夢さんデース！」

「鈴夢さん。大丈夫ですか？」

切歌ちゃんは俺に抱きついてくるが．．．調ちゃんは心配してくれたかのように聞いて

てくる

「ああ、大丈夫だよ。」

「・・・よかった・・・」

そう言う俺は外へと出るために歩くが

「鈴夢さん、お出かけデスか？」

「ああ。身体が訛ってるかもしれないから少し遊んで来ようかって。」

「・・・」

二人は俺の発言に顔を見合わせ・・・

「なら私たちと遊ぶデース！」

「・・・はい？」

どうやらこの子達は遊びたがりのようで、俺はこの子達に付き合うハメになった。



「モグモグ・・・お、美味しいデス！」

「・・・美味しいな・・・これ食べていいんですか？」

「ああ。食べていいよ。俺の奢りだからね？」

た  
・ ・ ・ 俺たちは美味しいもの巡りと言うことでとりあえず近くのお店から行く事に

しかし、切歌ちゃんたちの食い意地は凄い ・ ・ ・ なんてこんなに女の子は美味しいものに目がないのだろう。わからない

俺はこの子達の笑顔にこの事は言えなかったが、いつか聞こうとは思った。

「 ・ ・ ・ 次行くデスよ! 」

「 早っ! 」

「 っ 馳走さま。 」

そう言う俺の腕は切歌ちゃんに引つ張られ、あれこれお店を回りました

・ ・ ・ 女の子ってすごいわ。

◇

・ ・ ・ 俺の心はある意味黒いと思う。

決して表には出さないが。

しかし、人には表裏が存在する。

・ ・ ・ 彼もまた、それに苦しめられる人間である



「うおーっ！高いデース！」

「驚いた……」

俺たちは噂のタワーに来ていた

しかし、聞いていたよりタワーは高く。俺たちは歓喜の声を上げてしまう

「すげえ……初めてだ……」

俺も子供に戻ったかのような好奇心が気持ちを支配する

「……凄いデース！リディアンがあんなに小さいデース！」

「……凄い……綺麗……」

「楽しんでただけて何よりだ」

しかし、この子供もあれだ……心は子供……いや、好奇心旺盛な子供なんだろう

な……

……俺もそんな気持ちに襲われるが……

ドクン……

なんだろう……それとは別に黒い心が俺を襲ってくる

「……」

「どうしたデスカ？」

「いや。なんでもないんだ……」

俺はこの考えを振り切り、彼女たちと観光を続ける……と

遠くから……聞き覚えのある音が聞こえる

ヴー……ヴー……

……この音が何か。理解する前に俺たちの視界には身に覚えのある生物によって空が埋め尽くされていた

◇

ふふふ……ははははっ！

ある廃墟では、一人の男が狂っていた

「これがあ！僕達の……いや！僕の力ですよっ！ははははっ！」

男は狂人とも言える動きでフラフラと回るように歩く

「さあ！君たちがそこにいるのは理解してますよオ!? さっさと死んでくれよなあ!?!」

彼が杖を振るうと、映像ではノイズがタワーに突撃していた



「っ！危ないっ！」

俺はノイズが突っ込んで来るのを予想したかのように、反射的に切歌ちゃんたちを腕に抱え、回避する

「鈴夢さん!？」

「だ、大丈夫デス!？」

「……大丈夫だ。行こう」

俺はそう言うと彼女たちを降ろし、タワーを出るべく走り出す

タワーの中は思ったより広く、エレベーターまでが遠すぎる

が、そのエレベーターもノイズによって破壊される

「っ！脱出の手段が……」

「……絶体絶命デスう……」

……絶望的な状況……俺の心は黒く……怒りに染まり始めていた

## 第九詞 思イハ目覚メ希望ト化ス

ズドオン

大きな音と共にタワーの被害は大きくなる

所構わずノイズが突っ込んで来て、ここを崩そうとする

「こんな所でやられたら埒が明かないだろ！」

「鈴夢さん！次が来るデスよ！」

切歌ちゃんのかげと共に次々と出てくるノイズは迷うことなくタワーに突撃する

「くっ！こんなこと！こんなのが何になるんだ！」

だが、当然のことにノイズに俺のかげなど聞こえるはずもなく、ただ破壊を続ける

そのせいかな・・・犠牲になってく人も出てくる

「くそっ！こうなったら・・・」

俺はビートに変身しようとするが致命的なことに気づく

「・・・なかったな、そう言えば」

ビートドライバーは現在修復中・・・という事は俺の戦う牙が無いと言ってもいい。

こうなっては・・・逃げることしか出来ない



「切歌ちゃん！調ちゃん！こつちだ！」

二人を呼び・・・非常階段を駆け下りる

下からは・・・人の叫び声らしき物も聞こえる

「こんなのって・・・」

「・・・ドクターとか言ったか？あいつが・・・」

俺の心の黒い部分が大きくなる。

その時、階段の扉が勢いよく開く・・・そこには

「！・・・鈴夢・・・」

「・・・マリア？」

そこには黒いガングニールを纏ったマリアがいた

彼女はママと呼ばれる人物を担いでおり、逃げているのが分かるが・・・

・・・俺たちは睨み合う・・・

「鈴夢・・・貴方がどうして」

「・・・貴方こそ・・・何故そこにいるんです」

「・・・貴方には言えないわ。でも私たちには必要なのよ・・・私たちの悲願のために」

「・・・」

俺は静かに構えをとるが・・・

相手は武装した人間だ。生身の俺では勝てる見込みが無い  
と、その時、さらに酷い音が響いた

「っ！建物が限界か！」

「・・・話は後よ！早く逃げましょ！」

マリアが先行し俺達があとを追うように走り出す

「・・・俺は・・・うっ！」

と、走り出して数分・・・俺の身体が悲鳴を上げた

「鈴夢さん!?どうしたデス!?!」

「鈴夢さん・・・?!」

俺の身体が何かに持つていかれる感覚・・・これは

あの時の・・・黒い・・・

「ああっ・・・」

◇

「・・・ここはどこだ？」

再び黒い空間へと呼ばれたのか？

・・・と、考えていると

「よう。また来たな」

「・・・」

再びあの時の黒の戦士・・・俺が現れた

「警戒すんなよ？力を貸すだけだ」

「力？」

「ああ、悪くない話だろ？」

・・・しかし

「信用できるのか？」

「おいおい勘違いすんな俺はお前であつてお前ではないんだからな」

「・・・どうだか」

俺が呆れた感じで答えると黒の戦士は手を差し伸べる

「契約しろ。上位のな」

「・・・」

「もちろん代償もあるが・・・まあ、そこら辺は気にしなくてもいい。」

「人をやめるとかで無ければいいが」

・・・そう言うと俺は奴の手を取る



気がつけば切歌ちゃんたちに心配されていた・・・情けないな

「鈴夢さん!?!大丈夫デス!?!」

「ああ・・・なんとかな」

「・・・ここは崩れるわよ、早く逃げるわよ」

「マリアさんの言う通り・・・建物の被害は増大・・・限界を迎えようとしていたが・・・希望は・・・いつも自分の中に・・・」

俺の手にはいつの間にか何も無い・・・あの時とは違う黒いメモリが握られていた  
その黒いメモリは・・・願いに呼応するかのように発光したあと・・・緑色に染まる  
「行くぜっ・・・相棒!」

俺はその言葉と同時に二人を抱え、飛び降りる

「れ、鈴夢さああああん!?!」

「デ、デエエエエツス!?!」

叫ぶ二人を無視して俺は叫ぶ

「相棒っ!俺の声が聞こえるかっ!・・・お前は・・・お前はそんな奴か!俺の知るお前

をつ！本当のお前を取り戻せつ！俺は・・・

俺はここだアアアアつ!!!」

その時、俺の腰部分が光り、ベルトが巻かれる

「変身！」

俺は緑色のメモリを容赦なく押し込むと相棒が反応する

『行くぜっ！レッツビート！』

俺の身体は風に抱かれるような感覚に襲われる

やがて腕・・・胴・・・と鎧が現れ

「これがっ！俺たちの進化だ！」

俺の姿は・・・緑色の・・・虫をイメージとさせる戦士に変身していた

「鈴夢さん！気持ち悪いデス！」

「そこは我慢してよ!?俺たちの感動の再会なんだからさ!？」

しかし、俺たちの感動の変身は切歌ちゃんの矢のような一言に阻まれる

『はっはっはっ！俺たちらしいな！』

「・・・だな！」

しかし、俺たちにとってはこんなのは当たり前すぎた

馬鹿をやらかしたり、変なことをするにはこいつがいなきや困るんだ

「相棒・・・サンキューな！」

「どうでもいいけどっ！早く何とかして下さい！」

『・・・強気な嬢ちゃんだね・・・』

「それがこの子達だからな！行くぜ！」

俺が背中に意識を集中すると背中には蝶のような翼が生える

「凄いでス！そのまま飛ぶデス！」

「言われなくてもそのつもりだぜっ！」

俺はそのまま飛翔し、彼女たちをノイズから離れた所に下ろす

「・・・ありがと・・・」

「鈴夢さんは・・・どうするんデス？」

彼女たちを下ろすと当たり前のように質問がくるが

・・・俺は

「決まってるだろ？ノイズを駆逐してやる」

そう言うのと背中 of 鎌を担ぎ・・・俺は空を飛翔した

◇

．．．彼が空へ身を投げた後、私たちは無事に脱出が出来たが．．．  
「．．．鈴夢は．．．無事？」

．．．私は忘れる事の出来ない彼のことを心配していた

「マリア空よ」

「えっ．．．」

マムに指摘され、空を見ると

「まだっ！まだだっ！」

空を綺麗な翼で翔ける彼がいた

「．．．あれは．．．イガリマ？」

彼の持つている鎌．．．そして、姿から、切歌の持つ聖遺物．．．イガリマを想像してしまった

「マリア、一刻も早く拠点へ、この場を離れるわよ」

「．．．わかったわ」

そう言う私は今も戦う彼に背を向け、走り出す

．．．いつか．．．私のモノになると信じて

◇

鎌でノイズを切り裂くと、なんか不思議な感じがする  
俺だけが戦ってる訳では無い・・・そんな感覚がする

「・・・ふん。」

俺はさらに鎌を振るい、ノイズを切り裂いていく

『数は確実に減ってる！行けるぞ！』

相棒の言葉に応えるように俺はメモリを武器に差し込む

『ファイナルブレイクっ！リイイイーフッ！』

俺の鎌が二つに分裂すると俺は回転する

竜巻のようにまで回転が進むと、エネルギー弾がノイズを襲う

弾がノイズに当たると、ノイズは爆散していく

「・・・終わった？」

『・・・見てえだなあ・・・よかったぜ』

「ありがとな。相棒。」

俺はそう言うのと静かに地面へと降り立った・・・

◇



姉さんたちがついた頃には、俺がノイズを片付けたことで納得させたあとからセレナさんにこっぴどく叱られたけど・・・何故か優しく抱きしめられた。切歌ちゃん達からは前より抱きつかれるように・・・なんで？  
とりあえず・・・みんな無事でよかつたと・・・弦十郎さんに締めくくってもらった。

◇

「はあ・・・」

突然、俺はため息を漏らす・・・

まあ、理由としては

「俺が学園に来る理由はなんですか!？」

あろう事か学園へと来ていた

「・・・鈴夢くんは救急棒としてここに呼びました」

「うわー・・・適切な説明ありがとう」

と、何故か女子の授業にお邪魔させてもらってる・・・でも

「なんで水泳なんですか!?! 正当な理由を要求します!」

・・・季節が無くなればいいのに。

「ほら、鈴夢くんはモテますし、かつこいいですし」

「カツコよければなんでもしていいと」

「そうなりますね」

「ふざけんなこんちくしょー!」

壊れ始めた緒川さんに弄られ、絶賛テンションが下がり中です。

「まあ、司令からの頼み事ですし・・・」

「・・・やだ。やりたくない。」

が、頼まれたのならしようがない・・・

「やりますよ。やりますー」

そう言う緒川さんに笑顔で手を振られたので・・・俺は諦めて学園へとお邪魔した

## 第十詞　ハプニングだらけ

あー・・・だるい。

俺は全ての手伝いにおいて水泳の授業に参加させられていた

まあ、お手伝いだから文句は言えませんが

それでも一時間目から女子の水着を見るのはおかしくないですか？

キヤツキヤツ

・・・ほんとにだるい。

女子の水着の種類は豊富で、競泳からスク水までいる。

まあ・・・興味なしだけどさあ

「これは処刑かな？俺に対する処刑かな？」

ちなみにこのお手伝いに対して奏さんたちは否定されていましたが・・・最終的には彼女たちを俺の家に通すことで話が纏まった。

て言うか。これは事実上の死刑つすよね？

まあ、何はともあれお手伝いとして、役目を果たさなければ・・・

だけど・・・

「・・・」

俺も男だ。視線が自然と発達してる部分だったり目に目がいってもしようがないと思  
う

・・・大きいなあ。

ちなみに俺はどつちでもいいかな。

「・・・暑いな」

俺は水分補給をするが・・・

・・・ピー・・・

・・・全く・・・お呼びなのな

俺はみんなが集まるところへ、足取りを重たくしながら歩いて行った

◇

・・・授業は中盤を迎え、泳ぎ泳ぎタイム

みんながみんな、自由に泳ぎ始める

「元気だなあ・・・」

俺が一人、日陰に入りながら呟くと、突然、目の前に大きな胸が視界に入る

「っ!？」

俺は慌ててしまうが、直ぐに冷静を取り戻す

「鈴夢くん……私泳げないから一緒に泳ごう?」

「さつきまで普通に泳いでましたが?」

「あつ、ずるーい!鈴夢くんは私と泳ぐの!」

「いや。俺はのんびり、だんべりとここで寝そべってたいなあ……って」

ギャーギャー……

まずい。女子共が騒ぎ始めた

こう騒ぎ始めると、どうしてか止め方が全くわからない。

しかし、悩んでいる間もみんなが騒ぎ立てる音はうるさくなっていく

「あー……マジでだりい。」

俺はやれやれと思いつつも……そのままプールへと自分の身体を投下した。

◇

……いやあ、初めの水泳の授業が終わりひと段落。俺は一休みをしていた……だ  
けど

「次もお願いします。」

うへえ……水着を見るのはこの時間だけじゃないのね？

全く……俺の災難は終わらないな。

◇

時間は二時間目。

この時間は……地獄でした。

「鈴夢……お姉ちゃんに構ってくれよ……」

……だつて姉さんいるクラスだもん☆

「全く……姉さんはスタイルいいからモテるはずなのになあ……ブラコンだから。」

「何をお……私はブラコンじゃない！ただの弟好きで、いつも臭い嗅いでさらに、パ

○ツつかつて自慰をしてるだけだ！」

……今、聞き捨てならない言葉が聞こえたけど気のせいだよな？

そんなことはさておき俺は海パンを装着する。

「似合うなあ……鈴夢は」

「……姉さんはなんでも似合うなあ」

・・・お互いにフォローしあい。俺はプールへと身を入れるが  
「鈴夢ー！」

姉さんが俺に抱きつくためにプールへと飛んでくる

「ひい!?!」

「おらあー！」

・・・姉さんは見事プールへ着弾し、俺のパンツへと手を入れる

「姉さん!?!ちよー!そこ触らないで!」

「ふふふ・・・逃がさないぞ〜」

まずい。前にやられた時より上手くなっちゃる。

姉さんは正直テクニシャンすぎる。

だからどれだけ抵抗をつけようとも姉さんの攻撃は全部効果抜群なんだよなあ。

おまけに姉さんの身体つきは大人の女の女なんだよ。胸はおつきくなるし、お尻も肉付きがよくなくて、さらには耳元で優しく囁いてくる。

恐らくこれをやられて落ちないのは俺だけだと思う。

姉さんの攻撃が続く中・・・俺は、必死に反撃の糸口を待つ・・・そして!

「仕返しだっ!」

仕返しと言わんばかりに俺は姉さんの胸を軽く揉み、拘束を離れる

「んあつ！・・・鈴夢う・・・」

・・・少し寂しそうな声が聞こえたけど無視。俺は集中しよう。



・・・さて、時間は変わり、翼さんのクラス。

翼さんたちのクラスは、先輩だから・・・背の高い人も多いし、発育している人たちも多い。

・・・その中で翼さんは格別に美しいと思う

・・・恥ずかしながらずに水着を着こなす姿は、どつからどう見ても大和撫子？なんだよなあ。

・・・翼さんって大和撫子以外のイメージないのか？（作者）

・・・なんか天からの声が聞こえたが無視して全体を観察する

・・・翼さんとクラスの人たちを比べると、やっぱり全体的におっぱいとか・・・お尻とか大きい人が多いなあ。でも、それに比べ翼さんは少し小柄と言うか・・・成長途中と言うか・・・

・・・でも、翼さんが一番可愛いよ。うん。



姉さんたちや、響と誰がいいかって言われたら・・・僕には選べないよ。

ん？このセリフって・・・某ヤンデレアニメの・・・あの主人公みたいなセリフだな？おかしいな。

「・・・さて・・・翼さんに？」

と、翼さんの元に行こうとしたところ、同級生なのか・・・女子が近寄ってくる

「ねえねえ、私泳げないのよ。一緒に泳がない？」

ん？ちよつと可愛いいながら胸を押し付けて来るのをやめてもらえませんか？

・・・が、彼女は俺がオロオロしてる間にさらに身体を寄せ・・・お股まで俺に当ててくる

・・・ここまで来ると、限界なんですが？

「ねえ？いいいでしょ？」

「・・・ええ・・・」

と、彼女がさらに詰めようとした瞬間・・・彼女の後ろには・・・

「霧夜。何をしている？」

そこには絶対零度の冷気を纏った翼さんが立っていた

「・・・あ」

「あら、風鳴さん。どうしました？」

「……霧夜は私のだ。直ぐに離れろ」

あつ、目から光がねえな。

……と、ここまで来ると翼さんは誰かをやりかねん。

俺は女の人を振り払うと、翼さんを優しく抱きしめる

「あつ、……き、霧夜……」

「全く……翼さんは可愛いなあ」

……俺は翼さんの控えめの胸を味わいながら翼さんの髪を撫でてやる

「ひやつ!……くう……」

「よしよしよし。イイコイイコ（棒）」

翼さんが落ち着いたのを確かめると、俺は彼女から離れ、手を取る

「一緒に泳ごう?」

「ああ!」

何故か元気だけど、目にライトさんがいない翼さんと泳ぎ始めた

◇

そこから何事もなく。(錯乱)

最後。響たちの授業だ。

・・・響たちは・・・まともだと信じたい。

「・・・開始早々これだとなあ」

「んー・・・鈴夢くん（くんくん）」

「はあー・・・ごめんねー（くんくん）」

・・・開始早々、響たちの餌になったよ。

・・・詩織ちゃんたちは元気に泳いでるのに・・・響たちと来たら・・・

「全く・・・翼さんたちだけ楽しんで・・・我慢してたこつちの身にもなって欲しいな・・・」

「・・・」

響たちの目から光がないなあ・・・なんでみんながみんな・・・目から光がないんだよ。誰のせいでこんな子達になったの？

・・・お前だよ。お前。（作者）

「んだとゴラアっ!？」

俺は怒りを天にぶつけると、響たちを抱きしめる

「ふえっ!?!鈴夢くん!?!」

「一緒にTogetHERしようぜ!」

「いえー!」

俺たちは仲良く、空を飛翔する

・・・てか、抱きしめた際に響たちのおっぱいが俺の手に当たってる。

響は健康、姉さんよりは小柄だけど弾力のあるおっぱい。

未来ちゃんも翼さんと同じくらいか、もしくは・・・

・・・って、そんなことを考えてる暇はない。

・・・さて・・・とっておきだ！

「いくぜっ！ダイビングっ！」

全く・・・みんな元気だよな。



・・・さて、全ての授業が終わり

一人・・・プールにてくつろぐ・・・

このあとは自由時間としてみんな泳いでいた。

「いやあ・・・泳ぐのは楽ですなあ・・・」

「鈴夢と泳げて楽しいぜ！」

「鈴夢くん！早いよお・・・」

プールサイドでは翼さんや、未来ちゃんたちがくつろいでいたみんな・・・本当に楽しそうだ

「しかし・・・こんなことでここに来るとは・・・」

俺がラッコみたいに泳いでいると突然、姉さんが俺の顔を胸まで持つていく

「んー!?!」

「鈴夢ー!ひとはいないんだから・・・おっぱい吸つてもいいぞ?」

「(吸わねえわ!)」

心で叫びながら必死に抵抗するがここで問題。

「(!?!まずい!呼吸が!)」

プールは俺たちの首ぐらの深さまであり・・・姉さんの胸に顔を埋めるとなると、俺の顔は完全にプールへと浸かることになる

「ああっ!鈴夢う!」

「んがっ!?!」

「クリスちゃん!?!鈴夢くんが!」

響が気づいて助けに来てくれるが・・・

「・・・ちっ!鈴夢は渡さねえぞ!」

ダメだ、姉さんにスイッチが入った!くそつたれ!

「違うよ！鈴夢くんが！」

「うるさい！こつち来るな！」

・・・やべえ。息が・・・

姉さんたちの言い争いを最後に、俺意識を失った

◇

俺が次、目を覚ますと、みんなが俺を見ていた

「霧夜っ!？」

「よかった！目を覚ましたよ！」

俺は身体を起こし、状況を確認する

「・・・ああ、気を失ったのか・・・」

身体を起こすと・・・ふと、姉さんと目が合う

「すまん・・・その・・・」

「いいんだ。姉さんに悪気はないんだよ」

姉さんを慰めていると・・・ふと、違和感を感じる

なんか・・・みんなの視線が泳いでるんだよ

「・・・まさか？」

俺が唇に手をやると・・・すこし、水とは違う湿り気を感じる・・・もしかして・・・  
カア／＼／＼／＼／つとなる皆・・・

「・・・まじかよ。」

後悔した時は・・・時すでに遅しと、知った時だった

## 第十一詞 宣戦布告

休日。俺はバイクで大地を疾走していた

・・・今日は特にやることもなく、そこら辺をぶらついていただけだ。

家にいれば姉さんたちの攻撃に合うし、二課に行けば奏さんが襲ってきて、リディアン周辺でも気配を察知した翼さん達による襲撃に合う

あれ？肉食系女子？

いや・・・あれは気の迷いだと思う。

さて・・・何をしようか。

・・・と、思うと何を思ったのか、ある場所でバイクを止める

「アニ〇イト」

俺は一言言うと、聖地に足を踏み入れる

わあ・・・やっぱり・・・

周りを見れば、なのはやらハルヒのグッズが置いてある

「すいませーん。ハルヒの制服置いてません？」

「ありますよー」



あんのかい。そこは無い、にしてくれよ。

そして律儀にハルヒの制服を持ってくる店員さん・・・優しいなあ。平和主義者ってこういう人を言うんだらう。

「ありがとうございますー」

「うーっす。」

ハルヒの制服を買ったところで次は

「いらっしやいませこんにちはーいらっしやいませこんにちはーいらっしやいませこんにちはー!」

「BOOOOFFかよ。」

なんだあの店員、サンド○イッチ○ンの富澤さんかな?

さて、某ハンバーガー屋に来たところで俺はいつもの注文する

「Salt Lakeで?」

「テイクアウトね。」

ソルトレイク?意味わかんない。

さて・・・そろそろトレーニングに・・・と

思っていると、野良猫を見つける

「ん?なんだ?欲しいのか?」

俺は猫を膝に乗せ、くすぐったりして可愛がる

「んーここがええんか？ここがええんやろ？」

ごろごろごとと俺の膝で転がる猫さん。うーん。可愛いねー

と、俺たちはバイクの上で遊んでいると

・・・ん？あれは・・・

と、街中を歩いているセレナさんを発見する。

「・・・声かけようかなあ・・・」

・・・これまでの俺への態度からして向こうは恐らく俺のことを嫌っているのだから・・・

・・・俺が彼女に何をしたのかは知らないけど

でも・・・埋め合わせはしないと。

俺は猫を肩に乗せると、セレナさんのところへと歩いて行った

◇

「セレナさーん」

「ふえ？あ・・・」

突然、後ろの方から私を呼ぶ声があるので振り向いてみれば……そこには鈴夢くんがいた

「あ……」

今思えば……彼にどうやって接すればいいのか……わからなかった。

私たちのせいで心に怪我をおった少年を目の前に……私は頭が真っ白になった。

「えっと……」

「奇遇ですね。……?どうかしましたか?」

……私は……勇気がなかった。

姉さんの好きな人が、敵で、さらには非情な人だと思つてたのに、実際に話してみれば、彼は優しくかつこよくて……私も惹かれてしまった。

でも、今思えば……姉さんの好きな人だからって我慢してたのかも……

もしさつきの事が本当なら……私は……

「セレナさん?」

「!? ひゃい!」

「……固くなつてもなあ……」

……あなたのせいじゃないの。

……切歌たちが鈍感って言うのもわかるわね……

「?猫・・・」

よく見れば、彼の肩には猫が乗っており様子からして彼に懐いてるようだけど・・・

「・・・野良でしょ?大丈夫なの?」  
「・・・これからお買い物に行くんですよ。一緒に行きます?」  
「・・・ほんとに奇遇ね?私もですよ」

「ほいじゃあ行きますか」

私たちはそう言うとお互い、距離を置いてだが・・・歩き始めた



・・・二人で買い物中。

・・・来たのは何故か女性用下着のお店。

・・・あれ?俺の意思ガン無視ですな?

「・・・私たちの下着とか全部向こうに置きっぱなしなのよ。だから・・・ね?」

「あー・・・あつ・・・(察し)」

「・・・私は買いに行くけど・・・覗かないですよ?」

「覗かないよ。俺は紳士とかじゃなくて、ただの餓鬼だからね?」

俺はそれだけ言うと、某アイス店へと向かう

「・・・いじわる」

セレナさんは何を呟いたかは不明だが・・・少し悲しそうに下着店へと入っていった

「にゃー・・・」

「ふむ。お前は呑気でいいなあ。」

俺は既にアイスを購入し、ペロペロと食べていた。

あつ。一番好きなのはストロベリーね。

◇

・・・ペロペロと食べてると、店員がこちらにやってくる

「あの・・・お客様をお呼びですが・・・」

「ん？俺？」

「にゃー」

「はい・・・」

「行こう。」

そう言うとは故か。女性用下着の店へと通される

何故にここか。その謎はすぐ晴れた

「……?」

場所は試着室前……理由はすぐにわかった

「ん……鈴夢くん?」

「……あ。人違いです。帰ります」

「待つて!せめてホックを外してー!」

「何ではめれたんですか!逆に不思議ですわ!」

セレナさんが俺の腕を掴んで必死に止めるが……止めてくれ!せめて俺より人目を気にしてくれ!

店員さんにはここにこしてるし……つて!彼女とかじゃないですからね!?浮気とかしたら物理的に誰かに殺されそう!

ー学園ー

「へつくし!……うう……誰が噂してるのか?」

「……霧夜の身が危ない気がする。」

ーーー

……お互い落ち着き……とりあえず俺はセレナさんの……ぶ、ブラジャー?のホックを外すことに。

最近ではバックより、フロントホックの方が外しやすいとかで人気もあるのに：：何故これに。

・：：まあ。外せないのなら外してあげようじゃないか。

決してやましいことなんてありません。

恐る恐る俺は、セレナさんの背中へと手を伸ばす

チョンつと、少し指を触れるだけでセレナさんからいろいろと違う：：危ない声ができる。

「んっ：：あっ：：」

やましいことなんてないんや（2回目）

しかし、セレナさんの肌はすべすべだな：：

なんて言うか：：外国人なのか？セレナさんは：：なんか白い肌に触れると、癖になつちやうんだよな

姉さんと似た感じだ：：優しい感じがする。

切歌ちゃんやんと調ちゃんやんが「セレナはママみたいな人デース」つて、言うのがわかるなあ。

・：：とか言ってるうちに、セレナさんのブラのホックが外れる。

・：：もうやめてくれよ？

「……終わったんで、俺はこれで……」

「待って。」

そう言うのとセレナさんは俺を鏡の方へと寄せる

「ちよ!?!セレナさん!」

「……静かに」

そう言われ、静かにすると

ザワザワ……

外から声が聞こえる

「……どうする?このまま変態扱いがいい?」

「……時間を忘れてたわ。」

この時間は……お昼になるまで続いた。

全く……なんでこうなるんだ?

この日も……つぐづく運がないと思った。

◇

……次に買い物に行くのは……



「食料ね。」

「ですなー……」

……セレナさんたちはセーブハウス……なのかな？

実際にセレナさんたちの所有してる家に行ったことないからわかんないけど、とりあえず食費がやばいんだろうな。

まあ、育ち盛りの三人だからねえ。

……結構食べるんだろうなあ。

「……失礼なこと考えてる？」

「大丈夫だ。問題ない。」

……失礼なこと？ 考えてるわけないでしょ。

「んー……何にしようかな……」

「セレナさんはお母さんか何かで？」

「なっ!?!」

……俺の一言に動揺するセレナさん……可愛いな。

顔を真っ赤にして……全く……恥ずかしがることじゃないでしょ？

……全く……照れ屋さんだな。

……と、街中を歩いていると、突然……

ザザザザ……

「ん？テレビの調子が悪いのか？」

「……ほんとね……嫌な予感が……」

その予感が当たるように、モニターにはマリアさんの姿が映し出された

『……全世界の皆へ告ぐわ』

「!?姉さん！どうして！」

「トイツ！発信源は！」

『特定してるっ！待ってるよ！』

彼女は表情を変えずに言葉が続ける

『私たちはいよいよ成すべきことを成すわ。それはどれだけの犠牲を払おうが関係な

い』

「……姉さん？何を言ってるの!？」

「……セレナさん！あれは多分君の知るマリアさんじゃない！トイツ！」

『特定出来た！廃墟から放送されてるぞっ！』

「よし！行こう！」

俺はそう言うトバイクへとまたがる

「セレナさん！」

「っ！」

セレナさんも後ろに乗せて、テレビをつけながら走り出す

『遊びは終わりよ。私たちを馬鹿にした連中・・・関わる奴らは皆殺しにするから』

「・・・大量虐殺つてか・・・シヤレにならないぜっ！」

俺たちは唇を噛み締めながら・・・放送源である廃墟へと移動する・・・

そこで待つものを・・・俺たちは知らなかった。

## 第十二詞 争いの火種

ブロロロロロ……

マリアの宣戦布告……それは彼女が世界の敵に回ることを意味した。

彼女の事を知らない人はいないと思う。

だけど……こんなやり方は……

——

マリアの宣戦布告の後。俺たちはバイクで駆けていた

「どうしてこうなる！」

『落ちて着け相棒！運転が雑になってる！』

「……わかってるよ。」

しかし、急がなければならぬ。

あの宣戦布告してきたマリアがマリアではないなら、俺たちはそれを確かめるしかないからだ。

「……大丈夫だ。彼女はあんなことしないさ」

「姉さん……大丈夫よね？」

「……」

後ろで不安そうにする声に……俺は聞く耳を持たなかった。

◇

―宣戦布告の数分前―

私たちは、ある遺跡を見つけていた……それは

「フロンティア……」

「おお……間違いないっ！これこそがカストディアンが持ってきた遺産っ！」

……私は驚愕し、ウエルは喜び狂う

「……まさか本当にこんなものが存在してたなんて……」

「マム……」

私たちが驚く中、ウエルはテキパキと行動していく

「ささ、起動させよう！もちろん―僕が優先的にね！ふH A H A H A ははっ！」

……ウエルはそう言い、電子機器を片っ端から動かしていく。

「ウエルっ！あなた何が目的なの？」

「おんやあ!?!信用出来ませんか!?!最も!君たちを助ける権利は僕にあるんですからねえ!?!」

「ーっ!」

．．．私たちは口を閉じた．．．

ウエルはマムの治療．．．さらには私たちにLINKERの提供をしてくれてる博士だ．．．その提供が無くなれば．．．戦うことも、生きることも出来なくなる。

「．．．マム」

「マリア．．．今は堪えて．．．時期に彼らが来るから．．．あなたの信じる人が．．．」

「．．．ええ、」

．．．お願い鈴夢．．．私たちを助けて



「到着だっ!マリアさんは!?!」

俺たちは走ることで数分で目的の廃墟まで到達していた

しかし、中に入ればもぬけの殻．．．あるのは起動状態のパソコンだけだ。

「やられた!これは罠だわ!」

「っ！」

と、気づいたのも遅かった

ズガアアンと言う鋭い音とともに、建物が崩壊していく

「っ！爆薬か！いつの間にかこんな！」

「鈴夢くん！」

と、セレナさんがこっちに寄ってくる・・・だけど

「！セレナさん！」

「えっ・・・」

次の瞬間、俺たちは完全に瓦礫に飲み込まれてしまった。

◇

――二課――

「発信源の特定は！」

「今やつてます！」

鈴夢たちが瓦礫に飲み込まれる前、彼ら発信源を特定していた

「特定出来ました！例の廃墟です！」

「・・・クリスくんたちの予言は当たってたのか」

「どうしますか？」

「・・・俺達が行くしかないだろう」

他のみんなはそれぞれ別の場所にいる。しかも、罠の可能性が高くなると俺達が行くしかない。と弦十郎は考える

「わかりました。至急要請をかけます」

「頼むぞ」

と、次の瞬間であった

ズガアアンと言う音とともに建物が崩れたのだ

「！状況は！各装者は無事か！」

「確認します！」

・・・あおいさんや朔也さんが搜索を始める

「翼さんクリスさんOK！響ちゃんも切歌ちゃん、調ちゃんと一緒にいることを確認しました！」

「奏さん美月さんも確認！残りは鈴夢くんとセレナさんだけです！」

「・・・二人との連絡は？」

「それが・・・」



．．．と、彼らが連絡を入れるが  
彼らからの連絡は返っては来なかった



「雪音っ！今の音は!？」

決して遠くない場所にいた私たちだが．．．何かが崩れる音はしつかりと聞こえた  
「知らねえよ！確かに行くんだろ!？」

「．．．そうだな」

私がそう言うと二課から連絡が入る

『もしもし!?翼さん!?クリスちゃん!?無事なの!?!』

「あおいさんか！こちらは無事だが．．．何があつた!？」

『クリスちゃんたちが警戒してた廃墟が崩れたのよ!どうやら映像の発信源もそこらし  
くて．．．』

「証拠隠滅か．．．なんてことを」

しかし、その不安もすぐに消えることとなった。

「あなたたち．．．装者ね？」

「あ!？」

私たちを呼ぶ声がする……そこには

「悪いけど。それを私たちに頂戴」

そこには紫のような……暗い色に包まれた鎧を纏う、マリアがいた

◇

「なんですか!?!この音は!」

『建物が崩れたんだ! 廃墟だったところだよ!』

「それって……」

「私たちの拠点だったところデス!」

……私たちは朔也さんからの連絡で初めて建物が崩れたことを知った

「翼さんたちは無事なんですか!？」

『ええ。翼さんたち装者は健在……セレナさんと鈴夢くんを覗いてですが。』

その言葉を聞いた時……私たちの顔は青ざめた

「セレナ……って! セレナは無事なの!？」

「セレナは無事デス!?! それと鈴夢さんも!」

「二人とも落ち着いて！ほら！響も目を覚ます！」

私は未来に叩かれ、意識を取り戻す

「未来？」

「鈴夢くんが死ぬわけじゃないよ！信じてあげて！」

「・・・わかつたよ。」

そう言うのと学園の方から光が生じる

「っ！光！」

「・・・ネフィリム！」

調ちゃんがそう言ういうがその答えは朔也さんに否定される

『あれから高エネルギー反応！これは・・・聖遺物の反応です！』

この言葉が聞こえる直前に、私たちは不安を察知して走り出していた



・・・っ。私たちはどうなったの？

多数の瓦礫が落ちてくるまでは覚えてるけど・・・

ふと、私は不思議に思った

なぜ私に瓦礫が落ちてこないのか……と。

ポタツ……

と、私の頬に赤い雫が落ちてくる

……私は背筋が凍った。……恐る恐る上を見ると……

「……っ、大丈夫ですか？ セレナさん？」

「……っ!？」

そこには真つ赤に染まった少年が、私の盾となっていた

「鈴夢くん？ ……どうして!？」

「どうしてって……簡単じゃないですか……」

彼はその腕を動かさず、答えてくれる

「……誰かを守るのは……俺の仕事ですよ。みんなの……命を明日へと繋ぐのが俺

の仕事です……」

よく見れば、足にも怪我があり、状態からかなりの重症に見える

「っ！だからって！ 私なんかを……っ!？」

私がそう言うのと彼は残った足で私を吹き飛ばす

「行けっ！ その命は君だけのじゃないだろう！」

「……っ」

「君が成すべきことを！今！」

「……」

「……さようなら。」

そう言うのと彼女は走っていき……この場には俺が残される

「相棒……俺たちは……死ぬか？」

『……死んだらどうなる？』

「さあな。でもっ！」

俺は片手を瓦礫から外し、メモリを取り出す

血にまみれたメモリを、ドライバーに差し込む

「行くぜっ！俺たちはまだっ！死にはしないっ！」

『おっけー！火事場力メロディーー！』

俺たちはそのまま……新たな力を手にした

『チェンジ、メロディーイイイッ！ポイズンッ！』

……紫のような色が俺たちを包み……その場から光が飛び立った



・・・崩れた廃墟から走り続けると、私は緒川さんたちと、合流した

「セレナさん！無事でしたか！」

「緒川さん！鈴夢くんが！」

「・・・あの中ですか。」

緒川さんはあくまで冷静に分析する。

・・・でも！急がないと！

その時、彼のいるべき場所から光が飛び立った

「っ！あれは・・・」

「司令っ！廃墟から光が！」

『緒川っ！あれを追うんだ！もしかしたら行き先に行くのかもしれない！』

「了解です！セレナさん！こちらに！」

「ええ！」

私は緒川さんに勧められ車に乗り、シートベルトをはめる

「行きますよ！」

そう言うと緒川さんは車を出す。

彼かもしれない光は、私たちの通った道に戻っていく・・・それはこれからの争いを警告するものに等しかった



・・・いいですねえ。さすがは私のコマです。

私は彼女の様子をモニターして見ていた

「やはり復讐・・・不安、そして悲しみといった感情は潰け込みやすいですね・・・もつとも、彼が死んだと言われてはそうもなるでしょうねえ」

廃墟が崩れたとき、彼がいた事を私は知っていたし、セレナがいた事も知っていた。それを彼女に死んだと伝え、絶望させ、新たな力を与える。これが私の完璧な方法である。

あの聖遺物は・・・普通の方法では壊されないしやられない。

私はそう確信していた。

「くつくつくつ・・・いよいよですねえ。この力で！忌々しき装者たちを殺せるしい!?さにはあの餓鬼共も同時に消せますねえ!?ふっははひっ!?これがあ!?!私の完璧なあ!?!はっはっはっは!」

私はそう言い、腕の杖を見る

「後はア!?!ソロモンと私を融合させえ!?!さらにはネフィリムを強化すればあ!?!私たちの

勝利……いや！ 私たちの世界ですよお!？」

私はその場でぐるぐる回る……その顔は悦んだものになっていた

「さあ!?! 装者たちよお!?! 殺し合うんですよオ!?! でなければ私があ!?! あなた方を殺してやりますからねえ!?!」

私はぐるぐる回る……世界と同じように

唯一腕の杖だけが……希望を失っていないと……輝いていた

◇

「くっ！ マリアっ！ 何故こんなことを!」

「あなた達がっ!……鈴夢を返してっ!」

彼女は剣を振るい、私は刀を振るう

「ぐっ! 力が……」

「所詮その程度よ! この神獣鏡にかなうものはいないわ!」

「先輩っ! そこをどけっ!」

そう言うのと私は彼女と距離を取り、宙を舞うと彼女に大量の弾幕が当たる

「おらおらおらっ! もっと持ってけっ!」



ガトリングからミサイル・・・雪音の最大の火力が彼女に当たる  
・・・普通ならこれでやられるはず

煙が晴れると、そこから鏡が出てくる

「っ!?まさか防いだのか!」

「ありえねえ!これを防げるはずが!」

しかし、私たちの言葉を遮るように鏡から光が発せられる

「がああっ!?」

「雪音!」

その光は雪音を襲うと、シンフォギアシステムが解除される

「っ!?まさか強制解除!」

「所詮その程度なのよ・・・だけど私は違うわ!」

「くっ!」

彼女の剣を再び私は受け止め、対峙する

「何も守れないあなたたちとは違うわ!私は全部守ってみせる!」

「何っ!?」

「まだ分からないの!?鈴夢とセレナは死んだのよ!あなた達のせいだね!」

そう言うとき彼女は私を吹き飛ばす・・・そして

「さようなら、風鳴翼……」

光が再び私に放たれる……その時、彼女に向けて、光が落ちた

## 第十三詞 神獸鏡

「一体何が！」

私の目の前、光を遮るように何者かが目の前に立ち塞がった

「……」

その姿は……どこかシウルシヤガナを思わせる姿だった……しかし

「……鈴夢なの？」

私は喜びそうな声で問う

「マリア……」

「やっぱり！私に会いに来てくれたの!？」

「……違う」

彼の一言に私の気待ちは一気に崩れる。

どうして？じゃあなんでここに来たの!？」

「……お前を止めるためだ」

そう言うとは彼は両手のアームドギアを展開し、双刀を作る

「!?どうして！私は何もしてないのよ！」

「っ！ほんとにそう思うか！」

知らない……私は今の……今怒っている彼を知らない。

何故彼が怒っているのか……私にはそれだけが理解出来なかった

「これはなんだ！これは！」

彼は彼女たちを中心に指を指すようにする

「……それは不純物よ。私たちの愛を育むにはいけない……ね。」

「何が不純物だ！彼女たちは俺の大事な……家族なんだぞ！」

彼はそう言うのと地を蹴り、私に刃を振るう

「鈴夢！あなたは騙されてるのよ！」

「何がっ！俺は正常だ！」

嘘っ！鈴夢は私には優しい！優しくて、強くて……私の王子様なのにつ！

「くそっ！そいつらのせいなのね！」

そう言うのと彼と距離を取り、再び鏡を向ける

「閃光……」

「やめろおとおおっ！」

しかし、その光は彼女たちとの間に入った鈴夢によって防がれる

「鈴夢！」

「うっ！あがあああつ！」

彼に光が直撃し、彼はその場に倒れ込む

ああ、彼が傷ついている・・・癒してあげなきや・・・

私は少しずつ、ふらふらと彼に近づき、彼の肩に触れるが  
パシイ

何かを叩くような音と共に私の手は弾かれる

見れば彼は気絶しておらず、かろうじて意識を保っていた

「・・・っ！マリアっ！」

「鈴夢・・・」

彼が私の名前を呼ぶ・・・そう！それだわ！

私の名前を永遠と呼んでくれなくちゃ！

私はさらに、彼を蹴り飛ばし地面に転がせる

んー・・・実にきもちいい！

彼をどうにかすることによって私の中の欲が満たされていくのを感じた。

「マリアあああつ！」

しかし、彼はかろうじて立つと、私の名前を叫びながら突っ込んでくる

・・・気に入らない。

私は剣で受け止めながらも、確実な打撃を加えていく  
それと同時に隙があれば閃光を放てるようにしてある  
私に死角はない。

彼を再び吹き飛ばし、閃光を当てようとするが

ギイイイッ!

足のギアが作動し、彼の動きが変わる

彼の足のギアはローラースケートのようなものになっており、移動速度などが大幅に強化されたことになる

「っー!」

「あなたはこうしてこんなことをするんだ!」

「それはあなたのためよ! 鈴夢!」

私の刃と彼の刃が交差する

それと同時に私の意識は・・・徐々に私のものではなくなっていく

◇

俺はマリアさんと刃を交えるときさらに刃を交錯させる

まるで滑るような動きで彼女を翻弄しつつターゲットを俺に向け、俺が彼女を倒す。これが最適。

響たちが来るかは不明だが・・・そこは祈るしかない

「ぐっ！落ちろっ！」

俺はマリアさんに続けてダメージを与えるが・・・ふと違和感を感じた・・・それはマリアさんが突然棒立ちになったからだ

・・・そして棒立ちになった彼女はブツブツと言い始める

「・・・？トイ！行くぜ！」

『おっけー！行くぜ！』

そう言う俺の動きは早くなり、彼女へ向け加速しながら接近する

・・・そのまま双刀をぶつける・・・そう思ったが

ギイン

金属音と共に彼女の剣に防がれる

「っ!？」

「・・・」

彼女の顔のバイザーからは怪しげな光が立ち上る・・・そして

「春光」

次の瞬間、俺の身体の周りに光の粒が現れ、それが爆散した  
「ぐあああつー！」

俺はその衝撃に耐えれず・・・変身が解除されてしまう

彼女から立ちのぼるオーラ・・・それは負のオーラだった

「・・・マリア」

俺が彼女の名を呼ぶ・・・そうすると

「うふふふふふ・・・あははははははつー！」

彼女は狂ったかのように叫び出す

「・・・」

「鈴夢ー！」

俺が唖然としてっていると、後ろから翼さん姉さんの増援が来る

ブロロロロ

「ー！鈴夢くんー！」

さらに車と響たちが援護に来てくれる・・・

車からは緒川さんとセレナさんが降車、こちらに走って駆け寄ってはセレナさんが抱き抱える形で俺を保護してくれる

「姉さんー！彼は敵じゃないのよー！どうして撃つのか!?」



「マリア！目を覚ますデス！」

「マリアはあいつに操られてるだけなんだよ！」

三人・・・仲良しだった三人が彼女に語りかけるが・・・

「・・・無駄だ・・・彼女には言葉は届かない」

「・・・暴走か」

彼女は恐らくギアから出る力に耐えれない＋クソ野郎に植え付けられた不安と恐怖によつて支配されたのだろう・・・こうなつては彼女には何も届かない・・・できることは

「彼女をギアごと始末する」

それは俺だけが考えたことではない。恐らく二課全体が第一に考えることだろう。

だが、彼女を殺せば？

・・・後悔、恐怖、罪悪感が俺を支配して今度は俺がライダー・・・いや、人間ではなくなるだろう。

さらに彼女たちからの殺意を受け止めなければならぬ。

・・・それは・・・俺に出来るのか？

・・・俺は静かに一枚のメモリを取り出し、変身する

「変身」

俺の身体を白きメロディーが包み込み、ビート、ノーマルへと変身する……  
でも、これは俺の限界じゃない。

「やるぞ、相棒」

『おっけー！初めからクライマックスで行くぜ！』

俺はさらに白銀のメモリを取り出すとサブスロットへ差し込む

だが……みんなの意識は次のトイの言葉によって驚愕した

『エクストライブ』

「!?」

「発動」

『グレードアアアアップ！エクストライブ！』

白かったビートの装甲は本物の白銀に染まり、さらにエネルギー稼動式のような翼が生える

脚部もギアが強化され、腰に新しく剣が装備される

その姿は……天剣の騎士と呼べるものだった

「……マリア……君を解放する！」

俺は空を飛翔し、アームドギアを起動させた



「・・・すごい・・・」

「皆！大丈夫!?!」

「え!?!美月さん!?!奏さん!?!」

と、響たちが驚愕しているとそこに奏さん、美月さんがやって来る

美月さんは久しぶりの仮面ライダーノイズに変身してくる

「どうなの!?!ノーツ!」

『・・・』

しかし、奏さんたちは別の心配をしている様子・・・

「美月さん・・・何かあったデス?」

「・・・みんなに言うまいと思ってたけど・・・」

・・・奏さんたちが言葉を言わないのが腹たつたのか・・・クリスちゃんが美月さんの首元を掴む

「言えよっ！お前達だけで鈴夢を語るなよ!」

「クリスちゃん！落ち着いて！まだ語ってないから!」

「この人の力半端ないデス！ほんとに人間デスか!?!」

「……奏、美月、良ければ教えてくれ……私たちは霧夜のことを知る必要がある。」  
「……」

奏さんは少し間を置いて……

「……この前、セレナと戦ったあと、気絶してただろ？その時に検査したら……」  
「彼の身体は……人のそれじゃないのよ」

……私たちがこそ台詞を理解するには時間を要した。

ただ、この台詞からわかることは。

“彼は人間ではない。” そう言っているのだ

「ーっ！ふざけんなよ！」

クリスちゃん、美月さんからターゲットを奏さんに変え、首元を掴みにかかる

「クリスちゃん！」

「クリスさん落ち着くデス！」

奏さんは悔しそうにはしないものの悲しそうな顔を見せる

……この現実……今の私たちには重たすぎる。

私は今もマリアさんと戦う鈴夢くんを見る

……大丈夫だよ？鈴夢くん……



「鈴夢鈴夢鈴夢鈴夢鈴夢うううっ！」

「狂った女がつ！そんなマリアは大っ嫌いだ！」

「あれあれあれあれあれあれあれあれあれあれあれあへあれ．．．おかしいなあ．．．  
鈴夢があ．．．私のこと嫌いつてえ．．．」

マリアは狂いながらも俺に剣を振るう

ここうもなると．．．正直関わりたくないが．．．

「しょうがないなっ！俺が原因ならしょうがない！俺がつ！いや！俺が元に戻してやる  
よー！」

俺は空から響や弦十郎さんのやってる咆哮を真似した衝撃波を放つ

「ああつ！鈴夢の愛が痛いっ！もつと！もつと頂戴！」

「気持ち悪いっ！これが大人のやることかよっ！」

俺はさらに彼女を上空まで打ち上げ、そのまま膝蹴りで落とすが．．．

「鈴夢う！もつと！もつとお！」

「．．．気持ち悪いんだよ！あんたはああああつ！」

俺はさらに剣「シルバーソード・ドライブ」を抜き、彼女へと向け、突撃する

「痛い痛いー！」

俺は叫ぶ彼女のギアを腕から砕いていく  
が・・・そこまでだった

次の瞬間彼女は姿を消し、俺の隣に現れる

「っ！」

「あはっ!?! 終わりよー！」

・・・これで死んでしまう・・・そう思った時・・・

俺の中の・・・闇が姿を見せた

「・・・」

俺は静かに横からの強襲を躲すと、彼女の顔を両手で挟むようにして殴り込む

「あっ!?!」

「・・・」

その次に俺は彼女を蹴り飛ばすと、高速で背後に回り、さらに蹴り飛ばす

彼女に慈悲を与えない

「これで終わらせる」

俺はメモリを腕のギアスロットへ差し込む

『エクストライブ！限界突破！』

「ラストアタック！」

『ファイナルブレイクッ！ビィィートッ！』

俺は彼女を蹴り飛ばし・・・だが

彼女も鏡を広げ攻撃してくるが関係ない

「マリアああああっ！」

「鈴夢うううう！」

俺たちの技がぶつかり・・・そこには光ではなく閃光が生じ俺たちは衝撃に飲み込まれた

## 第十四詞 交わる物語。新たな時間

目を覚ますと・・・そこは二課の病室でした。

・・・この景色を何回見て・・・この消臭剤のような匂いを何回嗅いだことか。

俺は身体を起こす・・・と

「まったく・・・無茶するんだからアー」

俺の身体にのしかかるように、小さい少女が俺の上に乗っている

「・・・久しぶり。」

「ふん。やつぱり覚えてたか・・・とうっ!」

俺が一言発しただけで、彼女は俺に抱きついてくる

「ううっ。会いたかったよ・・・寂しかったよオ・・・」

「・・・はいはい。」

ちなみに彼女に会うのはこれが初めてではない。

「たすけてくれてありがとうー」

「あん時の猫だろ? 知ってる」

「えへへ・・・」



彼女はこの前、セレナさんとの買い物時に助けた猫……なのだが  
「なんで人の姿？」

「んー……やっぱわかってないか……」

そう言うのと彼女は俺に近づき……

「私は君の狂気……だよ？」

「……」

そう言うのと彼女は猫の姿になりすりすりしてくる

……しかし、その目には生気がない。

「……魔法使いじゃないんだし……どうやって猫になった」

「たまたま。魂をすーって変えただけだよ？もともとは君の狂気なわけだし……」

「……なるほど」

俺の狂気……まさかの

「……メモリがない。」

上の数式通り、メモリホルダーを漁っても黒い……シャドウメモリがない。つまり……

「ふふん。」

「……仮面ライダーオーズのアंकじゃないんだからさあ……」

「相棒は大事でしょ？」

・ ・ ・ と、メモリに戻ることを拒否る猫野郎・ ・ ・ 困るわ  
 ・ ・ ・ 別に猫になるのはいいけど・ ・ ・ 説明が困るんだよ

最近の翼さんたちは俺が女性と絡む以前に、女性が俺の事を見てるだけでも殺気立つ  
 し・ ・ ・

姉さんは色々困るし。

常識人のザババコンビは最近の抱きつきが酷い。

響は・ ・ ・ 前と一緒にだ。

・ ・ ・ この状況を説明すれば・ ・ ・ 恐らく・ ・ ・

ダメだ。到底説明なんか出来ねえ。

「いいか。俺と居るには条件がある。」

「なぐに〜?」

「まず俺以外の人が居る時は猫の状態のままです。人の姿になるのは俺と二人きりの時だけだ。」

「フム ( ) ⊗ ω ⊗ \* ( ) フム」

「んでもって出来るだけ喋るな。いいな」

「 ( ・ ・ ・ ㇿ ・ ・ ) b 」

なんだその顔は。なんか不満でもあるのか。

しかし、これで翼さんたちの殺意を無くすことが出来る。  
さて・・・起きて・・・

俺が布団から出ると、隣にマリアさんが寝てることがわかった

「・・・マリアさん・・・」

・・・俺は少し彼女の頬を撫でるとその部屋を後にする・・・  
彼女を救う戦いが・・・ここにあるのかもしれない。

◇

司令室では、俺が入るなり弾丸×5を食らった

その後、奏さんの蘇生により復活。

突っ込んできた中で一番痛いのは翼さんかな？なんか腰に刀が刺さってた。

次に姉さんかなあ・・・腹に銃口が。

とりあえず。俺は二課のメンツには一応の挨拶は出来たのだ。

「・・・大丈夫なのか」

「ええ。何より生きてることが証拠ですからね。」

しかし、俺の言っていることを信用してくれないのか・・・弦十郎さんを初め、二課の

人達は難しい表情をしている。

「……どうしました？」

「……いや、なんでもない。」

「……そうですか？じゃあ……僕は失礼します。こいつの餌とか買いに行きますので」

「(??ω??) ニャ？」

「行こう」

そう言い、俺は二課を後にする。

俺の服の隙間から見える肌が人のものじゃなくても……



……二課では。

「……了子。いや……フィーネ。説明を頼む」

二課の大きなモニターの前には白い白衣に身を包んだフィーネが立っていた。

了子と同じ眼鏡を掛けて彼女は静かにモニターを指す

「……櫻井 了子の調べた結果。彼の身体では侵食が始まっているという仮定まで辿り

着いた。」

「仮定？」

「ああ、この世界の・・・いや。それこそこの時代にはありえないような・・・な。」

「・・・どういうことだ。」

「仮面ライダーと言うのは特殊だな。」

「フィーネはある本を取り出す

そこには・・・

「・・・仮面ライダー・・・スーパー戦隊・・・？」

「古代の本らしいな。彼の部屋にあった。」

「・・・鈴夢の部屋？」

「クリスが眩く。すると装者たちの目が鋭いものに変わる

「了子さん・・・まさか。」

「・・・」

「翼が刀を取り出す・・・不味いな。」

「・・・まあ待て。とりあえず了子の話を聞こうじゃないか」

「どの道このままでは彼のことも聞けないからな

「俺が一喝すると、皆静まり、静かに座り込む

「話を続けてくれ」

「ええ。それで……この前のネフィリムの残骸を回収してそれで……」

フィーネは一呼吸置くと

「彼の身体から、聖遺物の反応が出てきたのよ」



……俺は二課を離れると、街を歩き回る

「さてーお前の餌を探そうかねえ」

「? (・▽・)? ニヤー」

「ん? ここがええんやろ? ここが」

俺は猫をとりあえず撫でてやる。

どうやらこいつが気持ちいいと思う場所は頭らしい。

だけど俺は軽いSだから。こいつの腹も撫でてやる

「にやっにやっ (・?・ω・?・?) ( ) ♡」

「ほらほら〜」

こいつとしばらく遊んでると。

ドンッ

「あつ・・・」

「おっ?」

誰かとぶつかってしまい、不意に猫を落としてしまうが

「よっ。ほっ。」

それを一瞬で姿勢を低くして腕でしっかりと抱き抱えてやる・・・ふむ。毛がフサフサしてて気持ちいい。

「ええつと・・・大丈夫ですか?」

「うん・・・君は?」

「ええつと・・・私は」

俺は金髪のきれいな女性に尋ねる・・・そこに

「フェイト〜!」

「!アルフ!」

「??」

獣耳を生やした女の人を迎えに来る・・・あつ。俺痴漢で捕まるかも。

とりあえず俺はこっそり・・・こっそりと帰ろうとするが

「おい。」

「・・・はい。」

女の人……アルフさんに呼び止められ、俺はそろりそろりと後ろを向くと……

「ん？お前……どこかであつた気が……」

「へ？」

そう言われ、彼女に近づかれる……

いやいやいや。アルフさんスタイル良すぎでしょ。この人何？何人？外人？黒人？

白人？メステイソ？ムラート？インディアン？アメリカン？ガイジ？

とりあえずどれにも当てはまらないのでパスかな。

とりあえず俺は彼女を引きはがす

「悪い悪い！懐かしい匂いがしたからよ……」

「気にすんな。たまにある事だよ。」

「シャー！（「ωω」）」

……こいつが威嚇してるけど……無視していいよな？

「どうやらこの猫には嫌われたのな」

「……そうみたいだな。すまねえ」

「ですね……すいません。」

俺は謝ると、その場に落ちてた黄色のナニカを拾い……

「ほい。次は考え事しとんなよ。」



そう言い、その場をあとにした。．．



「．．．犬？」

「ワン？」

俺の歩きたい通路に、捨て犬らしき奴が一匹。

「．．．こつちおいで。」

「トコトコ（（（（（（（（つ・ω・）））））））」

犬はこつちに歩いて来ると、足に頭を擦り付ける

「．．．顔が汚くなるぞ。ほれ」

「わふう」

俺は犬を抱き抱え、歩き出す

「犬はええなあ。可愛いし、毛はフサフサだし．．．」

「ひ．．？．．ひくうーん」

「でも母さんがなあ．．飼ってくれるか．．．」

「．．．（☒・ω・☒）」

「……ごめんな。飼えなくてよ」

と、歩いていると、ふとペットショップが目に入る

「……ここかな。」

俺は犬をその場に置き、ペットショップへと歩いていく

……犬は寂しそうだったけど……少しだけだからな。

……

しばらくして俺が戻ってくると、金髪の少女が犬を可愛がっていた

「……？この子の飼い主ですか？」

「……違うけど。君は？」

「私も違います。この子は……」

「捨て犬ですよ。」

俺はそう言うのと、犬のために買ってきた生活必需品物を犬に着させる

「……そうなの？」

「うん。良ければ引き取ってくれない？」

「……わかった。母さんに聞いてみる」

「……ありがとう。」

俺はそう言うのと、帰り道へと着くが……

「ぺろぺろ」

「……ん？まだ着いてくるのか……」

俺は犬を抱えると、彼女に渡す

「じゃあ……また会いに来るから。その時まで大きくなってくれよ」

「わん！」

「じゃあ。」

俺は金髪の少女に犬を託し……その場を去っていった。



……確かこんなこともあった気がするが……忘れたなあ。

てか、俺って以外にクソ野郎なのな。無責任すぎてワロタ。

……いや。死んでるって思ってた逃げただけなのかなあ……

「さて、猫よ。お前の名は田中……いや、佐藤さんだ。」

「……にああ。」

「冗談だ。お前の名は……チルカだ。よろしくな」

「ふにやあー！」

さて・・・猫の名前が決まったところで・・・俺たちは家に帰る・・・  
また、日常が、戻るといいなあ

◇

さて。場所を変え、家に帰宅・・・するじゃん？

「・・・おかえり。」  
ぱたん。

シラナイヒトガイエニイタゾ。

おかしいなあ・・・家のロックはしてあるしく鍵は数字式のダイヤルで特注最大の150桁なのになあ。おかしいなあ〜なんで解けたのかなあ。

・・・まさか盗聴・・・なんてしてないよねー？

「さて・・・玲奈さん？家にいる理由を聞いても？」

「最近構ってくれない。」

「・・・そりゃあ最近は戦ってばっかだしよオ・・・さらには俺だつて傷ついたりしてよお・・・大変なんだぜ？」

「知ってる。話は聞いてたから」

んん？今の発言は聞き逃せませんなあ。

「盗聴でもしてるのかな？」

「ナンノコトカシリマセン。」

「これが言論統制かー面白いなあー」

「使い方間違ってるけど多分ね？ね？ね？（3度目）」

「・・・とりあえず・・・横になる？」

「こーとーわーらーぬ。」

「おっけ。じゃあ寝ようか」

「その前に猫を飼わせろ」

「猫？」

そう言うと俺は先程から頭に乗ってた猫を玲奈に見せつける。

「大きいね。メス？」

「・・・何故わかつたし。」

「雌犬の匂いがする。」

「・・・こいつ猫やぞ？」

「じゃあ泥棒猫」

「・・・おーけー。俺たちの間に重要なのは会話だということがわかつた。」

とりあえず説明。

ー説明中ー

「ふーん。拾ってきたのかア・・・で。どういう関係？」

「あのー・・・話を聞いてますか？」

「・・・ふにやあ・・・」

おっと、猫さんが眠たそうにしている。これはあかん。

「玲奈。悪いがまた今度にしないか？会えたのは嬉しい。うん。嬉しいよ？でもほら。

俺たちは仮にも学生だからさ？」

「鈴夢は学生じゃないのに。」

「・・・そうだけど。でもほら。互いのプライバシーつてのは守ろうぜ？」

「・・・でもー・・・」

「ゲデモノ食ベに行くか、俺とデートするかどっちがいい？」

「そうだね！プライバシーの保護は大事だもんね！またね！デート期待してるよ！」

俺が問いかけた一秒後、そんな声と共に玲奈が俺の視界から消える・・・どこいった

？

まあ、消えたならありがたい。

「さて猫さんやーお昼寝タイムよな・・・」

「(??ω??) ニヤ？」

猫さんは俺の布団へと入ると枕を頭に引いて、まるで人のように寝る……こいつ。なかなかやりおるな。

「……それじゃあ……俺もおやすみ」

俺も布団へと入り、今日の疲れを取る。明日……いい目覚めであるように……な  
?

## 番外編 病みなんてないんや。(クリス+奏編)

クリス編

・・・ふあああつ。

激戦の続いた日が過ぎ。敵さんの動きも減った。

ウエルたちがどこにいるかわからない中。行動するのは無駄だと感じたようだ・・・  
そのため俺達にはしばらくの休暇が与えられたが・・・

「鈴夢ー♪れーいむー！」

「・・・痛いよ。姉さん」

「むー・・・わがままな弟だなあ・・・おっぱいいいる？」

「いない。そこまで餓鬼じゃない。」

俺は姉さんの攻撃を避けながら、ご飯を作る

当然、火はつけてるので、危なくならないようにそこはガード、さらにフライパンを  
持つ手が滑らないように、滑り止めの手袋を着用。

まったく・・・朝からうるさい姉さんである。

「ほらほら。朝食できるから座った座った」



「むー……」

姉さんが渋々座つたのを確認し、俺は美月さんを起こしに行くが……

「スキあり！」

「懲りないなあ……」

それでも抱きつこうとする姉さんとの攻防は、長く続いた。

◇

場所は変わり、リディアン。

俺は非常勤講師として、一応、音楽系の授業の補助を担当している。

その他、体育とか……

……別に俺が頼んだ訳じゃないから。勘違いするなよ？

ちなみに担当は姉さんのクラス。

……姉さんのクラスの人は優しい。放課の時も姉さんに絡んであげられる優しい人

達ばかりなのである。

だが……心配してた俺が馬鹿みたいだな

正直姉さんは性格があんなのだから……友達は出来ないとか勝手に思ってたけど

それでも無いらしい。

姉さんを受け入れてくれる人達でよかったよ。

「よかったなあ……」

「にやあ……」

「よしよし。ここがええんやろ？」

……俺が教室の片隅で猫を撫でているとそれを見た人達は

「あれってクリスちゃんの弟？」

「かつこいいなあ……写真撮っていいかな？」

……ふむ。目立ちすぎてるのか？

しかし……その視線に混じり……違う視線が……

「……姉さんか。」

「(ω・ω・ω)」

姉さんが目を凝らしてこっちを見てる。……くつ。やるじゃないか。

何気に先生にはバレてないからなあ……凄いなあ。

……さて。そろそろ放課かな？

俺はカバンから弁当を取り出すと同時に、放課を知らせるチャイムが鳴った。



「雪音さんの弟かつこいいねー、こんな弟が欲しいなあ・・・」

「弁当も美味しいし！お兄さんでもいいなあ」

「あははは・・・美味しいなら何よりかなあ・・・」

「鈴夢・・・デレデレするなよお？」

「してないよ。(迫真)」

「まったく姉さんは面白いこと言うなー姉さんが好きに決まってるじゃないかー(白目)」

あつ。もちろんそれは兄弟としてであり、決して彼女にしたいとかではない。

彼女にするなら・・・そうだなあ

「あおいさんかなあ・・・」

「(ガシツ)」

と、このように名前を出しただけでも姉さんはボディブローをキメてくる

さらに俺の耳で皆に聞こえないように呪詛を呟くのだ

「鈴夢鈴夢鈴夢鈴夢鈴夢鈴夢鈴夢鈴夢鈴夢鈴夢・・・」

あー薬キメてる人ですわこれは

と、悠長に言ってる暇もなくこれはヤバイ。

「雪音さんって弟さんと仲良さだねー」

と、このように返されるのも不味いし・・・なにがヤバイかと言うと

「なあ鈴夢、あおいさんの方がいいのか？あおいさんのどこが？顔か？髪か？体型か？それとも・・・冗談で言ってるのか？」

いえ冗談ではないですけども。

正直ここまで病んでくると姉さんはなんでもやりかねない。次の俺の一言で恐らく人が一人消えるだろう。

正直消すなら北の・・・ゲフンゲフン。作者にしてくれ。

「えっ？呼んだ？」「ー、ー、」チラッ」

「(・▽・)カエレ」

「ひでえ(・・・)」「」

まったく・・・こいつはどのポジションなんだ？

まあとにかく・・・これで作者は引きこもるから次の投稿は無くなるな(ウソ

「鈴夢。どうなんだ？」

あつ、しまった。姉さんの話を聞いてなかった

「どうって言われてもなあ・・・人の好みがあるから・・・」

「……」

「でも姉さんの方が好きかな。」

「!? ……どうして?」

「可愛いもん。(正直)」

「(ずっきゅーん……バタツ)」

と、上の会話をこなすと何故か姉さんが倒れた

「クリスちゃん!」

「雪音さん大丈夫!」

「衛生兵ー!!」

「……クマったクマった。」

俺は姉さんを寝かすとりあえず保健室へ走った

姉さんの顔は……うん。幸せだと思おうよ

◇

午後の授業は特に何も無く。俺は家へと帰宅しようとする。

そのために俺はバイクへと跨るが

「れーいむ♪」

「……」

「あつ！無視するなあ！私も乗せろ！」

「わかったわかったから。イチイバルをしまつて。」

と、姉さんにもヘルメットを渡すが……

「随分派手なヘルメットだな。」

「……いいじゃん。兎可愛いじゃん。」

「……照れてる鈴夢も可愛いぞ？」

「行くよ。しつかり捕まつて……つて！どこ触ってるんだよ！この⑨は！」

その後の騒動をなんとか終え、俺達は帰宅した。

ああ……姉さんは変態だな。



### 奏編

……俺は朝ごはんを作ったことを確認すると部屋を出て、目の前に止まつてる車へと走る

「時間は大丈夫ですか？」

「数分の遅刻だ。まったく・・・大人の女性を待たせるなよ」

「ごめんごめん。それじゃあ行こうか」

俺は奏さんが運転する車に乗ると、シートベルトを着用するが・・・

ギュー・・・つと

「・・・奏さん？」

「はぁ・・・私の鈴夢だぁ・・・ずっと守ってきたー鈴夢がー」

「・・・この人は何を言っているのか。」

数分後になり。俺たちを乗せた車は走り出した。



場所を変え、俺が所有する別の建物へ

「凄いな。これほどのスタジオを所有してるのか」

「まあ、ピアノとか普段は置いてるけど今は調整中だからね。」

「ふつつ、本当に音楽が好きだなお前は」

「奏さんも音楽好きなんですよ？」

「昔はね」

奏さんはそう言うのと俺に近寄ってくる

「でもな、今は本当に好きなやつが出来たから・・・音楽以上にそいつを守りたいと思っただよ」

「・・・彼氏（設定）である俺以上に？」

「そう思うか？」

と、突然俺の視界から奏さんが消える

俺が周りを見渡すが・・・奏さんの姿はない

「・・・っ。」

と、背中に重みを感じる・・・

「ふふっ。私の鈴夢・・・ずっと守ってきたんだからな？」

「はあ。」

「ため息か？なにかあったのか？・・・もしかして雪音か？翼か？それとも他に迷惑をかけるやつでもいるのか？そうなら私が守ってやるからな？」

「アリガト」

・・・ああ、レアな奏さんや。この状態になると一方的に引っ付いてくるんだよ。んでもって何？守ってきた？・・・心当たりのある脅威が多すぎてわかんねえわ。



とりあえず奏さんや。離れてはくれませんかのお

「離れて欲しいか？ならほつぺに欲しいな」

「聞こえない聞こえない」

なんでこの人は心の中で読んでくるんだ！

心を読むのは東方Projectのさとりんですら十分なんだよオ！クソっ！新しく幻

想万華鏡買わなきゃ！（作者

「・・・聞こえなかったか？鈴夢の唇が欲しいんだよ。ほつぺにな」

「言い直す必要ないよね」

「ん？恥ずかしいのか？そうか・・・」

おつ。理解してくれたか。当然だよなあ、年頃の男が大人の女性を自分のものにする

のはちよつと・・・

「なら唇にならしてくれるか？」

・・・ドウシテコウナッタL（\*、ω、\*）L

なんでやあ！理解してくれたんと違うんか！

「・・・困ったなあ。こんな時は！」

○デイレ法律事務所に相談だア！

と、携帯を取るが「シュツ」と言う音と共に俺の手から携帯（ガラケー）が取られ、奏

さんの膝で真つ二つにされる

さらにドアを謎の鍵で閉められ密室状態に……あつ。これ詰んだやつや。

「私はずつと、ずーつと！鈴夢を守ってきたんだ。……なら当然、私にも鈴夢を好きにする権利があるよな？」

「鍵がアカン。」

やべえ。いつの間にか窓の鍵も別もんになつとる。いつの間にか完全な密室になつてるやん。

そして部屋の端には……

ん？端？

ベッド「壁」／・x・）・x・）ノチャオ♪

「……にくげるんだよろ！」

「逃がすか！今日こそ私のモノにしてやるからな！」

「やれるものなら……やってみな（・・▽・・）」

「3分間待つてやる！」

「走れメロスっ！息子を死なせるなっ！」

（この後ここを借りに来たセレナさんにより説教を受けました

「まったく……こんなのを姉さんが気に入ったと思うと……」

「セレナさんマジ天使」

「／／／／／」



おまけ

今日は疲れた。

「・・・姉さんも奏さんも少し自重してくれたりいいのに。なんでベタベタと引っ付くのかねえ。」

俺の事が好き・・・なんてことは死んでもないやろ。ないと信じたい。  
奏さんも姉さんも、からかい上手だからな。

まあ、本当に好きな人が出来たら・・・ね？

「おやすみ。」

・・・

と、寝るじゃろ？

「・・・で、なんで隣にはお二人がいるのかなあ。」

「ん？いいだろ添い寝ぐらい」

「そうそう。雪音の言う通りだぞ」

「いろいろな人を敵に回すのですがそれは。」

まあ、寝るのはいいよ。でも……

「……いくらなんでも強調し過ぎじゃないですかね？」

「むー鈴夢なら色気に誘われて野獣になるかと思っただのに。」

「知らない人に着いていけない。これ絶対。」

「じゃあ私達はいいんだな!？」

「いえ。そんな変態な姉さんは知りません。家には優しくて頼りになる姉さんしかいないですね。」

「明日は早いからな！おやすみ！」

と、姉さんはこのように適当に言っておけば対処できます。

問題は先程から背中に抱きついてる人よ

背中には柔らかなボールが二つ。空気はいい感じで入ってるようです。

そして極めつけは足ですね。見事に絡ませて動けないようにしております。

そして耳元では

「鈴夢の背中は小さいなあ……雪音が守りたくなるのも分かるぞ。だけど後ろだけじゃ足りないから前も欲しいなあ」

変態だ。変態が居ます。

「一つ質問いい？」

「なんだ？ 私たちに答えられる範囲なら答えてやる」

「・・・どうして俺に執着するの？ そろそろ他の人でもいいんじゃない？」

と、言葉を発していると後ろの奏さんに違和感を感じた

先程までソワソワしていた手が動きを止め、俺の服を掴んでいる。

さらに絡みつく足はすごい力になり、離さないと言わんばかりに締め付けてくる

「・・・鈴夢は・・・どうして」

「？」

俺が手を取りそうになった瞬間。奏さんが体位を変え騎〇位の体勢になる

「っ！」

「ふふふっ・・・ねえどおーしてれいむは私のことを嫌うのかなあ・・・」

「・・・チョットナニツテルカワカラナイ（。ㇿ）」

俺は先程までの甘えん坊から突然変異してしまったこと人に対して唾然とすることしか出来なかった。

ただ分かるのは・・・この状態は不味い。

隣の姉さんは・・・やべえ。怪しい薬で眠つとる。

「まあ、れいむは鈍感だから仕方ないけどー．．．ここまで来たらもうひけないかなあ」

「な．．．なにを(カタ(???) (???) カタ」

「ゆつくりく時間をかけて調教しなきゃ」

「．．．ダレカタスケテ」

「無理だよ．．．さあ、お互いの愛を育もう？」

「サツ(ω^三^ω^ ) サツ」

「よけないで！じゃないと殺すよ！」

「俺からしたら貴方が出す選択肢全てに死が含まれてるんですが！」

ああ．．．俺死んだな。(。▽。 ) ハハツ

## 番外編 黒い翼と白い翼 (翼十セレナ編)

## セレナ編

「むー……悩んだなあ」

いつものようにお買い物していると彼の姿が目に入る

「……むー……どうよ。チルカさん」

「にやっにやっ、(甘△甘)」

「うむ。それはそうなんだが……」

どうやら何をかうかで迷ってるようね……てか頭の猫はなんなの？

「はあ、詳しい人がいればなあ」

「……(ω・ω・?)ニャー」

「呼ばれた気がしたのだけど。気の所為？」

「セレナさん? どうしてここに」

「……呼ばれた気がしただけ。別に貴方のためじゃないわ」

「はいはい。ありがとうございます。」

私がせっかく会ってあげたのに! なんなの!?! あの態度は!

なにか悩んでたから私を呼んだんじゃないの!?!もう!恥ずかしがり屋なんだから!

・・・そう考えてると彼が突然

「セレナさん。切歌ちゃんと調ちゃんが好きそうなプレゼントってなんかありますか?」

「・・・どうしたの急に」

「いやいや。仲良くなりたいたいから。最近よく避けられるんだよねえ・・・」

・・・それってただ単に貴方が好きだから・・・照れてるだけじゃ

「・・・蟹かハムか・・・何がいいかな」

・・・貴方は今日をお歳暮が何かと勘違いしてるのかしら

でもそれが彼のいい所よね。そして奏さんの言ってた守りたい部分でもあるのかも

ね

「むー何がいいのやら」

「・・・そうだ。今日は暇かしら」

「ん?ああ、特にやることはないけど」

「決定ね。今日私たちの家へ来なさい。おもてなししてあげるわ」

「それはどーも。」

もう・・・照れなくてもいいのに





「セレナ！鈴夢さんが来るって本当デスカ!？」

「しかもあのうるさい人達なしで？」

家に帰って鈴夢が来ることを言うなり、この子達は元気に食い付いてくる

「ええ。今日は4人でご飯よ」

「やったデス！今日は勝負下着で行くデス！」

「むっ。切ちゃんだけそれはダメだよ」

「はいはい。騒がない騒がない。あとすこしで鈴夢が来るから。部屋を綺麗にしてね」

「はーん」

さて。料理は・・・



・・・さて。そろそろかしら

料理の準備ができ、ベストな状態になった部屋に・・・

ピンポン

・・・来たわね

私は玄関へ行き、扉を開ける・・・そこには

「どもです。ちよつと遅すぎましたかね。」

「いいえ。むしろいいタイミングよ。」

そう言い、私は彼を家に入れるが・・・

「れーいーむさんにー！」

「んあ？」

「スツ」

廊下から聞こえる足音に私は彼の後ろに隠れ・・・そして

「ダアアアイブっ！」

私が彼を突き放したと同時に彼の身体が床に叩きつけられる

「ぐえっ。」

「ふふん。鈴夢さんの匂いデース！クンカクンカ！」

「わーセレナサンタスケテ」

「・・・切歌、どいてあげなさい？」

「むー・・・しようがないデス」

そう言う切歌は澁々彼から離れて私は彼を起こすが・・・

「むー……セレナばかり鈴夢さんに引っ付いててなんか嫌デス。」

「……ごめんね。ご飯の時は席隣でいいから。」

「わかったデス。その時にしっぴかり抱きつくデス！」

そう言い、切歌は先に部屋に行つてしまふが

「……痛たた……元気な子たちだね。」

「それもこれも貴方が好きだからじゃないの？」

「……まさか。それはないよ」

……鈍感。



「……いただきまーす」

リビングでお食事を。でも問題は

「鈴夢さんは何を食べるデス？ ご飯からデス？ それとも汁物からデスか？ あつ。……そ

れとも……私たちデスか？」

「……いや。唐揚げ貰うけど」

「鈴夢さん？ お口を開けてください。」

「断じて断る。俺は子供じゃない。」

鈴夢って本当に人がわからないわよね。

時に馬鹿になったり時にかっこよくなったり・・・本当に掴みどころがないって言うか・・・わからない人よね。

「鈴夢さんの唾液がついたスプーン・・・パクッ」

「こちらから。人のものを食べるでない」

「切ちゃん・・・間接キス・・・」

「・・・さりげなく怖いこと言わないで。」

私たちの好きな人は、多重人格なのかもね。



「ご馳走様です。」

「いえいえ。こちらこそ食べてくれてありがとね」

ご飯を食べた後、私と鈴夢は食器を片付けていた

鈴夢の手際がいいのか、テキパキテキパキと食器が片付いていく

「手際がいいのね。普段からこういうことをしてるのかしら」

「うん？ああ、まあ姉さんたちはやらないからな。」

「・・・ああ、クリスマスさんたちのことね。あんな下品な人が姉なんて。可哀想ね。」

「まあ、俺がやりたいだけってのもあるけどね。」

「・・・そうなの？」

「うん。ほら、俺が誰かと付き合うことになったらさ。家事とかこつちで出来たらいい

じゃん？」

「そうね。そのほうが私は楽ね」

「んん？」

聞いた話だと、二課の装者は彼の彼女らしい・・・なら・・・私たちだって

「・・・ねえ。鈴夢、貴方は彼女たちとどこまでしたのかしら」

「んん？どこまでって？」

「もちろん。男と女がすることの全てよ」

そう言うのと私は唯一の出口を塞ぐように立つ、彼は・・・うん。動揺してるようね

「・・・さて、じつくり料理しなきゃ。」

「ねえ鈴夢。私達は貴方が好きなのよ？私も・・・姉さんもね」

「へ？」

「だから・・・いいわよね？」

そう言いながら私は彼の横に近付き・・・  
—あなたを・・・私にちようだい?—



翼編

・・・むむ。鍛錬は終わりだ

午前中・・・私はいつもの鍛錬を終え、シャワーを浴びに行くが・・・  
その前に立ち寄る場所が一つ。

「霧夜はいるか?」

「いるよ。何かようですか?」

「うむ。」

そう言うと私は身体を霧夜に密着させる

「む・・・」

「ふふ。どうだ?私のあさいちの汗だ。しっかりと味わえよ?」

「はいはい。ファブリーズファブリーズ。」

「・・・霧夜は正直じゃないな」

「汗の匂い嗅ぐ彼氏とか変態以外の何者でもないのですが。」

そう言うのと霧夜はクローゼットを漁る

むう・・・変態の方が私としてはいいのだが・・・

「ほれ。」

そう言うのと霧夜は私に服を投げつけてくる

「これは？」

「昨日買ったやつ。プレゼントフォーユー」

「・・・ありがとう。早速使ってみるよ」

「せめて着て？」

「冗談だ。先にシャワーを浴びてくるぞ」

私は霧夜の部屋をあとにするが・・・恐らくその時の顔は喜んでいるのだろう。

ふふふ・・・鈴夢からのプレゼント・・・これで何個目だろうな・・・おっと

メモする前にまずはシャワーを浴びなきゃ、鈴夢に避けられるのだけはごめんだから

な



おいおい。あれって風鳴 翼じゃないのか!?

マジかよ!じゃああの隣の男は誰だよ!

「周りがうるさいな。黙らせるか?」

「いやいやいや。その刀どっから出したし、てかやめて。死人が出るどころじゃ済まな  
くなるから」

む?そうか・・・霧夜は優しいな

「・・・霧夜がそう言うならやめておくか」

「お、おう。」

しかし・・・ここはこんなに歩きにくかったか?

「霧夜・・・手を繋いでも・・・いいか?」

「ええ。はぐれたら嫌ですからね」

お、おい!あの男手を繋ぎやがったぞ!

マジかよ・・・マジの彼氏なのか!?

「・・・彼氏彼女ってか?やめてくれよ。」

「ふふっ・・・」

いいぞいいぞ・・・そのまま私と霧夜の噂がもつと広まってくれ!そうすれば私達は



幸せになれる！

「翼さん？場所を変えますよ」

「え？ああ、霧夜が行くところならどこでもいいぞ？」

「じゃあ、あそこかな」

そう言うのと私と霧夜を乗せたバイクは目的の場所へと走り出した



・・・私達は目的の場所・・・ここは

「懐かしいでしょ。」

「・・・そうだな」

場所は私たちが初めて会った場所・・・公園に来ていた

「ふむ。懐かしい場所だ・・・全然変わってない」

「ええ。ここはまだ子供たちの遊び場らしいですよ」

「私たちが守ってきたからだな」

「ですね。」

そう言うのと霧夜はジャングルジムへとまっすぐ歩き出す

「変わらないな……」

「ふふっ。思い出の確認か？」

「どうでしょう？」

彼は意地悪気にそう言うのと足早にバイクへと戻っていく

「霧夜？」

「……眠たいな……帰って寝ますよ」

「……そうだな。」

……ん？眠たいかそうかそうか……ふふふ

「霧夜。ならここで寝ないか？」

「公園で？」

「ああ、昼寝をするぐらいなら十分だろう」

「……わかった……」

「ふふふ」

そう言うのと私達はベンチに腰かけ、私の膝枕で霧夜が寝る形になる

「夕方には起こしてください……おやすみ……」

「ああ、ゆっくりしてくれ」

そう言うのと霧夜は眠りに落ちる……にしても可愛いな……

「流石は私の彼氏だな」

そう言いながら、寝息をたてる彼の髪をそつと撫でる

「霧夜・・・今なら・・・お前のことを好きにしてもいいよな?」

そう言おうと彼の唇に顔を近づける

「・・・お前は私のだ。誰にも渡さない。」

◇

「んあ?もう夕方か?」

「みたいだな。そろそろ帰ろう」

霧夜の唇が湿ってるが・・・恐らく気にはしないだろう

「ん?よだれか?全く俺もガキだなあ・・・」

「みつともないな。」

「拭くからちよいまち。」

そう言おうと彼はハンカチを取り出し、唇を拭く

ふふつ。バレてないな

「さて。翼さん?帰ろう?」

「ええ。そろそろ暗くなるから・・・でも」

私は立ち上がろうとする彼の身体を無理やり押し倒し、ベンチに横にさせる  
最高なことに・・・外は暗い。今なら・・・

霧夜も抵抗するが・・・

「っ！力が強いな！」

「・・・もう少し・・・もう少しなんだ。霧夜が・・・私のモノになるには！」

そう言っていると私は霧夜の唇を無理矢理奪う

「んー！んっ！」

「はあっ・・・んああ・・・霧夜の唇はいつ食べても美味しいな。」

「いつでも？」

「ふふふ」

私はさらに服をはだけさせる

「あほ。誰がここで・・・」

「ダメだ。絶対に逃がさないからな？」

暗い夜は・・・まだ明けない

## 第十五詞 歌姫は目覚め、少年は影を見る

う、うーん……

目を開けると、そこは知らない天井だった。

「……私は……生きてるの？」

試しに心臓がある位置に手を置くと、確かに鼓動を感じる

ああ、私は生きているんだ。夢とかではなく、現実に。

ガチャン

「ま、マリア……？」

と、扉の開いた方を見ると、そこには少年が一人、白衣を羽織った状態で啞然と立っている

しかし、私はその少年を知っている……彼は

「鈴夢……なの？」

「うん。」

彼が頷くと同時に私は起き上がろうとするが、身体が思ったように動かない  
ふらつく身体を必死に動かそうとするが、彼は私の手を握って

「ダメだ。今は身体を動かさないで」

そう言つて、すかさず電話を手取る

「弦十郎さん。マリアが起きました．．．ええ。彼女たちも一緒にお願いします。」

そう言つたと彼は電話を切り、私の隣へと腰かける

「．．．本当に鈴夢なの？夢とかじゃ．．．ない？」

「ああ、俺は本物の．．．霧夜 鈴夢だよ？おはよう。マリア」

「っ！」

私は思わず、隣に座つてる彼に抱きつく。

彼は少し驚いてたようだけど．．．少しして私の体を抱きしめ返してくれる

「俺はここにいるよ。もう離れたりしないから」

その言葉に安心して．．．しばらく私は彼を抱きしめた．．．

◇

「姉さん！」

「セレナ！」

目の前ではマリアさんとセレナさんが抱き合っている．．．姉妹の愛は素晴らしいね

「マリア〜!」

「切歌、調も・・・ごめんね」

「いいデスよ! マリアが元に戻ったんデスから!」

「マリアが元氣じゃないと私達は心配するから」

「・・・ありがとう」

・・・あの二人が抱きつくのもなかなか感動するな

今はそれを見届けたあとであり・・・そして俺はマリアさんと共にある場所へと向かっていた・・・バイクでね

「鈴夢?どこに行くのかしら」

「あら。お美しい彼女とのデートですよ。そりや雰囲気のある所でしょ」

「ラブ〇かしら」

「・・・まだ性行為はしませんけど。」

まったく・・・マリアさんは可愛いところあるなあ。翼さんたちが怖く見えるせいでもあるけど。

と、気づけば目的の場所にたどり着いた・・・そこは

「・・・アンティークショップか?」

「こそ、そして奥にいるのが・・・」

俺達はお店の奥に・・・そこには

「Hey親友！元気がいい!？」

「これが元気なんだよなあ。」

「そりゃあ最高だね!？」

意外とノリのいい親友・・・南雲 優也がバイトしてた。

ちなみに知らない人は第三話を中心に読んでみよう！何か分かるかも！

「あら・・・あの時の」

「あら。ナンパし損ねたお姉さんじゃないですか！元気にしてましたか!？」

「ふふ。おかげさまでね」

・・・こういう時のマリアさんはほんとに聖母に見える。

なんて言うか・・・抱きしめられたくなるよね。うん。

「で鈴夢。何か用か?？」

「ああ、・・・実は・・・」

その時だった、俺の首は謎の人によって刈り取られる所だった・・・

「ちっ。避けたか」

マリアさんも、優也も何が起きたか分からなかったようだが・・・俺が吹き飛ばされ

た・・・それだけは理解しようだ。



「鈴夢！なんだてめえは！」

「鈴夢!?!大丈夫なの!?!」

優也は謎の人に向けて拳をぶつけようとするが、簡単に止められる

「んなっ！」

「私が用なのはキミではない。彼だよ」

そう言うとう優也を弾き飛ばして、ガラスに叩きつける

「鈴夢！」

「っ！」

と、俺はマリアさんの声にて意識を戻す

「・・・霧夜 鈴夢だな？」

「そのセリフ。聞き飽きたよ・・・あんた誰だ？」

見た感じだが・・・この時代の人ではないように感じた。だが、相手は動揺することなく、言葉が続ける

「やはり・・・奴の言う通りだった。この世界には・・・表には出れないが・・・そこそこ強いライダーがいると」

「・・・ライダー・・・？」

「ああ、自己紹介がまだだったな・・・」

そう言うとき男は腰にベルトをはめ、手にグリップのようなものを握る……

「っ！仮面ライダーデルタ！」

『Standing By』

トリガーを引き……男は腰にはめる

「変身！」

『Complete』

ベルトを中心に青いラインが構築され……発光すると仮面ライダーデルタに変身する

「行くぞ！」

「ちっ！」

俺は突進してくるデルタを交わし蹴り飛ばすことで店の外へと弾き出す

「マリアさん！優也を頼みます！」

「鈴夢!?ダメ！行かないで！」

俺はマリアさんの静止を振り切り、デルタへ向かう

「トイっ！行くぜ！」

『おっけー！レッツトライ！』

「変身！」

『スタート、メロディー！ ビーイイトッ！』

俺の身体が白く発光するとビートに変身し、白い剣を構える

「そうだ！ かかってこい！」

「うおおおっ！」

デルタに切りかかろうとすると突然。

「もらった」

隣からパンチを食らってしまふ．．．こいつは．．．

黄のラインにデルタに似た顔．．．間違いない

「仮面ライダー．．．カイザ」

「悪く思ふなよ。」

そう言ふとカイザも俺に向かってくる

状況的には二対一。俺側に不利だ．．．しかし

「俺には歌がある！ 彼女たちの命の歌がなっ！」

歌の力は強く．．．そして俺の希望でもある。それはレジエンドライダーが敵でも変わらない

「仮面ライダーに歌など不要だ！ 己の力がかかってこい！」

「言われなくてもそうしてやるよっ！ 行くぜ！」

俺は剣を抜くと、デルタ、カイザと戦い始める。

「そうだ！己の力を見せてみる！」

「・・・っ！何が目的で俺を狙うんだ！」

「簡単だ！君がいずれ世界を敵に回すからだっ！」

「！」

カイザの拳を受け止め、デルタの蹴りを受け止めながら、俺は理由を探る

世界を敵に回す？俺が!?

「どういうことだ！説明してくれよ！」

「そのままの理由だ。このまま戦えば君は世界を敵に回す。だからその前に殺すんだ

！」

「そんな理屈が！」

「理屈などではない！これは現実だ！」

カイザは回し蹴りを俺に当てると、そのまま足に機械を付ける

「っ！まずい！」

俺は焦って距離を置こうとするが、後ろでもデルタが銃みたいなのを構えていた

『EXCEED CHARGE』

エネルギーがベルトから腕、そしてそのまま機器と移り・・・

「はあっ！」

「ぐっ！」

カイザの足は俺の身体へ、デルタの射撃が背中にあたると電子の入口みたいなものが出来る

「っ！」

「はああああっ！」

次の瞬間、デルタとカイザが飛翔し、ライダーキックを俺に当てると、身体にカイザとデルタが消え、気づいた時には……俺は意識を失っていた。

◇

「鈴夢!?ダメ!行かないで！」

彼は私の静止を振り切り、守ろうとしてくれたけど……

「……呆気ない。それでも仮面ライダーか」

目の前では彼が生きているという現実が否定される出来事が発生した。

「……いや……鈴夢……」

「!鈴夢！」

隣の彼も彼の現状を認めれない様子だけど．．．

今、私たちの目の前で起きたことは最早運命と言えるものに近かった。

「っ！てめえら！何なんだよ！」

「．．．なんだとは？」

「とぼけんな！鈴夢が世界の敵とかよ！いい加減にしろよ！」

「俺達は事実を述べただけだが」

「．．．っ。怒ったからな。」

そう言うのと隣の彼は小さい．．．お手頃サイズの果実を取り出す

「それは」

「真実の果実。昔、親父がくれたんだ．．．力が欲しかったら食えってな」

そう言うのと彼は果実を食べる．．．すると、彼の身体が変わっていく

「．．．オルフェノクか」

「グアアアアツ！」

彼が変身したのは．．．人とは遠い．．．しかし、白く美しい化け物だった

「オルフェノク!? 違うなっ！俺はDM（ドールム）だ！」

「ドールムだと!?!」

「そうだっ！驚いただろ！」

彼は私たちから引き離すように、敵を誘導していく・・・

「今なら・・・鈴夢を」

私はフラフラとした足取りで鈴夢に近づき、彼を抱えて後ろに少しずつつがっていく

「鈴夢お願い・・・生きて・・・」

私の僅かな願いは・・・未だ彼に届かないままだった。

◇

ズジャアアツ

「くっっ！」

「グッ!アッアッアッアッアッ!」

「愚かなっ!自ら人を辞めるか!」

「好都合だ!それで鈴夢を守るならな!」

俺は伸縮するムチを振るい、仮面ライダーと戦っていく

「・・・ちっ。こんな時にファイズがいれば!」

「おいおい人のせいだよ。それでも人間かなっ!」

俺は攻撃の手を休めることは無く、隙が少しでもあるなら攻撃をしていくスタイル

だ。

「ぐっ！なら一つ教えてくれ。仮面ライダービートとは何者で、彼が何なのかを」  
「……いいだろう。」

俺は一呼吸置くと、少しずつ話し出す

「かつての果実には……ヘルヘイムと言うものや、仮面ライダーに適合した果実まで生まれていた……だけど。俺達の世界では違った。その世界では少しずつ人間を改造してさらには奏者として適合させるために無理やり卵を押し込んだんだ。その対象は奏者となりうる子供たちだ。……だが結果は違った。卵は孵化することは無かったんだ。」  
「孵化することはない？」

「理由は簡単だ。それが新たな命になったからさ。やがてその命はその者の意識までも刈り取っていった……。そんな時だった。鈴夢が奏者として完全に適合したのは。あいつの両親や一族はみんなあいつを神と崇めたらしい……。でもおかしいだろう？ 鈴夢は適合して卵を孵化させたにも関わらず鈴夢には化け物の症状はなかった。俺たちみたにはならなかったんだ……。だから！」

次の瞬間。デルタとカイザは驚愕した。

—だから。ライダーシステムを生み出したんだ—



## 第十六詞 化け物と呼ばれた仮面ライダー

話は霧夜 鈴夢が奏者として適合した時期になる。

俺達は卵を孵化させることは出来ず・・・そのまま化け物になったが・・・霧夜 鈴夢は違った。

あいつは己の意思で卵を孵化させ、転生の命を手に入れたのだ。

転生の命・・・名前の通り、転生する命を指す。

所有者が一度死に至ると、まだ、肉体を新たに組成して生命活動を続けると言うものだ。

しかし、デメリットやメリットも存在する。

まず、その者の肉体が完全じゃないこと。

『サルベージ』と呼ばれる、特殊な処置を施すことで、転生の命、所有者は蘇ることが出来るが、恐らく肉体の一部が完全ではないだろう。

もう一つは、その生き物の性格が変わることである。

これは稀なケースだが、ごく稀に、対象前と対象後で性格が真反対だと証明されたケースがある。

メリットは一定時間の身体強化。さらには脳の活性化である。

・・・転生する命は・・・卵を孵化させたものにこそ、あたえられる特権みたいなものである。

命あるもの必ず寿命が来る・・・

しかし、卵を孵化させた者に待っているのは数々の地獄である。

しかも、霧夜 鈴夢は卵を孵化させながらも化け物へと成りはしなかった。いや、自分から慣れないべきか。

ならどうするか・・・俺達が考えたのはただ一つ。その力を引き出せるものを作ろう・・・それが・・・

—ライダーシステムだ。—

◇

その後、セレナと二課の緒川さんと言う人が駆けつけてくれて一応鈴夢は医療室へ。

「姉さんは大丈夫なの!？」

「私は平気よ・・・それよりも彼が・・・」

「・・・わかつてるわ。でもあのバカはここで挫けるような人間じゃないわ。」

「そうね……」

「それに彼が帰ってきた時に姉さんが笑ってなかったらバカも落ち込むわ」  
セレナにそう言われ、私は急に悲しそうな顔を引つ込め、笑顔を見せる

「それぞれ。姉さんに大事なものは笑うことだと思おうわ」

「……そうね」

「……そうですね。笑顔が一番！」

と……隣にはあの化け物の少年が何故か立っていた

「え!?あなたは戦ってたはず……」

「うん。俺の幻影がね。あー……やられたか」

笑顔でそう言うと、改めて私たちに向けて

「初めましてお姫様方？俺は情熱のドーレム。フォーコ、またの名を南雲 優也だ。」

「ドーレム……」

「まあ、音楽の化け物だな。中には面白いやつとか。あとはこわーいやつとかいるな」

「どういう連中なの？」

「……化け物って言うたやん。でも簡単に言うのなら奏者の成れの果て……もしくは  
失敗作……かな。」

「……奏者？」

・・・そう言うと彼は少し悩む仕草をする。

「そうだな。奏者から説明するのか」

「どうでもいいけど。みんなの前でね。一応二課の人たちには言っておくから、あとは自分から説明してね」

「きついなあ。せめて慈悲は」

「慈悲なんかないわよ」

「デスヨネー」

◇

美月side

「・・・で。奏者とは何か説明してもらおう」

「天性の音楽センス・・・そして俺たちを統括する天空の使者・・・」

「・・・一つにまとめて貰えるか？」

「簡単に言えばドレームのリーダーだ。」

「それが、霧夜 鈴夢くんの存在なのか。」

「ああ、実に愉快な話だろう？そして俺はそれを監視する者フォーコだ。」

「・・・情熱のと言ったか。もしかして彼の力に関係があるのか？」

そう言うトフオーコと呼ばれる少年。南雲は少し頭を抱える

「それはちよいと違うかな。あいつの力はいつ自身が生み出したものだ。俺たちとはなんの関係もねえよ。」

「・・・」

「それにビートはビートでちゃんと別の真名がある。それはそれで違うものと理解して頂きたいな。」

「分かった・・・では、霧夜　鈴夢はどういう化け物になる？それを聞かせてくれ」

「・・・ああ、そうだな。」

そう言うト南雲は姿を変える

「・・・俺がクソ暑い人間であるように・・・俺達はそれぞれの個性によつてそれぞれの姿を変える」

「つまり？」

「鈴夢には鈴夢の個性がある。どんな化け物になるかは想像つかないな。」

「あと一ついいか？」

「どーぞ。どうせ俺に拒否権はないんだろが。」

「・・・あの仮面ライダーたちは？」

「・・・仮面ライダーカイザ・・・デルタか。正直こっちはオルフェノクとも繋がってたから言い逃れのしようがないからなあ」

・・・彼は少し気まずそうに話す。その顔には明らかな動揺の色が見える

「まあ。伝説の仮面ライダーたちだよ。ただ、あれは別世界から来たと言うより、刺客として送り込まれた感じかな?」

「刺客だと?」

「ああ、こっちとしては実に不愉快なんだよな。」

「・・・で。君たちはどうするんだ?」

「んあ?」

「戦争にはならないの?」

「おつ。痛いところつくねお嬢様。そうだなー多分大方戦争になるかな。まあ・・・向こうの出方・・・かな?」

「・・・」

私達は唾然としていた。

仮面ライダーとの全面戦争。それは伝説を敵に回し、さらに世界を敵に回すことを意味することでもあった。

しかしこの少年は言葉一つ変えずに戦争の可能性を肯定した。つまりは今後の内容

によつて戦争を起こすと言つてゐるのだ。

「……君は……人と調和を取るつもりはないのかな？」

「人は人だ。生きるか死ぬかで怯える動物だろ？ だつたら関係がないな。俺達は俺たちで好き勝手やるだけだ。殺らなきゃ殺られる。そんだけだ。」

「そんなのめちやくちやデス！ 考え直して欲しいデスよ！」

「そうだよ！ 戦争なんかやつたら……っ！」

「……あ？ 戦争ふつかけたのはてめえら人間なんだよ。俺達は音楽さえあれば何もしない……ただの馬鹿なんだよ。」

切歌ちゃん調ちちゃんが戦争を否定すると、南雲は表情を変えて穏やかな顔から明らかな怒りの顔に変える

「言つとくが鈴夢がいるから調律が保たれるわけであつてあいつが人のせいで死ぬば俺達はそれを宣戦布告と受け取り戦争を始める。これは絶対だ。たとえ誰が否定しよう、友が目の前で死んで何もしいのは男ではないからな」

「……っ！」

……彼の言葉には覚悟があつた。彼を守ろうとする覚悟が。

「だが、霧夜はそれを望まないはずだ。」

「うるせえよ武人、あいつが望んでまいがこれは俺達が決めた絶対なんだよ。わかつた

ら引っ込んでろ」

そう言うのと彼は手に持ってた小太鼓を鳴らすと、足下に空間が出来上がる

「っ！これは！」

「転移!？」

「あばよ。また会う時は敵かも知れないけどな」

そう言うのと彼は虚空に消え……この場には静けさだけが残った。

◇

鈴夢 s i d e

ここはどこだ？

俺は再び身に覚えのない場所で、目を覚ます……そこは

「桜の……木」

そこには一つの島と桜の木がポツンと立っているだけだった。

「……ここで何をしろと」

そう考えてると、水辺に俺の影が映し出される……そして



『久しぶりだな。俺よ』

「!」

対面にもう一人．．．人が現れる．．．それは紛れもなく俺だった

「．．．お前は」

『ふん。今姿を見せてやる』

そう言いながら姿を変えると．．．そこには人ではなく。異形の怪物が立っていた

「それは．．．っ! そんな馬鹿な!」

『認めろ霧夜 鈴夢。これがお前のもう一つの姿だ。』

「そんな事は無い! 僕は人間だ!」

『．．．果たしてそうかな? ではその腕はなんだ。』

「!っ!」

俺は慌てて腕を抑える．．．そこには人の腕ではなく、化け物の腕があった。それも

もう一人の俺と似た．．．

「違う違う違う! 俺はこんなのじゃない!」

『．．．まだ否定するのか? 全てを』

「当たり前だ! 俺は奏者なんかにはならない! 俺はこんなのじゃ．．．」

『．．．変わらない。背負った運命は認めるべきだ。』

「……知らねえよ。」

……桜の木の下……俺は今の思いを口にするには出来なかった。



「鈴夢!?!」

「あ……あ……」

私が病室に入ると……鈴夢は姿を変えていた

「鈴夢!?!それは……」

「……っ!」

鈴夢は私を見るなり、窓から飛んで逃げていく

「鈴夢! 待って! 話を聞かせて!」

「……っ!」

鈴夢は背中に大きな翼を広げて、空を飛翔する。

「待って! 鈴夢……!」

私はその場に取り残され……飛翔した鈴夢を追うことは出来なかった……

## 第十七詞 怪物は翼を広げる

『っ！見られた見られた見られたっ！』

俺は悔しさと憎しみに満ちていた

何故かは簡単。マリアに化け物としての姿を見られたところだ。

さらにこれがみんなに広まればどうなる？

俺の・・・俺の存在は・・・

『否定される。それだけは嫌なんだ！』

せつかく自分の存在を忘れ、ここまで生きてこられたのに・・・また一人になるのは

嫌だからっ！

『あ・・・ああああっ！』

俺は空を飛び、ある場所を目指す。

それは・・・忘れられた者達が集まる幻想の地へ・・・



「鈴夢? どうしてなの?」

私は彼が病室から飛び出していく様を見ることしか出来なかった。

初めは止めもしたが。彼の行動で私の身体は彼を否定した

—彼は危ない—

そう反応してしまったのだ。

もし彼が私に牙を向ければ・・・

「・・・っ! 違う! 鈴夢がそんな事をするはずがないもの・・・」

・・・だが・・・彼は・・・

「姉さん! 何があつたの!?! 凄い大きい音がしたけど!」

「マリアっ! 何があつた!?! 説明してくれ!」

そこに風鳴翼、セレナの二人が飛び込んでくる・・・私は泣きそうに

「鈴夢が・・・いなくなったの・・・」

ただそう告げることしか出来なかった。

◇

今マリアはなんと言った?

「……鈴夢がいなくなつた？」

「そうよ。病室に行つたら……化け物になつてて。それで……」

「……ウエルの仕業かしら」

「セレナ。それはないな。考えてみる、あの馬鹿がこんなことすると思うか」

「……そうね。」

彼女たちは考えていた、何故彼がああ姿になつたのかを。既に疑問を見出していた

「……もしかして……あの本の内容なのでは？」

「え？」

あの本。それはかつてフィーネが読んでくれた仮面ライダー×スーパー戦隊のものだ。

人の中に絶望、悲観的考えがあればその者は怪物になる

オルフェノク……グリード……ヤミー……

「……生み出されるものと、変わるもの。それが仮面ライダーの敵さんの誕生じゃないんですか……ね」

「なるほど……つまり鈴夢は精神的か。もしくは何か追い詰められていたと」

「そうなりますね。」

……彼女達は悔やむ何故彼を止められなかったのかを

「それにあいつらは鈴夢を世界の敵と言ってた。」

「なるほどなあ・・・次あったらボコボコにしてやる！」

「ああ！しかし今は霧夜を探そう！」

「あてはあるの？」

「・・・こういう時のオペレーターじゃないか」



「霧夜くんの居場所はわかるか。」

「ええ。発信機を付けたのでわかりますよ。」

司令室では。マリアの説明を終え、鈴夢の捜索を行っていた

「・・・場所は・・・ここです！」

と朔也さんが映像をモニターに映し出すと、鈴夢の居場所がハッキリわかる。

どうやら現在はまだ東京上空を飛んでいるようだ。

「・・・まだ県内いや。国内にいるのか」

「そのようです。しかもそこから全く動く様子がないです。」

「なに？」

「何かを探しているようにも見えないし……何かを待つてるようにも見えます」  
「……待つている……か。」

と、弦十郎は腕を組み直す。今、司令室にはこの2人と、新海 美月、さらに天羽奏がいるだけだ。

「で？どうするんだよ。迎えに行くのか？」

「奏。今私たちが迎えに行けると思ってるの？」

「……そりゃあ無理だな。」

「そうだね。でも……不気味ね。まるで未練がある動き……」

……奏達はモニターを見ると、彼の動きを観察する。

彼が、戻ってくると思じて



「見つけた……あれがビートか。」

大地。そこには二人のライダーがいた。

一人はスピードのカードを使う戦士。

もう一人はダイヤの戦士

「劍崎……彼を殺すのか」

「ああ……そうでなければ。彼が壊れてしまうから」

「……劍崎……」

「もう始みたいな奴は増やしたくない！行くぞ！」

「付き合うぞ！」

バイクの走る音がその場に響き、彼らは走り出した



「……こちらクリスっ！未だ鈴夢の姿はない！」

「こちらもだ！くそっ！霧夜はどこだ！」

私達は司令の許可なしで、独断で鈴夢を探索していた。

「あーもう！鈴夢さんはどこに隠れてるデスか！」

「……反応はこの建物のはず。」

彼女たちは奏さんからの指示で。鈴夢はここにいるとの連絡を受けて搜索している

「響……鈴夢くんは……」

「大丈夫。鈴夢くんはそんな人じゃないから」



みんなは必死に鈴夢のいる建物を探す。

早くも探して数時間経つが、彼女たちは諦める様子を見せない

と、みんなが探す中・・・1つの部屋では・・・

「鈴夢・・・見つけた」

『っ！』

「見つけたわよ霧夜っ！一緒に帰るわよ！」

そこでは既にセレナとマリアが彼を追い詰めていた。

逃げ場のない部屋で。3人は言葉を交わす

「鈴夢お願い！戻ってきて！」

『・・・っ！』

「あんたがいなくなつてパニックなんですよ！早く戻つて！」

『・・・無理だ。もう僕は・・・人ではなくなつた』

微かに聞こえる彼の声。しかし、それももう聞こえなくなつてきている

「っ！帰る前から諦めてどうするのよ！我慢しなさいよ！」

『無理なんだ！どうせみんなは俺を嫌うだろう！』

「・・・そんな事ないわよ！」

『っ！そんな事ない!?じゃあ今の俺の姿を見てか!そうじゃないだろう!どうせ我慢し

て言ってるだけだろう！どうせそうさ！みんなー』

その時だった。彼の頬が叩かれたのは

—っ！

『……ま、……マリア？』

「馬鹿！鈴夢は鈴夢なのよ！誰が嫌うの！」

『俺は……化け物で……俺は……』

「鈴夢は鈴夢でしょ？姉さんのことを理解してあげて」

『……っ。』

「はあ……怪物になつてもバカはバカのままか……いや。案外アホも入ってるのかもね」

「……セレナ。少し言い過ぎよ」

『……いや。それぐらいがセレナさんっぽくて俺はいいな』

「……ふん。わかつたら元に戻りなさいよ」

『……戻れないんだよ』

「へ？」



『短い間でしたが。ご迷惑をお掛けしてすみません。』

「・・・っ。鈴夢くんなのだな」

『はい。』

「了子。どう見る」

「うー・・・ん。今のところは原因不明ねえ・・・正直これは自然現象としか言い様がないわ」

「なるほど」

『納得しないで。元に戻りたいのに』

しかし。了子さん⇨フィーネもお手上げとなると、もう元に戻すすべがいよいよ無いのかもな。

「何かヒントでもあれば・・・」

と、その時だった。

『・・・あ・・・』

「ん？どうした鈴夢。」

『・・・戻る方法・・・少しだけ聞いたことがある。』

「本当か!？」

『ええ。それを立証するためにも……』

鈴夢はビートドライバーを見つめ……

『こいつには起きてもらわないとな』



『んで俺の出番か』

『ああ、正直トイの知識だけが頼りだ』

『……なるほどな』

「……で。教えてもらおう。幻影の雫の場所を」

『まあ、教えてもいいけど。あれだ。場所が場所だから無理なんだよね』

「場所？」

『そう。その場所は……』

——幻想郷……だっけか——

## 伝説の仮面ライダー編

## 第1弦 新たな世界。過去の仲間たち

「二 鈴夢の変化を解く物がそこにある？」

『ああ、故に取りに行きたい。』

一 課司令室では鈴夢による話し合いが行われていた

『まあ……言ってもこことは違う争いの少ない場所だから安心してよ』

「ううっ……鈴夢さんが言うことはだいたい信用出来なくなってるのデス。」

「まあ。ついてって嫌なことは無いけどね」

各々の反応を見せる彼女たち。鈴夢はその中でも一段と落ち着いているようだ

『……取り敢えず。向こうに行くメンバーを決めようと思います。』

ちなみに決め方はスマブラだった。



……と、上のようなことがあります。

『やつとだ。やつとこれたのか』

「・・・へえ。ここがその場所なのか。結構綺麗な場所なのな」

「そうだな。水の音、風の音・・・一つ一つが違うものに感じるぞ」

着いてきたのは翼さんと、姉さん。

ちなみに俺達がいるのは、幻想郷と呼ばれる世界である。

創造者は知らないが、綺麗な場所だから暇があればここに来ていた。

来ていた。これが重要だ。

「・・・で。行く宛はあるのか？鈴夢」

「そうだな。私たちはこの世界は初めてだ。つまり地図の代わりみたいなのが欲しい訳だが」

『まあ。そこは考えてるから安心してよ』

と、みんなで話していると、一人の女性が隣にやってくる

「・・・おやおや！久しぶりじゃないか盟友！」

『お久しぶりですにとりさん。』

・・・そこには青の厚着のカバンを背負った少女。妖怪 河童の技術者にとりさんだ。

青は河童のあれなのか？好みなのかな・・・今度聞いてみよう

「もう戻ってきたのかい？全く・・・早苗は心配してたよ？」

『……もう子供じゃないよ。』

「……そうか。だけど私たちから見たら子供だよなあ！」

『……そうかもね』

……と、軽い挨拶を交わすと翼さんや姉さんに向かつて

『……紹介するよ。この人がこの世界でお世話になった人の一人、にとりさんだ』

「にとりだよ、盟友がお世話になってるね」

……2人は……ああ、啞然としてるか。

ちなみに幻想郷に来たのは子供の時以来だ。ほとんど変わってないように見えるが、実際大きく変わってるのがこの世界の恐ろしいところだよね。

「にしてもトイは元気かい？あれはいいだろう？」

「この子があれを作ったのか!？」

「?・そうだけど」

あつ。そう言えばそれも言っていなかったか。

トイは幻想郷譲りの人工知能システムで、にとりさんとあと誰かさんが協力して作ったんだっけか。

「……今日は連れてきてないのか?」

『いや、今日はちよつとね。にとりさん。神社つて向こうであつてる?』

「うん。にしても盟友は変わったなあ……」

『……今日はたまたま。今度からはちゃんと人間の姿だよ。』

「いや。その盟友のほう妖怪にモテそうだが」

『ほっとけ。』

そう言う俺は神社のある方へ走り出す。

三人も少し遅れて走り始める。

さて……紅白の姉さんはいるかな？

◇

あー退屈だわ。

鈴夢がいなくなってから、数年が経つが……彼は元気なのだろうか。

「あー……鈴夢鈴夢鈴夢……ブツブツ」

「やめろよ霊夢……怖いんだよ」

「ビビってるなら帰ればいいじゃない。」

私たちのいる神社、博麗神社では魔理沙が例のごとく居座っていた

「でも鈴夢に会いたいよなあ……お前と同じ名前だもんな」



「……うるさいわね」

「……と、私たちが話してると

「霊夢ー来たぞー」

「ん？霊夢。にとりが来たぞ。」

「にとり？」

と、魔理沙が先に表に行き、私もあとに続く。

「やあ！久しぶりじゃないか！魔理沙！」

「おーにとりか。それで何しに来たんだ？」

「やだなーちよつとしたサプライズあるのにさあ」

「サプライズ？」

「何やってんのよ。退治されに来たならそう言いなさいよ」

「まー慌てなさんなって。いい報告だからさ」

にとりがそう言うのと階段から人が登ってきたのが見える。

「……疲れた……鈴夢ーおんぶー」

「子供じゃないでしょ。しっかりしてよ」

「……この声。まさか！」

私は急いで彼により、疑問を問いかける

「……鈴夢……なの？」

「おつ。霊夢さんお久しぶりです」

……やっぱ名前ややこしいわね。



「ふう……一応これで人の姿になってると思うけど」

「おお！ありがとうございます！」

俺は霊夢さんに奏者としての封印を施してもらい、何とか人の姿に戻ることに成功した。

……やっぱり翼があるよりこの格好のほうがしっくりくるよね。かつこいいし。

「……それで……どうして幻想郷に？」

「ああ、そうだ。俺の変化を治したいんだ。」

「……さっきの化け物の姿ね」

その問いかけに俺は頷く。正直その姿でもいいのだが、人前などにはまずでれない。何かあった時以外は出れなくなるのは嫌だからだ。

……でも。この世界にこれば不可能が可能になる！奇跡が起きるんだ。

「馬鹿。そんなこと考えると・・・」奇跡はここですかー!」  
「・・・でた。」

俺が考えた矢先、緑髪の奇跡大好き巫女。東風谷早苗がやって来てしまった。

「奇跡の匂いがしますよっ!おっ!おっ!鈴夢くん!」

「ぎやあああつ!」

早苗さんが俺を見つけるなり、光の速さで拘束される。

正直ボルトより早い。

「んー!すーはーすーはー・・・鈴夢くんの匂いですう!」

「離さんかいこのバカ!」

結局この騒動は霊夢さんが早苗さんの頭を殴ることで収まった。

「あつ。早苗さんいい匂いする」

「え?」



それでは全員集まって自己紹介。

ちなみにトイは連れてきましたへへ

まあ、この騒動の犯人は全部トイだからね。自称おばさんに頼んで持ってきてもらいました^^

「さて・・・私が博麗霊夢。一応この神社の巫女よ」

「私は霧雨魔理沙だぜ！よろしく！」

「東風谷早苗と言います！鈴夢くんがお世話になってます！」

「・・・雪音 クリスだ。」

「風鳴翼だ。よろしく頼む」

おお・・・もう既に姉さんと早苗さんで火花が散ってるよ。近づかないでおう。

「それで？鈴夢が欲しいものはなに？」

「・・・そうだ。それを私達も聞かせて欲しい」

「・・・そうだな・・・俺が欲しいのは」

——月詠草——って知ってる？

「月詠・・・何？」

『月詠草。月を詠む様な草ってね。』

「・・・で？それはどこにあるんだ？」

「・・・知らない。」

・・・俺の一言にみんな啞然としてしまう。まあそんなものだよなあ。

「・・・ごめん。もう少し知識があれば良かったんだけど・・・急いでたから・・・」  
「・・・知識ならいるじゃない。詳しいのが」

そう言うのと魔理沙さんは「ああ!」と納得する

「霊夢さん。もしかしてパチュリーさんのところですか?」

「それもそうだし阿求のところも行かなきゃね」

「あと永琳もだな」

わあ・・・幻想郷の知識人の名前がポンポン出てくる彼女たちすごい(棒)

「・・・何の話だ?」

「さあ?」

・・・2人は知らなくていいよ。

「・・・行こう。情報は少しでも多い方がいいから。」

そう言うのと俺は神社を出て走り始める

「鈴夢!?!」

「ごめん!人里まで走ってくから!」

「ははっ!相変わらず元気だな!」

俺は魔理沙の箒に追われながら、俺は人里に向け走り始めた



「あー・・・空気が美味しい。」

人里について、俺と魔理沙さんは団子を食べていた

「いやー鈴夢の奢りとはなー・・・美味しい！」

「・・・そりやどうも。」

俺は団子を食べると、お茶をゆつくり飲み干す・・・

「あつ」

おつとと、お茶を落として・・・

「大丈夫ですか？鈴夢様」

「あり？」

「おつ。咲夜じゃないか」

「咲夜さん？」

お茶を落として数秒後には、霧の湖にある紅魔館のメイド、十六夜咲夜さんが現れる。

「お久しぶりね。いい加減パチュリー様に本を返しなさい」

「あれは借りてるだけって何回言えばわかるかなあ」

「それは借りてるとは言わない。」

俺の的確なツツコミが決まったところで本題に入りたい。

「咲夜さん。紅魔館にお邪魔してもいいですか？」

「ええ、大丈夫よ。お嬢様もきつと喜びます」

「むー．．．それだと私が喜ばれてないみたいな感じだな。」

「盗人は消えてどうぞ」

「むー」

まあ、．．．咲夜さんの言ってることは真実だから．．．否定したくないなあ

「では鈴夢様！行きましょう！」

俺は咲夜さんに紅魔館に誘拐された．．．

## 第2弦 運命と破壊の姉妹

俺は咲夜さんに半ば連行される形でここ、霧の湖の紅魔館と呼ばれる場所に来た。

「おー……相変わらず霧が凄いぜ」

「……魔理沙は空からくるもんね。霧が濃いことに気づかない……よね」

「空から来るからパチュリー様が困ってるんです。」

「……まあ、正直正面から来て泥棒だーとか言われてもなあ……」

「しようがないぜ。正面から来たら咲夜がいるからな」

「……納得。」

咲夜さんは正直細かい足音も聞き逃さないパーフェクトメイドだからな。侵入者来たら3秒と経たずに殺られるんじゃないか？

「ささ、鈴夢様は早くお入りください！」

「私はどうなんだよ!?!」

「魔理沙も来てよ。そのために3人で来たんだから」

そう言いながら……俺達が紅魔館の大きい門に差し掛かると……

「……zzzz」



「・・・ピキッ（？）（）」

あつ。あの人は美鈴さんか。相変わらざるの無防備っぷりです。

しかもプライドが口から出てますよ。・・・相変わらざる墮落した人だ

しかもさつきから俺の横で咲夜さんが怒ってるんですが。手が痛い痛い痛い。

「すいません鈴夢様。少しお待ち頂いてもよろしいですか？」

そう言うとき咲夜さんは俺の隣から消え、美鈴さんの前へ

「・・・めーいりーん？」

「・・・ふえっ!? さ、さ、さ、咲夜しゃん・・・これは・・・ええつとー！」

「死刑ね」

「いやああああつー！」

こうして咲夜さんと美鈴さんの追いかけっこが始まった。捕まったら死ぬぞー・・・

あつ。死んだ

「お待たせしました鈴夢様。」

「あーうん。」

怒ってた咲夜さんなんか見てない。いいね？



「あら。遅かったじゃない。」

「鈴夢っ！おせーぞ！」

紅魔館の大図書館に入るなり姉さんたちや、霊夢さんから言葉が飛んでくる。女の子の言葉つてどうして心に刺さるんだろう。何か魔力でもあるのか？

「あら。鈴夢じゃない」

「おっ。パチュリーさんもお久しぶりです」

と、奥からメガネを掛けた紫の少女が現れる・・・彼女が紅魔館図書係。パチュリー・ノーレッジだ。

「実際まともに話したことがないから久しぶりに会ったらどうしようとか考えてたよ」  
「それはこつちも同じよ。いや、それより酷いわね」

「ん？」

「鈍感な敵ね。」

「??？」

「ごめん。パッチェさんの言ってることがわかんない。鈍感とはなんぞや

「・・・早苗さん、今度こそ鈴夢さんを捕らえるチャンスですよ！」

「鈴夢くんを女の子にして・・・ぐへへへ」

・・・向こうは向こうで恐ろしい会話が繰り広げられてるし。

「・・・取り敢えず埒が明かないから早く座って話して欲しいわ」

「ああ、そうだね。」

パッチエさんがそう言うので一応椅子に腰かける

「それで・・・どこまで話は進んだかしら」

「残念ながら一つも話が進んでないですよ」

「・・・まあ、要件は霊夢から聞いてるわ。月詠草・・・だったかしらね」

「ええ。それについてこの図書館から手がかりを得たいな・・・なんて」

「・・・もしかしたら錬金術とかの本に乗ってる可能性はあるわね。まあ、私はその草の名前は聞いたことないから多分・・・だけどね。」

多分・・・おそらく、ないと言いたかったのだろう。

しかしパッチエさんも本の全てを把握するような超人ではない。もしかしたら探せばあるかも知れない。

「ありがとう。探してみるよ」

「ええ。私も協力するわ。」

そう言い、俺は図書館を歩き回ることにする・・・

「あー・・・成長した鈴夢さんも素敵ですなえ」

「わかるぞ。霧夜は誰にでも手を差し伸べる優しい子に育った。育てた人は喜ぶだろうな。」

「でも素直なのが駄目なところだよなあ……直して私好みに調教してやりたいな。」

……後ろの方で聞こえた会話はスルーで



……無いな

一通りみんなで協力して本を読んだが月詠草の情報はなかった。

「……なんで私まで。」

いつの間にか人は増え、人形使いのアリス・マーガトロイドと天狗の射命丸文が本読みの手伝いをしてくれていた

「鈴夢さんが帰ってきたって言うから来たらこれですよ……」

「……なんで私まで」

「お疲れ様です。」

俺は取り敢えずそれだけ言うと、再び本探しを続けようとするが

「れーいーむーにー!」

廊下を走る音と共に幼い声が聞こえ

「だあああいぶっ！」

「!? ああいつ!?」

その声の主に扉をぶち破られ、身体が倒される

「・・・フランドール」

「むー・・・フランドール!? お兄ちゃんは相変わらずだね!?」

「・・・お兄ちゃん言うのやめて」

俺はフランドールを退けて、取り敢えず立ち上がる。

「むー・・・お兄ちゃんを襲いたかったのに」

「誰ですか。フランドールをこんな風に育てたのは」

「ビクツ」

「・・・こーあーくーまー・・・お前かよ。」

「いやなんでもないです。」

「死刑だな。」

俺は小悪魔に力いっぱい投げた本をぶつける。しばらく天に登ってる。

「おんぶー！」

「はいはい。慌てんなって」

フランドールがバタバタし始めたので俺は取り敢えず、おんぶしてみんなの所へ歩き出す

「お兄ちゃんは何を探してるの？」

「珍しい草だよ。草と言うよりは花だけどね」

「綺麗かな!？」

「綺麗だよ・・・多分ね」

正直姿形を知らないから何も言い様がない。

ここで手掛かりが見つかるかと思っただけど無しか・・・辛いな

「・・・取り敢えず戻ろう。みんなが何か見つけてるかもしれない」



「へえ。鈴夢がたくさんお世話になったんだなあ・・・」

「ええ、特に私たちなんかはね。妖怪に食べられないようにとか、変態共に捕まらないようにとかね」

「まあ・・・何も無かったけどな。」

「でも天狗は変態だったわよね。」

「変態ですか!?!この清く正しい私がですか!?!」

「……清くないわよ。」

……彼女たちは鈴夢がない中で話し合っていた……題名を付けるなら鈴夢は何をしていたか……だ。

「あと慧音には何かとお世話になったから後で挨拶をした方がいいわね。」

「慧音?」

「ええ。人里の守護者よ。一応妖怪ね」

「妖怪と言うよりかは半分半分だな。」

彼女たちの会話が進む中。そこに

「姉さん、翼さん。戻ったよ」

「霧夜!見つけたのか?」

「いや、無かったよ。まさか無いとはね……驚いた」

「……そうか……」

鈴夢の報告が終わると、全員が羽を伸ばす。当然だ昼ぐらいの時間からずっと探してたのだから無理はない

「……そろそろご飯が欲しいわね」

「恋しくなってきましたよほんと……」

と、そう言うのと時計の音が響く

「?なんの音?」

「・・・これは時計か。となると・・・」

と、鈴夢が周りを見渡すと、隣には十六夜咲夜が居た

「皆様お疲れ様です。お食事の用意が出来ましたよ」

「待つてました! いったきまーす!」

「魔理沙! 行儀が悪いわよ!」

その報告を咲夜さんから受けて、走っていく魔理沙とアリス。

「やつとですか・・・もうへとへとです・・・」

「それだと巫女失格ね。ほら、ご飯食べに行くわよ」

「あああ! 霊夢さんそこはダメ! 服が脱げちゃいますうー!」

・・・あの二人はいいコンビになる(大嘘)

「あやや・・・鈴夢さんは行かないんですか?」

「ん? 俺はもう少し調べようなんてな・・・」

「そうですか。なら先に翼さんたちを案内しますねー」

「お願いします。」

そう言うのとみんな部屋を出ていき、残ったのはフランドールと鈴夢だけになった



「鈴夢？なんか怖いよ」

「……そこにいる奴。出てこいよ」

……鈴夢は本棚を指さして告げる、そこには

「驚いたな。俺の気配が分かるやつがいるとは」

そこには一人の戦士、トンボの銃をもった仮面ライダー……ドレイクがいた。

「お兄ちゃん……」

「……狙いは俺かっ！」

その次の瞬間。ドレイクの銃から光が放たれた



「そう言えば鈴夢はどうやってこの世界に来たのだ？」

「……言われてみれば」

そう。私たちが疑問に思っていたこと。それはこの世界に来る理由だ。

「いちいちこの世界を経由しなくても現実世界で生きられたのに……どうして？」

「……わからねえ。もしかしたらかもな」

「……」

もしかしたらだ。あの河童の少女が言ってた、その姿、があれだとするならこの世界の人は鈴夢のあの姿を知っている。

つまり鈴夢は立花 響に会うまでの時間。この世界にいた事を示している。

一体いつから？

その疑問を考えてるうちに食堂に着く

「ぎゃ、(´▽´)ですよ。」

前の天狗の少女に案内され、私たちは席へと座る・・・すると

「あら。随分可愛いお客様なのね」

「!?」

幼い声が、この食堂に響く・・・そして

「あら。レミアアじゃないの久しぶりね」

「そうね。宴会の時以来かしら」

私たちが入ってきた扉から先程のフランドールと同じくらいの幼女が現れる

「初めまして。私はこの紅魔館の主にして当主。レミア・スカーレットよ」

その赤い瞳は・・・まるで血のように赤かった。

### 第3弦 歴史を守るもの

ドオオン

場所は紅魔館の図書館。

そこでは2人の仮面ライダーが戦っていた

「はああっ!」

「遅いつ!」

仮面ライダードレイクと仮面ライダービート……相対する2つの仮面ライダーは戦っていた

「世界を敵に回す仮面ライダーが!ここで排除してやる!」

「ちっ!死人が出てきてるんじゃないよ!」

俺はスイカタナを二刀流にし、片方片方と連続で攻撃するが向こうは冷静に銃で防いでくる

「くそっ!どうして当たらないんだ!」

「……愚かな。俺たちを敵にするから!」

ドレイクの放つ銃弾が俺の体に吸い込まれる

「——っ！」

俺の身体は爆発を起こし、俺の身体を遠くに吹き飛ばす。

「……っ！まだやれる！」

俺は直ぐに立ち上がり、壁を蹴って疾走する。

「クロツクアツプ」

しかし、次の瞬間。ドレイクも加速して俺と格闘戦を繰り広げる

「っ！」

「遅いな！」

ドレイクと俺で殴り、蹴り合う

「っ！トイ！頼むぞ！」

『任せろ！』

トイに修復を。俺は交戦することで少しでも長く持たせる……それが俺達の考えだった

「……ちっ。なぜ抗うか。」

「何？」

「……お前は近い未来。敵になると言うのになぜ死ぬのが怖いんだ？」

「……あいにく死に慣れてる訳じゃないのね。つまり俺は死ぬのが怖いのだよ」

「ふん。」

そう言うのとドレイクは窓まで退却していく

「何処に行く!?!」

「この世界にいるのは俺だけじゃない。忠告はしたからな。」

そう言うのとドレイクは消え、図書館には俺とフランドールが残された

しばらくの静寂のあと、口を開いたのはフランドールだった

「……お兄ちゃん。ご飯いこ?」

「そうだな」

俺はフランドールの幼い手を取ると、食堂へと歩き出した



「……なるほどね。鈴夢の運命は……ね。」

「決まってるのか。そのように」

「ええ。」

私たちは鈴夢がいない中で、彼女の話を聞いていた。

「……運命……か。」

「気になるの？人間らしくないわね」

「何?!」

「……霊夢たちは私の予想してた運命を何度も変えたわよ。それこそ自分の力でね」

「……」

その中には恐らく鈴夢も入っているのだろう。

「……ん？みんなどうしたの？」

と、そこに金髪の少女を連れた鈴夢がくる

「あら。掃除は終わったのね」

「ああ、……厄介だよな。」

？掃除？何かやってたのか。

「……鈴夢はこの世界にいたんだよな？」

「……そうだなあ。」

「何があったのかお姉ちゃんたちに聞かせてくれよ。鈴夢のことをもつと知りたいな」

「……」

雪音がそう言うのと霧夜は少し黙り

「ごめん」

その言葉と共にその場を離れていく

「・・・鈴夢。」

「あらあら。相変わらざるの恥ずかしがり屋ね。起こったことを全て話せばいいのに。」

「貴様たちは・・・」

「言っておくわ。運命とは、自分で掴み、自分で切り開くものよ。私は鈴夢からそれを教わったわ」

運命。その言葉に彼の言葉が蘇る

「戦争はお前らが起こすんだよ」

「・・・教えてくれ。このまま行けば・・・戦争は避けられないものなのか?」

「そうね。なんとも言えないわ。それは貴方たちの決めることよ」

この館を照らす月は・・・少し不気味に感じながらも、彼女は手にある紅茶を飲んだ・・・



次の日

「おはようレミリア。」

俺は例のごとく早起きし、それぞれみんなを起こしに行く。まずは姉妹からだ。

「うー・・・鈴夢ー」

「鈴夢おはよー」

「はあ・・・二人ともしつかりしてよなあ」

レミリアはカリスマの欠けらも無いし、フランはまさにぬいぐるみのような感じだ。咲夜さんたちもさぞかし大変だろう。

しかし。外の世界のこととも気になると、ここでおちおちしてられないな。

「咲夜さん。僕は一足先に人里に行きます。会えるなら永遠亭で会いましょう」

俺はそれだけ伝えると、紅魔館を後にして人里を目指す・・・すると

「鈴夢ー！しようぶだー！」

「・・・でたな⑨」

こいつはみんなご存知⑨のチルノ。攻撃力はあるのにどうしても攻撃が当たらなかつたり変なものになったりする⑨だ。

まあ、普通にすれば可愛いし、まるで妹みたいにも感じる。

「むー・・・馬鹿にしたな」

「そんなことないよ。チルノは相変わらず可愛いなって思っただけ」

「そう!?!鈴夢のために修行したんだよ!」

「ほえー」

あれ?この会話の流れってやばくない?



「それで鈴夢のためにね！身体を使うことも覚えたんだよ！」  
「・・・啞然」

ちつ。まさか⑨から熟女に変わつてるなんて!?流石は幻想郷！常識が非常に変わる場所！恐るべし！

と、心の中で考えてると

「鈴夢ー！」

遠くからまるで闘牛の足音が聞こえ始め、さらに大声も聞こえ始める

「幻聴か？ー番会いたくない人の声が。」

と、森の方を見ると

「鈴夢ー！」

「いやああああつ！」

そこには人里の守護者。上白沢慧音が何故か、走ってきていた

あの距離でぶつかつたら俺は恐らくピチユるだろう

「ヤダヤダヤダヤダ！死にたくねえ！」

「鈴夢！逃げるな！私と愛を育むぞ！」

「お前とは死んでもやだ！」

「・・・他の女に毒されたな！なら私が薬になつてやる！いま目覚めさせてやるからな！」

「どうしてこうなるんだアアアアっ！」

「この前の占いな。結構当たるのな」



「なるほど。月詠草を取るために来た」と

「ここまで起こった出来事は全カットで。」

「書けば18禁になるからねシカタナイネ」

「・・・で。鈴夢は場所を知らない」と

「面目無い。」

「・・・外の世界を放置して来るものでは無いな」

「まあ、君たちに頼めば嫌でも探してくれるでしょ？でもそれじゃダメかなって」

「鈴夢は照れ屋さんだな」

「せんせは甘えんぼだな。相変わらずの」

「そう言ううちに人里へと着く」

「姉さんたちは恐らく起こされてる頃だろう。」

「しばらくは紅魔館に滞在するよ。何かあったら嫌だしね」

「そうだな。無理に永遠亭やら地霊殿に泊まる必要はないからな」

「・・・そうね」

無理に、という言葉に思い当たる節があるので俺は黙ることにする。出なきや俺が死ぬんだ

「・・・しかし、私たちが知らないとなるとやはりもつと強い知恵がいるな」

「・・・やつぱり？」

「ああ、それこそ永琳や、守矢の神奈子だろう」

「そうか。」

うわあ・・・絶対行きたくない場所No. 1, 2が同時に出てきたよ。知ってる。永遠亭は発情期の兎がいるし、守矢は早苗さんがいるからなあ。

「他は？」

「・・・仙人の茨木華扇ならあるいは・・・八雲に聞くのもアリかもな」

「ふむ。誰をとつても当たりの可能性ってやつか」

「そうだな。少なくとも大妖怪は当たって正解だと思うが。」

「おつけ。その前にもこうさんが生きてるか確認しなきや」

「そうか。なら竹林に行くか」

「そうですね」

俺達はそう言う迷いの竹林へと歩き出した。途中で人参を購入しながら

◇

「・・・鈴夢の暴走？」

「ええ。私から注意すべきはそれかもね」

私たちは過去の話をレミリアから聞くと同時に様々な疑問を抱えていた

「卵。奏者の話は聞いたかしら」

「大体は・・・しかし、制御出来たから卵が孵化したのでは？」

「そうね・・・あくまでそれは段階に過ぎないわ。真に狙ったのは恐らくけど・・・目覚めではなく覚醒じゃないかしら」

「覚醒・・・」

「ええ。それがあの姿だと私は考えるわ」

「・・・覚醒すれば鈴夢はどうなる？」

「ただの化け物になるわね。ただし神に近くなるという点を含めて・・・ね」

私たちは唾然としていた、彼が化け物になった時は南雲のように制御出来るかと思つたらそれに着くまでの段階を踏むことを。

しかも、その段階を終え、鈴夢が本当に化け物として目覚めたら恐らくは……  
「記憶は消えるわね。」

「——っ！」

◇

かつて、この世界で争った2つの仮面ライダーがいた。

「ふああ……もう朝なのな。」

その仮面ライダーは剣を持ち、歌を歌いながら戦い

「……ちそっさん」

もう1つの仮面ライダーは紅い鎧と、その他の色を使いこなした戦士だ

それは霧夜 鈴夢の夢でもあった

「さて……今日もよろしく」

その戦士の名は……仮面ライダークウガ。

◇

「うへえ・・・迷うなあ」

迷いの竹林に来れば早速迷った。うはあ・・・広いなあ

「こういう時に妹紅が歩いてればなあ」

「そうね。」

俺達はグングン進んでくがダメだ。全くもって希望がない。

「はあ・・・しようがない。これを使うか」

「人参加」

「正解です。てゐ！行くぞー！」

そう言いながら人参加を投げると竹から現れた小さい影が人参加をキャッチする

「??”??” (☒☒☒)??”??”」

「まさかのー口。」

兎の胃袋はブラックか何かかな？

「お久しぶりだねー鈴夢ー」

「うん。お久しぶり」

軽い挨拶を交わすと、てゐは俺の肩に乗る

「永遠亭に何か用かい？」

「永琳さんに会いたいんだけど・・・いる？」

「ちようどいいね。あと八雲と西行寺もいるんだよ」

「え？」

まさかのフルメンツですか。これは探す手間が省けたなあ

「でもなんで？」

「うーん。飲み会だよ。ついでに伊吹のやつもいたよ」

「……あの馬鹿どもは、どうして酒を飲むんだ」

……取り敢えず止まってもしょうがないので少しずつ歩き出す。

「で、マスパの影響は治ったんだ」

「だいぶ前の話だねー魔理沙が怒って発射したんだっけ」

「おかげで鈴仙が地獄送り……ご愁傷さまです。」

「ところで鈴夢の所は無事だったのかい？」

「んあ？」

「敵が出たんだろ？」

……八雲の奴だな？俺を監視するとか言つて覗いてたのは。

恐らくだがこれまでの動きは大体見られてたかな。

「……いろいろあるんだよ」

「まあ、鈴夢が悪いんだけどね」

「全くだ。私たちが発情させるなど」

慧音さん。あんたは発言を慎んでくれ

ところで俺達は足を止める・・・

「・・・慧音さん。てゐを連れて永遠亭へ」

「ああ、死ぬなよ」

そう言ううと慧音さんはてゐを抱えて走り出す・・・俺は

「ここまで追つて来るとは御苦労だな。ドクター・ゲロ」

後ろには俺の天敵。俺達の敵であるゲロ（ウエル）が来ていた

「違いますよっ！私はウエルです！なんで某漫画のすぐやられた人造人間の名前になる

んですか！」

「・・・名前忘れちゃった。えーつと、セルさん？」

「悟飯にやられたやつの名前を出すな！最終的には未来でトランクスにも負けてたじゃないか！」

「パンツ？」

「トランクスだ！ロン毛の！おカッパの！」

「あー7つの金玉ね」

「ドラゴンボールですよ!?!」



おお、流石はウエル。俺のボケに全てツッコミやがった

「はあはあはあ・・・なんて攻撃だ。強すぎる」

あれえ!?もしかして聞いている?聞いているんですか!?もしかしてツッコミ耐性のない人!?

「・・・じゃなくて!どうしてお前がこの世界に!」

「はっ!?・・・簡単ですよ!私も月詠草が欲しいのです!もちろん科学のためにね!」

「・・・クソ野郎が!お前は家に帰って泥パックしてろ!」

俺はベルトを腰に巻き変身の構えを取るが

「おっそいですよオ!」

「っ!」

ウエルの白衣の袖からムチみたいなのが俺の手に当たる。そうすると手からメモリが落ちる

「っ!しまった!」

「ははは!ビート!調子が悪いみたいですねえ!」

「くそっ!調子に乗るなっ!」

俺は緑のメモリをベルトに通す

「変身!」

『スタート、メロディー！リーフ！』

木の葉が舞い上がると同時にザババの片割れの音楽が流れ出す

『切り裂く魂！刈り取る命！』

LET'S SLASH!!!

仮面ライダービート！リーフツツ！！』

俺の姿は昆虫のようなフォルム。さらには背中に鎌を背負い、足はバツタのような腕に小型の鎌が存在する戦士になる

「始めましょう！実験を！」

「うっざいんだよ！あんたはあああつ！」

俺が鎌を手に取り、ウエルは杖を向けたことで、俺達の争いが始まった

## 第4弦 永遠と蝶と幻想と

咲夜「着きました。ここが永遠亭ですよ」

翼「……だいぶ大きいな。一瞬家と見間違えたぞ」

雪音「……先輩の家って大きいのな。」

私たちは鈴夢が行くと言った人里を後にし、先に永遠亭に来ていたレミリア「……あら。いつものイタズラ兔はいないのね」

咲夜「珍しいこともあるものですね」

翼「イタズラ兔だと？」

咲夜「ええ。この竹林には妖兔と月兔がいるんですが……」

雪音「……両方聞いたことない種類だな」

私たちが永遠亭の入口でそんな会話をしていると永遠亭の扉が開く。

そこからは制服のような服を身にまとった兔耳の少女が出てきた

レミリア「……鈴仙？」

鈴仙「あー……レミリアさん……咲夜さん……助けてえ……」

その情けない声とともに鈴仙と呼ばれた少女は倒れ込んだ

翼「大丈夫なのか？」

レミリア「この程度、日常茶飯事よ。さあ、入るわよ」

そう言うのと彼女たちは永遠亭に足を踏み入れた。

◇

鈴夢「くそっ！どうしてこの世界まで追ってくるんだ！」

ウエル「しようがないですよねえ！君が人に戻ろうとするからア！戦争が起こせないんですよ！」

鈴夢「てめえが諸悪の根源かつ！」

ウエル「違いますよオ！？わたしは世界を変えたいだけなんですわねえ！」

鈴夢「こいつはアアっ！」

俺は両手にある鎌を振るい、ウエルへと肉薄するが奴の出すノイズによつた阻まれるウエル「まあ！君の敵は私だけではありませんしい！？君はいつかは死ぬんですよ！」

鈴夢「——っ！」

俺は鎌を投げ、繋いだ糸によつてウエルへと肉薄するが、ウエルの腕に阻まれた

鈴夢「がつ！」

ウエル「おんやあ!?まるで赤子のようですねえ!動きが手に取るようにわかりますよオ!?!」

鈴夢「・・・てめえが・・・お前が戦いをつ！」

俺の心が黒くなる瞬間。遠くから矢が飛んでくる

ウエル「!?誰ですか！」

・・・ウエルが叫んだ。しかしその方向には誰もいなくて・・・

「俺はここだよ」

気づけばその戦士は空にいた

「もらったぞー！」

ウエル「ちっ！」

彼は長棒をウエル目掛けて叩き込むが、ウエルはそれを回避し彼に蹴りを入れる

しかし、彼もさらに姿を変え剣でそれを受けとめウエルを投げ飛ばす

「あー・・・駄目だったか・・・」

紫の戦士は悔しそうな声を出すが行動にはそんな素振りは一切ない

むしろ獲物を狙うその行動だ

「あー・・・この剣捌きだと妖夢に怒られるなあ・・・」

鈴夢 「妖夢さん!? 魂魄の娘さんですか!？」

「おっ? 知り合いつて・・・ お前は妖夢の言つてた!」

俺達が意気投合しているとウエルがノイズを召喚してくる

鈴夢 「話は後です! 今はこの場を!」

俺はそう言うのと青のメモリを通す

トイ 『チェンジ! メロディー! ウォーター!!』

俺はこの前、了子さんに強化されたスイカタナを担ぐとノイズを切り裂いていく

ウエル 「——っ! ここは分が悪いですね。少し引きましょう。」

鈴夢 「逃げるなあ! お前はここで死んでけ!」

ウエル 「教えてあげます霧夜 鈴夢! 戦争は既に始まつてるのですよ!」

鈴夢 「何!？」

ウエル 「君を助けるものと利用したいものの戦争ですよ! ははははっ!」

そう言うのとウエルは虚空へと消えていく

「あー・・・逃がしたかあ・・・」

鈴夢 「・・・どのみち俺達の邪魔をしなきゃ結果オーライですよ」

「・・・君は?」

鈴夢 「・・・霧夜 鈴夢です。あなたは・・・仮面ライダーダークウガ?」

「・・・鈴夢さんか！やっぱりな！」

ふえ!? なになにに？ なんて抱きつかれてるの!?

俺が名前を名乗ると彼は何故か抱きついてくる

「うんうん！ いい身体してるよ！ これなら幻想郷を救った理由がわかるな」

鈴夢 「・・・君は？」

「おっと。自己紹介がまだでしたか。」

彼は変身を解くと改めてお互いの姿を確認する

彼の服装は外の世界のそれだ。恐らく八雲あたりが手を回したのだろうが・・・

「俺の名前は魂魄こんぱく海聖かいとだ。よろしくな先輩。」

鈴夢 「せんぱっ!？」

海聖 「そう驚くなよ。ここに長くいたんだから当然だろ？」

鈴夢 「・・・そうか。」

海聖 「納得しちやったよ・・・」

取り敢えず聞きたいことは山ほどだ。

まずは・・・

鈴夢 「君は仮面ライダーダークウガで間違いないね？」

海聖 「ああ。」

ベルトやフォームを見る限りだがそれは仮面ライダークウガのものだった。まさか  
と思っただが……

鈴夢「……次は君は外の世界の人間なのか？」

海聖「半分半分かな。既に俺の肉体は死んでるからな」

……つまりは幽体。もしくは体は借り物なのだろう。そこは理解できた

鈴夢「……後は……お前はどこの世界から来たんだ」

海聖「……ノーコメント。俺は自由になれたんだからな。」

そう言うと彼は永遠亭のある方向にドンピシャに歩く

海聖「行こうぜ？お姫様たちがお前を待ってたよ」

鈴夢「……ああ。」

そう言うと俺達は歩き始めた。

◇

紫「あー……鈴夢はまだなのー」

幽々子「鈴夢♪鈴夢♪れーいむ♪」

レミリア「……一足遅かったか」



永遠亭と呼ばれるところに入り、茶の間に通されたがそこには酒に酔いつぶれた人たちがいた。

輝夜「鈴夢ー……むにやむにや……」

勇儀「ぐおおお……」

クリス「汚えな……なんか」

咲夜「鈴夢さんがいなくなつてからいつつこんな感じですよ。少しは身分を弁えて欲しいものです。」

……聞けばこの人たちは妖怪やら鬼だとか……とにかく強いらしいが。

この姿を見てるとそれを疑ってしまう。

レミリア「……ところで鈴夢は？まだ来てないの？」

翼「そう言えば……」

と、そこに駆け込んでくる影が2つあった

慧音「はあはあ……間に合ったー……」

てゐ「おつかれー。」

入ってきたのは布越しでも分かるスタイルのいい女性とうさ耳の可愛い子だったてゐ「あれ？鈴仙がいないね？死んじやったのかな？」

咲夜「あの兎がくたばるとお思いですか？」

てゐ「そんなわけないでしょ」

クリス「……」

大変なんだなって思いながら、私は恐る恐る尋ねてみる

クリス「お忙しいところわりいな、あんたらは鈴夢を知ってるのか？」

てゐ「ん？鈴夢？ああ、さつきそっちで戦ってたよ」

翼・クリス「何!？」

てゐ「でも今終わったよ。大変だろうなー」

そう言うとうさ耳の少女は部屋の座布団を下に横になる寝る時の仕草は動物そのものだった

慧音「……すまないな。取り敢えず自己紹介はしておこう。私は上白沢慧音、人里で教師をやってる」

クリス「雪音 クリスだ。鈴夢のお姉ちゃんだ」

翼「風鳴翼だ。一応……鈴夢の嫁だ」

慧音「……ピキッ」

慧音さん……で、いいのか？何故か先輩が自己紹介を終えると表情を一瞬だけ変えてた。

と、私たちがくだらない事で喧嘩してると

鈴夢「ただいまー」

海聖「たでーまー」

酒飲み達「鈴夢がギターー。(。▽。)

—!」  
そう言うのと彼女たちは各々に鈴夢が通るであろう通路で待ち伏せして・・・

鈴夢「ぎゃああああ!」

紫「ああん!逃げないでえ!」

幽々子「待つて!一回抱きしめさせて!」

勇儀「鈴夢!私と戦え!」

海聖「妖夢さんただいまです。」

妖夢「・・・海聖・・・遅いです・・・」

海聖と呼ばれた少年は慣れた手つきで部屋の片付けを開始する

鈴夢は永遠亭のあらゆる部屋を使い、彼女たちを避けていく

クリス「あれってなんだ?」

慧音「この世界での常識だ。あんまり気にしない方がいい」

翼「・・・」

目の前の非常識に、私たちは啞然とすることしか出来なかった。

◇

鈴夢「誰か助けて」

俺は彼女たちに捕まるなり、何故か手錠をかけられ、足には足枷をハメられていた紫「ダメよ。こうでもしなきゃ鈴夢が逃げるでしょ？」

鈴夢「このすぐ監禁する癖を止めろって言ってるんですよ！こんな時に聖さんが居れば説教するのに！」

幽々子「聖なら鈴夢の抱き枕で寝てたわよお」

鈴夢「聖さあああああん!？」

両脇から美女に抱かれ、後ろからは体付きのいい美女に抱かれる

勇儀「全く鈴夢も罪な男だな。しかしそんな所も私は好きなのだからな」

鈴夢「・・・いつそ殺すがいい。」

紫「ダメよー、せめて鈴夢を妖怪にしてから・・・」

鈴夢「・・・僕はニンゲンだ」

紫「人間は自分のことを人間なんていいません。」

くそっ！どうして言い訳が通じないんだ！誰でもいいから助けてくれ！出ないと僕の聖槍が危ないんだ！

勇儀「覚悟しろよ。今日はたっぷり愛してやるからな」

鈴夢「・・・さよなら」

クリス「れええええいむー！」

俺が別れを告げるとイチイバルを纏った姉さんがガトリングを構えながら突撃して  
くる

紫「いやああああ！」

クリス「てめえらそこに並べえええ！一人ずつ穴に弾丸ぶち込むからよおっ！」

幽々子「じゃあ私は帰るわねえ・・・」

鈴夢「逃げやがった!？」

幽々子さんの逃走は確定か・・・くう。後で妖夢さんに怒ってもらおうとしよう

紫「いやああああ！スキマを使っても追ってくるううう！」

クリス「までゴラアアアア！」

鈴夢「逃げるんだよあくしろよ」

こうしてイチイバルを使った鬼ごっこは1時間続いた

◇

鈴夢「……で。月詠草の場所はわかんないと」

藍「ああ、あれからいろいろ調べたが……すまないな」

永琳「こつちにも手掛かりになりそうなものはなかったわ。」

鈴夢「……マジかよ」

俺はあの後、永琳さんと八雲の従者、藍さんに月詠草のことを訪ねたが知らないとのこと

地上組は全滅かあ……くそう。

藍「……で、次の宛はあるのか？」

鈴夢「ええ。次は地底のさとりを尋ねたいと」

藍「さととり妖怪か……まあ、地底の主なら何か知ってるかもな」

まあ、本当はここから早く出たいんだけどね？ほら。ここにルールなんてものはないからさ、何時でも襲われるじゃん

翼「……くそっ！何故鈴夢の周りには巨乳がつ……」

クリス「……ダメだ……スタイルが良すぎる……」

妹紅「鈴夢。こいつらどうにかしてくれよ」

ああ、慰めてた妹紅さんから助けを求める声が聞こえた。そのうちアンパンマンが来るんじゃないのかな？

鈴夢 「妹紅さん妹紅さん。アンパンマン呼んでみ？」

妹紅 「ん？アンパンマン・・・か？」

??? 「ははっ！僕〇ツキーだよ!？」

鈴夢 「お前は帰れ」

海聖 「ちっ。乗ってやったのによー」

お前もか。ブルータス。

しかし、次の目的地が決まればやることは一つ

鈴夢 「行こう。くよくよしてる暇はないんだ。」

その時だった、突然目の前の空間が開いて・・・

戦兎 「どいてくれえええええ！」

鈴夢 「んあ!？」

見知った顔が俺の頭に衝突して来た・・・

コラボ編 幻想の地に降り立つ科学 前編

第5弦 世界は回り、時は混ざる（コラボ話）

あー・・・頭にびよびよがあ・・・

取り敢えず何が起こったか説明すると・・・

鈴夢に戦兎が衝突した。

戦兎「うーん・・・鈴夢が目の前にいたような・・・」

鈴夢「うーん・・・戦兎さんが目の前にいたような・・・」

翼「2人して同じこと言ってるのは気のせいかな？」

クリス「大丈夫だろ。馬鹿戦兎はともかく鈴夢は死戦兎なないからな」

取り敢えず2人は寝かせておくことに・・・問題は

永琳「あー・・・あったわよ。月詠草のことが載ってるやつ」

阿求「よかったー！あったんですね！」

この本の山の中から月詠草のことを調べることだ。

元はと言えば八雲 紫の発言。「なら阿求のところを尋ねて来るわ。」から始まった。



紫「なら阿求のところを尋ねて来るわ」

クリス「頼んだ」

鈴夢がぶつ倒れた後、私は八雲から一通りの情報を聞き出し、鈴夢の言っていた阿求と  
か言う娘のところを尋ねるように八雲をお願いしたのだ。

代償は鈴夢の秘蔵写真が3枚。

勇儀「見つかるといいな」

クリス「ああ。」

——数分後——

紫「ただいまー」

八雲 紫の声がして、私たちはその部屋に行くが・・・

阿求「いやああああ！本があああ！」

クリス「つて！なんだこれはああああつ！」

そこには大量の本と・・・

『あとは任せたわ！』

と、言う八雲の伝言だった・・・

クリス「あつたのか！」

八意の発言で、ほとんど全員が傍に集まってくる

永琳「・・・月詠草は月明かりの当たるところにあるわ。」

クリス「ならそこに行けば！」

永琳「だけど、1本の光が当たるところよ？ピンポイントでそんな所があるわけないでしょ？」

クリス「・・・っ！」

阿求「例えるなら光の柱・・・ですかね？幻想郷にはそんな所・・・聞いたことないですわね」

翼「搜索は振り出しか・・・」

しかし、最高の情報が得れた・・・それはここにいるみんなが思った事である。

月詠草の生える場所。それがわかっただけでも価値はあるのだ。嫌でも場所は探し出す。

戦兔「・・・うーん・・・鈴夢？」

鈴夢「うーん・・・戦兎・・・さん？」  
おっと・・・2人が起きたか

俺が身体を起こすと、永遠亭の一室だった

鈴夢「・・・何があつたんだ？」

妹紅「頭をこいつとぶつけたんだよ。それで気絶してた。」

鈴夢「・・・？戦兎さんっ!？」

戦兎「ん!?鈴夢!？」

妹紅「うるさい!」

俺達が叫ぶと妹紅さんに頭を叩かれる。酷い。親父にもぶたれたことないのに。

戦兎「しかし・・・ここはどこなんだ？鈴夢がいるということは・・・鈴夢の世界なのか？」

鈴夢「・・・そうじゃないんですか？でなきや、そちらは説明できませんものね」

戦兎「確かに。なのはや騎士達を知ったらどうなることやら・・・」

ああ・・・未だにシグナムさんやなのはさんたちに好かれてるのか・・・早く告つち

まえばいいのに。

戦兎「なんか言った？」

鈴夢「なんでもないですよ。」

こういうところは鋭いんだな！こんちくしょう！

戦兎「・・・あれ？なのは達も飛ばされたはずなんだが・・・」

鈴夢「ん？どうやって？」

戦兎「ブラックホール・・・かな。確か奏者がどうこう言われたが。」

鈴夢「・・・っ！」

恐らく南雲なのだろう。彼らを飛ばし、一体何がしたいのか・・・そう思っていると

海聖「その人誰だよ？」

鈴夢「ああ、・・・そうだったな」

そうだ。海聖は戦兎さんのことを知らないんだ・・・

ここで選択肢さんの出番！

鈴夢はどうする？

戦う

説得

寝る

## 丸投げ

## 命大事に

・・・ダメだ。まともなコマンドがない。

戦兎「俺は・・・」

俺が頭の中で説明しようか悩んでいると戦兎さんが1歩出て言葉をかける

鈴夢（戦兎さん!?!でも・・・本人が説明するならいけるかもしれない!）

戦兎「俺は・・・」

「俺は、この世界とは関係ない人間だよ」

鈴夢（あー!ですよねー!そーなりますよねー!（思考放棄）

海聖「何?」

戦兎「どうした?君も仮面ライダーなんだろう?」

海聖「・・・だったらなんだよ」

戦兎「アリサだったら戦えって言うからな。丁度いい。お前と戦わせて貰うぞ!」

海聖「上等だ!」

鈴夢「どうしてこうなった。」

しかし、戦兎さんがここまで戦意高揚してるのは久しぶりに見る。何か訳があるのか  
もしれない。

海聖「表に出やがれ！こてんぱんにしてやるよ！」

戦兎「はっ！お前なんか空の藻屑にしてバイバイキーンって言わせてやるよ！」

戦兎さん。それいろいろアウトですう。

まずバイバイキーンって何!?!とこかの呪文か？

鈴夢「・・・これでいいのか。」

俺はこの状況を放置し、永琳に胃薬を貰いに向かった。

s i d e 鈴夢

鈴夢「えーりん。胃薬をくれ」

永琳「・・・その呼び方は変わらないわね。はい」

鈴夢「・・・さんきゅ。」

俺は胃薬をそのまま飲み干すと改めて永琳に目をやる

永琳「な・・・なによ」

鈴夢「変わったなあ・・・みんな」

永琳「・・・そうね。あなたがいない間にだいぶ変わったわ」

鈴夢「そーなのか」

永琳「特に地底の連中なんか騒いでたわよ。特に橋姫がね」

鈴夢「パルパルが？」

トイ『それは浜名湖。俺達が話してるのはパルスイだろ』

鈴夢「そうか」

しかし。意外だな。あれだけ「妬ましい妬ましい」言ってた姫が自分の事を心配してくれるなんて。いっつもだが嫌われてると思ってた

鈴夢「・・・ところでトイ。」

トイ『んあ？』

鈴夢「向こうの世界・・・つまり。俺達の世界がどうなってるか分かるか？」

トイ『戦兎が入ってきた時に世界がズレた気がした。恐らくそれだろうな。』

人間は・・・大きな時間のズレは感じるものの、小さな時間のズレは感じない。そこそ細かいところに敏感とかそう言う感じだな。しかし、戦兎たちのズレは俺たちでも感じづらいものだった。』

鈴夢「・・・つまりどこか大きく変わった訳では無いんだな。」

トイ『そう言うことになるな。』

つまりだ。こちらの世界に戦兔さんが来たことは世界にズレが生じたのではなく、向こうの世界にズレが生じたから戦兔さんが来たんだ

・・・この予測から感じるに、向こうの世界は危険なんだろう。

鈴夢「早く戻らないとな」

永琳「あんまり女の子に心配はかけさせないでね」

鈴夢「分かっているさ・・・それが、仮面ライダーと言う力を託された責任なんだ。」

俺は拳を握りしめると改めて永琳に向く

鈴夢「永琳。ここから神子さんに会いたいんだけど・・・どこにいるか知ってる？」

永琳「・・・わからないわね。取り敢えず・・・厄神に教えて貰った方が早いんじゃない？」

鈴夢「厄神・・・ね。」

厄神「・・・それは鍵山 雛さんのことだろう。」

彼女は人と関わることを避けるため、妖怪の山に普段はいるが・・・

鈴夢「わかった。探してみるよ」

必要以上に会わないために、彼女とはあまり面識がないのが痛いかな

永琳「全く・・・早く行きなさい」

鈴夢「ああ！」



俺はお駄賃を置くと、永遠亭の扉を開け、外へ出る

クリス「鈴夢？何処に行くんだ!？」

鈴夢「姉さん！俺には用事が出来た！戦兔さんや海聖を頼む！」

クリス「わかった！必ず帰ってこいよ！」

俺は姉さんに手を振ると、山へ向けて走り出す。

・・・二課side

マリア「っ！あなたは何者なの!？」

私たちは鈴夢のいない間に何度かの襲撃を受けていた

それはウエルの者ではなく・・・異形の形をした化け物だった

切歌「こいつ・・・切っても切っても再生するデス！」

調「・・・厄介なやつ。」

空を飛ぶ彫刻のような人形は私たちに向けて攻撃してくる

翼を広げるとそこから超音波が流れ、数秒後には私たちの足元で爆発を起こす

マリア「ああっ！」

セレナ「姉さん！」

防御に徹していたセレナが刃を抜き、人形へと飛ばすが

』

人形から出された不協和音と共に全て落とされる。

切歌「防御も攻撃も完璧すぎデス・・・」

調「それどころか攻撃のパターンがわからない。迂闊に手は出せない・・・ね」

調の言う通りだ。

敵は恐らくただ遊んでいるだけなのだ。そうでなければわざわざ同じパターンで。

さらに何回も重ねて来るわけがないのだ。

セレナ「・・・出力が落ちてる。リンカーは？」

マリア「これがラストよ。次は無いわ」

そう言うともマリアは最後のリンカーを打ち込む

セレナ「ラストチャンス・・・ね」

そう言うとも私たちはそれぞれ刃を構えるが

「深淵は自分を見つめ、俺達もまた深淵を見つめている・・・」

マリア達「!？」

そこにもう一つ・・・人形が降りてくる

「そうは思わないかい？活発のヴィバーチエ。」

「・・・勇ましのマルチアーレ。なにか用ですか？」

そこに降りてきたのは独特の雰囲気を持った、古臭い服装の青年だった

マリア「・・・名前が・・・まさか」

セレナ「南雲くんと同じこと言ってる！」

ヴィバーチエ「・・・南雲・・・フォーコですか。あの者は・・・」

と、そこで青年―マルチアーレと呼ばれた青年が手を叩く

マルチアーレ「お話はそこまでだ。これ以上の言葉は禁句とする。これは命令だぞ」

ヴィバーチエ「御意。」

そう言うのと彼らは下がろうとするが・・・

「エクセリオンバスター！」

マリア「光!？」

遠くから光が煌めき、彼らにレーザーとなつて直撃する

マリア「魔力砲!?!これは！」

セレナ「姉さん知ってるの!?!」

啞然とする中、さらに上から金髪の魔法使いが飛んでくる

「行くよ！バルディッシュユ！」

『了解』

鎌のような武器を担いでの一撃を当てるが、マルチアーレはそれを簡単に受け流す  
「っ！一筋縄じゃいかないか」

マルチアーレ「はっ。なかなかやるじゃないか・・・だけど。タイムオーバーだ。」  
そう言うのと彼らは光を身にまとい空を舞う

マルチアーレ「一つだけ忠告する。霧夜 鈴夢の道を阻むなよ。阻んだ瞬間・・・君  
たちの命を殺すっ！」

そう言うのと彼らは姿を消し、その場には私たちが取り残された

セレナ「・・・彼女たちは？」

マリア「私たちの知り合いよ。セレナ」

そう言うのと私は彼女たちに近づき

マリア「久しぶりね、なのは、フェイト。」

懐かしく・・・そして忘れない名を呼んだ。

・  
・  
・

はあはあ・・・

俺は幻想郷の大地を疾走する

ルーミア「おつ、鈴夢だー」

途中で懐かしい声を何回か聞いた

萃香「鈴夢久しぶりー・・・一緒に飲まないかい？」

それでも俺は走ることを止めない

鈴夢「ははっ・・・命を燃やすのは最高の気分だなっ！」

そう言い、胸に手をやるとすぐ心臓からなのか・・・少し熱く感じる

鈴夢「これでいいんだ・・・走り続ける！誰が邪魔しよう俺の思ったままに行動す

るんだっ！」

俺は目的地である厄神様の家を目指し、幻想の台地を走る。

全く・・・馬鹿だよなあ・・・俺は。

## 第6弦 厄神様と天人様。

戦兎&海聖「うおおおっ！」

俺は今、この世界に来て早速、仮面ライダークウガと戦っている。

海聖「何が鋼のムーンサルトだ！調子乗ってんじやねえぞ！この厨二野郎！」

戦兎「そつちこそ！何がドラゴンだよ！ドラゴン要素ねえだろ！」

海聖「そうだよただ青くなって空を飛べるだけだよ！だから何だよ！」

拳と拳がぶつかると、お互いの身体は簡単に飛ばされるが俺達は地面を飛ぶ感じで疾走し、再び肉薄する

戦兎「くそっ！まともにやるとこつちが苦しいな！」

海聖「平成最初のライダーを舐めるなっ！」

海聖はそう言うとう手に持った長棒を俺に向けて振り回してくる

戦兎「っ！おいおい！それは反則だろ！」

海聖「しょうがないよなあ！これが俺のやり方なのさ！」

そうかい！・・・なら！

俺は手元に新たなフルボトルを取り出すと、ベルトに差し込む

『ゴリラ！ダイヤモンド！ベストマッチ！』

その音声が鳴ると、俺はベルト横のレバーを回転させる

海聖「クウガの力を見せてやる！」

そう言うのと彼のベルトは青から黒になり、再び変身の構えになる

俺がレバーを回転し続けると、足元から目の前……後ろにかけてにビルドのアーマーが構築される

『Are you ready?』

海聖&戦兎「変身!!」

ビルドアップ

海聖がベルト横に手を掛け、俺は叫ぶ……するとクウガは黒くなり、俺の身体には新たなビルドアーマーが装着される

『輝きのデストロイヤー！ゴリラモンド！』

戦兎「へっ……まさかの伝説とやるとはな」

俺はビルドのフォーム。ゴリラモンドになったことに対し、向こうはかなりガチのようだ。

戦兎「まさかアルティメットで来るとはな」

海聖「中途半端だどこつちがやられる。ただそれだけなんだよ。」

そう言うのと彼は飛翔し、俺に飛びかかってくる形で攻撃してくる

戦兎「生憎、命をかけるのは鈴夢だけでいいんだよ！」

俺は主に右側に構築されたゴリラアーマーの主甲で拳を受け止め、さらに空いてる左手で殴り返す

海聖「ちっ！後期のっ！こんな奴にいいっ！」

戦兎「怒りだけじゃ戦えない。憧れだけでも、強さだけでもな。」

海聖「おおおっ！」

しかし、しぶとさだけは一人前だ。彼は再び立ち上がると俺に拳をぶつけようとしてくる

戦兎「これなら鈴夢の方が強かったな。アリサたちにしばかれた頃が懐かしい」

海聖「逃げるなっ！戦え！」

戦兎「言われなくてもっ！」

俺は少しずつ下がりながらも、彼の拳を受け止め弾く

戦兎「ちよっと待ってろよ？」

『ラビット！タンク！』

俺はビルドをラビットタンクに戻すと、彼との距離をさらにとる

海聖「何!?!」

戦兎「ちよっと待ってろ！」



俺がレバーを回転させると、滑り台のようなものが海聖の動きを止める  
海聖「不味いつ!？」

そんな声と共に、俺は台の頂上へ

『Ready go! ボルテックファイニッシュ!』

戦兎「もらった!」

俺の渾身のライダーキックはクウガに直撃し、変身を解除させる

海聖「・・・っ!」

戦兎「鈴夢も大変なんだな。」

俺も変身を解除すると・・・改めて綺麗な風が俺たちの熱を冷やしていった

鈴夢「・・・」

俺は姉さんたちとは別行動し、今は妖怪の山に来ているが

小町「できあ・・・映姫様つたらまだ成長期来てなくてさあ・・・」

鈴夢「・・・小さいのも需要あると思うんだが」

小町「そうかい?」

鈴夢「でないと殺されそう。」

小町「じやあ大きい方は？」

鈴夢「ノーコメントで。」

と、俺達はそんな会話をしながら目的地である、厄神さん家へ向かっている

隣の人は小野塚 小町さん。この人は自分よりは大きいであろう鎌を肩に担ぎながら隣を歩いている。そして死神だとか。

小町「最近さあ。あたいの立場がない気がするんだ」

鈴夢「ん？映姫さんのせい？」

小町「違う違う。仙人のやつだよ。」

鈴夢「ん？ああ、華扇さんか」

茨木 華扇。幻想郷の長寿の人間として噂されてる仙人か。実際にはあったことないからなあ。どういう人なのか、それだけがわからない

小町「あの仙人も困ったもんだよ、私が家に来るなりすんなり通してさあ、話するんだぜ？」

鈴夢「へえ。」

ちなみに小町さんは三途の川の船頭という役職で、魂を運ぶのが仕事とか。

鈴夢「今日はさぼり？」

小町「んなわけないだろ？今日は休暇だよ」

鈴夢「珍しい。」

小町「映姫様は頑張ってるよ。あんたがいなくても泣かなくなっただしねえ」

鈴夢「まじか。泣く子の映姫も見えたかった。」

ちなみに俺達はちびちびとお酒を飲んでる。俺のはピ〇メキーノのこどもびーるだ。これのりんご味がど不味い。

しかし、この不味さがなかなかよいので俺は愛用している。

小町「はぁ・・・つままないなあ」

鈴夢「平和が一番だよ。」

小町「そうだけどさぁ・・・宴会がないってのもどうかと思うけどねえ」

鈴夢「・・・そうか。」

異変も特にないのか・・・季節の変わり目や、特に行事がない以外には宴会がないとの事だ。俺がいた頃には毎回のようになってたのになあ。

まあ、今遠くで姉さんたちの嘆く声とか、戦兎さんの悲鳴が聞こえた気がするけど困るなあ。難聴なのかなあ。

鈴夢「おっ。着いた着いた」

小町「ここが厄神さん家かい。」

と、俺達が家の前でコソコソやってると・・・

雛「あら、珍しい組み合わせね」

鈴夢「・・・ビビった。」

俺達の背後には既に鍵山 雛さんが立っていた。

この人の姿は実に美しく・・・幻想郷美しさランキングで上位に入りそうな人だ。

さらには滅多に人里に、山に、そして霧の方にも顔を出さないためにミステリアス  
ガールとも呼びたい人だ

雛「今、失礼なこと考えた？」

鈴夢「そんなことありません。はい。」

雛「そう・・・」

危ねえ危ねえ・・・みんな知らないと思うが・・・

彼女は重のヤンデレなのだ。

三回ぐらいあつた記憶があるが・・・そこで問題があつた。

早苗「うへへへへ・・・鈴夢さあん・・・♡」

守矢神社——一人の巫女が部屋で写真の山に埋もれながらゴロゴロしていた

神奈子「うわぁ・・・」

諏訪子「ドン引きだね。そんなに鈴夢が嫌いかい？」

神奈子「ち、違う！逆だよ逆！」

諏訪子「じゃあなんで引いてるの？」

神奈子「早苗だよ。」

そう言いながら神奈子は転がってる早苗を指さす。諏訪子は理解し「あー」と。

諏訪子「まあ。早苗の鈴夢好きは今に始まったことじゃないのにねえ。」

神奈子「そうだけどさぁ・・・さすがに部屋一面鈴夢の写真で埋め尽くすのは・・・」

諏訪子「人形遣いと紅魔のメイドと人里の教師と・・・以下略・・・あと天人もやってるよ」

神奈子「・・・やり過ぎだろ。」

全くだ。この言葉に何人同意するだろうか。

ちなみにだが。今でも鈴夢の写真は売られている（鳥天狗経由）お値段は1枚無料の2枚目から課金制だ。

ちなみに顔パスなんてものも通用するらしく彼女たちはこれにて無料で手にしている

諏訪子「最近になって鈴夢の写真が急増したからねえ。そりや早苗も元気になるよ」  
神奈子「大人しかった頃の早苗がなつかしいよ」

諏訪子「今では腐女子とやらのなりそこないだからねえ。困った困った。」  
守矢神社ではこんな感じ。では元の世界はどうだろう。

響「鈴夢くーん（ゴロゴロ）」

玲奈「・・・響？鈴夢の布団を返してくれない？」

未来「響。その布団燃やすから貸して」

鈴夢「ん？今、寒気がしたけど・・・気の所為か。」

雛「あら。私の前で他の女の子？」

鈴夢「いや？そんなことはないですよ」

・・・いかにいかに。ヤンデレの対処は姉さんたちで学んだぞ。これ以上の失敗は許

されない。

この狭い空間に二人きり・・・小町さんは帰っちゃうし。部屋には拷問器具のようなものがちらほら見えるんだよなあ・・・

雛「お茶でいいかしら。」

鈴夢「ええ。簡単なので構いませんよ。」

雛「そう？じゃあそうするわね」

彼女はそう言うのと部屋の奥へと消えていく。俺はそれを見て周りの状況を確認した。窓は補強済みだ。さらには椅子などのものが少なく、さらには鈍器を周辺に置いていない。たぶん嚴重に管理してるのだろう。

さらには扉に2重ロックがかかっている。恐らく俺が逃げない・・・

雛「ドウシタノ？」

鈴夢「―っ！」

刹那、背中冷たいものが走った。それが恐怖なのか怯え・・・もしくは他の感情なのかはわからないが。俺は後ずさってしまふ

雛「ドウシテニゲルノ？ナニカヤマシイコトガ・・・」

鈴夢「・・・っ！無いです無いです！」

ついつい殺意を見せてくる雛さんに俺は焦って答える・・・やべえ。地雷踏んだかも

雛「そう？なら良かった♡」

鈴夢「・・・っ。」

この天使のような笑顔も・・・今は怖く感じる。

鈴夢「・・・ん。美味しいな・・・」

雛「ふふふ・・・当然よ。あなたの好みに合わせたもの」

鈴夢「そうなんだ。」

・・・と、体に違和感を感じる。

先程までの鋭い感覚が、何故か少しずつ無くなっていく感じがする・・・え？

なく・・・な・・・って・・・

ドサツ

戦兎「ん？鈴夢は？」

クリス「鈴夢ならどっか行ったぞ。」

俺が永遠亭に戻ると翼さんは何故か倒れ込み、クリスさんは何故か鈴夢の人形を作っ

ていた



クリス「ほら。出来たぞ先輩」

翼「鈴夢の人形だああ・・・鈴夢うう・・・」

戦兎「・・・変わり身としては有効だな。」

改めてこれを見ると鈴夢がどれだけこの世界で苦労してるかがわかる。

戦兎「・・・てか。元の世界に戻りたいんだけど・・・」

クリス「しばらくは諦める。それとも鈴夢のことを手伝いたくないとか言うのか？」

戦兎「ソナンワケナイデスハイ」

クリス「ならいいけど。」

そう言うのとクリスは永遠亭を出て行ってしまふ。

戦兎「・・・鈴夢はこの中で生きてきたのか。強いなあ・・・あ、お菓子下さい」

鈴仙「はーい！ただいまー」

そう言うのと兎の女の子が持ってきてくれたお菓子を食べつつ、俺は鈴夢の帰りを待つていた・・・とその時。

「鈴夢ー！鈴夢はおらんかー！」

「やめましよう総領娘様。鈴夢様はいませんよ」

「いるわよっ！でなきや天狗が空を飛ぶわけないもの！」

外から騒がしい声が聞こえるので、俺は表に出てみる・・・そこには

天子「ちよつとあなた！鈴夢がどこにいるかわかるかしら！」  
衣玖「すいません。少しワガママに付き合ってください。」

戦兔「・・・誰ですか？」

どうやら鈴夢の災難は俺にも来るらしいな。恨んでやろうか。

## 第7弦 暗く、冷たく、狂おしく

???

・・・そこは暗く冷たい部屋だった。

うろうう・・・

うわアア・・・

「ちっ。相変わらずうるさい亡者たちだ。さっさと死ねばいいものを」

「未練がましいな。一思いに首を切り取ってやろうか。」

そこでは二人の死神が管理していた。

ペザンテ「なあ、セツコよお。」

セツコ「なんだペザンテ。」

ペザンテ「奏者のお出迎えとかいつてよオ。あいつら最近慌てる見たいじゃねえか。」

セツコ「そうだな。まあ、我らを統一する存在なのだ。それなりのお出迎えが必要なのだろう。」

ペザンテ「・・・フィーネもそうだ。ノコノコと人間達に味方しやがって・・・」

彼らのようなドーレムは・・・異形の怪物などではない。

セツコ「・・・仕方あるまい。同じ古代文明の生き残りだ。我らが排除することになるだろう。」

そう言うのとセツコは亡者の頭を蹴り、氷の海へ突き落とす

セツコ「俺達は冷徹でなければならない。そうでなければ、あのお方を。奏者をお出迎えることは出来ないのだから」

ペザンテ「・・・わからなくもねえな。だけど俺にはやりたいことがある。」

そう言うのとペザンテは氷の画面にある男の写真を写す

セツコ「・・・この男は・・・」

ペザンテ「必ず消してやる！こいつだけはっ！」

セツコ「・・・ん。了解だ。」

セツコは耳に手を当てる仕草をすると、そのように言葉を返す

ペザンテ「どうした？」

セツコ「集会だ。どうやら異世界の人間が来たらしい」

ペザンテ「・・・へっ。」

そう言うのと彼らはコキユートスを後にした。

戦兎「へえ．．．ずいぶん賑わってるんだな」

海聖「まあね。ここら辺はずっとこんな感じだよ。あつ、味噌汁いるか？」

戦兎「貰おう。」

俺達は二人で永遠亭から出発、竹林を抜け、人里に降りている。

里は人で賑わい、平和を感じ取れるような凄さがあつた

戦兎「温まるなあ．．．」

海聖「当たり前だろ？ほら、米も食え」

戦兎「腹が減つては戦が出来ぬ．．．な。おもしろい冗談だよ」

そう言いながらも、俺は差し出された米を食べる．．．

海聖「．．．でさあ、この人たちは何？」

と、海聖が突然余分な事を切り出した上に指を指した先には

天子「もぐもぐ．．．」

衣玖「．．．」

なんだろう。知らない人が二人もいる

戦兎「さあな。知らない人だよ」

海聖「嘘つけい。知らんやつがここまでついてくるわけないだろ」

戦兎「・・・さつき永遠亭で会った。鈴夢の知り合いだよ・・・多分。」

海聖「鈴夢さんの？それならありえるか」

・・・なんで納得したんだ。普通は聞き返すところだろ。「え!? 鈴夢の知り合い!?」  
みたいにあ、シンプルでもいいから。ね？

戦兎「で。どうして鈴夢に用があるんだ？」

一応だ。こいつらの目的を聞いておこう。もしかしたらなにか大事な事が――

天子「鈴夢を殺しに来たのよ」

はいー死亡フラグですーお疲れ様ーじゃなくてなあ！

戦兎「なんでだよ！どうしてそうなった!?!」

海聖「激しいキャラ崩壊乙。」

ここまでキャラ崩壊させてうちの作者（コラボ相手様）に怒られないか!?!大丈夫かこの作者!?!頭いかれてんのか!?!

作者「頭のネジ? 最近旅をしてましてね。」

天子「・・・そんなことより鈴夢はどこよ! 帰ってきたのは知ってるのよ!」

戦兎「首を掴むな首を! あと地味に指をチョコキにするなよ!」

衣玖「何時ぐらいかかりそうですかね?」

海聖「あと三時間はかかりそう。」

人里でギヤーギヤー喚く俺たちを差し置いて・・・海聖と衣玖さんは味噌汁を飲んでいた・・・

海聖「あつ。味噌が違うわ」

鈴夢「・・・っ。」

目を覚ますと・・・そこは知らない部屋だった。

雛「あら。起きたのね」

鈴夢「雛さん・・・これはなんの冗談ですか？」

俺の体は椅子に縛り付けられ、手足にはお決まりの手錠、足枷。さらには腰にも拘束具がはめられていた。ああ、逃げれないな

雛「冗談？いいえ。これは私たちの愛を確かめるのに必要なことなのよ」

鈴夢「タチ悪いですね。出来れば優しくして欲しかったな」

雛「あら、生憎私は肉食系よ？あなたを食べることに関してはね」

くそっ。話を通じてないじゃないか。当たり前のことだけど、当たり前のことだけで

！当たり前の（以下略

雛「でもよかつたわ。あなたがお茶を飲んでくれるなんて……もし飲んでくれなかつたらどうしようかな……って」

鈴夢「……」

考える。ここから出る方法を……

まず見ても、この手枷足枷だ。どう見ても外の世界のそれじゃない……つまり。

鈴夢（さてはにとりさんだな……こんなもの売りやがって……）

雛「さあて……どう料理しようかしら……」

このまま行くと本当に俺がヤバい。多分だが……俺の命はこの後の行動次第だろう。

雛「さあ。たあーくさん。私たちの愛を育みましょう？」

鈴夢「んぐっ!？」

そう言うのと雛さんは頬を赤らめながら俺に深く……だけど優しい口付けをしてくる……

しかも時間が長え。もはやマーケティングとか言うやつだろ。

雛「ぷはあ……ふふふっ……これが鈴夢の味なのね？」

鈴夢「ゲホッ……はーはー……」

雛「もつと欲しいわね……次は唾液を頂戴？」



鈴夢「んんんー!」

また口付けだ。しかし次のは違う。

唇を重ね合わせ、舌を俺の口に入れると俺の唾液を吸い取ってくるのだ  
雛「じゅるっ!じゅるるる!」

鈴夢「・・・っ・・・ん・・・」

ヤバイ・・・そろそろ感覚が落ちそうだ・・・

鈴夢（・・・不味い・・・なにか・・・なにかないのかだ。）

と、その時だった。突然キスをした雛さんが俺を抱え始めたのだ。

鈴夢「雛さん!」

雛「っ!嫌な予感がするわ!行くわよ!」

そう言うのと俺達は家を脱出し、山を駆け抜ける

鈴夢「どうかしたんですか!?!そんな焦ることもないでしょう!」

雛「焦ることよ!感じないの!?!この厄を!」

鈴夢「厄・・・!?!」

と、俺が変化に気づいたのはその後だった。突然森が変色を始めたのだ

鈴夢「っ!色が・・・」

雛「・・・異変かしら・・・それにしても狙いがわからないわね」

鈴夢「だいたい予想はつきませんが・・・恐らく狙いは俺です」

雛「どうしてかしら？」

鈴夢「おい。出てこいよ」

そう言う俺は木の上を指さす・・・そこには

「流石は奏者。腐つても一流・・・か。」

鈴夢「・・・誰だ。」

カルマ「俺は静穏のカルマ・・・ドールムの1人だ」

鈴夢「・・・古代文明の生き残り・・・」

カルマ「多少は知識があるようで何よりだ。霧夜 鈴夢。」

鈴夢「・・・」

俺は雛さんを後ろに・・・やつとの距離を少しずつつ開ける

カルマ「なあ鈴夢よ。この異変を変とは思わないか？」

鈴夢「っ?!この異変はお前達が起こしたんじゃないのか!」

カルマ「違う。この異変は二つの世界を跨いで行われている」

鈴夢「二つ・・・だ?!」

雛「・・・やっぱり異変なのね!でも二つの世界って!」

そう言う俺はカルマは俺に鏡を渡す・・・そこには

鈴夢「……っ！響！奏さん！」

雛「これは外の世界のっ！」

カルマ「……な。わかっただろう？これで異変の主犯がな」

大量のノイズ。そして空を埋め尽くす大量の石像たち……

間違いない。ドクター・ウエルだ。あいつがこの異変の主犯だ。

鈴夢「……どうして」

カルマ「ネフィリムだよ。あの木偶の坊を動かして自分の力にしたいんだと」

鈴夢「……っ。」

雛「……それをどうするの？」

カルマ「簡単だよ。ネフィリムを作り出しさらに送り込む……ドレームの技術を使っ

てね」

ドレームの技術……それは不可能を可能にすることに近いのだ。

新たな人形を作って、それに魂を入れる……そうすることで簡単なドレームが作れるのだ

だけどウエルはオリジナルのネフィリムを主軸に、恐らく軍団を作り上げるつもりだろう。

鈴夢「……そんなことは認めない。」

カルマ「じゃあどうする？奏者として罰を与える？それとも殺すのか？」

鈴夢「どっちもどっちだよ」

俺が手を払うと、そこに白い翼が生まれる

カルマ「っ」

鈴夢「人は自由なんだ。だけど願うことはみんな一緒なんだ。．．．でも一人一人が違う考えを持つからみんな道を外していく．．．」

そうだ。きつとウエルだって同じ思いなんだよ。何かがあったからそうして、何かあるからこうなったんだ。

鈴夢「だから．．．一度話し合うことが大事だと思うんだ。力だけじゃ、思いだけじゃ．．．通じないこともあるから。だから話し合うんだ。思いをぶつけて．．．初めて同じ道を歩むと俺は信じる。」

カルマ「．．．夢だな。それが叶うなんてのは不可能に近い。」

鈴夢「不可能じゃない。可能性は与えられるものじゃないから。」

その言葉を最後に、俺は雛さんの手を取り歩き出す。

カルマ「．．．奏者でもなく自分でもなく．．．一人の人間として．．．か。強くなつたな．．．ビート．．．」

海聖「・・・っ。これはこれは」

戦兎「参ったな。」

鈴夢がカルマと会うぐらい。俺達は異変の変化に気づいていた。

空は暗くなり・・・雨でも振りそうになる程だ。

海聖「雨なんて珍しいな。なんて思ったのが間違いだったなあ」

戦兎「・・・」

海聖は慣れてるようだが。俺はまだ状況を飲み込めないでいた

戦兎「確かに間違いだけど・・・ここまでくると最早テロなんじゃないか？」

海聖「テロ？なにそれ美味しいの？」

戦兎「・・・」

ネタで言ってるのか、本気なのかは問いたくないので俺は周囲を見渡してみる

森の色・・・ではなく。周りが暗くなってるのだ。それこそ俺達は箱のような場所に

閉じ込められたみたいだ。

戦兎「どうする？」

海聖「戻ってもいいけど。それは得策じゃないね」

そう言うのと俺達はお互いの背中を預ける。

戦兎「背中。任せたぜ」

海聖「誰に口聞いているんだ？俺は・・・」

戦兎「仮面ライダー・・・だろ？」

海聖「分かっているならいいや」

そう言うのと俺達の足下に弾丸が飛んでくる

戦兎「この連中は礼儀も知らないのか！なら叩き込むまでだ！」

『忍者！コミック！ベストマッチ！』

海聖「お前から全員締め上げてやるっ！」

俺は黄色と紫色のボトルを差し込み、海聖は紫になったベルトを構える

戦兎、海聖「変身！」

戦兎は新たなビルドアーマーを装着し、俺はクウガ、タイタンフォームになる

『忍びのエンターテイナー！ニンニンコミック！』

戦兎「・・・で？お相手は？」

海聖「・・・あれだよ。あれ。」

そう言い、海聖が指さす先には・・・

ウエル「ふふふ！かんっぺえき！ですよオ!?これならあのクソ野郎をやれますねエ

！」

麻葉をキメた感じの狂った白髪のおっサンがいた……

雛「鈴夢……」

鈴夢「ごめんなさい。話は後です！」

そう言う俺は雛さんを抱えながら山を下る。

鈴夢「とりあえず霊夢さんたちは気づいてるはず！まずは紅魔館へ行きます！」

雛「それからどうするの!？」

鈴夢「……紅魔館を拠点に対策を練たほうが安全でしょう。」

雛「そうね。」

そう言いながらも、俺は内心恐怖に怯えていた。

誰かと和解すること……それは得策では無いのだ。ましてや相手はクソ野郎なのだ。

まず俺の言葉が届くかなんてのは知らない……でも。

鈴夢「トイっ！力を貸してくれ！俺達の……俺の言葉をアイツに届けるんだ！」

トイ『こっちは何時でもいいぜ！出番が無くて待ちくたびれてたんだ！』

鈴夢「行こう！俺達の戦場<sup>ダンスホール</sup>へ！今度こそ完成させる！俺の究極のメロディーを！」  
俺がその言葉を叫んだ時。嫌な予感が俺の中でざわめいたが……俺はそれを無視し、  
紅魔館へと走り続けた。

響「鈴夢くん……大丈夫かな」

美月「立花さん？」

響「ひいつ!?み、美月さん……」

美月「お疲れ様。久しぶりの休日は楽しかった？」

そう言う和美月さんは私の隣に座る。その手には……似合わないが飴玉が握られて  
いる

響「……いえ。鈴夢くんがいないとつまらないです。」

美月「中毒ね。彼に依存しすぎだと……嫌われるわよ？」

響「……っ」

美月さんは落ち着きながらも、冷静に言葉を述べてくる。

私はその言葉に少し、胸が痛み無意識に唇を噛み締めてしまう。



響「……どうすれば……鈴夢くんは私たちを見てください?」

美月「愚問ね。そうするのはあなた達じゃなく鈴夢の方なのよ」

響「鈴夢くんが?」

美月「そう。どれだけ気になる人がいても結局付き合ってるって言うのは心から愛し合ってるからなのよ? そうでなければ鈴夢が悩み悩んで悩むことなんてないわ。」

響「……」

美月さんは席を立つと。私の口に飴玉を突っ込み、無理矢理食べさせる

美月「いい? あなた達がどうこうしたところで何も変わらないし逆に悪化するだけなのよ。……でも、あの馬鹿が本当に付き合ってくれるならそれはそう思ってもいいんじゃない?」

響「……」

美月「不安なのはわかるけど……あまり感情に出してはダメよ? 特に鈴夢なんかは死ぬほど心配してくるからね」

……私は小さく「はい。」と答え、口にある飴玉を食べる。……あ。これ鈴夢くんの好きな苳味だ。

## 第8弦 重奏曲

咲夜「お嬢様！鈴夢様が来ました！」

紅魔館の一室、大広間の扉を俺達は勢いよくあける．．．そこには紅茶を飲む、小さい姿があつた。

レミリア「．．．来たわね。」

鈴夢「遅くなってごめん。」

俺は雛さんと共に椅子に腰掛ける．．．相変わらずのふかふか物だ。

レミリア「早速だけど．．．あなたはこの異変をどう見る？」

鈴夢「．．．」

幻想郷全体を巻き込んだの異変。それは今回に限ったことではない。だけど．．．今回ののは異変と言うよりは．．．テロに近い。

鈴夢「異変なんてのはこんな生ぬるいものじゃない。それは君たちが一番よく知ってるだろう？」

レミリア「．．．そうかもしれないわね。」

そう言うときさらに大広間の扉が開けられる

文「あややや！緊急事態ですよ！鈴夢さん！レミリアさんー！」  
飛び込んで来たのは鳥天狗の射命丸 文さん。急いでいたのか、そのままの勢いで壁に激突する。

鈴夢「・・・文さん？なんのようですか？」

文「はっ!?そうそう！緊急事態なんですよ！これを見てください！」

そう言うと彼女は一枚の写真を見せてくる・・・そこには

鈴夢「・・・ネフィリム。」

レミリア「あら。可愛い彫刻じゃないの。是非紅魔館に欲しいわね。」

雛「・・・これは生物なの？」

鈴夢「ん。そうですね・・・こいつは生物と言うよりは掃除機ですかね。」

・・・飲み飲むと言う点では間違っていないはず。うん。

レミリア「それで？これがどうかしたの？」

文「それでですね！これが現れて・・・人里に向けて歩いてるんですよ！」

鈴夢「人里に!?!」

文「ええ、それどころか私たちと同じぐらいの気持ち悪い奴らも出てきましたです  
ね・・・」

・・・参ったな。ソロモンも使えちやうのか。

・・・・てことは状況は最悪だ。なんせ相手は無限の兵隊も確かなのだから。

消耗戦に持ち込めば明らかにこちらがやられる・・・

鈴夢「・・・霊夢さんたちはこのことを？」

文「ええ、既に退治を開始してますよ。永遠亭の人達はまだわかりませんが」

鈴夢「・・・そう。」

とりあえず動いてそうな人が動いてて助かった。問題は姉さんたちだ。

ネフィリムは聖遺物を主な餌とする・・・つまりは姉さんたちを優先的に狙って動くはずだ。

この過程から。恐らく姉さんたちは人里にいと考えられる。

鈴夢「今すぐ人里に行かなきゃ！文さん！雛さん！ここは任せました！」

レミリア「待ちなさい！」

焦って部屋を出そうになった俺を止めたのはレミリアだった。

レミリア「鈴夢・・・あなたに渡しておく物があるわね。パチエ！」

パチユリー「・・・これよ。」

鈴夢「っ！」

そう言い、奥から来たパチユリーさんに渡されたのは薬だった。

鈴夢「これは・・・まさか」

パチュリー「月詠草の薬よ。妖怪の賢者に頼んだら速攻で探してくれたわ」

鈴夢「・・・」

パチュリー「・・・お礼は？」

鈴夢「さんきゅ。」

俺はそう言うのと薬を噛み砕いて、無理矢理喉に押し込む。

鈴夢「行きます！」

俺はそう言うのとメモリを無理矢理差し込む。

『エクストライブ！』

鈴夢「発動！変身っ！」

『スタート、メロディー！エクストライブっ！』

今、紅魔館から銀色の羽が飛び立った

戦兎「・・・クソっ。数だけは立派に揃えやがって」

海聖「ここまで引けば恐らく着いては来れないはずだ。とりあえず傷を直そう」

彼の治療法により、俺達の傷は少しずつ癒えていく

似しても・・・ウエルとか言うやつは強い。

下手をすればそこら辺の変人達よりも強いかも知れない。・・・それだけ力を蓄えてきたのか・・・

戦兎「鈴夢もやれやれだな。」

海聖「どうする？1回退却するか？」

戦兎「いや、出来るだけここで迎撃したい。鈴夢だつてきつと戦うはずだ」  
そう言うのと遠方で別の光が上がる

戦兎「・・・星」

海聖「・・・魔理沙だな。全く・・・」

俺達は考え込む。どうすればやつに勝てるか。

ジーニアスを使ってもいいし、なんなら別のライダーになつてもいい。

しかし。それが通じるほどやつは便利な相手ではないのだ。

戦兎「・・・やるしかない。」

海聖「同じこと考えてた。どうせ引くならここで足止めしようぜ。」

・・・始め。こいつとはダメだと思つてた。

コイツ誰だ。とか思つたりした。

でも・・・結局は仮面ライダーなんだよ。

だから……

戦兔「俺はお前のことが嫌いだよ」

皮肉を言おう。馬鹿やって。楽しんで。鈴夢たちと笑えるようにするんだ。

海聖「同感だな。俺も嫌いだよ」

折り合った……俺達はやつと折り合ったのだ。

「背中は預ける……頼むぞ」

「応。」

最早どっちの言葉がわからない。……だけどそれは最初で最後の俺達の共闘なのだ。

だから……預けるものは預けてやる……

——さっさと相手の首撮ってこいよ！馬鹿野郎！——

鈴夢「当たれっ！」

空を飛翔しても、そこは戦場だった。

空から、大地からと、ノイズが攻めてきて、俺たちを食べようとしている

霊夢「鈴夢！遅いわよ！」

鈴夢 「すいません！遅れた分は取り戻します！」

そう言うのと俺は翼を鳴らし、音波攻撃で敵を圧倒する。

霊夢 「これがせめて弾幕だったら！」

鈴夢 「魔理沙さんなら」「やることは変わらねえ」とか言ってるんですけどっ!？」

霊夢 「あれは脳筋なのよ！あんたも同じになりたいの!？」

鈴夢 「ただでさえ名前が一緒なんだ！紛らわしいこと言わないで！」

霊夢 「紛らわしいのはあんたよ！」

お互いを叱咤しあい。ノイズを攻撃していく。

鈴夢 「強化番もいるのか！トイっ！メロディーチェンジだ！」

トイ 『かーっ！燃えてきたぜっ！熱き情熱のビートっ!』

トイがそう言うのと曲が「魔弓・イチイバル」に変わり、姿が赤くなる

鈴夢 「これがっ！女神たちの力を授かったライダーの力だ！」

そう言うのと全砲塔をこじ開け、大量にレーザーを放つ。

一撃でもレーザーが当たればノイズはその場で弾けて消えていく。

霊夢 「鈴夢！地上にでかいヤツよ！」

鈴夢 「行きますっ！」

次に「絶刀・天羽々斬」が流れ、俺の姿は二刀剣士に変わる。



鈴夢「斬っ！」

地上に降り立ち、ノイズを問答無用に切り裂く。

鈴夢「まだ来るのかっ！いいだろう！俺が相手をしてやるっ！」

俺は曲を「撃槍・ガングニール」に変わったのを確認するとノイズの腹部分に大きな風穴を開ける。

鈴夢「俺は戦う！お前達なんか負けてたまるかっ！」

幻想郷を巻き込んだ異変は・・・こうして開戦を始めた。

戦兎「歌！」

海聖「鈴夢さんが戦ってるのか！」

俺達の方でも、「撃槍・ガングニール」が流れたのを確認すると1度、お互いの背中を預ける。

海聖「どうします？このまま鈴夢と合流・・・」

戦兎「ダメだ。このまま戦う。」

海聖「・・・」

戦兎「俺にはわかる。行くぞ」

そう言うのと俺達は姿を変えながらも、ネフィリムへと突撃していく。

・・・鈴夢。死ぬなよ？

弦十郎「・・・ノイズが消えた？」

朔也「はい！何故か消えたみたいで・・・そういう報告が・・・」

妙だな。ウエルはここで終わるような奴か？

そう思いつつ、モニターに目を通すと、確かに増えていたノイズの群れが次々と消えていく。

弦十郎「・・・」

何かを考えてると、突然首筋に指が当てられる

弦十郎「誰だ？素直に姿を見せた方がいと思うが・・・」

紫「ふふつ。名乗るものではございませんわ。」

俺の隣にはいつの間にか、妖艶な・・・美しい女性がいた。

弦十郎「何が目的だ？」

紫「簡潔に言いますわ。鈴夢関係者を全員連れて行きたいのですけど。」

弦十郎「認めよう」

紫「そうよね簡単には・・・え？」

弦十郎「好きだけ持つてけ。」

紫「・・・嘘？」

そう言うのと、俺は少し楽しそうに答える。

弦十郎「嘘ではない。ちょうどアイツらも鈴夢に会えなくて退屈していた頃だろう。

全員連れてけ！」

紫「じ、じゃあ・・・遠慮なく・・・」

女はすすりと消えてくと、俺はため息をつく。

弦十郎「アイツらの部屋は怖いから・・・鈴夢には見せられん。」

鈴夢「数が多いっ！みんな耐えてくれ！」

俺は空を舞いながら、地上のノイズに向けても、攻撃を続ける。

むちやくちやな戦い方かも知れないけど、俺が倍働かなければみんながやられるの

だ。

鈴夢「どうかしてウエルまで行かなきゃ……でもどうすれば……」

霊夢「考えてる暇は無いわよ！」

鈴夢「っ！」

さらに空からノイズが飛来……これでは片付かない。

地上ではネフィリムの進軍が進んでいるのが見えている……このままでは何時人里が襲われるかわからない……

鈴夢「どうする？ どうすれば……」

その時、地上で大きめの爆発があった。

爆発があったのは永遠亭の方。まさかとは思うけど……

クリス「オラオラっ！ 私たちのバカンスを邪魔したやつから出てこいっ！」

翼「防人としてこの事態は見過ごせんっ！ 出るぞっ！」

いた。姉さんたちだ。

しかもギアを纏つての参戦だ。これは心強い。

鈴夢「地上は守れるかな……あとは空だ！」

俺はそう言うところ、ノーマルスタイルに戻り、剣を取り出す。

鈴夢「皆の夢……皆の希望っ！ 行くぞっ！ 狂い踊れ！ 狂詩曲ラフソディっ！」

刹那、閃光が空のノイズを撃ち落とした。

鈴夢「……え？」

トイ『かつこよく決めようとしたのになあ……誰だろうな？』

鈴夢「戦兎さんが来た時点で大体予想はしてるけどね？まさか……」

そのまさか。空にはバリアジャケットと呼ばれる装甲？を纏った魔法少女達がいた。

なのは「戦兎さん！鈴夢くん！助けに来たよ！」

鈴夢「……ご苦労さまです。」

フェイト「あれ？戦兎さんは……」

鈴夢「そこまでは知らん。」

とりあえずあの人のことだからほつといても死なないよね？大丈夫だよね？

鈴夢「……ん？この人たちが来たってことは？」

フェイト「そのまさかだよね」

その数秒後。地上では大きな爆発が起き、ノイズ達が一掃されていく。

鈴夢「響！マリアさんも！」

なのは「鈴夢にあつたらとりあえず監禁するって言ってたよ？」

鈴夢「……」

ダメだ。帰ったらとりあえずお話になりそう。

だが、戦力がこれで揃った！

鈴夢「行こう！俺達のためにっ！そして……この世界のために！」

俺はそう言うのと剣を掲げ、ネフィリムへと向かう。

ここで今……最後の戦いが始まろうとしていた

## 第9弦 開かれる真実の扉

海聖「・・・凄い・・・」

俺は圧倒されていた。

切歌「鈴夢さんの馬鹿デース！勝手に私たちの前からいなくなるからアッ！調「こいつのせいなのかな？鈴夢さんが帰ってこないのはっ！」

突然現れた小さい2人が、2人が・・・ネフィリムを圧倒している。

片方は鎌で圧倒し、もう片方はこれで圧倒してる・・・

海聖「すげえ・・・っ！戦兔さん！どこにいるんだ！」

戦兔「くそっ！こつちだ！」

戦兔さんはどうやら後ろでノイズの相手をしてたみたいだ。

海聖「援護しますっ！散開をっ！」

そう言うとなフィリムの拳が俺の元へ来る

海聖「危ねえだろっ！」

俺はそう言いながらも、ネフィリムを弾き飛ばす。

切歌「気をつけるデス！」

調「そいつの力は私たち以上だから！」

戦兎「そう言うの・・・何回もやって慣れたよ！」

そう言うのと戦兎は素早い身のこなしでかわしつつ、ネフィリムの注目の的になる

海聖「さんきゅ！行くぜツ！」

俺は黒きクウガを纏うと、ネフィリムに対して突撃する。

海聖「俺が攻めるっ！合わせろよ！」

戦兎「言われなくても！」

俺はそう言うのと高速でネフィリムに接近、そのまま肉薄する

ネフィリムは俺を捉えるべく、腕を動かすが、俺は読んでいたかのように回避する

そのまま地面に足をつけた状態で、回避を続ける。

妖夢の師匠は言ってた「見る前に感じる事が大事だと」・・・なら、全感覚を研ぎ澄ま

して回避するまでだ。

戦兎「海聖！」

海聖「戦兎！俺が時間を稼ぐっ！方法を考えてくれ！」

戦兎「方法？」

海聖「そうだ！こいつの攻略方法だよ！任せたぞ！」

そう言う俺はネフィリムに集中する。



右・・・いや、左か！

俺は読み終えると数秒もせずに行動に移す・・・もちろん間違いはあるが、それを修正するかのように俺は体勢を立て直す。

切歌「海聖さん！」

海聖「君たちは他の救援に！ここは仮面ライダーが引き受けた！」

そう言うと、彼女たちは容赦なくその場を離れていく。

海聖「・・・も少し拒否してもいいんじゃない？」

俺はネフィリムの拳を避けつつ、ネフィリムへの反撃の機会を伺う。

戦兎「・・・ダメだ。どうも計算できない！」

海聖「落ち着け！絞りだせよ！」

そう言うとう・・・空からレーザーが降ってくる

海聖「なんだ!？」

戦兎「これは！」

俺達が驚いていると、間髪入れずに空から鈴夢が飛んでくる。

鈴夢「戦兎さん！海聖！援護します！」

海聖「さつすが！ギアとやらの力だけあるな！頼りになるぜ！」

戦兎「鈴夢！ネフィリムをそのまま引き付けてくれ！」

鈴夢「了解！」

そう言うのと鈴夢は剣を振るい、翼をはためかせ、空を舞うように戦う。

トイ『攻撃がワントンポ速いぞ！少し遅めた方がいいぜ！』

鈴夢「おっけ！」

・・・彼はリズムに乗るように、剣を振るう・・・リズム・・・

リズム！これだ！

海聖「戦兎！」

戦兎「ああ！俺も思い浮かんだぜ！」

そう言うのと、吹き飛ばされてきた鈴夢を加えて、俺達は話をする。

戦兎「鈴夢！ちよつといいか？」

鈴夢「なんですか？」

戦兎「お前が俺たちをリードしてくれないか？」

鈴夢「え・・・」

戦兎「お前の音感なら・・・多分・・・いや、絶対いけるんだ。」

鈴夢「つまり・・・」

海聖「お前が指示を出すんだよ。頼むぜ？」

俺達が鈴夢にそう言うのと、鈴夢は分かったように頷く。

海聖「よし！行くぞ！」

そう言うのと俺達はそれぞれ散開し、ネフィリムとの戦闘を始めた。

鈴夢「戦兔さん！そのまま2テンポ待機！海聖は速めてくれ！」

トイ『クレッツシエンド！一気に上がってくぜ！』

鈴夢「やろう！みんなの指揮をとるんだ！」

俺は散開してネフィリムへ攻撃する2人へ指示を出す。もちろん俺も攻撃を続ける。

鈴夢「戦兔さんは攻撃をワンテンポ速めて下さい！海聖はそのまま待機！トイ！」

トイ『敵のリズムに変更はない！このままいけるぞ！』

ネフィリムからの攻撃が戦兔さんに向くと、海聖はそのまま突っ込んで行く。

戦兔さんはそのまま交代するように下がっていく・・・いい感じだ！

鈴夢「戦兔さんはフォームチェンジを！海聖はそのまま引き付けててくれ！」

そう言うのと戦兔さんはビルド、ホークガトリングに姿を変え、飛翔しながらネフィリ

ムへと銃弾の雨を浴びせる

鈴夢「海聖！タイタンフォームへ変身を！俺も同時に切り込む！」

海聖「おう！」

海聖が紫色の戦士、クウガ、タイタンフォームに変身すると俺と同時にネフィリムへと切りかかる。

ネフィリムの身体にさらに傷が着くと、ネフィリムは身体を一回転させながら殴り込む

鈴夢「ちっ！戦兔さんはそのまま弾幕を！俺達は直ぐに体勢を立て直します！」

戦兔「わかった！」

そう言うのと戦兔さんはネフィリムの攻撃をかわしつつ撃ち込む。

今は順調・・・いや。まだまだだな。全く思い通りに進まない。

鈴夢（まだまだ・・・皆の指揮をとるにはあまいか・・・）

でもだ。今、戦兔さんは・・・いや、2人は俺に頼ってくれた。

こんな馬鹿みたいな俺でも、化け物になった俺でも。信用してくれるから、俺に託してくれたんだ。だから！

鈴夢「この思いだけは無駄にはしないっ！俺の命をかけた指揮でっ！最高のリズムを奏でてやる！」

俺はタクトを振るように手を動かすと、2人をリードするために指揮を始めた・・・

海聖「凄い……凄い指揮だ」

海聖の言う通り。俺達は鈴夢の指揮に圧倒されていた。

戦兎「なんだよ……鈴夢って天才なのか？」

海聖「天才なんてレベルじゃないですよ！こんなの……」

運命が見えてるように見える。そう言いたいのかも知れない。

しかし、その言葉通りに、鈴夢は絶妙な指揮で俺たちを動かし、さらには無傷でネフィリムへと攻撃している。

まるで圧倒的なチェスの盤面だ。一つがやられても、また新たな一手が繰り出される。

そうすることで相手を焦らせ、道をひらく……少なくとも俺達にはそう感じる。

海聖「……絶対音感……か。」

戦兎「噂には聞いたことあるが……これ程とはな」

俺も、別のことだが天才と呼ばれる。しかし……鈴夢のはそれ以上だ。

彼の性格上。謙遜し、あまり自分から進みでるやつじゃないが……本気になると誰もが知らない彼の顔が現れるのだ。

眠れる獅子……そう言うのかもしいないが、彼は……今や止められないものになったのだ。

戦兎「怒らせたら手がつけられないってこういう事なのかもな。」

海聖「何？」

戦兎「なんでもない！行くぞ！鈴夢の指示通りにうごくんだ！」

海聖「任せろっ！そつちは足を引つ張るなよ！」

戦兎「お前こそなっ！」

俺達はお互いに叱咤しあうと、鈴夢の指示を聴きながら、戦闘を続けた。

鈴夢の指示が飛んでいたのは彼らだけではなかった。

鈴夢「マリアさん、翼さんは両翼を！響をフワードにセレナさんがバックアップを！」

人里周辺の防衛戦では装者たちが中心に防衛陣を組んでいた。もちろん指揮は鈴夢が担当する。

鈴夢「切歌ちゃんは調ちゃんのバックを！調ちゃんは馬鹿共をなんとかまとめてく

れ！」

妹紅、天子「誰が馬鹿だって!？」

霊夢「はいはい。馬鹿って自覚あるなら仕事をしなさいな。」

鈴夢「続けて姉さんが主軸に、空中戦の部隊を！なのはさん達だけじゃ多分だけど防げない！」

クリス「了解した！オラオラっ！着いてこいよ！」

魔理沙「あいよっ！綺麗な弾幕を見せてやるぜっ！」

幻想郷の空と地上では。光が飛び交い、森では大地が動き、水辺では飛沫が上がっていった。

鈴夢「・・・思い通りに動く・・・これが奏者の・・・いや。俺の力なのか！」

トイ『鈴夢！紅魔館の周辺で反応多数！』

鈴夢「にとりさんに打電！美鈴さんを起こして！」

トイ『起きたって！』

鈴夢「了解！全体の指揮をとるよ！」

そう言うと、トイが俺に細かな状況を伝え、俺が戦術を立てる。

少ない時間だが、僅かな欠陥も埋めるようにして指示を出す。もちろん全体にだ。

鈴夢「ウエルだって全体に指揮が出せるほど有能じゃないはずだ・・・その点俺らに

は有利がある。」

トイ『その通りだ。あの馬鹿じゃあネフィリムぐらいが限界だろうし……そのネフィリムは怒り狂うかもしれないからな』

鈴夢「後最も。」

そう言うのと俺らは白銀の剣を担ぎ、前へ出る

トイ『おいおいw指揮官が前に出ていいのか?』

鈴夢「かの有名な指揮官。ナポレオンだって前に出てたさ。ほら。不可能を可能にするには何事も挑戦からでしょ?」

トイ『一理あるな!』

鈴夢「行こうぜ!戦兔さん!海聖!剣舞曲だ!一気に行こう!」

剣舞曲。人呼んで、ガンガン攻めろと指示を出すと、俺はギアの出力を上げる。

ネフィリムは俺達の動きに翻弄され、その身体に少しずつだが傷を負っていく

鈴夢「……っ。これでも倒れないのか」

海聖「流星は化け物つてところかな?」

その時だった。ネフィリムの動きに違和感を感じたのは。

ネフィリムは大きく腕を振り上げると、乱暴な感じで地面に叩きつけ、衝撃波を起こした。



鈴夢「っ！間に合わないっ！」

衝撃波は俺たちを飲み込むと、拡散するように周囲に飛び散って行った。

クリス「っ！鈴夢！」

空から地上を見下ろせば、そこにはネフィリムの崩した大地しかなかった。

ネフィリムはその中心で呆然と立ち。鈴夢達の姿は見えなかった。

なのは「戦兎さんがやられたの!？」

霊夢「あの化け物……とんでもない強さね。」

仮面ライダーを圧倒した力……これには皆が険しい顔をしているに違いない。

しかし、あれはいずれにしても倒さなければならぬ敵なのだ。倒さなければ……

翼「雪音っ！無事なのか！」

クリス「先輩っ！鈴夢たちが！」

フェイト「とりあえず落ち着きましたよ。指揮なら私たちが何とかするわ。」

クリス「……すまねえ。」

なのは「気にしないで！今は体勢を立て直しましょう！」

そう言うと2人は魔法陣を展開させ、光球のようなものや、矢を放っていく。  
クリス「アイツはどうする？」

翼「・・・私たちが止めるしかない。聖遺物に対抗するには聖遺物が一番だ。」

クリス「・・・私たちがやるってか」

翼「それしか方法があるまい。行くぞ雪音！」

そう言うと先輩は刀を担ぎ、一つの風となつて降りて行く。

クリス「しようがねえな！私も付き合うぜ！」

そう言うと私はレーザーをネフィリム向け、照射する。

クリス「鈴夢たちがやられるわけねえだろ！目覚めるまでは耐えてやるからなっ！」

そう言うとネフィリムはこちらを向き、その姿を変えた。

戦兎「二人とも・・・起きろっ・・・」

ネフィリムのすぐ近く。一人、二人の少年を担ぐ戦士がいた。

戦兎「特に鈴夢はこんな所で死ぬなよ・・・お前にはもつと聞きたいことがあるんだからなっ・・・」

その戦士。戦兎は既に意識が途切れている二人を担ぎ、ネフィリムから遠ざかるように歩いていた

もちろん彼らは甚大な被害を負っており、それぞれがそれぞれの怪我を負っていた

戦兎「……ここまで来れば……安全か。」

彼はそう言うのと、2人を担ぎ下ろし、静かに倒れ込んだ。

戦兎「あ……いろいろな……もう、寝てもいいよな……」

彼が静かに目を閉じた時、空からは白い翼を羽ばたかせる魔法使いが降りて来ていた

鈴夢「……歌?」

「そうだ。とっておきの歌なんだよ」

懐かしい会話だ。そう思いながら、俺はこの話を聞いていた。

いつの日か。俺はある通りすがりの人の歌ってた歌に惹かれ、それを聞いたことがある

「ただ、この歌は未完成なんだ。」

鈴夢「……」

「そんな悲しい顔すんなって。曲事態出来てない訳じゃないんだから」

鈴夢 「そうなのか？」

「ああ。だけど・・・そんな簡単に歌うものじゃないんだ。この曲は・・・ある人の。俺の大切な人のために歌いたいんだ。」

鈴夢 「・・・よくわかんないや。」

俺が悲しそうな顔を見ると、その人は少し乱暴だが、優しく頭を撫でてくれる。

「いつかお前にもわかるさ・・・本当の歌ってのは・・・誰かに与えられる物じゃないって事がな」

そう言った彼が歌っていた曲は・・・

コラボ編 仮面ライダー電王・ブレイズ&ゲート

コラボ中編 仮面ライダー電王・ブレイズ&ゲート

鈴夢 「おー！お菓子だらけだ！おっ！このケーキいいかも！」

シユンガ 「・・・鈴夢が子供と化している。」

梓 「お、お邪魔します・・・」

いろいろ突っ込みたいことがあるので、とりあえず纏めてみる。

ひとつは彼女たちのカバンからなんで家が出るんでしょうか。

あれかな？トリックかな？ネタは知らないけど。

2つ目は鈴夢の人格だ。やべえ。子供に戻ってるよ。

うん。なんかギャップあるなって。

ホイップ 「これね！全部私たちが作ったんだよ？」

鈴夢 「マジか・・・俺も作れるようになりたいなあ・・・」

ホイップ 「いつか教えてあげるから！とりあえず話すこと話さないよね・・・」

シユンガ 「話すことだと？」

マカロン 「私が説明するわ。皆はリラックスしてて」

そう言うのと彼女たちは鈴夢たちを連れ、別室へと移る……ここには俺と彼女が残される。

シユンガ「……それで？俺を残して話したいことは……」

マカロン「簡単なことよ？そんなに下がらなくてもいいわ」

シユンガ「……」

俺は一応、警戒をしていたが流石はプリキュア。しかも最年長だろうか……交渉と  
言うものをわかつてるようだ。

シユンガ「ふう……ならこの姿勢で話そう」

マカロン「助かるわ。それで……私たちからの話なのだけけど……」

「私たち……変身が解けないのよ。」

致命的すぎる。

彼女の放った言葉を理解するのに少しの時間を要した……。だが。理解できてもこれは酷いと思った。

プリキュアは基本、正体を知られてはいけない……。それをモットーにしていると聞いたが……

変身が解けないとなると俺たち以上にやばい。恐らく彼女たちも苦勞していたのだろう。

シユンガ「……それで？それがアナザーマリアと関係してると？」  
マカロン「はい。私達はそう仮説しています。」

・もし本当に関係してるのであれば……この事件の解決も近いかも知れない。  
鈴夢のゲート通過。そして鍵のあの怒りようにも……ケジメをつけられるかもしれない  
いと考えたからだ。

シユンガ「君たちと共闘しよう。どうやら目的は同じみたいだしな」

マカロン「はい！よろしくお願いします！」

俺達は軽く握手を交わすと、これからの事のために、情報交換を始めた……

鈴夢「……鍵さんはそんな世界にいたんですね。」

梓「うん。インバイダーと戦って傷ついて……ね。でも……鍵だから。多分諦めないんだろうな……って」

アラタ「んでもって梓さん大好きです。」

鈴夢「や。わかりますよ。俺と鍵さんは同じ人ですね」

梓&アラタ「え？」

そう言い、俺は皆の前で、右手を見せる

梓「!？」

ホイップ「これって……」

シヨコラ「酷い……誰がこんなに」

そこには異形とも呼べる腕があつた。多数の目玉が支配する……腕が

鈴夢「はは……気持ち悪いでしょ？これ」

梓「でしょって……そんな軽いものじゃないでしょ!？」

アラタ「……この腕だけ生きてるみたい……どうなってるんですか？これ……」

ジェラート「……誰がこんな」

鈴夢「……実はですね。僕は死なないんですよ」

俺は自分のことを打ち明けていく。違う異世界で戦うこと。それぞれの世界の仮面

ライダーたちに狙われたこと……そして自分に課せられた使命のこと。

梓「……なんか信じられない」

カスタード「その仮面ライダーたちがあなたを狙ってたのね」

鈴夢「はは……恥ずかしい話そうなります。元々、この腕は災の象徴なんとも言わ

れたりしますね……でも、俺は満足してるからいいですけど。」

アラタ「……仮面ライダーでも辛い人はいるんですね……」



鈴夢「辛くないですよ！このこのー！」

俺はアラタさんに飛びかかる。この人と会うのは初めてだけど……なんか上手くやっていけそうだ。

そう言ってるうちに鍵さんが目覚める

鍵「……梓？」

梓「戸島くん!?よかった……」

アイン「起きるの遅いですよ！」

シヨコラ「目立った外傷はないわ。安静にしてください」

鍵「……すまないな。鈴夢くん達は無事なのか？」

鈴夢「はい、大丈夫ですよ？」

鍵「そうか。ならいいんだけど」

そう言うのと鍵さんは少し身体を起こす。

鍵「話はだいたい聞いた。」

鈴夢「じゃあ次は鍵さんの話でも！」

その時。キラパティの窓がぶち破られ、梓さんの姿が消える

梓「いやああっ！」

鈴夢「梓さんっ！行くぞトイっ！」

ジエラート「ここは任せて！行っっていいよ！」

俺はその僅かな影を追いながら、仮面ライダーへと変身する

『スタート、メロディー！サンダー！』

槍を持つと、閃光の如く影を追う

鈴夢「そこだっ！見つけたぞ！」

俺はそう言うのと、空中からの奇襲をかける。

このまま決まってくれる・・・そう思ったけど・・・

アナザービート「甘いな」

鈴夢「っ!?ビート!?!」

そこに居たのは俺に瓜二つの仮面ライダー・・・ビートだった。

鍵「・・・っ！あの女か！」

俺は鈴夢を追いかけようとすると、プリキュア達に止められる。

カスタード「ダメですよ！まだ体調は万全じゃないんですから！」

ホイップ「そうだよ！ここは鈴夢くんに任せてあげて！」

鍵「だが！」

そう言ってるうちに、別の部屋からジュンガが出てくる。

鍵「ジュンガ！梓が連れてかれたんだ！」

ジュンガ「何っ!? 鈴夢は！」

シヨコラ「鈴夢くんならさつきそいつを追いかけて行つたわ！でも・・・」

ジュンガ「でも？」

シヨコラ「影はひとつじゃないのよ。・・・少なくとも私たちが見た中ではね」

・・・つまりは。

鍵「あの女か・・・梓を連れていったのは！」

ジュンガ「・・・俺たちで行くしかないな！皆行こう！」

そう言うのと、俺達は急いでキラパティの扉を開け、大地を走る。

ホイツプ「え!? ちよつと待つてよー！」

そう言う彼女たちを置き去りにして、俺達は梓を救うために走り出す。

ジュンガ「鈴夢！そつちは任せたぞ！変身！」

鍵「梓は必ず救うっ！行くぞジュンガ！」

アラタ「ええ！僕も行きます！」

『ライドチェンジ！』

World gate keeper! kamen Rider Gate! fo  
oooo!

『ストライクフォーム』

『Ride change

, World treasure hunter! kamen Rider I  
ne! Type Acceler!』

3人は仮面ライダーに変身するとシユンガ、鍵はもうひとつの影を追い、アラタは鈴  
夢を追いかけるように走り出した。

ホイップ「え!?ちよつと!ほんとに待ってえ!」

アナザー翼「・・・全く。マリアだけ楽しんでるいわね。」

アナザーアスナ「仕方ないじゃない。勝手にやらせておけばいいのよ。その代わり他  
の餌は頂くわ」

・・・アナザーマリアの動きを監視するように、彼女たちはたくさんの映像を見る。

アナザー翼「似してもアレを出すなんてね、マリアも焦ってるんじゃない?」

アナザーアスナ「私たちの人形をね。．．．アレって作るの苦労したのにく．．．  
そこに映し出されたのは2人の仮面ライダーだった。

アナザー翼「．．．数々の異世界を敵にまわす仮面ライダー．．．ビートね。」

アナザーアスナ「今回はプリキュアちゃんとあとブレイズ達が目的なのに。なんでこ  
いつが来るかなあ．．．」

アナザー翼「いいじゃない。餌は多い方が嬉しいわよ．．．特に私はね？」

ジュンガ「追い詰めたぞっ！」

鍵「さあ！梓を返してもらおうか！」

梓「戸島くん！シユンガさん！」

俺達はやつとの事で、鈴夢が逃した誘拐犯を追い詰めることに成功した。チート使っ  
たけど。

フィリップ「女の子を攫うのはよくないね。」

電車使ったんよ。おかげでフィリップもこの通り。

アナザーマリア「．．．まさかその方法で来るなんてね。予想外だわ。」

シユンガ「・・・痛い目見るぞ。」

アナザーマリア「別にい？それに私一人な分けないでしょ？」

そう言ってるうちにプリキュア達も到着する

ホイップ「うわっ！何この人！」

マカロン「こいつよ。こいつ。私たちの変身解除に関わる人はね」

ジェラート「じゃあ・・・こいつを倒せば！」

アナザーマリア「・・・あらあら。お客様がいつぱいね。ほらっ！」

そう言うアナザーマリアはたくさんの雑魚を出してくる。

カスタード「うわっ！気持ち悪いの！」

シユンガ「・・・時間稼ぎのつもりか？」

アナザーマリア「そうねえ・・・そうでなかったら・・・何？」

鍵「とにかく何を考えてるかは知らないが梓は返してもらおうぞ！」

シヨコラ「私たちの変身も解いてもらうわよ！」

アナザーマリア「やれるものならやってみなさい！仮面ライダー共！ここがあなた達の墓場よ！」

鈴夢「クソっ！こいつ！」

俺は剣、シルバースードを振るうが、全くこのレプリカに当たる気がしない。

アナザービート「そんなものか。お前の……いや、厄災の力は！」

鈴夢「っ！トイ！シユンガさんたちは！」

トイ『お姫様の救出に行つたが？どうした？』

鈴夢「……いや。それで十分だ。」

そう言うのと、遠くから銃弾も飛んでくる

アナザービート「ちっ。新手か。」

アラタ「鈴夢くん!?無事ですか!?!」

鈴夢「アラタさん!それとなんか知らんベルト!」

アイン「アイン!それが名前よ!」

なんか知らんツッコミは無視して、俺はアナザービートに直る

アナザービート「……お前は俺なのか?先程から動きが一緒だが」

鈴夢「……俺も感じた。だがお前と俺は別だ!」

アナザービート「そうかつ!だが同じ存在だ!なら倒して俺が強いと証明する!」

そう言うのとアナザービートはアラタさんの攻撃を無視して俺に向かつてくる

鈴夢「そんなものっ！」

アナザービート「ふんっ！」

俺は攻撃を防ぐために、手をクロスさせたがそれを逆に取られ、そのまま投げ飛ばされる

鈴夢「っ！」

アラタ「ああっ！」

アナザービート「お前はすっこんでろ！」

そう言うと、次にアラタさんも吹き飛ばされる。・・・これで実質一対一だ。

アナザービート「・・・さあ。俺と決着をつけよう。」

鈴夢「・・・いいだろう。」

俺はそう言うと、ベルトに新たなメモリを通す

トイ『エクストライブ！』

鈴夢「発動！」

トイ『グレードアップ！エクストライブ！

究極完全！次元を超えた姿！

LET'S IGNITION!!!!

仮面ライダービート！エクストライブッ！』



俺の背中にエナジーウイングが現れると、俺はアナザービートに向けて、剣を一閃させる

鈴夢「うおおおっ！」

アナザービート「おおおおっ！」

ここからはお互いの意地と意地のぶつかり合いだ。邪魔なんてのはいらぬ。

アナザービート「いいぞ！これが俺のしたかったものだ！そして俺の餌になれ！ビート！」

鈴夢「誰がっ！お前の！お前達のものになるかっ！」

シユンガさんたちは！鍵さんは！自分たちの戦いをしてるんだ！俺だって！約立たずで終わる気は無い！

そう言うとう、俺はアナザービートと剣を交えつつも、腰のファイナルスロットにメモリを通す。

『ファイナルドライブッ！エクストライブ！ビート！』

しかし、動きを見てみれば、向こうも必殺技の体勢に入る

鈴夢「行くぞっ！」

俺は空を飛翔し、アナザー向け、急降下する。

アナザービート「こいっ！ビート!!」

アナザーも、地上からのライダーキックを繰り返す。

お互いのライダーキックがぶつかる。そこには爆発が生じた。

鈴夢「・・・俺の・・・勝ちだ！」

大地へと足をつけたのは俺の方。どうやらアナザービートは砕け散ったようだ。

鈴夢「二度と出てくるなよ。偽物。」

アラタ「ごめん鈴夢くん！遅く・・・あれ？終わった？」

鈴夢「ええ。さあ！シユンガさんたちのところへ行きましょう！」

アラタ「・・・あ、う、うん・・・アイン・・・これって鍵さんやシユンガさんにど

う説明すればいいのかな？」

アイン「頑張れ」

俺達は話しながらも、シユンガさんたちのところへ急いだ・・・

最終決戦が、始まろうとしていた。

## コラボ IS魔法ビルド 後編

## 第10弦 天を廻りて戻り来よ（前編）

鈴夢「・・・そうか。」

あの人の言つてた言葉の意味。

歌は誰かに与えられるものではない・・・それは・・・自分自身が変わると言うことなんだ。

そして・・・

「やつと気づいたか」

鈴夢「ああ・・・」

そして俺が奏者になることでもない。

本当に俺が求めている答えは・・・

鈴夢「お前の存在を認め・・・俺たち自身が一つになることなんだ・・・」

「やつと納得したのか、退屈だったぜ」

鈴夢「ああ・・・お前に頼るのは嫌だけだな。」

「・・・やる時はやるんだろ？」

鈴夢「……ああ。俺達の約束の為にもな。」

そう言っていると俺はあいつの手を獲る

「痛てえな」

鈴夢「これが人の痛さだ。」

「……ふん。」

そう言っていると俺達は……

「「やろう。究極のメロデーを奏でるんだ。」」

鈴夢「……なのはさん？」

なのは「鈴夢くん無事なの!？」

鈴夢「……戦兔さんや海聖は？」

なのは「……今、隣で寝かせてるけど……どうするの!？」

俺は立ち上がると、腕を確認する

鈴夢「……お前の力……借りるぞ！」

そう言っていると俺は翼を広げ、その場を飛び立つ

なのは「・・・鈴夢くん？」

鈴夢「俺達は1人じゃないっ！力を貸せっ！相棒っ！」

そう言う俺は再び、ビート、エクストライブに変身するが・・・

鈴夢「・・・これが・・・エクストライブの進化？」

「そうだ。俺達が1人になった結果だ。」

装備は前より格段に変わっており・・・さらに強化されている

鈴夢「・・・セレナーデ・・・」

「・・・これがお前の求めたリズムなのか？」

鈴夢「かも知れないな。とにかく・・・今はネフィリムを止める！力を貸せっ！」

「言われるまでもねえ！」

そう言う俺達はネフィリムへと攻撃を仕掛ける

鈴夢「ウエル！お前の野望もここまでだ！」

「何が目的か知らねえが！」

鈴夢「俺たちの前で好き勝手させるか！」

俺達は剣を抜くと、地上へと飛びたつていった

——  
マリア「鈴夢の救援に急ぐわよ！」

私は、地上で戦っていた立花 響とセレナと合流すると鈴夢の救援に急いでいた  
セレナ「姉さん！焦らなくても鈴夢はいなくならないわよ！」

マリア「それはわかっているわよ！でも鈴夢のことよ！どうせまたどっか行くわ！」  
響「わかります！鈴夢くんはいつも一人です！どっか歩いてるんですから！」

セレナ「そこはわかって欲しくはないわね！」

そう言うのと私達は道中のノイズたちを切り倒しながらも前進しつづける

セレナ「姉さん！翼さんたちが向こうで戦ってるらしいわ！そこに鈴夢もいるって  
！」

マリア「ほんとに!?ならもつと急がなきゃ！」

セレナ「姉さん!?ああ！もう！ここは任せたわよ！」

萃香「あいよー！まかせろおーい！」

勇儀「鈴夢によろしくな——！」

そう言うのと、後ろで大地が割れたような音になる。……この場所には超人しかないのかしら

でも……頼りがいのある仲間がいるのは悪くないわね。

マリア「全く……帰ったら鈴夢はお仕置きね！奏や美月も混ぜてしつかりとやるわよ！」

響「私たちを満足させてくれるまで離さないからね！鈴夢くん！」

セレナ「……こんなので大丈夫かなあ。」

妹紅「鈴夢は生きてるんだよ！さっさとやれよ！この淫乱天人が！」

天子「んなこと知ってるわよ！あなたこそしつかり焼却処分しなさいよ！」

永琳「その2人は五月蠅いわね……」

衣玖「同感です」

そう言いながらも、叫んでいた2人はきつちりと仕事をこなしていく。

緋想の剣を振るい、炎を纏ってノイズたちを蹴散らして行く

永琳「さて……こつちもやらないとね？」

衣玖「ええ。総領娘様に怒られてしまいますからね」

そう言うのと電撃を乗せた矢を永琳が放っていく。

それに当たったノイズたちは爆散するように散っていく。

衣玖「……あら。後ろにもいましたか」

永琳「……抜かれわね……幽々子！そっちは頼むわよ！」

幽々子「まかされたわー」

そう言うのは、白玉楼の主、西行寺 幽々子。彼女の操る蝶が……ノイズを一瞬で

溶かしていく

幽々子「いくら魂が入ってない人形でも、命があれば私の餌よー妖夢ー？」

幽々子がそう言うのと、後ろから高速で迫ってきた少女が、大量のノイズを切り裂く

妖夢「……この白楼剣に切れぬものは……あまりない。」

刀を鞘に収めると、ノイズたちは一瞬にして塵と化す。

妖夢「……鈴夢さんがまだ戦ってるんですか!?!幽々子様あー！」

幽々子「そうじゃなーい？」

妖夢「うわああん！鈴夢さんの馬鹿あああ！」

永琳「……どうしたのよ」

妖夢「だって……ぐすん。「妖夢のご飯美味しいね」とかあ……「いつも布団干し



てくれてありがとう」とかあ！私を惚れさせて逃げるなんてえ！」

永琳「・・・それって当たり前にやってるんじゃない？」

・・・永琳がそう言うのと妖夢の目が変わる

妖夢「うう・・・そんな浮気性の鈴夢さんには・・・喉から剣を通して、私の傍にいてもらうしかないですね・・・」

永琳「それって霊体としてよね？」

妖夢「こうなったらこの戦いを終わらせませすよ！幽々子様！行きましょう！」

そう言うのと妖夢は二刀流のスタイルでノイズの群れに突っ込んでいく

永琳「・・・関わりたくないわね」

幽々子「いいじゃないの・・・恋する乙女は強いよ♪」

鈴夢「戦兔さんが起きるまで俺たちでやるぞ！」

翼「霧夜っ！無事なのだな！」

鈴夢「あつたりまえですよっ！こんな所で死んでたまるもんですか！」

俺は腰の剣を抜くと、高速でネフイリムへと切りかかる。一度ではなく。連続で

翼「戦兎はなのはたちが見てるのか！なら私達はコイツをどうにか動かすぞ！」

鈴夢「多分マリアさん達も後で来る！その時にはもう倒してる感じていきましよう  
！」

翼「ああ！」

そう言い、俺は翼を羽ばたかせ、そこから出る音波でネフィリムへと攻撃する

鈴夢「一方的に殺られる痛さと怖さを教えてやるよ！」

俺はネフィリムの身体にあたる部分に剣を刺す。もちろん刺すだけでなく、そのまま一閃し、傷を広げる

鈴夢「翼さん！マリアさんたちの居場所は!？」

翼「もう少しで来る！そのまま持ちこたえてくれ霧夜！」

鈴夢「無茶言うよ！ほんとに！」

そう言いながらも、俺はネフィリムを蹴り飛ばしたりする。

鈴夢「ネフィリム！今お前を通す訳には行かないし！さらにはこの世界に居させることもいけないんだ！・・・なら！」

トイ『なら!?!』

鈴夢「この世界から退場させる！お前の存在を！みんなに認めさせない為にもっ！」  
俺はそう言うのと、翼をさらに大きく広げ、加速する

鈴夢「お前を駆逐するっ！そうすればっ！」

しかし、剣を振るった腕はネフィリムに捕まれる

鈴夢「腕の一本！くれてやるよっ！」

そう言うのと俺はもうひとつの剣を無理やりネフィリムの頭に差し込む

鈴夢「あああっ！割れるオオオっ！」

俺が強く剣を差し込むと、根本から折れてしまう

鈴夢「変えはあるっ！もう一度だ！」

何回やってもダメなら何回も・・・それでもダメなら・・・っ！

鈴夢「俺は人を止めるっ！それぐらいの覚悟が今は必要なんだあああっ！」

さらに俺は拳をネフィリムへとぶつける

鈴夢「お前も生きてるならわかるはずだっ！命の重要さと！何故命があるのかを！」

俺がこいつに問いたかった疑問。それは純粹に生きているかという事だ。

俺は必死にネフィリムへと意志をぶつける。

鈴夢「ウエルの言いなりになって楽しいのか!?なあ！楽しいんだったら・・・俺を殺

してみろよっ！この野郎っ！」

俺はネフィリムの腕をひとつ潰すと、顔を蹴り飛ばし体勢を崩す

鈴夢「お前には命があるはずだ！俺とは違う！与えられた命なんかじゃなくても！与

えられた命でも！同じ命だ！生きろ！自分からな！」

そう言う俺はメモリを横のスロットに通す

トイ『ファイナルドライブ！ビート！』

鈴夢「イグニツション！」

俺は空へ飛ぶと、そのまま急降下する

鈴夢「これが・・・生きてる命の力だアアアっ！」

戦兎「・・・鈴夢が？」

なのは「うん。あの仮面ライダーたちが言ってたのってこの事なのかな・・・」

戦兎「・・・」

俺はなのはから鈴夢の異変について聞いて聞いていた。

鈴夢に翼が生えたこと。そして腕が変わっていたことなど。

戦兎「・・・こういう事なのかも知れない。でも鈴夢は鈴夢だから・・・俺は信じたいな」

なのは「・・・」

俺達が少し、冷静に落ち着いていると、フェイトから救援の要請が入る。

戦兎「鈴夢が？・・・わかった！海聖！」

海聖「おう！行くぞ！」

俺達はジーニアス、ライジングアルティメットに変身すると、鈴夢のいる方へと走り出す

戦兎「なのは！フェイトの方へ行ってやってくれ！」

なのは「わかった！戦兎さんも無事でね！」

戦兎「・・・お互いにな」

そう言うとなのはは飛び立っていく。

海聖「好きなの？」

戦兎「・・・ノーコメントで」

海聖「あつそ」

素っ気ない挨拶をお互い交わすと、俺達はネフィリムの方へと走っていった。

鈴夢「戦兎さん！海聖！」

海聖「なんだ・・・もう終わってたのか」

鈴夢「うん。」

海聖、戦兎さんが来たが・・・俺の戦いは既に終わっていた。

ネフィリムは仰向けになり、倒れ込んでいる。

戦兎「動くことは無いのか？」

鈴夢「やめてくださいよ・・・動いちやうでしょ？そういう事言う」と

海聖「かもな」

その時だった。ネフィリムは突然咆哮を上げ、その場で進化を遂げ始めたのだ

戦兎「進化・・・」

鈴夢「・・・でか。フィーネの時以上だな。これは・・・」

そこにあつたのは全長が倍ぐらいになった、ネフィリムの姿だった。

海聖「っ！二人共っ！離れろ！」

海聖の指示と、同時にネフィリムはレーザーを俺たちに向けて放ってくる

戦兎「にやろっ！やらせておけばっ！」

鈴夢「っ！どうして！どうしてこういう事をするんだ！お前はアアっ！」

俺は戦兎さんにシルバースード・ドライブを渡すと、2人で切り込んでいく。

もちろんその後には海聖のパンチが待っているのだが、ネフィリムはそのまま俺達の

剣をはじき返すと、殴り込んでくる

戦兎「ぐああっ！」

鈴夢「ぐっ！」

俺達の身体は宙を舞い、地面へと叩き落とされる

海聖「二人共っ！……てめえっ！いい加減にっ！」

海聖が慎重になりながら、接近して行くも、ネフィリムは簡単に海聖を弾き飛ばして  
しまう

海聖「ぐはっ！……やるじゃないの」

戦兎「ああ……正直予想外だ。」

鈴夢「……これが……ネフィリムの本当の姿……」

そこに降り立ったネフィリムは、まるで魔神のようだった。

## 第11弦 天を廻りて戻り来よ（後編）

ウエル「・・・ネフィリムが、ついに覚醒したぞッ！H A H A H A つ！」  
かつてドクターと呼ばれた人間は、まるで狂人と化していた。

何が彼をそうしたかすらもわからず。ただ、この世界は彼を狂わせたのだ。

ウエル「そうですねですよ！科学とは結果そのものが全てなのですッ！失敗作なんてのは  
ありません！全て廃棄ですよ！」

そう言うのと彼は杖を掲げ、さらにノイズを出現させる

ウエル「あはははっ！さあネフィリム！私に結果を見せてくださいっ！」

ウエルは進化したネフィリムを見据えると、新たな確信を心に宿しながらこの世界を  
去っていった。

鈴夢「っ！デカくなった訳じゃないのか！」

俺達は進化したネフィリムと、戦闘し、現在は劣勢という状況に立たされていた



海聖「何度攻撃を与えても弾かれちまうぞ！」

戦兎「まさか・・・こいつ自体学習してるのか！」

学習能力とは、一部の人間に設けられた能力でもある。

戦いの中で学習するとなれば。それは学習もない実践も当然となるのだ。それを成すのは正確なコンピュータしかないのだ。

しかし、ネフィリムは予習の余裕もない中。俺達の行動を見切っているのだ。

鈴夢「なんて学習能力だ！」

海聖「っ！こうなったら長期の決戦は無理だ！戦兎！」

戦兎「わかっている！ボルテックファイニッシュで決めるぞ！」

二人が必殺技の体勢をとるが、ネフィリムは予測してたかのようにそれを弾く

鈴夢「っ！戦兎さん！海聖！」

2人は地面に叩き落とされ、声にならない悲鳴を上げる

海聖「がっ！」

戦兎「っ！」

鈴夢「・・・こいつ・・・俺達の行動を計算してたのか」

人の行動と言うのは一周のパターンがあれば、独自のパターンが存在する。

歩く、食べる、寝る、などと言った社会的行動は一周のパターンになる。それは繰り返し

返すからだ。

しかし、個人差が現れるのはそれぞれの個性を生かす時なのだ。そこでは個人のパターンが現れる。

戦いで言うなら場所取りや行動のパターン。さらには攻撃の癖などが全て人とは違うものなのだ。

しかし、ネフィリムはそれを一つ一つ計算し、分析した結果で俺たちの攻撃を防いでいるのだ

鈴夢「・・・くっ。これじゃあ・・・ジリ貧だな」

そう言う俺の足下にネフィリムの拳が飛んでくる。

俺は飛んで回避するも、その行動を読んでいたネフィリムからの拳が俺に当たる

鈴夢「っ！」

俺は吹き飛ばされ、少し遠くの木の残骸へと身体をぶつける

鈴夢「・・・なんて強さだ・・・これじゃあ・・・仮面ライダーじゃ勝てないなあ」

海聖「戦兎っ！あれやるぞ！」

戦兎「おうっ！」

2人はそう言うと、戦兎が空中で逆さになり足を上に向ける。

そこに海聖の足が合わさり、海聖は高く飛ぶ・・・そして

海聖「ライダー・・・キックッ！」

空中から炎を纏ったライダーキックがネフィリムに向けられるが・・・ネフィリムは腕一つでそれをしのぎ、海聖を投げ飛ばす。

海聖「ぐはっ!・・・これはやべえぞ。」

戦兎「・・・勝算がない。これほどまでに絶望的な戦いはないぞ。」

俺達はネフィリムを睨む・・・すると後ろから衝撃波が飛んでくる。

鈴夢「!?響!」

響「鈴夢くん!大丈夫!」

マリア「鈴夢!無事なの!」

そこに来たのは、エクストライブ状態の響、マリアさん、そしてセレナさんだった

鈴夢「どうして3人がこの世界に!?いや、切歌ちゃんたちにも言ったと思うけど!」

マリア「決まってるじゃない!鈴夢を追いかけてきたのよ!」

鈴夢「はいー問題発言!これだからマリアさんはモテないんですよ!」

マリア「鈴夢以外にモテたくないわ!」

・・・あつ。この会話してるとあれだ。周りの時が止まって見える。見てよ。ネフィリムの困り顔をさ。

(・・・ω・・・) って! (・・・ω・・・) ってなってるから!可愛そうだからネフィリムを放

置しないであげて！

鈴夢 「響はどうして!？」

響 「鈴夢くんを追いかけに！」

鈴夢 「響も!?!もう止めてくれないっ!?!俺はどう反応すればいいの!?!この2人に！」

セレナ 「諦めなさい。これが現実よ」

鈴夢 「嫌だアアアっ！」

ダメだ!この人たちと喧嘩していると頭が痛くなるんだよ!誰か!この人たちに万国共通の常識つてのを教えてやれよ!教えてやれよ!（懇願）

マリア 「・・・ネフィリム！」

鈴夢 「ああ、そうだったね。ネフィリムが目の前にいたんだよね」

セレナ 「前より進化してる?いや・・・これは・・・」

海聖 「ネフィリムであつてこいつはネフィリムじゃねえ・・・新しい・・・知らない個体だ。」

そう。こいつはネフィリムから進化したからとはいえネフィリムそのものではないのだ。

ネフィリムから姿を変えたそれは。禍々しいオーラを発していた。

マリア 「・・・切歌たちにもこつちに来るように言うわ。この人数では勝てない・・・

かも知れないから」

鈴夢「頼んだ。響はあまり突撃しないこと！いいね!？」

響「うん！あとクリスちゃんや、翼さんも呼んでおくね!？」

うん。出来ればその2人だけはやめてください。お願いします。何でもしますから。

鈴夢「・・・でも。響たちが生きてくれて良かった・・・」

セレナ「はいはい。感動的な再開はここまで。とりあえず今はネフィリムをどうにかしないと。」

・・・そうだ。ネフィリムは進化したんだ・・・

俺たちで勝てない化物に。俺達が挑もうとしている。

鈴夢「とりあえず、みんなで攻撃を仕掛けましょう。無理なら策を建てますけど・・・」

戦兎「いや、策はいらない。」

俺たちに戦兎さん、海聖が合流する。

戦兎「こいつに俺達の全力の攻撃をぶつける。」

海聖「それしか方法がないからな。鈴夢さん。」

鈴夢「・・・そうだね。」

そう言う俺達は再びネフィリムを見据える。

鈴夢「やろう。これが俺達の最後の戦いだ。」

そう言うのと俺達は散開する。

戦兎「鈴夢からの頼みだし！さらにはこの世界の危機だ！見過ごせるか！なのは！  
フェイト！上からこいつに攻撃を！」

なのは&フェイト「了解！」

俺はそれだけ伝えると、ジーニアスのまま突撃していく。

戦兎「拳がダメなら武器を使うまでだ！鈴夢から貰った剣で切り裂いてやるぜ！」

海聖「無駄口叩くなよ！さっさと斬れ！」

・・・あいつ・・・終わったらボコボコにしてやる。

戦兎「ふっ。お前も無駄口叩いてんだろ！」

海聖「じゃあどっちが先に倒せるか勝負だ！」

戦兎「負け犬が！よく吠える練習しろよ！」

海聖「泣いたらその面に蜂つけてやるからなっ！覚えとけ！」

・・・俺達は笑みを浮かべながらも、ネフィリムを切り裂いて行つた。

鈴夢「ネフィリムっ！お前の相手はこつちだ！」

俺は二刀流で、空からネフィリムの胴体を切り裂いていく。

鈴夢「苦しいかつ！この世界の！皆はお前のせいで苦しんだんだ！」

俺は皆の怒りを載せるようにしてネフィリムを切り裂く。

鈴夢「っ！反撃かつ！」

響「鈴夢くん！」

飛んでくるネフィリムの拳を、響が弾く

マリア「鈴夢！こいつ！」

鈴夢「あつ。そうだ・・・こいつは学習するんだ・・・」

学習して進化する生き物・・・まるで人間みたいだな。

鈴夢「だけど人じゃないなら弱点はあるはずだ！セレナさん！マリアさん！姉さんと

翼さんは!！」

セレナ「まだ時間がかかるそうよ！」

鈴夢「了解です！なら僕が時間を稼ぐので皆さんは大技の準備を！」

俺はメインスロットからメモリを取り出し、剣に読み込ませる

トイ『ファイナルブレイクツ！ビート！』

剣から放出されるエネルギーを確実にネフィリムへと当てていく。それはまさに無

限の刃が切り裂くようだった。

鈴夢「うおおおっ！」

俺の刃は全てネフィリムへと突き刺さり、かなりのダメージになる。

鈴夢「空いた傷を塞ぐのには時間がかかるはずだっ！みんなでいこう！」

戦兎「3人のライダーキックなら！」

俺達はそれぞれ、必殺技を繰り出す

『ファイナルドライブッ！ビート！』

『Ready Go！ボルテックフイニッシュ！』

クウガは足に火を纏い、ビルドは雷を帯びる。俺のはギアが出力をまし、高速でネフィリムへと蹴りかかる。

3人「いつけえええ！」

俺達のライダーキックはやつの傷に直撃し……ネフィリムは崩れていった。

鈴夢「……終わったー……」

戦兎「腹減ったな……」

ネフィリムが崩れ落ち異変が解決したあと。俺達は脱力していた。



戦兎「味噌汁飲みたいなあ・・・」

鈴夢「海聖のところですか？アレって美味しいんですよね・・・」

戦兎「・・・飲んだことあるのか」

鈴夢「ここには・・・現実世界で言う中学生近くまで住んでましたから。なんでも知ってます。」

戦兎「・・・そうか。」

そう言うのと、突然後ろから強い力で体を起こされる

鈴夢「ん？さとりん？なんで地上に？」

さとりん「・・・上で異変があったって言うから・・・心配で来たんですよ」

鈴夢「ひよつとしてお空が？」

さとりん「ええ。見事にド忘れしてくれましたね・・・おかげで参加することも出来ませんでした。」

・・・ああ。地霊殿のみんなよ。哀れなり。

鈴夢「そうだ！この後多分宴会やるんで戦兎さんも是非！」

戦兎「・・・なのはたちを先に世界に返してくれたらな。」

鈴夢「決定ですね！それじゃあ、行きましょう！さとりんも！」

戦兎「ああ・・・結局こうなるのか」

さとり「・・・え!?!私もですか!?!ちよつとやめてください!」  
こうして幻想郷で起きた異変は解決したのだった・・・  
鈴夢「・・・ドクター・ウエル。また会おうな」

## 第12弦？(・ω・)？ Let's party!!(／

\*・ω・\*(／ふうー!!

戦兎「・・・買い出しとは・・・お前は厄病神か何かなのか？(怒)」

鈴夢「嫌だなー・・・褒めないで下さいよー照れるでしょー」

戦兎「褒めてないっ！」

俺達はあの戦いを終え、休息を・・・得た・・・はず。なのにどうしてこうなった。

鈴夢「いやー！大量ですね！咲夜さん！まだ何か買いますかー！」

咲夜「そうですね・・・あとはお酒を幾つか・・・あ、ここに安いお野菜が！」

鈴夢「おっ！安いですねー！買いますかー！」

戦兎「・・・やめろおおおう！」

今の状態は休む所じやなくそれ以上に働かされてる気がする・・・まさにオーバーワークだ。

俺の腕には既に大量の荷物(買い物したやつ)があり・・・俺の腕が悲鳴を上げているのがわかる。

ちなみになのは達には先に帰ってもらった。理由は簡単。向こうで騒いでる人たち

を黙らせるためでもある。

戦兎「・・・にしても鈴夢はよく持つなあ・・・俺よりは重たいだろ」

しかし本当にやばいのは鈴夢の方である。あの戦いを終え、俺たちの体には多くの包帯やら絆創膏が貼られてる中、鈴夢の傷は尋常じゃない・・・はずなのに。鈴夢は何故か俺以上の荷物を軽々と持ち上げている

鈴夢「・・・そうですか？これでもいつも通りなんですけど・・・」

戦兎「いつも通りっ!?!」

ダメだ。彼の頭まで壊れてるのかもしれない。この荷物の量(ポケモンのチャオブーぐらい。)を軽々と持ち上げてるんだぞ!?!どうなってるんだ!

トイ「えーチャオブー・・・ひぶたポケモン。」

体内の炎が燃え上がると、動きのキレとスピードが増す。また、ピンチになると煙を吐き出す。

たかさ 1.0m 重さ 55.0kg (ポケモンブラック調べ)「

とんでもねえポケモン凶鑑だ。てかあの腕時計はトイでいいんだよな?」

トイ『この世界では常識は非常識ってな! 難しく考えるなよ! ブラザー!』

戦兎「誰がブラザーだ。てかその理論なんだよ」

トイ『屁理屈が理屈ってな! この世界では可能だらけだぜ!』

戦兎「……元の世界に帰ったら薬を貰おう。」

トイ『薬物！ダメ！絶対だぜ!?!』

戦兎「そっちじゃないわ！」

嗚呼……頭痛を……誰か治して……

鈴夢「帰ったよー。」

戦兎「ぜえぜえぜえ……」

鈴夢「戦兎さんは強いのか弱いのか……全くわからんですな。」

戦兎「……こっちの世界についてけない。」

メタ発言ダメ。絶対。

幼女組「鈴夢ー！」

鈴夢「んあ？」

戦兎「ざまあ。」

しかし次の瞬間。俺は謎の衝撃に襲われる。

鈴夢「ピギャー……グワァー」

フラン「こらあつ！鈴夢の腕返せー！」

こいし「お兄ちゃんの頭もーらい！」

橙「お兄様の身体返せー！」

主にこの三人の力強いよ。鬼か。餓鬼なのか。

てゐ「戦兎は無事だねー、ほらほら早く来る」

戦兎「俺の恨みが具現化した・・・ありがとう・・・名も無き勇者たちよ」

海聖「壊れかけてんなあ・・・毎回か。」

戦兎「お前はっ！何時ぞやの壊れ物！」

海聖「誰が壊れ物か！そう言うお前は数十・・・いや！数百股！」

戦兎「違うわ！浮気しとらんわ！」

・・・あのー・・・どうでもいいから助けてくれませんか？そろそろ腕が、身体が散り

散りになりそうです。

幽々子「あらあらく鈴夢さんはモテモテね〜」

藍「・・・橙だけいいなあ・・・」

永琳「はあ・・・後で特注の胃薬を用意しておきましょうか。」

遠くで見てるあの人たちは！助けてはくれないのか!? くそっ！誰でもいい！この状況を！

響「鈴夢くん何してるの？」

あつ。悪魔・・・いや。鬼神が来た。

マリア「私たちを差し置いて他の娘とイチャイチャと・・・っ！」

フラン「あつ！おばさ・・・もぐっ！」

鈴夢「いやー！響さんとマリアさんじゃないかー！奇遇ですなー！いやー！・・・はは・・・」

ダメだ。最強の文句が思いつかない。遠くではさらに姉さんが・・・翼さんが・・・二人が・・・

マリア「鈴夢ー？最後に言い残すことは？」

鈴夢「フタエノキワミアー！」

響「死刑だね？とりあえず・・・アイを教えるから！」

鈴夢「ウソダ！ウソダ！ウソダドンドコドン！」

嗚呼・・・戦兎さんに優しくしとくべきだった。

鈴夢「ぼーけつとーをたーたーくとビスケットーがひとつー」

ミスティア「何その歌」

鈴夢「こつちで流行りのネタものよ。他には松○修造のもつと…熱くなれよお！なんてのもありますが。」

ミスティア「それより私の歌を聴いてひとつにならなない？」

鈴夢「それ聞くぐらいならASMR聴いて寝ます。」

・・・場所は変わり厨房。料理ダイスキ！の人達と腕利きの人達とで料理をしている。まあ、ヤンデレだらけなのは気の所為だよね？（放心）

妖夢「鈴夢さん！あーん。つて！お願いします！」

鈴夢「あつ、咲夜さん！魚どうします？」

咲夜「あー…とりあえず鍋にしようかしら…」

鈴夢「…鍋なら3匹もいらないうすよね。他のとりあえず…大きいやつは刺身にします。」

妖夢「鈴夢さんの意地悪。」

ちなみに厨房にはセレナさんも立っている。エプロン似合うなあ…

鈴夢「…あつ。やべえ。卵。熟になっちゃった。」

早苗「あつ！サラダににしましよ！その卵使いますから捨てないで下さいね！」

鈴仙「なら野菜をさらに切らないとですね…てる！人参奪つてくくなアアつ！」



鈴夢「喧嘩なら別の場所どうぞ。人參ならいくらでもありますし。」  
嗚呼・・・賑やかっつていいなあ・・・

海聖「で？なんで戦兎は戻らないんだ？元の世界に」

・・・俺はこいつと二人きりになった途端にそんな質問を突きつけられる

戦兎「どうしてそんなことを聞くんだ？」

海聖「彼女たちは帰したんだろ？なのになんでお前が残ってるのかな・・・って。」

戦兎「そういう事ね。」

まあ。疑問に思うのは当然か。

戦兎「・・・俺だつて少しはハメを外して楽しみたいし・・・それに」

海聖「？」

戦兎「俺は鈴夢のことを確かめたいんだ。カイザが言つてた通りの・・・本当に危険な奴なのか・・・ってな」

海聖「なるほど。」

大体の話は雪音 クリスから聞いた。

鈴夢が奏者として、ドーレムの統一すべきと言う事。

さらにそのために命を狙われること。

そして鈴夢が仮面ライダーから見て、世界を滅ぼす存在か・・・という事。

戦兎「・・・今まで一緒に戦ってきたが。鈴夢にはそんな感じは無かった。俺の気の所為なのか・・・それとも」

海聖「・・・」

唐突。俺は突然、口に何かを啜えさせられる。

戦兎「・・・餡？」

海聖「俺のお気に入り。味はコーヒーだ。」

戦兎「・・・不味いな・・・」

俺がそう言うと、海聖は納得したように腕を組む

海聖「・・・世界を滅ぼすとか・・・そんなのどうでもいい。大切なのは・・・信じることなんじゃないのか？」

戦兎「・・・」

海聖「確かにそう言われたら悩むけどなあ・・・俺達は少なくともそうは思っちゃいない。むしろ大歓迎だな」

戦兎「は？」

海聖「だつてなあ．．．世界を滅ぼす力があるってことは、ある意味世界を救う力があるってことなんだからな！」

戦兎「．．．頭イカれてんな」

．．．だけど。これで納得した。

戦兎「．．．ありがとな。」

海聖「どうも？」

俺は感謝を素直に口にはせず．．．とりあえずだが宴会の準備をするために戻った。

鈴夢「あー．．．また机散らかして．．．」

いざ料理を出そうと来てみればこのザマだ。やっぱり始めてるじゃないか。

萃香「おー．．．鈴夢ー、こっちは始めてるよー」

霊夢「遅いわよ！料理は？まだなの!？」

鈴夢「どうどう。料理なら運んでくるから。」

そう言う俺は、とりあえずだが酒を没収しようとする

萃香「おっとお．．．」

鈴夢 「没収。ご飯にお酒はいりません。」

萃香 「冷たいこと言うなよおー、一緒に飲もう?」

鈴夢 「断る。断じて酒は飲みません。」

未成年の飲酒はダメだからね。仕方ないね。

ビールは飲んだことあるよ。(白目)

勇儀 「いやー、すまないねえ・・・」

鈴夢 「勇儀さんのせいじゃないでしょ。事の始まりはこの鬼な訳ですし」

萃香 「何か言ったかい?」

鈴夢 「言ったんだよ!」

そう言うと萃香は再び酒を口に運ぶ

鈴夢 「また飲む!没収するぞ!」

萃香 「えー・・・このまま飲ませてくれたら・・・イイことしてやるのにな・・・」

鈴夢 「断じて断る。」

そう言うのと俺は萃香から酒を没収する。

鈴夢 「とりあえず料理運んでくるんで。そのまま大人しくお願いしますね。」

一同 「はい!」

鈴夢 「・・・少しは手伝えや。」

鈴夢「はいい……料理は全てに行き渡つたね……食べよう！」

戦兔「……俺たちまで駆り出される理由は？」

鈴夢「よし！食べよう！」

と、その時遠くで手が上がる。

鈴夢「はい。幽々子さん。なんですか？」

幽々子「鈴夢……私のご飯だけ少ないと思うの？」

鈴夢「釜そのまま出してるんだが。我慢してくれ」

妖夢「私は鈴夢さんの愛が足りないですよ！どうせなら鈴夢さんの愛を……」

マリア「……はいはい！私のも足りないの！鈴夢の愛が！」

鈴夢「お二人は自重の方をお願いします。」

……そもそも、俺は周りに幼女の皆様が座つてらっしゃるので行けませんね。

諏訪子「ん？食べないのかい？」

鈴夢「いただきますしてからね。」

フラン「鈴夢……私を食べて……？」

鈴夢「何処でそんなの覚えたっ!?まさか・・・」

俺がパチユリーさんに目をやるとパッチエさんは笑いを堪えていた・・・

パチユリー「ぷぷぶ・・・」

鈴夢「・・・後で締めてやる。」

そう言う俺は手を合わせ

鈴夢「んじやあ・・・前置きはなしで。いただきます!」

いただきます!

そんな声と共に・・・俺の悪夢が始まるのだった・・・

## 第13弦 発言ひとつで戦場です。

わーわー

きやーきやー

・・・人里から少し離れたところにある博麗神社・・・そこで俺達は異変の終わりを記念して、宴会を行っていた。

勇儀「戦兔とか言ったかい？ いやー、鈴夢がお世話になるねえ。そらっ！」

戦兔「(グベウ)。」

萃香「いやー・・・さらには海聖までお世話なつて悪いねえ・・・これはお礼だよ。飲みな飲みな」

戦兔「(ガボガボ)」

嗚呼。戦兔さんが早速鬼共に絡まれてやがる。しかもあの二人に酒を勧められたが最後。生きて帰る人間はいないそうなの。

鈴夢「戦兔さん。ご愁傷さまです。」

海聖「哀れなり。」

そう言うのと、海聖の方にも、箸が頭に直撃する

鈴夢「？」

海聖「……ゆ、ゆゆ様……」

幽々子「海聖……ご飯が足りないわよー？」

海聖「ヒイイ！い、今からたすんで！その蝶を閉まってくれええつ！」

……三窠食べといてそれかい。全く……白玉楼の従者共は大変だな。

海聖「鈴夢ー！たーすけてくれー！」

鈴夢「だが断る。」

俺はそう言うと、海聖とは真反対の方へ行く

フラン「鈴夢？行っちゃうの？」

ダメか。やはり足元には幼女組がいるようだ。

しかも足に引っ付いては一向に離れようとはしない……困ったもんだな

鈴夢「ごめん。俺はちよつと……行くところがあるから」

フラン「あのおばさんたちのところ？ダメだよ？」

こいし「お兄ちゃんは私たちと一緒に……いるんだよ？」

嗚呼……ハイライトさん。仕事を放棄しないでください。

だが背に腹は変えられん。ここは勝負に出るぞ

鈴夢「フラン。こいし？俺は大事な話があるんだ。それも命に関わる……ね？」



二人「むー……」

鈴夢「だから……退いてくれる？」

フラン「じゃあ!……き、キス……して?」

……はい?今なんと?

フラン「キスして!ほっぺじゃなく唇に!」

鈴夢「誰だ!フランにこんなこと教えた奴はあああああつ!」

こいし「ずるい!お兄ちゃん!私も私も!」

鈴夢「こいしもかあああああつ!誰だあああああつ!」

俺はそう言うひとつの結論にたどり着く……

まさか……

俺は頭を機械のように動かすと……ある2人組を目に映す……その2人は……

パチュリー&さとり「……ぷぷぷ……」

鈴夢「笑つたなあ!謀つたなあ!おのれええええつ!末代まで恨んでやるうううう  
!」

二人「お兄ちゃん!キスちょうだい!」

鈴夢「いやあああああつ!この2人の教育に悪影響がアアアアつ!誰かあの二人を

おさえてくれええええつ!」

真面目にこのままキスすれば・・・

響&マリア「(???)」

調&切歌「(☒―☒) 刃チャキツ」

クリス&翼「ボソボソ・・・」

セレナ「・・・バキツ」

いやー！怖い怖い怖い！何されるかももう見えてるんですけど！俺の場合なんか殺される運命しかないよ！助けてくれ！

神奈子「こらこら。鈴夢も困ってるだろ？少しは遠慮してやんな」

神い！神がいるぞ！（神だけど）

幼女組「むー」

神奈子「そういうのはせめて二人きりの時にやりな」

幼女組「はーい。」

くそおおおつ！貢ぎ物全て生姜にしてやるからなああああつ！

裏切られたところで、俺は幼女組の拘束から離れ、1人外に出る。

紫「あら、鈴夢じゃない。」

鈴夢「・・・話したいことがあって来た。」

紫「・・・大体わかってるわ。私の膝に来なさい？」

鈴夢「拒否権ねえのは何時もなのか。」

俺はそう言うのと、大人しく八雲の膝に頭を乗せた……

魔理沙「そう言えば鈴夢って好きな奴いるのか？」

戦争の始まりはこの一言だった。

霊夢「なんで私に聞くのよ」

魔理沙「いや、なんやかんや霊夢が一番鈴夢と長くいたんじゃないのか？」

霊夢「……知らないわよ。」

早苗「うわっ！ 気になりますよお！ 霊夢さんー！」

霊夢「ええい！ 抱きつくなこの変態！」

早苗「げふん。」

……俺は彼女たちから目をそらすと、今度はシンフォギアのメンバーに目をやる……

すると

クリス「……鈴夢の好きな奴……か。」

マリア「私よね？ 鈴夢が好きなのは……（プルプル）」

翼「……」

セレナ「翼さん？箸の持ち方さつきと違いますけど……」

切歌「……ふ、ふん。鈴夢さんなんか知らないデス！」

調「きりちゃん。それ刺身じゃなくて煮干だけど」

・・・ダメだ。何処も彼処も動揺だらけじゃねえか。・・・元と言えば鈴夢のせいだが。

あいつのヤンデレ体質はどこぞの主人公を思い出させるな。・・・ほら。結局死んで死んだ後も叩かれる奴。○chool○aysの。

萃香「そんなに知りたいなら鈴夢に聞けばいいんじゃないやね？」

おい。鬼このやろう。なんてこと言うんだ。

霊夢「……やめなさいよ。鈴夢に迷惑……」

その時、ある1人が言い出した

妖夢「鈴夢さんは私の婿です！」

嗚呼……第二次ヤンデレ大戦勃発……か。もうこれわかんねえな

紫「・・・そう。交渉に行くのね」

鈴夢「ああ・・・出来るだけ戦争になる。なんてのは避けたいし・・・それに、俺にはまだ。こつちでやることがあるんだ。」

紫「・・・」

鈴夢「そんな悲しい顔しないでください。必ず帰って来ますから。」

そう言うと、俺は戻ろうとするが・・・

バタン！

鈴夢「ん？戦兔さん？」

そこには顔を真っ青にした戦兔さんがいた。

戦兔「れ、鈴夢・・・逃げろ・・・」

その言葉を最後に戦兔さんの意識が堕ちる。

鈴夢「戦兔さん!?!しっかり!しっかり!」

戦兔「おじいちゃん・・・おばあちゃん・・・今・・・いくよ」

鈴夢「ダメだ!その川を渡ってはダメなんだ!」

紫「三途の川?あれって死神がいるんじゃない」

鈴夢「シヤラップ!戦兔さん!何があつたんですか!それだけでも聞かせてください

!」

戦兎さんは口をパクパク動かしてるが・・・全くわからない。

そうしてると、次は海聖がやってくる

海聖「鈴夢さん！早く・・・逃げっ!？」

鈴夢「海聖!？」

刹那、海聖が光のごとく姿を消し・・・数秒後には死体となって降りてきた

海聖「(くく)。ん。っピクピク」

鈴夢「ここは築地か。」

だが、そうも言っではいられなかった・・・

「鈴夢く・・・」

これが・・・

「遊ぼく」

悪夢の始まりなのだ・・・

鈴夢「これは夢だよ。」

霊夢「ええい！逃げるな！」

魔理沙「悪いが捕まって貰うぜ！悪く思うなよ！」

俺は現在。宴に参加したのであろう連中の襲撃を受けていた。恐らく・・・戦兎さんと海聖が死んでいたのも納得する。

鈴夢「悪く思ってるならやめろよ！なんでこうなるんだ！」

俺の質問に彼女たちは

皆「鈴夢が鈍感なのが悪いんだよ!!」

鈴夢「なんで俺のせいなんだ！」

くそっ！どうしてみんな襲ってくる時俺のせいにするんだ!!

俺が鈍感とか！なんでなの!?!何処がどう見たら鈍感なんですか！

トイ「お前は鈍感だよ。」

鈴夢「トイ！お前は黙ってる！」

そう言う俺は皆から放たれる弾幕を緩やかにかわしていく

妹紅「ちっ！弾幕なんてやってられねえ！慧音！行くぞ！」

慧音「わかった！」

そう言う俺と、白澤状態の慧音さんと炎を纏った妹紅さんが突っ込んでくる。

鈴夢「ああっ!?!なんで来るのさ！」

妹紅&慧音「鈴夢が悪いんだからな！」

ハイライト消して殺しに來ないで下さい。怖いです。

翼「くっ！待ってられん！霧夜を我が物に！」

マリア「私も行くわ！」

ああっ!? どうして來るかなあ!

切歌「鈴夢さんは私たちの物デス! 調! 行くデスよ!」

調「鈴夢さん? 待っててね・・・えへへ・・・」

鈴夢「ひいつ!? 怖い怖い! お願いだから刃をしまえええっ!」

ダメだ! ヤンデレと化してるから刃物を持つことに躊躇いが無い!

そもそもなんでこうなつたんだよ! 誰だよ! みんなをこうしたのはっ!

海聖&戦兎「お前だよ!」

妖夢「鈴夢さーん! お願いしますからお婿に!」

鈴夢「いやあああああっ! 刃を向けて言うこと違うだろおお!」

俺は妖夢さんの刃を受け止めると、そのまま後ろから來る人たちに向けて投げ飛ばす

後ろの人たち「あー!」

鈴夢「許して。」

俺はそのまま外へ出ようとするが・・・

ガラガラピシャン!



あー・・・出口がイタズラ妖精共に閉じられた・・・

大妖精「鈴夢さん？まさか逃げようなんて・・・」

鈴夢「思うわけ・・・思うわアホオオオっ！」

リグル「お兄さん死刑だよ！浮気は犯罪なんだから！」

鈴夢「残念ながらここには法律もクソもありませーん！あるのは俺への襲撃だけです！」

フラン「お兄ちゃん待って！今から足を獲るから！」

鈴夢「安心と言う言葉がねえ！マジで死にそうだあ！」

ダメだ！どんなことを言おうが自分に都合が良いように解釈してやがる！これが言論統制って言うのか！

勇儀「鈴夢。諦めた方がいいぞ？ほらほら、今なら大きいおっぱいで挟んでやるから！」

鈴夢「お前は殺しに来てるだろ！どうせあれだろ！死体を抱くんだろ！？」

勇儀「よく分かったな」

鈴夢「よっぽどこつちの方が殺人鬼だよ！誰かああっ！たーすけてくれええ！」

もうダメだ！俺の命が尽きそう！

頑張れ頑張れ！行ける行ける！

はっ！……この声は……修○先生!?まさか俺に何かを伝えるに……  
『頑張れ頑張れ!行ける行ける!絶対行ける!昨日までのお前を信じろよ!なんでそこで諦めるんだ!』

……ん?あれ?逃げるためのヒントじゃねえ?

『……もつと!熱くなれよ!』

それなら熱盛の方がよかったよこんちくしよー!

『こういう時はおっぱい揉むんだよ!揉んどけ!』

お前誰だよ!帰れ!

『はくな咲けばつかくん!』

いやああおおあああつ!カツパ出たよ!?カツパが!俺の頭にいい!

『少年よ、大志を抱け』

クラーク先生ー!

鈴夢「タコス!」

咲夜「えへへへ……鈴夢様く捕まえましたよ」

酒!?!咲夜さんがまさかのドーピングを!これは反則ですよ審判!

幽々子「セーフ♪」

鈴夢「いや!アウトオオオオ!」

無情にも俺の体は・・・彼女たちによってむしゃくしやされた・・・  
嗚呼・・・この世の中・・・とても無常と・・・今気づく・・・(字余り)

妖夢「鈴夢さん？妖夢のお膝はどうですか？」

鈴夢「ウンキモチイイヨ。」

勇儀「お姉さんたちのマツサージはどうだい？気持ちいいだろ？」

鈴夢「ウンキモチイイヨ」

鈴夢はあれでいいのか？

俺達は味噌汁を飲みながら考える。

戦兎「・・・そろそろ元の世界に帰るか」

海聖「そうしろ。出なきや鈴夢さんの餌だぜ」

戦兎「・・・胃薬貰って帰るわ」

鈴夢「・・・また会えたら会おう・・・」

その時は宜しく頼むぞ・・・！

## ほのぼのの冒険編

### 第1節 いざ!新たな出会いを求め!

幻想郷から帰り・・・俺は

鈴夢「いや。皆さん。許して」

マリア「じゃあ夜這いを」

鈴夢「それは勘弁願う。」

土下座からの説教を受けてます。

弦十郎「だからやめると・・・あれほど行つたのだが」

セレナ「つまりは翼の叔父様は知つてたわけね?」

鈴夢「そうなるからセレナさんはその拳を抑えて抑えて。」

ダメだ。俺が勝手にどっかいったせいでみんなの性格が・・・黒くなってやがる。

しかし。俺はこんな所で挫ける子供ではありません。

鈴夢「・・・でもなあ・・・あの姿で暮らすのこの姿でいるの。みんなはどつちがいい?」

皆「今の鈴夢だよ。」

鈴夢「じゃあケチらないで」

あの姿でいると正直警察以上。世界大戦以下の存在がくるからやめよう。

弦十郎「それで。鈴夢くんは大丈夫なのか？」

了子「なんとも言えないわね。まだ引つかかる部分があるから……」

鈴夢「大丈夫ですよ。俺は正常です。」

どつからどう見ても多分……人間だよな？な？

俺がそう言うくと大人二人は頭を抱える。

鈴夢「……さて。次はどこに旅行に行こうかな？」

と、俺が呟くと……

響「……次はどこに行く気？」

切歌「逃がさないデスよ？」

鈴夢「……こうなるよなあ。」

正直こういうのは……束縛って言うのかもしれないが。あえて口にはしないでおく。さて？俺はどうしようか。

鈴夢「とりあえず出かける？喫茶店にさ」

2人「喫茶店？」

鈴夢「うん。昔良く行つてた喫茶店があつてね……rabbit……house……」

うん。ラビットハウスって言うんだけど・・・どう?」

2人「今なんでケータイ開いたの?」

鈴夢「(ω。;) シラー」

決してメールを確認してた訳ではありません。うん。ただのガチャ確認です。カリオストロさんの確認です。

響「とりあえず鈴夢くんが連れて行ってくれるならどこでも行くよ!ね?切歌ちゃん!」

切歌「はいデス!鈴夢さんの行きたいところならラブホでもどこでもいいデスけど・・・出来れば2人がいいデス。」

響「・・・でも。」

2人「女の子いたら殺すよ?」

鈴夢「・・・マジか」

あちや・・・言わなければよかったかな。

このまま行けば俺の命は消えます。よし。投稿をやめよう(嘘)

鈴夢「はあ・・・今日は厄日だわ。」

2人「何か言った?」

鈴夢「別に?」

ゆかりん助けて。

場所は変わり西洋の街並みの街へ。

響「ここって日本国内だよな？」

鈴夢「だと思うよ。出なかつたら周りの人達は全て外国人になるぜ？」

切歌「んー・・・なんか迷子になりそうデス。」

そう言いながらも俺の腕を離さない2人。さっきの発言は何なの。

うーん。でもここら辺だと思っただよなあ・・・俺は地図が読めないからどうしようもないね。

響「え。鈴夢くんって地図読めないの？」

鈴夢「誰かに連れてって貰って記憶する人間ですから。初見の場所は大体迷います。」

切歌「それってダサイデス。」

鈴夢「治そうとはしてるんだけどね。どうにも出来なくてさあ・・・」

切歌「これは相当の重症なのデス。」

・・・うわ。病気持ちの扱いされた。もう生きていけない。

鈴夢「とりあえず病院行くか」

響「どうしてそうなるの? ほらほら、早く探そうよ」

鈴夢「嫌だアア! 殺されるううう!」

逃げ出そうとする俺と、抑えようとする2人。

殺られる・・・そう思った時

「あつ! 鈴夢くんだ! 久しぶり!」

鈴夢「んあ? ココアちゃんと千夜ちゃん・・・どうしたの?」

視線の先から保登 心愛ちゃんことココアと宇治松 千夜ちゃんこと千夜が歩いて来た。

ココア「えへへ・・・学校の帰りなんだよ? 鈴夢くんは?」

鈴夢「息抜きでこっちに来ました。」

千夜「それで後ろにいる人達は友達?」

鈴夢「・・・」

俺は恐る恐る後ろを振り向く・・・そこには

響「鈴夢くん。3文字で説明してご覧?」

切歌「返答によつては首が飛ぶデス。」

鈴夢「あつ。辞世の句読むわ」



・・・嗚呼。儂い命とはこの事よ。

場所は変わりラビットハウス。

チノ「・・・ココアさん遅いですね」

リゼ「ああ、どこで油を売ってるのか」

2人がほのぼのと話していると・・・

カランカラン

ラビットハウスの扉が開き、2人は歩いて行く。

チノ「いらつしや・・・」

リゼ「遅かった・・・な？」

唾然とした2人の目線の先には・・・死体を担いでいるココアと千夜の姿があった。

さらに知らない人たちも手伝い・・・なんか・・・わからない状態になっていた

ココア「ごめんね、遅刻しちゃった・・・(カタカタ)」

千夜「(カタカタ)」

リゼ「これはどういう状況だ？」

とりあえずお店のバックヤードで、鈴夢(死体)は降ろされる

リゼ「ん? 鈴夢か。 . . . 鈴夢! ?」

チノ「鈴夢さんです。 久しぶりです。」

・ . . . 魂の抜けた死体(鈴夢)に話しかける2人 . . . 帰ってくる返答は死体「 . . . 止まるんじゃねえぞ . . . 」

リゼ「ダメだ。 意識が向こうに逝ってるな。」

チノ「逝ってるどころかももう死んでますよね。」

ココア「死んでるとか言わないで! まだ脈はあるから!」

リゼ&チノ「どうしてこうなった?」

・ . . . 少女説明中 . . .

千夜「ザオリク!」

鈴夢「あふつ . . . あつ? ここ天国?」

リゼ「なるほど。 鈴夢は首を切られたのか」

鈴夢「待てや。 今の説明からどうしてその結論にたどり着くんのだ?」

俺の蘇生後。 彼女たちは何故か葬式の準備をしていた。

・・・ん？いつの間に俺の周りは白い花に囲まれてるんだ？

鈴夢「・・・まあ。お久しぶりだね。皆」

リゼ「・・・お前こそ。だいぶ変わったじゃないか。」

チノ「大きくなりましたね」

鈴夢「まあ・・・いろいろ食べて成長したからね・・・」

響「鈴夢くん？この子達は・・・」

鈴夢「ああ、ラビットハウスの人達だよ・・・若干1名違うけどね

こっちのツインテの子が天々座 理世。愛称・・・リゼちゃん。

んで、こっちのお馬鹿に見える子が保登 心愛ちゃん。愛称、ココアちゃん。」

切歌「鈴夢さんって愛称付けるの下手すぎデス。」

鈴夢「・・・で。このモフモフを乗せた子は香風 智乃ちゃん。チノちゃんです。」

チノ「面倒だからって省略するのは・・・」

鈴夢「・・・しーらね。」

で。この和服の子が宇治松 千夜ちゃん。千夜ちゃんと呼んでやってくれ」

そう言つて1人ずつ紹介してく。

なんせこのまま殺されるのはマジで・・・勘弁したいです。はい。

ココア「・・・鈴夢くんって・・・変態・・・なの？」

鈴夢「何故そうなる。てかこっちも紹介した方がいいかな。」

千夜「ええ。お願いするわ。」

鈴夢「ええつと・・・こっちのフードの子が、暁 切歌。愛称、切ちゃん。」

切歌「よろしくデース!」

鈴夢「で。こっちが立花 響・・・ん?響どうした?」

響「鈴夢くん。あれ。」

鈴夢「・・・」

響が指をさした先に俺達は驚愕する。そこには・・・

鈴夢「ああ・・・こいつらも来るのな。」

カルマ「お久しぶりです。ビート。」

ヴィバーチェ「・・・初めまして。我が主よ。」

全く。誰だよ。こいつら呼んだの

鈴夢「おつ、ラテアート上手くなった?」

ココア「へへん!私だって成長するんだよ!」

鈴夢「勉強は出来てるの？」

ココア「・・・出来れば教えて？」

・・・そんな涙目のココアちゃんはスルー。俺はラテアートを少し飲むと、目の前の連中に目を向ける。

鈴夢「・・・で？なんでここに来たんだ？」

カルマ「主に少し話したいことがあったので・・・急いで来たのですが。」

響「戦争のこと？」

カルマ「いや。それは最早我々にとつてはどうでも良い事なのです。それよりも大事な話が。」

鈴夢「・・・戦争よりも重要なことか。そりゃ俺を探すよなあ。」

正直、戦争以上に大事な事などないはず。だが、戦争をその程度の扱いにしたのだ。よっぽど大事な話なのだろう。

カルマ「・・・仮面ライダー共を元の世界に返して欲しいのです。」  
うわあ。面倒なことになったぞ。

そもそも仮面ライダーは・・・俺の知る中では、カイザ、デルタ、ドレイク以外の敵ライダーは見たことがない。カルマやヴィバーチエが話を持って来るといふことは、恐らくだが・・・

鈴夢「・・・なんでそうなる?」

ヴィバーチエ「・・・我々は。戦争の可能性を否定したあと。火種の原因を探しました・・・そうしたら・・・」

鈴夢「・・・」

ヴィバーチエ「遙か遠く・・・この地球の原点となる所に小さきながら・・・錬金術師がいる様子なのです。」

響、切歌「錬金術師?」

千夜「錬金術って、魔法のことかしら」

千夜ちゃん。君は聞かなくてもいいのに・・・なんで俺たちと同じ席に座ってるんだい?」

それに・・・地球の原点か・・・もしかして子午線のことか赤道のことを言ってるのかな?」

鈴夢「となるとロンドンとか、そこら辺かな?」

カルマ「・・・前探知した時はそこにいたが・・・今はわからない。離れたかもしれないし・・・隠れたのかもしれない。」

鈴夢「それは参ったな」

俺達が話してる中。「あの一」と響が手を上げる

カルマ「なんででしょうか。立花さん。」

響「えーっと……どうしてその錬金術師と仮面ライダーが関係するんですか？……どう考えても無縁のはずなのに。」

ヴィバーチエ「……仮面ライダーは。力を与えられし戦士。人を超えた存在。」

鈴夢「……なるほど。執念みたいな感じか」

カルマ「……もし、魂を返す錬金術があるなら……それも不可能ではない。」

鈴夢「……厄介な敵が増えるなあ」

まあ。伝説のライダーと会えるのは嫌ではないけど……でも、どうせなら味方して欲しいなあ。

チノ「何か悩んでるんですか？」

鈴夢「ふあつ……。チノちゃんか。いろいろあるんだよ。こっちも」

チノ「……」

そう言うと俺はラテアートを少し、飲む

鈴夢「……この味……。好きじゃないな」

そのコーヒーからは……。俺の嫌いな苦い味がした……

ココア「え!?!鈴夢くん苦いの嫌いなもの!?!」

根源あいつかよ。

鈴夢「・・・ん。制服がきついなあ・・・」

リゼ「自分で作つといてそれか? 全く・・・注文の多いバイトだ。」

鈴夢「響たちはもう着替えたのか。」

リゼ「うん。あつちはココアとチノが手伝ったからな。」

・・・そう言うと、俺は腰にエプロンを巻いて、一応鏡で姿を確認する。

鈴夢「・・・じゃあ。バイト始めるか」

リゼ「ああ。数日だけだがよろしく頼むぞ?」

鈴夢「任せとけ。ここに来るまでにバイトの経験は詰んでるぞ!」

リゼ「ふふっ。少しは期待するぞ?」

任せとけ・・・って言いたいけど・・・

俺がバイトしてたのって・・・全部喫茶店やんけ。



## 第2節 3 店舗巡り！まずは癒しを！

鈴夢「いらっしやいませー。何名ですか？」

女性「・・・ええつと・・・／／／／／」

鈴夢くんがバイトを初めて数時間。とうとうイライラが限界にまで達してきた

響「・・・鈴夢くんが私たちだけを見てくれる方法はないのかな？切歌ちゃん。」

切歌「・・・さあデス。でも、マリアたちなら策はあるかもデスよ？」

響「あつ。また他の人と・・・イライラしてくるなあ・・・」

鈴夢くんの動きにはミスは愚か、細かい所までしつかりしている。・・・そう言えば

鈴夢くんつて前は喫茶店でバイトしてたんだっけ。

だが問題は、鈴夢くんが他の人と楽しそうに話していることなのだ。

千夜「あら、顔が怖いわよ？」

響「えっ!?そ、そんな顔してました!?!」

チノ「・・・わかりやすいです。」

と、こつちに戻ってきた千夜ちゃんとチノちゃんにそう指摘される。

切歌「むー・・・コーヒー淹れるの・・・難しいデス。」

鈴夢「ここネルとかコーヒープレスって置いてあるよね?」

チノ「洗うのが面倒です。」

鈴夢「そう言わずにさ。ネルなら交代交代で回せばいいじゃない。プレスは中とかしつかり洗うだけだしさ」

切歌「・・・鈴夢さんはいつからいたデス?」

・・・あえて会話の途中で言わなかったが、いつの間にか鈴夢くんは私たちの間に入っていた。チノちゃんの頭を撫でながら。

鈴夢「切ちゃん「コーヒー淹れるの難しい」って所からかな。あつ。休憩代わりに紅茶いる?今日はハーブティーだから苦めだよ」

響「・・・準備がいいね・・・」

鈴夢「プロですから(キリッ)」

そう言うのと鈴夢くんは嵐のように去っていく。・・・紅茶・・・いい匂いだなあ。

チノ「あつ。そう言えば鈴夢さんはシャロさんには会ったのでしょうか。」

千夜「・・・来て早々だから会ってないんじゃない?」

響「何?浮気の話?」

チノ「いえ・・・そういう訳ではなく。」

そう話していると、奥からリゼちゃんとココアちゃんがやってくる

リゼ「おーい。交代だぞー」

チノ「む。もうそんな時間ですか。．．．すいませんが響さんと切歌さんは先に待たせてもらえないでしょうか。あと少しで私達も上がるので」

響「ん？上がっていいの？」

チノ「はい。お二人にはお手伝いして頂いてありがとうございます。」

切歌「気にしないで欲しいデス！私達は仲間なんデスから！」

ココア「で、私達も早めに上がってどうするの？待たせて貰うてことは．．．」

チノ「はい。シャロさんに会いに行きます。問題は．．．」

チノちゃん含め、みんながホールに目をやる。そこには．．．

鈴夢「．．．ああ．．．仕事してる時が平和だなあ。このまま日向ぼっこしてえ．．．」

．．．そこには優雅に紅茶を淹れ、飲んでる鈴夢くんの姿があった。

紅茶を飲む姿はまるで中世の貴族を思わせる仕草、さらには背景の光がいい感じに鈴夢くんに当たっている。

ざわ．．．ざわ．．．

．．．当然か。鈴夢くんのようなイケメンが無防備にあんなことしてたら写真の一つや二つ。ざわざわも増えますよね。

チノ「．．．お父さんをお願いして早めに代わってもらいましょう。」

リゼ「そうだな。これ以上ここをスタジオにするのは良くないからな  
切歌「・・・ここはいつからスタジオなん德斯?」

鈴夢「・・・なあ、聞いてくれよウサギさん。」

日は暮れ始め、チノちゃんのお父さんのバーになった所で俺はカウンターでウサギと  
会話する。ちなみに名前はティツピー・・・とか言うらしい。メスです。

鈴夢「全くよオ・・・人生つてのは上手くいかないもんだな」

ティツピー「・・・人生の初めにおける奴が何を言うか。」

鈴夢「いやいや。俺はもう十分に折り返しに來てますけど。」

ティツピー「そう言うのは鏡と経歴を見てから言え。」

鈴夢「連れないなあ・・・」

このウサギさんはプライドが高いのか・・・なかなか会話が弾まない。おかしい  
なあ・・・

鈴夢「はあ・・・モテたいなあ」

ティツピー「半殺しにしてやろうか?小僧」

鈴夢「ウサギがそんな怖いこと言わないでくれよ。全く……冗談に決まってるだろ？」

ティツピー「自覚があるのか？」

鈴夢「無いわ。」

響「……フルール・ド・ラパン？」

ココア「そうだよ！ここにシャロちゃんがいるんだ！」

切歌「……名前聞いているだけじゃわかんないデス。特にイメージもないから……」  
リゼ「まあ、悪い奴ではないからな。入るか。」

そう言い、リゼちゃんを先頭に扉を開けると

シャロ「ようこそー……って！リゼ先輩!？」

そこにはフリフリのお耳……?に可愛らしい服装に身を包んだ女の子がいた。……  
まさか。

響「この子がシャロちゃん？」

ココア「そうだよー。(ペカー)」

切歌「軽い!軽すぎる紹介デスっ!?!」

千夜「今日も可愛いわねー」

シヤロ「う、うるさい!なんでみんなして来てるのよ!」

チノ「早めに仕事を代わってもらったので、この方達にシヤロさんを紹介しようかと。」

シヤロ「・・・よく見たら見ない顔ね。知り合いなの?」

・・・カクカク、シカジカΨ(・ω・)Ψ

一通り、とりあえずシヤロちゃんに説明する。

シヤロ「・・・ふ、ふーん。あのバカが帰ってきたんだ・・・へえー・・・」

響「・・・バカ・・・?」

切歌「ストーツップ!ストーツップデス!お気を確かにい!」

・・・鈴夢くんの説明とかしたただけなのに!バカとか!バカって!こいつ!こいつは!

リゼ「・・・二人とも落ち着け。これが私たちの普通だ」

響「・・・なら、しようがないか」

・・・ちつ。命拾いしたな。

シヤロ「で?みんなは今日もハーブティーを味わいに来たの?」

チノ「普段はココアさんが寝てるイメージしかないんですが。どうなんですか？」  
「……ああ、このお店の看板にも書かれてた「心も身体も」って、そういう事なのね。  
把握出来ました。」

シャロ「……あれ？鈴夢は一緒じゃないのね。」

ココア「今はチノちゃんのお父さんと共にバーやつてるよ？どうして？」

シャロ「なんでもないわよ。ふん。」

そう言うのと、シャロちゃんは去っていく。

リゼ「素直になれないのはシャロだけじゃないよな。わかる。」

響「……素直？」

カランカラン

鈴夢「いらつしやい……って。青山さんじゃないですか。」

暗い夕方、少し早くだが、バーの扉が開き、そこから身に覚えのある人が入ってくる  
青山「鈴夢くんじゃないですか、お元気にしてましたか？」

鈴夢「元気ですけど……青山さんこそどうなんですか？最近小説書いてます？」

青山「……」

鈴夢「ああ。そういう事か。」

俺が質問すると同時に青山さんの視線が下がる。なるほど……スランプなんですね。もしくは行き詰まってるか。

青山「また、発想がなかなか浮かばなくてですね……どうにかして引っぱりたいな……と。」

鈴夢「あー……わかります。集中する時の方が余計に書きづらいですもんね。」

青山「……何かいい案はないですか?」

鈴夢「言い方が酷いですね。てか、初めぐらい自分で決めてくださいよ」

そう言いながらも、俺はテキパキと支度を進めていく。

青山「そう言えば鈴夢くんはみんなには会えましたか?」

鈴夢「……ええ。中々変わってなくて驚きましたよ」

青山「ふふつ。鈴夢くんは変わりましたね。」

鈴夢「あつ。わかっちゃうんですね。」

ああ……この人には隠し事ができないって言うか……お互い様っていうか……うん。お互い様だな。

青山「どうです? コーヒー淹れながら話でもしません?」



鈴夢「あー……まあ、うん。それで青山さんの気が済むなら。」

青山「あれ？……マスター声のぬいぐるみさんは？」

鈴夢「今日はお休みです。」

響「ふーん。鈴夢くんはここ辺りに来てたんだ。」

リゼ「ああ、その時なんだが……なんでも逃げてきたとか……」

チノ「とりあえず傷ついてたので介抱してました。」

鈴夢くんの過去は話を聞く度に奥深くなる……なんだ。次元も超えられるの？鈴夢くんは。

ココア「その他にも月に行ってきたとか、あとはドレスの剣士と打ち合ってきたとか言ってたね」

響、切歌「……」

もう何処まで信じていいのかわからない。まず月に行くには……ああ、(察し)

そう言いながらも、私達はひとつのテーブルを囲んでお茶をする。焼きたてのクッキーが美味しいんです。

ココア「ここのハーブティーが良いんだよ!効果抜群だしさ!」

チノ「それはココアさんだけです。背負って帰る身にもなってください。」

ココア「もしかしてチノちゃんが!」

リゼ「私だが」

ハーブティーからはいい匂いがする。それも眠たくなるような・・・甘い香りが

響「紅茶とコーヒーってお互いに苦いイメージしかないけど・・・どうなんだろう?」

ココア「え?成分の違いじゃないの?」

チノ「・・・(プルプル)」

切歌「お気を確かにするデス。ああ言う人だつてのは1番わかつてるはず・・・デス。」

・・・そう言い、皆でわいわいと騒ぐのは嫌いではない。むしろこの時間を大事にし

て行きたい・・・

響「戦うって大事なんだね?切歌ちゃん。」

切歌「そうデスね。このまま笑顔を守っていききたいデス。」

あつ。ハーブティーでココアちゃんがやられた。

タカヒロ「鈴夢くん。そろそろ上がってもいいぞ。」

鈴夢「うん？どうしてですか？」

タカヒロ「このまま未成年に任せるのもどうかと思つてな・・・」

鈴夢「あー・・・大丈夫ですよ。俺は全然働けますが。」

・・・そう言い、無理矢理働き続ける。正直、この程度の事なんか慣れてる。

前のバイト先なんか店長と話してただけだった記憶があるからな。ここまでまとも  
に働いたのは久しぶりだ。

タカヒロ「すまないな。ならチノたちのお迎えを頼めるかな？どうも帰りが遅くて心  
配してるんだ。」

鈴夢「ああ、了解です。」

そう言う俺は店を出て、例の・・・なんだっけ？

鈴夢「まあ、名前忘れたけど何とか・・・なるだろ。」

チノ「あつ。鈴夢さん。」

鈴夢「ん？」

歩いている中で、目的のチノちゃんたちに合流する。ああ、またハーブティー味わつ  
てきたのか。

鈴夢「また、ココアちゃんか。」

チノ「はい。なので手伝ってください。」

鈴夢「うん。それじゃあ皆で帰ろうねー」

そう言うところココアちゃんを担ぎ、皆で歩き出す。

・・・あ。何か忘れてる気がする。

### 第3節 店舗巡り！魔女の家へ！

・ ・ ・俺がごちうさの土地へ踏み込み、バイトをしながら過ごして2日目。俺は優雅な朝を迎えていた。

鈴夢「んー ・ ・ ・朝は気持ちええのお。」

朝方から甘めのコーヒーを飲むと、デーブルに置いてあるパンをかじる。

あつ。コーヒーもそうですが自分は甘党ですよ？お菓子も甘いもの大好きです。 ・ ・ ・  
だがチョコと苺。テメエらに慈悲はない。

ちなみにコーヒーには砂糖ガツガツいれます。だって苦いの嫌いなんだもん。

響「おはよー！鈴夢くん！」

おつ。そうこう言っていると彼女の響がやって来て直ぐに抱きついてくる

響「ふふん。鈴夢くんだー！」

鈴夢「 ・ ・ ・昨日一緒に寝てそれかい。俺がいなくなったらどうするんだよ。」

響「鈴夢くんはいなくならないよ。私が身体で繋ぎ止めるから」

・ ・ ・と、この発言である。この子は誰が育てたんですかねえ？

響「とりあえず ・ ・ ・鈴夢くんの甘い唇が欲しいな ・ ・ ・えへへ」

甘い?俺の唇はコーヒーの味ぞ?

いや、そういう問題じゃなくて。まず響がなんの躊躇もなく唇を出してるのが問題だ。

これは・・・間違いない。俺のキスが欲しいんや。

鈴夢「響が今日一日落ち着いてたら考えてやるけどなあ・・・」

響「・・・(ピツ)」

ん?あれ?

俺が台詞を言ったあと。響の手から聞き覚えのない電子機器の音が聞こえる・・・まさか。

響「・・・(ニタア)」

電子機器『響が今日一日落ち着いてたら考えてやるけどなあ・・・』

響「人質はとったよ?鈴夢くん♡」

嗚呼。命は儂いものだ。

チノ「おはようございます。鈴夢さん」

鈴夢 「おはようチノちゃん。結構早いだね？」

チノ 「いえ、私なんて遅い方です・・・？ココアさんがいません。」

ん。本当だ。チノちゃんの隣で寝てるはずのココアちゃんが無効か消えたぞ。まさか・・・

切歌 「ココアさんならあそこデス。」

鈴夢 「・・・」

そう言い切ちちゃんの指さす先にはココアちゃんがいるんだが・・・ん？どうして土下座してるんだ？

チノ 「昨日ちようど半〇直樹のドラマ見てまして・・・」

鈴夢 「この放送局古くね？」

あれって何年前のドラマよ。たしか「倍返しだ！」の人でしょ？堺さん。元気かなあ・・・

鈴夢 「あつ。朝食はできてるから下りてきてね」

チノ 「はい。鈴夢・・・お兄ちゃん（ボソツ）」

鈴夢 「なんか言った？」

チノ 「なんでもないです。」

・・・お兄ちゃんね。初めてかも。

マリア「鈴夢!来たわよ!」  
翼「霧夜!立花と暁を連れ出して逃避行とは何事だ!もしかして浮気なのか!そんなのか!」

あー……来てしまったか。最悪の鬼が。

朝のランニング中。俺は3人に遭遇してしまう。しかも知ってる人達に

鈴夢「……いやあ。まずはシヤロちゃんお疲れ様。」

シヤロ「何よバカ!死ぬかと思ったじゃない!」

鈴夢「なんで?」

シヤロ「あの人たちに出会うなり「霧夜は何処だ!」って路地裏でナイフを突きつけられるのよ!あんなの断れないじゃない!」

……嗚呼。相当苦勞されたんですね。すいません。そして後でご飯奢りますわ。

鈴夢「……で。聞くまでもないけど2人はどうしてここに?」

マリア、翼「霧夜(鈴夢)に会いに来たんだ!さあ!愛を育もう!」

鈴夢「断る。」



ここで断れる俺。カッコイイな。

某、ぶつかり犯のあの人の相方なら喜んで「断らぬ」って言いそうだけど……俺は断る人だからね。仕方ないね。

で、俺の服装は……

鈴夢「とりあえず……これ恥ずかしいから着替えていい？」

俺の服装は部屋着の「ウラオモテ」のまんまなんだよなあ。(詳しくは「リズム天国ウラオモテ」で検索。)

これで再生回数が増えるね。やったね。

翼「むう……なら、鈴夢が着替えるまで待とう。私は彼女だからな」

鈴夢「うん。その後でここら辺回ろうね」

誰だよ。翼さんたち連れてきたの

鈴夢「……そう言えば翼さんたちはここ初めてなんだよなあ。」

マリア「だからね？ 鈴夢に手取り足取り教えてもらえないかしら。」

鈴夢「……わー抱きつかれても困るなあ……」

うわ。背中にマリアさんのミルタンクがある。(おっぱいなんて言いたくない)・・・  
結構大きいんだな・・・って!ちがーう!

翼「・・・霧夜・・・離れるな」

鈴夢「どうして?」

翼「・・・私は・・・猫なんだ。鈴夢がいないとき、寂しいの・・・にや」

そう言いつつ、俺の手は翼さんのあー・・・困ります!お客様!そこは表現に困ります!  
す!

とりあえず挟まれたとだけ言っておこう。ん。濡れてます(白目)

鈴夢「とは言われてもなあ・・・そうだ!2人に似合うような喫茶店があるんだけど  
?行く?」

マリア「あら、そんな所があるの?」

鈴夢「うん。いろんな意味で似合うと思うよ。特に翼さんなんかは気に入ってくれる  
んじゃないかな?」

翼「ほう。それは楽しみだな。」

鈴夢「・・・あ。地図読めないわ。」

ダメだ。この2人の前で甘えるなんて・・・できない!

マリア「その店ってここを左よね」

・・・あ。バレた。

マリア「・・・まさか鈴夢が地図を読めない方向音痴だなんて・・・」

鈴夢「ごめんね・・・こんな子でごめんね。」

マリア「謝らなくてもいいわ。地図が読めなくても私となら暮らせるもの」

鈴夢「嫌ア！頭の中が洗脳されるう！」

そうだ！FGO！FGOなら煩惱が消え・・・

翼「・・・（バキバキ）」

あつ。ダメみたいですわね。スマホが粉々にされる瞬間を目撃した時からわかってたよ。うん。

鈴夢「あつ。ここだよ。」

翼「ん？甘兔庵・・・か。随分と洒落た名前だな。」

そこには少し和風をイメージさせる、喫茶店があった。名前は甘兔庵。

鈴夢「洒落た・・・か。どうかは知らないけど良いところだよ。」

マリア「鈴夢のオススメなら何処でも行くわよ」

鈴夢「そりやどうも。」

少し置いて、甘兎庵の扉を開ける。するとまずうさぎが目に入った。  
翼「……」

鈴夢「あんこか。お久しぶり」

あんこと呼んだうさぎの頭を撫でると、俺達は少し奥へと進む。

千夜「あら鈴夢くん。いらつしやい」

鈴夢「お疲れ様。千夜ちゃん。」

マリア「鈴夢?この人は……」

あつ。そうか。マリアさんたちは千夜ちゃんたちと初対面なのか。うっかりうっかり。  
り。

鈴夢「紹介するよ。宇治松 千夜。この甘兎で働く可愛い子だよ」

千夜「あら、可愛いって言ってくれるの?」

鈴夢「間違ってた?」

つて、女の子に聞くもんじやないな。女の子はみんな可愛い(結論)

翼「ふむ。鈴夢のことは……」

千夜「親友かしら。それ以上ではないし……それ以下でもないわ」

マリア「そう。」

俺はほっと、身体の力を抜くと、改めて千夜ちゃんに目をやる

鈴夢「ん？千夜ちゃん体調は大丈夫かい？」

千夜「？どうしてそう思ったの？」

鈴夢「いや。心なしか疲れてるように見えたから」

千夜「・・・心配性ね。でも大丈夫よ？」

鈴夢「ならいいけど。」

とりあえず、ここで立って話すのもなんなので、席に座って、注文をしてみる。

鈴夢「・・・呪文が増えとる。」

千夜「鈴夢くんって甘いの大丈夫？」

一通り注文を何とか終え、千夜ちゃんから予想外の言葉が帰ってくる

鈴夢「ん？どうして？」

千夜「いや、前は甘いのと苦いのが嫌いって言ってたじゃない？」

鈴夢「・・・そうだね。」

それは今でも。相変わらず過度に甘いのと、苦いのはダメなのだ。だから大体、俺は

調味料で甘味と苦味を調整する。

とは言っても、そこまで苦いのが嫌いでもなく、甘いのが嫌いな訳でもない。ただの我儘なのだ。

鈴夢「……今は大丈夫だよ。だから遠慮しなくていいから。」

千夜「そう?じゃあ頑張って作るわね!」

……何故だろう。その輝かしい笑みは、調理自体ではなく俺に向けられてると感じるのは気のせいかな?

鈴夢「……何だかなあ。」

翼「霧夜はモテるのか。何処でも」

マリア「仕方ないわよ翼。だけどチャンスがないわけじゃないわ。必ず捕まえるわよ。」

翼「……そうだな。必ず霧夜は我が物に。」

翼「まさかこのような料理とは……」

マリア「……凄い美味しいわ。初めは合わないと思ってたのに……」

千夜さんとその料理と言うかデザートと言うか……まあ。大好評とだけ言うておこ  
う。

それも当然か。なんせ作ってるのはプロだからな。見た目どうこう、さらに言うなら  
味が合わねえだろ発想を覆すのが彼女の力なんだよなあ

千夜「失礼なこと考えたかしら？」

鈴夢「なにも考えてません。」

さとりなのか。彼女は。

俺は彼女が作り上げた芸術をパクパク食べていく。

千夜「鈴夢くんは変わったわね」

鈴夢「ん？」

千夜「なんて言うか。私たちが置いてかれてるみたいで……少し寂しいかも」

鈴夢「……もぐ。」

……置いていつてる。か。確かにそうかもしれない。

常識的に考えれば、千夜ちゃんよりは俺の方が異常なのだ。性格的にも、身体的に  
も……だ。

と言うか最早人間じゃない俺に成長がどうこうとか関係あるのか？

千夜「……」

鈴夢「ごめん。」

とりあえず今の俺に出来ることは。少し悲しそうにする彼女に謝ることぐらいだ。それが・・・俺にできる事なんだ。

鈴夢「あー・・・ご馳走様。ありがとね。」

全て料理を食べ終えると、俺達はお会計を済ませ、店を出ようとす

千夜「いいいえ。気に入ってくれて何よりだわ」

鈴夢「・・・そうだね。」

翼さんたちはご満足の様子で。ウキウキしながら外で待っています。

千夜「鈴夢くんは、また、何処か行っちゃうのね」

鈴夢「・・・そうでもしないと嫌な事から逃げてることになるからね。嫌でもやることはしつかりやらないと。」

千夜「まるで社畜みたいね」

鈴夢「社畜にはなりたくない。」

俺はお店を出ると、再び彼女に手を振り、翼さんたちとラビットハウスの方へ向かう



鈴夢 「帰ろう。今日は色々疲れたよ。」

マリア 「あら、もういいのかしら」

鈴夢 「言つても明日もまた巡るけどね。ここにいるうちは何回も行くかな」

翼 「霧夜は・・・」

鈴夢 「・・・言つたでしょ？俺はやるべき事をこなす。ここにいても・・・それだけは変わらないから。」

俺は静かに彼女たちの手を取り、歩き出す。

俺。ダサいなあ

## シンフオギアGX編

### 第1章 特異点としての使命。

鈴夢「うーん。むにやむにや。」

暖かな日差しを浴びながら、俺は浅い眠りにつく。

??? 「先輩。起きてください。先輩」

鈴夢「やだあ。あと数分は寝るんだーい。」

??? 「・・・困りましたね」

・・・なんか可愛らしい女の子の声が聞こえたがスルーで。俺は今、仕事をしているのです。

翼「霧夜！ここにいたか！・・・ん？」

??? 「あつ。知り合いの方ですか？良かった・・・先輩を起こすのを手伝ってくれませんか？」

翼「・・・いいが。」

俺の肩に冷たい手が乗る。ああ、しかも声からして翼さんが来たつばいな。

俺はゆっくり目を開けると、翼さんの隣に身に覚えのない女の子がいた。

??? 「先輩……? どうしました?」

鈴夢 「ん? いや、可愛いなって思って。」

??? 「か、か、かわ!」

翼 「霧夜。」

鈴夢 「ん? ああ、この後集会みたいなのあるんだっけ?」

??? 「はい。ここの所長の話です」

鈴夢 「ん。ありがとね。あっそうだ、なんかの縁だから飴ちゃんをあげよう。」

??? 「むぐっ!」

俺は苺味の飴ちゃんを無理矢理眼鏡の少女に押し込むと、翼さんの手を取り歩いてい

く

翼 「霧夜? 彼女は知り合いなのか?」

鈴夢 「うん? どうして?」

翼 「霧夜のことを先輩と呼んでたじゃないか。知り合いではないのか?」

確かに。彼女は俺を起こす時も先輩と。起きたあとも先輩と呼んでいた。人間違い

とかそんなレベルじゃなくて。

鈴夢 「……人違いだろ。」

翼 「ん? 霧夜にしては珍しく冷たいな」

鈴夢「そう？これでも初対面なりに言っただけだけなあ。」  
・・・とりあえず、だ。今はその話とやらを聞きに行こうじゃないか。

鈴夢「と思ったが俺は面倒なので辞めます。」

トイ「お前は自宅警備員だもんな。」

鈴夢「そうだなあ・・ん？」

話しながら歩いていると、道中で歌が聞こえる

鈴夢「うん。いい歌じゃないか。ねえ？」

???'「え!？」

鈴夢「うんうん。変装してるけどわかるんだよねえ・・君は・・ジャンヌ・ダルク？」  
ク？」

ん？今、俺はなんと言った？ジャンヌ・ダルク？その人って、どつかの国で魔女として殺された人だよな？なんで？

鈴夢「・・あれ？違った？」

ジャンヌ「いえ・・正解です。でもどうして？」

鈴夢「なんでだろうな。何となく・・・うん。なんか知らないけど、頭に単語が浮かんできたんだ。」

ジャンヌ「・・・」

てか俺の記憶のジャンヌ・ダルクってのは嫌なイメージでしか残ってないのか。そりやそうか。なんだってあまりいいイメージの人ではないからな・・・

ジャンヌ「あの・・・あなたはここの人ですか？」

鈴夢「ノーコメント。とりあえず違うとだけ言っとく。俺は・・・冒険者だよ。」

ジャンヌ「はあ。」

あつ。呆れられた。

表情からして彼女は呆れてるな？ だけど。俺は挫けず、そのまま話を続けていく

鈴夢「で？ 君は多分だけどサーヴァントって呼ばれる存在。いわゆる英霊だよな？」

ジャンヌ「・・・そうですね。ですが私は少し違います」

鈴夢「・・・」

ジャンヌ「私のクラスはルーラー。エクストラクラスの・・・要ははぐれ者です」

鈴夢「役目は聖杯戦争の管理。存在の死守。だったか。」

ジャンヌ「半分正解。半分不正解ですね。でも勉強してるなんて関心しました。」

勉強？ してませんが。

ビート『……全部俺の受け持ちだろうが。』

鈴夢「うるせえ。」

ビート『そもそもだ。お前は思い出せなさすぎだ。俺と共に居て、何も思い出せないとは……』



鈴夢「お前の記憶を全て俺が把握してると思ったのか？」

……そもそもここから説明があるのかもしれない。

こいつは俺の片割れ。化け物の方のビートだ。

話せば長くなるが。まあ、ごちうさの世界から唐突に逃げてきたと言っておこう。しかし、ヴィバーチエの言う通りなら、ここにその錬金術師がいるとか。

とりあえず、翼さんとマリアさんを連れて逃避行だな。うん。

響？切歌ちゃん？知らんな（—）

鈴夢「とりあえず。俺達の目的は錬金術師の探索だからな？覚えとけよ？」

ビート『……鈴夢。後ろ』

鈴夢「あふん。」

ビートが俺にそう命令した数秒後。俺の頭が殴られる

マリア「もう！探したのよ！鈴夢！」

鈴夢「……話は終わったの？」

マリア「ええ。鈴夢の話よりつまらなかつたけどね？私頑張ったのよ？」

鈴夢「・・・そうですか」

まあ、あの飽き性のマリアさんがよく耐えたものだ。翼さんも恐らく・・・限界のはず。

恐らくこの状態で翼さんを見つけると人前は愚か。恐らくどんな所でも抱きついて来るだろう。

鈴夢「そうかあ。お疲れ様ー」

マリア「それで？」

鈴夢「何もしないで観戦かな。僕は争うのが嫌いだからね？」

マリア「・・・そうね。」

正直英霊と契約してない俺らでは無理でしょ。さらに言えばシンフォギアシステムと仮面ライダーへの変身は極力控えろって弦十郎さんからの指示だし。

まあ、向こうには奏さんや美月さんがいるから何とかなるでしょ。

鈴夢「それで・・・どうしろって言うのさ」

マリア「私達は待機だそうよ。A班が先に出撃・・・するらしいわ。」

鈴夢「りよーかい。次の指示まで待機ってわけですか」

・・・と、その時、俺の頭に嫌なイメージが浮かんだ。

—先輩……助けて……—

鈴夢「……ビート」

ビート『俺はお前だ。お前の指示に任せるぜ』

鈴夢「サンキューな。」

俺はマリアさんと共に歩き出すと。説明で言われた自分の部屋に向かうことにした……

翼「霧夜！」

鈴夢「ん？どうしたの？」

翼「いや……心配……だったから」

鈴夢「あーはいはい。」

……ようは普通の翼さんなのね。なんか焦ってたから心配したわ。

まあ。こんな可愛らしい翼さんならいいな。困らない。

鈴夢「……それでマリアさん？翼さん？話の内容は？」

マリア「カルデア一帯の調査と、……なんだっけ？」



鈴夢「そもそも話の内容が頭に入っていないのか……こりや何したらいいかわかんないなあ。」

まあ。とりあえず待機だからいいでしょ。……そう考えていると

——…こつち……—

鈴夢「ごめん。出かけてくる。」

翼「き、霧夜!?!」

唐突にそう告げると、俺は施設の廊下を疾走する。

鈴夢「ビート！お前の翼を広げろっ！」

ビート『言うと思った！』

鈴夢「ゆかりんの札使うからな！後悔すんなよ！」

俺はそう言うのと、札を空間に広げ、転移陣を構築する

鈴夢「行くぞっ！彼女たちの待つ戦場に！」

ビート『おうよっ！戦闘は任せなっ！』

俺達は心でそう告げると、まだ見ぬ戦場へと……足を踏み入れた。

鈴夢「……で。ここは何処だ？」

新たな地に降り立つと、そこは赤く……炎に囲まれた街だった。なにか争ったあとなのだろうか。周りには多くの血が流れている。

鈴夢「……トイ。周辺の索敵を」

トイ「鈴夢！近くに反応だ！数は3！」

鈴夢「了解した！」

俺は赤く染まった大地を走ると、声が聞こえる方に走り出す

???「……っ。このままじゃ……」

鈴夢「見つけたっ！あの時の可愛い子！」

ビート「鈴夢!?その言い方は誤解を招くぞ！」

……ビートが何か言ってるが無視無視！今はあの子をどうやって救うかだ。

見た感じ……傷は酷くはない。……だが、治してどうにかなるのか？

そもそも……俺の治療では……

???「……先輩……?どうして？」

鈴夢「んあ？助けたいからきたんだ。悪いか？」

???「……」

鈴夢「名前は俺が後でゆっくり聞いてやる。じゃあ。まずは周辺を片付けますか。」

ビート『行くぜ。』

俺はサルベージ、ビルドアップを使うと、姿を化物へと変える

鈴夢『・・・行くぞ。』

ビート「アグレッシブに行くぜ！ブラストオ！」

俺達はまず、正面の骸骨の腹を腕で突き破ると、そのまま投げ捨てる

さらに遠く離れている狙撃兵みたいな骸骨を引きずり下ろし、地面を這いずり回す

ビート「オラア！死にたいやつから前に出ろ！」

鈴夢「・・・あまり暴れんなよ？腹が減る」

そう言うも。ビートは動きを止める気配はない。むしろ激しくなってる気がする。

・・・そう思っていると、ビートが次々と敵の息の根を止めているのがわかる。

的確に・・・そして正確に急所となる部分のみを刈り取っていく。それは一種の殺人

鬼のように見えた。

???「ガアアア・・・」

ビート「名前を知りたいなら命を出せっ！堂々と戦え！それがお前達に与えられた唯

一の権利だ！」

そう言いながら、ビートは一つ一つ、心臓の部分を丁寧に潰していく。

???「・・・先輩？」

ビート「ああああっ！」

ダメだ。アグレッシブになったこいつは周りの目を気にしない。それどころか前のことも見えてないような気がする

・・・革命のために命を差し出せ。躊躇うな。お前の命で世界が変わる・・・だっけか？よくもまあ。そこまで戦えるな。

だが、そろそろ周りを見せてやろう。

鈴夢「ビート。ストップだ。一時停止。・・・周りを見てみる」

ビート「んあ？」

周りは、赤く染っていた。

それどころか、俺たちすらも赤く染まっている。これではどっちがこの人たちを殺したかわかんねえな。

・・・俺の腕は・・・

一言で言うなら、魔の腕つてところか。もう人のそれでは無いものになっている。

鈴夢「な？落ち着け。クールダウンだ。」

ビート「・・・ちっ。じゃあ・・・後始末は任せた。俺は面倒が嫌いなんだよ。」

そう言うときビートは俺の体から離れていく。自分の腕が戻るのを感じる。

鈴夢「ふう・・・この方が馴染むな・・・で？大丈夫？」

??? 「大丈夫……に……見えますか？」

鈴夢 「見えねえよ。酷くやられてなあ……」

……片目を髪で隠した眼鏡の少女は、半死半生……って、ところか。半分生きて、半分死んでる……

鈴夢 「じつとしてろ。身体をくつつけるから。」

??? 「くつつける……ですか？」

そう。くつつける。それしか彼女を救う方法はないのだ。

隣で死んでる……英霊であろう奴の肉体を借りる。最悪死んでそこまでは経っていない。なら、彼女と適合して新たな身体を作るはずだ。

ただ、代償は大きい。そうした所で彼女が無事とは言い難いのだ。

??? 「……大丈夫ですよ？」

鈴夢 「そう言うと思った。始めよう。」

……この子の身体は、半分死んでいる……なら。

——新たな……力をあげよう。神を……超える力を——

## 第2章 火種は火を起こす

朔也「鈴夢くんの周辺で転移反応を確認！鈴夢くんの反応が消滅しました！」

場所は変わり、二課では施設の監視が行われていた

弦十郎「鈴夢くんの言った通りか・・・そのまま周辺の探索を！もしかしたら本命が出てくるかもしれない！」

あおい「ほんとにこれで争いを止めれるの!？」

カルマ「・・・わからんな。あくまで予言だからな・・・だが、彼らが争いの火種になる可能性は高い。」

・・・二課には初期のメンバーに加え、仮面ライダーノイズこと新海 美月、さらに、天界からヴィバーチェとカルマ、そしてフォルテが来ていた

ヴィバーチェ「・・・特に我が主に怪しい感じはありません。恐らく無事でしょう。美月「ならいいけど！鈴夢くんの探索するこつちの身にもなつてよね！」

フォルテ「人間は我々の知らない技術を持っていると聞く。すなわち我々よりも進化しているという事だ。」

奏「・・・もうちよい簡単にまとめてくれよ。」

キーボードを打ち、画面を確認するメンバー達に対し、ゆつくりする天界のドールたち。

響「もう！鈴夢くんはどこ！早く探して！」

切歌「早く鈴夢さんの童貞を奪うデス！もう我慢の限界デス！」

調「怒ってるからって・・・それは・・・」

そのままターゲットを調に変え、襲いかかる二人。

・・・しかし、弦十郎は慌てる様子を見せない

弦十郎「鈴夢くんからの連絡があるまで待機。・・・敵の尻尾を探り出すぞ」

あおい「・・・鈴夢くんは？」

弦十郎「・・・彼なら大丈夫だろう。それに・・・彼には不死身の力がある。」

カルマ「・・・それがいい。それよりも俺達は争いの火種を探そう。・・・主が最初

に接触した・・・あの女・・・怪しいな」

ヴァイバーチエ「あなたも感じてましたか。カルマ」

ヴァイバーチエはカルマに問うように言うと、カルマは笑いながら返す

カルマ「ああ。だってなあ・・・英霊は自力ではこつちに来ることは無いのだから。つ

まりだ・・・あれは誰かが名乗っていたとしか思えまい。」

ヴァイバーチエ「・・・調べますか？」

カルマ「ああ、頼むよ。それと・・・カルデアに連絡をいれよう。レイシフトの件も気になるしな」

ヴィバーチエ「・・・全て分かっているのですね。あなたは・・・」

カルマ「・・・今の何歩か先を見る。それが時の監視者の仕事だ。」

・・・そう話す2人に対して

美月「おかしいな・・・鈴夢くんの反応はここから出てるのに・・・」

フォルテ「・・・それがどうしたのだ。」

奏「・・・つまりは、ここにいるのに・・・この反応の出方がおかしいってことよ。本当ならここに鈴夢がいるはずなのにいない。そして姿がないのに鈴夢の反応がここから出ている・・・これはおかしい事なのよ。」

フォルテ「・・・つまり」

奏「認めたくないけど・・・鈴夢は平行世界か・・・もしくは異空間にいるのね。」

・・・暗くなる二課。しかし、彼らの予想とは違うことが・・・異世界では起こって  
いた



鈴夢「……一応の治療は出来た。おーい。起きてるー?」

トイ『そこは生きてるー? じゃないのか?』

鈴夢「その聞き方はどうかと。それに生きてるってなって欲しいのよ。」

……そう言ってるうちに、彼女の身体が少し跳ねるのを見た。

鈴夢「……無事だったか。よかった」

???「……ここは……何処ですか?」

鈴夢「俺が敵をボコしたところね。そこからは1ミリも動いておりません。」

???「……」

……しかし、よくよく見れば彼女の姿は変わっていた。大きな盾を持ち、そして、さつきよりは遥かに寒そうで動きやすそうな服装に……もしかして。

鈴夢「英霊と融合したのか?」

トイ「可能性はあるだろうな。現に彼女からは底知れないエネルギーを感じる。」

鈴夢「……」

……しまった。と、直感的に感じた。少し合成の仕方を間違えてしまったのかもしれない。

まあ……なっちゃったものはしょうがないな。さらには彼女を救うためだったんだ……

・・・さらに。俺の手から謎の熱が発生しているのを感じる。

鈴夢「・・・もしかして」

ビート「・・・契約したのか？彼女と。」

左手には見えない紋様が浮かんでおり、輝きを発している。　∴彼女と契約したのか∴  
新しく見える

鈴夢「・・・そうだ。一応だけど君の名前を聞いておきたい。・・・教えて・・・くれるかな？」

???'「・・・はい。私の名前は、マシユ、マシユ・キリエライトです。」

鈴夢「・・・」

彼女はもう人ではない。・・・かと言い、英霊とも呼べる存在ではないのだ。

彼女は・・・

鈴夢「デミ・サーヴァントか。面倒なものを作ったなあ・・・俺は」

半々と、言う意味を込めて、デミ・サーヴァントと呼ぶ。・・・まただ。また、わからない単語を・・・

マシユ「それと・・・助けて頂いてありがとうございます。」

鈴夢「いいんだ。それより身体に変化はない？」

マシユ「これ以外は・・・特には？・・・先輩？もしかして・・・私と契約を・・・」

鈴夢「可能性はあるだろうな。現にこれがあるわけだから。」  
俺は左手の令呪を見せる。

英霊と契約することで表れる物、令呪。

3回英霊への絶対的な命令件があり、それを全て使うと英霊との契約が強制的に解除せれるとか・・・なんとか。

・・・しかし、面倒なことになった。

鈴夢「ただでさえ翼さん達がいるのに・・・なんで女の子と。」

どうせならバーサーカーとかがよかった。それなら死なずに済むからマシユ「とりあえず状況を整理しましょう・・・ここは・・・冬木？」

鈴夢「ん？知ってる場所なの？」

マシユ「はい。地形を把握するにここは冬木の街だと思うのですが・・・私が知る冬木じゃないんです」

鈴夢「・・・てことは」

マシユ「はい。似たようで違う可能性。それも考えられますが・・・」

・・・厄介なことになったかもしれない。

そもそもゆかりん直伝の転移の札は特定の人周辺に転移すると言う物だ。

・・・俺は。それに惑わされてある考えを見失っていた。

もしかしたら・・・ここは別の世界なんじゃないかと。

否定は出来ない。それはこの周辺の状態から立てれる仮説のひとつだ。もし・・・本  
当にこの世界が別のものならば・・・

鈴夢「厄介なことに首を突っ込んだかもな。」

俺は少し後悔をするが・・・後ろから来る影に反応する

鈴夢「・・・影か。」

英霊の影。 “シャドウサーヴァント” と呼ばれる存在。俺たちはそれに武器を向け  
る

マシユの武器は・・・武器と言うより盾だ。

・・・盾？

鈴夢「・・・英霊はエクストラクラスを除いて七騎しかないはず。彼女のは一体な  
んなんだ？」

ビート「・・・神話にあるイージスの盾じゃねえから。まずすわかんなくなつたぜ。」  
と、そう言ってるうちに俺はメモリをベルトに通す

鈴夢「変身。」

『スタート メロディー！ビート！』

トイの大きい声が、周囲まで響き。それを聞いたシャドウ達が集まってくる。

マシユ「先輩……」

鈴夢「マシユは『いのち大事に』……で。あとはよろしく。」  
瞬間。俺は大地を駆け抜けた。

まずは一体目。首を的確にラリアットで落としていく。

次は2体目……いや。2体同時にくるか。

俺は2体の攻撃をバク転で回避し、そのまま滑りながらシャドウの足を切る  
しかし、当然のように奴らは動いている……そこで

鈴夢「変身。」

『チエンジ メロディー！フレエイム！』

紅い弾薬庫のようなビートに変身し、そのまま武器を構える

鈴夢「ちよつと新しいのを試すか」

そう言うのと、俺は背中のバレルを装備し、弾薬を変更する

鈴夢「くらえ！プレストファイヤー！」

そう言いながら、トリガーを引き、弾丸を放つ。

その弾丸が相手に直撃すると、相手は死んでいるかのように燃えていく

鈴夢「どうだ！そのまま朽ちていけ！」

トイ『鈴夢！増援が来るぞ！』

・ ・ ・ トイにそう言われ、指摘された方を見てみる ・ ・ ・ そこには

鈴夢 「んな!? ノイズだと!」

そこには不協和音と言ってもいい。変な色をした化け物たち ・ ・ ・ ノイズが大群で押し寄せていた

変身 「おいおい。冗談だろ? ソロモンは ・ ・ ・」

トイ 「そんなこと言ってる場合か! 来るぞ!」

トイが俺に喝を入れたあと、速攻でノイズからの攻撃がくる

鈴夢 「 ・ ・ ・ 誰だ! 後ろにいる奴っ! 出て来やがれ!」

??? 「ふん。そのまま朽ちておればよかったものを ・ ・ ・」

そう言いながら、ノイズ達の群れを嗅ぎ分けて、前に出てきたのは全身タイツのような変態にも見える変態だった。

??? 「心の中で変態うるさいぞ!」

鈴夢 「なんで心まで読んでくるんだ! お姉さん! 変態だろ!」

??? 「寝めるか貶すかどっちかにしろ! いけ! ゲイ・ボルグ!」

と、黒タイツの人が紅い槍を投げってくる ・ ・ ・ え?

鈴夢 「っ! 避けれないっ!」

??? 「無駄だ! ゲイ・ボルグはどこまでも追うぞ! さあ! 無様に死ぬがいい!」

マシユ「先輩っ！」

・・・このままではゲイ・ボルグが俺の身体に・・・なんて。

鈴夢「つて言うのは全部嘘。トイ！」

そう言うのと、俺は瞬時に加速する。・・・カブトのクロックアップのように。

鈴夢「・・・危ねえ。あと少しで死ぬところだったぜ」

???「・・・何？外しただと？」

追いかけるつて言っても、咄嗟に曲がれるわけじゃない。それこそ放物線を・・・いや、曲線を描かなきゃ曲がれないのが本能だからな。

走っている時。急加速してる時に急に曲がるのは至難の技だ。

なら、急加速するゲイ・ボルグはどうだ？追いかけて来るとはいえ、それも例外ではない。

獲物が目の前で急に曲がれない方向に言った時の絶望感つてのは最高だ。

鈴夢「さて・・・そろそろ名乗ってもらおうか。どうせこつちのことは知ってるんだろ？」

???「・・・ふん。いいだろう！我が名はランサー！サーヴァント、ランサー！真名はスカサハ！」

ケルト神話の・・・しかもお姫様の登場か。厄介だなあ。

鈴夢「あー・・・なるほどね。」

スカサハ「ふん。見たところ貴様もマスターと見た。」

鈴夢「え？」

ん？見たところ？

・・・ここで新たな疑問が生まれた。

こいつは俺のことを知ってるな？と。俺はさつき聞いた。

そしてそのまま真名を、あいつは答えた。

なら・・・なんで・・・

あの時の質問を否定しなかったんだ？

鈴夢「・・・とりあえずだ。今は捕まえてでも聞かせてもらおうか。」

俺は銃を。

スカサハ「やってみろ。その前に貴様の命が吹き飛ぶがな」

スカサハは真紅の槍を向ける

・・・俺達は・・・戦争へと近づいていた



### 第3章 紅き槍の戸惑い

優也「そうか・・・戦闘が始まったか」

少し離れた辺境にある神殿の最深部では。南雲 優也が鈴夢の動きを聞いていた

その彼の前には多くの英霊たちが各々の体勢で報告を行っていた

ドレイク「ああ。・・・にしても、なんでアタシを出さなかったんだい？あんな奴ら一発で沈めてくるのに」

メデューサ「・・・彼にもお考えがあるのでしよう。」

英霊たちは話し続ける。

そもそも、彼らは正規に契約をしている訳では無い。

ただ、ある目的のために彼に従っていたのだ。

両儀式「どうする？お前の宿敵とやらは英霊には頼らんようだぞ？」

優也「・・・なら好都合だ。むしろシャドウたちを送り込んでやれ・・・ノイズが出るとは予想外だな。」

・・・鈴夢は、既に送ったシャドウ、スカサハたちと。さらに現れたノイズたちと戦っている。

ジル「いくらランサーとは言え、少し頼りすぎではないですか？王よ」  
優也「・・・そうかもしれないな。だが、ちゃんと処理は考えている。・・・ギルガメツ  
シュ。」

優也が名を呼ぶと、彼の玉座の裏から、金色の鎧を纏った戦士が表れる。

ギルガメツシュ「なんだ雑種よ。俺の力が必要になったか？」

優也「ああ、・・・お前の力がなければいけないんだよ。」

ギルガメツシュ「ふん。ならとつとと言え、俺は退屈なんだよ。」

・・・彼らは話す。円卓を囲みながら。

・・・黄金の戦士の顔は・・・争いを望む顔だった。

鈴夢「あー！困ります！そんな感じに槍を振り回されても！」

スカサハ「ちっ！避けるな！」

俺は黒タイツのお姉さん。ランサーのサーヴァントと槍と銃を打ち付けあっていた

鈴夢「ちっ！装填完了、ファイア！」

スカサハ「ぬっ！」

俺が至近距離で放つ銃弾を、少し距離を取った後で処理をする・・・手際が良くて笑うんだだけ。

・・・それに戦いすぎたのか。フレイルムスタイルの限界がきている。俺にはわかるなら！と、俺は青いメモリを取り出す

鈴夢「変身」

『チエンジ　メロディー！ウオーター！』

青の戦士に変身し、刀を持ち、飛びかかるようにランサーへと突撃する

スカサハ「腕はいい！しかし、間合いがあまりない！」

鈴夢「うっせえな！」

向こうは何年も英霊と戦ってるだろうがこっちは違う。こっちが毎回相手してんのは行動パターンに偏りのある寄生虫たちだ。

そもそも行動のわかる奴ら相手にしたあとで、人間と戦うのが間違ってもんよ。

鈴夢「ああっ！だったらこれだ！」

俺はナイフを相手の足下目掛け、投げようとする。翼さん直伝の、*“影縫い”*だ。

が、そのナイフは無情にもランサーに弾かれる

鈴夢「これでどうやって戦えってんだ！」

スカサハ「受けろっ！我が槍を！」

そう言うと、ランサーは異次元からも槍を取り出す……え？それは反則なのでは？

スカサハ「はあああつ！」

鈴夢「ちくしよよよつ！」

マシユ「先輩！先輩ー！」

目の前で先輩が死んだ。……そう言いたくはないが。

大きな煙が晴れると……そこにはランサーと、1つの刀が残っていた。

それは先程まで先輩が振るっていた刀。それが大地に突き刺さっているのだ。

マシユ「……先輩……」

スカサハ「……案外弱かったな。さて……残りを始末して私たちの天下としようか。」

……ランサーは怪しい笑みと共に、私に近づいてくる

スカサハ「見ない英霊だが悪く思うなよ。」

そう言いながらも、ゲイ・ボルグを私向け、突撃してくる。

マシユ「……っ！」

私はその突撃を、盾で封じながら、ランサーと鏢迫り合いにも似たような状態になるスカサハ「ほう．．．少しは骨があるようだな。」

マシユ「．．．何故ですか!?!英霊は．．．」

スカサハ「ふふ。いいことを教えてやろう．．．私達はある目的のために手伝ってやってるんだ。」

マシユ「．．．手伝ってやってる?英霊なのに!?!」

スカサハ「．．．かつての聖杯には力があつたが．．．今は違う。聖杯には頼らん! 私たちの力で天下を作るのだ!」

．．．私が言葉を失つてた時．．．

「あつそ。で?何か最後に言い残すことはある?」

空から．．．私の大好きな声が聞こえました．．．

鈴夢「角度バツチリ! トイ! 出力全開で行くぞ!」

空高く飛び上がり、俺達は二刀流の刀にそれぞれ炎を宿す

トイ「鈴夢! 変身が持たない! 出力の上げすぎだ!」

鈴夢「……まだだ！まだ行ける！」

二刀をそれぞれ一つにすることで、1つの大きな炎になる

鈴夢「超えろ！輝くゼウスの名の元に！」

トイ「それ違うやつだ！行くぜ！」

大地に降り、地を高速で移動する。

トイから警告が出ているのがわかる。恐らくだが、この一撃で俺の変身は強制解除されるだろう……。だが。関係ない。

鈴夢「行くぜ！ランサー！これが……俺達の全力だあああつ！」

『風輪火斬』

かつての翼さんの超奥義を、俺はフル火力でぶつける

スカサハ「ふっ。まるで太陽の剣だな……。面白い！我が槍で受けて立つぞ！」

向こうも衝撃波のようなものを纏いながら、突進してくる……。が。

あまいなランサー。お前は1つの過ちを犯した。

鈴夢「はあああつ！」

スカサハ「良いぞ！かかってこい！そして私を倒してみろ！」

ランサー「……お前は……」

ギイン！

そんな金属音と共に・・・俺達は炎に飲み込まれた・・・

スカサハ「なっ・・・」

彼とぶつかった。全力で・・・だ。

しかし。これはどういう事なのだ。

スカサハ「ゲイ・ボルグが・・・折れた？」

折れた。私の・・・私たちの最強の槍が。

スカサハ「・・・何故だ。何故。」

鈴夢「簡単だ。疲れてたんだよ・・・槍は」

後ろから感じる純粹な殺意。首に添えられた刀がそれを示していた。

スカサハ「・・・ふっ。まるでそれを狙っていたかのような言い方だな。」

鈴夢「お前が俺と打ち合ってた時から狙ってたさ。お前は純粹に戦ってた。だが、それが駄目だったんだよ。」

スカサハ「・・・」

鈴夢「本当の武人とは。自分だけではなく。自身の刀、武器をも命として扱うものの

ことを言うからな。」

スカサハ「そうか……」

つまり彼は……あえて武器のみを狙っていた……

赤い戦士の時も、恐らくは回避、防御を槍のみでこなすとわかっていたから……私の癖を、この戦いの中で。僅かな時間で導き出したのか……

ふふっ。

そう言うと私は自然と彼の手を取る。彼は動揺しているが……

鈴夢「ふにゃ!? にゃ、にゃにすんじゃごらあ!」

スカサハ「……こんな手で。こんな可愛らしい手で、貴様は私に勝ったのだな。」

鈴夢「……貶されてる感じがして嫌だ。」

スカサハ「ふふ……1つ。私からお願いがあるのだが。」

鈴夢「……何?」

スカサハ「私をお前のモノにして欲しい。」

……へ? 今なんて?



鈴夢「なんて言った今。」

スカサハ「私をお前のものにして欲しいのだ。もちろん拒否権はないぞ?」

鈴夢「なんで?」

スカサハ「敗走した兵士を拷問するのは当然のことだろう? さあ、好きに身体を触るがいい。そして孕ませるといい。」

鈴夢「ちよつと何言ってるのかわかりません。」

・・・とりあえず状況を整理しよう。

マシユ「先輩!? 大丈夫ですか!」

鈴夢「おー、マシユ。お疲れ様ー」

そうだ。この盾の子に聞いてみよう。

鈴夢「なーなーマシユさんや。」

マシユ「は、はい・・・?」

鈴夢「私をお前のモノにしろつてどういう意味だと思っ?」

マシユ「ボフツ」

あー・・・そういう事なのね。いつも翼さんたちがしてくるようなそんな感じなのね。スカサハ「うん? 何が悪い? 私は強い男の愛人になりたいのだが」

鈴夢「そんな願望があるなら帰れ。今すぐにだ。雇い主んとこ帰れ。」

スカサハ「それは出来んな。実力行使で。しかも、真正面から打ち合つて勝つた男は貴様ぐらいの物だ。かつての王ですら正面から打ち合うことは無かつたからな」

鈴夢「参つたなこれ。」

まあ、何はともあれ。共に戦つてくれる？のはありがたい。

鈴夢「・・・じゃあ・・・ランサーさん。いや・・・スカサハさん。俺達の・・・刃になつてくれませんか？」

スカサハ「もちろんだとも。お前とならいい戦いが出来そうだ。それに・・・」

鈴夢「？」

スカサハ「ふつ。なんでもない。」

そうですねか？じゃあ、数秒ぐらい俺のことを見てたのはなんでしょうね？

マシユ「・・・」

鈴夢「あつ。ごめんごめん。」

隣にいるマシユにとりあえず謝り、この状態をどうにか収めようと努力しよう。それがいい。

鈴夢「で？ところで・・・冬木だっけ？どうしてここに？」

マシユ「はっ！そうでした！恐らくは転移のせいでしょう。」

鈴夢「どこもそれだな。」

スカサハ「……だが。そう簡単には酷くならないはずだぞ？なにもしなければ……だが。」

……何もなければ……か。

そう言えば他のみんなは？まさか死んでる……いや。さつき見たからわかるがこれは酷い。

鈴夢「……とりあえずだ。考えるのは後にしよう。俺が来れるってことは他の人も来てるはずだからさ……とりあえずは生き残ってる人を探そうぜ？な？」

マシユ「そうですね。」

スカサハ「……ふむ。まあなんだ。私はマスターの考えに従うがな」

もうマスターとか言ってるよ。英霊業界ってブラックなの？黒いの？

あつ。俺のバイト先はブラックだったなあ。

鈴夢「……ん？人影……」

ふと、遠くを見ていると、小さいヒトカゲを見つける。あつ。消えた。

マシユ「先輩。人影違います。」

鈴夢「すまんすまん……でもどうしてここに？」

スカサハ「私が来た時にはあんな人影は見なかったぞ？」

鈴夢「……てことは。」

新しい……人？もしくは隠れてた人の可能性もある。なんにせよこっちに仲間になつて欲しい。

鈴夢「追いかけてよう！ランサー！マシユ！行こう！」

マシユ「はい！先輩！」

スカサハ「むう……またこの女だけ……」

鈴夢「なんか言つた？」

スカサハ「なんでもない！スカサハ、出るぞ！」

……俺達は微かに見えた人影を追い……燃え盛っている街を歩いていった……

優也「……うん？魔剣を奪われた？」

王の玉座が置いてある場所。そこでは2人の人間が話していた。

片方は南雲。もう片方は……小さい……大きな帽子を被った女の子だった

??「ああ、だが心配はない。私の人形たちが追っているさ、直ぐに捕まえられる」

優也「……ならいいけど。くれぐれも奴らに渡ることはないようにしてくれよ？あ

れだけは困る」

??? 「わかってるさ……」

そう言うのと女の子は足下に転移陣を作り、消えてしまう、南雲は少しため息をつく。優也「……やっぱり見た目は一緒でも考えることは違う……か。厄介だな」

……彼は片手に剣を持ち、掲げる

優也「ふん。だがそんな魔剣。俺達の敵ではない！この最強の聖剣！  
〈勇者の握りし霸王の聖剣〉が！最強であると証明してやろう！」

……彼は片手にある聖剣を握りしめながら笑う……

世界が崩れる日は……近い。

## 第4章 聖剣の祭壇

鈴夢「……こつちから人がいそうな気配がする。」

マシユ「そこは感覚なんですわね。」

俺達は特には行く宛がないので……とりあえず冬木の街をほつつき歩いてた。

スカサハ「ところでマスターよ。先程の影はどうするのだ？」

鈴夢「……助けに行きたいけど……なんとも言えないかな」

スカサハ「ふむ。……まあ。マスターの判断に任せるが……私としては夜伽を」

鈴夢「却下。」

俺はとりあえずさっきの子の影を頼りに、その子が行った方向に歩いていくが……

鈴夢「ふーむ……なかなかさっきのこの影がないなあ……」

スカサハ「確かに。簡単には姿は消せないはずだが……ふむ。興味深いな」

歩く足を止めることなく、俺達は進んでいくが……良く考えればここで何をするかなんて決めてなかったことに気づく。

鈴夢「……目的がない。」

マシユ「そうでしたわね。ここまでいろいろありましたもんね……」

鈴夢「やめて。そんな終わりみたいに言わないで。」

と、スカサハさんが突然、歩いていた足を止める。

鈴夢「うん？スカサハさん？」

スカサハ「・・・マスター。ここから物凄い魔力を感じるのだが・・・」

鈴夢「まじ？じゃあ見に行こう」

即決。まあ、行く宛もないから当然といえば当然なんだけどね？

まあ、わかってたし？ここに何かありそうなのはわかってたから？だからここまで来たんだよ。

鈴夢「・・・え？どこって？」

スカサハ「ここだ。」

スカサハさんは立ったまま、槍を「トントン」と地面に叩きつける。え？だから？

マシユ「・・・もしかしてその下なのでは・・・」

鈴夢「まじ？」

スカサハ「うむ。どうやらこの下のようだ。」

・・・ああ、穴を掘れ・・・つか。

鈴夢「・・・掘りました」

安心安定のシーンカットである。

スカサハ「・・・ほほう。ここにこんな場所があるとはな。」

鈴夢「・・・」

穴を掘った先は、巨大な神殿のようなところだった。

ところどころ壊れてはいるが、神殿の面影を感じさせるような神聖さをしっかりと感じる事が出来る。

鈴夢「・・・すげえな。」

マシユ「先輩。よく見たら奥にも道がありますよ」

鈴夢「・・・行こう。ここしか進む道がないんだ。」

俺を先頭に、2人はしっかりと付いてくる。

スカサハ「・・・魔力が強くなってるな・・・」

マシユ「ええ。デミ・サーヴァントとなった私でもわかります。ここには大きな力

が・・・」

・・・と、あ。扉やんけ。

ギイイイ



マシユ「先輩!?なんで開けてるんですか!？」

鈴夢「え?いや、なんかドラクエっぽいなって。」

マシユ「遊び心の方が大きすぎませんか!？」

鈴夢「いや。もしかしたら神父いるかもじゃん?」

マシユ「そうだとしても!」

ジャンヌ「・・・なにか用ですか?」

・・・え?なに?なんかいるの?

ジャンヌ「あの・・・」

鈴夢「シャ!シャベツタア!!」

マシユ「落ち着いて先輩!ただのジャンヌさんですつて!」

鈴夢「・・・あ。ほんとだ。おっぱいあるやん。」

マシユ「判断基準・・・」

・・・う、うるさいな!大体のやつはジャンヌを初めて見たらなあ!まずはおっぱい大きいなどか思うんだよ!可愛いからのおっぱいだろうが!

大体の漢なんかなあ!おっぱいと尻のどっちかしか見ないんだよ!顔は・・・どうでもいいや。女嫌いだし

スカサハ「ふむ。マスターはどんな女でも抱けるとな?」

鈴夢「まあね。見た目よりは中身とる派だから。見た目だけで性格が悪いやつより見た目まあまあで性格いい人の方がいいからね。」

スカサハ「ふむ・・・では私は好きか？」

鈴夢「どつちかと言われると好きかな・・・だつて可愛いじゃん。」

何故かガツポーズをしだすスカサハさん。何故だ。何故そうなる。

・・・と。そんな場合じゃねえ。

鈴夢「そうだ・・・ジャンヌさん。ここはなんの神殿なんですか？見たところ・・・何かあるようには」

ジャンヌ「・・・こちらに。言うよりは見た方が早いと思うので」

ジャンヌさんに先導され、奥へと進んでいく。

少しの光が当たる祭壇みたいな所に連れてこられると、そこには小さな子が一人、剣にもたれかかって寝ていた

鈴夢「・・・あの子は」

ジャンヌ「先程私が倒れてるところを保護しました。外傷はないみたいです・・・一応疲れている様子でしたので寝かせてますが・・・」

鈴夢「・・・」

先程倒れていた。つまり先程までは活動していたことになる。

なら・・・俺達が追いかけていたあの影の正体も少しは納得出来るのだが・・・

鈴夢「・・・それだけじゃ根拠がない。どうする？」

・・・と。ふと、その子のもたれかかっている剣を見てみる

鈴夢「ん？これは・・・」

・・・この剣。見たことがある。と・・・俺の中の記憶が微かに語っているのを感じ

る。・・・この剣は

スカサハ「・・・〈<sup>エ</sup>約束<sup>ク</sup>された勝利<sup>カ</sup>の剣<sup>バ</sup>〉・・・か。」

鈴夢「・・・聖剣」

神話やいろんな話で出てくる最強の剣。エクスカリバー。

その剣は王を選ぶための物であったり、さらには魔を封じる役目を持つていたとか。

鈴夢「・・・どうしてこんなところに。」

ジャンヌ「わかりませんが・・・恐らくは封印・・・かと」

鈴夢「ああ、契約する流れなのね。めんどくせえなあ・・・」

とか言いながら、俺は聖剣の刺さっている祭壇まで近づいていく。

鈴夢「・・・感じる。この聖剣の力を」

・・・聖剣からは普通の人には感じれないオーラを感じる。それも生半可なものでは

ない。本物の覚悟だ。

鈴夢「・・・真面目にやらなきややられる。」

スカサハ「マスター・・・」

鈴夢「問題ない。俺なら行けるさ。」

俺は聖劍の柄を握ると、そのまま引き上げる

鈴夢「ぎいいいつ！重てええええ！」

マシユ「せ、先輩！フアイトです！」

スカサハ「貴様ならやれると信じてるぞ。マスター。」

ビート『俺は王だぞ？失敗すんなよ？』

あつ。そんな設定あつたな。

スポツ。

鈴夢「へ？」

マシユ「え」

スカサハ「ん？」

ジャンヌ「え・・・」

嗚呼。みんな唾然としてるよなあ。そうだよなあ・・・だつて・・・

鈴夢「あつ。意外と軽いやん。これ。」

俺の手に聖劍があつて・・・

アルトリア「……問おう。貴方が、私のマスターか」

目の前に金髪の甲冑着込んだ女の子がいるんだから……

鈴夢「ん？マスター？俺？なんで？」

ビート『知らん。』

セイバー、アルトリア・ペンドラゴン。

アーサー王がなんちゃらこうちゃら。

聖杯戦争の勝ち役者みたいな扱いを受けてたセイバークラスの中では無類の強さを誇る人とか。

アルトリア「……貴方が封印を解いたのでは？」

鈴夢「あ……そうだね。うん。そうだよ？」

アルトリア「なのにマスターではないと。」

鈴夢「うん。俺にはそんな器はないからね？それに俺はそんな資格のある人間じゃないですから。」

……アルトリアさんには悪いけど、俺はあなたのマスターではありません。早くお

帰りください。

マシユ「先輩！セイバークラスですよ！？仲間にしましょう！」

鈴夢「無理。なんか・・・この人嫌いなんだよね」

マシユ「え!？」

アルトリア「？そうなのですか？」

鈴夢「うん。なんか嫌な記憶しかない。」

この人を見た瞬間。俺の頭には嫌な記憶が走った。

細い剣を杖代わりに、血だらけの身体を支えて立っている姿。

彼女の前には大きな戦士。

後ろには2人の少年少女。

・・・この記憶は・・・

ビート『・・・俺の記憶だ。勝手に見るんじゃない。』

鈴夢「すまん。」

・・・心の中で謝罪すると、俺は頭をかきながら、どうするか考える。

まず選択肢を二つ上げる。

1つは彼女の言葉を飲んで、彼女のマスターになること。

もう1つは、丁寧に断り、聖剣を元あった場所に戻すことだ。

俺的には後者かなあ。

鈴夢「・・・悩むなあ。」

マシユ「悩むことなんですか!？」

鈴夢「だって。面倒だし。」

それにほら。近くで女の子が寝てるわけだし。

鈴夢「もうこれは彼女に渡した方がええやん? その方が平和的でしょ。」

マシユ「先輩い!?! 最早捨てることしか選択肢がないんですか!?!」

鈴夢「俺には決める権利も。定める権利もございません。自由大好きだから。」

そもそも俺のものに慣れって言うてるようなことを彼女に言えますか? 言えません。だって人権侵害してるみたいで嫌だし。さらには彼女の人生決めてるみたいで嫌じゃん。

それに俺は真面目な法律国の人間だからね。ほら。他人の嫌がることはしない。他人を傷つけたりしない。初対面の人とは目を合わせない。だからね。

ん? ただの陰キャだって? 気にするな。

鈴夢「とりあえずセイバーさん。お帰りください。出口はあちらですよ?」

アルトリア「断る。また聖剣と眠るのは嫌だ。」

本音だだ漏れじゃねえか。もう見た目からのカリスマ要素ゼロだよ。ゼロ。

鈴夢「一瞬でも真面目だと思った俺の気持ち返して。」

マシユ「……とりあえずセイバーさんは仲間になりますよ。先輩に拒否権はありません。」

はい！せんせー！いじめでーす！人権を否定されましたー！これはもう帰っていいってことですよねー！

鈴夢「帰ろう帰ろう。こんな後輩を持った覚えはない。」

マシユ「に、げ、な、い、で！下さい！」

鈴夢「嫌だ！家に帰って翼さんと奏さんと、どうぶつの○やりたいんだあ！」

マシユ「そんな子供みたいなこと言わないでください！ほらー！」

鈴夢「あー！」

俺達がちやがちややっていると。神殿の入口の方から大きな音がする

アルトリア「なんだ！敵襲か！……はっ！剣を返してください！」

スカサハ「ここは守ってやらんとな。」

……2人が早くも殺気だっている。やめて！闇のデ○エルで死んだら現実でも死ぬのよ！

マシユ「先輩は黙ってくださいね？」

鈴夢「はい。」



もう。困った困った。

そんなこと言っていると、入り口（穴掘ったところ）の方から人影が見える．．．あれは。

??? 「．．．ん？なんか見ないところ．．．え？」

鈴夢 「ちよつとターイム！ほらー！ダメじゃないか！アルトリア！スカサハ！初対面の人には目を合わせないでしょ！」

マシユ 「先輩！それ逃げてるだけですよ！」

．．．え？ そうなの．．．？

鈴夢 「．．．俺の気持ち返して。今までそうだと思つてた気持ちをさあ！」

??? 「．．．よくわからん。」

鈴夢 「．．．で。あなたは．．．」

よくこの人を見ている．．．ふむ。いい筋肉だ。

鈴夢 「さてはマッスルダンスの継承者だな？」

??? 「全く違う。俺の名は．．．天地 帝だ。よろしくな。」

鈴夢 「．．．仮面ライダー．．．」

この人の腰には。見た事のあるライダーベルトが巻かれていた。

帝 「バレたか。俺は仮面ライダー．．．と言うよりオルフェノクって言った方が早い

か？」

鈴夢「……」

この邂逅は……俺にとっての戦争の始まりに過ぎなかった。

## 第5章 表と裏と仮面と。

帝「……まんま fate の世界じゃねえか。」

鈴夢「うそ。知らなかった。」

帝「……まじか。」

俺達は会つて数秒。談笑をしながら今の状況を把握していた。(主に帝が。)

スカサハ「……む。私の方からもいいか。」

鈴夢「ええ。ここからは質問タイムです。」

帝「待つて? そんなのあるの?」

はい。ここからは国語の時間です。皆さん。帝くんに質問ありましたら挙手を。

おつ。ではスカサハさん。

スカサハ「……そもそも話だが。マスターたちは違う世界から来たのか? 言い方から……」

帝「……そうだな。俺は完全に違う世界から来た。てか見ただろ? 俺が来るところ」

鈴夢「そうだな。(興味なし。) はい、次は?」

帝「慣れた。」

・ ・ ・ おつ。ではアルトリアさん。

アルトリア「・ ・ ・ ・ 貴様。強いな？」

帝「それは・ ・ ・ ・」

鈴夢「この人強いよ。(適當) はい。以上質問タイムね。」

帝「・ ・ ・ ・ 殴りてえ。」

・ ・ ・ ・ 帝さんから殺意を感じるがとりあえず無視。今は・ ・ ・

鈴夢「とりあえず現状をどうにかしないと。」

帝「そうだな。俺の事もとりあえず後でいいから。・ ・ ・ とりあえずここは何処だ？」

鈴夢「日本。それだけ分かればいいだろ。」

帝「・ ・ ・ ・ ほんとに殴りてえ。これでも仮面ライダーかよ。」

俺は周りを見渡す。・ ・ ・ あつ。そうだそうだ。

鈴夢「この子を起こしてあげないと。風邪引いちやうわ。」

帝「確かに。風邪は引かねえけど。」

む。失礼な。今の日本風邪を引くことが流行ってるんだぞ。日本人なら知ってて当然だろうが。

帝「俺、化け物やで？」

鈴夢「これは1本取られたなあ・・・」

帝&鈴夢「H A H A H A H A H A H A !」

俺達が肩を叩きながらパンパンやっていると、後ろからマシユさんが盾を持ってこつちに来る。

マシユ「・・・先輩？」

鈴夢「ごめん。真面目にやるわ。」

さて。あの子を起こしに行こう。

鈴夢「・・・起きてる？」

???「う・・・」

帝「よく見たら疲れてるじゃねえか。水とかは？」

鈴夢「・・・俺のなっちゃんなら上げるけど。ちなみにみかん味。」

帝「なんでもいい!飲ませてやれよ！」

鈴夢「そうか!すまん！」

一大事だつてのに俺はボケてる。後悔などない。

むしろ助けますけど?そうしないと物語が進まないじゃん。

鈴夢「・・・とりあえずこれで安定？」

帝「ああ、あとは目覚めるのを待つだけだ。」

・ ・ ・ その場に座り込み。俺は頭を地面に預ける。

鈴夢 「 ・ ・ ・ どうしてこうなったんだ？俺は悪いことしてねえのになあ」

帝 「 ・ ・ ・ なあ。鈴夢 ・ ・ ・ お前も化け物なのか？」

鈴夢 「 ・ ・ ・ どうして？」

帝 「俺とお前で自己紹介した時。腕が染まってるのを見た。」

鈴夢 「 ・ ・ ・ バレてたか。」

・ ・ ・ 流石は仮面ライダー。なんの迷いもなく俺に質問をぶつけてくるあたり。相当のやつと見える。

帝 「良ければ聞かせてくれないか？この世界で何があったのか。ついでにお前達のことも。」

鈴夢 「 ・ ・ ・ 話長くなるぞ？」

帝 「覚悟の上だ。それに話なんてのは今に始まったことではないからな。」

鈴夢 「 ・ ・ ・ そうだなあ。 ・ ・ ・ 」

それから、俺達は少女が目覚めるまで、話をした。

俺の事。ドールেমのこと。ここまで仮面ライダーたちに襲われたこと。さらには戦争のことも。

シンフォギアの世界での現状は伏せ。俺はここまでを簡単に話した。

帝「……で。お前を撃つと戦争が始まるわけだ。」

鈴夢「そうそう。んでもって理不尽が始まるわけよ。それこそ第3次の世界大戦だな。」

帝「……今の武力で勝てるか？」

鈴夢「……正直今のじゃ無理。」

・・・ドレームがガチで戦争おっぱじめたら誰も止めることは出来ない。それどころか逆に文明を焼き尽くされるだけだ。

??? 「……え、ここは……」

ジャンヌ「よかった……！無事なのですわ！主よ！この子の目が覚めましたよ！」

鈴夢「戦争の可能性って言っても。僅かなものだとな俺は信じたいね。それこそ今の感じじゃ否定出来ないからな」

帝「戦争が始まること？」

鈴夢「そういうこと。」

無駄な話を切り上げ。先程ジャンヌさんが叫んでたので言ってみる。

鈴夢「……目が覚めたの？」

??? 「……あなた達は……」

鈴夢「俺は鈴夢。ただの陰キヤだ。」

帝「俺は帝。ただの陽キャだ。」

2人合わせて・・・ただの高校生ってな。

マシユ「そんな自己紹介いつ考えたんですか・・・」

鈴夢「今でしょ（古い）」

ウザイ顔でマシユちゃんを呆れさせて、俺は少女に向き直る

・・・彼女の服装は中に少し着込んでるだけと、フードの着いたナニカを着てる。（名前を知らないなんて言えない。）

・・・？手に持つてる本は？

鈴夢「・・・君は・・・誰？」

???「・・・僕はエルフナイン。・・・鈴夢さん。黙って僕を助けてくれませんか？」

帝「どうして鈴夢の名前を・・・」

鈴夢「自己紹介したからだろ？」

数秒前の出来事を思い出せ。俺達は自己紹介をしたはずなんだ。

鈴夢「・・・待ってくれ。1つ確認いいか？」

エルフナイン「はい。」

鈴夢「君は男の娘なのか？女の男なのか？」

・・・この質問の後。俺の意識が飛んだのは知らないことだった。



鈴夢のいる場所から少し離れたところ。また、別の人が転移してきた。

弦十郎「・・・鈴夢くんがいる所に来た訳だが。」

響「荒れててはどうしようもないですね。・・・師匠？」

・・・二課の司令。風鳴弦十郎とシンフォギア装者、立花響だ。

2人はいつもと変わらない服装でこの世界に来た。

響「・・・まるでフィーネさんと戦ったみたい。」

弦十郎（確かにこんな感じだったが・・・妙だな）

興味を示す響とは対称に、弦十郎は何かを警戒するように周りを見渡す。

・・・2、3回。周りを見渡した後で、ため息をつく。

弦十郎「鈴夢くんを探そう。嫌な予感がする。」

響「はい！」

そう言い、立花は元気よく歩いていくが・・・途中で弦十郎はその足を止める。

弦十郎「覗きなんてのは趣味じゃないな。出てこい。」

静かに構えをとる先には・・・人形のような白い肌を持った、美しい女性だった。

??? 「……まるで待っていたかのようだな」

弦十郎 「その殺気で気づかないのはあの子だけだ。……貴様は何者だ。」

??? 「……私の狙いは貴様ではない。そちらの持っている力だ。」

・人形のような女性は、踊り始めるかのような構えをとり、弦十郎は手を握る力を強くする

弦十郎 「なるほど。だが簡単に渡すと思うか？」

??? 「出来たら苦労しないな。」

弦十郎 「ならいい。覚悟があるならかかってこい！」

弦十郎が足に力を入れると、大地が割れ、そのまま女性を襲う

??? 「人間離れた力だな。だが、私を倒せるかな？」

弦十郎 「少し骨が折れそうだが仕方ない……全力で相手をしてやる！」

鈴夢 「……大地が割れる音がした。」

帝 「ああ、俺も感じた。……ここからさほど遠くはないぞ」

・地下神殿でも、その気配は感じていた。

まるで天井が崩れ落ちるかのような衝撃。近くで戦闘があるのがわかる。

スカサハ「近くで戦いがあるようだ。マスター」

鈴夢「行こう。誰かわかんないけど助けよう！」

・ ・ ・ 鈴夢は帝と共に直ぐに走り出す。

その後を追うかのように、スカサハ、アルトリアと続くが。

マシユ「先輩！この子は!？」

鈴夢「ぐぬぬぬ ・ ・ ・ そうだった。その子がいたか ・ ・ ・」

鈴夢は直ぐに立ち止まり、止まっていた頭を回す。

鈴夢「 ・ ・ ・ 」

帝「どうする!？時間がないぞ！」

鈴夢「どうする ・ ・ ・ 」

その時。鈴夢たちの足を冷たい物が襲った。

鈴夢「っ！皆、ガードだ！」

・ ・ ・ 咄嗟に出た判断で、辛うじてだが、その後に来た攻撃を防ぐ。

氷の刃 ・ ・ ・ だろうか。腕越しに冷たい感覚が鈴夢たちを襲う

帝「 ・ ・ ・ 誰だっ！姿を見せろ！」

?? 「ありやあ？死んだかと思つたのに ・ ・ ・ ざあーんねん。」

・・・何も無い。そう思っていたところに。青い服を纏った人形のような女性がいた。ジャンヌ「いつの間に！」

アルトリア「・・・はあっ！」

ジャンヌ、アルトリアの2人が急いで応戦に向かうが、彼女はその間を滑るように抜いていく

帝「鈴夢！足だ！」

鈴夢「っ！ブーストアップ！」

鈴夢は帝の指示通りに、彼女の足場目掛け拳を叩き込む。すると、彼女の足場がガラスのように、キラキラと輝きながら砕けていく・・・

鈴夢「氷か。」

帝「・・・やっぱりか。」

お互いに納得し合うと、彼女へと向き合う。

鈴夢「マシユはその子を！スカサハさんは護衛を！」

帝「俺達は!？」

鈴夢「この場で応戦するぞ！」

鈴夢はビートドライバを腰に巻き、帝はサイガのベルトを巻く

帝「付き合うぜ。乗りかかった船だからな。」

鈴夢「後悔すんなよ。」

『スタンディンググ　バイ。』

『ビート』

帝、鈴夢「変身。」

『complete』

『スタート、メロディー！ビート！』

???「あらあら。戦う気満々なのお？ガリイちゃん。困っちゃうな」

鈴夢「・・・ガリイ。それが貴様の名前か。」

帝「・・・鈴夢さん？目の色変わってるぜ？」

ガリイ「・・・」

ガリイと呼ばれた人形少女は静かに、その場に静止し、鈴夢と帝は互いの刃を構える。

鈴夢「答えろ。お前達の目的はなんだ。」

ガリイ「・・・やだなあ。ガリイちゃんがそれを答えると思う？」

鈴夢「なら力づくでも聞き出す！」

鈴夢が先行して、突撃し、その剣を彼女に突き立てる・・・が。

ピキイイイン

帝「っ?!?氷の壁!?!」

ガリイの前には、まるで俺の攻撃のみを阻むかのように、氷の壁が存在していた  
鈴夢「っ!？」

ガリイ「なんてなあ!てめえはあまちゃんかなあ!？」

鈴夢「・・・っ!」

ガリイから出される刃を鈴夢は足払いで、ガード、その後は下がりながら姿勢を建て直した

帝も鈴夢と同じ位置まで前進し、アルトリアたちも合流する。

ジャンヌ「・・・まるで魔女。」

ガリイ「魔女お?お前には言われたくないな・・・ジャンヌ・ダルク。」

ジャンヌ「!？」

鈴夢「止めろ。今は俺達の相手だろうが。」

ガリイ「・・・なら目的だけでも教えてやるよ。ほれ。」

そう言い、ガリイが指を刺したのはエルフラインと呼ばれる少女・・・まさか。

ガリイ「あいつを取り返しに来たんだよ。早く魔剣を返しな」

鈴夢「・・・魔剣。」

その言葉に、俺の心臓がドクン。と鳴ったのは・・・俺しか知らなかった・・・

## 第6話 追憶の過去。帝王の協力

ヴィバーチエ「クリス。マリア。1つよろしいですか？」

クリス「なんだ？」

マリア「なにか言いたいことでも？言つとくけど。鈴夢は渡さないから」

ヴィバーチエ「いえ・・・主のことではありません。ただ、少し引つかかることがありまして・・・」

マリア「引つかかること？」

彼女から話しかけてきた割には少し自信がないようにも見える。

恐る恐る。彼女は1つの日記を渡してくる。

クリス「こいつは？随分古いようだけど。」

ヴィバーチエ「あなた達の考えるように、これは日記です。ですが・・・誰が書いたのか。それだけが分からないのです。」

マリア「まるで粗末な言い方ね。」

ヴィバーチエ「・・・すみません。」

ヴィバーチエは少し謝罪をすると、直ぐに立ち直る。

ヴィバーチエ「ですが……これは是非……あなた達に読んでもらいたかったのです。」

マリア「あなたは読んだの？」

ヴィバーチエ「はい。ですが……何故か私に見えたのは白紙のページばかりで……白紙……ねえ。」

私は本の表紙等を確認する。

〈追憶〉

……気味の悪い。血文字で書かれていたのはその二文字だけだった。他は文字らしい文字は無く。読み取れたのはこれだけだった。

クリス「お前らのものじゃないのか？それに……私たちが触つてもいいのか？」

ヴィバーチエ「はい。むしろ、カルマからそのように仰せつかっています。」

クリス「……私たちの好きにしろってことな。……そうするわ。」

そう言い、少し乱暴に日記を手を持つ。

クリス「で。おっさん達が出かけて数時間経つなあ……鈴夢に会えたか。」

マリア「それは分からないわね。通信も通じない以上、無事だと信じる他ないわね。」

クリス「……手馴れてるんだな。」

マリア「あら。好きな人を待つのは基本よ？」



・・・そう言い、少し悲しそうな顔で部屋を去っていくマリア。  
「ヴィバーチエ」・・・愛されてるのですね。主は」

クリス「ああ、だつてよ。鈴夢がいなかったらこうは関わらなかつたし、関わりうともしなかつた。ここにお前がいるのも。鈴夢のおかげだな。」

ヴィバーチエ「お礼をしなくてはなりませんね。・・・何が良いのでしょうか。」

クリス「とりあえずは黙って帰りを待とう。それは鈴夢が帰ってきてからだな。」

・・・私はゆつくり、ゆつくりと部屋を出ていく。鈴夢は・・・戦っているのだろうか・・・

力のない自分が悔しい・・・鈴夢の傍にいたいのに・・・

クリス「鈴夢は強くなるからな。私も・・・手伝えるだけ強くならなきゃ。」

彼女は拳を握りしめると、二課の訓練室へ向け走り出した。

鈴夢「ちっ！めんどくせえなあ！」

ガリイ「んあ!?てめえも大概だろう!?!」

・・・俺達は、地下の神殿にて、氷の魔女と対峙していた

ジャンヌ「光よ！矢となりて敵を撃て！」

スカサハ「これなら避けれまいっ！追突っ！」

2人は上手く護衛をしてるみたいだな。少女は……

エルフナイン「……ガリイ。追ってきたのですね。……もしかして命令……」

帝「命令っ!?誰の！」

ガリイ「……関係ないね！私は自分の意思で動くからなあ！」

鈴夢「口の悪い人形だ！少し黙らせてやる！」

俺はそう言い、剣を蛇剣のように鞭状に剣を展開し、ガリイ目掛けて放つ。

ガリイ「けっ！ちゃんとしろやあ!？」

鈴夢「がっ!?……やるじゃん。」

……完全に当たったと思つたのに。彼女が作り出す氷の壁に阻まれ、俺はそのままカウンターを受ける

恐らくだが。……彼女の……氷の展開速度はクソ早い。正直、昔のガンダムゲムの選択肢の選択速度ぐらいに速度が早い。

……体感で1秒あるかないか。……正直正面から戦うのは不可能だ。

鈴夢「……まともには無理。……なにか考えないとダメか。」

……まあ、言つても相手も学習する生き物なのだ。人形だとは言え、考えることは

人間なのだ。だから・・・恐らく学ぶはず。

しかし、調子に乗っている今がチャンスだ。向こうは気が抜けているはず。

鈴夢「連チャンでたたきこんでやる！」

俺はさらに腕からナイフを数本出すと、彼女に向け投合し、さらに腕のギアを使い加速する

ガリイ「無駄無駄！あたしには届かないよお！」

鈴夢「っ！」

が、彼女は、俺が放った数秒後に周辺に氷の弾幕を展開。そのままナイフを相殺し、さらに俺の加速をまともにはじき返す

鈴夢「・・・っ。やるじゃん。」

ガリイ「ガリイちゃん。子供だましは聞かないよ〜」

アルトリア「マスター！私も参加します！」

鈴夢「ペンちゃん!?!」

と、そこに加入してきたのは帝と共に、ルート確保に向かっていたアルトリアさんだ。剣を持ち、俺の方に来てくれている。

アルトリア「私が相手だ！行くぞ！」

ガリイ「弱そうなやつ。ガリイちゃんはこいつと相手してるんだけど〜」

アルトリア「問答無用！消えなさい！」

アルトリアが勢いよく剣を振り下ろすと、その場に斬撃が走る。

鈴夢「っ！すげえ……」

アルトリア「避けましたか。流石ですね。」

ガリイ「……そんな、子供騙しがきくかよ！」

しかし、そんな攻撃すらもガリイは氷の壁で防ぎきる。……すげえな。

……しかし、彼女で確かめたいことが一つだけある。……それは

鈴夢「同時展開は出来ないはず。……試してみるか。」

俺は腕から追加のナイフを投げると、そのまま地面を蹴る。

鈴夢「アルトリアさん！交代します！」

アルトリア「任せたぞ！マスター！」

このままアルトリアさんには魔力の補充を。帝さんは遠距離からの援護を続けてもらいたい。

……が、それはそうは行かないようだ。

帝「ちっ！すまない！前が出るぞ！」

帝さんことオーガは、剣を持つと、そのままノイズへと切りかかっていく

……正直言う。ノイズの雰囲気がおかしい。

鈴夢「・・・前はもう少しアグレッシヴなんだがなあ・・・なんか大人しくないか？」

ガリイ「えく？ガリイちゃん知らないなあく(？、？)♡」

鈴夢「そう？」

お互い敵だからか。お互いに刃を向けながら笑顔で和む。・・・だが、そんなのは建前だ。

・・・お互いにタイミングを見ている。恐らくは油断を誘っているだろう・・・

鈴夢「誘いに乗ってやる。変身」

『チェンジ、メロディー！サンダー！』

そう言う俺は姿を変え、槍を持ったサンダースタイルへと変身し、両手に槍を持つ

ガリイ「んー？遊びはもう終わり!？」

鈴夢「悪いな！新しい遊びを思いついたんだよ！」

俺はそのまま槍からレーザーを放つ。マリアさんの〈HORIZON SPEAR〉だ。

・・・直撃しても、しなくてもだ。時間は稼げるはず・・・

ガリイ「ん？だから何？」

鈴夢「・・・もらった！」

直撃したと同時に、そこに大きな煙が生じる・・・さらに俺は加速し、槍を突き刺し

に行く

鈴夢「うおおおっ！」

俺の加速と、アームドギアの加速で、槍を突き刺しに行くも……予想通り、ガリイの水に阻まれる

ガリイ「……で？」

鈴夢「まだだ！」

槍をそのままに、パーツを分離させて槍を押し込むが……彼女の顔にも氷の壁があつた……

が、さらに俺は片方の手にある、槍を突き刺しに行く

ガリイ「ちっ！めんどくせえなあ！そらあ！」

鈴夢「っ！がああっ！」

が、その槍を突き刺すと同時に、彼女の放った氷の矢が俺を直撃し、俺は大きく吹き飛ばされる

帝「鈴夢!?くそっ！」

マシユ「帝さん！ジャンヌさん！行ってください！これは私たちが！」

その声と同時に、こちらに光の矢が飛んでくるのを見る。

ジャンヌ「主よ！大丈夫ですか!?!」

帝「鈴夢！死ぬんじゃねえぞ！」

2人のカバーが入る、しかし、ガリイはその攻撃すらも受け止めてしまう。

帝「……無理ゲーな。今俺たちじゃ無理かもな」

鈴夢「……」

ここは……退くしかない。

俺は直感でそう感じ、大量のナイフをばら撒くと、全員に指示する

鈴夢「退くぞっ！正直勝てる気がしないっ！」

帝「一理あるっ！行くぜ！」

帝が俺を担ぎ、ジャンヌさんは光の矢を展開しながら俺達は下がっていく

アルトリア「潮時ですね……ランサー！後退しますよ！」

スカサハ「承知した。シールド。ここは退くぞ。」

3人も、エルフナインを確保すると、神殿を後にする……

ガリイ「逃げるのお？ガリイちゃん……遊び足りないんだけど」

鈴夢「ならプレゼントだ。受け取りな。」

俺がそう言うと同時に、やつの周りに落ちていたナイフが爆発を始める

先程の攻撃も加え、大量のナイフが爆発を始める

鈴夢「see you again！いい夢を！」

俺達が神殿を出る頃には……そこはただの廃墟と化していた。

鈴夢「……撒けた？」

帝「撒けた撒けた。……一息つけるな。」

……大きな橋の手前まで逃げてきた俺達は。とりあえず休憩をしていた。

鈴夢「……うーん。二課に戻れないかなあ。」

帝「空間を超えないのかよ。」

鈴夢「(物理的に)無理です。」

……正直この世界は不可能の方が多すぎる。

……ああ、この世界にもド○えもんがいてくれたらなあ。あつ。ミ○キーでもいいや。世界を超えられるじゃん。

鈴夢「どうするかなあ。」

正直ゆかりんに頼るのは無理。まずこの世界に来れるか不安なんだもん。

紫「呼んだ？」

鈴夢「まあ来るわけ……」



チラツ。(：？―？)

紫「…ω・」

鈴夢「( ( ( || ^ . ω . ) スー

( : ? | ? ) チラツ。

紫 壁「ω・」ジイ……

なんかおる。

帝「うお。なんかおる。」

鈴夢「こらこら帝さん。初対面の人には目を合わさない……でしょ？」

帝「そうだったな。俺は何も見えない。見えない。」

よし。上手いこと帝さんを洗脳した。次は皆だ。

アルトリア「マスター？そいつは誰だ？」

スカサハ「……不思議と私たちとは違う魔力を感じる。」

こらこら2人とも。初対面の人には刃を向けてはいけません。そつとしてあげなさい。

鈴夢「……何しに来たの？」

紫「鈴夢がそろそろ困るかなあ……って！思ってたね！」

鈴夢「はーそーですかー」

紫 「元の世界に帰りたい？」

鈴夢 「なんで？」

紫 「私の能力を忘れたのかしら？ 私は空間ならスキマを通して繋げられるのよ？」

・・・あらい不思議。

## 第7話 合流。そして旅立ち

鈴夢「なるほど。ゆかりんはそんなことも出来たのか。」

帝「・・・長年いてお前は気づかなかったのか。」

気づいてたよ？いや。言ってくれなかつただけで。気づいてたよ？（震え声）

ジャンヌ「凄いところですね？・・・目が・・・いっぱい。」

スカサハ「・・・マスターよ。私は怖くなってきたぞ？抱いてくれないか。」

鈴夢「どさくさに紛れて来んな。それとみんなは良かったの？」

マシユ「・・・あの世界は結局転移した世界ですし・・・出られるなら万歳かと。」

鈴夢「・・・なるほどね？」

要するにあの世界はもう用済みなのね？・・・全く。早めに呼んどけば良かったかな。

・・・にしても相変わらずのスキマ。それを抜けた先には・・・

???「む。鈴夢さんではないですか。お久しぶりです」

鈴夢「あー・・・えー・・・」

???「ふふつ。今困ってますね？大丈夫ですよ？私たちのモノになってくれるって約束

してくれるなら・・・ね？」

鈴夢「後ろでもものすごい殺意を感じてるので発言の撤回をお願いします。さとりさん。」

・・・さっきの発言で俺の後ろの人達が刃を構えている。止めて。争いは嫌いだから。帝「・・・へえ・・・ここが東方の世界つてか。おもしれえ人達ばつかな。」

さとり「あら、お兄さんもなかなか面白い人ですね？」

帝「・・・そうか。」

ダメだ。帝さんも突つ込むことを放棄したか。・・・やっぱりさとりさんは強いなあ。ちなみに来た場所は地霊殿と呼ばれる。幻想郷の地底に建てられた豪邸である。全く。金持ちつてのはいいな。少しよこせ

・・・ん？お隣やお空が来ないなあ。いつもならこの段階で来るんだけど。

さとり「・・・お隣とお空は介護をしています。鈴夢さんたちより先に来た人達の・・・」

鈴夢「俺たちより先？」

さとり「はい。」

・・・ん？俺たち以外に人がいたか・・・あ。

帝「もしかして。」

鈴夢「・・・まさか。」

俺は急いで、その部屋をさとりさんに教えてもらい。走り出す

鈴夢「弦十郎さん!？」

弦十郎「む。鈴夢か。探したぞ」

鈴夢「・・・」

啞然とするしかなかった。その部屋にはほぼ無傷の弦十郎さんと響がいたんだから。さらには介護するお空たちも・・・ある意味怖いわ。

鈴夢「弦十郎さん・・・どうしてこつちに?」

弦十郎「ん? ああ、俺達は鈴夢を探しに来たんだが・・・見つけたからいいか。」

鈴夢「・・・はあ。」

帝「おつ。弦十郎さんだ。」

・・・あつ。そつか。帝もシンフォギアの世界から来たんだっけか。・・・そりや弦十郎さんは知ってるよなあ

鈴夢「・・・あつ。こいつは帝って言って俺と同じ仮面ライダー・・・です。」

弦十郎「ふむ・・・違う世界の・・・か。」

あつ、やっぱり気づきますよね?

帝「そう言うことになりますね? なんの因果でここに来たんだか。」

鈴夢「神様の言う通り?」

帝「神隠しとは・・・やりますねえ。」

まあ。この世界では日常のようにありますから。・・・でも、やっぱり空気は美味しい。弦十郎「とりあえず元の世界に戻らせてもらわないとな・・・向こうの様子も気になるしな」

鈴夢「ですね。まあ、奏さんいるから大丈夫だと思いますが・・・」

帝「ん？鈴夢の世界？」

あれ？帝さん？俺のシンフォギアの世界知ってるんですか？

帝「うちの天の声からなあ。向こうはヤンデレが多いぞつて。」

弦十郎&鈴夢「・・・」

帝「え？何？当たり前なの!？」

ええ。全くもつて当たり前です。

とりあえず帝さんの主さんは後で一緒にお茶しよう。もちろん。話の内容は俺も帝

さんの世界に行くかだな。

まあ、行ったら行ったでこっちの皆が厄介事起こすからなあ。・・・困るわ。

鈴夢「まあ、そんなことはどうでもいいです。」

帝「どうでもいい!?!俺の命に関わるんだけど!?!」

鈴夢「・・・それよりどうして弦十郎さんはそんな怪我を？響がいたなら無傷も当然では・・・」

弦十郎「……人形に会ったんだ。」

鈴夢「人形……」

人形。そう言われればつと思いつくのはガリイの事だ。

ノイズを出し、さらには個人の能力で仮面ライダーである俺たちを圧倒した。

さらにはその抜群の身体能力……どれも侮れない強敵だった。

弦十郎「奴らは普通とは違う。ノイズもだ。」

鈴夢「それは察してます。……一体なんなんだ。」

帝「……あいつら、人形なら普通は動けないよなあ。」

鈴夢「へ？」

……と。帝さんが気になる言葉を発する。

帝「いや。人形ならさ。持ち主とかいそうじゃん。てかそもそも人形って自立して動

けるもんじゃないだろ？」

鈴夢「……」

帝「どつちかと言えば自動人形だな。全く……作った奴は性格悪いぜ」

……人形と。彼女は自分から名乗っていた。

そしてエルフナインが発した命令という言葉。そして魔剣の存在……

もしかして……

鈴夢「エルフナインちゃんはどこ？」

帝「さつきマシユと外行ったけど・・・どうしてだ？」

鈴夢「少し彼女に聞きたいことが出来た。呼んでくれない？もちろんみんなもな」

帝「わかった。」

そう言うのと帝は外へ走っていく。・・・これで俺の予想が当たって。何か情報が得られればいいけど・・・

鈴夢「外れれば逆戻りだ。・・・一か八かのギャンブルだな。」

ビート『・・・お前らしくねえな。』

鈴夢「そうでもしないと何もかもが手遅れになる。そうなる前に、俺は可能性にかけようと考えたんだ。」

ビート『そうか。まあ、誰かが死ぬよりはマシだよな。』

思い当たる節があるので。俺はアホの言葉には耳を傾けることなく外へ歩き出す  
みんな無事だろうか・・・そんなことを考えつつ。俺はその手がかりとなる少女の所  
へと急いだ。



エルフナイン「僕に・・・ですか？」

帝「ああ、鈴夢が直接聞きたいことがあるんだと。俺は知らないけどな」

鈴夢「言い方を考えてくれる？まるで変人みたいな言い方を」

と、案外地霊殿から離れてない所にみんないるなあ。

鈴夢「うん。まあ、別にみんなにも聞かれていいんだけど・・・君って何者なの？」

エルフナイン「・・・っ。」

鈴夢「普通とは違う・・・とはあんまり言いたくないけど。なんか引つかかるんだよね。行動は特に変わらないけど。」

マシユ「引つかかる・・・ですか？」

・・・みんなは違和感を感じてないのか。各々の反応を見せてくる。ふむ。

鈴夢「ああ、そもその話。ガリイと言ったか・・・あの子は俺たちに攻撃を仕掛けてきたよなあ。俺達は何にもしてないのに。」

帝「・・・そうだなあ。」

スカサハ「しかしマスターよ。見知らぬ人がいれば戦うのは当然ではないのか？」

鈴夢「昔の考え方だね。それに何か目的があるなら殺すより先に聞くと思うんだけど」

・・・方法も方法だ。色々とやり方がある。

交渉なら話すだけだし。暗殺にしても、殺人にしてもだ。何かしらの行動は求められるものなのだ。さらに言ってしまうえば、その行動がなければ次にはいけない。それが人間と言うものなのだ。

アルトリア「ふむ・・・つまりその目的のために私たちが邪魔だと認識した・・・？」  
鈴夢「半分つてところ？まあ、どの道、力尽くつて言うのは嫌いじゃないし。もつと言えば簡単な方法はやって好きだからね。」

アルトリア「では何故？」

鈴夢「知らんな。それは彼女・・・？に聞くでしょう。」

・・・俺達は黙つてエルフナインを見つめる。彼女はそれに困ったのか、少しキョドつた感じになる。

別に敵対したい訳じゃないんだよなあ。ただ、君がなんのために来たのか言ってくればいいのに。これだから日本語って難しいね。

帝「・・・言わないなら何も知らないじゃないのか？」

鈴夢「だといいいけど？まあ、ガリイとか言うやつの名前をこつそり呼んでたぐらいだしね？何かしらの接点はあると俺は思っているよ？さあ？どうなのかな？うん？」  
少し強めの言い方で詰めをかける。

まあ、これで何も知らないとさえ素直に諦めるけど。彼女はオドオドしてるから

なあ。怪しく見えてくるのも無理はないんだよ。

エルフナイン「……言っても怒りませんか？」

鈴夢「怒らない怒らない。むしろ怒って何になるって話なんだよなあ。」

エルフナイン「……僕は。ある目的を止めるために魔剣を持ち出したんです。」

鈴夢「……目的？」

エルフナイン「はい。キャロル達の計画です。」

鈴夢「……」

ああ、やっぱりこうなるのか。

大体察してはいたが。まず聞きたいことが山ほどある。

キャロルとは。そして彼女たちの……さらにはスカサハさんが何処にいたのかを。

だ。

スカサハさんに関しては後で聞くが。まずは聞きたいことから聞かなければ。

鈴夢「……キャロルって誰？それに魔剣って……」

エルフナイン「魔剣は魔剣です。名前までは……言えないです。」

鈴夢「じゃ、キャロルって誰？」

エルフナイン「キャロルとは。僕のオリジナルの素体なんです。」

鈴夢「……」

帝「……」

オリジナル？つてことは君は人形か何かなのかい？

帝「じゃあ君は誰なんだ？」

エルフナイン「僕はキャロルの錬金術によって出来た一種の人形です。」

鈴夢「……」

こりやまた。話が長くなりそうですね。

アルトリアさんたちは難しい表情で聞いているし。大丈夫だよ。日本語わからんなら帰つてて

鈴夢「君は君じゃない……そういうことでもいい？」

エルフナイン「そうでもいいですけど……まあ、それは後に説明させてください。今はこれを持ち帰りたいんです」

鈴夢「……？」

エルフナイン「鈴夢さん。帝さんなら知ってるでしょう。聖遺物のこと、そしてシンフォギアシステムのことを」

どうしてその話がつて言う暇もなく。俺達は呆気にとられる。その話がここで出てくるなんて思わないからだ。

そもそも。魔剣とんのつながりが……

エルフナイン「はつきり言います。今のままではキャロルはおろか。新しいノイズすらも倒せないかと……」

帝「へ？え!？」

鈴夢「……」

新しいノイズ。あのちよつと光つてた新種のことか。

エルフナイン「あれの名前はアルカ・ノイズ。貴方達が戦ってきたノイズとはさらに違う個体です。」

鈴夢「……厄介な事が増えるなあ。」

帝「とりあえず。俺たちだけでも元の世界に戻らないとな？鈴夢。頼めるか？」

鈴夢「もちろんだ。そして二課のみんなにもこのことを話さないとな」

俺はそう言うのと、地霊殿の方へと走り出そうとするが。

弦十郎「ふむ。興味深い話だ」

鈴夢「弦十郎さん？いたんですね」

弦十郎「ああ、内容も聞かせてもらった。……新たなノイズか。」

鈴夢「……」

マシユ「あの……よろしければ私達もご一緒させてもらえないでしょうか？」

弦十郎「もちろんだ。戦力は多い方がいいからな。」

紫 「決まりかしらあ？」

鈴夢 「・・・準備がいいですね・・・ほいじやあ行きますか！」  
元の世界に戻る。これが争いの始まりだと俺達は知らなかった。

## 第8話 星天ギヤラクシイクロス

鈴夢「ただいま」

切歌「鈴夢さんデスっ！調々！鈴夢さんが帰ってきたデスよー！」

調「鈴夢さん・・・（ウルウル）」

鈴夢「あー泣かない泣かない。よしよしー」

あれからゆかりんに送ってもらい。二課へと帰還を果たしたが・・・予想より荒れてなくて草

ん？てか翼さんとマリアさん居なくね？

帝「へえ・・・ここが二課ですか。前より広くなつてない？」

鈴夢「俺と緒川さんとで広くしました。」

帝「・・・施設なの？」

ほら。俺達は空間建築士の資格ありますから。どんなところにもブロック置いて作りますよ。ほら。クラフターですから。

ちなみに緒川さんは空中飛んでたよ。・・・忍者つてあんなこと出来たのな。不思議。

アルトリア「ほう・・・なかなか現代的なものだな。これは」

スカサハ「……ふむ。少し苦しいな」

ジャンヌ「スカサハ。そこは慣れです。」

マシユ「……ここが先輩の住処……いや、帰る場所なんですか？」

鈴夢「今はね？でもほら。俺は色んなところに家を作ってるから。」

と、俺は司令室の皆さんにも一通り挨拶をする。

朔也「鈴夢くん。おかしいと思つたことは無いかい？」

鈴夢「……そうですね……翼さんたちがいないから？」

朔也「翼さんたちはライブに言ってるよ……イギリス？だつたかな。」

鈴夢「覚えてないんですね。とりあえず海外にいるのはわかりました。」

エルフナイン「……あの〜」

鈴夢「ごめん。紹介するね。」

と、俺は後ろにいるエルフナインちゃんを前に出して、皆さんに紹介する

鈴夢「この子はエルフナインちゃん。実は……向こうの世界でとんでもねえ連中に

会いましたですね」

あおい「どんな奴らなの？」

鈴夢「……実は……」

俺は全てを隠すことなく話した。



アルカ・ノイズのこと。錬金術師のことなど。とりあえずエルフナインちゃんに教えて貰ったことを中心に。俺たちの周りで起こったことを話た。

朔也「なるほど。．．．司令も同じ感じですか？」

弦十郎「ああ。骨の折れる相手だったぞ」

鈴夢「アルカ・ノイズは．．．従来のノイズとは違うらしいんです。だから．．．接触した時は出来るだけ探る感じで戦ってみようと思います。」

あおい「なるほどね．．．それで後ろの子達は？」

鈴夢「俺が契約した英霊たちです。さっき話しませんでしたっけ？」

あおい「話したわね。．．．それでその子達も戦うの？」

鈴夢「必要とあればって感じですかね？まあ．．．基本ノイズと戦わせる気は無いです。あくまで隠し戦力って感じです。」

まあ、生身でノイズと戦うのは危険だからね？そんなことは俺たちが一番よく知っているんだ。

鈴夢「．．．ん？姉さんは？」

奏「クリスならさつき美月と出掛けたぞ？」

鈴夢「．．．後ろに抱きつくのやめてください。」

響「ああ！奏さんずるい！私だって鈴夢くんを抱きつきたいのに！」

・・・なるほど。みんな寂しかったんだなあ。

帝「しばらく離れてやろうか？」

鈴夢「そんな優しさはいらない。一緒にいてもいいんだぞ？」

帝「そうするか。」

俺達は・・・

鈴夢「とりあえず状況を説明する。了子さんを。あとは・・・翼さんのマリアさんは通信でいいや。みんなに話したいことがある。」

玲奈「よーしよし。ネコちゃんは元気だねー」

チルカ「ふにやー！にやー！」

クリス「おー、もう仲がいいじゃねえか！」

美月「私には懐いてくれない・・・(p|q\*)シクシク」

鈴夢の家で。私達は鈴夢の飼っている猫と戯れていた。

鈴夢曰く、新種の猫らしいので、どんな姿か期待していたら・・・

尻尾が二又のどつかで見たことある猫だった。

クリス「にしてもコイツは遊びたがり屋だなあ。猫って言ったたら、ゴロゴロしてるイメージが強そうだけど・・・違うのか？」

玲奈「あつてると思いますよ？でもこの子はちよつと違うだけかもしれないですし」  
美月「まあ、猫にもいろいろあるって事よね。」

チルカ「にゃ〜！にゃ〜！」

と、猫は玲奈の腕を飛び出ると、玄関へと元気に走っていく。

玲奈「ああん！もう！大人しくしてよー！」

クリス「やっぱ飼い主に似るんだなあ。なんかしみじみと感じる」

美月「わかるわ。あの猫は鈴夢君よりなのねきつと。」

鈴夢「・・・魔剣によるシンフォギアシステムの強化？」

弦十郎「ああ、先日。エルフナインちゃんにシンフォギアシステムを見てもらったところ。そんな案が返ってきた。」

鈴夢「・・・」

了子「聞いた話だとアルカ・ノイズに対抗する力らしいけど・・・」

・ ・ ・ どうしてそれを俺に聞くんですか？

弦十郎 「どうせなら鈴夢くんの意見も聞きたいと思った。彼女たちは拒否することも、肯定することもないからな。」

鈴夢 「半々つてどこですか。 ・ ・ ・ なるほど。」

そういう事ね。翼さんやマリアさんとかなら性格的に慎重になって手が出せなかったり。響や切歌、調なら簡単に手を出してしまうかもしれないってことか。 ・ ・ ・ わかりやすいな。

了子 「フィーネは賛成らしいわ。 ・ ・ ・ そこで鈴夢くんに話が言ったわけよ。」

鈴夢 「なるほどね。 ・ ・ ・ ん？てか二課の名前変わってませんか？」

弦十郎 「ああ、言おうと思ってたが ・ ・ ・ 」

鈴夢 「いや。僕は二課って言わせてもらいます。その方が馴染みあるので。」

弦十郎 「すまないな。」

鈴夢 「気にしないで下さい。組織の名前なんて変わるのとは当然のことじゃないですか。」

弦 「帝くんは？一緒じゃないのか。」

・ ・ ・ 帝？ああ、確か響のサンドバッグになつてますよ。今頃みんなにやられてるんじゃないですかね？いやー俺じゃなくてよかった。

弦十郎「……それでだ。鈴夢くんの意見は」

鈴夢「……様子見つてところですかね？まあ、成すべきことならそうしますが。今はそういう状況でもないの。それに……力に頼る戦い方はあまりしたくないですね。」

……とりあえずこう言うしかない。

俺には何も決めることは出来ないから。シンフォギアシステムとは無関係だし。さらには俺は彼女達じゃないから。

何も俺が決めるべきじゃないんだ。だから。

弦十郎「そうか。」

鈴夢「……すいません。まともな意見が言えなくて……」

弦「いや。気にしなくていい。元々様子見のつもりだったしな。鈴夢くんからその口が聞けてよかったよ。」

鈴夢「はあ……」

とりあえず話は終え。俺は外へ

鈴夢「……久しぶりの外だなあ……遠くに行くか。」

そう言いながら。俺はバイクに跨りエンジンを入れて。俺は遠くへとバイクを走らせた

帝「おおー！星天ギャラクシクロスじゃないか！」

奏「へえ、あの二人やるじゃないか！まあ、あたしと翼の時に比べればまだまだだな。」

ジャンヌ「歌ですか・・・これは良いものです！是非主にも聞かせたいものです！訓練室では、休憩中の3人が海外のライブ映像を見ており、訓練している響たちが、激しく暴れているところだった

響「うわっ！槍で遠距離!？」

スカサハ「先程の戦法とは違うぞ！交わしてみせよ！」

アルトリア「ほらほらシルダー！早く反撃しないと自慢の盾が壊れますよ！」

マシユ「だ、大丈夫ですよ！それより早くそちらの剣が壊れるに決まっています！」

・・・さらに隅っこでは2人の奏者がカメラを監視していた

切歌「鈴夢さんの貴重な調理シーンです！エプロンが凄い可愛いデス！」

調「・・・鈴夢さんは何着てもカツコイイから。はあ・・・早く私たちのものにならないかなあ。」

と。それぞれがそれぞれのことをしていると、全体通信が入る

奏「どうしたおっさん。鈴夢がコーヒーこぼしたか？」

弦十郎『奏！みんな緊急事態だ！翼たちの方とクリスたちの方で例の人形とアルカ・ノイズが出現した！』

帝「はあ!?それで!?誰が戦ってるんだ!？」

弦十郎『クリスくんの方には鈴夢が向かってる！翼の方はセレナちゃんがいるから大丈夫だ!』

奏「じゃああたし達は鈴夢の方に行くぞ！」

帝「奏さん！俺も行きます！」

そう言う奏と帝はそれぞれ部屋を出る。

響「師匠！私達は……」

弦十郎「各装者は現状維持だ、……ここで貴重な戦力を失う訳には行かないからな。」

切歌「……鈴夢さん。大丈夫デスカ？」

調「大丈夫だと思う。と言うよりそう言わないと多分ダメなんだと思うよ」

切歌「……デエス。」

装者3人を残し。訓練室は静寂に包まれた

マリア「……ライブが終わったと思ったらこれね。あなた達は何者なのかしら」

???「答えには応じません。私達は命を受けてますので」

ライブ会場からさほど離れてはいない場所で。彼女たちは対峙していた。

翼「……なるほど。そのような態度を取るのであれば……迷いなく切り捨てる！」

セレナ「姉さんは下がって！翼さん！援護します！」

翼は天羽々斬を、セレナはアガートラムを纏うとそれぞれ刀と剣で切りかかる

ギイン

翼「っ!?!剣だ?!」

???「まだまだですね。まあ……筋はあると言っておきましょうか」

セレナ「こいつ……強い！」

装者2人分の攻撃を剣1つで防ぎきる人形は、少し微笑むと装者2人を後ろへ飛ばす

???「ついでにお土産です。受け取ってくださいいね？」

そう言い、赤い粒みたいなのをばら撒くと、そこから大量のノイズが出現する。

マリア「アルカ・ノイズね！2人共注意して！」

翼「そんなもの！私の剣で！」

その時だった。



翼の攻撃が放たれると同時に、ノイズが反撃をする。

翼の刀はノイズに当たりますが、ノイズが消滅する直前。ノイズの伸ばした腕が偶然にも翼のペンダントに当たる・・・

マリア「翼!？」

翼「ーっ!」

その衝撃か。翼の身体は弾き飛ばされ、シンフォギアシステムが強制解除される。

セレナ「何!?何が起きたの!？」

翼「・・・天羽々斬が・・・砕けた？」

それは一瞬の出来事だった。

砕ける・・・と言うより解剖されたと言う形に近いだろう。

シンフォギアシステムは。聖遺物が組み立てる鎧みたいなもので。当然、構築するためには多くの処理を施す必要がある。

このことから。シンフォギアシステムにも人間と同じような細胞があると考えられる。

では、その細胞の活動を止める。あるいは破壊してしまえば・・・

マリア「・・・厄介な敵ね。」

翼「くっ・・・情けない。」

同現象はクリス側でも起きていた。

美月「ノーツ！クリスに一体何が！」

ノーツ『細胞分解に近いものですが・・・正式な説明は出来ません。解析不能です。』  
クリスの纏っていた魔弓・イチイバルが敵の攻撃によって砕けたのだ。

クリス「・・・あいつ！」

美月「クリスは下がってて。残りは引き受けるわ」

そう言いながら。仮面ライダーノイズは静かにダガーを構える。

???「・・・これで戦闘能力は削った。仮面ライダーなど敵ではないな」

鈴夢「そういうの決めつけるの良くないなあ。」

・・・と、人形が喋ったと同時に。鈴夢がバイクでその正面を横切る。

美月「鈴夢くん!？」

クリス「鈴夢！」

鈴夢「・・・サンダースタイル。仮面ライダービート参上って・・・どう言う状況?」  
???「仮面ライダービート・・・なるほどな。」

鈴夢「・・・うわ。また人形かよ。もうコリゴリだよなあ。トイ。」

トイ『俺に言われても知らないぜ。』

冗談を終え、俺は槍を作り出すと、人形に向け構える

鈴夢「さて。姉さんに傷を付けたんだ。それ相応の礼はさせてもらうよ」

???「ふん。少し遊んでやろう。」

状況悪化。まさに今の状況はこの言葉そのものだった・・・

## 第9話 降り掛かる火の粉

鈴夢「つ！弾幕なんてちまちまやってんな！こつちに来いや！」

???「美しくない。もつと踊れ！」

遠距離から飛んでくる弾を、俺は槍で次々と的確に返すようにして弾いていく  
もちろん簡単に行かないのが世の定め。向こうは次々と放ってくる弾で相殺してしま  
う。

鈴夢「くそつ！次行くぞ！次！」

俺は槍を収納すると、アームドギアの加速を使い、突撃して行く  
大きく半円を描きながら、俺は人形へと拳を振るうが

???「ぬるいつ！」

鈴夢「ちっ！」

その攻撃すらも、見事にかわしてしまう。

まるで踊るようにして、回避する人形に俺は攻撃を当てれずにいるのだ。

クリスマス「クソつ！イチイバルがやられなければ！」

美月「どうこう言っても状況は変わらないでしょ!?ノーツ！あとどれぐらい戦えそう

!？」

ノーツ「残り5分。それ以上は身体的にきついかと。」

美月「上等！」

鈴夢「美月さん!?ダメですよ!後退を！」

しかし俺のその声は届かず、彼女は縦横無尽に拳を振るう

鈴夢「ダメだ!これ以上ここで疲労しては!くそっ!トイ!やるぞ!」

トイ『鈴夢!?まさか!』

鈴夢「ぶつつけ本番だろ!やるしかない!」

俺はそう言うと、攻撃しながらメモリを変える。

鈴夢「変身!」

トイ『チェンジ、メロディー!ビート!』

元のビートの姿に戻ると、腕のアームドギアから大量のナイフを取り出し、投合する。

ナイフは光の矢となり、ノイズの身体を貫通して行くと同時に、遠くに飛んでいく

鈴夢「今だっ!」

遠くに行ったナイフに繋いであった紐を、俺は力いっぱい反対側へと引っ張る

???「ほう。面白い」

鈴夢「要領は釣りだ!行けよっ!」

原理的ならこれでナイフがあの人形に刺さるはずだが……  
??? 「見えない糸で繋ぐまではいいが……私には見えるのだよ！」

その時、俺は同時に走り出していた。

わかったさ。光の目立つこの暗いステージには、糸なんて通じないってことぐらいは  
さ。

でもなあ……俺は言うぜ？

鈴夢 「拳で語り合って真の仮面ライダーだ！行くぜえ！」

トイ 『ファイナルブレイクっ！ビート！』

ギアの加速を使い、俺は人形へと接近する。

上からはナイフが雨のように降ってくる。翼さんの見様見真似だ！

鈴夢 「届く！」

が、俺の攻撃は届かず、俺の体は宙に舞った。

鈴夢 「があ……」

トイ 『鈴夢！』

何が起こったかはわからなかったが……このことだけは理解できた。

俺は……恐らくここで死ぬのだと。

切歌「鈴夢さん！」

調「っ！」

2人が到着した時には霧夜。鈴夢の身体は既に宙を舞っていた。そして、そのまま落ちてくるナイフをともに身体に受けた。

切歌「こんなことが、こんなことって……」

調「切ちゃん！鈴夢さんを助けなきゃ！」

鈴夢の変身は解除され、人形の足下へと落ちる

??。「筋はよかったが……まだまだ甘いな。」

鈴夢「……」

鈴夢の方は反応がない。気を失っているのだ。

それを見て、2人の少女が戦場に姿を現す。

切歌「鈴夢さんから離れるデエエツス！」

調「切ちゃん！そっちは任せた！」

切歌が「切呪りeツTお」を調は「?α?式・百輪廻」をそれぞれ人形へ向け飛ばすが。人形は難なくそれをコインで撃ち落としてみせる

切歌「あれはなんなんデス!? 無尽蔵のコインケースデスカ!」

調「強いのは確か。でも：：私たちの目的はこいつと戦うことじゃないよ切ちゃん。」  
切歌「わかってるデス。こいつより鈴夢さんの回収の方が先デス。」

そう言い、彼女たちは人形の足下へと視線を向ける。・・そこには血を流しながらも横たわっている鈴夢の姿があった。

美月「2人共! クリスの救出はやつとく! 鈴夢は任せるよ! いいね!」

2人「了解(デス)！」

そう言う和美月は反対側にクリスを担ぎながら走り出す、それをカバーするかにように2人は鈴夢の元へと向かうが・・

???「そうはさせん!」

人形はそれを塞ぐかのようにコインを連続して撃ってくる。

切歌「そこを退けデエエス!」

調「切ちゃん! 鈴夢さんをお願い!」

調がのこを盾にし、その隙に切歌が鈴夢を回収する。

美月「2人共! 煙幕を撃つわよ!」

2人が下がると同時に、美月が放つ特性の毒性のある煙幕が周囲を襲う

切歌「使用注意デエエス! もうー!」



調「ほんとそれだね。でも悪くない。」

元々人間には有害性のあまり無い毒なので。彼女たちは鈴夢を担ぎながらゆつくりと距離をとる。

クリス「鈴夢に傷を付けたら撃ち込むからな！覚えとけよお前ら！」

切歌「大丈夫デス！傷なんか付けないデス！」

人形にまとりつく霧が晴れるころ・・・、彼女たちは姿を消していた

???「・・・あなたは誰です？」

翼、マリアの方は、赤い戦士の介入によって戦況は混乱していた

???「それはこつちのセリフだ。まあ、お前が誰なのかはすぐにわかるがな・・・フラ。」

???「・・・」

剣を持つ人形は、静かに敵意を見せる。

翼「貴様は何者なんだ。」

???「俺は・・・さあね？誰か知りたいなら鈴夢にでも聞いたらいじやないか。・・・」

まあ、あえて言うなら・・・通りすがりの仮面ライダーだ。覚えとけ。」

そう言うとき赤い戦士は高速で剣持ち人形の隣へと移動する

フアラ「ーっ！」

??? 「さて。楽しませてもらうぞ。」

そのままナイフを彼女へーとは行かず、人形も剣を振るって対抗する

フアラ「あら、折れませんか・・・」

??? 「俺の力は剣だけじゃない。それを今から教えてやる！」

そう言うときさらに赤い戦士は高速化。そのままナイフを手から外して拳で撃ち合う

フアラ「ー！」

??? 「決める。」

『R i d e r K i c k』

赤い戦士は、そのまま超近距離の状態で人形に蹴りを入れると、人形の身体は宙を舞い、海へと落ちる

??? 「あちやー・・・回収は無理かもなあ。でも、この3人は守れたから貸しーだな。鈴夢。」

そう言うとき赤い戦士は変身を解き、その姿を表す。

まず彼女たちの目に入ったのは少し大きめのコート。少年の身体にはめるにしては

少し大きすぎる物だ。

そしてその光のない瞳。まるで少年のこころを表しているかのようだった。

翼「……君は……」

??? 「……仮面ライダーカブト。とは言っても。レジエンドの人じゃないから説得力もクソもねえわな。」

マリア「そう、あなたも仮面ライダーなのね。」

??? 「てことは多少は知ってる感じか。……俺の名は双龍 玲音。よろしくな。」

コートの少年がそう名乗ると、翼、マリアの周りにSPの人達が集まってくる。

SP 「ミス・翼とミス・マリアを護衛しろ！……君は何者だ？」

SP 「答えなくとも投降して頂きます。よろしいですね？」

そう言いながらもSPは彼の背中に押し付けるように銃を突きつける。

玲音「ええ。喜んで投降しますよ。」

そう言うのと彼らに乗せ、黒い車は走り出した。

弦十郎「……そうか。鈴夢くんの意識が。」

切歌「……デス。」

二課司令室では、装者たちの報告が行われていた

弦十郎「翼たちも無事なのだな？」

翼『はい。……それともう一つ言いたいことが。』

弦十郎「言ってみろ。」

翼『先程、人形と対した際に、双龍 玲音と名乗る少年が私たちを助ける形で戦闘に介入し……今はこちらのSPが保護しています。』

帝「!?玲音が！」

弦十郎「……帝くんは知り合いなのか。」

知り合いも何も。天地 帝と双龍 玲音。そして霧夜 鈴夢の3名は既に面識があるのだ。

それも2つ、3つの大きな戦いの中でだ。その際には別のライダーもいたが……それらは不明である。

故に帝が驚くのも無理はなかった。

帝「玲音は……俺達の仲間なんです。……時は違っても、また共に戦うと誓った……調「鈴夢さんが時折いなかったのはそれが理由なのね。」

帝「……内緒にしててすまない。でも、いずれは鈴夢の口からも出るはずだったん

だ。」

美月「なるほどね。」

マリア『クリスは!?一緒じゃないの!?!』

美月「あの馬鹿なら寝かせてるわ。身体に異常があつたら困るし。エルフナインちゃん  
の監視付きでね。」

・・・それを最後に二課が静まる・・・初めに沈黙を破つたのは珍しく帝だった。

帝「玲音を呼んでくれませんか。とりあえず彼と会話したいんです。」

弦十郎「俺の名を出せ。翼。それで彼と面会出来るはずだ。手続きは・・・こちらで  
やっておく。」

翼「わかりました。」

それを終えると、一度通信が切れる。

帝はため息をつき、弦十郎は静かに腕を組む。

奏「とりあえず。私から言いたいことを言う。」

切歌「デエエス・・・」

調「(\*・ω・)(\*グスン)」

2人は公開処刑。それもそのはず、彼女たちは奏たちが出た後に鈴夢のバイクを使って最短ルートで移動していたのだ。

ギアを纏った2人を見て、奏が驚愕したのは帝にとつていい思い出だ。

弦十郎「帝くん。その玲音くんが来たら君たちに聞きたいことがある。いいな。」  
帝「構いませんよ。どの道言わなきゃ行けないことなんです……から。」

玲音「びこびこ」

SP「……おっ。色違いメタグロスだ。持つてるのか……いいなあ。」

玲音「わかります？こいつを手に入れた時の嬉しさ」

SP「わかるー！なんか苦労したかいがあつたとか！」

まさにそれなんだよと。玲音は軽く言う。

翼「……なんなのだ。奴は」

マリア「わからないけど。話を通しておきましょう。」

響「……未来う……鈴夢くん大丈夫かなあ」

未来「だ、大丈夫じゃない？ねえ、玲奈さん。」

玲奈「あのバカなら大丈夫でしょ。そこら辺でくたばる人間じゃないもの。」

響「・・・そうだねー・・・（\*・ω・\*）グスン」

・・・にしても。鈴夢くんからの連絡が来ない・・・響が心配してるのに・・・本当に大丈夫なの？

響「そうだ！今から二課に行こう！それがいいよ！決定ね！」

未来「ちよ！宿題は!？」

響「後でやるよ！それなら問題ないでしょ!？」

玲奈「仕方ないわね。まあ、私たちがいれば問題ないでしょ？」

未来「むー・・・今日だけだからね！」

玲奈「そのセリフを何回聞いたか・・・」

響「やったー！未来大好き！」

私たちは手を繋ぎあい。二課へと向かった。・・・ほんと。馬鹿ばつかね。

玲音『・・・帝さん？どうしてそつちに』

帝「玲音か・・・1つ聞きたいことがある。」

二課では皆の監視の元、2人の会話が行なわれていた・・・そして  
帝「お前は・・・扉を見たのか？」



## 第10話 転移・・・そして

帝「お前は・・・扉を見たのか？」

帝のその発言で、二課全体が凍りついた。

その傍らで、緒川さんと朔也さんが音声録画しているが、それに構わず帝は話を続ける

玲音『扉・・・ですか。』

帝「ああ。」

・・・モニター越しで、玲音は少し悩むような顔を見せる。

セレナ『扉？玲音さんや帝さんはそれでこの世界に来たんですか？』

帝「・・・詳しいことはわからない。だけど・・・誰かに連れていかれる前。俺は確かに扉を見た。黄色の扉を・・・」

玲音『俺は黒を見ました。なるほど・・・帝さんも一緒でしたか。』

帝「・・・違う色。」

玲音と帝はそれぞれ色の違う扉を言うが、どうやら意味合い的には一緒のようだ。

弦十郎「色の違う扉・・・何か意味があるのか？」

帝「詳しいことは俺達も知りません。・・・わかったとしても。これは俺達の問題です。」

玲音『・・・そしてその扉は閉じることを知らない・・・多分ですが。他にも仮面ライダーたちが来るかと。』

帝「・・・まじか。」

玲音『多分ですが、他のライダー・・・多分ですよ？一海さんと戦兎さん、後はシュンガさんが来るかと・・・』

帝「来たら来たで厄介事になりそうなメンバーだな。」

・・・扉、その名前はわからないが。彼らには扉の目的がわかるような気がした。

何故自分たちがここに集められたか・・・その理由は明白すぎる。・・・だが。そんな理由で俺たちをこの世界に送り込むか？

玲音『・・・どの道大きな戦いがあることには違いありません。とりあえず・・・そちらに合流した方が都合がいいかなっ・・・て』

帝「・・・頼む。」

玲音『了解。』

その言葉を最後に。向こう側との通信が切れる。

弦十郎「・・・君たちは共に戦ってくれるのだな？」

帝「ええ。喜んで戦いますよ。」

弦十郎「そうか・・・いや、そうしてくれると助かるのでな。確認をとる形ですまない。」

帝「気にしないで下さい。この世界に来たのも・・・何かの縁ですから。こうなることは覚悟してました。」

帝は隣のケースに手を触れると・・・少し懐かしいように話す。

帝「俺達は何かの縁で結ばれてるんです。だからこうして危機の時に訪れるんじゃないか・・・ってね」

鈴夢「・・・あれ？生きてる・・・」

白い景色が目立つ医療室で、鈴夢は静かに目を開けていた。

彼の隣のベッドは、先程まで誰かがいたような跡があり、鈴夢のかけていた布団も少しズレていた。

スカサハ「む。起きたかマスターよ。」

鈴夢「・・・やあ皆。ご機嫌どう？」

医療室は、鈴夢の契約した英霊が彼の目覚めを待つようにして待っていたのだ。

ジャンヌ「マスター！お怪我はありませんか!? ああ、よかった・・・」

鈴夢「怪我はない。死にかけだから」

アルトリア「ふむ。大事でないならいい・・・よかった（ボソツ）」

鈴夢が少し体を起こすと、ジャンヌがそれを保護するように鈴夢のカバーに入る。

鈴夢「むう。1人で起きれるのに。」

マシユ「先輩？死にかけの人間はしっかり介護されてくださいね？」

鈴夢「誰が死にかけ？」

帝「お前だアホ。」

そう言うのと鈴夢の後ろから帝が鈴夢を殴るように叩き上げ、机にコーヒーを置く。

鈴夢「いたああい！」

帝「自業自得だ。ほら。元気なうちに飲んでけ」

鈴夢「・・・はいはい。」

プルトップの蓋を開け、俺はミルクを突っ込むとコーヒーをゆつくりと、少しずつ飲んでいく。

あー・・・コーヒーはミルク派です。

鈴夢「・・・うめえ。生きてる味がする。」

スカサハ「生きてるから……そんな味がするのではないのか？」

鈴夢「違うのだよ。コーヒーは淹れる物で味が変わるんだよなあ」

エルフナイン「死にかけの人間が何を言いますか。早く検査を受けてください。」

と、鈴夢の後ろから怒り顔のエルフナイン。鈴夢は顔を青くしながら後ろを向く。

鈴夢「……あとからじゃ。だめ？」

エルフナイン「アウトです。車椅子に乗ってでもいいので私と了子さんの検査を受けてください。以上ですよ。ちなみに弦十郎さんからは許可をもらってますから。」

鈴夢「まさかの先手を打たれた!?!でも緒川さんは!?!」

エルフナイン「緒川さんはお仕事で不在です」

鈴夢「おーまいぐーねす。」

そう言うのと俺はスカサハさんに担がれて隣の検査室に連れてかれる。

帝「……元気だなあ。あれで元死人なんだろ？」

マシユ「え？死人って話……本気なんですか？」

帝「俺に聞かれても知らないな。やっぱり鈴夢に直接聞く方が早いんじゃない？」

玲音「・・・困った。」

翼「・・・何が困ったと言うのだ。」

帰りの輸送ヘリの中。突然コート姿の玲音が物を言い出した。

何かを探しながら・・・そんな仕草で焦った話し方をしている。

玲音「いやあ・・・ちよつと忘れ物をしましてね。ええ。」

セレナ「忘れ物・・・ですか？取りに行かなくて大丈夫なんですか？」

玲音「重要ちや重要なんだけど・・・なんだろう。なんか思い出せないんだよね・・・」

セレナ「？」

玲音「なんだろう・・・大切な何かを忘れてる気が・・・」

玲音は頭をかきながら答える。とてもあやふやな答え方だ。

マリア「大切なもの・・・ね。」

玲音「・・・」

鈴夢「くびーふすところのふう〜」

了子「あら、気に入ったのかしら？」

鈴夢「もちのろん。おいしいですね。これ。」

二課の医療室。鈴夢は奏の作り置きのパーフストロガノフを食べていた。

了子「隠し味は何かしら〜？」

鈴夢「愛なんじゃね？家族的なさ。」

了子「もう。鈴夢くんはそういうことをさらつと言つちやうから響ちゃんたちに鈍感って言われるのよ？」

鈴夢「関係あるんだ。」

鈴夢は自覚してたかのように答える。了子はデスクワークをしながらクスクスと微笑んでいるようにも笑つてるようにも見える。

鈴夢「そう言えば響たちは学校ですか？」

了子「そうね〜？鈴夢くんは学校に行かないのかしら。」

鈴夢「義務教育終えれば自由ですから。そこまで自由を奪われたくないので」

ほら。僕はフリーダムですから。自由に動きたいし。

そんなことをこころで思いながら。鈴夢はパーフストロガノフをぱくぱく口に運んでいく。

鈴夢「うん。愛情の味って素晴らしい。」

響「鈴夢くん食べてくれるかなあ〜？未来〜」

未来「食べてくれるよ！起きてたら・・・」

同時刻。リディアンでは調理室で響たちのクラスによる調理実習的な授業が行われていた。

詩織「鈴夢さんは二課に籠ってるんですよね？」

未来「あー・・・そうかもしれないね・・・」

弓美「男の子なのに引きこもりなんて・・・らしくないわね。」

弓美の正論に響たちは笑うしかなかった。

鈴夢はぶつちやけ言ってしまったえば運動が得意な方ではない。好きかと言われれば普通。と答えてしまう程なのだ。

響「確かに・・・この前なんかマリアさんとテニスしてただけで倒れたもんね・・・」  
未来「そんなこともあったね。」

思い返せば鈴夢が帰ってきた直後。マリアさんとクリス。そして響と未来でテニスをしに行った時である。



鈴夢『テニス？やだ。しんどいじゃんか。』

クリス『はいはい。お姉ちゃんが遊ぶって言うからなー一緒に行こうなー鈴夢ー』

鈴夢『あー・・・助けてくれ。チルカ。』

チルカ『にや（頑張れ）』

―車で数分後―

鈴夢『・・・バリバリのテニスコートとバスケットコートやんけ。戦争でもしたいのかな？』

車で連行された先には、広く、大きなグラウンドがあり、さらには色んな球技によってコートが分かれていた。

響『向こうにはゴルフもあるねえ。どれから行こうか！』

鈴夢『ウンドウキライ。やりたくない。』

マリア『ふふん。鈴夢！私と勝負しないかしら!?!』

鈴夢『コトワル。』

鈴夢はそっぽ向くと、コートの砂をいじって遊び出す。・・・少し前の子供みたいだ。

注！（どのコートも砂やら備品は勝手にいじったりしたらダメだぞ！作者との約束な

！)

クリス『ふふん！鈴夢！ちゃんと人質はあるからな！』

鈴夢『ふえ？』

そう言いクリスが取り出したのは――

鈴夢『・・・あ。』

鈴夢の女装が写つてる写真だった。

創世「それで？その写真は取り返せたの？」

創世がそう聞くと、響、未来の両名は苦笑いをして答える

響「いや、結果は鈴夢くんの惨敗だね。結果的にはマリアさんとクリスちゃんの宝物になつちやつたんだよね・・・」

未来「さらには翼さんや奏さんまでに広めちゃうから・・・あの後も鈴夢くんは動きっぱなしなんだよ」

弓美「・・・それって運動できるとか出来ないのレベルじゃないわよね。」

詩織「はいはい。授業もラストパートですよ！みんなで美味しいの食べましょう

「？」

玲音「帰った。帰ったあ……日本だ……シャバだあ……空気だア……うえつ。」  
セレナ「……乗り物酔い……よくそんなのでバイクには乗れますね。」

空港では。玲音、翼、セレナ、マリアの4名が帰還を果たしていた。

中でも玲音は重度の乗り物酔いのスキルを持つており。かなり疲労している。

翼「……それよりもだ。そろそろ迎えが……」

そう言うと、バツチリのタイミングで黒い車が現れる。それに乗っているのは、奏と帝の2名だった。

帝「よう玲音。お久しぶりだな。」

玲音「ええ。……少しヒゲが生えてませんか？帝さん？」

帝「まじ？え？え？」

翼「……奏。ありがとう」

奏「気にすんなつての！おっさんはなかなか二課から動けないからさ！な！」

緒川「それでは皆さん。車にお乗り下さい。」

帝、玲音、翼は奏の車へ、マリア、セレナは緒川さんの車へと搭乗する。

帝「・・・何も無ければいいけどな、」

玲音「・・・それで帝さん。扉の話ですが」

帝「そうだな・・・おい。奏さん？録音しなくてもいいのかい？」

二課のあの二人とは違い。奏さんは一切録音とかの行動を見せようとはしない。それどころか話を聞こうとしてもしてない。

奏「あ？扉とかあたし達には関係ないからな。お前らで解決できるならそれでいいんじゃないのか？なあ、翼。」

翼「え？ああ、そうだな。己の撒いた種は己で摘み取るが一番だ。」

そう言うと、緒川さんの車に遅れて奏の車が走り出す。

玲音「・・・さんきゅー。」

彼の放った声は届いたかはわからないが、その車の中が、暖かい空気になったのは間違いない・・・

## 第11話 少年は聖装を纏う

鈴夢「・・・俺のやることは間違ってるのかなあ。」

そう言いながら。鈴夢は静かにトイに語りかける。・・・なかなかシユールな絵面である。

鈴夢「響たちを守る。だから力を得る・・・そんなことはわかってるさ・・・でも。」  
彼は拳を握りしめると、隣の壁にぶつける。

鈴夢「・・・力はただ力だ。そんなもの・・・俺には必要ない・・・って」  
トイ『・・・』

彼の目の前のベルトはただ沈黙を貫く。

彼の髪は、色が少し変わっていた。

半分がクリスと同じ銀色なのだが・・・残りの半分は赤色に染まっている。

鈴夢「・・・どうすれば。」

その時だった。二課全体に突然緊急を知らせるアラームが鳴り出したのだ。

隣のモニターに映し出された文字を見て、彼は走り出す・・・その文字は・・・

↑アルカ・ノイズ↓

時間は遡り、響たちが学校を終える時間に戻る。

響「・・・何？なんなの？」

詩織「なんなのですか・・・貴方は」

彼女たちの帰り道には：：待っていたかのように、オートスコアラーの1人、ガリイが立っていた

ガリイ「もう、遅いじゃないの、ガリイちゃん退屈だったんだから」

弓美「誰かわかんないけど・・・そこを退いてくれない!?!邪魔なんだけど・・・」

響「・・・こいつ。まさか鈴夢くんたちをやった・・・」

その時。ガリイの手から赤い粒が放たれる。

赤い粒のような物が地面に落ちると、落ちた場所からノイズが出現する。

響「ーっ！ノイズ！」

創世「ちよつと！数が多くない!?!」

ノイズはそのまま彼女たちを襲わず。静かにガリイの命令を待つかのように立っている。

詩織「私達は関係ないでしょう!? だから通してくれませんか!」

ガリイ「へえ・・・でも面倒だから一層しちゃうね!」

その時だった。ガリイの後ろから閃光が煌めくと、無数の弾丸がノイズと彼女に向けて放たれる

響「―っ! 皆伏せて!」

響の声とともに、みんなは身を低くし、弾丸を回避する。

ガリイ「あー・・・やっぱり来たか。融合体。」

ガリイが睨む先には、バイクに乗り、疾走する、仮面ライダービート、フレイムスタイルver2と、ランサーのサーヴァント、スカサハの姿があつた。

スカサハ「主よ! 例のヤツだ!」

鈴夢「わかつてる! ここで逃がす訳には行かない!」

鈴夢はバイクから飛翔すると、上から無数の弾丸を回転しながら放つ。

鈴夢「ヘレイン・バレット!」

上から降る弾丸は、確実にガリイを捉えるが、彼女は頭上に氷の盾を展開する。

鈴夢「―っ! ならこれでっ!」

さらに鈴夢は背中からバンカーを取り出すと、そのまま氷の盾へとぶつけ・・・そして

鈴夢「ぶち抜けーバンカー！」

気力を込めた一撃を、そのままお見舞し、彼は響たちの前に着地する。

彼から流れでる曲は〈TRUST HEART〉。GXにおけるクリスの歌だ。

鈴夢「響！みんなも大丈夫か!？」

響「鈴夢くん！どうしてここに!？」

鈴夢「みんなが心配だから来たんだよ！スカサハ！」

彼が声を上げると、彼の隣に黒い服を纏ったスカサハが現れる

スカサハ「ふむ。この者達を守ればいいのだな。心得た」

鈴夢「頼む。．．．さあ、やらせてもらおうぞ！」

鈴夢はそう言うと、その手のガトリングをガリイのいた位置に向けて弾丸を放つ。ガ

トリングの横から殻が落ちていく

スカサハは響たちを守るようにして立つ。

スカサハ「ふむ。大丈夫か？」

響「大丈夫ですけど！あの．．．」

スカサハ「戦えないのなら引くといい。主の邪魔だからな」

響「．．．！」

その時。響は歌おうとしたが．．．口を開けずに閉じてしまう。



響「……歌えない……どうして？今が必要な時に……」  
未来「響！逃げなきゃ！ほら！」

結果、響は未来につられて、皆の後を追う。

ガリイ「……あらあ、ガリイちゃんの獲物が逃げちゃうじゃない……しかもあいつ……歌えないのか？」

鈴夢「——っ！なんで当たってないんだ！」

ガリイ「油断するなっつか!?馬鹿じゃねえの!?お前！」

鈴夢「っ！」

鈴夢は急いで、距離を取ろうとしたが、彼女は速攻で氷の矢を放つ

スカサハ「むっ！避ける！」

鈴夢「くそっ！」

鈴夢は半分はガトリングで撃ち落とすものの、残りの半分が処理できず、そのまま身体を空中へと持ち上げる。

と、空中で無防備になった鈴夢に、ガリイが氷の刃を腕に宿しながら突きつける

ガリイ「頭冷やしや〜！」

鈴夢「舐めんなあっ！」

咄嗟の判断でガトリングを盾にし、鈴夢はガリイの攻撃を防ぐ。

ガリイ「……へえくなかなかやるのね。」

鈴夢「……あと少し、あと少しなんだ……っ！」

冷静に言葉を紡ぐガリイに対し、鈴夢は少し荒い感じに言葉を放つ。

スカサハは残ったノイズを処理しながら、鈴夢の方を見る

スカサハ「……主が危険なら……宝具を使うしか……」

スカサハがそう考える内に、鈴夢はさらに引き金を引き、ガリイへと弾丸をぶち込む。ただ、ガリイはそれを全て氷で防ぐ。

スカサハ「あの防壁を破れなければ……主は……っ！」

その時、空から身に覚えのない、斬撃がガリイに降り注ぐ。

鈴夢「なんだ!？」

スカサハ「むっ!この気配……この力は!」

2人が距離取ると、その間に人影が落ちる。

???「ここにいましたか!鈴夢様!」

鈴夢「ふえ!?!お、俺かい。」

そこに居たのは白銀の鎧を携える好青年で、俺を見つけるや否や駆け寄って膝を着く。忠誠のポーズかな?

ガウエイン「失礼しました。私の名はガウエイン。セイバーのサーヴァントです。」

鈴夢「英霊!?なんで俺の事を！」

ガウエイン「・・・それはアルキメデスの言葉です。」

鈴夢「アルキメデス・・・」

なんだろう。少し聞いたことあるような・・・

ガリイ「無視すんな！」

その隙を狙っていたかのように、ガリイがガウエインの後ろから、ガリイが切りつけるように刃を振り下ろすが・・・

ガウエインはそれを予想してたかのように持っていた大剣で受け止める

鈴夢「・・・マジかよ」

ガウエイン「お話はあとの方がよろしいかもですね。ともかく。ここから離れるのを推奨します」

鈴夢「・・・ダメだ。ここで迎撃する。」

そう言うのとガウエインはガリイを吹き飛ばし、鈴夢に背を向ける

ガウエイン「分かりました。ならば太陽の力！お見せ致しますよう！」

スカサハ「太陽の戦士か！しかし薔薇の騎士の戦士である貴様が何故！」

鈴夢「話はあと！行くぞ！」

そう言うのと3人は、それぞれ剣をガリイ目掛け振るう

ガリイ「少しは楽しませてくれるわね！」

鈴夢「ガウエイン！俺が足を止める！」

そう言う俺は彼女の脚を目がけて、ガトリングを放つ

無数の弾丸は、彼女の脚を取り囲むように着弾する。

その直後、ガウエインがガリイに突撃し、その大きな大剣を振るう

ガウエイン「せいっ！」

ガウエインの放った大剣は、ガリイの体に吸い込まれ、半分に切り裂くかと思われた……が。

ガリイ「甘いなあゝ！」

ガウエイン「っ！氷が！」

彼女は胴体にも氷の壁を貼り、真つ二つは防いだらしい……しかし、ガウエインの大剣に吹き飛ばされたダメージはあるはず。

ガリイ「もう私の相手がなくてガリイちゃんつまんない。」

ガウエイン「どうやら口だけではないようですね。実力もあります。」

鈴夢「……やっかいなやつ。」

しかし。このセリフを言おうが倒せないのは事実なので、鈴夢は黙る。

ガリイ「まあ、楽しめたからいいや。ばいばい！」

ガリイはそう言うのと、足下にテレポートジェムを展開して消えていくスカサハ「・・・逃がしたか。」

鈴夢「・・・まあいいんじゃない？とりあえずは平和よ平和。」

そう言うとその場に黒い車が2台滑り込むように走ってくる。

翼「霧夜！無事か!?!」

マリア「鈴夢！無事なの!?!」

まず、この2人がほぼ同時に鈴夢に駆け寄り

奏「鈴夢！無事か!?!」

セレナ「大丈夫なの!?!」

2人が降りてきて

帝「待って・・・なんで俺を・・・踏み台に・・・」

緒川「帝さん！大丈夫ですか！」

ああ、まあそうなるよな。

玲音「・・・止まるんじゃないやねえぞ・・・俺はその先にいるからよ・・・止まるんじゃないやねえぞ・・・」

鈴夢「!?だんちよ!?何やってるんだよ!だんちよ!」

帝「キボウノハナー」

ラストには玲音と帝が下敷きみたいにするすると降りてくるハメに鈴夢は急いで駆け寄り、心肺蘇生を行う

玲音「……この世界でも厄介だな。あの人たちは」

鈴夢「あはははは……よく言われます。」

2人が蘇生したところで、鈴夢は状況を説明した。

ガウエイン「よろしくお願いします。セイバーのサーヴァント。ガウエインと申しませう。」

玲音「へえ……」

帝「……」

2人の反応は薄め。

そうこう言っていると、反対側に逃げたはずの響たちが戻ってくる

響「鈴夢くん!? 無事なの!」

鈴夢「ああ……ギリギリ生きてるよ。」

鈴夢は右手を抑えながら苦しげに答える。……それを見ていた奏は突然鈴夢を担ぎあげる。

鈴夢「奏さんんっ!? やめて!? 肉フックには吊るさないで! お願いします何でもしますから! ……なんでもするとは言っていない。」

奏「はいはい。けが人はさっさと診断してもらえーそいでさっさとベッドで寝ろー」

鈴夢「やだあああ！食べられるうう！翼さん！マリアさんっ！ヘルプうううっ！」

そう言ってる間に、鈴夢は車に連れていかれ、連行される。

残されたみんなは・・・

緒川「とりあえず翼さん、マリアさん、セレナさんは送ります。玲音さん、帝さんは

この子達の護衛を任せてもいいでしょうか？」

帝「大丈夫ですよ。なあ玲音」

玲音「そうですね。それでお願ひします。」

そう言うのと緒川さんたちを乗せた車も走り出す、残された帝たちは・・・

玲音「というわけで鈴夢の知り合いです。よろしく」

帝「同じく鈴夢の知り合いです。よろしく。」

響「・・・は、はい・・・」

そう言い。護衛（お供）する形で下校を再開した・・・

鈴夢「・・・体は大丈夫なんですか？」

二課の医療室では。鈴夢の身体検査が再度行われていた……結果は

了子「うくん。腕の侵食以外は特にないわね。ノイズのやられとかはないし。まあ、簡単に言えば命に別状はないわよ？」

鈴夢「そりゃあ、あつたら困るでしょうよ。」

了子「というわけで鈴夢くんはしばらく待機ね？何かあつたら困るから……」

鈴夢「はいはい。大人しく寝てますよ。」

そう言いながらも、しっかりと白衣に着替える鈴夢。

その時に見える赤い、筋肉が剥き出しになったような腕に……櫻井 了子が口を挟む余裕はなかった。



## 第12話 平和1からの悲愴

クリス「……これは……鈴夢の日記？」

鈴夢が了子さんの検査を受けると同時刻。クリスとマリアの所持する日記に変化があった。

マリア「……わからないわね。ただ、子供の書くものでは無いわよ。」

クリス「でもこれは鈴夢の日記だ。私にはわかる。同じものを……私は持つてる。」

マリア「本当なの？じゃあ……この日記は誰が書いたの？」

目の前の日記には名前が無く。しかも古い厚紙で肌触りが悪い。

その日記をめくると、そこには少し子供っぽい文字が書かれていた

??? 『俺は誰なんだ……』

鈴夢「……ビート。俺の腕はいつまで持ちそう？」

二課。休憩室では。鈴夢が1人、赤い腕を見ながらビートに問いかけていた。

ビート「……しらん。少なくとも長くはないだろう。」

鈴夢「……そうか。」

鈴夢の右腕は。命があるかのように、脈を打つ。……意識が持つてかれるのも時間の問題だ……

鈴夢は少し、考えると片目に涙を浮かべる

鈴夢「……なあ。俺の意識が消えたら……姉さんたちは俺の事を殺すのか？」

ビート「……」

鈴夢「わかんないんだ。最近。多分このまま行けば……姉さんたちのことも。帝さん達のこととも忘れてしまう……」

そう言うと、鈴夢は机に頭をぶつける。

鈴夢「なあ……俺は……人間なんだろ？」

クリス「……これが鈴夢……なのか？」

クリスたちは、日記の内容を一通り見終えると、驚愕し、悩む。

マリア「……これを書いたのは鈴夢なのかしら」

クリス「内容は全然違うぞ。こんな……自分を人じゃない言い方を鈴夢はしないかな。」

マリア「……人間を否定してる……」

そう言うのと2人は日記を元に戻し、鈴夢を探そうとする

マリア「……ねえクリス？あの日記が本当なら……鈴夢は人を止めるってことなのね？」

クリス「……鈴夢は……そんな奴じゃ……」

マリア「とりあえずみんなにも注意するように言っておくわね？あとは鈴夢に日記の事を聞かないと……」

2人はそう言うのと、長い廊下を歩き出す。

その時、黒い猫が彼女たちの後ろを横切る。

チルカ「……鈴夢は……ひとをやめかけにやのか……だつてさ。フォルト。フォルト……」

その猫の隣にいるのは黒い鴉。その名はフォルトと言う。彼はドールムである。

彼の役目は鈴夢の監視。ただそれだけである。

フォルト「まあ。気軽でいいんじゃないの？どうせただの日記なんだから。」

チルカ「そうだにや……一緒に魚食ベに行くにやー！」

フォルト「とりあえず奏さんにせびりに行こう。」

そう言い、猫は鴉を背中に乗せ、走り出す。

奏「ん？魚か？ほれほれ」

チルカ「ふにや！ふっ！にやあー！」

フォルト「もぐもぐ。」

玲音「・・・ライダー・・・キック！」

『R i d e r   K i c k 』

カブトの素早い蹴りが、その部屋に音となって響く。発生した場所では、煙が起こつている。

そこから飛び出るのは2人の戦士。仮面ライダーカブトと鈴夢のサーヴァント。セイバー、アルトリア・ペンドラゴンだ。

アルトリアの礼装は騎士のものに近づいており、姫騎士を思わせる。

玲音「なるほど！流石は最強のセイバークラスだ！力が違うぜ！」

アルトリア「ふっ！早い・・・強い！いいぞ！もつと私とやるぞ！さあ！さあ！」

そう言うと2人は建物の壁を蹴り、再び拳と剣を撃ち合う帝「あー・・・ダメだ。目で追えねえわ。」

ガウエイン「ずいぶん余裕なんですわ。なら私から行かせていただきます！」  
下でも。仮面ライダーオーガと、ガウエインが大きな大剣を撃ち合っていた。

あおい「凄い・・・2人共鈴夢くんに劣らない力だわ。」

その傍ら。訓練室の外ではあおいさんが密かに2人の仮面ライダーのデータを収集していた。

2人の数値は鈴夢以上。もしくは鈴夢とほぼ同じぐらいなのだ。これなら。彼らに勝てるかもしれない・・・

弦十郎「しかし。こちらの戦力は前より低下している・・・エルフナインちゃんは  
どう思う。」

エルフナイン「・・・彼らは味方ですし・・・ですか・・・キャロルに勝てるとは思って  
ません。」

弦十郎「それは今のままでは・・・ということかな？」

エルフナイン「はい。なので是非。プロジェクトイグナイトを受け入れて欲しいんです。  
」

エルフナインの目には曇りも、騙すようなものでもないが・・・正直このプロジェクト

トは彼女に任せることになってしまふ。

つまり、修理の全てをエルフナインに任せることになってしまふ。．．．それは時間がかかるといふマイナスがあるのだ。

弦十郎「俺は否定しない。だが．．．」

エルフナイン「翼さんクリスマスさんには許可をもらってます。」

弦十郎「ならその2人を中心に強化を頼む。．．．鈴夢くんのは？」

エルフナイン「イグナイトメモリですね。試作は完成してますが．．．トイを使つての実験は．．．まだ．．．」

弦十郎「そうか。なら鈴夢くんには俺から話しておく。それでいいだろう？」

そう言うときOTONAは先に訓練室のモニター室から出ていく

エルフナイン「．．．鈴夢さん。皆さん．．．お願いします．．．」

エルフナインは目の前をモニターを見ながら．．．そう祈つた．．．

鈴夢「動きたい。動きたい。」

ジャンヌ「ダメですよマスター。ちゃんと身体を労わってください。」

鈴夢「俺は社畜です。困る。」

美月「仮面ライダーは社畜じゃないわよ。」

と、ジャンヌと鈴夢が仲良く話していた所に、仮面ライダーノイズ、美月さんが現れる。

鈴夢「美月さん……」

美月「鈴夢は次の出撃には参加しないわ。それだけ伝えに来たの」

鈴夢「出撃がない!？」

美月「そうよ。次は私とセレナで出るわ。」

鈴夢「無茶な！俺だってまだっ……！」

鈴夢がその場に立つと、彼の身体は壁に打ち付けられる。

ジャンヌ「マスター!？」

そのまま倒れる鈴夢を見て、ジャンヌが直ぐにカバーに入る。

鈴夢「あ……あれ？」

美月「……身体が完全に回復してないのよ。やっぱり貯めすぎてたのね。」

鈴夢「違うっ……これは……」

美月「無駄よ。エルちゃんは分かっていたらしいから。司令にも許可を取ってあるから。勝手に動かないようにね。」

鈴夢「っ！」

美月は冷たく言い放つと、部屋から出て行つてく。

鈴夢「・・・くそっ。」

ジャンヌ「・・・」

静かに悲しむ鈴夢に、ジャンヌは声をかけられなかった・・・

セレナ「鈴夢には言ったのね。」

美月「うん。一応ね・・・」

切歌「鈴夢さんが辛そうデス・・・」

調「・・・それよりもなんで鈴夢さんは待機なんですか？」

美月「他に駒がいるからでしょ？双龍 玲音と、天地 帝の2人が。」

切歌「駒って言い方は酷いデス・・・」

美月「でも実際その通りなのよ。鈴夢のサーヴァントは鈴夢の指示がないと動かないし・・・だったらなんか事情のあるアイツらに手伝って貰った方がいいのよ。」

セレナ「・・・そうだけど。鈴夢は大丈夫なの？」

美月「ツンデレの癖に心配するの？情けないわね」



セレナ「んな!？」

ガタンと机を叩くセレナを切歌と調は必死に抑える。美月はわかっていたかのよう  
に紅茶を飲む。

美月「心配なら見に行けばいいじゃない。私は行ったからいいわ」

そう言うのと美月は二課司令室方面へと向かう。

セレナ「……鈴夢の顔をまともに見れたら苦労しないわよ。」

切歌「……なら調! 私たちが行くデス!」

調「そうだね!」

2人は手を繋いで鈴夢の部屋に行く。

セレナ「ちょ!?! わかったわよ! 私も行くから!」

玲音「ふい〜」

アルトリア「流石は主と共に肩を並べた者です……お強いようで。」

帝「最強のセイバーさんに言われたらなんかなあ……」

玲音「まずセイバークラス2人に激戦繰り広げただけでも充分ですよ。」

た  
4人が訓練室を出ると、出た先で緒川さんが紅茶とお菓子を用意して待っていて

緒川「お疲れ様です。お茶を飲みますか？」

帝「俺は頂きますよ。みんなは？」

アルトリア「私は少し汗を流してきます」

玲音「・・・俺は頂きますよ。」

ガウエイン「ふむ・・・ならば私も一緒にしましょう。」

そして帝がお菓子に手を伸ばすと・・・

鈴夢「美味いなあ。」

帝「おい。俺のお菓子・・・」

鈴夢「お菓子は柿ピーが好きなんだけど。帝さんは何が好きです？」

帝「・・・覚悟は出来てるか？」

鈴夢「許してヒヤシンス。」

次の瞬間。帝は鈴夢の首元を思いつきり掴むと、そのまま訓練室の壁に叩きつける。

アルトリア「マスター！」

鈴夢「ぎやああああ！帝さん！やめでええ！」

帝「速く逝けよ！おらおら！」

玲音「……ガウエインさん。止めてやってください。鈴夢が死んじやいますよ。」  
ガウエイン「仕方ありませんね。」

そう言うのと太陽のような騎士は鈴夢たちの元へと歩き出した……

鈴夢「あーっ……痛えなあ、帝さんは」

トイ「今に始まったことじゃねえだろ？ だったら大丈夫だ。」

ガンガンやられてガウエインに救出されたあと。俺は外でぶらついていた。

理由は特にないのと。……半分は理由だが。

鈴夢「……ここに来るのも久しぶりだなあ。」

そう言い、鈴夢が来たのは墓地。そこには多くの人達の墓がある。

鈴夢「用事を済ませるか……早めにな」

そう言い、バイクから花を出し、ある場所へと向かう……

鈴夢「……」

墓に1つずつ。鈴夢は花を添えていく。

鈴夢「俺が守れなかった人達……今でも俺を恨んでるのかな？ ははっ……」

トイ「……なあ。」

鈴夢「……わかつてるさ。でも……仕方ないんじや駄目なんだ。力が……力が  
あるなら。俺は戦わなきゃ……俺にはそのための力があるんだから。」

そう言い、鈴夢は外へ出ようとするが……

???「死者への弔いは済んだか？」

鈴夢「——っ！」

出口にいたのは人形の1人。この前戦ったコイン持ちだ。

レイア「……悪いがここは通さないぞ。」

鈴夢「ちっ。だけどここは通させて貰うぞ。」

レイア「ふん。」

鈴夢は速攻で変身する構えをとるが……突然。彼の身体が後ろへと吹き飛ばされる

鈴夢「何!？」

???「なんだ、逃げたの力!？」

鈴夢「!？」

そこには腕に大きな爪のような……化け物のような人形の少女がいた。

???「お前を食べてやるゾ！」

鈴夢「やってみろ！逆に返り討ちにしてやるよ！」

## 第13話 時と科学の登場、迫り来る黄金

突然だが―場所は変わり異世界―

そこでは1人の青年が歩いてた。

その青年は大きめのコートを羽織っており、腰にはベルトが巻かれていた

??? 「・・・早めに双龍と合流しないと。キャロルは敵ではないんだ。」

そう言い、大地を歩く彼の顔には、誰でもわかるような動揺が表情に出ていた。

??? 「にしても。ここには始めてくるな。どこなんだ？」

そう言い、彼が辺りを見回すと、そこにレールが作られる

その次の瞬間。コートの青年の前を大きな電車が通過し、そこから2人の青年がはじき出される

戦兎「どわっ！」

シユンガ「があっ!？」

2人はそれぞれ、ベルトと共に放り出され、フラフラと地面に叩きつけられた身体を起こす。

戦兎「いてて・・・あの英霊ってやつ。容赦ないな」

シユンガ「しょうがないですよ。とりあえず鈴夢と合流しなきゃ・・・取り返しのつかないことになるかもしれないんですよ！」

戦兎「わかってる。とりあえずここが何処か調べないとな。」

そう言うと、彼らと青年の目が合う。

戦兎「・・・」

シユンガ「すいません。こちら辺が何処かってわかり・・・」

戦兎「下がってろ。」

シユンガがコートの青年に話しかけようとした時、戦兎は何かを察したのか、シユンガの前に出て少し構える

戦兎「お前は・・・誰だ？ここのやつじゃない・・・よな？」

???「俺も質問したい。ここはどこなんだ？そして君たちは誰なんだ？」

シユンガ「質問は1つずつ応えよう。もちろん。こっちの質問にも答えてもらおうぞ？」

???「そうか・・・」

そう言うとお互いにベルトを構える

コートの青年はカブトムシ絵のスピードのエースを。

シユンガはベルトとパスを構え、戦兎はボトルを振り、ベルトへと差し込む。

??? 「・・・変身」

『ターンアップ』

その声の後、青年からカブトムシのゲートが現れ、それを通ると、身に覚えのある戦士へと変身する。

シユンガ 「つ！変身！」

『ストライクフォーム』

シユンガは銃剣を構えた戦士に変身し

『Are you ready?』

戦兎 「変身！」

『鋼のムーンサルト！ラビットタンク！』

戦兎は赤青の戦士へと変身する。

??? 「ウエエエエイ！」

戦兎 「仮面ライダー・・・ブレイド！」

戦兎の放つ拳の一撃を弾くと、確実に胴に剣を当てていく。

シユンガ 「戦兎さん！下がって！」

カバーでシユンガが入るが、ブレイドの空中蹴りに吹き飛ばされる。

??? 「その程度か！」

さらにブレイドはラウズアブソーバーに2枚のカードを通す。

『アブソーブクイーン』

『フュージョンジャック』

鷲のシンボルがブレイドへと吸い込まれると、ブレイドの姿が一気に変わる。剣の先が伸び、さらには背中に大きな翼が生える。

戦兔「くっつ!」

シュンガ「空も来る! 戦兔さん!」

??? 「これで終わらせる!」

そう言い、ブレイドは空を飛ぼうとするが・・・先に戦兔が後ろへ走っていく

??? 「何!」

戦兔「ちよっと待ってろ!」

ブレイドはあとを追おうとするが、後ろからシュンガに押さえつけられ、阻まれる

??? 「離せっ!」

シュンガ「戦兔さん! 今だ!」

戦兔「行くぞっ!」

大きく大地を踏み、そのまま空へと駆け上がると、レールみたいなものが2人の動きを止める



『Ready GO!ボルテックファイニッシュ!』

そのままライダーキックをブレイドに当てると、それを押さえつけていたシユンガも吹き飛ぶ

シユンガ「ぐあつ!」

戦兎「シユンガ!大丈夫か!」

シユンガ「も、もう少し威力を考えて下さいよ・・・」

戦兎「スマンな。立てるか?」

シユンガ「よいしょ。」

軽いやり取りの後、シユンガと戦兎は立つ。そしてブレイドの倒れているであろう方向を見ると・・・

「ダメだなあ・・・闘いは」

そこには、別の仮面ライダーがいた。・・・名前は・・・確か。

戦兎「仮面ライダー・・・レイ」

カルマ「いやあ。バレてたバレてた。流石は仮面ライダー。そして一度はこちらの危機を救ってくれた人達だ。」

シユンガ「お前は・・・」

レイが変身を解くと、そこからはひよろひよろした、少年が現れる。

カルマ「さて……お喧嘩はここまでですよ？仮面ライダーブレイド……劍崎一真さん？」

一真「……」

そう言うと、ブレイドは変身を解く。そこからは身に覚えのある顔があった。

シユンガ「本物じゃないか。……意外だ」

戦兎「ここでレジエンドの登場か。……にしてもなんでここに？」

一真「……恩返しだ。」

そう言うのと照れ隠しと言わんばかりに顔を隠す、どうやら玲音の方らしい。

4人が落ち着いた所で、カルマと言う鈴夢のところの天使？から説明がある。

戦兎「……英霊との戦争？魔法少女異変？」

カルマ「そう。劍崎様は体験したことあるかと思いますが……魔法少女異変と英霊と呼ばれる伝説との戦争が同時に起こってるのです。……そのため。私がこちらの世界のあらゆる所に散らばっている仮面ライダーを集めています。」

シユンガ「……扉はお前らの仕業じゃないのか？」

カルマ「……扉……なんの事か存じませんが、私は鈴夢様のために動いてるので。我々が不利になるような事はしませんよ？」

一真「……玲音はそっちにいるのか？」

カルマ「やはり心配ですか？大丈夫ですよ。玲音様も生きてらっしゃいます」  
一真「そうか。」

カルマ「何か用でも？」

カルマがどう言おうが、やはり剣崎は顔を隠してしまおう。

全く……嘘が下手な人だ。

戦兎「それで？俺たちをどうする気だ？」

カルマ「決まっていますよ。鈴夢様のところへ送りますが……もう一人。この世界に迷い込んだ人が今してね、そちらの救出にも行きたいですね」

俺達が首を傾げていると、カルマはある映像を水晶で見せてくれる。そこには仮面ライダーグリスが一人で影と戦っていた。

一海『ここはどこなんだ！そしてなんなんだ！この影は！ええ？』

戦兎「あれは……一海か！」

シュンガ「ほんとだ！なんでそんな所に！」

仮面ライダーグリス、イクサこと、紅一海。かつて鈴夢、シュンガ、戦兎、玲音は共に戦ったメンバーだった。

さらにグリスの戦ってる相手を見る……あれは

一真「……オートスコアラ。キャロルたちか。」

カルマ「流石。既にこの物語を体験してる奴は違うなあ……まあ、いても足でまといなんだがなあ。」

一真「どういふことだ。」

カルマ「結果は結果つてこと。君たちがいても運命は変えれないってこと。」

その言葉に、戦兎とシュンガが反応する。剣崎も、少し怒った表情で、カルマを睨む。シュンガ「鈴夢の運命は変えられる。俺達はそうしてきたからな。負ける運命も、いなくなる運命すらも。そして……戦兎さんや俺の異変も解決してくれた鈴夢に俺はまだ、恩返しが出来てないからな。」

カルマ「確かに、時野 シュンガ様はこつちの世界に来てないな」

シュンガ「だからだよ。今度は俺が鈴夢の手助けをしてやる番だ。本当ならアイツも連れてきたかったが……そこはどういふ言つてもしょうがないからな。」

カルマ「……なるほど？」

カルマはそう言うのと、その隣に髪の毛の長い。美しい女性が現れる。

ヴィバーチェ「カルマ。紅 一海の場所への座標特定は済みました。あとは移動するだけですよ。」

カルマ「もう？ 早いな」

隣のヤツも、会話からして天使だと戦兎、シュンガ、一真の3名は察する。そしてカ

ルマは空間を開く。

戦兎「天使はそんなことも出来るのか？」

カルマ「出来るのは上位の天使だけだ。鈴夢様の守護騎士も出来るし、あとは鈴夢様  
自信も出来るはず。」

シユンガ「はず？」

カルマ「ビートが前に出れば出来るんだがなあ・・・あいつは恥ずかしがり屋だから  
な。」

一真「・・・よく分からんが・・・とりあえず、霧夜 鈴夢とは誰だ？」

・・・戦兎とシユンガは説明する。

一真「・・・なるほど。二重人格みたいな少年なのか。」

シユンガ「そしてその二重人格の片割れがビートって言うらしい。」

一真「まるで俺だな」

戦兎「・・・まさかお前は」

戦兎が察したように質問すると、一真は静かに頷き、JOKERのカードを手を持つ。

一真「そうだ。俺はジョーカーだ。」

戦兎「・・・っ。」

そう言い一真はカードをしまう。

一真「大丈夫だ。何も無い限りは俺はお前達の的に回るつもりは無い。」  
シユンガ「……ならいいけど。」

一真「……」

そう言うと、俺達はカルマの方へと視線を向ける。そこには2人の天使が道を開けて待っていた

俺達はそれぞれ道の前に立つ。

カルマ「さて。今私たちに出来ることは彼の救出ですね。鈴夢様との合流は、あとです。」

戦兎「一海を救出して、さらにはこの世界の脅威を知るってか？」

シユンガ「そして鈴夢の身に何が起きてるのかも調べないとですね。……やること多くて涙でそう。」

一真「グズグズ言ってる暇はない。俺達は進まなきゃ行けないんだ……みんなを、戦えない人達のために。俺達が行くしか……」

そう言うと、一真は先に入っていく。

その次にシユンガが入っていく。その次にヴィバーチエが。そして……

戦兎「カルマとやら。俺達が戻ってくる頃に全て終わってるって可能性はないのか？

鈴夢と玲音。そして帝なら終わらせそうだが……」

カルマ「それはないな。恐らくだが：鈴夢様はまもなく人としての原型を失う。……だから……あなた達の力を借りたいのです。」

戦兎「……なるほどね。」

そう言うと、カルマは戦兎の背中を軽く叩く

戦兎「なんだよ。」

カルマ「あなた達なら。恐らく鈴夢様の暴走も、この世界のことと止めれます。……

だから……」

戦兎「どうでもいいけど。俺達は遊びに来たんじゃねえからな。」

カルマ「……肝に銘じておきます。」

それを最後に、彼らは天使の道をくぐった。

玲音「俺達も戦っているんです？」

二課では、弦十郎から玲音と帝に向けて説明が行われていた。内容は2人の戦闘制限の解除。……つまり、自由行動権である。

玲音「……」

弦十郎「このままでは響くん、切歌くんと調くんの3名で戦うことになる・・・あとはセレナくんか。彼女たちはできるだけ戦わせたくないし、さらにはイグナイトの件で改良がくるからな。」

玲音「わかりました。いいですよ？帝さん。」

帝「・・・いいですよ。」

そう言うと、玲音と帝は司令室を出る。

玲音「戦兔さんやシユンガさんは無事だろうか・・・」

帝「どうした急に」

玲音「巻き込まれてると思うと・・・ね？」

ちよつと恥ずかしそうに言う、玲音をよそに帝は少し足を止める

帝「・・・でも。あの人たちなら大丈夫だろ？だって激戦をくぐり抜けてきた人たちだからな。」

玲音「そうですね。そうだ！ここら辺ならラーメン屋ないですかね、食べに行きたいんですが」

帝「同じ世界なら紹介のしようがある！こっちだ！」

2人はラーメンを食べに行くために、廊下を走る。

この時2人は知らなかった・・・選ばれし仮面ライダーたちは・・・この世界に集結



しつつかあることを

## 第14話 先立つ黄金、走る彗星

ミカ「ははっ！お前遅いゾ！」

鈴夢「なんだこれ！クリスタルか！」

鈴夢は墓地近くの工事現場にて、自動人形達からの襲撃を受けていた。上手く障害物を使い、攻撃をかわしているが、その障害物はことごとく破壊されていく。

レイア「逃げるのか。何故変身しない。」

鈴夢「ここで変身する理由がない！だから逃げてるんだ！くそっ！」

ミカ「むー！こいつ面白いぞ！」

レイア「・・・目的は生け捕りだ。殺すなよ？ミカ」

そう言おうが、ミカと呼ばれる人形はクリスタルのような、物質を飛ばしてくる。

鈴夢「くそっ！どうして俺ばっか悪運が強いんだ！」

鈴夢は文句を言いながらも、その攻撃を生身で回避していく。さらにはクリスタルを素手で叩き割ったりして体への直撃を防いでいる。

さらに、回避しながら鈴夢たちは工事現場の奥へと行く、そこは真ん中が大きく空いており、上から光が刺していた。

鈴夢「っ！・・・行き止まりか。」

しかも、そこは行き止まりであり、上からしか逃げる場所がない程である。

鈴夢「・・・っ。やるしかないのか。」

ミカ「追い詰めたゾ？・・・ふふん。楽しませて欲しいゾ！」

弦十郎「何!?アルカノイズの反応だど!?!」

二課では、鈴夢が追われている最中に敵出現の反応をキャッチしていた。

朔也「はい!周辺に自動人形もいる模様です!」

奏「まずいな・・・翼と雪音のイグナイトへの強化はまだ終わってない。それどころ

か、動けるやつは全く居ないんだろ?」

弦十郎「帝くんたちを出す。それだけしか俺たちにできることはない。」

あおい「了解!」

そう言うと、朔也から悲鳴にも似た言葉が上がる

朔也「司令!周辺に鈴夢くんが!」

弦十郎「なんだと!?!」

弦十郎が叫んだ後、モニターに映し出された映像には、追いかけている鈴夢と、追いかけている人形がいた。

弦十郎「帝くん！玲音くんに連絡を！現場への到着を急がせろ！」

朔也「了解！」

緒川「到着までに鈴夢くんが持つてでしょうか？」

弦十郎「彼なら持つてくれるさ。」

玲音「鈴夢が!? 1人で!？」

奏『そうだ! だから早めに行けよ!』

帝「玲音! 急ぐぞ!」

そう言うのと玲音と帝はそれぞれ鈴夢の使っていたバイクに乗り、現場へと急ぐ。

玲音「くそっ・・・間に合うのか・・・?」

帝「間に合わせるんだ。急ぐぞ!」

スピードを上げると、俺達は鈴夢の所へと急ぐ・・・と、その道中で

美月「ん?! あれは馬鹿2人!？」

セレナ「何かあったのかしら?」

玲奈「……？誰ですか？あの人たち。」

セレナ「ただの馬鹿よ。とりあえず二課へ急ぎましょう。どうやらただ事ではなさそうだしね」

鈴夢「っ！があっ！」

鈴夢はあれから、ビート、ベノムスタイルへと変身し、縦横無尽に刃を振るうも、無情にも攻撃は通らず、人形にカウンターをハメられる。

鈴夢「くそっ！どうして攻撃が通らないんだ！」

ミカ「無駄無駄！私にはどんな攻撃も通らないんだゾ！今のお前じゃ無力だゾ！」

鈴夢も確実に、ミカに攻撃を加えるが、それでもミカが動じることは無く。元気に鈴夢へと攻撃を繰り返している。

レイア「……ふん。今の貴様らでは私たちを倒すことなんて不可能に等しいな。」

鈴夢「……プロジェクトイグナイトのことか。魔剣を使ってなんとやら」

レイア「そうか……もう実用段階まできているのか。だがあれは貴様らが簡単に使える代物ではない。むしろ貴様が扱われる側になるかも知れんな。」

鈴夢「……それはないな。」

鈴夢はチエーンソーを構え直すと、人形を睨みながら、ハッキリとした声で言う

鈴夢「みんなは……そんな力も自分のものにする俺は信じてる。そうじゃないと……俺が俺で無くなりそうで……皆が女神に認められることもないから。だから、俺は信じる！今も何処かで戦つてることを！」

レイア「……だが貴様はここで死ぬ。奴らの成長を見ることも無くな。」

レイアがコインを構え、ミカはその大きな爪を構える。その中、鈴夢は笑いながら答える

鈴夢「俺が死ぬ？ああ、いつか死んでやるさ。……でもな……」

問いかげに答えてる中、我慢できなかつた、ミカがクリスタルを投げてきて、攻撃してくる……俺は

鈴夢「俺は信じる！皆が来ることを！」

その時、黄金の光が鈴夢の目の前を通り過ぎる。

その光が晴れると同時に、鈴夢を含めた、その場の全員が衝撃波によつて吹き飛ばされる。そして光が晴れた中には……黄金の戦士が立っていた。

一真「よく言つた。それでこそライダーだ。」

鈴夢「……あなたは」

一真「劍崎一真・・・仮面ライダーレンゲルだ。」

そう言うのと、レンゲルはその黄金の杖を人形に向け、そこに突撃していく

鈴夢「・・・劍崎・・・さん、」

玲音「鈴夢！無事か！」

帝「鈴夢！」

そこに、帝、玲音の両名が到着する。玲音はザビーへ。帝はサイガへ変身している。

玲音「あれは・・・劍崎さんか！どうしてここに!?!」

帝「劍崎・・・仮面ライダーブレイドか！でもあれはレンゲルだろ!!どうしてあの人が変身出来るんだ！」

玲音「俺に聞くな！そんなことは劍崎さん以外に知るはずがねえだろ！」

そう言うのとレイアの弾丸が、これでもかと飛んでくる。それを帝が直撃しない程度に弾き返している

玲音は鈴夢を持ち上げると、そのまま外へ出ようとするが、そこに、狙ってたかのようにはアルカノイズが出現する。

玲音「っ。やっぱりタダでは通してくれないか。」

帝「向こうも必死だな。わかるぞ。」

そう言うのと、帝は背中のブースターで移動しながら銃を、玲音は加速しながら的確に

アルカノイズの中心を狙って攻撃する。

鈴夢「・・・これが。この人たちの実力。」

もちろんこれが本気出ないことは承知しているが、それでも彼らは強いといえる。

それを間近で鈴夢は実感する。

セレナ「鈴夢！無事なの!?!」

美月「馬鹿！生きてるか!」

と、そこにアガートラムを纏ったセレナさんと仮面ライダーノイズに変身して鈴夢に駆け寄る。

セレナさんの瞳には何故かうつつすらと涙が浮かんでいた。

鈴夢「セレナさん？花粉ですか？目から雫が・・・」

セレナ「うるさい！けが人は黙ってなさい！美月！こいつを連行すればいいのね!?!」

美月「そう！任せたわよ!」

鈴夢「へっ?!違う！俺にはまだやるべき事がアアアア!」

ゆっくり、ゆっくりとセレナは鈴夢を持ち上げると、そのまま来た道を引き返して行く。

一真「・・・あの子も生きてるのか。驚くことだらけだな。この世界は」

玲音「あら。剣崎さんの世界でもセレナさんは生きてるでしょうに。」



一真「……玲音。お前に手紙がある。」

玲音「誰から？」

一真「響。」

玲音「ほんとですか？嘘だったりしませんよね？」

そう言うのと、劍崎は玲音に手紙を横流しする。封筒を破り、手紙の中身を見る……そこには

『死ね』

玲音「ふああああつく！」

一真「……よそ見するなよ。来るぞ」

玲音「分かってたよ！ああ！響だったらこんな内容だったね！てかさあ！でももう少しかける言葉があるんじゃないのかなあ！」

叫んでいると、玲音の目の前にいい感じのサンドバッグが飛んでくる。

玲音「ふんっ！……ちようどいい。こいつら片付けて一真さんの世界の響を殴つてやる。てか殴らないと気が済まない！」

一真「それは俺がさせないぞ？」

玲音「なら代表で一真さんやりますか？」

一真「俺は別に構わんが。」

玲音「じゃあ決定！後で練習という名の喧嘩をやりましょう！剣崎さん！」

そう言うのと2人は各個に散開し、それぞれアルカノイズの数を減らしていく。

帝「全く！数だけは立派にしやがって！」

美月「この程度で弱音を吐くの!?らしくないわね！それでも男なの!?」

帝「・・・そこを突くなよ。なあ。」

美月「ふん。悔しいなら私たちより多く敵を倒して見なさいよ！」

帝「はいはい！」

美月が打撃を加えた敵に対して、帝が確実に的を撃ち抜いていく。

帝「なんだツンデレか!?そんなんじや鈴夢に嫌われるぞ！」

美月「・・・わかってるわよ！だからさっさと敵を片付けろ！このカス！」

帝「んなつ!?カスとか言うなよ！仮面ライダー舐めんな！おらっ！」

皆が戦ってる場とは少し遠い場所。鈴夢はセレナに担がれながら、戦場を離れようとしてる。

鈴夢はセレナの肩で暴れるが、セレナはそれにビクともせず、運び続ける。

鈴夢「くそっ！セレナさん！離してくれ！俺は行かなきゃ行けないですよ！」

セレナ「ダメよ。あなたは帰るの。そして二課で拘束させてもらうわ」

鈴夢「なんで!?!」

セレナ「……それがあなたを守るためのよ。わかって頂戴。」  
鈴夢「くそがあ！」

鈴夢は力づくで、セレナの方から降りると、そのまま走り出そうとするが、目の前にアガートラームをフルで展開したセレナが邪魔をする

セレナ「ダメよ。」

鈴夢「なんでだよ！ どう戦おうが俺の勝手だろ！」

セレナ「……司令が決めたの。あなたは危険なのよ。」

鈴夢「……関係ないだろ？ そんなことは……俺は一人なんだ。どうせ。また一人になる。」

セレナ「ならないためにそうする必要がある。あなたを監禁するという義務が」

鈴夢「そんなのは理不尽だ！」

鈴夢は刃を構えると、その狂気の瞳をセレナに向ける。セレナも、瞳を鈴夢へと向けるが、その瞳には雫が写った。

セレナ「……どうしても行くのなら。私を倒してからにしてもらえる？ もちろん。それがあなたに出来るならの……話だけどね？」

鈴夢「っ！ 卑怯だ！ あなたは！」

セレナ「なんでも言ってくれていいわ。でも。大好きな人を止めるにはこうでもしな

いと止まらないから」

鈴夢「……この……」

そう言うと鈴夢は走り出す。

セレナは鈴夢が攻撃をしないと置いていたのか、鈴夢が大地を蹴った数秒後に防御行動をとるが……

鈴夢「遅い」

鈴夢はその隙に接近し、セレナに打撃を加える。胴、腹、足、腕……頭……

連続的に繰り返される拳の攻撃にセレナは反応出来ず、鈴夢がうち終わったあとにはその場に倒れ込んでしまう

シンフォギアの防御力を見事に無力化した連撃は、彼女のシンフォギアを砕いていた鈴夢「ボロボロの鎧を纏うぐらいなら。俺の敵になるな。……さよなら」

セレナ「ぐっ……れ、れい……む。」

倒れたセレナを背に、彼は戦場へと走り出した。

## 第15話 天空にそびえ立つ路城

一海「・・・助かった・・・戦兔さん。シユンガ。ありがとうな。」

別世界。仮面ライダーグリス、イクサこと紅 一海は戦兔、シユンガたちと合流していた。

ヴァーチェ「・・・これでこの世界に迷い込む仮面ライダーたちは確保出来ましたね。」

シユンガ「そうか・・・よかった。」

場所は天空にそびえ立つ工業地帯のような場所。そして彼らの周辺には英霊の形をした影が、そこら中に転がっている。

戦兔「こいつらは英霊ってやつなのか。」

一海「少し違うと思う・・・確かシャドウとか言ってたな」

シユンガ「知ってるんです？」

一海「・・・いや。先程まで竜の尻尾を持つ女と会ってなあ。そいつと戦ってた所だよ。」

ヴァーチェ「それって・・・」

そうこう言っていると、遠くから声が聞こえる。

いや、声と言うより雑音の方が近いのかもしれない。その声は、ボエくと効果音をつける程に酷いものである。

戦兎「うおおおおつ！」

一海「これだ！これだよ！この声なんだっ！があああつ！」

シユンガ「こんな声どつから出してるんだよ！」

仮面ライダー3人がもがく中、ヴィバーチエはその手に弓を持つ。

ヴィバーチエ「天を裂く天啓のヒュペリオン・・・」

弓を射ると矢が光の線を引きながら、空高くそびえ立つ塔へと飛んでいく

???「きやうん！もお！何をやるのよこの変態！」

放たれた矢は、少女へと当たり、少女は塔の上でぴよんぴよん跳ねている

特徴的な竜の尻尾。そして隣の槍。間違いない。彼女はランサークラスのサーヴァ

ント。エリザベート・パートリーだ。

ヴィバーチエ「・・・ああ、エリザベート・パートリーですか。あれはダメな英霊で

すね。」

戦兎「ぐつ・・・まさかこの世界に久しぶりに来て聞く歌がこれとはな・・・死にそうだ」

シユンガ「……一海さんはこれ聞いてたんですか？」

一海「嫌という程な。だがグリスのアーマーのお陰で多少は防いでいた。……みた  
いだ。」

エリザベート「ちよつと！無視しないでよ！この豚どもが！」

ヴィバーチエ「……」

エリザベートを放置し、それぞれが感想を言いながらその場にふらふらと立つ。

戦兎「だが。問題はこの状況だな。」

戦兎がそう言い、それぞれ周りを確認すると、周辺にはシャドウが大量に湧いていた。

一海「やるしかないかな。」

そう言うで一海はベルトとナツクルを取り出し、構え、戦兎はボトルを回し、シユン  
ガはパスを通す

『ストライクフォーム』

『タカ、ガトリング！ベストマッチ！』

『レ・デ・イ』

戦兎、シユンガ、一海「変身！」

『天空の暴れん坊！』

『ホークガトリング！』

『フィ・ス・ト・オ・ン』

一海はイクサへ、シユンガは電王、ストライクフォーム。戦兎はビルド、ホークガトリングへと変身する。

エリザベート「はん！あたしとやろうつての？アイドルである私にファンであるあなた方が勝てるわけじゃないの！」

その直後。彼女の背後から空へと放たれる矢がある。

戦兎「ん？あれは・・・なんだ？」

シユンガ「先程ヴィバーチエが放った矢だ。どうしてあそこに？」

一海「・・・まさか。」

矢が上に登り消えた次の瞬間。空から矢が雨のように降ってくる。もちろんこちらにも

戦兎たちは急いで防御の構えを取るが、矢は彼らの周辺のシャドウたちを倒すだけで彼らに被害は与えなかった。

エリザベート「きやああん！誰よー！こんなことするやつはー！」

「おかしいな。しつかりと狙ったはずなのだが。」

「だからダメなんだよ弓兵が。初めから俺にやらせればよかつただろうが。」

エリザベートがブルブルと身震いした後。戦兎たちの後ろ側。物資コンテナの影か



ら2人の青年が姿を現す。

1人はその手に弓を持ち。もう1人は真紅の槍を持っている

ヴィバーチエ「・・・アーチャークラス。エミヤとランサークラス。クーフーリンではないですか。」

エミヤ「なんだ。俺達の事を知っているのか。」

クーフーリン「けっ。先客がいたのか?」

一海「・・・さっきの矢は・・・もしかして。」

一海の疑問はエミヤの持っている弓で解決される。先程、エリザベート達に矢の雨を降らせたのは彼である。

戦兎「・・・もしかしてお前達もあいつの敵なのか?」

エミヤ「・・・敵というか。我々はエリザベートを助けたいだけなのだ。」

シユンガ「どういう事だ?」

エミヤ「・・・先程、サーヴァントの影を見ただろう。あれを生み出すのを止めたいだけだ。」

戦兎「?」

ヴィバーチエ「転生同化。ですな。」

ヴィバーチエの一言で、彼らは表情を帰る。

エミヤ「そうだ。我々はシャルルマーニユの移動城によって何とかなったが。その他の連中。つまり地上に残った奴らは大半が同化された。もしくは同化を受け入れたのだ。」

一海「つまり・・・」

クローリー「ほぼ強制の洗脳だ。つたく。そんな力の何がいいんだか。俺がますます燃えちまうだろうが。」

戦意むき出しのクローリーに対し、エミヤは頭を抱えて

エミヤ「これまでで同化したサーヴァントの数は半分以上。我々の知る限りではジャンヌ・オルタ率いる連中と、ネロ、玉藻、シャルルマーニユの部隊は無事だ。」

戦兎「それってそこそこやられてる・・・のか？」

エミヤ「戦力的にはキツイ方だ。」

ヴァイバーチェ「？あなた方は自力ではレイシフト出来ないはずですよ。なのに何故ジャンヌ・オルタのことを知っているのです？」

クローリー「それはほら。企業秘密ってやつだよ。」

そう言うと、周りを見渡し、お互いに背を預けるように立つ。

エミヤ「しかし敵の数が多いな。ここは一つ。共闘と行かないか？君たちが後ろ。私たちが前の敵をやる。それでいいかな？」

戦兎「俺達は構わん。鈴夢の手伝い出来るならな」

シユンガ「よっし。やるか。」

一海「行くぞ。」

仮面ライダーたちはシャドウが向かってきたのを合図に、それぞれ戦闘を始める。

エミヤとクローフリーンも、それぞれ攻撃を開始し、空中に浮かぶ大地で。戦闘が始まった。

シユンガの拳が、シャドウに吸い込まれると、そのままシャドウは後ろに吹き飛び、そのまま消滅していく。

一海「凄いな。みんな強くなってるんだな」

シユンガ「それはそうでしょうとも。俺たちだつて戦つて強くなるんですから」

一海「まあ、仮面ライダーだからな・・・」

一海はイクサで近、遠距離をそれぞれ交互にこなす、銃で射撃し、剣で切り裂く。

戦兎はその中で空を舞い。建物を上手く利用して空から攻撃を加える。

地上からはシャドウアーチャーが、弓を放つたり。シャドウキヤスターが攻撃してき

たりするが、それを空中で躲し、ガトリングで攻撃を加える

シユンガ「戦兎さんは強いな。IS乗ってるのもあつて空中でも地上でも強いな」

一海「まあ。IS乗つたり魔法使いと戦つたりと忙しい人だからな。」

そう言うのと地上の2人もそれぞれシャドウを相手にするが。

一海「くっ！この剣持ち厄介だぞ！」

1番厄介なのがセイバーのシャドウ。アルトリアやジークフリートをベースにしているのか。それなりに強い。

シユンガ「一海さん！変わります！」

一海「すまん！頼むぞ！」

そう言うのと2人は場所を入れ替わるが、入れ替わつても後ろからセイバーのシャドウが接近してくる。

シユンガ「ぐっ……剣が重い！」

戦兎たちが苦戦する中。塔の上でエリザベートは大声を出して叫んでいる。

エリザベート「もう来たのね！アーチャー！ランサー！ふん！だけど遅いわよ！私はアイドルになったのよ！さあ！私の綺麗な歌を聞きなあい！」

エミヤ「断る。特にランサー。お前とセイバーだけは歌わせる訳には行かないのだ！」

クーフーリン「つたく！シャルルマーニュやマスターにも言われただろうが！お前達の声は迷惑なんだよ！」

エリザベート「にやにおっ！さすがツンデレね！」

クーフーリン「ツンデレはテメエだろうが！」

愚痴を言い合う2人を他所に。戦兎たちは苦戦しながらもシャドウの数を減らしていく

一海「あとどれ位だ！戦兎！」

戦兎「あとざつと30！」

シユンガ「このまま押していきましょう！」

エリザベート「ああん！私のファンが減っちゃうじゃない！やめなさいよー！」

一海「断る！俺はこいつらにボコられたからな！その分は仕返しさせてもらう！」

一海は主に容赦なく。その手に持った銃でシャドウの頭を貫いていく。

エリザベート「むうー！こうなったら私の綺麗な美声をまた聞かせるまでね！」

エミヤ「・・・そうさせると思うか？エリザベート。」

エリザベート「にやつ!？」

そう言うと、エリザベートの下まで、エミヤとクーフーリンは建物を上手く利用して移動する。さらに戦兎も空を飛びながら、エリザベートの下まで飛ぶ。

シユンガ「俺達は飛べないから・・・」

一海「どうする？」

そんな時。2人にヴィバーチエが

ヴィバーチエ「そんなこともあるのかと転送装置を起動させておきました。これであるの小姑娘の所までいけますよ」

一海「流石だな。仕事が早い」

ヴィバーチエ「天使ですから。一応は」

そう言うと、一海とシユンガの2人は装置を使い、立体的に空中移動しながらエリザベートの下まで行く。

エリザベート「げっ！みんな来ちやうの！もうー！こうなったら容赦しないんだから！」

エリザベートは後ろに刺していた槍を引き抜くと、その先を戦兎たちへと向け、構える。

エミヤ「さて。ここで仕事を終わらせるとしようか。」

戦兎「腕がなるな！行くぞ！」

そう言うと戦兎は真つ先にエリザベートヘガトリングを放つと、エリザベートはそれを羽から風を出すので弾丸を全て吹き飛ばす。

エリザベート「ふふん！あなた達よりは遥かに戦い慣れてる私が！あなた達に負けるわけがないじゃないの！」

戦兎「言ってくれるな！だが俺たちにも引けない理由があるんだよ！」

シユンガ「戦兎さん！変わるぞ！」

シユンガが戦兎の肩を使って空へ舞いそこから剣を振りかざすが、エリザベートの槍に簡単に止められてしまう。

シユンガ「っ!?力が違う！」

エリザベート「あら。男ながら情けないわね！ほらっ！」

シユンガ「ぐっ！」

シユンガは吹き飛ばされ、3人は同じ場所に集まる

一海「2人共！無事か！」

シユンガ「あいつ口だけじゃないですよ！」

戦兎「・・・まずいな。」

3人が苦戦する中。エリザベートは塔の上で笑っていた

エリザベート「さあ来なさい！私のライブは始まったばかりなのよ！」

エミヤとクローリンも合流する中。彼らも死闘を繰り広げていた。

## 第16話 重なる記憶

ミカ「そーりゃ！」

帝「ぐああっ！」

ミカのクリスタルがサイガのベルトに当たると、そのままベルトが外れ、変身が解けてしまう。

玲音「帝！っ！」

レイア「余所見か！らしくないな！」

玲音「クロックアップ」

玲音が呟いた次の瞬間。ザビー（玲音）は加速しサイガの変身ツール一式を広い帝の腰へとはめ込む。

帝「すまない……」

玲音「気にすんな。もう一度だ。」

帝「ああ！」

そうしている内に、人形たちが近づいて来るが、それを防ぐように剣崎……仮面ライダーレンゲルが立ちはだかる。



『ブリザード』

熊の紋章が身体にレンゲルラウザーに吸い込まれると、そこから強力な冷気を発し、彼女たちの動きを止めてしまう

レイア「むっ！」

ミカ「おっ？凍ったゾ！お前面白いゾ！」

劍崎「急げ！」

帝「言われなくても！」

サイガのベルトをはめると、変身コードを打ち込み、ベルトへと装着する

帝「変身！」

『Complete』

光のラインが身体に流れること数秒、発光し、仮面ライダーサイガへと変身する。

帝「さつきはやってくれたなっ！倍返しの時間と行こうじゃねえか！」

玲音「行くぞ！」

玲音と帝もレンゲルに加勢する形で戦闘に加わる。レンゲルは彼らが来ることを確

認すると、玲音と帝と位置を代わる

『クローバー、10、J、Q、K、A』

玲音「っ！帝！離れろ！」

帝「あ!？」

『ロイヤルストレートフラッシュ』

玲音が叫び、帝が反応した直後、レンゲルラウザーから強力な光が放たれ、俺たちを巻き込んで光が当たる

玲音「——っ！」

帝「あー!？」

俺達は光からはじき出されると、変身が強制的に解ける。

劍崎もレンゲルの変身を解くと、玲音の身体を起こしに行く

劍崎「大丈夫か。」

玲音「……ねえ。レンゲルは強いんですから……やめてくださいよ」

劍崎「ああ……だが、避けれはしただろ」

玲音「……」

ああ、全部分かってやってたんですね。

サイガの背にはブースター。ザビーにはクロックアップがあることを知った上でやるとは……ある意味恐ろしい人だ。だけど。この人は頼もしいし強い。

玲音「だけどそれを俺たちに教えてくれないじゃないですか。」

劍崎「すまないな。以後気をつけるよ」

「ホントか？」と、玲音は心の中で思いつつ帝を起こす。帝も変身が解け、ちよつとした火傷があった。

帝「いてえ……」

玲音「はあ……これだったらハイパーゼクター使うべきだったなあ。」

帝「持つてるんなら初めからやれよ！」

そう言っていると、遠くから仮面ライダービート……もとい、鈴夢が遅れてやってくる。

玲音「主役の登場ですよ。劍崎さん。」

劍崎「……なるほど。俺と一緒にだな。君は」

鈴夢「……終わった……のか？」

全員が安堵し、その場で変身を解こうとした……その時だった。唯一、鈴夢が劍崎の横へ向けて、手持ちの剣を投げ出す。

玲音「っ！鈴夢！何を！」

鈴夢「……劍崎さんの後ろにいる奴。姿を見せろよ。」

そう言うのと周辺に霧のような。すごい違和感を感じたその直後に、劍崎の後ろに人影が突然現れる

???「我の境界を見破ったか！面白い！」

??? 「あらあら、面白い子ね。」

そこには、布地の少ない服?を着た女性と、武術家のサーヴァントがいた。

玲音「……ゲームで見た事あるぞ。あいつはサーヴァント、李書文、そしてマタ・ハリだな。」

帝「変態と真面目野郎が組んだみたいだな。てかサーヴァントなのか。」

玲音「ああ、どっちも厄介な奴だ。」

マタ・ハリは誘惑のスキルがあつたり、李書文はゲームでだが、よく隠れたりする厄介なサーヴァントである。出来れば味方に欲しかった。

しかし、敵になったものは仕方ないと判断したのか。玲音たちはそれぞれ変身の体勢に入るが……

李書文「止めておけ。我等には貴様らだけでは勝てんよ。」

玲音「……やってみなきゃわかんないと思うけど。」

マタ・ハリ「そうね……元気な子は好きよ?でも私たちの方が上なのよ。それっ  
!」

マタ・ハリが一回転した次の瞬間。鈴夢達の身体は力を失ったかのようにその場に崩れ落ちる。

劍崎「ぐっ!身体が……重い!」

鈴夢「何をした！お前達は！」

李書文「何を……か。簡単に言えば鮮血神殿のようなものよ。貴様らの身体を弱体化させた。」

玲音「ライダー……メデューサもいるのか！」

李書文「その通り。しかし、大帝のお陰でな。我等だけでも発動出来るようになったのだ。」

玲音「それってメデューサいる意味なくね？」

鮮血神殿。前まではライダークラスのサーヴァント。メデューサが主に使える物だ。味方以外の敵の能力を下げたり、味方の能力を上げたりと出来る馬鹿みたいな代物だ。

しかし、先程、李書文が言ったように全ての敵サーヴァントがそれを習得済みなら……玲音「状況は最悪。ただそれだけだな。」

マタ・ハリ「ふふっ。それだけじゃないわよ？ 私たちにはバーサーカーたちがいるんだから！」

李書文「左様。我々の仲間にはヘラクレス卿。ランスロット卿、呂布卿がいるのだからな。」

玲音「バーサーカー勢揃いだな。厄介厄介。」

先程名前が出たのはなかなか強いバーサーカークラスのサーヴァント達である。

基本バーサーカークラスは話すことは出来ないものの、その分力にステータスを振つてるためになかなか手強い敵である。鈴夢のサーヴァント。ガウエインが本気をだして渡り合えるぐらいだ。と思う。

ダレイオスさんなんてのはいなかった、いいね？

帝「要はわからんが・・・状況は最悪だつてことは理解した。絶望的に仲間が少ないこともな！」

玲音「だが・・・問題がある。」

玲音が口に出そうとする問題とは・・・

劍崎「そうか。向こうも戦力が整ってないという事か。」

そうだ。

恐らくだが、英霊の一人一人の戦力はシンフォギアを遥かに上回り、さらには世界を敵に回せる力があると玲音は信じている。

そんな地球ぬっ殺せる奴らがどうして集団で集まっているのにこちらの世界を攻めてこないか。理由は簡単だ。

こつちに攻めれる程の決定打がないのと、恐らくだが戦力が足りてないのだと思う。鈴夢のサーヴァントは上級クラスの者が多い。

アニメ、そして伝承でも覇権の働きを見せたセイバー、アルトリア・ペンドラゴン。

聖杯戦争の概念を守るエクストラクラス。ルーラーのジャンヌ・ダルク。

そして若きクーフリーンの師であり、ランサーのトップサーヴァント。スカサハ。

そしてキャメロットの円卓の騎士。太陽の力を持つ、セイバー、ガヴェイン。

そして鈴夢の後輩？であり、サーヴァントと融合することで存在を保った少女。シー  
ルダールの半英霊。マシユ・キリエライト。

彼女たちは一流のサーヴァントであると同時に激戦をくぐり抜けてきた猛者である。  
さらにトップサーヴァントが約2名。

戦力敵には申し分なく。セイバー1人でもライダー2人は相手できるであろう。  
まあ、相手によるが。

李書文「ふむ。考えは筋を突いているな。確かにそうだ。大帝やあの小僧のサーヴァ  
ントはまだ整ってはおらん。他のサーヴァントを探すなら今だぞ？」

鈴夢「・・・何故それを言う!?!俺達は敵なんだぞ！」

鈴夢が武器を構えながら、李書文に詰め寄ると、李書文は笑いながら分かっていたか  
のように答える。

李書文「簡単なこと。儂はこの身で強い敵と戦いたいのだ。故に同化などといった力  
を求める気にはならん！」

マタ・ハリ「そういう事♡私は私の美貌で何処まで人を堕とせるか楽しみなのよ♡」

・・・ああ。真面目かと思っただらこれらしい。鈴夢たちはその答えが意外だったのか。その場で啞然としている。

劍崎「では同化とやらはしてないのか？」

李書文「当然よ！それと。仲間を求めるなら情報をやろう。」

帝「なに!？」

李書文「ここより少し離れたところに反応がするのだ。それが英霊か。もしくは化け物かは知らんが・・・まあ、試してみる価値はあると思うぞ？」

そう言うのと李書文とマタ・ハりは姿を消していく。恐らくだが隠密系のスキルを使っただのだろう。全く目視出来ない。

しかし、奴らはまだ真面目だった。なるほど。敵にはああいう敵もいるのか。

玲音「・・・やることは決まったな。」

帝「ああ。」

とりあえず。話を簡単にする。その大帝に戦力を取られる前に俺達が取るという事だ。

まあ。簡単にまとめたただけだから・・・やることは大量にあるが。

鈴夢「・・・」

劍崎「霧夜。君は大丈夫なのか。」



鈴夢「はい……」

そう言うのと鈴夢は変身を解き、直ぐにその場を離れようとするが劍崎に腕を掴まれ止められる

鈴夢「っ！」

劍崎「嘘をつくな！この腕はなんなんだ！」

帝「それは……っ！」

そこには鈴夢の腕……いや。赤い筋肉のようなものに変わってしまった鈴夢の腕があつた。

劍崎「君が何故これを隠すかわかる！だが！何故俺たちに言ってくれない！」

鈴夢「うるさい！それ以上言えば……俺はお前を殺すっ！」

劍崎「っ！」

鈴夢の威圧に押されたのか、劍崎が腕を離すと鈴夢はそのまま走ってその場を去ってしまう。

玲音「劍崎さん。」

劍崎「すまない。少し取り乱してしまったな。」

玲音「……今のは……」

劍崎「始だ。霧夜が始に重なって見えただ。」

玲音「……」

仮面ライダーカリス。相川 始。

ジョーカーと言う人類の脅威であり、剣崎さんがバトルファイトの呪縛から救おうとした人である。

結果。剣崎さんが新たなアンデットになることでバトルファイトは終わったが……

剣崎「初めの頃はあんな感じだった。みんな……」

帝「……」

お互いが話を止めた数分後。二課からの応援が来ることで俺達はその後にした。

二課。ガレージ

玲音「……」

そこは二課が新たに作ったガレージ。そこには翼のバイクだったり鈴夢が使ってたバイク。さらには黒服の車等が収納されていた。

その奥の作業スペースにて、玲音は一人作業をしていた。

剣崎「ここにいたのか。」

玲音「？剣崎さん。どうしたんですか。」

ガレージの扉が開くと、そこには剣崎 一真が何時ものコート姿で立っていた。

剣崎「事情聴取だそうさ。鈴夢のことを知りたいとか知って欲しいとか」

玲音「あつ。了解です。少し遅れるんで、そこだけお願いします。」

剣崎「・・・」

改めてガレージを見て、剣崎は玲音のいじる車を見つめている

剣崎「これはなんだ？ただの車じゃないようだが。」

玲音「レースカーですよ。レースカー。俺は・・・転生する前にちよつとしたアニメにハマってましてね。」

剣崎「ほう。」

玲音「これ中々の出来なんですよ。多分、帝に見せたら興奮しますよ。」

剣崎「・・・そうなのか？」

玲音「ええ。男のロマンですよ。」

そう言い、玲音は白い車を叩く。

玲音「なあ。アスラーダ。」

剣崎「行くぞ玲音。」

そう言うのと剣崎は玲音の襟を掴み、無理矢理ガレージから退出させる。

その時、玲音の言葉に反応したかのようにアスラーダの操縦席にあるコンピュータが反応したのは誰も知らない……

## 第17話 襲撃！

鈴夢「……ここは？」

俺は帝、玲音、劍崎さんと離れると、途中で気を失ったと思ったが……ここは？

ロマン「やあ、お久しぶりだね。」

鈴夢「……」

そこは病室のような場所で、パソコンのある机には男が1人、パソコンを弄りながら声をかけてきた。

鈴夢「あなたは……」

「おっ！目エ覚めたかい！」

そして鈴夢が声をかけたと同時に、扉から3人。人が入ってくる。

1人はフードを被り、背中には木の杖がある男。

さらに次は和服の似合う白い女性。

最後は小さいけど……女神のような感じをイメージさせる女性だった。

ロマン「やあ、どうだった？」

「外はいつも通りだよ。全く。俺達は変人じゃねえつての。」

鈴夢「……」

鈴夢が唾然としていることに気づいたDr. ロマンは彼らを鈴夢へと紹介する

ロマン「紹介するよ。彼はキャスター。クーフーリンさ、そしてその隣の白い着物の子がバーサーカー。清姫、そしてその隣の小さい子がアーチャー。エウリュアレだよ。」

鈴夢「英霊。」

クーフーリン「おう。なんだ。話のわかるやつじゃねえか。流石はマスターじゃねえか。」

鈴夢「もうマスター呼ばわりか。」

清姫「やはり言ったでは無いですかキャスター。マスターではなく旦那様と読んだ方がいいと。」

クーフーリン「それは大概デメエみたいなヤンデレだけだろうがよ。あと俺は男だからな。」

エウリュアレ「あら。意外にも可愛いじゃないの。この銀髪も似合ってるわよ。」

鈴夢「ん?」

気づけば鈴夢の髪の色は銀に戻っており、服は新しいものに変えられていた。

ロマン「前のが汚かったからね。少し変えさせてもらったよ。」

クーフーリン「その白女が変えたんだよ。結構ノリノリで鼻歌歌いながらな。」

鈴夢「ゾクツ。」

清姫は「フフフ・・・」と軽く笑ってるがそんな問題ではない。青少年の服を着替えさせたのが問題だと言っているのだ。

エウリュアレ「結構な筋肉だったわよ。アナタ」

鈴夢「見たんですか!? 見たんですね!？」

エウリュアレ「下は見てないわよ。安心して頂戴?」

鈴夢「安心できねえ! 畜生!」

鈴夢は床をバンバン叩きながら唇を噛み締める。隣のクーフリーンはそんな鈴夢の肩を叩きながら

クーフリーン「大丈夫だ。俺だけはお前の味方だからよ。なんかあったら相談してくれや。」

鈴夢「アニキイ・・・」

鈴夢にはクーフリーンが輝いてるように見えるのか、眩しそうに手で目を隠す  
ロマン「・・・? おっと。厄介な出来事だなあ。」

エウリュアレ「どうかしたの? メロン」

ロマン「ロマン! ドクターですよ!?! 君たちを育てたの誰だと思ってるの!?!」

エウリュアレ「アナタではないわね。」

ロマン「ううっ!」

と、一瞬引き下がるロマンだったが、鈴夢を見据えると、冷静な顔で話し出す

ロマン「そうだそうだ。ニュースの件なんだが・・・厄介な出来事に巻き込まれそう  
だ。」

鈴夢「厄介な出来事?」

ロマン「うん。ここら辺の場所ってわかるかな?」

クローリン「これ地図な」

そう言つてクローリンによつて出された地図では、ここは発電施設周辺の地形も書かれていた

鈴夢「発電施設周辺?」

ロマン「そうだ。そして最悪なことに・・・発電施設が例のサーヴァントとノイズつて奴に襲われてるらしい」

鈴夢「っ!」

鈴夢が建物を出ようとした次の瞬間。パソコンを含め、全ての電源が落とされた。



時は遡り事件の数時間前。

玲音「・・・アスラーダさんは動かんねえ。」

帝「試運転はしたんだろ？ どうだった？」

玲音「・・・試運転は問題ないけど。ここのAIさんが動いてくれねえと完成した気にならないんだよなあ。」

帝「そもそもアスラーダってどここのアニメの乗り物だよ。」

玲音「サイバーフォーミュラって・・・知らんか？」

帝「なにそれガン〇ム？」

玲音「知らないならいいや。」

サイバーフォーミュラ。一応簡単に説明しておく超次元のレースアニメだ。超次元って言うても人間はまともだが。

問題なのは出てくるレースカー。あるいはプロトタイプレーシングカーだ。ブースト使って加速して、さらには二段ブーストで死にかけるとなるとホラー？

ちなみに1993年か。それぐらいに放送された神作画とも言われるアニメだ。皆様気になる方はようつべやらニコニコ、また、自分のお父さんたちに聞いてみてください。アニメ好きのお父さんなら知ってます。(だいたい)

帝「にしても二段ブースト付きか。オマケにしてもやりすぎじゃないか？ 下手したら

そこら辺の車よりも速いぞ。」

玲音「アニメの遺産だから速いのは当たり前だけど。問題は鈴夢が使ってくれるかだよなあ。」

レースカーだと平気で交通違反して免許取られかねないので、そこだけなのかもしれない。

玲音はそう言うと、アスラーダの操縦席を開け、作業に入る。

劍崎「ここにいたか。天地、玲音。」

玲音「それだとどつちがどつちかわかんなくなるからやめてもらえませんか？せめて二人とも名前で呼んでくださいよ」

劍崎「……すまん。それよりも、司令室から緊急のお呼び出しだ。行くぞ」

玲音「了解。」

帝「おけです！」

そう言うと帝は先に走っていき、玲音は作業服を干すと、何時ものコートを着て、劍崎と共に司令室へと向かった。

切歌「玲音さん！帝さああん！」

玲音「それ剣崎さんや。」

剣崎「・・・」

司令室に入るなり、切歌と調は剣崎へと抱きつく。帝はその横を通り抜け、目の前に映されているモニターを見続ける

帝「なんだよこれ！」

玲音「・・・街が・・・」

そこには発電施設がノイズに襲われている絵が映し出されていた。

弦十郎「理解したか。」

剣崎「キャラルたちか。」

弦十郎「うむ・・・例のオートスコアラーたちがここの発電施設を襲っている・・・狙いは」

了子「8割はシンフォギアシステム狙いでしょうね、強化させないつもりよ。」

弦十郎「二課には予備の電源があるから無事だが・・・このままでは国が黙ってないだろう。それに色々問題があるのでな。」

そう言うと、モニターは変わり、巨大な影を映し出す。

アルトリア「っ！バーサーカー！」

マシユ「あれは・・・」

ガヴェイン「呂布卿か! どうやら取り込まれてるようですね。」

サーヴァント、バーサーカー。呂布。三国志で名前が上がる程の実力の持ち主で、縦横無尽の鬼神だったとか。(諸説あり。)

呂布『|||||!』

スカサハ「あれは完全にイキってるな。それと、厄介な敵はそれだけではないのだろう?」

緒川「はい。こちらもです。」

そう言うと、さらに映し出された影はその手に銃を持ち、海賊のような帽子をかぶった女だった

ジャンヌ「あれは・・・ライダー! フランシス・ドレイクですか!」

玲音「歴史上有名な女海賊? だな。」

帝「そんなに有名?」

玲音「俺も詳しくは知らんが・・・英霊の中には訳ありでなった奴や、反英霊もいるらしいぞ?」

帝「ふーん。」

そう言うと、ふと後ろを見る

そこには劍崎さんが扉の前に立っているだけで、一見、なんにもないように見えるが……

劍崎「どうした？」

玲音「なんでもありません。」

後ろに居たはずの小さいふたりはどうしたんですか？。なんて聞こうとしたが馬鹿みたいな感じで、玲音は聞かないことにした。

調「ちよいちよい。」

劍崎「ん？」

切歌「私たちは行ってくるデス。ここは任せたデスよ。」

劍崎「わかった。」

そう言うのと切歌と調は部屋を出て、LINKERの収納部屋に来ていた

調「これだけあれば私達は戦えるよ？切ちゃん。」

切歌「そうデスね調。ついでに鈴夢さんにも会えるかも知れないのデス」

調「うん。責任感の強い鈴夢さんならきつと来る。それを助けて私たちに惚れてもら

おう。」

切歌「デス!それなら善は急げデス!」

そう言うのとLINKERを取り出し、2人は外へ向け走っていった。

鈴夢「・・・なんてことを」

現場に着き、鈴夢は1人、驚愕していた。

そこには地獄絵図と呼ばんような、怪物たちの宴のようなのが開かれていた。

鈴夢「・・・これが・・・元人間のやることかよ・・・」

呂布「|||||!!|||!!!」

呂布が鈴夢を捉えると、雄叫びのようなものを上げ、鈴夢のいる場所へと飛びかかるように斧を下ろす

鈴夢「・・・」

呂布「|||||!!」

斧が鈴夢に当たる数秒、鈴夢は呂布に渾身のパンチをお見舞いする。

呂布「|||||!?!」

鈴夢「あ、あ、あ、あ、あ、っ！」

拳は見事に呂布の胴体を捉え、そのままノイズの群れへと、吹き飛ばしていった。

ドレイク「へえ！やる奴もいるんじゃないか！」

鈴夢「お前！どうしてこんなことを！」

ドレイク「アタシはビジネスさ！依頼主に使われて、それなりの対価を貰う！最高のビジネスをね！」

鈴夢「ビジネス．．．？そんなことで!?そんなことでここを襲ったのか！」

鈴夢は決して優しい人間ではない。

鈴夢だって、怒る時は怒るし、泣く時は泣く。そして人を憎む時だってある。

しかし。今の鈴夢はそんな優しいものではなかった。

鈴夢「．．．お前達は．．．お前達だけは殺してやるっ！変身！」

『スタート、メロディー！ダークネス！』

次の瞬間。鈴夢の身体を黒い霧が包むと、鈴夢は亡霊海賊のような．．．そんな仮面ライダーへと変身していた

ドレイク「やろうってのかい!?アタシは強いよ！」

鈴夢「ふー．．．ふー．．．」

鈴夢が獣ののように理性を忘れて飛びかかろうとしたその時、鈴夢の背中を誰かが叩

いた

鈴夢「っ!」

クーフリーン「よう坊主。元気かい？」

鈴夢「・・・どうして・・・」

そこには先程会ったばかりの、サーヴァントたち。クーフリーン（キャスター）清姫、エウリュアレが立っていた

クーフリーン「ドクターの頼みだよ。冷蔵庫止まって飯が食べれなくなるのは御免だぜ？」

エウリュアレ「同感ね。やっぱり美を保つには食事は必要だもの」

清姫「それに湯船も湧かせませんし・・・困ったものですね。女狐は」

ドレイク「・・・おやあ。アンタたちはこっち側じゃないのか。残念だねえ」

ドレイクが笑いながら言うと、クーフリーンは持つている杖をドレイクに向けてこう言う

クーフリーン「ドレイクさんよお。悪いが、うちのマスターだけはやらせねえぜ？」

ドレイク「ははっ！面白そうじゃないかい！さあ！パーティーを始めるよ！」

その直後、後ろで倒れていたはずの呂布が復活してこちらに來ている。

呂布「|| || ||！」



清姫「ならあれは私が相手しましょう。」

鈴夢「無茶だ！俺が・・・っ？」

鈴夢が清姫の前に出ようとした時、清姫は手に持っていた扇子で、鈴夢の口を止める清姫「お忘れですか？私のクラスもバーサーカー。つまり相性なら五分五分ですわ。」

エウリュアレ「それはどのクラスにも言えることよ。」

クーフリーン「ならこっち手伝ってくれや。こっちは相性最悪だぜ。」

皆が身構えた次の瞬間、ドレイクが銃を撃ち、戦いが始まった。

## 第18話 発進!白き流星!

劍崎「これに乗ってく?」

玲音「そうですね。多分ですが調ちゃんやんと切歌ちゃんはもう着いてるだろうし……何かあったら困るので、そこだけ……ね?」

劍崎「これは二人乗りなのか?」

玲音「いえ。1人乗りですが。」

劍崎「……まさか。」

玲音「はい。僕が乗るんで劍崎さん。走るかバイクで来てください。」

劍崎「因果応報か?俺がなにかしたか?」

そう言う劍崎を置いて、玲音は着々と準備を始める。

劍崎「……玲音」

玲音「んじゃ!帝のことお願いしますよ!」

そう言うのと、玲音はハンドルを握り、思いつきりアクセルを踏み出す。次の瞬間、アスラーダは物凄い音とともに、外へと飛び出して行った。

玲音「スピードは良好。あとはブーストだけだな。」

アニメでは3段もの変形をこなす、この機体は最早レースカーの領域を超えているなとか思っていた。

さらに、サイバーフォーミュラ、アニメ後半では、アスラーダは二段ブースト付き、通称スパイラルブーストを搭載していた。

玲音「俺にブーストの衝撃が耐えられるか？」

そう言くと、横のナビならぬ、AIが起動し、こう答える

アスラーダ『耐えられるかと。』

玲音「え？」

アスラーダ『しかし、目的地に着くのなら、ブーストは1回で十分かと』

玲音「お、おう！」

そう言くと玲音はハンドルから手を離し、横になる別の操縦桿を倒し、そのまま前に出す。

それと同時にアスラーダの後部にブースターが出現。そのまま加速していく

玲音「——っ！」

加速のスピードは尋常ではなく、これでも常人なら意識が飛びそうだったが・・・アスラーダはそんな生ぬるいものではない。

残りブースト時間。10秒を切ると、握っている操縦桿に赤いボタンが出現する。アニメ通りならこれが二段ブーストのボタンだ。

残り6秒で、玲音がボタンを押すと、モニターには6秒間の新たなカウント表示、さらには後ろのブースターが変形し、放出してる光が青い粒子から赤い粒子へと変わる。

玲音「うおおおっ！」

二段ブーストの衝撃に、玲音が押しつぶされそうになる中、事態は大きく動いていた。――

発電施設周辺では、鈴夢たちがサーヴァントと戦っていた。

クーフリーン「ちっ！出来れば敵になりたくなかつたなあ！海賊がよお！」

ドレイク「五月蠅いね！その杖と髪を墓に飾ってやるよ！だからさっさと死にな！」  
エウリュアレ「断るわ。私はまだ死ぬような英霊ではないわ。ここで死ぬのはアナタよ。ドレイク」

クーフリーンたちがドレイクと死闘を繰り広げる中、鈴夢も清姫と共に、呂布を相手

に死闘を繰り広げていた。

鈴夢「ぐっ！がああっ！」

呂布の振るった槍は鈴夢の身体を確実に捕え、そのまま身体を吹き飛ばすが、鈴夢は地面に爪をたて、吹き飛ばされる身体をしつかりと止める。

清姫「この巨体は、どうやら馬鹿力も逝かれてるようですね。大丈夫ですか？ マスター」

鈴夢「大丈夫だ！ まだやれる！」

鈴夢は白いメモリと緑のメモリを入れ替え、そのままビート、リーフスタイルになった後、持っている鎌で呂布の槍と打ち合う

呂布「|||||！」

鈴夢「力だけなら俺だって負けないからなっ！」

呂布「|||||!!！」

鎌は呂布の首を確実に狙うが、呂布はそのまま手で掴み、鈴夢の身体ごと宙に浮かせるが、鈴夢はそのまま呂布の顔に蹴りを入れて直ぐに下がる。

それを追撃するかのように呂布が正面突破して来るが、横に入ってきた清姫が呂布の大きな巨体を扇を一振りさせるだけで吹き飛ばすが、呂布は地面を少し転がると、起き上がり、雄叫びを上げる

清姫「あの声イライラしますわね。」

鈴夢「はは・・・」

清姫のマジレスに、鈴夢は苦笑いするしかなかった。

そんな会話の直後、呂布が大地を大きく蹴り、一気に鈴夢、清姫との距離を詰めてくるが、鈴夢は清姫を庇うように前に出て、呂布の槍を鎌で受け止める。

ギチギチと言う鏝迫り合いの音とともに鈴夢は徐々に呂布に押されていく。

呂布の足が進むと同時に、鈴夢の足は徐々に後退していく。

鈴夢「——っ！」

鈴夢が力を入れて突き放そうとした直後、呂布が槍を持ったまま、上に力強く腕を上げる。

力を入れていた鈴夢の腕は、そのままに上がるが、鈴夢は冷静な反応が出来ていなかった。

その間に呂布は槍から手を離し、鈴夢の胴へと、強烈なパンチをぶち込む

清姫「マスター！」

鈴夢「がああっ！」

鈴夢の身体は少しの間、宙を舞いそのまま地面へと強く叩きつけられ、痛みに耐えきれず、悲痛の声を出してしまう

ドレイク「ははっ！いいねえ！アンタのそんな声を聞いてるとますます楽しくなってきたよ！」

クーフリーン「このシヨタ好きのババアがよ！いい気になってんじやねえぞ！」

エウリユアレ「相性悪いのに突撃しないで！援護することちの身にもなつて欲しいわね！」

エウリユアレ、クーフリーンがドレイクに攻撃を加えるが、流石は高ランクサーヴァント。彼ら二人の攻撃を完璧に捌いている。

清姫「このっ……！もう許しませんわ！」

そう言う清姫はそのまま大地を蹴つて、呂布の懐へ飛び込むと、扇から発せられる炎で、そのまま呂布と好戦を開始する

鈴夢「……ぐ……き、清姫……」

意識と取り戻した鈴夢は、ふらふらになった身体を起こすと、目の前の状況を見ていた

目の前では、英霊たちが戦いを広げ。

さらにその後ろでは建物が破壊されていく。

よく見れば、そこには働いていたであろう作業員の死体が転がっていたりした。

鈴夢「……止めさせなきゃ。こんな……」

鈴夢はふらふらと立ち上がると、鎌を杖がわりにして姿勢を立て直す。

と、その時、突然空気の流れが変わるのを戦場にいる誰もが感じた。

ドレイク「なんだい？」

呂布「||||？」

サーヴァント達が、動きを止めると、そこに衝撃波が飛んできた。

鈴夢「——っ!この歌は!」

戦場に響くデュエット。シンクロした歌を歌うのは彼女達しかいないと、鈴夢が衝撃波の飛んできた方を向くと、シンフォギアを纏った調と切歌が立っていた。

調「鈴夢さん!無事!」

切歌「鈴夢さあああん!大丈夫デスカあああ!」

鈴夢「げぼぼっ!」

鈴夢が唾然とする中、2人は鈴夢の身体に飛び込むように駆け寄る。二人分の重量が鈴夢の身体を襲う

鈴夢「ぐっ・・・お、重い・・・」

切歌「怪我は無いようデス!間に合いましたよ!調え!」

調「よかった。鈴夢さんが無事でよかった。」

鈴夢「そんなことより!どうしてこっちに!?!弦十郎さんたちは許可を出したの!?!」



鈴夢が彼女たちにそう問うと、彼女たちは痛いところを疲れたかのように苦い顔をす  
る。

ああ、弦十郎さんたちに黙ってきたんだなつて。

鈴夢「・・・危険なんだよ。どうしてこんなことを！」

切歌「鈴夢さんが大好きだからデスよ！」

さも当然のように答えが帰ってきたことに、鈴夢は気圧され、啞然としてしまう。

切歌「鈴夢さんはいっつも私たちを置いて行つちやうデス！そのせいで皆が悲しんで  
るってなんで気が付かないデスカ！」

鈴夢「・・・俺のせい？」

切歌「そうデス！ずっと一人で悩んでつ！私たちの好きになった鈴夢さんじゃない  
デス！」

・・・少し鈴夢の心にチクリと来た。鈴夢はそのまま考えて、少し置いて切歌の頭を  
撫でる。

切歌「ふえっ!?!ええ!?!」

鈴夢「そっか・・・ごめんな。」

切歌「ど、どうして鈴夢さんが謝るデス!?!わ、私たちがまず謝なきやならないのに・・・」  
鈴夢「違う違う。こんな事に君たちを巻き込んだんだ。俺が謝らないとな。・・・後、

もう少し：．．みんなに頼るよ。こんな俺で良ければ、これからもずっと居てくれ。．．  
いや、居なきやいや．．かな。」

鈴夢が切歌の涙を拭い、頭を撫でながら姿勢を立て直す

鈴夢「さて．．切り替えて行くか！」

調「鈴夢さん！」

鈴夢「調ちゃん!切歌ちゃんと一緒にドレイクの撃破へ!俺はこいつを落とす!」

そう言う装者2人は、ドレイクの方へ、鈴夢はそのまま呂布との好戦に入る

清姫「マスター!?!」

鈴夢「ここは俺が引き受けた!looriなら負けないぞ!」

清姫「マスター!ですが!」

鈴夢「行つてくれ!ひとつでも多くの命を守るためにっ!」

鈴夢が力強く放つた言葉は、彼女にどう響いたかは分からないが、彼女は少し考える  
と、そのまま別の方へ飛んでいく

鈴夢はその様子を横目で見届けると、呂布の槍を払い、蹴りを入れて距離を離す。

鈴夢「待たせたなあ．．雑魚がよお」

呂布「|| || ||」

鈴夢「大丈夫さあ．．もうさつきのくよくよ悩んでた僕とは違う．．」

呂布「|| ||?」

鈴夢「わかんないか? ああ、わかんないだろうよ。恵まれた力を持って、さらには英雄と呼ばれる名前も持っていたであろうお前にはな」

鈴夢はふらふらと歩きながら、呂布を警戒するように動く、呂布もまた、鈴夢を警戒しながら動く、お互いがお互いの行動を読もうとしているのかもしれない。

その中で、鈴夢は愚痴を言う、先程ポコポコにされた腹いせか、少し言葉がきつくなる。

鈴夢「でもよ・・・僕もお前も、所詮は半端者なんだよ・・・わかるか? 決してお前は強くないし、決して僕は強くない。これが人なんだ。そして僕もお前も、ただの半端者なんだよ。」

その言葉を最後に、鈴夢は地を蹴り、一気に呂布との距離を詰める。

呂布は対応出来なかったのか、少し遅れて槍で防ごうとするが・・・

鈴夢「遅い」

鈴夢のスピードはそれを遙かに上回った。接近した鈴夢は、鎌で槍を打ち上げると、そのまま刃の向きを変え、呂布を真つ二つにするために振り下ろす。

呂布「|| || ||つ!」

鈴夢「ちっ! 浅かったか!」

その直後、鈴夢に強烈な蹴りが飛んでくるが、鈴夢はしっかり腕を交差してガード、その後、飛んでくる衝撃波を鎌の斬撃で防ぐ。

鈴夢「……ダメかもしれないな。」

そう呟く鈴夢の腕は震え始め、早くも限界を迎え始めていた。

しかし呂布はそんなことを気にせず、鈴夢に突っ込んでいく。鈴夢も負けずと突撃する巨体と槍と鎌を打ち合う。

鈴夢「うおおおっ！」

呂布「|||||||!!」

お互いの力が頂点に達し、武器に込める力も強くなる時、俺達がぶつかる直前に邪魔が入る

鈴夢「——っ!誰だ!」

邪魔が飛んできた方を向くと……そこには

キャロル「少し遅かったか、絶望してる時に攻撃するべきだったな。」

そこには、シンフォギアを纏った……キャロル本人が立っていた。

鈴夢「お前が……っ!お前がキャロルかつ!」

キャロル「ふん。さあ、お前の力を見せてみる。」

裏で意図を運ぶ人間のことなど知らず、2人はぶつかろうとしていた。

## 第19話 終わりの始まり

鈴夢「キャラル・・・っ！」

キャラル「さあ！私に貴様の力を見せてみる！」

キャラルがそう言うと、配下である人形たちが一気に鈴夢に襲いかかる、鈴夢はそのまま鎌で、人形たちの攻撃を捌いていく。

鈴夢「人数差が！くそっ！」

ミカ「ほらほら遅いゾ？遅いと食べちゃうゾ！」

鈴夢「鬱陶しい！」

鈴夢はカウンターと言わんばかりにミカを吹き飛ばした後、レイアに狙いを定め、突撃して行くが間にファアラが入り、剣で押し返される

押し返されて体勢を立て直そうとした時、ガリイの氷の刃が鈴夢の頭上から投下されるが、鈴夢は鎌を盾がわりに、なんとか防ぐ

ファアラ「前よりは強くなってますわね。ですが、何処まで踊れますか？」

鈴夢「・・・くそっ。」

鈴夢の身体は、最早限界を迎え始めていた。それもそうだ。なんの強化も得てないよ

うな人間が、連戦に耐えられるはずがない。

ビートによる身体強化も考えたが、彼女たちのことを考えると迂闊には使えないと鈴夢は考える

鈴夢（・・・どうする。このまま行ってもギリ貧。玲音さん剣崎さん、帝さんが来るまで持ちこたえられるか？）

その時、鈴夢たちの戦場に1台の車が姿を現す。

車体は白をメインに青のライン等で、構成されており、そこそこ使われてるように見えた。

キャロル「なんだ？迷子か」

玲音「んなわけあるか。タコ。」

操縦席らしき所からは、玲音さんが、息切れをしながらヘルメットを取り、そのまま降りてきた。

腰には既にデイケイドのベルトが巻かれており、変身する気満々だった。

キャロル「・・・なっ・・・っ！貴様！タコって言うな！」

玲音「五月蠅い！タコはタコだろうが！それかその背中見て言うが蜘蛛か？蜘蛛なのか？蜘蛛人間に憧れてるんですか？！アメリカ行ってこいや！」

キャロル「行ったことあるんだよ！ついでに貴様はゾンビか？！なんだその青ざめた顔

は！そのまま死んでろ！」

玲音「うるせえなババアが！どうせ長生きしてるならそれぐらいの歳なんだろ!? おらどうした！現代機器使ってみろよ！スマホとかパソコンとかなあ！」

キャロル「こつちには錬金術とか言う超未来的なものがあるんだぞ！」

玲音「はあく!? だからなんですか!? 現代機器使えない腹いせですかあく!? 飯田線のワンマン電車乗れるかおい！」

・・・戦場は唾然としていた。

周りの敵サーヴァントですら、戦いを止めるほどには超が着くほどの低レベルの争いだった。

ドレイク「な、何言ってるんだいあいつは。・・・馬鹿なのかい?」

玲音「馬鹿!? 今馬鹿って言った!? はい0点〜! 馬鹿って言う方が馬鹿なんですう〜！」

鈴夢（ダメだ。玲音さんは超限界を迎えてたのか人格があらん方向に逝ってる。目を覚ましてくれ! このままだと変人に思われるから!）

呂布「|||||」

呂布は無言で、清姫にアイコンタクトを送る。しかし、清姫から帰ってきたのは分からない。のアイコンタクトだった。

キャロル「もういい！南雲つて奴から生け捕りの命令を受けてたが貴様は殺してやるからな！泣いても許さんぞ！」

玲音「は〜い！そのセリフはフラグだと思いま〜す！最終的には君が泣くと思うに！票入れま〜す・・・じゃねえんだよ！危ねえ！死ぬところだった！」

そう言うのと玲音はデイケイドのカードを通し、そのまま変身する。

『カメンライド！デイケイド！』

赤の板が顔にはめられ、玲音は仮面ライダーデイケイドへと変身する。

玲音「手始めに・・・これだ。」

そう言うのと、玲音はホルダーからカードを取り出す。そこには電王の絵が映っていた。

キャロル「なに？」

玲音「まあ、見てろつて。変身！」

『カメンライド！電王！』

電王の変身の様に、玲音が変身すると、さらにカードを通す。

『アタックライド！俺！参上！』

玲音「俺っ！参上っ!!」

その玲音の声は、全体に響き、その場にいた誰もが思わず耳を閉じた。



キャロル「・・・だからなんなのだ。」

玲音「へっ。いいか！今の俺はクライマックスなんだ・・・だからよ・・・」

そう言うのと玲音は両手を広げ。こう語る

玲音「俺の力は平成ライダーになることだけじゃない。だが、今から俺のやることは、クウガからディケイドまでの平成前期。ダブルからジオウまでの平成後期！その全てでお前を倒してやるぜ！キャロル！」

そう言うのとキャロルは配下の人形を呼び出すが

玲音は、それを気にせず突っ込んでいく。

玲音「行くぞっ！」

『カメンライド！クウガ！』

ドライバーにカードを通し玲音は赤いライダー。クウガに変身して突っ込んでいく。

ミカから繰り出される大きな腕を玲音は受け止め、腹に1発入れた後にそのまま蹴り飛ばし、飛んでさらにカードを通す。

『カメンライド！アギト！』

光が玲音を包むと、クウガとは少し違うフォルムのライダー。アギトに変身し、フラとガリイの攻撃を両手で止める。

剣崎「玲音！鈴夢！」

鈴夢「劍崎さん！」

その間に劍崎が颯爽とバイクで、鈴夢の隣に登場し鈴夢の身体を起こす。

玲音「劍崎さん！鈴夢を頼みますよ！」

劍崎「わかった。」

玲音は後ろから来たガリイの刃を腕で受け止めると、そのまま別のカードを通し、そのままガリイを吹き飛ばす。

『カメンライド！龍騎！』

玲音は龍騎に変身し、劍を振るい人形たちを追っていく。

ファアラの劍を吹き飛ばすと、そのまま胴体を切り仰け反らせた後で、玲音は蹴り飛ばす。

後ろからミカが一気に詰めてくるが、玲音は後ろを見ずに、カードを差し込み、ミカの攻撃を受け流す。

『カメンライド！ファイズ！』

赤い光が玲音を包むと、仮面ライダーファイズへと変身し、そのままミカの身体に蹴りを入れる。

ライドブツカーからカードを取り出すと、そのまま通そうとするが、遠距離からレイアがコインで射撃をしてくる。

玲音「変身させない気だな？ 劍崎さん！」

劍崎「言われなくても！」

劍崎はベルトを腰に巻くと、ブレイドとも、レンゲルとも違う変身の構え方をする。

劍崎「変身。」

『ターンアップ』

ベルトから出る、クワガタの門を通ると、劍崎はクワガタのような外見を見せる戦士、仮面ライダーギヤレンへと変身する。

劍崎は腰のギャレンラウザーを取ると、レイアに向け、弾丸を放つ。

弾丸はレイアに当たらず。しかし、レイアの射撃は劍崎の弾丸を回避するため止まってしまう

玲音「ないす！」

次のカードを通すと、1度罅迫り合いをしているミカを吹き飛ばす。

『カメンライド！ブレイド！』

ベルトから出る、カブトムシの門を通ると玲音は仮面ライダーブレイドへと変身する。

玲音「っ！」

ブレイドになると同時にファラが剣を一閃させてくるが、玲音はバク転をしながら華

麗に回避を見せる。

鈴夢は劍崎と共に、瓦礫に隠れ様子を伺っていた。

鈴夢「玲音さん……ぐっ。」

鈴夢が変身を解くと、包帯を巻いている部分から大量の血液が出ていた。

激しい戦闘で傷が開いたのだろう。劍崎は素早く応急処置へとかかる。

劍崎「気にするな。玲音は強いやつだ。死にはしないだろうな。」

鈴夢「どうして……そこまで言えるんですか？」

劍崎「……」

鈴夢「お互い数日あった中でしよう？なのに何故……」

劍崎「あいつと初めてあった時。俺は無関心だった。」

鈴夢「？」

劍崎「俺はアンデットだからな。無理に人と関わることは出来ないが……あいつはそれを知った上なのか。俺の心に入ろうとしてきやがった。」

鈴夢「……」

劍崎「もちろん。そんなことは出来ないが……それでもあいつはやろうとした。俺の心を開こうとしてくれたんだ……」

鈴夢「そんなことが、」

劍崎「まあ。半分は嘘だがな。」  
嘘なのかい。と鈴夢が突っ込むことは無かった。

『カメンライド！響鬼！』

炎が玲音の身体を包み、ミカ、ガリイの攻撃を止めると、玲音は仮面ライダー響鬼へと変身する。

響鬼の基本武器である。槌を振るいながらも、玲音の攻撃は彼女たちに当たることは無い。

いや、当てる気が無いのか。玲音は彼女に当たる寸前に少しコースを外しているのだ。

それを理解した人形たちは顔色を変え、玲音に再び襲いかかるが、玲音は新たなカードを通し、蹴りを入れることで彼女たちを遠ざける。

『カメンライド！カブト！』

紅い戦士、カブトに変身すると、玲音は剣を捨て、格闘主体のスタイルで応戦します。その後も、戦闘は玲音が主導権を握った形で行われていた。

『カメンライド！電王！』

再び地に刺さっている剣を取り、二刀流でレイアの弾丸を防ぎながら切りかかる。  
『カメンライド！キバ！』

蝙蝠のような獣のような戦士、仮面ライダーキバに変身すると、軽い身のこなしで人形の攻撃を次々とかわしていく。

人形たちが戦意を下げる中で、玲音はマスクのしたでニコニコしている顔を隠しながら、戦っていた。

傍から見たら煽ったりしていると思われるだろうが、これが・・・

鈴夢「玲音さんの戦い方なのか。」

劍崎「・・・」

と、その時。

キャロル「・・・何故だ。何故俺たちを倒そうとはしない。」

玲音「・・・？」

キャロル「お前は俺たちを殺しに来たんじゃないのか？」

玲音「え？そんなこと言ったかい？」

劍崎「・・・」

玲音はデイクイドに戻ると、周りを見ながら話し続ける。

玲音「俺達はおくまでお前の説得に来たんだ。俺達の世界……いや。俺達の世界では結果はわかりきったものだからな。」

キャロル「貴様らの……世界？だと？」

玲音「……そうだな。そして、その世界ではお前は生きている。」

玲音は変身を解くと、覚悟を決めたその目で、彼女に訴えるように言葉を投げかける。

玲音「世界つてのは不思議で、また、繊細なものなんだ。……まあ。お前にもいろいろあるんだろうが……それでも。お前の探してる答えつてのは今見つけるものなのか？」

キャロル「……パパの答えをお前達は知ってるのか？」

玲音「んなものは知らん。」

素直にからつと言つてしまう玲音。それに対しキャロルは僅かな怒りを見せる。

玲音「だけどな……一人だから答えは見えないんだよ。世界には……こんなに沢山助けを求められる人がいるんだからな。」

玲音は剣崎、そして鈴夢の方を見ながらそう言う。　　剣崎は分かつてたかのように頷く。

玲音「だから……こつちに来いよ。な？」

玲音が手を差し伸べる……その時だった。

??? 「答え？はっ。そんなモノはくだらんなあ。」

玲音「・・・」

突然。何も無いはずの空間から、金ピカの鎧を纏ったサイヤ人が襲来する。

玲音「お前に聞いてないだろ？英雄王。・・・ギルガメツシュ。」

玲音が呟いたと同時に、サイヤ人の後ろには無数の武器が見えていた。

ギルガメツシュ「裁きの時間だ！」



## 第20話 2つの世界を繋ぐモノ

戦兔「・・・この性格どうにかならんのか？」

エリザベート・バートリーの襲撃後、戦兔たちは仕事を終え、お茶を取っていた。

ヴィバーチエがお茶を注ぐ中、一海とシユンガ、戦兔はエミヤ、クーフーリンと話をしていた。

エミヤ「無理だな。彼女の性格は最早個性の1つとしか言えないな。」

クーフーリン「同感だぜ。こいつの意地の悪さと、この性格だけはめでたいものだからな。」

シユンガ「要約してバカつてことか。」

エリザベート「んなっ!？」

シユンガの心無き一言にエリザベートは机を叩きながらシユンガに詰め寄る、布地の少ない服はシユンガの目には悪いらしく、シユンガは慌てて視線を逸らす。

戦兔「危ない危ない。角が刺さるだろ」

エリザベート「はん！私がバカつて!?!あのパンツ丸見えの赤セイバーに比べたらマシよー！」

クーフリーン「はいはい。ウチのローマ馬鹿にすんのはやめとけ。面倒になるから。」  
クーフリーンがそう言うと、エリザベートとクーフリーン間で火花が散る。

その間に、シユンガ、戦兎、一海の3人は疑問をぶつける。

戦兎「お前達のマスターってのは誰なんだ？ 言い方からして俺たちではないし、玲音たちでもないようだが」

エミヤ「・・・そうだな。」

ため息をひとつ置き、エミヤは淡々と言葉を続ける。

エミヤ「電脳体だ。要約するとな。特定の世界でしか生きることを許されない・・・誰かを模した形。だろうな。」

シユンガ「その形ってのは。」

エミヤ「それがわからんのだな。名はセイバー。キャスターしか知らんものでな。」

一海、戦兎、シユンガ「・・・」

エミヤ「勘違いするなよ。俺達は興味がないだけだ。まあ・・・妻である彼女たちが名前を知ってるのは当然のことだな。」

一海「つまりお前達は正規サーヴァントではないと。」

エミヤ「そういうことになる。」

・・・その数秒後。エミヤは頭をボリボリいじってこう言う。

エミヤ「まあ。契約するならもつとマシなマスターを見つけたいな。」  
戦兎「そうだろうな。浮気するマスターとか嫌だな。」

エリザベート「アンタ！子ブタを馬鹿にしたわね！きーっ！」

クーフリーン「うるせえぞババア！」

エリザベート「誰がババアよ筋肉っ！」

そう言うと、みんなでワイワイと笑ったり、話したりする。

この時間が続けば・・・そう思っていた矢先、空の雲行きが怪しくなっていく。

エミヤ「・・・風が変わったな。なにか来るのか？」

クーフリーン「・・・このくせえ臭い。間違いねえ。獣の臭いだ。・・・って。この時代に黙持ってくる奴らはだいたい限られてるからなあ。」

エリザベート「ライダークラスか。あるいは別の敵かしら？まあ！どの道!?私の歌を心響くまで聞かせてあげるけどね！」

一海「その前に俺達が死ぬからダメな。歌は」

エリザベート「なんでよー！」

エリザベートが駄々をこねる姿は子供そのものだが、全員そんなことには目もくれず、空を警戒し始める。

空は雲が出てきただけで、特に変化はない・・・そう思った時。

ギヤアアアツ!

エミヤ「来るぞ!」

エミヤが叫ぶと同時に、戦兎達がいた場所に赤く熱い火の玉が飛んでくる。火球だった。

火球は地面を焼くと消滅し、さらに次の火球が戦兎たちに向けて飛んでくる。

それもひとつではない。多くの火球が戦兎たちを焼き付くそうと飛んでくるのだ。

一海「どうなってる! 相手は何なんだよ!」

シユンガ「くそっ!」

シユンガたちはそれぞれ電王、ビルド、グリスに変身して、回避するが火球はある時突然止まる。

その火球が止まった数秒後。戦兎たちの頭上には多くの竜が飛んでいた。

???「あら。アレで死んだと思ったのに・・・生きてるのね。」

エミヤ「やれやれ。厄介だなサーヴァントと言うのは。」

???「同類が何を言うか。」

そこにいたのは。旗を持った黒き聖女が竜の手綱を持って戦兎たちを見下していた。

その他にも、仮面をかけた女、槍を持った長髪の男性、十字架を背負う女性、花騎士

の服装に身を包んだ騎士がいた。

エリザベート「あら？それが久しぶりに会うセリフかしら。カーミラ。」

カーミラ「・・・お久しぶりね、私・・・いや、エリザベート・バートリー。月の聖杯を掌握出来なかつた気分はどう？宇宙人が。」

エリザベート「はあ？あのバカ科学者と一緒にするのやめてくれる？私は私。そしてあなたなのよ？そしてさらつと言つたけど宇宙人じゃないわよ！いっつだ！」

姿を見せるな否や、早くもサーヴァント間で口論による戦争が勃発している。・・・これには戦兎たちは呆れるしかなかった。

その中で、黒き聖女は彼らを見下すように見下ろしながら、静かに言葉を紡ぐ

???「・・・見ない連中が居ますね。害虫でしょうか・・・？いえ。どの道私たちの邪魔をするのには変わりませんね。」

戦兎「害虫とは随分言ってくれるじゃないか！」

戦兎は黒き聖女に指を刺す。

彼女はそれを予想していたのか。待つてたかのように言葉を続ける

???「害虫は害虫でしょう？ああ・・・害虫より達が悪いからゴミとでも言いましょうか？」

戦兎「・・・」

シユンガ「お前っ！」

シユンガが怒りに任せ前に出ようとしたが、それを一海は冷静な態度で止める。

戦兎も彼女の言葉には怒ろうとせず、静かにため息をつく

シユンガ「一海さん！悔しくないんですか！俺達は見下されてるんですよ！」

一海「落ち着け。これは俺たちを逆立てるための煽りだ。無駄に付き合う必要はない・・・それに・・・」

一海は戦兎をチラ見する。戦兎は分かっていたかのように頷くと、シユンガの前に出る。

一海「戦兎だつて分かつてて我慢してるんだ。お前一人で何か出来るわけじゃないかな。」

シユンガ「・・・」

一海は言葉でシユンガを抑えると、そのまま戦兎と肩を並べる。

???'「・・・なんだ。つまらない奴等ね」

一海「名を名乗れ。出なければ俺達は名もなきお前を殺すことになる。・・・誰にも名前を覚えられないのは嫌だろ？」

一海が煽るように言うと、聖女は旗を掲げ高らかに宣言するように叫ぶ

邪ンヌ「我が名はジャンヌ・ダルク！復讐の旗を掲げ貴様らを排除しよう！」

エミヤ「・・・オルレアンの戦乙女か。」

エリザベート「ふん！私の敵はアイツだけよ！悪いけど好き勝手にやらせてもらおうわよ！」

そう言うと、エリザベートはカーミラと呼ぶ仮面の女性と対面し、戦い始める。

邪ンヌ「バーサーカー！ライダー！セイバー！面倒な奴らを片付けてしまいなさい！」

邪ンヌが叫ぶと、竜の背にいた三体のサーヴァントがそれぞれ戦兎たちに襲いかかる。

エミヤ、クーパーリンはそれぞれ一体のサーヴァントを相手し、戦兎たちの目の前には長髪の男性が立っていた。

バーサーク・バーサーカー「・・・ふん。」

戦兎「こいつから感じるこの感じはなんだ？・・・血の感じ・・・」

一海「・・・戦兎さん！飲まれたらおしまいだ！」

戦兎「わかってる！」

戦兎たちがようやく構えを取った次の瞬間。目の前に男は居らず、気づけばシュンガの眼前に移動していた。

シュンガは咄嗟の出来事に反応出来ず、そのまま飛ばされてしまう。

シユンガ「うわあああつ!？」

戦兎「シユンガ！」

一海「野郎っ！」

一海はグリスの武器であるツインブレイカーを構え、バーサーカーへと突撃して行くが、バーサーカーは素手で剣部分を握りしめ、そのまま槍で身体を切り裂いていく。

一海「があっ！」

ライダーアーマーを切られたはずなのに、一海の身体は直に引き裂かれるかのような感覚に襲われる。

バーサーカーはさらに一海へ近づくと、地面に槍を刺し、血の針で一海の身体を貫く

戦兎「一海——っ！やらせるか！ビルドアップ！」

戦兎の身体は変化し、ビルド、ゴリラモンドフォームへと変身後、一海、シユンガを助けるためにバーサーカーの槍を腕で止める

バーサーク・バーサーカー「・・・やろうと言うのかね？面白い。」

戦兎「これ以上お前の好き勝手にやらせはしない！行くぞ！止めれるなら止めてみる！ダイヤの鎧は砕けないぜ！」

そう言うのと戦兎とバーサーカーは槍と拳を撃ち合う。

誰のかわからない血が着いた槍と、新品の、鋼鉄の腕がぶつかると、その間に火花が



生じる。

その間だが、シユンガは意識を起こし、一海を起こそうと駆け寄っていた。

一海「ぐっ……シユンガ……」

シユンガ「大丈夫ですか！」

一海「大丈夫……だ。問題ない。」

一海は剣を杖のように突き立て、フラフラと身体を起こす、攻撃を受けてなのか、立つてからも身体が安定しない。

一海「それより―戦兔の助けになってやれ。アイツは厄介だぞ？」

シユンガ「この世界に来てから同じことを聞いている気がします。……行きます！」

シユンガもブレイクソードを構え、銃を打ちながら戦兔の方へと走っていく。

その銃弾は、バーサーカーの槍によって弾かれ、さらには戦兔を蹴つ飛ばしてシユンガに向けて走ってくる。

シユンガ「来るなら来い！返り討ちにしてやる！」

バーサーク・バーサーカー「愚かな……血となるがいい」

バーサーカーは地を蹴り、シユンガと剣を打つと、そこに煙が生じる。

シユンガはバーサーカーに押され、だんだんと押されていく。

シユンガ「ぐーっ！」

バーサーク・バーサーカー「……予想していたより強いな。これなら……いや。なんでもない。」

シユンガ「何!？」

バーサーカーは槍を弾くと、半円を書くようにそのまま槍を横に一閃させる。

シユンガは咄嗟の判断で後ろにバックステップで下がり、再びバーサーカーへと剣を構え、地を蹴る。

シユンガ「うおおおおおつ！」

バーサーク・バーサーカー「ふん！」

戦兎「俺も居る！忘れるなよ！」

そこに戦兎も参入し、二対一の乱戦となる。

さらに一海も加わり、三対一で、人数なら戦兎たちの完全有利となる。

ヴィバーチェ「……」

ヴィバーチェだけは、戦闘には介入せず、何かを待つように空を見つめる。

そこに竜を降りたジャンヌ・ダルクが近づき、旗をヴィバーチェへと向ける。

邪ンヌ「あなたは戦わないのかしら？全く……逃げるなんて根性無しもいい所ね。」

ヴィバーチェ「私の力は戦闘向きではないので……基本はこうして応援することしか出来ません。」

邪ンヌ「・・・自分は無関係なです。って？はっ！私をイライラさせないで頂戴。」  
ヴィバーチエ「イライラ・・・ですか。」

邪ンヌ「ええ。私が何故復讐しようとするか。あなた達には分からないでしょうね！  
だけど！それがいいのよ！それがっ！」

ヴィバーチエ「・・・そう・・・ですが・・・」

ヴィバーチエはその顔に笑みを浮かべると、さらに言葉を紡ぐ。

ヴィバーチエ「この戦いは・・・引き分けです。」

邪ンヌ「何？」

次の瞬間。ヴィバーチエの周りの景色だけが崩壊。そのまま何も無い空間に変わる。

邪ンヌは危険を察し下がるが、彼女には何も影響はない。

ヴィバーチエは戦兎たちを指さすと、戦兎たちの身体はヴィバーチエの居る、何も無い空間に引っ張られていく。

戦兎「んにやー!!？」

シュンガ「おおおっ!!？」

一海「・・・マジか」

戦兎たちは何も無い空間に飲み込まれると、声も、気配も完全に消える。

エミヤ、クーフーリン、エリザベートも同様に引っ張られ、そのまま姿を消す。

邪ンヌ「これは!？」

ヴィバーチエ「あなた達と遊ぶ時間はここまです。また会いましょう。ジャンヌ・ダルク。」

その言葉を最後に空間は閉じ、そこには何も残らなかった・・・

## 第21話 武器の貯蔵は十分か。

ギルガメツシユが腕を振り下ろすと、彼の後ろにある武器は全ての玲音たちを目がけて飛んでいく

しかも、玲音の近くにキャラルがいる。これは……

劍崎「仲間割れか！玲音！」

玲音「キャラル！こつちだ！」

キャラル「ーっ！」

玲音はカードを通し、ベルトを起動させる。

『カメンライド！鎧武！』

平成ライダーの中でも頑丈な鎧を纏う鎧武に変身すると、キャラルを抱きしめながら、ギルガメツシユの攻撃をライドブツカーで捌いていく。

それを見ていた劍崎、鈴夢も玲音へ近づこうとするが

呂布「＝＝＝！！！」

鈴夢「呂布……っ！調！切歌！清姫！」

3人を抱えた呂布が鈴夢、劍崎の前に立ちはだかった。3人は既に気を失っており、

呂布はそのまま3人を捨てるように下ろす。

鈴夢は駆け寄りとうとするが、それを遮るかのように呂布は彼女たちの前に出る

呂布「|||||!!!」

鈴夢「ぐっ・・・!」

まるで戦えとも言わんばかりの呂布を、鈴夢は睨みつけながら距離をとる姿勢をとる。

呂布はジリジリと鈴夢との距離を詰めてくるが、鈴夢の前に剣崎が立つ。

鈴夢「剣崎さん!」

剣崎「・・・行け。ここは任せろ」

そう言うのと腰にベルトを巻き、蜘蛛のカードを通す。

そのまま蜘蛛の門がベルトから出現すると、剣崎へ向かって、そして通り過ぎる。

剣崎は仮面ライダーレンゲルへと変身し、ラウズアソーバーへと2枚のカードを通す。

『アブソーブクイーン、フュージョンジャック。』

レンゲルの姿が変わり、肩に牛の牙が着いたような上半身が大きく変化した戦闘特化のフォームへと変身する。

レンゲルラウザーには、後ろ側に刃が付き、片腕には鎖付き鉄球がある。

劍崎「呂布とか言ったな？戦うのが趣味なら・・・俺が相手になろう。」

呂布「|| || ||!!」

劍崎「俺は、対仮面ライダーなら・・・いや。対人間なら最強と自負できる。それは冗談などではない。・・・俺自身の経験からだ」

鈴夢「劍崎さん・・・」

劍崎「行け！守るべきものがあるだろう！」

その次の瞬間。2人は大地に大きな足跡を残し、気づけば武器を撃ち合っていた。

槍と杖がぶつかる時、お互いの身体が吹き飛びそうな程の衝撃波がその場を襲うが、

2人は地に足を踏み入れ、そのまま踏ん張って、武器を撃つ。

劍崎「ぐっ！だが力はこつちが有利なはずっ！」

呂布「|| || || ||!!」

2人が撃つ中、鈴夢は切歌、調、清姫を起ここしに行く。

3人は満身創痍で倒れ込んでおり、切歌、調に関しては、シンフォギアの変身が解け、布が1枚巻かれているだけだった。

呂布なりの優しさだ・・・

鈴夢「大丈夫か!?しつかりしてくれ！」

切歌「・・・れ、鈴夢・・・さん？」

鈴夢「……ごめん。守れなくて……」

調「……気にしないでください。これは……命令を破った私たちへの罰なんです……よ。」

鈴夢「……!!」

鈴夢は一瞬。拳を叩きつけそうになったが。心がそれを抑え、彼女たちの身体を起さず。

切歌「鈴夢さんは戦って欲しいデス。……私達は……足でまといなんかじゃないデスから。」

鈴夢「……君たちは未熟なんだ！シンフォギアもまともに纏えないで何を言うんだ！」

切歌「それが足でまといって言っくんデス！私達はもう大人なんデスよ！わかってくださいー！」

鈴夢「……」

鈴夢が迷っていると、調が鈴夢の腕をとり、顔を上げて泣きそうな顔で訴える。

調「鈴夢さんが私たちを守るんじゃないんです。私たちが……鈴夢さんを守るんです。そうじゃないと……鈴夢さんはどこかに行きそうだから……それが、切ちゃんとの私の約束……だから。」



鈴夢「……」

鈴夢は彼女たちを寝かせると、メモリを黒いものに入れ替える。

『ダークネス』

黒いモヤが鈴夢を包むと、亡霊海賊を模した戦士、ビート、ダークネススタイルへと変身する。

そしてそのまま、サブスロットに黒く、そこに紅く血管のような線が入っているメモリを差し込む。そして……

『抜剣！ready?』

鈴夢「……さよなら。アクション。」

『抜剣！開放——!』

さらに次の瞬間、鈴夢の身体を黒き竜が飲み込むと、鈴夢はさらに禍々しい仮面ライダーへと姿を変える。

全てが黒く、もう人の影などない物と……

鈴夢「行くぞ。」

ギルガメッシュ「……何?」

鈴夢「行くぞ、英雄王。武器の貯蔵は十分か。」

ギルガメッシュ「雑種が。何を言うかと思えば……っ! 貴様の頭蓋も戦いてやろう

!!  
」

鈴夢「そのセリフ。聞き飽きたぞ！」

鈴夢が黒き弓を引くと同時に英雄王の後ろに浮いていた武器は全て消滅する。

それと同時に、鈴夢は瓦礫を足場に、英雄王までの距離を確実に近づける。

切歌「鈴夢さああん！」

剣崎「霧夜!? 畜生! 邪魔だっ！」

玲音「……っ。鈴夢……」

と、ギルガメツシユと鈴夢が武器を撃ち合う中、そこに帝と翼、セレナとクリスが到着する。

翼「なっ!? あれは霧夜なのか!？」

セレナ「あの禍々しいのは……ダークネススタイルなのね! あのバカはまた暴走する気なの!？」

帝「とりあえず3人を回収します! 大丈夫か!」

翼たちは新品のシンフォギアを纏っており、帝はサイガへ、そして帝はそのまま切歌たちを回収しに行く。

ドレイク「なんだい!? 可愛い子達だねえ! なんならこの子達も混ぜて遊ぼうか!」

クーフリーン「黙れババア! てめえは俺たちにやられてればいいんだよ!」

エウリュアレ「美しくないわね！せっかくの身体が台無しよ！」

クリス「うるせえな！まずはてめえから片付けてやるよ！」

翼「雪音！出しゃばるな！」

セレナ「なら鈴夢は任せて！あなた達はそいつの相手をよろしく頼むわね！」

翼「恩に着るぞ！行くぞ雪音！」

翼、クリスの2人はそのまま既に戦っているクーフリーンとエウリュアレの援護へ。

セレナは鈴夢の援護に行こうとするが・・・

ギルガメツシュ「ふははははっ！愉快だ！俺は実に愉快であるぞ！それぞれ！避けて見せろっ！」

鈴夢「・・・っ！」

武器を出し、鈴夢へと放つ英雄王。放たれる武器は1ミリも外されること無く鈴夢へ向けて放たれる。

鈴夢は確実に腕の弓と鎖を使って、英雄王の放つ武器を落としていく。

ギルガメツシュ「はははははっ！避けれるものか！その武器も破壊して貴様の心臓を貫いてやる！」

鈴夢「今現状出来てないんだがな！心底ガツカリだぜ英雄王！」

2人が熾烈な戦いを繰り広げているために、セレナは戦いに入れなかった。

すぐ近くでは劍崎と呂布が、槍と杖を撃ち合い、周囲を吹き飛ばすがお互い倒れる気配がない。

セレナ「・・・鈴夢。」

奏『セレナ！そっちは大丈夫なのか！鈴夢は！凄いエネルギーの反応があるけど！』  
セレナ「え!? 鈴夢じゃないの!?!」

と、セレナが愛しき少年の名を呟くと同時に二課司令室の奏が焦った感じに通信を入れてくる。

あおい『皆さん！皆さん周辺に高エネルギー反応です！』

ギルガメツシユ「なんだ！この不愉快な感じは！」

鈴夢「っ！転移・・・誰だ！」

鈴夢とギルガメツシユはお互いの武器を撃つのを止め、劍崎、呂布は罅迫り合いのまま空を見る。

ドレイクは多方向からの攻撃を止め、翼たちはそのまま反応のある方へと視線を向ける。

そこには、黒いモヤが現れると同時に、3人の仮面ライダーが先に落とされる。

帝「あれは・・・仮面ライダーグリス！ビルド！電王か！・・・ってことは！」

玲音「戦兎さん！一海さん！シユンガさん！」

戦兎「……ん？おっ！玲音！帝！久しぶりだな！」

シユンガ「帝！玲音！んげっ!？」

と、3人の仮面ライダーの後に、サーヴァントだろうか。服装が完全に違う奴らが3人落ちてくる。

エリザベート「きゃーん！痛いじゃないのー！全く！」

クローリーン「ん？なんだ。見たことのある連中ばつかじやないかって……なんで英雄王がいるんだよ。不思議だなあ。」

ギルガメツシュ「ああん？何故貴様がいるのだ。ランサー……そして、アーチャー」  
エミヤ「久しぶりだな。英雄王。武器の貯蔵は……いや。言うまでもないな。」

そして、その直後、空から多数の紅い槍が降ってくる。

英雄王、そして今現れた3人はその場を離れ、回避するが、槍の着弾点には、3人のサーヴァントが立っていた。

スカサハ「ん？セタンタではないか。こんな所でどうしたのだ？」

クローリーン（槍）「はあ!?!お、お師匠!?!そなんでここに!？」

クローリーン（杖）「げ!?!マジかよ!？」

2人のクローリーンが反応すると、隣の騎士は呆れた顔で、さらにその隣の大剣を背負う騎士は少し気まずい顔をする。

エミヤ「おや、ガヴェインか。こんな所で何をしているんだ？」

ガヴェイン「お久しぶりです。アーチャー。あなたこそ……一体どうしてこちらに？」

エリザベート「あらー！見知った顔がいっぱいね！これなら私も楽しくなるわ！」

アルトリア「……ランサー……エリザベートですか。はあ……英雄王もいることとで……全く。月の守護者は何をしているのやら。」

ギルガメツシュ「ほほう。騎士王。貴様も来たのか。喜べ！この世界は俺たちのものになるぞ！ははははっ！」

戦兎たちは状況を飲み込めなかった。しかし、瞬時に意識を戻す。

これなら、戦力は向こうの倍。まとも以上に戦えると思っている矢先、英雄王が指を鳴らす。

ギルガメツシュ「今宵はここまでだ。バーサーカー！ライダー！帰るぞ！俺は満足だ！」

ドレイク「遊ぶだけ遊んで帰るってかい？好きだねえ！アンタも！」

ギルガメツシュ「ふん。今回は見逃してやるのだ！有難く思えよ！」

その言葉を最後に。英雄王たちは姿を消す。

そこに残ったのは。僅かな静寂のみ。戦兎たちは変身を解き、お互いの顔を合わせに

行く。

帝「戦兎さん！一海さん！シユンガさん！無事だったんですね！」

戦兎「ああ、剣崎と別れたあと、一海の救出に行つてたんだ。そしたらこのサーヴァントたちがいてなあ」

一海「正直、キツかった。」

剣崎「生きているなら大したものだ。元々仮面ライダーは対人用に作られたものではないからな。」

シユンガ「人と戦うのは慣れませんか。いえ・・・できるだけ慣れたくないですね。」

一海「とりあえずそちらの世界の現状も聞きたい。・・・？玲音。キャロルは」

玲音「生きてますよ。」

そう言い、玲音は翼たちに保護されたキャロルを指さす。そこには後で到着したエルフナインと抱き合つてる絵があった。

鈴夢も、クリスたちに担がれながら近くまで来ていた。抜剣・・・と、言っていたが、玲音たちはあまり気にしないことにした。

帝「鈴夢なら大丈夫ですよ。アイツはああ見えて頑丈ですから。」

玲音「でもまあ。セレナさんたちからお仕置きは受けそうだよなあ。なんせ命令違反

してまで逃げたんだからなあ」

戦兎「あはは・・・いつもの鈴夢の光景だな。」

帝「これを気にいつもの鈴夢に戻ればいいんですけどね。」

劍崎「どうだろうな。」

シユンガ「と言うと？」

劍崎「1度力を使えば、それに取り込まれたままになる・・・なんてのはよくある話だ。だが、鈴夢のことだ。俺にはわからんよ。」

皆「・・・」

戦兎たちが話してるのとは別に、鈴夢はセレナたちから説教を受けていた。

セレナ「つたく！傷も治ってないのに行くから・・・」

鈴夢「・・・治つてると思っただですよ・・・そのー、ビートいるからあ・・・」

セレナ「そいつがいるからって！鈴夢の命はひとつなのよ！わかる!!」

鈴夢「うう・・・」

クリス「命令違反は救えねえなあ・・・先輩はどうだよ。」

さらにその傍ら、クリスと翼が腕を組みながら鈴夢とセレナの様子を見ていた。翼だけは様子がおかしかったが。

翼「そうだな雪音。しかしこれはチャンスでは？」



クリス「？」

翼「鈴夢を看病する必要があるだろう。なら私たちが看病すれば・・・」  
クリス「なるほど。合法的に一緒にいれるわけだな。」

翼「うむ。」

2人がコソコソと話す中。鈴夢はセレナに叩かれて気絶していた。

## 第22話 しばらくの平和 その1

戦兔「おはよう。一海。」

一海「ん？もう朝か・・・」

先日の全員合流した戦いの次の日。戦兔たちは二課の一室で目を覚ました。

ちなみに二課には追加メンバーの存在は紹介し、戦兔に関しては科学者だからか。子さんにスカウトされたが華麗にスルー。他のメンバーもゆっくりと昨日を終えた。

ちなみに二課は施設拡張したらしい。鈴夢と緒川さんが空間建築したとか。マイ○ラかな？

一海「ふぁー・・・」

戦兔「先行つてるぞー」

一海「あーい。」

戦兔は身支度だけさっさと終わると、そのまま部屋を後にする。

部屋から出た直後。トレーニングルームから音が聞こえてくるので、戦兔はちよこつと覗きに行く・・・そこには拳で撃ち合う緒川さんと玲音の姿があった。

戦兔「・・・何してんすか。緒川さん。」

緒川「おはようございます。戦兔さん。今は朝から玲音さんと撃ち合っていた頃なんですよ。」

戦兔「玲音も緒川さんも早起きですね」

玲音「そんな早起きですか？」

戦兔「俺たちからしたら早起きだ。」

と、話しているとそこにマシユ、ジャンヌ、キヤロルの3人が現れる。こうして見ると保護者たちが子供を連れてるように見えて仕方ない。

キヤロル「なんだ。」

玲音「・・・おはよう。」

キヤロル「・・・おはよう。」

戦兔「初心者か。」

緒川さんも続けてキヤロルに挨拶をする。そして挨拶を終えるとキヤロルはマシユの後ろに隠れてしまう。

戦兔とトレーニングを終えた玲音は早速食堂へ・・・そこには2人の似たもの同士が戦争を繰り広げていた。

クーフリーン（槍）「んだと!?本物のクーフリーンは俺なんだよ!オラア!」

クーフリーン（杖）「んだと!?本物のクーフリーンは俺だつての!オラア!」

戦兎と玲音は「またか・・・」と、頭を抱えながら食堂の配膳口へと向かう。そこでは家庭的なセレナとマリア、そして鈴夢が食事を作っていた。

チルカ「？（ω、？）ニャー」

玲音「おはよさん。」

戦兎「この猫は元気だなあ。幻想郷以来か？」

玲音「そんな所まで行っただんですね。戦兎さんは」

戦兎「ん？違う違う。鈴夢とそこで会っただよ。」

玲音「・・・あー、」

納得した2人は、それぞれ朝食を受け取ると、席に着いて食べる。

少し遅れて一海、シユンガ、帝が仲良くやってくる。

玲音「ん？剣崎さんは？」

鈴夢「剣崎さんなら少し早めに食べてどっかいったけど・・・」

戦兎、玲音「・・・」

2人が沈黙する間に一海たちは朝食を受け取り、ゆっくり食べる。

鈴夢はお茶を淹れて、戦兎たちに出してくれる。

戦兎「朝はコーヒーとか飲みたいよなあ。」

玲音「カフェイン摂取ですか？あんまり飲みすぎるとダメですよ？」

戦兎「知ってる。」

一海「あつ。玲音。マヨを」

玲音「どうぞー。」

帝「もぐもぐ・・・シユンガさん。半分あげますよ。半分。」

シユンガ「好き嫌いかよ！いらねえ！」

仮面ライダーズが、朝食を取っていると、少し遅れて女子組がやってくる。

クリスに関してはパジャマが少しはだけてしまっている。他にも、エリザベートは朝からテンション上がりまくりだったり。アルトリアは剣を振ってきたのか、額に僅かな汗が。スカサハはいつも通りのタイツ姿だった。

スカサハ「マスター。私の朝食はマスターでどうだ？」

鈴夢「僕は食べませーん。次ー」

エリザベート「あら？健康な配膳ね。しっかりしてるのね。子ブタは。」

スカサハ「肉をくれ。肉を」

鈴夢「ダメです。朝は控えめをお願いします。」

そう言うと、鈴夢はエプロンを脱ぎご飯を食べようとするが・・・

清姫「まーすーたー？」

鈴夢「んあ？」

清姫「いただきまあす♪」

鈴夢「来んなアアアっ！」

鈴夢の後ろにはヨダレを垂らしまくってた清姫が、我慢の限界と言わんばかりに猛スピードで鈴夢に襲いかかるが、鈴夢は机を巧みに使い、清姫の拘束を躲していく。

奏「あー！うるせーな！ご飯が食べれないだろ！」

鈴夢「すいませんね！清姫！外に行くぞ！」

清姫「デートですか!?!わかりました！なら私と抱き合って・・・！」

鈴夢「ちーがーうーだーろ！デートなんか行くか！くそっ！動き早いなコイツ！」

清姫「お待ちください旦那様アアア！」

鈴夢「誰かタスケテエエ！」

鈴夢は奇妙な叫び声と共に遠くへ行くと、入れ違いでエミヤとガヴェイン、エウリュアレが現れる。

エミヤ「朝からお風呂とは良い身分だな」

エウリュアレ「あら。美貌を保つためよ？仕方ないとは思わないかしら？」

ガヴェイン「タオルを変えましょう。こちらになります。」

・・・まるで執事とお嬢様だ。そんなツツコミを入れたかったが、みんなはスルーする。

そのさらに後に響、調、切歌が現れて大半のメンバーはここに集まっていることになる。

マリア「さて。セレナ、私たちも食べましょうか」

セレナ「ええ。マリア姉さん。鈴夢はいないけど・・・あのバカ。」

マリア「いいのよ。鈴夢の居場所ならわかるからね。」

セレナ「え？」

セレナはもちろん。戦兎たちも驚きながら次の言葉を待つ。

そしてマリアは腕に着いている時計をセレナへと見せる。そこには鈴夢・・・？の居場所が移動とともに映し出されていた。

マリア「司令にお願いしたら作ってくれたわ。これがあれば鈴夢の動きは丸わかりね。」

セレナ「・・・まだ無駄なものを作ったわね・・・姉さん。」

マリア「無駄じゃないわ。鈴夢を私たちのものにするためよ？セレナ。」

戦兎たちはこのセリフに鈴夢の安否を祈るばかりだった。いや。祈っても仕方ないが。

一海「鈴夢は意外にもすごい所で生活してるんだなあ。これじゃあ、命がいくらあっても足りないなあ。」

玲音「あれ以上にヤバいのを戦兔さんは知ってるんですよ？それに昨日は・・・」  
戦兔「ああ、昨日は鈴夢の看病とか言いながらクリスが怪しい薬を鈴夢に飲ませようとしたし。翼さんは布団に無言で入るだろ？正直あれはまだ、まともだが・・・マリアさんは鈴夢から離れること無かったし、切歌、調のコンビは鈴夢に下着で襲いかかったんだぜ・・・？止める方の身にもなってくれよ。」

シユンガ「よく生きてるなあ、鈴夢。」

玲音「剣崎さんも似たようなものですよ？」

4人「ふあっ!？」

玲音の一言に驚く4人。玲音は「どうした？」と言わんばかりの顔で、4人を見渡す。

4人は玲音を驚愕の眼差しで見続ける。

帝「・・・剣崎さんも？」

玲音「ああ、確か剣崎さんの世界もヤンデレだらけで、確か襲われそうだとか・・・」

戦兔「よく生きてるなあ・・・」

一海「玲音も驚いてないが、もしかして玲音もヤンデレに・・・」

玲音「ヤンデレとはなんぞや？」

帝「そこから教えるのかー、めんどくさい。戦兔さーん。」

戦兔「俺もパスで。」



シユンガ（そこはパスする所じやないですよ！戦兎さん！）

速攻で食べ終えた仮面ライダーズは、食器だけ簡単に片付けると、そのまま外へ行く  
と見せかけてガレージへと向かう

そこには鈴夢のバイク含め、多くの機体が置いてあった。

玲音「はあー・・・こいつで走れないのは辛いなあ」

戦兎「作って交通規則バリバリアウトか。そりやお蔵入りにもなるな。」

シユンガ「納得出来る条件しかないな。」

一海（まず交通規則を守れないマシンを作る理由が見当たらないが・・・突っ込むのはよそう。）

玲音は工具一式を持ってくると、白いヤツ。名称、アスラーダをカチャカチャと弄り始める。

帝「サイバーシステム・・・でしたっけ。二段ブーストもありましたし・・・こいつのスペックつてどれぐらいなんですかね？」

一海「それに変形も出来るんだろ？」

玲音「ええ。一応、サーキットモードとエアロモードの2種類ありますよ。エンジン  
の問題もないです・・・ないはず。」

疑うような言い方をする玲音。戦兎たちは疑問を浮かべるわけでもなく。ただアス

ラーダを眺めているだけだった。

剣崎「……。」

ビル頂上。そこでは剣崎が風に当たりながら立っていた。

普通に立っているだけなら問題ない……しかし、剣崎が立っているのは落ちるスレスレの部分だった。

剣崎「よく見えるな。今日は最高の晴天だ」

……こんな風になるのには理由があった。

剣崎（……響たちが心配だなあ。）

玲音（どうしたんです？ 難しい顔して）

剣崎（いや、あつちの世界の心配しててな。）

玲音（ん？）

剣崎（帰ったら響たちに殺される……）

玲音（……あー。）

と、そんな話の経緯から。現実逃避のような形でこの場所で黄昏ているのだ。

鈴夢の天使達に頼めば、何とかしてくれるのだが……その考えだけは今の彼には無かった。

劍崎（次は……ん？あれは）

遙か高くの場所から劍崎が見つけたのは戦兔と調、切歌だった。どうやら無理矢理引つ張りだされてきたのか。戦兔は引きずられる形で運ばれている。

劍崎（……面白そうだ。あとを付けてみるか。）

そう言うのと再びコートを羽織り、劍崎は姿を消し、ビルから飛び降りた。

劍崎が戦兔を追いかけてから数時間後。戦兔は窮地に立たされていた。

理由を聞かれれば……

戦兔（俺は何故ここに来ているのだろう。）

戦兔が水着コーナーにいることだ。

切歌、調に連行された戦兔は今度みんなで行く、海に向けて水着を買うのに連れてこられた。

戦兔（……暇だなあ。一海でも呼ぶか。）

そう思い、スマホから一海へと連絡を入れようとすると、丁度いいタイミングで切歌と調が現れる。

手には買い物袋。恐らく買い物を終えたあとのだろう。

切歌「戦兔さん！ありがとデース！」

戦兔「ん？満足なものは買ったのか？」

調「うん。これなら鈴夢さんも落とせるってぐらいには良いものを買えたよ」

戦兔「・・・鈴夢を落とすのはやめて欲しいなあ・・・」

そう言うと、切歌、調は戦兔に買い物袋を持たせて、次の場所へと戦兔を引っ張っていく。

切歌「次行くデース！鈴夢さんたちへのお土産デース！」

戦兔「・・・勘弁してくれよ。」

二課のトレーニングルーム。中ではスカサハとクローリン（槍）がうちあつているのが見える。

そしてガラス窓からその様子を確認出来る部屋では、一海とシユンガが様子を見ていた。と、そこに帝が入ってくる。

帝「一海さん。トレーニングですか？」

一海「ん？いや・・・ちよつとコイツらの戦い方でも見ておこうかなって」

帝「サーヴァントのですか。」

シユンガ「ああ、これからもコイツらを相手するとなると戦い方は見ておいて損は無いからな。」

そう言って、ガラス越しの光景を見つめる3人・・・

この後の特訓で。地獄になるとは誰も知らなかった・・・

## 第23話 今日俺が稽古をつけてやろう!その1

鈴夢「特訓ですか？」

二課、娯楽室では、ボロボロに帰還した戦兔、平和に家事をこなしていた鈴夢と弦十郎が話をしていた。

弦十郎「ああ、今ちようど鈴夢の英霊たちが戦っているが・・・少ししたら空くのでな。どうかと思ったが」

鈴夢「俺は大丈夫ですよ？戦兔さんは？」

戦兔「ん。まあ、鍛錬は大事だからな。俺も引き受けるでしょう。」

重たい身体を起こし、戦兔は先にトレーニングルームへと向かう。

鈴夢は掃除機を片付け、エプロンを外すとそのまま部屋を後にする。

弦十郎「む。玲音くんがいないが・・・大丈夫だろう。」

そう言うOTONAの顔は、自信に満ち溢れたような表情と同時に、無邪気なワクワク顔になっていた。

玲音「トレーニング？もちろん行くが・・・」

ガレッジにも、訓練参加の要請は届いていた。奏が直接連絡を入れたのだ。

玲音は曖昧な返事をする、通信越しだが奏は喜びの反応を見せる。

奏『そうかそうか！なら早く来いよ！』

玲音「は？概要は？」

奏『自分の目で見ろ！』

その叫びを最後に通信は切れ、玲音はアスラーダの下から現れると身体を起ここす着ている作業服は少し汚れていて、とても外に行くものではなかった。

玲音「このまま行くと怒られるかな。」

そう思い、玲音は作業服を脱ぎ、ガレッジ入口に干してある上着を身にまといガレッジを後にした。

トレーニングルームでは、ノイズの大量発生を想定した特訓が行われていた。今いるのは一海、帝、シユンガの3人だ。

それぞれ、イクサ、サイガ、電王・ストライクフォームに変身して戦っている。

一海「帝!そっちに抜けた!フォロー頼む!」

一海が抑えている場所。ここを彼らは第一防衛線。そう仮称して訓練していた。

一海が大きいノイズを抑えていると、小型のノイズが多数、一海の横をすり抜けて防衛線を突破していく。

帝「了解です!」

一海がいる場所から少し離れた所で、帝はブースターライフルで迫り来るノイズを撃つ。

帝がいる場所が第二防衛線。ここを抜けると最終防衛線へ行かれてしまう。

帝「遠くなら・・・数は減らせるはずっ!」

引き金を引くと、数秒遅れてノイズが爆散していく。

砲撃を続けてしばらくすると、ノイズが帝とさほど離れない距離まで接近してくる。

帝はブースターをトンファーのようなモードにすると、接近して蹴散らしていく

帝に向かってくるノイズもいれば、それを素通りするノイズもいる。

さらに帝はフォンブラスターを抜けていくノイズに向けて放つ

帝「くっ・・・!シユンガさん!任せました!」

しかしせいぜい数は減らせてもノイズは全滅した訳では無い。そのままノイズは最



後の防衛線に向けて進軍していく。

帝は苦しい声で、そう叫ぶと最後の防衛線にいるシユンガはブレイクソードを構え、接近してくるノイズへ攻撃する。

シユンガ「くっつ！数が多いだろ！誰だよ設定したの！」

了子『ゴメンね〜』

シユンガ「テメエエエ！」

部屋に引きこもる研究者からの悪意に、シユンガは叫びながらもノイズを倒している。

しかしそれを素通りしたノイズは・・・防衛線を・・・

シユンガ「ダメだ！また・・・抜かれる！」

一海、帝「っ！」

その時、空から銃声が聞こえたと同時にトンボが空から飛来する。

さらにシユンガの視線の先・・・防衛線の向こうからは一人の人間が走ってくる。トンボも高速でそちらに向かっていく

シユンガ「あれは・・・玲音か！」

玲音「またせたな！変身！」

『変身』

トンボ：…ドレイクゼクターがグリップにハマリ玲音の身体を機械的なライダーアーマーが覆っていく。

玲音「キャストオフ！」

『キャストオフ。』

叫び声の後、装甲が弾け飛ぶと下から本来の仮面ライダーの姿が現れる。

『チェンジ、ドラゴンフライ』

シユンガ「玲音！援護を頼む！数が多くて・・・！」

玲音「分かった！」

そのやり取りの後、シユンガはノイズを吹き飛ばすと一旦防衛線側に下がる。その後、玲音の手にある銃から放たれた弾丸がノイズの身体を溶かしていく。

シユンガ「・・・数は多い。一海と帝が抑えてくれててもこのザマだからな。」

玲音「まあ、2人ならなんとかなると思いますけど・・・」  
迫り来るノイズの数を見て、玲音は苦笑いする。

ノイズの数は一海と帝で減らしてるとはいえ、玲音たちが見ているノイズの数は減つても見えないように見えた。

玲音「まあ、作った人には後で文句言うとしましようよ。今はこれをどうにかしましよう。」

シユンガ「了解！」

玲音は腰に手を当て、加速してノイズの群れへと突っ込んでいく。シユンガも遅れてノイズの群れへと突っ込んでいく。

ちようどその時、最後の防衛線の向こうから新たな人影が走ってくる。

鈴夢「！遅れたか！」

戦兎「一海！帝！シユンガ！今助けるぞ！」

それぞれビルド、海賊レッシャーとビート、ウォータースタイルへと変身している。

鈴夢「行きますよ！」

戦兎「鈴夢は帝、一海の方へ！俺はここを死守する！……2人を頼むぞ！」

鈴夢「了解！」

鈴夢はノイズを踏み台に、2つ目の防衛線がある所まで疾走する。戦兎はそのまま最後の防衛線付近から弓を放つ

シユンガ「戦兎さん！」

戦兎「シユンガ！ここを抑えるぞ！」

玲音「戦兎さんがいれば百人力さ！」

最後の防衛線の防御力が高まり、鈴夢は戦兎に言われた一海、帝のいる防衛線まで走っていた。

途中、進軍するノイズを切り裂きながら目的地まで足を動かしていた。

鈴夢「一海さん!帝さん!」

一海「鈴夢か!間に合ったぞ!」

鈴夢「間に合って良かったです!これより前線に加わります!」

帝「頼んだ!」

2人は数が数なのか、第2の防衛線まで下がって2人で戦っていた。

鈴夢は2人の前に出て、二刀の刀でノイズの身体を的確に切り裂く。

鈴夢「よしっ!・・・これで!」

と、鈴夢が大きいノイズを切り裂こうとした時だった。

「爆裂っ!」

突然大きな声が聞こえたと同時に、鈴夢、帝、一海の眼前のノイズたちが全て吹き飛ば、その後相手していた全てのノイズが消えていく。

砂煙の起こる中。鈴夢たちは状況が飲み込めないでいた。

鈴夢「なんですか・・・何があるんですか。」

帝「わからん。突然ノイズが消滅して・・・一海さん!そっちは!」

一海「向こうも同じみたいだ。突然こっちで爆音が聞こえた後、ノイズが消滅したらしい・・・一体何が。」

鈴夢たちの疑問はありえない形で解けることになる。

砂煙が晴れると、そこには鈴夢たちシンフォギアの世界では見知った。最強の人間の人影が立っていた。

弦十郎「さあ！お前ら！テストの時間だぞ！」

帝、一海「お！おっさん!?!」

鈴夢「……かあ……」

鈴夢たちは風鳴弦十郎の突然の登場に普段は出さないのであろう声を上げてしまった。通信越しの戦兎たちからは、何故か声が聞こえない。

弦十郎「テストの時間だと言っている！ここでは教官と呼べ！」

帝「結構ノリノリだなこの人！くそっ！なんで構えてんだ！てかあの手のものなんだよ！」

帝が言う物とは、弦十郎が片手に持っているガヴェインの大剣だった。

奪ってきたのか、了承を得てなのかは不明だが、弦十郎と言う人間に持たせては行けない物なのかも知れない。

鈴夢「あれはダメでしょ。人間が英霊の武器を持っていいわけ？」

帝「……俺に言われてもなあ……てか、あの人は人間なのか？」

一海「人間だったらここら辺の地形を破壊しねえよ。」

俺達の眼前には風鳴弦十郎が立っているが、その後ろは歩いてきた道を除いてボロボロになっていた。

弦十郎「どうした!来ないなら俺から行くぞ!

鈴夢「あのー……これはどう言った流れで?」

弦十郎「……今日は特別に俺が訓練を付けてやる!遠慮は要らんどお!」

帝、一海、鈴夢「えー……」

弦十郎「こちらも遠慮なしで行く!」

鈴夢たちの反応を待たずして、弦十郎の姿が一瞬にして消える。

消えた直後、気づけば弦十郎は一海の目の前まで急接近し、百裂拳を当てる。

一海「これでどうやって戦えばいいんだ!」

構え直そうとした直後、煙の中から弦十郎が現れ、一海の身体を吹き飛ばす。

帝「い、一海さん!」

戦兎「帝!一海!鈴夢!無事なのか!」

一海が吹き飛ばされたと入れ替わりに、戦兎たちがやってくる。一海は戦兎たちの頭上を超えて、建物の瓦礫の中に頭から突っ込んでいく。

鈴夢「一海さんは死にました」

シユンガ「何!?そんな酷いことが!」

玲音「シユンガ！目の前だ！」

玲音の警告が鼓膜を突き破る。シユンガの目の前には弦十郎が既に吹き飛ばす姿勢で力を溜めていた・・・そして・・・

弦十郎「ふううんぬっ!!」

溜めていた力を一気に放出した拳はシユンガの身体に吸い込まれ、鈍い音と共にシユンガの身体を吹き飛ばす。

シユンガは思考が止まり、防御をする暇もなくあつという間にその場から身体が消える。

玲音「あー・・・」

鈴夢「たーまやー」

戦兎「綺麗な花火だ・・・って！言ってる場合か！」

帝「自分で突っ込んで恥ずかしくないんですか。」

残りの仮面ライダーズは各々の武器を構えるが、弦十郎は挑発するように手を彼らに向け招くようにする

弦十郎「どうした？怯えて来れないか？」

帝「・・・っ。実際この人は強いから・・・人間なのか・・・そこが問題点なんだが。」

玲音「そもそも俺たちと生身で戦うってあたり人間の行動じゃないですよ。まあ……強さを知ってる人は知ってるんですが。」

戦兎「劍崎さんは?どこに?」

玲音「それが連絡ないんですわ。」

3人が話している間に、鈴夢は一人弦十郎へと突っ込んでいく。刀を振るものの、弦十郎には当たらない。

まるで刀の動き、鈴夢の考えていることが分かるような動きに、玲音たちは圧倒されていた。

鈴夢「っ!たあああっ!」

鈴夢の渾身の縦振りは、弦十郎の腕へと吸い込まれるが、弦十郎はそれを簡単に受け止める。

鈴夢「……っ!まだ!」

さらにナイフを取り出し、影へ撃とうとするが、弦十郎の手が鈴夢の手を払い、そのまま鈴夢の身体は吹き飛ばされる。

弦十郎「数をばらまいて何になる!心を合わせろ!」

玲音「……弦十郎さんなりに何かを伝えようとしているのか?」

と、3人が構えようとした時、弦十郎は足を地面へと突き立てる。その直後、弦十郎



の足元から物凄い衝撃波が戦兔、玲音、帝を襲う。

3人が最後に見た光景は・・・戦場に立つ修羅の姿だった。

## 第24話 大地に咲く希望の花

風鳴弦十郎とのトレーニング後。鈴夢たちは医務室へと運ばれた。

戦兎「痛たたた・・・」

一海「おはよう。大丈夫だったか？」

戦兎「筋肉痛が酷い。」

医務室を出た先では、戦兎と一海が顔を洗いながら話していた。その少し後、遅れてシユンガも部屋から出てくる。

シユンガ「お疲れ様です・・・」

戦兎「大丈夫か。顔が青ざめてるが・・・」

シユンガ「大丈夫に見えます？あの訓練の悪夢が蘇って・・・ははは・・・」

一海「重症か。とりあえずエルちゃんとこ行こうな」

シユンガ「・・・」

一海はシユンガを抑えて、そのまま引つ張っていくようにシユンガを研究室まで連れていく。

戦兎はそのままガレージへと顔を出そうとするがそこにこの地獄に参加しなかった

人間が・・・

劍崎「お疲れ。」

戦兎「うおおおおお！」

帝「すとおおおつぷ!!!」

劍崎がひよろつと顔を出した瞬間。戦兎は獣になったかのように劍崎に飛びかかろうとするが、そこにちょうど帝が現れそのまま戦兎を止めに入る。

劍崎「大丈夫だったか？」

戦兎「煽ってきやがってえ!!!帝!はなせええええ!」

帝「やめてええ!劍崎さんも!はやくにげてええ!」

劍崎「いや。俺は別に訓練行つてもよかつたがな。ほら。俺が行つたつて面白くないだろ?」

戦兎「・・・」

劍崎「それにあの人が入っていくあたり、この訓練は地獄と化すことが分かつてたからな。」

劍崎の言うことも最もだった。そもそもここにはシンフォギアの世界関連の奴。つまり帝、一海、玲音、劍崎がいる。つまり弦十郎の実力はこの4人は嫌でも知っているはずなのに・・・

戦兔「謀ったな？」

劍崎「なんのことやら。」

戦兔「……」

劍崎はすつとぼけた顔でその場を去る。どうやら彼には分かっていたようである。

帝はその隙を見計らいそのまま帰ろうとするが、戦兔はどす黒い声で帝へ問う

戦兔「帝は知ってたのか？あの人の力を……」

帝「知ってた……と言えます。はい。」

その答えに対し、戦兔は帝の方をゆっくり振り向くと、帝の頭を掴みいい笑顔で応える

戦兔「よし。今から特訓だ手伝ってくれるよな？」

帝「……はい。」

そのまま引きずられるように帝は誘拐された。

一海「お疲れ様。頑張るな玲音。」

玲音「お疲れ様です。身体は大丈夫なんですか？」

ガレージ。シユンガを送り届けた一海と、アスラーダを調整していた玲音が話している。

一海「あの人も物好きだなあ・・・まさか訓練に入ってくるなんて」

玲音「・・・はは・・・まあ、考えればやりかねない人ですよ。でも、お陰でやるべき事は決まりました。」

一海「やるべき事？」

玲音「ええ。俺たちに来ること、俺たちだから出来ること。ですよ。」

玲音の予想外の応えに、一海は首を傾げながらも、アスラーダの新品のツルツルな車体に触れる。

下では玲音が工具でカチャカチャ点検しているが、それを無視して一海は品定めするようにアスラーダの周りを見る。

一海「玲音。これももう1台作れないのか？」

玲音「どうしてです？」

一海「いや。俺もこれ使って走りたいって・・・な。」

玲音「・・・まあ、制作費貰えたら頑張りますよ。」

一海「制作費って何処から出るの？」

玲音「Googleで。」

鈴夢「おは。」

スカサハ「む。マスターか。夜分遅くにどうしたのだ？ 添い寝か？ なら仕方あるまい……」

鈴夢「違う違う。そして布団に空きスペースを作らないで。お願いします。」

そのまま部屋のポットを使い。紅茶を淹れると手馴れた動きで砂糖を入れ、甘さを出す。

鈴夢「どうぞ？」

スカサハ「すまんな。」

紅茶を飲み、2人で落ち着いたところで、鈴夢からスカサハへと話を切り出す。

鈴夢「スカサハ……1つ聞いていいか？」

スカサハ「なんだ？ 婚約なら今からでもしてやるぞ？」

鈴夢「結構です。それよりも……俺がマスターなんかでいいのか？ 本当なら俺じゃなくて。別のマスターが召喚するべきじゃないのか？ それこそ戦兎さんたちや……弦十郎さんとか……」

そう続きを紡ごうとする鈴夢の唇をスカサハは、その綺麗な指で抑える。そんな意外な行動に鈴夢は少し下がりがり唇を拭う、その額には緊張なのか、もしくは照れているのか、汗が僅かだが見える。

鈴夢「な、な、ななっ！」

スカサハ「なんだ。戯れ言を言っていたからうるさい口を閉じた迄だ。」

鈴夢「・・・戯れ言って。」

スカサハ「・・・確かに。マスター以外の奴に呼ばれることもあるが・・・今は違う。」

鈴夢「・・・何が？」

スカサハ「貴様がマスターの理由はただ一つだ。状況だ。そして、貴様自身が何かを引きつける力を持っている・・・ということだろう。」

鈴夢「え？」

その瞬間。扉が壊れ、そこから鈴夢の仮契約サーヴァントが雪崩のように入ってくる。

クーフーリン（槍）「テメエ！お前が居なきやスムーズに入れただろうが！」

クーフーリン（杖）「俺のせいだよ！全部テメエが悪いだろうが！表出ろや！」

クーフーリン（槍）「上等だゴラア！」

そのままクーフーリンは口論を起こし、そのまま2人仲良く部屋の外へと出て行って

しまう。

他のサーヴァントたちは、鈴夢の前に行くなり、それぞれの姿勢で言葉を待つ。

鈴夢「……みんな。」

マシユ「先輩……あのー……ここにいる皆さん。そして私は先輩のことをマスターと認めてるんですよ？」

鈴夢「そうなのか？」

エミヤ「まあ。そうでなければここまで着いては来ないだろうな。」

ガウエイン「それに貴方でなければ、恐らくここまで来なかったでしょう。」

鈴夢「……まじ？」

アルトリア「マスター。今一度。我らと親睦を深めませんか？」

アルトリアの意外な提案に、鈴夢はどうとう固まってしまう。

他のサーヴァントは、当然かのように酒を出したり、さらにはクツキーなどのお菓子を持つてくる。

鈴夢「ノリの良さは超一流だね。」

ジャンヌ「それが私たちですから。」

鈴夢「……(ぽりぽり)」

エウリュアレ「あら。クツキーが消えたわ。」



スカサハ「ほらほら。もつと飲め！」

エミヤ「ガボガボガボ……」

ガウエイン「アーサー王。飲み過ぎは程々に。」

アルトリア「お腹が減りました！ガウエイン卿！ご飯を！大盛りで持つてきなさい！」

清姫「ふふ。マスターを酔った隙に食べれば……」

鈴夢「……参ったなあ。」

一人、牛乳を飲みながら鈴夢は楽しそうなこの景色を、思い出しにしまい込むかのように眺めていた。

ドクター「そうだね。このままイグナイトシステムとやらの転用は行けるよ。」

エルフナイン「ありがとうございます。ドクター。」

ドクター「いやいや。お礼は要らないよ。」

研究室では、科学者5人と、その保護者である風鳴弦十郎が現場監督として立ち合っていた。

研究室の大きなモニターには、各聖遺物のデータが映し出されていた。

弦十郎「これで各装者がイグナイトシステムを使えるわけか。」

ドクター「ええ。ですがイグナイトシステムつてのは魔剣の力を加えたものなんですよね？」

エルフナイン「はい。」

ドクター「・・・身体の負荷つてのは？」

キャロル「当然不明だ。しかし。彼女たちなら超えられるだろう。」

弦十郎「・・・」

無責任な応えにドクターは頭を抱え、弦十郎はモニターを睥む。

鈴夢のイグナイト。ダークネススタイルとの融合は成功。闇の意識を追い出し、彼自身の意識を取り戻すことには成功した。

が、心に迷いがある彼らは・・・恐らく。

弦十郎「いや。この話はよそう。一応だが、装者たちには俺から話しておこう。」

ドクター「じゃあ僕達はこたつでぬくぬくしようかな？」

キャロル「・・・(うずうず)」

エルフナイン「鈴夢さんの所に私は行きます。お身体のこと心配なので・・・」

エルフナインは慌てて白衣を着て、診察用のボードとペンを持って部屋を後に、ドク

ターは研究を終えると、近くのこたつに入り、パソコンを弄り出す。

了子「キャロルちゃんは行かないのかしら？」

キャロル「・・・な、何を！」

了子「鈴夢くんのが心配じゃないのかしら？」

覗き込むように尋ねる了子に、キャロルは頬を赤くしながら応える。その行動が面白いのか、了子はニヤニヤしながら、手元にある鈴夢のデータを見て独り言のように呟く了子「そうねー。鈴夢のイグナイトデータは興味あるわねえ。動きもいいし。これなら良い実験台になってくれるかもねえ・・・」

キャロル「それはダメだ！鈴夢は・・・わ、わ、私たちの・・・実験台になるんだ！」

了子「あら、素直じゃない子ね。」

キャロル「うるさいっ！」

鈴夢「劍崎さん。」

ワイワイ騒ぎの翌日。エルフナインの診断を一通り受けた鈴夢は、劍崎を尋ねていた。

剣崎「……なんだ？」

鈴夢「俺に戦いを教えてください。」

剣崎「……はあ。」

突然の申し出に、剣崎は戸惑い、隣に付き添っていたエルフナインは鈴夢の頬を引っ張る

鈴夢「痛い痛い痛い！」

エルフナイン「ダメに決まっています！司令とのトレーニング後の疲労も抜けてないでどうするんです！」

鈴夢「大丈夫だから！ほら！人間じゃないし！」

エルフナイン「人間とかではないです！生きてるもの全て、疲労は感じるものなんです！ゆっくり休んで下さい！ほら！」

エルフナインに引っ張られるように剣崎から離される鈴夢。しかし剣崎は少し悩んだ後、バックルを腰に巻くと、訓練室へ向け歩き出す。

剣崎「いいだろう。ただし。お前の疲労が治ってからな。」

鈴夢「剣崎さん？」

剣崎「疲れてるやつとやっても面白くないだろ？だったらお互いフェアでやる方が楽だ。」

鈴夢「はい！」

エルフナインに引つ張られ、完全に剣崎さんの声が聞こえなくなる時、部屋で剣崎が少し微笑みながら訓練室へと一人歩いていった。

エルフナイン「……この腕はなんですか！鈴夢さん！」

鈴夢の自室に着くなり、エルフナインは鈴夢の腕を鈴夢自身に見せながら叫ぶ。

鈴夢は焦りながらも「まあまあ」と、エルフナインをなだめるものの、エルフナインは泣きそうな顔で怒りを見せる。

エルフナイン「……このまま行くと鈴夢さんが鈴夢さんじゃなくなりますよ！」

鈴夢「……」

エルフナイン「とりあえず進行を抑える薬は打ちますね！」

鈴夢「……ありがとう。」

……その時の鈴夢には、自分の腕は、目玉の生えた……化け物のような腕に見えていた。

## 第25話 目覚めの福音・銀腕・アガートラーム その1

未来「響ー！」

響「待ってよー！未来ー！」

激しく輝きを放つ太陽の下、砂浜を走る2人の姿が海に映し出される。

さらにその光景の少し離れたところでは、ベンチを引いて寝そべる人影もある。

そんな中で、それを遠くから見守る人影が3つ。それも休憩所から皆を見守っていた。

玲音「・・・うみー。あつーい。」

一海「ほれ。ポカリ買ってきたぞ」

そこでは男3人が暑さに負け、机に寝そべっており、その中で一海の手にはポカリ、アケリアスが握られていた。

シユンガ「はあ、本当に来るんだから。」

玲音「弦十郎さんの提案が凶とでましたね。・・・まあ、否定しなかった俺達も悪いですが。」

一海「そういえば、戦兎さんたちは来ないのか？」

玲音「訓練中ですって。なので遅れて来るそうですよ。」

ここ、鈴夢の友達である紫藤 玲奈の私有するビーチでは、この3人。そしてシンフォギア装者（奏を除く）がバカンスを楽しんでいた。

二課に残った人達は何んでもやることがあるそうぞ。

玲音「にしても、鈴夢が来ないのでよく来る気になりましたね。彼女たち。」

シンガ「来なかったら俺達が消されるぞ」

一海「まあ。嫌でも緒川さんが連れてきてくれるからな。俺達は俺達でバカンスを楽しむとしようぜ？」

玲音「賛成です。」

シンガ「んじゃあ、泳ぎに行きますか？」

と、休憩所の時計が鳴る音がする。

時間を確認すると、針はお昼を指していた。

玲音「ん。やばいな。」

一海「お昼・・・どうしようか？」

玲音「お昼はマリアさんとお先に作る予定だったんですけどねえ。俺行つてきます。」

シンガ「了解。美味しい飯をよろしく頼む。」

玲音「心得た。」

そう言うと、玲音は上着を着て外へと走り出す。

外では、装者たちが思い思いの時間を過ごしていた。

と、玲音は一直線に、ベンチに寝そべるマリアへ向けて走っていく。

玲音「マリアさん！マリアさん！」

マリア「あら、玲音。どうしたの？」

玲音「時間ですよ！時間！」

セレナ「……姉さん。12時ですけど……」

マリア「あつ。」

玲音「急がなくてもいいんで行きますよ！」

そう言い、玲音は2人の手を掴むとそのまま宿のある方へと向かって走っていく。

クリス「宿ってあのちっちゃい森を抜けた先だろ？」

美月「そうそう。森を抜けた先がお城……いや、館があるなんてロマンティックじゃない？」

クリス「……何もなければいいけどな」



マリア「……玲音？一つ聞いてもいいかしら？」

宿へ向かう最中。マリアは突然、玲音へ声をかける。

玲音たちは向かう足を止めず、そのまま宿へ向かいながら会話を続ける。

玲音「なんですか？」

マリア「貴方なら……困ってる人がいたら質問に乗ってあげるのかしら？」

玲音「どういう意味ですか？」

マリア「聞き方が悪かったかしら。……悩みがあるのに、それを誰にも言えなくて、自分で抱え込んでる人がいたら……貴方は声をかけれる？」

マリアの質問に対し、玲音は少し口を閉じると誰のことを言っているか理解したかのように、再び口を開き始める。

玲音「さあ？俺はその時の流れ……ですかね？」

セレナ「答えになってないです、ちゃんと答えて下さい。」

玲音「……悩みがあるのはいつものことだろ？それこそ後悔とか……嫉妬とか……ましてや復讐心とか。悩みの種ってのはどこでも落ちてるもんなんだよ。それをどう拾うかってことじゃないのか？」

マリア「悩みの種？」

玲音「うん。人の悩みは突然出るもんじゃない。何か原因と言う餌があつて、初めて

悩みの芽が出るんだ。悩みが解決する時つてのは自分の因縁を断ち切った時なんだよ。」

セレナ「……因縁。」

玲音「そしてそいつの悩みつてのは多分、断ち切るべきものなんだと思う。……少なくとも……ね?」

笑顔で答え、そのまま話すことのない3人。

しばらく進むと、玲音の足が止まり、後ろを歩いていた2人も足を止めてしまう

マリア「玲音? どうしたの?」

玲音「……?」

しばらく周りを見る玲音。彼女たちが周りを見ても、何も無いように見えるが、玲音は何かを追うようにしっかりと森の暗闇を見続ける。

セレナ「何かいるの? 玲音!」

玲音「っ! 来る!」

玲音が叫んだ直後、マリアとセレナの身体が吹き飛び木々へと叩きつけられる。

玲音はギリギリ回避し、姿勢を立て直して飛んできた場所から視線を外し、別の暗闇に視線を通す

玲音「ザビー!」

腕のブレスレットと、手にはザビーゼクターが握られ、玲音は変身体勢へと入るが、敵の姿は未だに見えない。

と、油断した直後に、先程と同じような斬撃が玲音を襲う

玲音「っ！変身！」

玲音は変身し、斬撃を近くの木を蹴って跳躍することで回避し、飛んできた方向を睨む。

玲音「誰だ！・・・って。言うまでもないな。」

そこにはパーカーに帽子、そして半ズボンと言う夏の格好をした聖剣使いが立っていた。

彼女は剣を背中の鞘にしまうと、玲音と対峙するように現れる。

???「驚きですね。私の斬撃を避けるとは。」

玲音「こう見えても戦いには慣れてる方だ。セイバーさんよ。いや、謎のヒロインXさん？」

サーヴァント。アサシン。謎のヒロインX。

他のセイバーが嫌いとか言うド畜生で、自称セイバー。正直だが、強い。

アサシンの癖して宝具EX近いんだぜ？やばいよ。

謎のヒロインX「ふん。調子に乗るのも今のうちですよ。今にボコボコにしてあげま

す！」

玲音「天然キャラ乙。」

謎のヒロインX「3枚に卸してやりますっ！」

謎のヒロインが地を蹴ると、そのまま聖剣を引き抜いて玲音を斬ろうとするが、玲音は高速化、そのまま彼女に接近して聖剣を引き抜く手を抑え、左手を自分の手と絡ませる。

謎のヒロインX「―っ?！」

玲音「残念だな。お前とは乗り越えてきた逆境の数が違うんだよ。自称セイバーなのはいいが。そのクラスに恥じない戦いをすべきだったな。」

謎のヒロインX「こいつ！私を馬鹿にして！」

怒りを見せる謎のヒロインXの聖剣は、玲音を掠めることなく、ただ残像のみを斬り裂いていく。

その間に体勢を立て直したセレナは、アガートラームを身にまとい、剣を持ってこちらに向かってくる。

セレナ「玲音！変わるわ！」

玲音「了解！」

そんな簡単な会話だけを交わし、玲音とセレナは位置を交代し、今度はセレナが聖剣

を打ち合う。

白銀の剣がぶつかる中、玲音はマリアを起こしに走る。

玲音「マリアさん！しっかり！」

マリア「・・・玲音？ぐっ！」

玲音「今動いたらダメです！安静にしてください！」

マリアを横にし、玲音はサソードゼクターが背負っていた包帯、ガーゼを傷口へと当て、応急処置をテキパキとこなして行く。

マリア「私にも・・・装者としての力があれば！」

玲音「・・・マリアさん。」

その時、セレナの悲鳴と共に、アガートラムを纏ったセレナが吹き飛ばされてくる。セレナの身体はそのまま玲音たちの近くの木へと叩きつけられる。

マリア「セレナ!？」

玲音「んなっ!？」

吹き飛ばされた事が意外なのか。玲音たちは呆気にとられるが、すぐさまセレナの方へ向かう。

玲音「セレナさん！大丈夫ですか！」

セレナ「大丈夫じゃないでしょ！一体何が・・・」

玲音たちの視線の先には・・・謎のヒロインXと、その隣には男が見える。

謎のヒロインX「・・・カルナ。何故邪魔をしたのですか!」

カルナ「お前が危なかったから助けた迄だ。アサシン。」

謎のヒロインX「私はセイバーです!」

サーヴァント、ランサー。カルナ。

ランサーのトップサーヴァントと呼べるほどの実力を持つサーヴァントで、アチャーのアルジュナとは犬猿の仲だと聞くが。敵に回つてるとは・・・

カルナ「俺は自分の目的のために大帝へと手を貸した迄だ。」

玲音「サーヴァントつてもクソ野郎だな。正義はこういう言うくせに、善悪の判断がつかないなんてな。」

カルナ「・・・何を言ってくれてもいい。」

玲音は拳をカルナと謎のヒロインXへと構えるが、2人は剣と槍を構える。戦力だけを見れば玲音の劣勢は必然である。

玲音（どうする? 2対1じゃあ勝てないな。出来ればセレナさんの援護が欲しいところだけど・・・）

マリアの方を見ると、マリアがセレナを抱えて、悲しい顔で首を振ってきた。援護は望めないだろう。

玲音はザビーの装甲を弾き、2人と向き合うが……  
??? 「おっと。無駄な事をしてもらっても困るな。」

カルナ、謎のヒロインXの後ろに謎の空間が広がり、そこから金ピカの甲冑を纏った男が現れた。前見たギルガメッシュとは違う大男だ。

玲音「……」

??? 「初めまして。かな？ 双龍 玲音。」

玲音「そうかい。俺はお前が嫌いだよ。」

??? 「我が名はカール大帝なるぞ！物の言い方には気をつけるんだな」

そう言い、剣を玲音に向けるカール大帝。

サーヴァント、セイバー。カール大帝。同化することを得意とし、宝具を2つ持つと言いが、その真意は定かではない。

玲音「で？大帝が何の用だ？」

カール大帝「何やら手こずっているようだな。私自らが出向いてやったのだ。」

カルナ「何も大帝が出向くことは無いがな。オレが来たからには心配はない。」

カール大帝「そうではないのだ。ランサーよ。」

カール大帝が謎のヒロインXに掌を向けると、謎のヒロインの心臓がある部分に光が発生する。

光は輝いていた色から、黒く染まる。それと同時に謎のヒロインXの首から黒い枝み  
たいなものが顎の辺りまで侵食する。

謎のヒロインX「あ——っ!!!」

玲音「何をしてる！お前！」

カール大帝「反転させているのだよ。サーヴァントの意識は乗っ取りやすいもので  
な。」

玲音「反転・・・？」

カール大帝「さあ！アサシンよ！私の思いに応え冥府の闇に染まるといい！」

叫び声を上げる謎のヒロインXは、そのまま闇が身体を包み込み、晴れた時には謎の  
ヒロインXは前の綺麗な美少女の原型を留めてはいなかった。

謎のヒロインオルタ「・・・」

カール大帝「さあ。目の前の敵を倒すといい。」

その時、隣にいるはずのカルナは槍を俺ではなく大帝へと向ける。それと同時に謎の  
ヒロインオルタも剣をカルナへと向ける。

カール大帝「どういうつもりだ？ランサー」

カルナ「何故、彼女を闇へと堕とした。答えろ。」

カール大帝「心に迷いがあるようだな。少し霧を晴らした迄だ。」



カルナ「・・・俺の思った答えとは違ったな。どうやら無理に貴様らに味方する暇もないようだな。」

そのまま火花を散らすカルナと謎のヒロインXオルタ。その時、玲音の前にまた、空  
間が広がるのだった。

マリア「・・・セレナ」

目の前の妹の頬を撫でるマリア。その目には微かな雫が映っていた。

マリア（私に・・・装者としての力があれば！ガングニールがあれば・・・っ！）

その時、セレナの身体が震え、その手がマリアの手を掴む。マリアは思わず、両手で  
掴み返す。

マリア「セレナ！無事なのね！」

セレナ「・・・姉さん・・・！」

セレナのアガートルームは既に解除されて、ペンダントの状態に戻っている。

セレナはそんなアガートルームを、マリアの手に掛ける。

マリア「セレナ!?これはダメよ！アガートルームは・・・貴女の物なのよ！」

セレナ「姉さん……違うわ！これは……私たちの遺産なのよ！独奏という名の血が残した！母さんの……私たちの！」

セレナは震える身体で、マリアの手を握る力を強くしながら強い、確固たる意志を持った声でマリアに言い聞かせる。マリアも、そんなセレナに驚いたのか動揺を隠せないでいる。

マリアの手を握る手が弱くなり……セレナ自身の身体の色も消えていく中。セレナは震える口でマリアに囁く

セレナ「姉さん……私の……命で戦って……」

マリア「——っ！」

セレナの意識はそれを最後に落ちてしまいが、息はある。

後ろから危険を察した一海と、シュンガが来るが、マリアはアガートラームを手に走り出す。

一海「マリアさん!？」

マリア「一海！シュンガ！セレナをお願い！」

シュンガ「……っ！分かった！死ぬなよ！」

2人はセレナを抱え、その場を離れる。マリアはそのまま玲音のいる方へと走り続ける。

マリア「アガートラム……私にも！装者の資格があるならっ！そして！鈴夢の、皆の未来を守る力なら私に力を貸して！」

　　その瞬間。力強い歌がマリアの口から歌われると共に、マリアの身体をアガートラムは包み込んだ……

## 第26話 独奏が奏でる抜剣・銀腕・アガートラーム その2

玲音「なんだ!?! 新手か!」

カール大帝「これは……!」

目の前に新たな空間が広がると、そこからサーヴァントなのか。歯車を背にした男が現れた。

男の雰囲気は落ち着いていた、学者のような雰囲気を感じさせる人だった。

???「いやはや、カール大帝。お久しぶりです。」

カール大帝「……アルキメデス……私たちと同じサーヴァントが何故、邪魔をするか。」

サーヴァント、キャスター。アルキメデス。

遊星サーヴァントで、全知全能とも呼ばれる知識者だ。月のnew聖杯戦争はこいつのせいで始まったと言っても過言ではない。

玲音「……お前。何故ここに?」

アルキメデス「いやはや。少し私の計画とは違う事が起きてしまいましたね。」

玲音「アサシンのことか。」

アルキメデス「そうです。これは月の管理者としては放つてはおけませんね。さらに。勝手にサーヴァントを同化して召喚するのも我慢してるんですよ。」

玲音「・・・」

アルキメデスが淡々と話を続けるその時、玲音の後ろから多くの銀ナイフが飛んでくる。

その直後、アルキメデスを蹴るように、銀腕・アガートラームを纏ったマリアが玲音の前に着地する。

マリア「玲音！大丈夫かしら！」

玲音「マリアさん!?アガートラームを！」

マリア「・・・話は後よ。どういう状況かしら？」

お互いの空気がおかしい事を察したのか。マリアは流石に玲音に尋ねざるを得なかった。

玲音も首を振るだけで、詳しいことは話そうとはしない。その間にアルキメデスは会話を続ける。

アルキメデス「・・・月の聖杯戦争には。B・Bとか言う小娘にメルトリリスさらには他の人間も聖杯戦争に混ざりましたが・・・その時には、サーヴァントを抑制するシ

STEMしか無かったですよ。」

玲音「・・・あれか。ゲームで見た事あるが。ネロの服が白のウェディングドレスみたいなやつになってたのがそうか。」

アルキメデス「ええ。ですがこの男にはどうやらマスターの権限も与えられてるようなのでねえ。」

玲音「月の権限が捻れてるのか？」

アルキメデス「恐らくはシステムが乗っ取られたんでしようね。そしてそれを危ぶんだ私は、月に存在する電脳体のマスターの本体を探しに来たんですよ。」

マリア「マスターの本体？」

アルキメデス「ええ。霧夜 鈴夢です。ご存知ですよね？」

玲音とマリアは同時に息を呑む。アルキメデスが出した名前に、敏感に反応してしまつた。

その反応にアルキメデスは微笑み、分かっていたような目でカール大帝を見る。

アルキメデス「さて・・・どうしましょうか？このまま戦いますか？カール大帝。」

カール大帝「・・・」

謎のヒロインオルタ「大帝。ここは私に任せてお帰りください。」

カール大帝「そうだな。少しだがお土産も置いて行こう。」

それと同時にカール大帝は消えるが、闇の空間から黒いサーヴァントたちが現れる。

玲音「シャドウサーヴァントか。厄介な。」

カルナ「足を引つ張るなよ。」

玲音「カブト。」

玲音が名を呼ぶと、ザビーゼクターは腕から離れ、ベルトにカブトゼクターがはめられ、玲音は銀の装甲を身に纏う。

マリア「玲音。」

玲音「マリアさん、やりましょう。後で聞きたいことが山ほどありますし、さらに玲音にも聞きたいことがある。そのためにも俺達は死ぬ訳には行かないんですよ！」

玲音はそのままカブトゼクターの角を反対に倒し、銀の装甲を外す。

『CHANGE、BEETLE』

そして、そのまま腰に止まっていたハイパーゼクターの角を倒すと、カブトのアーマーには、赤と銀のラインが目立つ戦士になる

玲音「ハイパーキャストオフ。」

『ハイパーキャストオフ。CHANGE、HYPER BEETLE』

カルナ「勝敗を決めるのは力ではない。」

玲音「純粋な力では勝てないって教えてやるよ。」

お互いが睨み合う中、戦いの始まりとなったのはシャドウアーチャーが放った矢だった。

矢は玲音に当たるかと思いきや、カルナが槍で弾き、玲音はシャドウに高速で近づきそのまま吹き飛ばす。

玲音「・・・今までの俺たちだと思うなよ！マリアさん！」

マリア「ええ！」

玲音の号令と共に二人は駆け出す、カルナもそれを追うかのように走り、シャドウたちの中へ突っ込んでいく。

アルキメデスは後ろへ、そのまま援護を開始してくれる。

マリア「セレナのために、鈴夢のためにも！私は・・・この剣を振るうわ！抜剣！」  
ペンダントの形を変え、元あった首元に刺すことで、マリアから流れ出るオーラが変わる。紛れもない。闇の力に変わっていく。

シンフォギアの形状も、元の銀腕・アガートラームの色から黒に変わる。

〃銀腕・アガートラーム I G N I T E〃

マリアは歌を歌いながらシャドウたちを蹴散らしていく。

玲音「パーフェクトゼクター！」

シャドウランサーとシャドウバーサーカーと打ち合う玲音は、攻撃を抑えながらも飛



んでくるパーフェクトゼクターを手にする。

パーフェクトゼクターには既にサソードゼクターが装着されており、玲音は対応する紫のボタンを押す。

『サソード、パワー。ハイパースラッシュユー!』

パーフェクトゼクターの刀身にエネルギーが走ると、玲音はバーサーカー、ランサーの攻撃を弾き、パーフェクトゼクターを胸に当て、横に振り切る。

バーサーカーとランサーは僅かにもがいた後、そのまま光の粒子となって消滅して逝く。

アサシン。いや・・・オルタと化した謎のヒロインXは不思議そうに玲音たちを見つめる。

謎のヒロインオルタ「何故だ。何故貴様らは戦うのか。大帝に従えば楽しく過ごせるというのに、自ら戦争に堕ちる世界を選ぶか?」

オルタの問い。それは今の鈴夢たちの事を指すものだった。

しかし、玲音とマリアは答えることなく、無言のままシャドウたちを蹴散らしていく。

玲音「マリアさんっ! 大技で!」

マリア「分かったわ!」

マリアが剣を蛇のように伸ばし、シャドウたちを拘束する中、玲音のパーフェクトゼ

クターには、ザビー、サソード、ドレイクゼクターが装着される。

『カブト、ザビー、サソード、ドレイク、パワー。』

マキシマム、ハイパータイフーン。』

マリアが固定した敵を、玲音は超斬撃で切り裂く。シャドウたちは一斉に光の粒子となり溶けていく。

一掃され、開けた場所に四人は集まり、謎のヒロインオルタへ牙を向けるように各々の武器を構える。

謎のヒロインオルタ「・・・」

玲音「さあ。観念してもらおうぞ。」

マリア「私たちの怒りを受けてもらおうわよ。」

しかし、彼らの先の謎のヒロインオルタはビクともしない。それどころか、彼女は背中  
中の剣に手を伸ばす・・・

玲音（ん？剣に手を伸ばして・・・なんだ？）

背中  
の剣は、鞘から少し出すだけでも負のオーラが漂ってくる。そして、それは辺りを暗くし、何か起こる予兆を作り出す。

カルナ、アルキメデスは何かを察しているのか、武器を構えるが、マリアは理解してないのか、武器を構え直し走っていく。

その光景を待っていたかのように、オルタの顔には笑顔が現れていた。溢れ出る魔力・・・玲音は何を起こるか直ぐ察した。

謎のヒロインオルタ「・・・この時を待っていました。」

オルタは背中の中の二つの剣を抜くと、構える姿勢を取り、宝具詠唱を始める。

宝具詠唱が始まると、謎のヒロインオルタの剣に魔力が集まっていくのを三人は確認した。

謎のヒロインオルタ「オルトリアクター魔力転換炉臨界突破。我が暗黒の光芒で、素粒子に還れ！  
『クロス・カリバー黒竜双剣勝利剣』!!」

大きな魔力が放出され、オルタが振りかざした剣は大地を、彼女の目の前の敵を殺すように刈り取っていく。

マリア「——っ！」

マリアはその衝撃に飲み込まれ——ようとしたその時、マリアの目の前に人が立つ。

赤と銀の鎧を纏う戦士が、翼を広げ、手に剣を持ちながら彼女の前に立つ。

マリア「——玲音！」

謎のヒロインオルタ「無駄な・・・っ！消えろおおっ！」

彼女の叫びを具現化したような斬撃が、玲音を襲おうとする。

玲音はその手に持った剣——パーフェクトゼクターを目の前に差し出す。

魔力が玲音に当たるその時。玲音はパーフェクトゼクターをその魔力の斬撃へ切り込む

魔力の斬撃へと吸い込まれるパーフェクトゼクターは、そのままぶつかると思った、次の瞬間。魔力斬撃は真つ直ぐマリアに当たるルートではなく、少し上へズレて放たれる。

謎のヒロインオルタ「なっ……！弾いたのか！あれを！」

玲音「……」

玲音はパーフェクトゼクターをぶつけるのではなく、ただ、流れるかのように魔力斬撃を受け流したのだ。

玲音には多少の傷があるものの、重症と呼べる傷はなかった。

謎のヒロインオルタ「くっ！ならもう一度！」

玲音「ハイパークロックアップ。」

玲音がハイパーゼクターの赤い部分を叩くと、再び背中の翼が開き、そのまま加速する。

オルタが再び剣を強く握るその時には、玲音は彼女の片手の剣を落としていた。

謎のヒロインオルタ「おのれおのれおのれおのれおのれおのれおのれおのれおのれ！」

玲音「所詮はお前もオルタ……つまり、ただのクソ野郎なんだよな！根はどうもこいつも一緒だな！」

謎のヒロインオルタ「贗作の出来損ないが！私に説教をするな！」

玲音「……人間ってのはみんな出来損ないなんだよ！」

謎のヒロインオルタによって振りまわされる剣。しかし、その斬撃は玲音の残像を切るだけで、玲音は彼女の攻撃を楽々に避ける。

謎のヒロインオルタ「私はセイバーなんだ！聖剣を持って！力を持って生まれた！だから強いんだ！」

玲音「っ！」

玲音は剣を振る彼女の腕を叩きつけ、剣を落としたあと、そのまま彼女へ打撃を与える。

女の命とも言える顔、腹、そして細い腕にも確実なダメージを与える。

玲音「お前は人間じゃない、バーサーカー！」

謎のヒロインオルタ「何!？」

玲音「人間なら……っ！死ぬことに抗ってみろ！」

腹に与えた一撃でよろけた謎のヒロインオルタを打ち上げると、玲音はハイパーゼクターの角を倒す。

『マキシマム、ライダーパワー。』

『1. 2. 3. . . .』

玲音「マリアさんっ！」

マリア「ええ！」

マリアはそのまま俺に向け走り出し、その手に持った刃を大きくする。

〈SERE↑NADE〉

玲音「ハイパー．．．キック！」

『ライダーキック。』

玲音は宙を舞い、マリアも同じように空へと飛ぶ、そしてそのまま2人は謎のヒロインオルタへと向かっていく。

マリア「これが．．．っ！アガートラームの力だ！」

2人の一撃は謎のヒロインオルタに吸い込まれる。

マリアの剣は彼女の身体を切り裂き、玲音の一撃は確実に彼女を地上へと落とした。

玲音「人は完璧なんかじゃない。天才だって、馬鹿だって、みんな大切なものが欠ける．．．欠陥品なんだよ。」

その数秒後。謎のヒロインオルタは光の粒子となって消滅した。

## 第27話 ヤンデレVS正常

玲音、マリアコンビが謎のヒロインオルタを倒した頃、二課では……

『ロイヤルストリートフラッシュ』

強い光と共に、再び訓練室の中が爆発する。外にいた帝、戦兎は思わずびっくりする。中からは半死状態の鈴夢とそれを引きずる剣崎の姿が出てくる。エルフナインは鈴夢の腕を掴むと、そのままズルズルと医療室へと引きずっていく。

戦兎「……またか。」

帝「……この2時間で13回死亡。どんだけ死んだら気が済むんだ？鈴夢……」

剣崎はコートを羽織り直すと、そのまま2人の目の前で姿を消す。アンデット特有の能力なのだろうか。ただ、歩く音だけが彼らの目の前には聞こえた。

そして、歩く音すら無くなると2人はさらに顔を見合わせる。

戦兎「……玲音の方も終わったらしいからな。俺達もゆっくりしてる暇は無いかな。」

そう言い、戦兎が見るのは手元の報告書。そこにはマリア、セレナの使用する『銀腕・アガートラーム』のデータが映されていた。

戦兎が開いているのは、通常状態のギアと、イグナイトシステム起動時の比較データだった。

帝「にしても凄い強化方法ですね。まさか魔剣の本質そのものを利用するなんて。」

戦兎「・・・あんまり魔剣魔剣って言うな？縁起が悪いだろ・・・ゲツ!？」

帝「がっ!？」

と、2人が歩いていると突然、襟を誰かに掴まれる。

後ろを見ると、そこにはニコニコ顔のランサー。エリザベート・バートリーが何故かマイク片手に2人をつまみ上げていた。

戦兎「この狭い施設内で飛ぶんじゃない！この筋肉女!」

エリザベート「あくら。か弱い乙女になに？その態度は。」

帝「か弱かったら俺らを持ち上げねえよ!」

エリザベート「あら、最近のアイドルは身体も鍛えるのよ？そしてあの子ブタと結婚式を開くのよ!その時に誓ってもらうの・・・永遠の愛を・・・ね!」

帝、戦兎「身体を鍛える理由じゃねえ!」

戦兎、帝は脱出を試みるも、彼女の爪が針のように服に刺さって貫通しているのか、なかなか離してはくれない。それどころか彼らを握る手は力を増すばかりだ。

エリザベートは、くるつと振り向くと、そのまま2人の連れて愉快そうに歩いていく。



エリザベート「ら、ら、ら、ら♪」

帝「これって事実上の死刑では・・・」

エリザベート「安心して？ 脳の髄まで痺れさせてあげるから〜ね♡」

戦兎「殺される！ 俺達はこの魔物に殺され・・・」

戦兎が台詞を言い終えるその時には、エリザベートの尻尾が戦兎の鳩尾を直撃、そのまま的確に意識を刈り取る。

エリザベート「さて・・・あなたは黙るわよね？」

帝「カタカタカタ」

そのまま笑顔で帝を気絶させたエリザベートは上機嫌に尻尾をフリフリさせながら、別の部屋へと移動する・・・数時間後。そこでジ○イアンリサイタルが始まったのは別のお話。

クリス「鈴夢・・・来てくれー」

翼「霧夜・・・」

玲音「じゅーじゅー」

一海「うまうま。」

玲奈の所有する旅館？ではBBQをしながらぐたぐたする皆の姿があった。もつとも、ぐたぐたしているのはシンフォギア装者だけだが。

シユンガ「もぐもぐ。にしても玲音がマリアさんと仲良くなつてないか？」

一海「確かに。」

旅館に2人が帰つてきたと思つたら何故か玲音がマリアを抱えているという状況。さらにはマリア自信が玲音の傷を治療するとか言い出した始末である。

これには仮面ライダーズは目を疑うしかなかった。

玲音「そうか？俺は普通だと思うが」

一海「いやいや。ヤンデレどもと仲良くなれることに凄さを感じるぞ。」

玲音「ヤンデレも話せばわかりますよ。」

響「玲音さん！お代わりお願いします！」

玲音「はいはい。」

響に呼ばれ、玲音は響と未来が一緒にいる方へと向かつていく。その時、入り口のドアが開きみんなの知った顔が2人入ってくる。

戦兎「あーあー」

帝「かーかー」

一海「帝！戦兎さん!？」

入ってきた2人は死んだよな・・・どこか魂の行方が分からないような感じの人へと変わっていた。

戦兎たちを部屋へ送ると、2人はそのまま死んだかのように崩れ落ちていく。

一海「何があつたんですか。」

戦兎「あの蛇女があゝ・・・」

シユンガ「・・・おやすみなさい。」

一海とシユンガは、2人を寝かせると、そのまま居間へと戻っていく。そこでは遅れてきた鈴夢と剣崎がみんなに囲まれていた。

クリス「鈴夢・・・お姉ちゃんを抱いてくれよー。ほら。おっぱい柔らかいぞー」

翼「霧夜！わ、私を抱け！今なら・・・さ、サービス・・・するぞー」

鈴夢「剣崎さんー。ヘルプみー。」

鈴夢が2人に囲まれる中。剣崎さんも2人に囲まれていた。それもザババ組に。

剣崎「鈴夢を監禁するならもう少し硬いものがないぞ。俺もその程度の代物では簡単に脱出出来てしまうからな。」

切歌「経験談デスか。厄介な力デス。」

調「剣崎さん。この部屋はどうでしょう。」

劍崎「・・・いや。一応法令は守れ。怪しまれると一発で見つかるからな。刑務所行きはやめた方がいいぞ?」

調「しゅん。」

意外と劍崎は彼女たちの話にはノリノリのように見える。彼女たちも次々と劍崎に写真と見取り図を見せては試行錯誤を繰り返す。・・・その姿はお父さんみたいだ。

と、そこにサーヴァント、キャスター。アルキメデスが歩いてきて玲音とコソコソ話す

アルキメデス「あれが霧夜 鈴夢ですか。」

玲音「ああ。」

顔を拝んだだけで、アルキメデスは自室へと引き返してしまう、玲音はその場でごろごろする。

一海「ところでそろそろ風呂の時間だぞ?」

一海さんのその宣言に、装者組の顔が変わる。

シユンガ「・・・もうそんな時間か?」

鈴夢「あー、じゃあ先に行きますか?」

シユンガ「そうだな。戦兎さんと帝さんも呼んでくるわ」

そう言うときシユンガは戦兎と帝を呼びに部屋へと行ってしまふ、一海と劍崎は覚悟し

たかのように腕を回す。

鈴夢「ええっと・・・皆さんで入りますか？」

剣崎「いや、霧夜一人で行くといい。俺達は仕事があるからな」

鈴夢がお風呂に入った直後。切歌が合図を鳴らす。

その瞬間。各シンフォギアを纏った装者たちが部屋から出てくる

翼「よいな。これは戦争だ」

クリス「ああ・・・剣崎とか言うやつには悟られてたからな。恐らくは戦いになるだろう」

スカサハ「ふむ。向こうの方が戦力的には十分だろう。しかし、我らが力が合わせれば出来るだろう。」

マリア「ええ！行くわよ！」

女子組が目指すのは自室がある三階から一階の浴場。そこには鈴夢（神）が全裸で一糸まとわぬ姿になっているだろう。

これは彼女達にとってはまさに好機だった。

と、三階の階段に差し掛かると・・・そこには

クローリン（槍）「おいおい。どこに行く気だ？嬢ちゃんたち。」

響「くっ！鈴夢君筆頭のサーヴァントたちだ！」

クローリン（杖）「ここは通さねえぞ！ネズミ共！」

と、2人のクローリンが目の前に立ちはだかるが・・・

彼女たちの前に、彼らの恐れる人間が立った。

スカサハ「やあ、セタンタ。私を倒せるほどの力を手にしたか？」

クローリン（槍）「なんでテメエがいるんだよ！マスターだぞ?!」

スカサハ「マスターだろうと。夫たるものの裸を見るのは妻の役目だ。」

クローリン（杖）「ダメだ！理性が働いてねえ！」

スカサハ「さあ！目的を果たすために行くが良い！小娘共！」

翼「恩に着る！行くぞ！」

動けないクローリンを横に、シンフォギア装者とサーヴァントは下へ降りていく。

スカサハ「さあ、セタンタ。最後の授業を始めようか。」

二階の廊下も同様に、ご丁寧に鈴夢のサーヴァントが待ち受けていた。翼「っ！新たな敵か！」

ガウエイン「残念ですが・・・ここは通しませんよ！」

アルトリア「行くぞガウエイン卿！マスターのために！」

クリス「どうする先輩！」

クリスが叫ぶと同時に、クリスたちの後ろから2人に向け矢が放たれる。後ろにいたのは、アーチャー、エウリュアレだ。

エウリュアレ「邪魔よセイバー。クラス負けしてる癖に。死にたくなければ退きなさい。」

ガウエイン「アーサー王！ここは私が！」

アルトリア「ええ。任せますよ！」

と、ガウエインが駆けたその時、小さい影がガウエインの足を止める。

アルトリア「なっ・・・！バーサーカー！」

清姫「あらあら。ここを通して貰えませんか？私たちの欲が怒りに変りそうで・・・」  
アルトリア「なりません！ましてやマスターの裸体が見たいなど・・・不健全にも程があります！」

清姫「なら意地でも通してもらいます！」

そのままアルトリアと清姫がぶつかり、翼たちはその間を通過していく。  
この戦いは・・・始まったばかりだった。



## 第28話 ヤンデレVS正常

二階の廊下でセイバー2人とエウリユアレ、清姫が戦う音が聞こえる。

建物が壊れないのは不思議だが、彼女たちが全力で戦えるのもまた、不思議だった。

二階の階段。下に降りればいよいよという所で装者たちの足が止まる。

彼女たちが各々と武器を構える中。彼女たちの目の前には聖騎士、そして科学者が待ち受けていた。

戦兔「ここは通さん!!」

一海「通りたければ神に懺悔しなさい!」

調「つ、ここで仮面ライダー。後にはどんな奴が控えてるの?」

切歌「この人たち相手でもやることは同じデース。先輩たちは先に行くデース!」

調、切歌の2人がそれぞれ前に出て威嚇する。戦兔、一海は前に出たのを警戒してか、少し下がっていく

翼「ダメだ。こうも固められては前には行けん」

クリス「階段は狭いからな・・・くつ。裏目に出たか」

お互いが拮抗する中、調、切歌のコンビは戦兔、一海のコンビに突撃して行く。

少し反応が遅れたのか、戦兎たちはそのまま後ろに押し出される形になり、鏑迫り合  
いになる。

切歌「さあ！行くデス！」

マリア「二人ともごめんね！行くわよ！」

翼「了解した！」

クリス「後でしつかり拝ませてやるからよ！」

戦兎たちは目的に気づくが少し遅かった。

装者たちが階段に差し掛かると切歌たちは鏑迫り合いのまま、体の向きを変えて、階  
段を守るような形になる。

戦兎たちはそのまま押し返され、目の前には階段を守る少女たちがいる状況になっ  
た。

切歌、調「ここは通さない（デス）！」

一海「・・・どうする！戦兎！」

戦兎「不覚だな・・・この後の部隊に・・・ん？」

一海と戦兎は何かか聞こえたかのように耳に手を当てる。そして数秒後、2人は武器  
を構え、目の前の敵に的を絞る。

調「良いんですか？マリアたちを追わなくて」

戦兎「ああ、どうせ後続の奴らが仕留めてくれるからな。」

切歌「随分な自信デス……」

戦兎「そういう訳だ。一海！行くぞ！」

一海「了解した！」

2人は階段を守る少女たちに刃を向けながら突進した。

1階に降りた装者たちは降りた先で新たな敵と遭遇していた。

翼「くっ……！貴様！」

エリザベート「悪いわね。ここは通さないわよ」

そこに居たのは翼たちと、同じジャンデレのはずのエリザベート・バートリーだった。

彼女の後ろにはアーチャー……エミヤもいた。

クリス「どういう要件だ？お前も私たちに協力してくれるはずだが……？」

エリザベート「状況が変わったのよ。ここであの子ブタに恩を植え付けて後で私に御

奉仕してもらおうのよ」

エミヤ「要するに彼女のものにするためにマスターを助けようって事さ」

エリザベート「ちよつとアーチャー！ばらさないでもらえるかしら！」  
彼女たちが軽いやり取りをしている中、翼たちの中ではクリスだけがイライラをオーラとして発していた。

クリス「イライラ・・・ブツブツ・・・」

マリア「く、クリス？お、落ち着いてくれるかしら？」

ジャンヌ「アーチャー！ランサー！無駄な争いはそこまでです！」

と、そこに現れたのは、旗を手に取った金髪聖女。ジャンヌ・ダルクだった。服は既に防具で覆われ、さらにマントまで羽織っている。

エミヤ「・・・なるほど。ルーラーが相手か。なかなか厄介な敵じゃないか。・・・エリザベート」

エリザベート「むー！なんでよ！なんでアナタまで敵になるのよ！そんなに子ブタの裸が見たいの!？」

ジャンヌ「ええ見たいですよ！だって主の！我が最愛のマスターの身体ですよ！拝めなかつたら死んじやいますよ！」

エミヤ「ルーラー！貴様この世界に来て何にハマったんだ！」

その隙に翼たちはササツとエリザベートたちの横を通り過ぎる。ジャンヌは笑顔で彼女たちを送るとエミヤたちに旗を向け・・・

ジャンヌ「マスターの全てと！神への信仰です！」

エミヤ「むっ!?に、逃がしたのか！くそっ！」

エリザベート「アーチャー！来るわよ！こうなったらこいつをボコボコにするわよ！」

ジャンヌ「主よ！今こそ我が旗に舞い降りたまえ！」

翼「よし。あと少しで鈴夢の浴場だ・・・」

響「良かったあ・・・もう少しなんですわね」

彼女たちの部屋の反対側のフロア。そこに鈴夢の浴場があるのだが・・・そこに行くためには大広間を通る必要がある。

クリス「なかなか広いな」

マリア「見晴らしもいいわ。注意して進みましょう！」

その時、マリアは響の横まで飛び、そのまま剣で飛んできた銃弾を弾いた。翼はその音と同時に正面へ出て刀を構える。

響「ふえっ!?な、なに!?!」

翼「何者だ！姿を見せろ！」

玲音「……そのまま倒れば良かったのに」

大広間の上、そこには4人の仮面ライダーが立ちはだかっていた。

仮面ライダーカリス、仮面ライダー電王・ストライクフォーム、仮面ライダーサイガ、そして仮面ライダーキックホッパーがシャンデリアにぶら下がっていた。カリスの手にはカリスアローが握られており、彼が矢を放つたと見るべき……か。

劍崎「どうする玲音。作戦は失敗したわけだが」

玲音「むー。静かに隠密作戦なんてのは無理か……シユンガさん。帝。やるぞ」  
シユンガ、帝「おう！」

3人の仮面ライダーはそのまま投下、それぞれ剣、トンファー、キックで地面を削る。  
カリス「テメエも降りてこい！」

劍崎「ちっ。この世界のカリスも野蠻なのか……」

カリスはイチイバルをシャンデリア向け発砲するが、劍崎は軽い動きで躲し、そのまま降りる。

帝「行くぞ！鈴夢のことを守るんだ！」

劍崎「無駄なことをするのはやめるんだ。男にも知られたくない秘密ってのはあるんだよ」

劍崎はそのままクリスへと肉薄し、蹴り飛ばしで距離を離す、帝はマリアに突っ込み、トンファーで近接戦を仕掛けるが、マリアは剣で防ぎ逆に帝を吹き飛ばす。

帝「ぐあっ!?! 流石は銀腕・・・強えな」

マリア「ふん。伊達に戦い抜いてきた訳では無いわ」

翼「各員散開! そのまま敵を倒せ!」

玲音「ぬっ!」

響「んにやっ!?!」

玲音は響の首を掴むと、窓から外へ投げ込む。

響はそのまま外に出され、池に放り込まれる。

響「うー・・・冷たいよお・・・」

玲音「涙目になっても無駄な。狙いがわかった以上、ここを通す訳には行かないな」

響「ぐすん」

玲音「な、泣いても無駄だ! 無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄!」

帝「何やってんだ玲音」

その直後、玲音の隣をマリアが高速で飛んでいく、飛んで行ったマリアの身体は思いつきり池に叩きつけられる

玲音の隣にはブースターを背負った帝がいた。

響「マリアさん!?大丈夫ですか!」

マリア「・・・レディを池に落とすなんてね。最低の男ね」

帝「仕方ない。これも世の定め」

玲音「いや。普通にやってる事最低だからな?仕方ないじゃないからな?」

と、2人で談笑していると、マリアの銀ナイフが飛んでくるが帝がしっかりと落とす。

帝「玲音。コンビを組もう。報酬は鈴夢の作るご飯だ」

玲音「乗った。夜食に生姜焼きという名のツマミが欲しいからな」

そして玲音はクロックアップで響に肉薄し、綺麗な滑り込みからの上蹴りを響の腹に当てる。

それを帝の銃撃によって追撃する。

マリア「響!」

玲音「変態は帰れ!」

玲音はそのまま響を空中に吹き飛ばすと、マリアにパンチを連続で加える。

マリアも捌くことで抵抗するが、途中、蹴りを加え着実にマリアを後退させる。



帝も空中で姿勢を取り直す響を撃ち、玲音側へ寄せないようにする。

響「コンビネーション良すぎですよ！マリアさんっ！」

マリア「捌ききれない！響！そっちは任せたわよ！」

2人は別れて突撃することを決めたが・・・玲音たちは冷静に攻撃を避ける。

帝「玲音・・・大丈夫だろうな？」

玲音「ああ、何せ時間だけ稼げればいいんだよ。後、数分だ」

対する戦兎たちサイドも、戦いは佳境を迎えていた。

戦兎「一海！ダブルクローリンが抜かれたみたいだ!!」

一海「んなアホな！てことは敵の進軍を多少許したのか！」

仮面ライダーたちは階段を降りようと必死だが、それを遮るように切歌、調が立ち上がる。  
だかる。

一海がイクサカリバーを振るい、切歌が振るう死神の鎌と剣を打ち合う。

切歌「っ！強いデス！」

一海「これが女の力!?な、何がお前達を動かすんだ！」

切歌、調「鈴夢さんの裸（デス）！」

戦兎「聞いた俺達が馬鹿だったんだ。一海」

そのまま4人が武器をぶつけようとしたその時・・・

鈴夢「んあ？あれ？戦兎さん。一海さん？何してるんです？」

戦兎、一海「はあ？」

切歌、調「へえ？」

シユンガ「ちっ！ご丁寧に刀まで重たいな！この野郎！」

翼「ふっ！貴様とは違うのだ！せいやっ！」

上から下ろされるシユンガの剣と、翼の刀がぶつかると、勢いよくシユンガの剣が吹き飛ぶ・・・

そのままシユンガは倒れ、翼に刀を首に突きつけられる。

翼「私の勝ちだ。通させてもらおうぞ」

シユンガ「ははは・・・」

翼「ん？何がおかしい」

シユンガ「劍崎さん！時間は！」

その時、奥からクリスを引きずった劍崎が出てきて変身を解く・・・そして

劍崎「ん、鈴夢か？もう風呂から出たぞ？」

この衝撃の言葉に・・・翼たちは崩れ落ちた。

## 第29話 天才が3人。無双の弾丸 魔弓・イチイバル

鈴夢「・・・へえ。お風呂を・・・ね」

クリス「わ、悪気はなかったんだよ。鈴夢の裸が見れば・・・」

装者、さらにはそれに加担したサーヴァントたちは鈴夢の処刑台に乗せられていた。

ちなみに鈴夢の後ろにはアルトリア、ガヴェイン、エミヤが呆れた顔で立っており、剣崎、戦兎は困った顔で立っていた。

鈴夢「やりたい気持ちは分かるけどさあ・・・こう。迷惑つてのを考えてねえ・・・」

戦兎「いやいや。わかっちゃダメだろ」

エミヤ「戦兎の言う通りだマスター。理解してはダメだ」

鈴夢「・・・でも何か可哀想だろ？」

戦兎、アルトリア「全然」

エミヤ「可愛そうでは無いな。哀れとしか言い様がない」

その言葉を受け、犯罪者予備軍たちは「うっ」と苦しい声を上げる。

アルトリア「私なら全員切り裂いてますね」

エミヤ「俺なら貫いているだろう」

戦兎「俺は・・・警察かな？いやハーレムだから・・・（ブツブツ）」

劍崎「俺は受け入れる。慣れてるからな」

それぞれの意見を述べ、予備軍の皆さんの神経を削っていく皆さん・・・

そこに帝、玲音、一海、シユンガ、ダブルクーフォーリンが現れ、話は変わりに変わっ

ていく

玲音「・・・なんだ。反省会？」

戦兎「そうそう。んで？そっちは終わったのか？」

一海「終わった終わった。部屋の修理って辛いな・・・シユンガと玲音がいてくれて

助かった」

シユンガ「俺達の世界の暇人連れてきただけですよ・・・玲音の世界は暇人が多いな」

・・・戦兎たち、一海たちで反省会をしている中、鈴夢は装者たちの反省会を続けて

いた。

鈴夢「・・・エリザベートとエウリュアレは許そう・・・だがしかし！姉さん？みんな

なは分かっているよなあ・・・」

エウリュアレ「やった♪」

エリザベート「まあ当然よね！助けてやったんだからね！ねえ子ブタ・・・？」

エリザベートが鈴夢の方に手を乗せようとする……鈴夢の身体からドス黒い殺気が溢れ出る。

鈴夢はニコニコ顔で……いつもと同じ状態を出しているがエリザベート、そして他のサーヴァントたちは鈴夢の変容にいち早く気づいた。

アルトリア「ま、マスター！」

クーフーリン（槍）「おいおい……」

みんなが鈴夢の変容に気づいた時には遅かった。鈴夢はクリスの身体を持ち上げると、そのまま逆さまに吊るす。

クリス「へ？れ、鈴夢!？」

鈴夢「……一人ずつ教育してくからな？ビート。あとは任せた」

ビート「……ケツを叩くんだろ？了解した。」

その夜……館には甘い悲鳴が飛び交ったと言う。

戦兔「……ん？なんだこれ？」

戦兔がパソコンを弄ってキャロルたちと情報収集を行っていると、突然パソコンの動

きが重たくなる。

一海「どうした？戦兔」

戦兔「いや、パソコンがカクつくから何かあったのかな・・・って」

一海「鈴夢に文句言うか？」

戦兔「だな。後で・・・ん？」

と、戦兔がパソコンの異常に気づいたのは次のファイルを開いた時であった。

パソコンに見慣れないアイコンが表示されていた・・・そして

一海「ん？戦兔・・・そのアイコンは・・・」

戦兔「ハッキングだ！遠距離からこつちのパソコンを解析してやがるポンコツがいやがる！」

一海「へえ!？」

戦兔の唐突な報告に、一海はあたふたした後、戦兔の隣へと高速で移動する。

一海「ヤバすぎだろ！どうする！」

戦兔「・・・アルキメデスだ！ついでに鈴夢も呼んでくれ！」

鈴夢「お呼びでしょうか？」

アルキメデス「同じくお呼びでしょうか？」

戦兔「お前ら話は聞いてたな！鈴夢はパソコンを剣崎さんや玲音・・・帝とシユンガ

にも手伝わせとけ！アルキメデスはハッキング妨害の手伝いを頼む！」

アルキメデス「分かりました……では月の制御システムを使って仕事をしましょう」

鈴夢「月って乗っ取られたんじや？」

鈴夢が質問したその矢先、鈴夢の足元にぴよこつと尻尾が現れる。

一海はそのチラチラ動く尻尾に気づいたが、鈴夢とアルキメデスは気付かない。

アルキメデス「ですが、ローマ都市を模した地形。さらには千年京……そこにあるシステムは生きてるんですよ。不思議ですね」

鈴夢「……てことは。敵は誰なんだ」

玉藻「気づいて下さいましー！」

一海は無視して部屋を出ていった直後、鈴夢とアルキメデスの目の前でお歳の女性が突然飛び上がって鈴夢に抱きつこうとするが、鈴夢は蚊を払うかの如く、「ばしっ」と手で飛びついてくる敵を払う。

鈴夢「あつ。サーヴァントか」

玉藻「ううっ。ご主人様……酷いです。愛する妻にムチを打つなんて……」

アルキメデス「……やれやれ。我慢できずに来てしまいましたか。キャスター……セイバーは許可を出したんですか？」

玉藻「あら。アルキメデス……ええ。あの暴君からは許可を頂きましたとも！」



鈴夢「・・・玉藻？」

鈴夢がうつすら名前を呼ぶと・・・戦兎は後ろでイライラしているが、玉藻が飛び上がりテンションの高い声で自慢を始める。

玉藻「はいー！御用とあれば即参上！あなたのお嫁さん！玉藻ちゃんですよー！」

鈴夢「あれ？なんでコイツの名前知ってるんだ？」

戦兎「とりあえずアルキメデスは手伝え！」

アルキメデス「はいはい」

戦兎「鈴夢は二課へ連絡！恐らく向こうも攻撃を受けてるだろうから連携して止めるぞー！」

この攻撃は誰からのものか・・・その事など考えないまま、戦兎たちはキーボードをただ叩いていた。

優也「・・・ちつ。流石は如月 戦兎か。一筋縄では行かないな」

ハッキングを行っている犯人は、その画面を見て机をコツコツと叩いていた。

ハッキング阻止の報告があると同時に、優也は目の前のパソコンを吹き飛ばす。

優也「くそつ。謎のヒロインといい。カール大帝といい・・・使えないヤツらばかりだな。やはり下級サーヴァントでは相手にならんか」

ギルガメツシュ「ふん。やはり俺らが出なければならんのか？」

そこに金髪の黒私服を纏った男、ギルガメツシュが現れる。手には本が沢山握られている。

優也「いや。普通に下級サーヴァントを出さき。ランサー、セイバーのトップサーヴァントが向こうにいる限り、こちらも迂闊に戦力を投入出来ないからな」

ギルガメツシュ「ふん。しかし、月の管理システムの掌握には失敗。オマケにデータのハッキングすらも失敗するとはな・・・」

優也「うるせえ。どのみちイグナイト転用のデータは取れたから良しとしよう・・・しかし、鈴夢のデータは取れなかったな」

ギルガメツシュ「あの男に未練があるのか？」

ギルガメツシュの問いかけに、優也は答えることなく手に持った槍群をギルガメツシュ向け投合する。

しかし、ギルガメツシュの背後から大量の剣が出ると同時に槍を突き落としていく、その場には地面に刺さった槍と剣が残る。

ギルガメツシュ「まあ良い。ならこちらでも仕事を進めさせてもらおうぞ」

優也「勝手にしろ」

ギルガメツシユは消え、優也だけが残されると……彼は何も無いところに一人で語りかけていた。

戦兎「……このまま死ぬ。楽にしたい……」

鈴夢「戦兎さん。お疲れ様です」

電子機器だらけの一室、部屋の真ん中ではハッキングを阻止した戦兎が横になっていた。

鈴夢はそんな戦兎におにぎり、緑茶を差し入れる。

鈴夢「簡単なものですが……どうぞ」

戦兎「鈴夢は食堂に行かなくてもいいのか？クリスマスたちが五月蠅いだろ？」

鈴夢「もう餌は与えましたから、ぼくはあそこに入りませんからね」

戦兎「なんだ空気が重たいのか」

鈴夢「ええ。玉藻さんの余計な一言でみんなが凍りつきましてね……」

戦兎「ヤンデレなんてそんなものだろ」

2人で談笑しながらおにぎりや口を口に運ぶ。部屋の明かりが彼らのそんな影を繊細に映し出す。

戦兎がお茶を飲み、ゆったりする姿を見て、鈴夢は少し微笑む。

戦兎「むっ。笑ったな？」

鈴夢「いえいえ。笑って……ぷぷっ」

戦兎「やっぱり笑ってるだろうが！このー！」

鈴夢「ア、ア、ア、ア、ア！痛い痛い！頭をグリグリするなああー！」

2人が笑いながらいちやつく中……2人を除いて異変に気づいた人物がいた。

一海「ん？戦兎の部屋が静かだな……寝たのか？」

剣崎「寝るぞ一海。明日はアルキメデス……とやらの大事な話があるからな」

一海「……ああ」

戦兎「……いい寝顔しやがってこの野郎。」

しばらくして、鈴夢が眠りに着いた後、戦兎は1人で本を読んでいた。

鈴夢は戦兎の布団を占拠して、戦兎も運ぼうと試みたが……

ビート「辞めておけ。鈴夢は疲れてるんだ」

ビートにそう言われ、ここで寝かざるを得なかった。

窓はまだ空いており、そこから冷たい風が入ってくる。

戦兎「たまにはゆつたりも良いものだ・・・な」

ビート「戦兎！伏せろ！」

その直後、目を覚ました鈴夢（ビート）が突然叫び声に似たような声を上げる。それと同時に窓を突き破り、血の矢が飛んでくる。

戦兎「なんだ！」

ビート「鈴夢！起きろ！鈴夢!!」

鈴夢「・・・っ！敵か！」

2人は血の矢をかくぐり、身体を滑らせて割れた窓から外へ出る。

外には、戦兎にとって仇とも言える敵が待ち構えていた・・・

ジャンヌオルタ「あら・・・まだ生きていたのね。てつきり死んだのかと思ったわ」

戦兎「ジャンヌ・ダルク・・・オルタってやつか」

鈴夢「・・・あれは・・・」

ビート「鈴夢。あれが第一の聖杯の所持者だ」

黒い服を身に纏う少女は、隣に竜を置き、背後には彼女のサーヴァント達が控えてい

た。

ジャンヌオルタ「あなたがマスターなのね。ふーん……私が気に入る理由もわかるわ」

バーサーク・ライダー「ジャンヌ？ここまで連れてきたんだから……話はそらさないで」

鈴夢「……後ろのサーヴァントたちのあれはなんだ。まるで支配されてるかのような……」

戦兔「……狂化スキルらしい。あれがある限りほとんど自我を保つことは出来ないらしい」

鈴夢「そうかい」

戦兔と鈴夢はお互い腰にベルトをはめ、変身する体勢を整えるが、ジャンヌオルタは竜を下がらせ、鈴夢の前まで来る、二人の距離は……直ぐ駆ければ剣を打ち合える距離になった。

ジャンヌオルタ「……ふん。やはり月の戦争を生き延びたマスターね。」

戦兔「月の……」

鈴夢「戦争……？」

ジャンヌオルタ「いい!?焼き払え!この家と!彼らの命をね!あつ。マスターは残し

てよ!?!わかった!?!」

戦兎「鈴夢！」

鈴夢「戦兎さん！行きます！」

2人は変身し、迫り来る脅威へと立ち向かって行った・・・

## 第30話 天才が3人 無双の弾丸 魔弓・イチイバル

クリス「戦兎の部屋が？」

一海「ああ、妙に静かなんだが・・・何か知らないか？」

クリス「・・・行くか？」

一海「頼む。俺は帝とシユンガを呼んでくる」

そう言うで一海は廊下を走り、階段を駆け上がる、クリスはそのまま戦兎の部屋までゆつくり歩いていくと・・・

玉藻「あら。泥棒猫さんではないですか」

クリス「うるせえぞ駄狐。私の鈴夢だ。変なことするなよ」

玉藻「みつこーん！これは強敵の予感！玉藻ちゃんリーダーが危険を刺してますっ  
！」

クリス「言つてろ」

玉藻「・・・そういう所はマスターそつくりですね。ええ」

そう言い、2人は戦兎の部屋のドアを開け、中に入るが・・・

玉藻「おかしいですねえ・・・誰もいませんが？」



クリス「散歩にでも行つてんのか？」

その直後、何かに睨まれるような視線が2人を襲う。

2人はすぐに身構えるが、辺りを見渡しても、何も無く、静寂が彼女たちを襲う。

クリス「なんだ！何があるんだ……！」

玉藻「これは……結界？しかも高レベルの……」

クリス「結界!？」

玉藻「みつこーん！しかし！玉藻が持つ愛のレーダーの前では無意味！マスターのいる場所などすぐ分かるんですよー！」

クリス「お前のそのレーダーだけが頼りだア！頼むぞ！」

玉藻「……む？あれは？」

と、玉藻が目をつけたのは窓、そこにはいつも通りの景色が広がっていたが……

クリス「なんか違和感あるな」

玉藻「分かりますか？ここが結界源です。恐らく……ここからマスターのいる場所へと行けます」

クリス「……行こう」

玉藻「お待ち！この玉藻！あなたに愛あるプレゼントをしましょう！」

クリス「……これは？」

クリスは玉藻から渡された御札を受け取る……。それは魔力を避け、所持者に幸運をもたらす術をかける文字が書かれていた。

玉藻「キャスターお手製の護符です！これを持っては幸運になりますっ！」

クリス「ありがとな。行くぜ！」

クリスが窓に飛び込むと、そこから彼女の姿は消えていく。玉藻もその後には飛び込んでいく。

ジャンヌオルタ「さあマスター！私のモノに……。ゲフンゲフン！いや！私のために倒れなさい！」

バーサーク・アーチャー「……。本音が漏れてますが」

ジャンヌオルタ「うるさいわね！とりあえずマスターは私の前に引つ張り出しなさい！いいわね！」

バーサーク・キャスター「分かりました！我がジャンヌのためならアア！ジャンヌウウウ！ジャンヌウウウウ！」

鈴夢「戦兔さん！下がってください！」

鈴夢のその声の後、キャスターからイカの足みたいなのが鈴夢たちを襲うが、戦兎は鈴夢を蹴つ飛ばして自分もその場を離れる。

バーサーク・セイバー「マスター！ ジャンヌ！ マスターは保護してくれるんだよね？」  
ジャンヌオルタ「もちろんよ。とりあえずあの邪魔な紅蒼を殺して！」

バーサーク・アーチャー「了解した。追跡開始」

バーサーク・セイバー、アーチャーに続き、アサシン、バーサーカーと戦兎に一齐にサーヴァントたちが襲いかかる。

鈴夢「戦兎さん！ 変身っ！」

トイ『チェンジ、メロディー！ フレイムっ！』

戦兎の目の前に高速で移動した鈴夢は紅い真紅の弾丸を戦兎向け飛んでくるサーヴァントたちに向けて放つが、サーヴァントたちは全て捌き、鈴夢、戦兎から距離を取る。

戦兎「鈴夢……」

鈴夢「……お前達……何が目的だ！」

バーサーク・セイバー「……何が……マスターが欲しいんだよ！ 君が！ 僕の守るべき存在だから！」

バーサーク・アサシン「私が気に入る理由を探したいのよ。あなたの……全てを、ね

？」

鈴夢「……くだらねえ」

戦兎「……！」

彼女たちの理由を真つ向に否定した鈴夢の目は紅く染まるが……戦兎はその変化に気づいた。

戦兎「鈴夢！ダメだ！冷静になれ！」

鈴夢「……なっ！」

鈴夢の目の色が元に戻ると同時に、鈴夢の目の前にはアサシンが接近していた。

バーサーク・アサシン「もらったわ」

鈴夢「ぐあっ……！」

血のような液体で形作られた槍は、鈴夢の体を貫くと、鈴夢の変身が解け、身体はその場に倒れ込む。

そしてアサシンの後ろには……槍を構えたバーサーカーが……

戦兎「鈴夢！くそっ！どけええ！」

バーサーク・セイバー「ダメだよ！僕たちがマスターを助けるんだ！ジャンヌだつて

そう言ってくれた！」

バーサーク・アーチャー「貴様に私たちの心まで否定させない！」

戦兎「くそっ！目の前のこともわからないクソ女共が！邪魔なんだよ！」

戦兎の抵抗も虚しく、鈴夢はアサシンの血の十字に吊るされ、その目の前にはバーサーカーが槍を構えていた。

バーサーク・バーサーカー「さらばだ。マスター」

その槍は、鈴夢の心臓を貫く、そして鈴夢の身体はそのまま後ろに飛ばされる。

クリス「鈴夢！」

玉藻「マスター！」

後ろからクリス、玉藻が来るが、鈴夢の身体には、白い服に目立つ赤い血が、そして口から・・・傷口から流れ出る大量の紅い液体が戦兎の目を染めた。

吹き飛ばされた鈴夢の身体は、戦兎の目の前に落ち、戦兎の・・・ビルドの頭を赤く染めた。

戦兎「・・・鈴夢？」

鈴夢「・・・」

戦兎は二騎のサーヴァントを振り払うと、目の前の鈴夢の身体を起こす。

鈴夢の身体は先ほどより冷たく、まるで人形のように身体に力がない。

クリス「・・・おい！何してんだよ！お前！」

玉藻「・・・嘘。マスターの・・・魔力が・・・消えた？」

戦兎「鈴夢！鈴夢っ！」

そのまま戦兎の視線は黒い聖女へ向くが、黒い聖女は予想してたかのように笑っていた。

ジャンヌオルタ「これでいいのよ。これで月にある彼の身体は私たちが貰えば……永遠の管理。愛を与えられるわ……」

クリス「……っ！」

戦兎「愛だと？ふざけるなよ！人を殺すのがお前の愛なのか！」

ジャンヌオルタ「殺したいほど愛してる。のよ」

玉藻「とにかくマスターはこちらへ！」

戦兎「頼んだ！」

戦兎は鈴夢の身体を玉藻に預けると、落ちていた鈴夢の剣を取り、クリスの横に並ぶ。

クリス「戦兎。やるべきことは分かっているな？」

戦兎「ああ、アイツらをボコボコにすればいいんだろ？」

クリス「鈴夢のことはその後だ。今はここを乗り切る」

戦兎「……ああ。行くぞ！」

戦兎の叫びを合図に、正面から海魔の攻撃が2人を襲うが……大きい爆煙とともに、クリスと戦兎は違う姿で姿を現す。

戦兎「……イグナイトか。一筋縄では行かないな」

クリス「後ろは任せろ。前は頼んだぞ用心棒」

戦兎「……心得た！行くぞ！」

白いビルド、インフィニティフューチャーフォームになった戦兎は鈴夢の使っていた剣を拾うと接近戦を仕掛けてくるサーヴァントの攻撃を巧みに弾く。

戦兎「クリス！」

セイバー、バーサーカーの攻撃を捌いていると、遠くからアーチャーの矢が飛んでくるが、クリスはそれを的確に落とす。

バーサーク・アーチャー「何!?!」

クリス「残念だな！全部見えてんだよ！」

クリスも戦兎の援護に出るべく前へ出る。戦兎と位置を帰ると周囲に弾丸を撒き散らす。

バーサーク・バーサーカー「むっ！」

バーサーク・セイバー「くっ！」

2人は大きく身体を後ろに飛ばされる。

その直後、バーサーカーの目の前には戦兎が剣を構えた状態で立っていた。

戦兎「まずは……1人っ！」

その剣はバーサーカーの槍を持った剣を落とし、さらに身体を貫く。

バーサーク・バーサーカー「ぐううっ！」

戦兎「相手が悪かったな」

そのままバーサーカーは光の粒子となって消えていく、その後、戦兎は飛んできたアサシンと打ち合う。

バーサーク・アサシン「・・・荒々しいですね」

戦兎「舐める・・・なっ！」

近づいて放たれる血の槍を捌きながら、戦兎はアサシンの白い肌を赤く染めていく。最後の一撃を捌ききると、アサシンの肩から刃を振りかざす。

戦兎「次っ！」

クリス「後ろ来てるぞ！」

クリスの言葉の後、細いレイピアが戦兎の横をかすめる。

バーサーク・セイバー「外した！」

戦兎「残念だな！」

そのまま後ろに横一線。剣でセイバーを溶かす。

クリスも至近距離まで近づいた後、弾丸の嵐をアーチャー向け放つ。

クリス「さあて・・・残りはてめえらだけだ」



バーサーク・ライダー「……」

戦兎「あと3人！まとめて行くぞ！」

バーサーク・ライダー「愛を知らぬ哀しき竜よ……ここに！」

2人がジャンヌオルタ向け走り出した瞬間。バーサーク・ライダーの前に大きな竜が姿を現す。

ライダーはその竜の元へと飛ぶ。

バーサーク・ライダー「星のように……タラスク！」

その瞬間。竜が弾丸のように放たれ、戦兎たち向け飛んでくる。

ライダーの身体が地面に立つ頃は、竜が通った部分は何も無い平野と化していた。

バーサーク・ライダー「……罪を悔いなさい……なるべく早く」

ジャンヌオルタ「流石ね。これなら奴らも死んだことでしょう……」

戦兎「んで？言いたいことは終わったか？」

その直後。空には戦兎が剣を両手に構えて飛翔していた。残った大地には……

クリス「間に合ったのか……遅かったな」

クーフリーン（杖）「……森の賢者を舐めてもらったら困るっての。」

マシユ「間に合いました！」

そこにはイグナイトを展開したままのクリスと、盾を正面に構えたマシユ、その後ろ

にはクーフリーン（杖）がマシユを支える形で立っていた。

バーサーク・ライダー「そんな・・・！」

戦兎「悪いなっ！俺達はひとりじゃないんだっ！」

戦兎はバーサーク・ライダーを切り捨てると、そのままジャンヌオルタ向け駆ける。

ジャンヌオルタ「くっ！この雑魚が！」

腰の剣を抜くがその剣は彼女の願い通りにはならず、戦兎向け振りかざされるどころか、その剣は落ちていった。

よく見れば、ジャンヌオルタの片手が肘の所から切られていた。

ジャンヌオルタ「なっ・・・！」

戦兎「悪いな。今回も・・・俺達の勝ちだ」

剣を遠くへ蹴り飛ばした戦兎は、鈴夢の剣をジャンヌオルタの首元へ突きつける。

戦兎「俺達の勝ちだ・・・悪いが・・・一緒に来てもらう」

ジャンヌオルタ「・・・」

戦兎「鈴夢が死ぬわけない。何かあるんだろ・・・？教えてもらうぜ」

黒き聖女は、その手に持った旗を落とした・・・

# 第31話 月の侵略者 黄金の軌跡 撃槍・ガングニール

ジャンヌオルタとの戦いを終え、戦兎の部屋では、まるで息をしていない鈴夢が、布団で寝ており、その前にはサーヴァント、仮面ライダーたちが揃っていた。

シンフォギアメンバーからは代表して、クリス、マリアの2人が立ち会っている。

ジャンヌオルタは隣にジル・ド・レエを従えて、特に悪びれた様子を見せないでいた。戦兎「・・・で。鈴夢が死んでないのは何でだ？」

シユンガ「戦兎さん。それじゃ鈴夢が死んでなきやダメみたいな感じじゃないすか」  
一海「意味は伝わるからいいだろ」

戦兎の質問にジャンヌオルタは窓を眺める。剣崎、玲音の2人はイライラしながら話めようと歩き出す。帝に止められる。

ジャンヌオルタ「・・・呪いのスキルよ。高ランクのね」

アルトリア「高ランクスキルですか」

エミヤ「恐らくだが・・・狂化スキルによって、強化され・・・恐らくだが強くなっているのではないか？」

ジャンヌオルタ「そうよ。強化されたこのスキルは……聖人が二人いないと解けない仕組みになってるわ」

戦兎「玲音。聖人って誰かいたっけか？」

玲音は悩むような素振りを見せ、少し悩んだ後に重い口を開く。

玲音「いや、今のところジャンヌ・ダルク以外はいない……かも知れないですね。鈴夢が召喚すれば、先程戦ったライダー……そして他のサーヴァントを呼んで解除することも出来るかもですね」

一海「どこへ進んでも行き止まりだな。参ったな……」

ジャンヌオルタ「……一つ。心当たりがあるわ」

事の始まりの本人が、口を開く、それに全員が反応し、次の言葉を待つように静かになる。

ジャンヌオルタ「私たちが拠点としてた海底の遺跡。そこに確か……聖人の男がいた気がするわ、名は……ゲオルギオス」

エミヤ「ライダーのサーヴァントか。確かに彼なら力を貸してくれるだろう」

ジル・ド・レエ「その他にも、セイバー、キャスター、ライダー、そしてアサシンを収容しております」

玲音「……誰かは分からないが……恐らく戦力にはなってくれそうだな」

数少ない朗報は、彼らを行動に移させようとしたが、戦兎は直ぐに駆け出した玲音と帝を止め、視線をジャンヌオルタに向ける。

その直後、戦兎は質問をぶつける。

戦兎「・・・その遺跡ってどこなんだ？俺達は愚か・・・シンフォギアのメンバーも知らないとなるとお手上げなんだが？」

ジャンヌオルタ「フロンティアよ。聞いたことあるでしょ？」

剣崎「・・・っ！」

部屋の端で沈黙を保っていた剣崎は、手に1枚のカードを取ると、そのまま姿を消し、部屋を後にした。

剣崎が長い廊下を歩いていると、突然目の前に人影が見える。

その影は剣崎が来るのを理解していたかのように腕を組みながら壁にもたれかかっていた。

剣崎「玲音か」

玲音「どこへ行くんです？剣崎さん」

もたれかかっていた身体を起こし、劍崎と対峙する。2人はそれぞれ腰にベルトを巻いていた。

劍崎「さあ、なんの事か」

玲音「とぼけないで下さい。鈴夢のことですよ」

劍崎「それがどうした？俺には関係ないから部屋を後にした迄だ。俺は眠い……だから寝かせてくれ」

その次の瞬間、劍崎の後ろから矢が、劍崎の顔すれすれに飛んでくる。

後ろには、弓を構えたエミヤが顔に笑みを浮かべながら立っていた。

エミヤ「何処に行こうというのかね？まあ……この状況で行く場所は一つか」

劍崎「……」

玲音「劍崎さん。急ぎたいのは分かりますが、鈴夢はそんなこと望んじやない。フロンティアだって皆で行けば……「黙れ」」

劍崎の怒りを込めた言葉が玲音の台詞を遮る、同時にエミヤ、玲音は構えをとる。

劍崎「玲音。俺の事はこの世界の誰よりもお前が知っているはずだ。」

玲音「……」

劍崎「ただ死なないってだけで化け物扱いされる……そんな存在なんだよ。俺は。だが、鈴夢も同じだ。まるで俺を写したような人間。彼は俺とは生き方は違うが……死

なないと言う点では一緒だ．．．だから、助けてやりたい。俺の命を捨ててもだ」

玲音「それはダメですよ。元の世界に戻ったらどうせ貴方の響、そして皆が貴方を心配してますからね．．．だから」

玲音は飛んできたホップパーゼクターを手に取ると、その手をベルトまで運ぶ。

玲音「あなたは死なせない。例え敵になっても．．．ね」

劍崎「通してもらおう」

玲音、劍崎「変身！」

『オーブンアップ』

『HEN—SIN』

2人が拳をぶつけた時には、既に仮面ライダーへと変身していた。

劍崎は仮面ライダーレンゲル、玲音は仮面ライダーキックホップパーへと変身し、それぞれ得意な戦い方を広げる。

エミヤ「私も忘れてもらったら困る。君を止めるために来たのだからな」

エミヤは劍製と、矢を同時に放つが、劍崎はレンゲルラウザーを円状に振り回す。放たれた矢と劍製は阻まれ、劍崎まで届かない。

玲音「あなたは通さない！1人には．．．させないっ！」

劍崎「無駄だ！お前にもわかるだろう！レンゲルは対人において最強のライダーだと

！」

玲音「こつちも生憎対人戦に強くてね！遅れはとらない・・・よっ！」  
エミヤを放置し、2人の戦いは加速していく。

剣崎と玲音の拳がぶつかると、そこには優しき、同情などなかった。

2人の拳は覆っていた装甲を貫通し、肌が見えていた、その肌は赤と、緑に染まっていた。

剣崎「・・・退け」

玲音「断る。退いて欲しいなら頭を下げてください」

剣崎「ならこうするまでだ」

剣崎は2枚のカードを取り出し、ラウズアブソーバーへとそれぞれ通す。

『アブソーブクイーン、フュージョンジャック』

新たな門が出てくると、剣崎はそれを通過し、玲音へと襲い掛かる。

玲音は構えるも、ジャックフォームのレンゲルのパワーの前では歯がたたず、そのまま身体ごと壁に押し込まれる。

剣崎「すまないな、また俺の勝ちだ」

壁から落ちてくる玲音の身体は、キックホッパーのままであり、身体が完全に落ちると、そのまま変身も解ける。



劍崎「さて……で、お前もやるか？」

エミヤ「生憎。私は君に向ける剣は持っていないくてね」

劍崎「そうか、なら通させてもらおう」

劍崎は変身を解き、出てきた別のベルトに先程姿を消したカードを通し、姿を消す。

帝「……すごい音したが?!れ、玲音!どうした?!おい!戦兔さん!」

戦兔「玲音!大丈夫なのか!」

フロンティア内部

ボロボロに崩れかかっている遺跡。劍崎は一足先に内部に足を踏み入れる。

中は所々割れそうな部分はあるものの、劍崎は構わず、ツカツカと歩いていく。

劍崎「……俺の世界とは違う。何かがおかしいな」

そう言いつつも、歩く足を止めない劍崎。

フロンティアの一画、格納庫らしき所に着くと、そこには呻き声が多く聞こえる場所に変わっていた。

劍崎「……死霊か?どの道俺には関係ない……」

「すまない。その人よ、助けてくれないか」

劍崎「何？」

劍崎がある牢屋の前を通ると、その牢屋の中から声がする。呻き声ではない。生きて  
いる人間の声が、劍崎は牢屋の中を覗くと、そこには捕えられているサーヴァント達が  
鎖に繋がれた姿で座っていた。

ジークフリート「……声を聞いてくれたこと感謝する。俺はセイバー……ジーク  
フリート」

ゲオルギオス「我が名はライダーサーヴァント、名をゲオルギオスを言う」

劍崎「……聖人か」

牢屋をこじ開け、彼らの鎖を解くと、その部屋を後にフロンティアの廊下を歩く。

2人はそれぞれ剣を下げながら歩き、劍崎は腰にベルトを巻いて歩く。

ゲオルギオス「ところで何故あなたはここへ？」

劍崎「ある人間を助けたくて来た」

なんの感情もない冷静な言葉。しかし、サーヴァントたちにはそんな彼が何故か悲し  
く見えていた……。

# 第32話 月の侵略者 黄金の軌跡 撃槍・ガングニール

鈴夢「・・・ジャンヌ・・・？」

ジャンヌオルタ「・・・！」

寢室。サーヴァント監視の元、ジャンヌオルタ、ジル・ド・レエを監禁している中、同室で寝ていた鈴夢が意識を取り戻す。

部屋にいた鈴夢のサーヴァントはガウエイン、玉藻、ジャンヌの3人。他のメンバーは館の修理に借り出されていた。

ガウエイン「マスター、お目覚めでしょうか」

鈴夢「身体が重い・・・戦兔さんは？」

玉藻「ご安心を、戦兔さんは無事。マスターは今、生死の狭間にいます。ささ、とりあえずご飯をお食べになって♪」

玉藻は軽めのご飯だが、おにぎりと味噌汁、お茶を鈴夢の寝てる布団の隣にある机に置く。

鈴夢「・・・やだ」

玉藻「やだ。ではないです。しっかりと食べてください。ささお口を開けてください」  
鈴夢「むー」

ジャンヌ、ガウエインとジャンヌオルタ、ジル・ド・レエはそんなやり取りを見ながら談笑していた。

ジャンヌオルタ「あれがマスター？わ、私たちと戦った時とは何か違う・・・みたいだけど？」

ジャンヌ「ええ。間違いなく貴女と戦ったマスターですよ。令呪もあるではないですか」

ジャンヌオルタ「そういう訳じゃなくて。子供みたいになってるわよ。いいの？」

ジャンヌ「ええ。むしろその方が萌えませんか？」

「何言ってるんだこの聖女は」と心の中で思いつつ、ジャンヌオルタは鈴夢を見つめる。

玉藻が差し出すおにぎりを避ける鈴夢。その感じはまるでとかではなく子供そのものだった。

ジル・ド・レエ「・・・呪いのせいでしょうか。誠に申し訳ございません」

ガウエイン「気にすることはありません。この呪いが解ければ、きつと元のマスターに戻りますから」

ジャンヌ「邪ンヌ、マスターに話しかけてみませんか？」

ジャンヌオルタ「わ、私が!？」

ジャンヌ「ええ!きつと恥ずかしがりながらも返してくださいすよ!」

少しおどおどとした後、覚悟を決めたかのようにため息をついたジャンヌオルタは、布団を後に、鈴夢の横までジャンヌと共に移動する。

近くに來た際、玉藻に少し睨まれるが、鈴夢がさらにおにぎりを避けると、玉藻はさらに鈴夢に攻撃を続ける。

ジャンヌ「ささ」

ジャンヌオルタ「ま、マスター・・・?」

ジャンヌオルタが可愛い声を出しながら鈴夢の名前を呼ぶと、同時にジル・ド・レエは録音していたが・・・それは別の話。

呼ばれた本人はゆっくりジャンヌオルタを見て・・・

鈴夢「ん。ジャンヌ?久しぶり・・・」

ジャンヌ「お久しぶりですマスター、ところでこちらの私に身に覚えはありませんか?」

まじまじと品定めするような視線がジャンヌオルタに突き刺さる。

見つめられている等の本人は頬を赤らめ、そっぽを向いていたがジャンヌに軌道修正される。

鈴夢「・・・ジャンヌオルタ」

ジャンヌオルタ「マスター・・・」

鈴夢「俺は君を許してない」

冷静に告げられるその言葉は、さながら彼女たちには死刑宣告のように聞こえたが、鈴夢は言葉を続ける。

鈴夢「それでも君を生かしたのは、生きることをやめて欲しくないからだ。戦って死ぬのが本望とかさ、嫌じゃん」

ジャンヌ「ええ。オルタには私の分も頑張つて生きて欲しいです」

ジャンヌオルタ「や！やかましいわね！アンタは生きてるでしょうが！」

ワイワイと盛り上がる部屋・・・ジャンヌオルタの顔には、何時しか笑顔が表情に出ている。

剣崎「敵の襲撃がないな」

ジークフリート「妙だな。俺達がここに飛ばされた時には沢山いたものだが」

剣崎「そうなのか」

フロンティアの機関部であろう部分を歩く一同は、警戒しながら出口を目指していた。

敗走したサーヴァントたちの死骸がところどころ落ちていているが、全て核の部分を貫かれていた。

劍崎「……！」

ゲオルギオス「聞こえましたか！ 劍崎殿！」

劍崎「戦闘の音だ！ 行くぞ！」

『チェンジ』

劍崎はカードを通し、仮面ライダーカリスへと変身、ジークフリート、ゲオルギオスも剣を出し、それぞれ音が聞こえる場所まで駆ける。

ジークフリート「無事か！ 援護に来たぞ！」

そこにいたのは氷、雷を放っているスーツを纏った少年、そして長刀を構えた和の戦士だった。

諸葛孔明「援軍か。丁度いい。手伝ってもらおうか……アサシン！」

佐々木小次郎「援軍？ 全く……いいタイミング出来てくれる！」

シャドウサーヴァントを振り切ると、ジークフリート、ゲオルギオス、劍崎がいる位置まで下がってくれる。

劍崎「貴様らはどうしてここに？」

諸葛孔明「さあな。召喚されたかと思えばこうなっていた。おかげで抵抗せざるをえなくなつたよ」

ジークフリート「一体誰が・・・」

その時、劍崎たちが集まる場所にスポットライトが当たる。色とりどりの色で、彼らの姿はハッキリと映し出されてしまう。

劍崎「何っ！」

佐々木小次郎「困つたな、祝福されるのはあまり好きではないな」

劍崎「そういうものなのか!？」

孔明、ジークフリート以外が動揺する中、ツカツカと、彼らの前を歩く影がいた。

その影は彼らの前で止まると、手を挙げ、元気な声を上げる。

BB「レディース、アーンド、ジェーントルメン！」

諸葛孔明「とんだ登場だな。BB」

劍崎「BB・・・？」

目の前に現れた少女は、なんとも言えない姿をしていた。服をマントのように羽織り、妖艶な動きでこちらに寄ってくる。言うならば淫魔だ。そしてヤンデレだ。

BB「もう酷いなあー！私はあなた達を待つてたんですよ！」



ジークフリート「待っていた、だと？」

諸葛孔明「なるほど……誘い出されていたのか」

その直後、B Bが指を鳴らすと彼らの周りの死体が蘇るように身体を起こす。

今にも崩れそうな身体が維持できているのは、B Bが魔力を送っているからだ。彼女にはマスターの権限である令呪を独自に持っていた。

B Bが手を下ろすと死体……「アンデット」たちは各々の武器を手に取り目の前の障害を排除すべく前進する。

ジークフリート「厄介だな。海底だから宝具も使えない」

諸葛孔明「おまけに物量作戦と見た。ここを突破するのは難しいぞ」

海底で剣崎たちが本気を出せば、この状況は確かに厳しいかもしれない。

もし彼らが本気を出し、この状況を切り抜けようものなら、まずフロンティアが壊れかねない。それにそれを出して剣崎……その他のサーヴァントが無事している保証はない。

剣崎「どうする」

諸葛孔明「……ともかく突破口を作らなければここから脱出も出来ない。アサシン、先導を頼めるか」

佐々木小次郎「ああ、任せたまえ」

ジークフリート「君一人では手間がかかるだろう。俺も前に出るぞ」

佐々木小次郎、ジークフリートが各々構え、孔明は眼鏡を掛け直して、劍崎はカリスアローを敵へと向ける。

そこから数秒もしないうちに孔明が手を合わせ、前衛の2人が駆ける。

劍崎は一陣の風となり、孔明の周りによつてくる「アンデット」たちを蹴散らしていく。

身体を切り裂き、頭蓋骨を矢で貫いていく。

孔明も雷、氷の魔術を使い「アンデット」たちを蹴散らしていく。

ジークフリート「道は開けた！進むぞ！」

諸葛孔明「後退する、行くぞ」

劍崎「了解」

ジークフリートが手を振る位置まで、劍崎と孔明は走っていく。

佐々木小次郎が出口を守る中で、3人はアンデットたちの大軍を抜ける。

・・・が、そこまです。

BB「さんねーん、時間切れです！」

ジークフリート「これは！」

BBの声か聞こえた瞬間。劍崎達が進んで来た道が塞がれてしまう、佐々木小次郎は

ため息をつき、刀を構え直す。

劍崎「お前・・・ハメたのか」

BB「なんの事かな？BBちゃんには分からないなあ〜」

ジークフリート「佐々木！無事なのか！」

2人が佐々木小次郎の方を振り向くと、彼に大量のアンデットたちが迫ってきていた。

佐々木小次郎は渋々と刀を取り出し、静かに構える。

その額には・・・わずながら汗が出ていた。

劍崎「くそっ！俺が行く！それまで・・・！」

佐々木小次郎「止めないか。劍崎一真」

佐々木小次郎は静かな、それこそ冷静な声で告げる。

その声には迷いなどなく、自分の運命を理解したような声だった。

佐々木小次郎「我らは英霊だぞ？それこそ死など覚悟の上。その覚悟がなければこの戦場に立つておらんよ」

劍崎「・・・」

佐々木小次郎「行け、守りたいものがあるのなら・・・な」

その直後、劍崎はジークフリートに腕を捕まれ連れていかれる。佐々木小次郎は一

人、大軍の中へ突っ込んでいく。

佐々木小次郎「さらばだ。次は良いマスターに恵みたいものだな」  
その言葉を最後に、彼の刀は吹き飛ばされた・・・

# 第33話 月の侵略者 黄金の軌跡 撃槍・ガングニー

響「ここがフロンティア？」

戦兎「うむ。一海や、帝、玲音の情報を集めて探索した結果。ここにあることが分かった」

切歌「なんか嫌デス」

フロンティア直上、海上では自衛隊の軍艦に乗った戦兎たちが潮風に当たりながら構えていた。

ちなみに何故自衛隊なのかと言うと・・・

——数時間前——

鈴夢「たのもー」

防衛大臣「・・・鈴夢くんか。お久しぶりだな」

防衛大臣の執務室、ここでは4人が対面していた。

メンバーは防衛大臣、鈴夢、ジャンヌオルタ、カルナだった。

何故このメンバーなのかと言うと

鈴夢『え？脅せた方が強そうじゃん？お願い、ジャンヌオルさん』

ジャンヌオルタ『仕方ないわね。ほらランサー！アンタも悪そうだし・・・行くわよ！』

カルナ『仕方ないな』

と、言う流れがあった。

鈴夢「お久しぶりですー、で、単刀直入に言いますね？」

防衛大臣「構わん、君の頼みだ・・・できることなら何でもしよう」

鈴夢「自衛隊の船貸してくれませんか？出来れば高性能な軍艦を」

無邪気な鈴夢の一言が、このように自衛隊の軍艦を借りるといふ奇跡的な状況を作り出した。

鈴夢自身は酔うからと搭乗を拒否、ならばとこの3人十で戦兔が乗っていた。

3人の表情はそれぞれだった。戦兔は思い悩むように海面を睨み、3人は楽しみなのか騒いでいる。

ちなみに彼らがこれからすることは遠足ではなく、剣崎を助けに行くことなのだ（確認）

戦兔は自分に一喝入れると、後ろへ「ぐりん！」と身体を向け「ごらあ！」と3人を整列させる。

切歌「な、なんデスカ、戦兔さん・・・」

戦兔「任務はわかってるな？再確認しようか」

調「先に逝った剣崎さんを助けて、鈴夢さんの呪いを解くんですよね？」

戦兔「おーい。剣崎は死んでないぞ。だがその通りだな。逝きそうなあいつを助けて、その他のサーヴァントごと連れて帰ってくるのが俺たちの仕事だ」

響「腕がなります！早く行きましよう！」

と、飛び込もうとする響を3人は慌てて押さえる。戦兔は彼女のマフラーの両端を掴むと大きな声を上げて引つ張りあげる。

戦兔「どおせええええいつ！」

響「え!?あああああー！」

抵抗の無かった響は首が閉まる感覚と、身体が持ち上げられる感覚に襲われ、その体は宙に舞う。

持ち上げた戦兎はてっぺんまで行ったところを確認してマフラーから手を離す、そうすると空から響が背中から船の甲板に叩きつけられる。

響「酷いじゃないですか！戦兎さん!?殺しますよ！」

戦兎「サラツと言うな！後、構えるな！距離を測るな！その凶器（拳）を下ろせ！」  
戦兎の3段階注意で響は言葉の通り、拳を下ろし痛いであろう背中を撫でる。戦兎は「はあー」と重いため息をついて、じつと海面を睨む。

戦兎（あのバカは死んでないよな・・・まあ、アンデットだから死なないんだろうけど、不死だからって死なない訳では無い・・・からな）

鈴夢から聞いた言葉。それが戦兎の脳裏をよぎる。

その言葉は出航する時、鈴夢が戦兎にかけて微妙な言葉だった。

鈴夢（不死なんてろくなもんじゃないですよ。それに死ぬ痛みを味わうより、誰かが死ぬほうがよっぽど辛い。剣崎さんだって同じです。不死は死なない。死ぬ時は自分が絶望した時だって）

不死という存在は死なない。なんて人が考えた勝手な決めつけだ。

誰だって命の終わりを迎える。もっと言えば不死だって命の終わりを迎える時はあ



るのだ。それはその人にとっての絶望を味わった時である。

戦兎はゴソゴソとダイバー用の装備を整えると、「じゃっ」と一言、その後でしつかり海に飛び込む。

続いて響、ザババコンビが入り、4人は目的地を目指す。

目指すは海の底に沈んだ遺跡。フロンティア、装者にとっての因縁の場所である。

フロンティア内部では、BBが覇権を握っており、剣崎たちは自由に行動ができなかった。

剣崎「・・・また、道しるべか」

道の途中途中に置いてある、BBお手製の道しるべ、これ以外のところに行くとは何か透明な壁で通れなかった。

剣崎たちはこの道を通ること1時間、もはや彼らには時間間隔など無くなっているのかもしれないが、それぐらいの時間が経っていた。

孔明が周りを警戒し、剣崎、ジークフリート、ゲオルギオスが前を警戒する。

サーヴァントの感覚は人間より高く、便利なのだが、どうやらBBの結界内ではその

感覚も役に立たないらしく、剣崎も前に出る形で警戒していた。

孔明「ここから先は広場に出るようだ」

剣崎「まるで異次元の迷路だな」

もはやフロンティアの中にいる感覚などない。ここはBBの箱庭。彼らはそう割り切っていた。

その通りなのか、彼らの行く先は、何故か草原だったり、あるいは学園だったりした。誰かの記憶を辿っているのか・・・あるいは

BB「はーい！そこまででーすっ！」

剣崎「出たな雑魚が。さっさと降りてこい」

BB「はいはい！精神が壊れかけてるからって暴言吐かないの！全く・・・！ほんとに人間ってダメなやつばっかなんですからー」

BBは宙で足を組み手に持ったステッキのようなものをぺちぺちと自分の手に当て、音を立てる。表情は無邪気な子供そのものだった。

イタズラの笑みを浮かべ、宙に舞う彼女を、剣崎たちは睨むしかなかった。

剣崎「・・・なんの用だ。お前に絡んでる暇はないんだ」

ゲオルギオス「落ち着きください剣崎殿、ここは我慢比べですぞ」

ゲオルギオスの言う通りだった、剣崎たちに今必要なのは情報。つまりこの船、そし

て彼女からの脱出方法だった。

劍崎もちろん理解していたが、それを気にする余裕もないほどに彼は怒っていたのだ。

BB「……私は基本的に貴方たちが嫌いなんです。なのであまりイラつかせないでください……ね？」

劍崎「……っ」

BBの冷たい一言が4人の戦意を削ぐ。

その一言は冷たく、そして激しい憎悪の混じったものだった。言い方も言い方が、彼女の人に対する憎しみが伝わってくる。

BB「でも先輩だけは大好きなので、そこだけは違っても嫌いとは言いません。ええ。本当に大好きです」

劍崎「鈴夢のことか。厄介な……」

BB「ええ！な・の・で、皆さん消えてくださいねー！」  
???「待ったアアアアア！」

と、BBが手に持ったステッキを振ろうとした直後、BBの身体は吹き飛ばされていった。

劍崎たちの視界には、先程までBBがいた位置に立っているライダーの姿が映ってい

た。

劍崎「戦兎か」

戦兎「お久しぶりだ、劍崎」

劍崎「ご丁寧に追いかけてくるとはな」

さらに劍崎たちの後ろからは走って響、切歌、調と何故か死んだはずの佐々木小次郎がいた。

孔明「・・・アサシンよ。死んだはずでは」

佐々木「勝手に殺すでないよ。彼らに助けられてここにいるのだ！」

ジークフリート「なるほどな」

劍崎「助けたのか・・・」

戦兎「ああ、戦力減るのはごめんだからな」

あとで聞いた話だが、戦兎たちは、水中からフロンティアに侵入した後はどうやら佐々木小次郎がいる位置まで迷いながらもたどり着いたらしい。そして何かしらの方法でBBの結界を破壊し・・・今に至る。

と、劍崎と戦兎はBBの飛んでいった方を見る。そこにはBBはもちろん居たが、それ以外にも見ないサーヴァントが隣にいた。

戦兎「あれどう見るよ劍崎さん」

劍崎「……知らん。だが……お前たちが来てくれて状況が変わった」  
戦兎「ならよかった」

2人はそれぞれ構える。劍崎も、戦兎も、その目に迷いはなかった。  
後ろからジークフリート、響たちが走って劍崎たちと共に構える。

「来いよ。最後まで面倒見てやる」

海底の奥深く。不死身の戦士は一人の少年のために剣を振るおうとしていた。

## 第34話 月の侵略者 黄金の軌跡 撃槍・ガングニール

フロンティア内部の剣崎、戦兎たちの戦いを鈴夢たちは遠くから見ている。

映像の発信元は戦兎が着けているカメラからだった、彼の視点が、鈴夢たちの目には映っていた。

医療室には、クリス、鈴夢、ジャンヌオルタ、ジャンヌ、玲音と帝がいた。

「あれは・・・アルターエゴか」

「アルターエゴ？ 奴等はどう言う存在なんだ」

アルターエゴ。BBによって産み出された、いわゆる分身みたいな存在である。しかし、彼女本体とは性格が違い、爪の大きなアルターエゴ、パッションリップは穏やか、ヤンデレであり、メルトリリスも、ヤンデレ、引っ込み事案の少女である。

鈴夢の記憶の中には、彼女たちと、そして・・・と死闘を繰り広げた記憶があった。

「・・・俺。行きます」

「鈴夢!？」

「んな無茶な」

身体を支えながらも、歩きだそうとする鈴夢をクリスは支える。玲音と帝は映像を見ながら、軽い筋トレをしていた。

戦兎からの映像にはパッションリップしか映っておらず、隣には切歌と調は居たが、響と剣崎は居らず、別のメルトリリスを相手していると理解した。

玲音たちは汗をタオルで拭くと、モニターで戦う戦兎の視線に映っているパッションリップを睨む。彼女は闇が深い目をしており、その戦い方は全てを消すかのようなやり方だった。

『……あの人が欲しいんです。欲しいんです……欲しいんです……だから、退いてください。迎えに行かなきゃ……私の……私の王子様を』

『退くか！アイツが戦ってるのに俺が退けるか！』

戦兎は大きな爪を躲しながら、攻撃しようとするが、彼女の身体の身のこなしと大きな攻撃によつて戦兎、そして切歌と調の攻撃は阻まれる。

玲音たちはベルト、そしてヘルメットを手に取ると外へ出ようとするが、出るところで鈴夢に止められる。

「玲音さん……帝さん……俺も。俺もお願いします」

「却下。怪我人は寝とけ」

「帝。行こう」

玲音たちは鈴夢の同行を却下すると、廊下を走り、ガレージへと走る。

鈴夢はクリスに寝かされ、クリスは部屋をあとにするが、クリスが部屋を後にした瞬間。ジャンヌオルタは鈴夢を肩に抱え、外へ飛び出る。

ジャンヌも後へ続き、窓から外へ出ると、そこにはオルタの召喚した竜が待機しており、三人はそのまま空を飛び、フロンティアのある海まで急ぐ。

「竜……鈴夢か。怒られるの俺なんだよなあ……」

空を飛ぶ竜を見て、一海は怒られることを覚悟した……。



「……くそっ！爪の大きさはなんなんだよ！」

パッションリップと戦う戦兎から思わずそんな声が漏れてしまう。だが、パッションリップはそんなことなど気にせず、無邪気に狂気の刃を戦兎たちに向け突き立てる。

戦兎が刃を受け止め、調と切歌がリップへの接近を試みるが、リップの動きはその見た目とは裏腹にクソ早い。

迫ってくる2人に対して、少し早めに後ろへ下がり、下がった分の距離を利用してか、腕がピンポイントで二人に飛んでくる。



「・・・早くやられてください。そして早く王子様を助けなきや・・・」

「ダメデス！戦兎さん！接近は私たちに任せるデース！」

「戦兎さんは腕を抑えてください！出来れば後ろに下がらせないで欲しいかな！」

「無茶言うよね？でも・・・悪くないっ！」

三人はほぼ同時に飛び出て、いち早く戦兎がリップに絡む、振られてくる腕をしつかりと受け止め、がっちりとその場から離さないように固定する。

「調！行くデス！」

「切ちゃん！行くよ！」

その戦兎の後ろから二人の影がいきなり飛び出る。お互いに刃をリップに向け、突き立てながら接近する。

リップは後ろに下がろうと再び足に力を入れるが、後ろには下がれなかった、視線を下に向けると、戦兎が足を思いつきり踏んでいたからだ。

「どいてください」

「やだね・・・二人とも！今だ！」

二人は思いつきり刃をリップに刺すが、何故か刃は全て彼女にたどり着く前に止められてしまう。彼女は悪魔のように微笑むと、二人を返り討ちにし吹き飛ばしてしまう。

戦兎を追い越し、二人は後ろに吹き飛ばされる。戦兎もそれに釣られ後ろを向いてし

まう。

「切ちゃん……！調ちゃん……っ!?しまっ……！」

「遅いですよ」

その隙にリップは懐まで迫って、戦兔のボディに爪を突き刺す。ライダーアーマーは予想より固く、貫通は防いだが、彼女の爪が予想より痛かったのか、戦兔の口から苦痛の言葉が漏れる。

「ぐうっ……あっ……！」

「痛いですか？でも我慢してくださいね」

そのまま彼女は戦兔を壁に叩きつける。戦兔は意識を辛うじて保っており、次に飛んできた彼女の爪をあと少しで届くギリギリのところでかわしきる。

「……まだ意識があったんですね。厄介……」

「……困ったな。俺じゃあ勝てねえ……」



「……剣崎さん！私が突っ込みます！」

「援護する。突っ込め」

『ファイア』

響が前へ出て、目の前のメルトリリスに向かって突っ走ると、その後ろから剣崎（ギャレン）が炎の弾丸を放つが、メルトリリスは軽い動きで軽やかに躲す。

普通に触れれば燃えるだろう炎を諸共せず、響と己の武器で戦う。

「どうして戦うの？ 悪い気はしないわ、早く諦めて頂戴」

「どうして戦うんですか!?! 同じ人を愛しているのに!」

二人の言葉がほぼ同時にぶつかる。剣崎はその隙に二人の傍まで接近し、新たなカードを通す。

『ロック』

接近に気づいたメルトリリスはすぐに距離を取ろうとするが、気づいた時には足は石化していた。

ラウズカード、『ロック』は対象を石化させる効果を持っており、本編では決して使われることは無かった。

（・・・思いも寄らないところでカードが役に立つ、これだからやめられない）

そのまま次のカードを通し、拳を振り上げる。

『アッパー』

強化された拳はメルトリリスの顔・・・ではなく、お腹に当たり、そのまま身体が持

ち上げられる。

「があっ……!」

「……」

持ち上げられた身体はそのまま剣崎たちの後ろに飛ばされ、後ろに傾がる。

「小細工は終わりか？他に面白いことがあるなら見せたらどうだ？」

「……ふふっ」

そう言うと、メルトリリスは何故か姿を消してしまう。突然とかではなく、すつと、煙のように消えていった。

「……本体ではないのか」

「剣崎さん。行きましょう」

「だな……その前に。ここを早めに抜けるぞ」

銃を手に取った剣崎が見据える先には、大量のメルトリリス、その複製体が道を塞いでいた。

数は時間を増すごとに増えていた、剣崎は、キングフォームで一掃しようとも考えたが、フロンティアか耐えられるかは分からず、保留にしていた。

（……どうする。ここままでは……）

その時、後ろから閃光が弾ける。

「劍崎さん！」

「っ!？」

後ろから閃光が弾けると同時に、劍崎たちの道を塞いでいたメルトリリスの複製たちを薙ぎ払う。

「誰だっ!？」

「俺ですよっ！劍崎さん！」

そこには鈴夢を筆頭とした、四人が立っていた。うち、二人は旗を掲げ、一人は本を手持っていた。

鈴夢の横にいた二人の旗持ちは劍崎の前に立つ。鈴夢と本持ちは劍崎たちの横まで来る。

「・・・鈴夢。来たのか」

「ええ！だつてこれは俺の問題ですから・・・しようがないですよね」

「・・・玲音たちは」

「全部一海さんに押し付けました。後悔はしてない」

（一海・・・すまんな）

劍崎は心の中で一海に謝りつつ、廊下を見る。廊下は先程までの地獄絵図のような光景から打って変わり、綺麗なものになっていた。

「劍崎さんは奥へ、恐らくそこにBBがいる」

「・・・鈴夢は？」

その時、劍崎の目に映ったのは覚悟を決めた鈴夢の顔だった。その目には僅かだが必死の覚悟を感じた。

「・・・わかった。・・・死ぬなよ」

「劍崎さんも。ご武運を」

その言葉を最後に、2人は道を別れ進んで行った。

# 第35話 月の侵略者 黄金の軌跡 撃槍・ガングニール

「案の定、先に進まれちゃいましたかー」

フロンティアの奥にある制御室、そこには伝承であるヴァンパイアのような格好をした美、が付くほどの美少女。自称先輩の這い寄る混沌、BBちゃんである。

訳あって復活した彼女はムーンセルの管理区よりこの地上に降り立っていた。理由は「先輩は私のです！」と言うことらしい。

妹2人はその時はそれぞれの反応を示したらしい。メルトリリスは「ううん」と唸るように、パッションリップは「ふええ」と少し驚いた感じで。

現在彼女はメルトリリスと交戦している鈴夢の様子を見ていた。ビートとして戦っている彼はもう彼女たちの知っている「先輩」と呼べる存在ではなかったが。彼を手に入れるにも理由があつた。

（ふふふ・・・先輩の魂をあの忌々しい身体から離してえ、ムーンセル中心にある先輩の身体にぶち込めばあ・・・晴れてBBちゃんのもですね！あの女狐や暴君皇帝の好きなのようにはさせませんよ！ふふふっ）

とまあ彼女が今心の中で考えたように鈴夢の本体、元の身体と呼べる存在はムーンセルの中心、管理区に存在している。ムーンセルの王となるには少し古いシステムだが、レガリアと呼ばれるマスターのみが持つ指輪が必要になる。

しかし、意識がない身体だけのレガリアなど彼女たちには興味がなく、彼女たちが狙っているのは鈴夢本人の愛<sup>レガリア</sup>である。

そうすることで小うるさい皇帝と女狐を黙らせよう☆って言うのがこのBBちゃんの考えである。

「・・・っと。邪魔をする怪物もどきが来ますか」

剣崎一真、彼のことは調べ尽くしている。仮面ライダーブレイド、長引くバトルを繰り返し、彼は最後無いはずのアンデットになってしまった。

しかも同世界のライダーたちに適合したその身体。BBちゃんにとっては研究素材そのものだった。

「バトルファイトの異物・・・ですが不死は目を見張るものがありますね、先輩の延命に役に経ちそうですね」

マウスカーソルらしきものをコロコロ転がしていた指はいつの間にか手を握りしめていた。先輩を邪魔する邪魔者、今の彼女には剣崎一真はその程度の男と認識されている。



彼女は愛する人間には慈悲を与える。例えその人間が死んでいようと、死に損ないだろうと、可能な限りの慈悲を与える。

しかし、その愛を邪魔されれば一部の人間はどうなるか。強行に出るか、あるいは素直に待つかの二択だが彼女は通常の人間の思考を遥かに超越した悪魔である。

「殺します。先輩と私の愛を邪魔する人間は。．．待っててくださいね？私の触手は残忍ですのぞ」



「．．．お前がBBか」

「あら、随分お早い到着ですね。劍崎一真さん。立花 響さん」

「私たちの事を知ってる．．．!？」

「ええ。ムーンセルの技術をもつてすればあなた方の事を調べあげるなんて造作もないことです。まあ．．．ドーでもいいですけどね」

何処からか生み出した黒い鎌、その刃の向く先は迷いがなく、響だけを一点。睨みつけるような目で見ていた。

彼女の感情を読み取ってか、触手たちの動きも激しくなる。

「私がイラつくのは貴方ですよあ・な・た」

「私!？」

「ええ。貴方、先輩の事がだーい好き♡みたいですね」

ちよくちよくお茶目な所を見せるBBに劍崎は攻撃のタイミングを見失っていた。響も「どうすればいいんですか」と言った顔だ。しかし劍崎は警戒だけはするぞとキングラウザーの先をBBに向ける。

「ええ。BBちゃん、上からしつかり見てたんですがあなたの方大層先輩の事が大好きみたいですね。夜な夜な○○○○ーや先輩の○○○○で○○○○してるのを知ってるんですよ?」

「・・・はあ」

唐突なカミングアウトに響が茹で上がったトマトのように顔が赤くなり、やがて頭から蒸気が吹き出してしまう。劍崎がこの状況で出来ることと言えばこの会話の終着点を探し、早くこのイライラを目の前の悪魔にぶつけることだけだった。

その後も関係の無い会話は続いてしまう。BBがあれやこれやと響たちの秘密をばらし、響が代表して反論する。置いてけぼりの劍崎は「大変だな」と考えながら警戒するしかやる事がなかった。

「まあ、こんな事を言いに来たんじゃありません」

「なら本当の目的を聞こうか・・・わかるが」

「ええ。私たちは先輩が欲しいんです」

「・・・どうして」

「どうして。ですか。簡単に言いましたよ。ムーンセルは元々先輩が王となって管理していたものです。その先輩の魂が突如欠如。気づいた私たちはその装束を確かめたら・・・まあ。地上にいるわけですよ。本来行けるはずのない地上に。直ぐ呼び戻そうと考えました。でも先輩の肉体はムーンセルの中で眠ったまま・・・そう。魂が欠如してはいたんです。そしてその魂はあろう事か新たな肉体、魂と融合して、私たちでは取り出せないんですよ」

鈴夢の魂とビートの肉体は融合している。それは櫻井了子の研究、そして解析で分かっていた。そのデータは二課全体に共有されており、マリア、奏の両名に話していた。しかしビートの話により、弦十郎と了子の両名はそれよりさらに確実に話・・・鈴夢の魂のありどころを聞いていた。

天霊の肉体。魂との融合。そして仮面ライダーへと適合すること。

シンフォギアと同じテクノロジーが使われている仮面ライダー ビートのシステムは通常の人間では適合しなかった。かつて、月の事件の際にフィーネがレインボーマモリとの適合を試みたが失敗・・・つまり、シンフォギア装着者以上の適合率がこの仮面

ライダーシステムには求められることが判明していた。

しかし霧夜 鈴夢だけは適合率が他の装者を超えており、ライダーシステムに適合していた。他のシンフォギアとのシミュレーションでも各聖遺物にも適合していた。それはシンフォギア装者の各パラメーターよりも安定していた。

ビートの肉体補助のおかげか、あるいは鈴夢の魂が適合させているのか。それは誰にも、いや、本人を除いて理解出来なかった。

しかし、ビート本人だけはその意味を理解しているらしい。弦十郎が聞きに言ったが「答えるつもりはない」の一点張りだった。

「……つまりお前たちは」

「あなたの考えの通りです。剣崎一真さん。私たちは聖杯を使おうと考えています」

聖杯。願いを叶えると言われている聖遺物だ。ヨーロッパを中心に伝説を残したと言われている。

黄金の聖杯、白の聖杯、黒の聖杯など、いろいろな話が鈴夢たちの口から漏れていたが、所詮は空想の産物と思っていた。しかし、BBの口ぶりから実在するものと改めて思い知らされた。

確かに、あらゆる願いを叶える聖杯を使えば鈴夢の魂を取り戻すことは出来るかもしれない。しかし、そうした所でビートはどうなる。

「ビートさんにはご退場願います。天界に戻してもいいですよ」

「・・・初めから鈴夢目当てか」

「最初からそう言ってたじゃないですか！もう！」

そう言いながらも手には黒い鎌、足元には触手が出現している。どうやら戦う気のないようだ。

「私から先輩を奪った罪。血で贖え。人間が」

「響。来るぞ」

響が「え？」と言った次の瞬間、彼女の視線の先では火花が散った。キングラウザーとBBの鎌がぶつかった音だ。右から、左から剣をBBに当てようとするが、彼女の鎌がそれを防ぐ。

キングラウザーで鎌を落とし、そのまま柄を滑っていくように剣をBBに当てようとするが、まるで血のようにドロドロに鎌が溶けたと思ったら、再びBBの手の中に鎌が生まれた。

「残念でしたね☆」

「劍崎さん！下がって！」

劍崎が蹴りでBBを吹き飛ばすと劍崎の後ろから響が猛スピード出詰めてくる。右拳を構え、そのまま前に振り出す。BBは受け流すように躲して触手で彼女の背中を叩

いて吹き飛ばす。

吹き飛ばされた響は両手を地面に付け飛んで見事に着地する。直ぐに後ろを振り向き、戦闘態勢をとる。

「……困った人達ですね。先輩をくれるだけでいいのに」

「……やらん」

「劍崎さん!?!今ちよつと考えましたよね!?!」

その響の悲鳴を無視して劍崎はキンググラウザーを振るう。しかし、振るわれる黄金の剣はBBに当たることではなく、全て彼女の操る鎌に吸い込まれていくように受け止められてしまう。

続いて響が突撃して行くものの劍崎と同じ。攻撃が全てBBではなく鎌に吸い込まれていくように当たってしまふ。

「どうして!?!狙いは完璧のはずなのに!」

「……全てBBに吸い込まれている」

「そうです。まあここは私の領域です。勘のいい劍崎さんなら初めから分かっていたのでは?」

「……」

劍崎も響も初めは理解出来ていなかった。しかし今、彼女の言葉でようやく納得し

た。フロンティアは彼女たちの領域<sup>おもちゃ</sup>。彼女たちにとってはこの中では思いのまま、気まぐれで敵を出すのも、罠を置くのも自由なのだ。

「私はこの現象をBBハプニングつて名付けたいんですけどどうですかね！先輩と早く会ってあんなことやこんなこと・・・」

「よそ見を・・・するなっ！」

彼女の視界の端、斜め後ろから剣崎が剣を担いで飛んでくる。そのまま地を踏み込み、大きく剣を振ろうとするがBBの触手が剣崎の身体を軽々と吹き飛ばす。

大きく吹き飛ばされた剣崎は部屋の入り口のドアに身体をぶつける。そのまま力なく身体は落ちて倒れてしまう。

「剣崎さん！」

「立花さん？あなただけでは助けてあげてもいいですよ？先輩のお気に入りみたいです。抵抗を止めて先輩を差し出してくれれば・・・ね」

「・・・剣崎さんはどうなるんです」

奥で倒れている剣崎を庇うようにして響がBBの前に立つ。BBはその冷たい視線を響から奥で倒れている剣崎に向ける。

「さっきも言いました、この男は殺して研究材料にしますよ。不死の力・・・それが分かれば先輩を不死にして永遠に私たちの傍に置けますし」

「それは鈴夢くんは望んでない！鈴夢くんは本当は戦いたくないんだよ！」

「なら私たちに渡すべきです。私たちなら未来永劫、絶対永遠に先輩を愛せますから。邪魔な小娘たちは消えていいですよ？」

「それじゃあ鈴夢くんが余計に苦しむだけだよ！そんな人たちに鈴夢くんは渡せないっ！」

響は首元のペンダントを取ると、祈るようにして歌い出す。大切なものを守る。彼女の仲間を……友達を、そして大事な恋人を……。

その時。ガングニールが答えた。彼女の思いに答えるように赤く輝く。

「行くよ……ガングニール！イグナイトモジュール！抜剣ッ！」

ペンダントの形が変わり、響の身体に黒いモヤが吸収されていく。それは魔剣の力だけではなかった。

「まさか……私の魔力まで!？」

「がああああつ！」

### 魔剣

それはあらゆる生命を奪う呪いの剣。しかし、それが呪いだと誰が決めた。

呪い——それは魔剣を間違った使い方をしているから言われた様なもの。なら間違った使い方をしなければ。決して呪いにはならない。



「大事な人を守るんだッ！だから！ガングニール！私にいいいっ！力をおおおつ！」  
「響……！」

後ろでは剣崎が再び立ち上がる。ブレイドの仮面は半分が割れており、顔、額からは緑の血が流れていた。

彼の目の前。BBの正面には黒いガングニールに身を包んだ響が立っていた。剣崎はこの姿を知っている……そう。

「響……なのか」

その姿は。その大事なものを守ろうとする後ろ姿は、自分の世界の立花 響に似ていたのだ。

「行くよッ！」

月の侵略者 二人の絆 獄鎌・イガリマ、塵鋸・シウル  
シャガナ

時は戻り、鈴夢と剣崎が分かれた後にまで戻る。

「俺が道を開くっ！急こうっ！」

ビート、サンダースタイルを駆り、鈴夢が先人を駆けて道を開く。相手しているのはメルトリリスが出てきたコピー。所謂レプリカだ。

後ろからはイガリマを纏った切歌、シウルシャガナを纏う調が後続を退けながら続く。

鈴夢たちが目指しているのはB Bが掌握しているメインルームでは無く、メルトリリスが掌握しているであろうエンジン部の方だった。

メルトリリスの幻影ニセモノは正直鬱陶しい。それにB Bを倒した所で彼女たちが普通に従ってくれると思うとそれもまた可能性としては薄いだろう。彼女たちはB Bのコマでは無い。少なくとも自分で動けるだけの力が備わっているはずだ。それに、今は敵だ。どんな事情があってもこれだけは変わらないのだろう。

ジャンヌたちはそのまま後ろで戦っている戦兎たちの援護だろう。あの二人とジル

にはほぼ不覚などないはず。そう信じて俺たちは前へと進む。

「あら。向かつてくるのね」

「無駄だと言うのに」

彼女たちの戯言が聞こえるが俺の耳には入れず。ただ手に持った槍で彼女たちを刺し穿つ。

スカサハに教えてもらったケルト仕込みの槍さばきがここで役に立つなんてのは考えてなかった。

彼女を相手する時に最も注意すべきなのはあの脚だ。まるで作られたかのような鋭利な刃物のようになっていた。

「・・・アーマーが持つか。彼女の脚が強いかな」

アルターエゴ。メルトリリス。俺の微かに残った記憶の中では彼女とはろくな思い出がない。監禁する。幸せにしてみせる。だの戯言しか思い出せない。

パッションリップも同様だ。全く。恋は盲目とはよく言ったものだ。

稲妻の槍を振るう、その槍先でメルトリリスの影を溶かしていく。消える際に彼女が不気味な笑顔を零すものの、俺は無視していく。

一切の感情は要らない。敵は切り捨てる。目の前のコイツらはただの邪魔でしかない。

俺とその道を邪魔する。敵。

「鈴夢さん!？」

「と、止まるデス!」

倒す、倒す、倒す、倒す、倒す。

その時。俺の視界が黒くなった。

鈴夢さんの身体が突然、私たちの方に押し出される。咄嗟の判断で私と切ちゃんは鈴夢さんの身体を受け止める。

目立った傷はない。しかし、仮面ライダーとなった鈴夢さんの身体を軽々と吹き飛ばすほどの力。誰なんて考える暇もなかった。

「あら。まだあなたたちは居たのね」

「調、鈴夢さんを頼むデス」

切ちゃんが鎌を持ち、こちらに歩み寄ってくる敵に構える。こちらに歩み寄ってくる人は綺麗で、まるでお人形さんのようだった。脚まである長い髪、露出の多い服、そして何より、そのすらつとした綺麗な脚に目がいった。

彼女が鈴夢さんの言っていたメルトリリスなのだろう。そして鈴夢さんを吹き飛ばしたのも彼女。

「・・・さて要件だけいうわね。その人を頂戴」

「断つたらどうなるデス」

「アナタたちの命はないわよ。そうね・・・私の部屋に玩具として飾ってあげるわ」

言い終わった後、切ちゃんが床を蹴つてメルトリリスまで一気に距離を詰める。そしてそのまま鎌を外から大きく振って首を落とそうとするがメルトリリスが長い脚で切ちゃんを吹き飛ばす。

「切ちゃんー！」

私もヨーヨーで追撃をしようとするがメルトリリスが正面まで流れるように滑ってくる。まるでスケーターのように滑らかな動きに攻撃は当たらず、そのままメルトリリスの脚が私を吹き飛ばす。

今度は切ちゃんと私が同時に攻撃するがメルトリリスは一回転、私たちを軽くあしらう。

「むう・・・つ。アイツ。動きが嫌いデス」

「まるで見透かされてるみたいで・・・なんか嫌だ」

「ふふつ。アナタたちが単純なのよ。おバカさん」

「じゃあ……単純じゃないやつと戦ってみるか？」

突然。本来ここには居ないはずの音がする。その主は、本当ならここには居なくて、かつ、今頃お説教を受けているはずなのに。

全員が入り口に視線を向ける。そこには二人のライダーがいた。

一人は仮面ライダーオーガ。黒にところどころ緑のラインが入っているのが気になるライダー。

そしてもう一人は仮面ライダーグリス、ブリザード。本当ならこの人は今一番お説教を受けてるはずだがどうしてここにいるのか。

「なぜ俺たちがいるのか気になるか？」

「鈴夢を追ってきた。それだけでいいだろう」

オーガ、帝とグリス、一海はそれぞれ調、切歌の前に出る。拳を構えて殴り合う気満々の姿勢を見せる。

「へえ。武器は構えないのね」

「……構えたところで君に届かないのは理解してる。なら殴り合うのが手っ取り早いだろう？」

「女に手を上げるなんてサイテー」

「……人じゃないからセーフ」

その言葉が開戦の合図となった。痺れを切らしたメルトリリスが一海の足元まで詰めてくる。が一海はそのメルトリリスが来る僅かな隙について、拳を胴体に叩き込む。霊基によつて強化されてる肉体にブローをぶち込むが逆に一海が激しい痛みにも襲われる。

が、それでも思いつきり力を入れ、メルトリリスを大幅に後退させる。そしてそこに帝が詰めてくる。振り放たれた剣はメルトリリスの硬い脚に当たる。

「反応がいいなっ！」

「帝！しばらく頼む！俺は鈴夢を！」

帝はそのままメルトリリスとの戦いに興じてくれる。一海は鈴夢たちに駆け寄りに行く、切歌、調が付いてくれたのか、その後の鈴夢には新しい傷は一つもない。が、鈴夢の意識が戻らないのも気になる。

「一海さん！鈴夢さんが！」

「分かつてるよ！助けてやるから泣くな！」

泣きそうな二人を慰めながら鈴夢の容態をとりあえず確認する。意識は落ちているものの……脈があるかどうか。そして変身が解けていないのも気にかかる。もしかしたら……いや。それだけは考えないようにする。最悪の展開は鈴夢に限っては無いのだから。

しかし、不死を無効にする方法はいくらだつてある。そもそも、不死と言うのは本当に死なないものなのか、誰だつて分かりはしない。だが、劍崎さんのように不死の間でもその人の形を保つことが出来るのか、あるいは身体に流れる年月が俺たちと違うのか、その疑問に答えてくれる人はいなかった。

「・・・大丈夫だ。鈴夢は多分、ただの脳震盪で倒れてるだけだ」

「それつて重症・・・」

「こいつの事だ。数分したら目を覚ますだろ」

脳震盪で死ぬ例も多い。このまま死んでくれれば鈴夢はまた目を覚ますのだろうか。だが、一海の頭にはそんな思考はない。仲間を助ける。ただそれだけが存在していた。

簡単に応急処置だけ施し、後は二人に任せる。俺は急ぎ帝が抑えている現場まで戻ろうと走る。

「帝！待たせたな！」

「めつちや早くないか!？」

「アイツは死にはしない！それだけ確認した！」

ブリザードナツクル両手に、メルトリリスへと肉薄する。メルトリリスが蹴りを主体とした動きに対して一海は拳による打撃から脚術まで使える。手を使わない相手には遅れを取らない。



メルトリリスの鋭い脚が横一閃に空を切り裂く。そこにいたはずの一海は既にしゃがみこみ、下から拳を突き上げる。弦十郎仕込みの腹パンアツパーだ。自分もジャンプすることでさらにそのダメージは加速する。

「帝！」

「任せろっ！」

上上がったメルトリリスの身体はそのまま帝がかかと落として地面に叩きつける。フロンティアの古くなっていた床に大きな窪みが出来る。

「ふう……」

「強くやりすぎテース！沈んだらどうするデスカ！」

そこに遅れて切歌と調がやってくる。調に至っては呼吸が荒れているが……何かあったのか。彼女たちの額には汗がある。

「どうしたんだ？」

「不味いのがきます！」

その時部屋の扉が思いっきり破壊され、もう一人のアルターエゴ、パッションリップが大きな腕と共に姿を表した。

## (作者の息抜き) 闇鈴夢。

「と言うわけで今日は休暇です」

鈴夢は何も無い、青い空に向けて突然言葉を告げる。

時は休日。ひと時の平和を鈴夢は噛み締めていた。理由は言わなくても分かると信じた。

人気のない場所。廃墟となったビルを占領し、鈴夢は仕事を終えたかのように一息つく。

「いやー、平和っていいな・・・」

今頃機動二課では突然いなくなった鈴夢を探しているだろうが鈴夢には知ったことではなかった。

異世界の仮面ライダーたちが集まる中、鈴夢の件で怒られるのは帝か一海もしくは玲音なので鈴夢はあんまり気にしないでいた(後で鈴夢は怒られるのだが)

「・・・ん?・・・そこにいるのは誰だ」

ふと、違和感を感じる。何かに見られているような、冷たい視線を直感で感じ取る。何があっても良いようにドライバーを装着する。手にはすぐ変身出来るようにメモ

りも常備されていた。

時間を置いてても姿を表す気配はない。痺れを切らした鈴夢はため息をつく。

「……出てこいよ。今なら許してやる」

「……流石は俺だな」

そう言い、会話に入ってきたのは鈴夢の分身であり肉体を構成している怪物、ビートだった。仮面ライダーになるためにも必要不可欠な存在であり、鈴夢にとっては兄弟当然の存在だった。

視線を感じても姿を表さないのでには納得した。それもそのはず、自分が自分から監視されているなんて普通なら思いもしないからだ。

「なんの用？ただ疲れたって言う訳では無いだろう？」

呆れた物出で鈴夢はビートに要件を尋ねる。正直鈴夢からしたら、ビートは邪魔な存在でもあったので、だいたい関わってくる時は碌でもない事だなと諦めていた。

「俺にも遊ばせろ」

「……は？」

思考が止まる。その時間僅かに3秒。

鳩が鳴くような時間を置いて、鈴夢の思考は再び動き、言葉を理解する。

「俺にも遊ばせろと言ったんだ」

「ずいぶん直球だなおい」

2回目、再び投げかけられる言葉にゆっくりとした返答を返す、その言葉にビートは「けっけ」と悪者笑いで返してくる。

「この狭い体は飽きねえからなあ。しかも、お前は相当の修羅場を作つてると見えた」  
「それは褒めてるのか貶してるのか」

「むしろ褒めてる方さ。なあに。悪いようにはしない」

しかし鈴夢からしたら貶されているような気がして堪らなかつたが、正直なところ否定出来ないのが現実である。

二課に行けば嫌でも修羅場が出来るだろう。それこそ英霊やライダーチーム、さらには暇にしてる元アイドル達が待っているのだから。

「・・・勝手にしてくれ。だけど悪いようにはしないでくれよう。」

そんな現実から逃げたいのか、祈願とも言える言葉をビートに投げかける。正直鈴夢からしたらこれは悪い提案ではなかつた。

まず鈴夢の身体だが、ビートが意識を乗っ取っている間は鈴夢の意識は別の所へと保管される。

要するに部屋から交代交代で出るようなものだ。しかし部屋から出る時・・・つまり意識が戻る時には記憶は共有される。

鈴夢は定期的にビートと入れ替わり、情報を弦十郎や剣崎、戦兔と共有していた。「わかったわかった。勝手にしてくれ」

そう言うのと鈴夢は諦めたかのように身体を明け渡す、少しの時間を置いて、ビートの意識が覚醒する。

「あつ。一言忘れたが、できるだけ彼女たちとの接触は避けてくれよ？お前が関わると碌でもないことになる」

「わかってるよ。テメエみたいな修羅場に巻き込まれるのはごめんだ」

「やっぱ貶してんだろ」

この時、鈴夢は悪魔が解き放たれたなんて知る由もないのである。



「ここが機動二課ってヤツか」

『おう。俺たちの現在の拠点だ。ノイズ対策、サーヴァントの探知までここでこなしてる』

まず来たのは機動二課本部。正直ビートにとっては嫌なところだと思っていたが本人はそうでも無いらしい。むしろ興味があるとの事だった。

ぐちぐち言ってもらえないので鈴夢は道案内をしながらビートにある程度の内情を話していた。

「つてことはここも修羅場ポイントか」

『むしろ日常的に起こるからな。ほら、早速お出しました』

ゆっくり話していると、通路の先から二人こちらに向けて歩いてくるのが見える。

歩いてきた人影の正体は仮面ライダービルド、如月 戦兔と仮面ライダーオーガ、天地 帝だった。

「おっ。鈴夢」

「鈴夢！元気か？」

「ええ。いつも通りですよ！ところでおふたりはどちらへ？」

以外にも自分の真似が上手くて鈴夢は少し嫉妬してしまうが構わず意識の中から監視を続ける。どうやら2人は玲音からのお願いで食材の買い出しに行くところらしかった。

「・・・大食いがいるのか？」

『いるよ。若干1名ほどね』

「ちなみにどのくらいだ」

『・・・食堂へ行けばわかる』

そう言いながら食堂へと足を入れると、入った途端カルナに肩を叩かれる。

カルナは戦闘時の軽装ではなく、まるで農家でも営んでいるかのような服装だった。

「マスターか。よかった。助けてくれないか」

「どうした？」

「・・・あれを見てくれ」

カルナが指を指した先には食堂の真ん中で一人丼を食べ続ける騎士王、アルトリア・ペンドラゴンと、キツチンで黙々と料理を作り続ける弓兵、エミヤと仮面ライダーディケイド、双龍 玲音の姿があった。

アルトリアの机には丼の山が。玲音とエミヤは汗を隠してテキパキと作業をしていた。後ろでは緒川さんが野菜の下ごしらえをしているのが見える。おかしいな。緒川さんが10人見えるけど気の所為？あの人、人間だよな。

「・・・アイツは女なんだよな？」

『そうだよ（便乗）』

「なのにあの机の丼の量はなんだ？」

『そういう奴なんだろ』

ちよつとまで俺も突然のこと過ぎて目の前の光景についていけないぞ。ビートよ。固まってないでなんとか言ってくれ。いつもの煽り癖を忘れないでくれてこいつ失

神してやがる！クソ！だったら体返せよクソが！

「ヤダ。返さんぞ」

そうだった！心の声も聞こえてるんだった！思考共有してたんですね忘れてましたわあははははははははっ泣

が、ここで折れてはせつかくの休日が台無しだ。それに親睦を深めるのも悪くない。何かのぼろでコイツが出でもいいようにみんなとの絆を深めないといけないなこれは。

『っーわけでいけ』

「わかったよ」

「おやマスター！ご飯ですか？」

ご飯粒を口周りに付けながらアルトリアが笑顔で答えてくれる。返事に戸惑っている間も彼女の橋は止まらなくその勢いはさらに加速する。今気づいたが料理を運んでいるのはエリザベートだ。彼女の私服はもこもこ服だから可愛いな。たまには新鮮な彼女を見るのもいいかもしれない。

「いや。朝ごはんはもう食べたんだ・・・アルトリアは・・・大丈夫かい？」

「それはもちろん！いつかマスターと食べたいものですな」

「まあいつかは・・・ね。」

まあ、サーヴァントよりも早起きしてる自分が言うことじゃないんだが。こんなに朝



ごはんを食べているのを隣で見ると俺がなんか申し訳ないし劣等感に駆られてしまう。なるほど、クーフリーンが言っていたのはこういう事だったのか。

「・・・」「アイツは悪魔なんだ」つけ？」

「気がついたら自分のご飯まで消えてるんだよ。ほんとに困るよなあ」

いつの間に俺の隣にはクーフリーン（術）が立っていた。戦闘中に来ている上着や服はなく、派手なシャツと半ズボン・・・そして何故が釣り具が手にあった。

「釣りか？」

「ああ。アイツ（槍）がよ一緒にどうだつて言うからこれから行くぜ。ついでに師匠も一緒だ」

『スカサハが？』

「珍しいこともあるんだ？」

「まあな。たまには息抜きもしないと女って爆発するだろ？それだよ。じゃあな」

クーフリーン（術）はそれだけ言つて食堂を後にする。その後すぐにエリザベートが俺の足にすがりついてくる。

「ねー！子ブタ！たすけなさいよ！お願いいいい！」

「どうすんの」

泣いているように見えるが実際は巻き込んでやろうという意志の表れだ。ここで妥

協すると俺まで被害を被ることになる。

『スルー安定で。関わってもろくな事ないよ』

「じゃあ帰るわ」

エリちゃんには申し訳ないがそのまま働いてもらおう。突っかかって来たら満足するまでなでなでしてやろう。そう思いながら俺たちはその場を後にする。危険だが……こいつを外に出してやらんとフラストレーション溜まるだろうしな。

俺たちはまあ色々あって外に出た。ちょうど雨なのでバイクをできるだけ走らせたくない……。なので暇な黒服さんと呼んで車を走らせることにした。

ちなみに今の時間はマリアさん、翼さん両名が仕事からしく。それのお迎えに行くと  
いう。

「こちらです」

「じゃあお迎え行ってきますわ。あとお願いします」

スタジオ向け建物内を歩き回るが、ビートはウロウロしている。右へ行くが違うと言  
い戻る。左へ行くが違うといい戻る。まさに今迷子の状態だった。ちなみに鈴夢は

黙っており心の中では笑っていた。

「おかしいな。こつちじゃないのか」

『違うぞ』

「お前の記憶は曖昧だな」

嫌味を言いながらしつかり案内すること数時間。やっと翼さんたちが待機してるお部屋にたどり着いた。たどり着いた時にはもう満身創痍だった。

ともかく部屋を開けるとそこには綺麗な衣装に身を包んだ翼、マリア兩名が椅子に座ってくつろいでいた。

「鈴夢！」

「うわっ」

瞬間。俺の視界は暗くなる。手の周り具合からして俺はどつちかの胸の中だろう。まあ分かりきっていた事だが、それでも第三者となるとまあなんだ。めつちや恥ずかしく感じる。

上でこれは……マリアさんか。の吐息が聞こえるがその息は荒く、まるで興奮しているようにも聞こえる。翼さんはなんか焦ってる感じだ。

「はあ……鈴夢の匂いが」

「ま、マリア……変わってくれないか」

いつも以上にキツイ。そして長い。これだから俺の胃が次々と蝕まれていくんだよなあ。また了子さんから胃薬貰わなきゃな。

しかし、マリアさんもなかなか手放してくれない。困ったなあ。好かれるつてのはこれ以上に怖かったものか。自分の身で理解するのは癪だが・・・まあ仕方ないな。

「・・・俺の心が折れそうだが」

『頑張ってくれ』

# 第37話 月の侵略者 二人の絆 獄鎌・イガリマ、塵鋸・シユルシヤガナ

パッションリップがここに来たことで状況が変わった。俺と帝、そして切歌ちゃんと調ちゃん。状況的には4:2だがパッションリップの性能は未知数だ。メルトリリスですら二人でやつとだと言うのにコイツを抑えるのは何人要することか。

それを考えさせるのはあの大きな腕、肩まではなんとか人間の形を保っているもの。そこからは完全に化け物だ。大きな金属の爪は地面を擦り、耳には嫌な金属音が聞こえる。

「・・・化け物が」

「なんですか・・・貴方も敵ですか・・・」

パッションリップの瞳。まるで俺たちのことが見えていない。焦点の合わない目をしていた。彼女の目には何が見えているか分からない上に、何とは言わないがデカイ。それとメルトリリスと同じような服だから目のやり場に困る。が、私情を挟んでいる理由はない。やらなければやられる。そんな状況なのだから。

静かに切歌ちゃんと調ちゃんが構える。帝はまだメルトリリスと戦っている途中だ

ろう。奥で金属がぶつかる音が聞こえる。それもかなり連続でだ。

目の前の彼女の様子がおかしい。声が聞こえない・・いや、正確には喋っているが小声なのだ。まるで呪詛を呟くような彼女の声に、俺は咄嗟に行動に出る。

その直後、俺の悪い予感が当たった。パッションリップはいきなり飛び上がるとそのまま俺に向けて大きな手を振り下ろしてくる。前へ倒れるように滑り込み、ギリギリ回避する。俺が居た場所には既にパッションリップが手を振り下ろしていた。

もしあそこにいたらと思うとゾツとする。しかし、最悪はまだ終わらない。彼女の視線がこちらに向くと彼女の手が宙に舞う。いや、浮かせていると言うべきか、自分の身体を捻らせ、その回転力で重い腕に力を入れて無理矢理動かしているのだ。その攻撃は俺だけではなく切歌ちゃん調ちゃんも攻撃対象になる。

周りの障害物を諸共せず腕は俺の方へ寄ってくる。が、俺は腕の親指の部分にゆっくり手を当て、手を乗り越えるように側転をしながら彼女の手を飛び越える。

切歌ちゃん調ちゃんは下がって回避する。フリーになったもうひとつの腕は的確に俺を狙ってくるが、今度はさつきよりも早い。さつきみたいなカツコイイ回避は出来ないだろう。

と、そこに切歌ちゃんの鎌が飛んでくる。天井に奥深く刺さり、簡単には抜けそうにない。俺ぐらいの体重ならギリギリ支えてくれそうだ・・そうか！

俺は彼女の手の手が来るタイミングに合わせて踏み台にしてジャンプ、そのまま鎌を一気に抜き取り、そのままの勢いでパッションリップ向け振り下ろす。

「っ!?!」

「腕が重くて身体が操れないだろ!?!もらっつ!?!」

が、俺のあては外れた、彼女は少し身体を下げると両手を俺に向けて飛ばしてくる。両側から大きな手が迫ってきて、このままではサンドイッチにされてしまう。

「・・・惜しいです」

「ちっ。あと少しでぐちゃぐちゃの具になっちまう所だったぜ・・・」

その一海とは反対に、メルトリリス、帝の方も熾烈な戦いが始まっていた。オーガのまま、帝は剣を振るうが、メルトリリスの華麗な立ち回りと回避が、帝の振るう剣の直撃を躲す。

それもただでは無い。少しずつ少しずつ慣れているのだ。回避する動きに迷いが無くなっていく。その段々と楽々かわされていく動きに帝は焦り始めていた。

「くそっ!なんで当たらない!」

「あら、もう終わりなの？ 残念」

「巫山戯るなよっ！」

耐えかねて剣を投げる。メルトリリスは両手で受け止めるが、その瞬間に帝は詰め。姿勢を低くし、速攻で拳を構えてメルトリリスの懐に入り込んでアツパーカットを入れようとしますがメルトリリスの膝蹴りが仮面に当たる。オーガの頑丈な仮面にヒビが入る。

隙を疲れたのかそのまま姿勢を直し帝は横殴りを入れようとするが、それもメルトリリスの手に止められ最後は彼女の脚で横腹に直撃を喰らう。

「があっ?!」

「・・・惜しい惜しい」

子供のように笑うメルトリリスに帝は怒りを募らせていく。メルトリリス・・・BBもそうだが、コイツらは戦いを遊びを思っているのだ。ましてや命を奪う行為そのものもオマケ程度にしか思っていない。コイツらが楽しんでいるのは戦っている間・・・だ。人を虐める、苦しませる事が彼女たちが楽しいこと。彼女たちにとっての快樂そのものなのだ。ましてやメルトリリスは性格上どう見てもDSの性格だ。楽しむのも納得してしまう。

しかし、帝の怒りは頂点に達していた。そんな人が苦しんでいる戦いすら遊びでしか



ないコイツらに嫌気が刺していたのだ。

「お前たちは……っ！お前たちだけは！」

「もういいじゃない。早くあの人を寄越しなさいよ」

「断るっ！鈴夢は……お前たちには相応しくないっ！」

鈴夢は帝たちに戦う理由を打ち明けていた。歴代の仮面ライダーたちに託された希望を守るため、そしてその希望を次の未来へと繋げるため……、大切なもの、人、そして守れる全ての命を守るために……と。

「身体の侵食？」

とある日のこと。鈴夢、シンフォギア装者を除く二課メンバーが、エルフナイン、キャロルによって司令室に集められていた。題材は……鈴夢のこと。

そして全員が到着するや否や、エルフナインによってモニターが表示される、鈴夢の身体のデータが隅々まで表示されるが、表示された鈴夢の身体の半分が黒く点滅していた。

「そうです。霧夜　鈴夢さんの身体検査の結果……鈴夢さんの身体は身体、及び精神的に侵食されている事が判明しました」

黒く点滅しているのがその侵食部位であるとさらに補足される。現時点で、既に身体の三分の一が侵食されているとこの画面で判明した。

これには戦兎たちは唾然としていた。別世界で鈴夢に会ったが、そんな異常があるとは誰も分からなかったからだ。ただ、剣崎だけは分かっていたかのように腕を組み冷静に画面を見つめていた。

「・・・どうして俺たちだけなんだ」

「装者の皆さんには引き続き、プロジエクト・イグナイトに専念してもらおうつもりですし・・・鈴夢さんは言うこと聞かないので・・・」

「そういうやつだからな。概要は？」

「私が説明しよう、錬金術にも通じたものだからな。この手のものは」

キャロルが説明をするために前が出る。エルフラインとお揃いの格好の為、どちらがどちらか全く分からない。

・・・本題だが、まず、鈴夢の身体はビートと完全に融合しつつある。しかし、それだけならまだいい。しかし、ビートの身体は同時に別の病に侵されていた。それはビート肉体の変化である。

ビートの肉体は天霊と呼ばれる存在であるが、何者かの手によってその肉体は墮天しつつあった。地上に居すぎたせい、他の外敵によるものかは不明である。

現状では、右腕、右脚が汚染されており、まるで筋肉がそのまま出たかのように赤く、そしてリアルになっていった。

「二つ目は人間として出来ていないからだ。それ故に鈴夢は不安定な姿になる」

「人間にすることは出来ないのか？」

「人体錬成でもしない限り無理だな。まあ、私の力を使えば出来んくもないが・・・厄介だな」

厄介な理由、それは鈴夢の魂が、ビートの肉体に定着しているからだ、まるで糸のようにつながっていた魂は簡単にはビートの肉体からは離れようとはせず、さらには肉体も、魂を離そうとしない。

「・・・なるほど」

「じゃあこのまま鈴夢が壊れるのを見ろと!？」

「戦兎落ち着け！誰もそうとは言っていないだろ！」

二人の葛藤、少なからずも仮面ライダーチームの間には動揺が発生する。戦兎、一海が争い、他のメンバーは動揺をそれぞれ隠していた。

冷静な剣崎にすら迷いが見える。それほどこの問題は深刻で、彼が人で無くなる問題なのだ。

「・・・人の心でいるのは簡単なのさ。だが、人であり続けるには難しい」

「劍崎さん？」

「・・・なんでもない」

「冷静になれ、何かヤツの弱点みたいなのがあるはずだ」

「あら無駄よ？ 私たちは完璧な生命体。あらゆるモノも、あらゆる存在も私たちを否定することは出来ない」

「・・・嘘だろ？ お前たちは未完成なんだ」

「・・・なんですつて？」

帝は変身を解く、強烈な光が発生すると共にオーガのアーマーが剥がれ帝の生身の身体が姿を表わす。そしてオーガのドライバーを外し、その場へと落とす。

一つ深呼吸、メルトリリスはもう相手にもしていないのかその場でクルクル回ったりしている。

「鈴夢から聞いてる。お前たちはある人間のデータを元に作られたただの人形だと。人形には心がない。だからお前たちは人を殺すんだ」

「心がない・・・ですつて？」

「だってそうだろ？人形に余分な感情は必要ない。ただ、言うことを聞いていればいいんだもんな？」

その後、メルトリリスの鋭い足蹴りが飛んでくる。帝はそれをスレスレで躲す。二回、三回と同じように飛んでくる足を躲していく。軽くフットワークを刻み、ステップを踏みながらリズムよく回避していく。

「私は人形じゃないわ！私は……！」

「人間には自我がある。自分を認識し、律する力を少なからず持っているんだ。お前たちは子供なんだよ」

「黙れっ！」

「変身！」

新たなベルトを通し、サイドにトリガーをはめ込むと青い光に包まれて帝が新たなライダーへと変身する。仮面ライダーデルタ。オーガと同じ次元の仮面ライダーである。

その後の帝の動きは簡単だった。冷静さを欠いたメルトリリスは本物の子供のように突っ込んできては足蹴りを何回か帝へ当てようとする。まずはご丁寧に脚払い、それを帝は軽くジャンプしてメルトリリスの無防備な腹に両足蹴りを決め込む。

次に回し蹴り、それを簡単に腕で受け止め、彼女の顔に向けて拳を叩き込む。蹴りの具合は先程より弱い。精神的に弱っているのか彼女の動揺がひしひしと帝には伝わって

いた。

次に連続攻撃、コンビネーションアタックだ。連続で飛んでくる攻撃すらも帝は回避する。

今の帝は怒りなど頭には無かった。ただ集中することで得るもの、超認識能力が今の帝には備わっていた。飛んでくる瞬間に攻撃コースを想定し、回避する。まるで未来を見る能力そのものだ。

「……ゲームは終わりだ。ここからは戦いつてのを教えてやる」